

常磐自動車道遺跡調査報告58

田子平遺跡

上平A 遺跡（5次調査）



図絵1 田子平遺跡出土縄文土器



図絵2 田子平遺跡出土土製品・石製品

序 文

福島県浜通り地方を縦貫する常磐自動車道は、昭和63年に埼玉県三郷～いわき中央間、平成11年にいわき中央～いわき四倉間、平成14年にはいわき四倉～広野間、平成16年には広野～常磐富岡間が開通し、現在は富岡～宮城県山元間で工事が進められています。

この常磐自動車道建設用地内には、先人が残した貴重な文化遺産が所在しており、周知の埋蔵文化財包蔵地を含め、数多くの遺跡等を確認しております。

埋蔵文化財は、それぞれの地域の歴史と文化に根ざした歴史的遺産であると同時に、我が国の歴史・文化等の正しい理解と、将来の文化の向上発展の基礎をなすものです。

福島県教育委員会では、常磐自動車道建設予定地内で確認されたこれらの埋蔵文化財の保護・保存について、開発関係機関と協議を重ね、平成5年度以降、埋蔵文化財包蔵地の範囲や性格を確かめるための試掘調査を行い、その結果をもとに、平成6年度から、現状保存が困難な遺跡については記録として保存することとし、発掘調査を実施してきました。

本報告書は、平成19年度から20年度に行った浪江町の田子平遺跡と平成21年度に行った大熊町の上平A遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。この報告書が、文化財に対する御理解を深め、地域の歴史を解明するための基礎資料となり、さらには生涯学習等の資料として広く県民の皆様に御活用していただければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査から報告書の作成にあたり、御協力いただいた東日本高速道路株式会社、浪江町教育委員会、大熊町教育委員会、財團法人福島県文化振興事業団をはじめとする関係機関及び関係各位に対し、感謝の意を表するものであります。

平成22年3月

福島県教育委員会

教育長 遠藤俊博

あいさつ

財團法人福島県文化振興事業団では、福島県教育委員会からの委託により、県内の大規模開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査業務を行っております。

常磐自動車道建設にかかる埋蔵文化財の調査は、平成6年度にいわき市四倉町に所在する遺跡の調査を開始し、富岡ICまでの間については、楢葉パーキングエリアの一部を除き、平成13年度までに発掘調査を終了しております。また、平成14年度からは、富岡ICから相馬IC予定地までの区間にかかる遺跡の調査を本格的に開始し、現在も継続して調査を実施しております。

本報告書は、平成19・20年度に発掘調査を実施した田子平遺跡、平成21年度に発掘調査を実施した上平A遺跡の成果をまとめたものです。

田子平遺跡では、縄文時代後・晩期の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、埋甕などが調査され、当時の大規模集落跡を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

上平A遺跡では、縄文時代前期の竪穴住居跡や、後期の敷石住居跡が確認されました。

今後、これらの調査成果を歴史研究の基礎資料として、さらには地域社会を理解する資料として、生涯学習の場等で幅広く活用していただければ幸いに存じます。

終わりに、この調査に御協力いただきました東日本高速道路株式会社、大熊町ならびに地域住民の皆様に、深く感謝申し上げますとともに、当事業団の事業の推進につきまして、今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成22年3月

財團法人 福島県文化振興事業団

理事長 富田孝志

緒 言

- 1 本書は、平成19～21年度に実施した常磐自動車道（いわき工区）遺跡調査の発掘調査報告書である。
- 2 本書には以下に記す遺跡調査成果を収録した。

田子平遺跡	福島県双葉郡浪江町大字室原字田子平	埋蔵文化財番号	54700125
上平A遺跡	福島県双葉郡大熊町大字大川原字南平	埋蔵文化財番号	54500015
- 3 本事業は、福島県教育委員会が東日本高速道路株式会社の委託を受けて実施し、調査に係る費用は東日本高速道路株式会社が負担した。
- 4 福島県教育委員会は、発掘調査を財団法人福島県文化振興事業団に委託して実施した。
- 5 財団法人福島県文化振興事業団では、遺跡調査部遺跡調査課の下記の職員を配して調査および報告書作成にあたった。

平成19年度

副 主 幹 山岸 英夫	文化財主査 霽原 祥夫	文化財主査 吉野 滋夫
文化財主査 今野 徹	嘱 託 中野 幸大	

平成20年度

副 主 幹 山岸 英夫	文化財主査 佐藤 啓	文化財副主査 三浦 武司
嘱 託 中野 幸大	(平成21年3月まで現職)	嘱 託 水野 一夫

平成21年度

副 主 幹 吉田 秀享	文化財副主査 三浦 武司	嘱 託 水野 一夫
-------------	--------------	-----------

- 6 本書に掲載した自然科学分析は、次の機関に委託し、第1編付章1・2にその結果と考察を掲載している。

出土炭化材放射性炭素年代 株式会社加速器分析研究所

出土獣骨類同定 パリノ・サーヴェイ株式会社

- 7 引用・参考文献は執筆者の敬称を略し、編ごとにまとめて掲載した。
- 8 本書に収録した遺跡の調査記録および出土資料は、福島県教育委員会が保管している。
- 9 発掘調査および報告書作成にあたり、次の諸機関・諸氏からご協力いただいた。

浪江町教育委員会 大熊町教育委員会 東日本高速道路株式会社東北支社いわき工事事務所

用 例

1 本書における遺構図版の用例は、以下のとおりである。

- (1) 方位 遺構図・地形図の方位は世界測地系で設定した座標北を示す。表記がない遺構図はすべて図の真上を座標北とした。
- (2) 標高 水準点を基にした海拔標高で示した。
- (3) 縄尺 各挿図中に示した。
- (4) 土層 基本土層はアルファベット大文字Lとローマ数字を組み合わせ、遺構内の堆積土はアルファベット小文字lと算用数字を組み合わせて表記した。
(例) 基本層位-L I・L II…、遺構内堆積土-l 1・l 2…
なお、挿図の土層注記で使用した土色名は、『新版標準土色帖22版』(小山正忠・竹原秀雄編著 1999 日本色研究事業株式会社発行)に基づく。
- (5) ケバ 遺構内の傾斜面は「III」で表現したが、相対的に緩傾斜の部分には「アア」で表している。また、「アア」は後世の搅乱が明らかである場合に使用した。
- (6) 網点 挿図中の網点は焼土の範囲を示し、その他の用例は同図中に表示した。
- (7) 深さ 壓穴住居跡等でピット番号に付した()内の数字は、床面からの深さ(cm)を示している。

2 本書における遺物図版の用例は、以下のとおりである。

- (1) 縄尺 各挿図中に示した。
- (2) 番号 遺物は挿図ごとに通し番号を付した。文中における遺物番号は、例えば図1の1番の遺物を「図1-1」とし、写真図版中では「1-1」と示した。
- (3) 記記 出土グリッド、出土層位等は遺物番号の右脇に示した。
- (4) 断面 土器断面は白ヌキとした。また、胎土中に纖維が混和されたものには▲を付した。
- (5) 計測値 ()内の数値は推定値、()内の数値は遺存値を示す。
- (6) 網点 挿図中の網点の用例は同図中に表示した。

4 本書で使用した略号は、次のとおりである。

浪江町：N E	大熊町：O K	田子平遺跡：T G T
上平A遺跡：U D・A	竪穴住居跡：S I	掘立柱建物跡：S B
土坑：S K	埋甕：S M	性格不明遺構：S X
集石遺構：S S	屋外焼土遺構：S G	柱穴・ピット：P
グリッド：G		

目 次

序 章

第1節 調査に到る経緯	1
1. 平成19年度までの調査経過（1）	2. 平成20年度の調査経過（2）
3. 平成21年度の調査経過（4）	
第2節 浪江町周辺の環境	5
1. 地理的環境（5）	2. 歴史的環境（5）
第3節 大熊町周辺の環境	9
1. 地理的環境（9）	2. 歴史的環境（11）

第1編 田子平遺跡

第1章 調査経過	17		
第1節 遺跡の位置と地形	17		
第2節 調査経過	19		
1. 平成19年度の調査経過（19）	2. 平成20年度の調査経過（19）		
第3節 調査方法と出土遺物の分類	21		
1. 調査方法（21）	2. 出土遺物の分類（22）		
第2章 遺構と遺物	23		
第1節 遺構の分布と基本土層	23		
第2節 堅穴住居跡	29		
1号住居跡（29）	2号住居跡（33）	3号住居跡（35）	4号住居跡（36）
5号住居跡（36）	6号住居跡（41）	7号住居跡（44）	8号住居跡（45）
9号住居跡（47）	10号住居跡（47）	11号住居跡（50）	12号住居跡（53）
14号住居跡（56）	15号住居跡（61）	16号住居跡（62）	17号住居跡（66）
18号住居跡（68）	19号住居跡（70）	20号住居跡（73）	21号住居跡（73）
22号住居跡（75）	23号住居跡（79）	24号住居跡（82）	25号住居跡（88）
26号住居跡（90）	27号住居跡（93）	28号住居跡（93）	29号住居跡（99）
30号住居跡（104）	31号住居跡（106）	32号住居跡（110）	33号住居跡（110）
34号住居跡（116）	35号住居跡（118）	36号住居跡（121）	37号住居跡（124）

第3節 挖立柱建物跡	126			
1号建物跡 (126)	2号建物跡 (129)	3号建物跡 (131)	4号建物跡 (133)	
5号建物跡 (135)	6号建物跡 (137)	7号建物跡 (141)	8号建物跡 (143)	
9号建物跡 (145)	10号建物跡 (147)	11号建物跡 (149)	12号建物跡 (149)	
13号建物跡 (153)	14号建物跡 (155)	15号建物跡 (156)	16号建物跡 (156)	
18号建物跡 (158)	19号建物跡 (159)	20号建物跡 (159)	21号建物跡 (162)	
22号建物跡 (165)	23号建物跡 (166)	24号建物跡 (168)	25号建物跡 (168)	
26号建物跡 (171)	27号建物跡 (172)			
第4節 土坑	174			
1号土坑 (174)	2号土坑 (174)	3号土坑 (175)	4号土坑 (175)	5号土坑 (175)
6号土坑 (176)	7号土坑 (176)	8号土坑 (177)	9号土坑 (177)	10号土坑 (177)
11号土坑 (178)	12号土坑 (178)	13号土坑 (179)	14号土坑 (179)	15号土坑 (179)
16号土坑 (180)	17号土坑 (180)	18号土坑 (181)	19号土坑 (181)	20号土坑 (181)
21号土坑 (182)	22号土坑 (183)	23号土坑 (183)	24号土坑 (183)	25号土坑 (183)
26号土坑 (184)	27号土坑 (184)	28号土坑 (185)	29号土坑 (185)	30号土坑 (187)
31号土坑 (187)	32号土坑 (188)	33号土坑 (190)	34号土坑 (190)	35号土坑 (190)
36号土坑 (191)	37号土坑 (191)	38号土坑 (191)	39号土坑 (192)	40号土坑 (192)
41号土坑 (193)	42号土坑 (193)	43号土坑 (193)	44号土坑 (194)	45号土坑 (194)
46号土坑 (194)	47号土坑 (195)	48号土坑 (195)	49号土坑 (196)	50号土坑 (196)
51号土坑 (197)	52号土坑 (197)	53号土坑 (198)	54号土坑 (198)	55号土坑 (198)
56号土坑 (199)	57号土坑 (199)	58号土坑 (200)	59号土坑 (200)	60号土坑 (201)
61号土坑 (201)	62号土坑 (201)	63号土坑 (202)	64号土坑 (202)	65号土坑 (203)
66号土坑 (203)	67号土坑 (203)	68号土坑 (204)	69号土坑 (204)	70号土坑 (204)
71号土坑 (204)	72号土坑 (205)	73号土坑 (205)	74号土坑 (205)	75号土坑 (206)
76号土坑 (206)	77号土坑 (219)	78号土坑 (219)	79号土坑 (232)	80号土坑 (235)
81号土坑 (235)				
第5節 埋甕	236			
1号埋甕 (236)	2号埋甕 (236)	3号埋甕 (237)	4号埋甕 (237)	5号埋甕 (237)
6号埋甕 (238)	7号埋甕 (238)	8号埋甕 (238)	9号埋甕 (239)	10号埋甕 (239)
11号埋甕 (240)	12号埋甕 (240)	13号埋甕 (240)	14号埋甕 (241)	15号埋甕 (241)
16号埋甕 (241)	17号埋甕 (242)	18号埋甕 (242)	19号埋甕 (243)	20号埋甕 (243)
21号埋甕 (244)	22号埋甕 (244)	23号埋甕 (244)	24号埋甕 (245)	25号埋甕 (245)
26号埋甕 (246)	27号埋甕 (246)	28号埋甕 (246)	29号埋甕 (247)	30号埋甕 (247)
31号埋甕 (247)	32号埋甕 (248)	33号埋甕 (248)	34号埋甕 (249)	35号埋甕 (249)

36号埋甕 (249)	37号埋甕 (250)	38号埋甕 (250)	39号埋甕 (250)	40号埋甕 (251)
41号埋甕 (251)	42号埋甕 (251)	43号埋甕 (251)	44号埋甕 (252)	45号埋甕 (252)
46号埋甕 (252)	47号埋甕 (253)	48号埋甕 (253)	49号埋甕 (254)	50号埋甕 (254)
51号埋甕 (255)	52号埋甕 (255)	53号埋甕 (255)	54号埋甕 (256)	55号埋甕 (256)
56号埋甕 (257)	57号埋甕 (257)			
第6節 その他の遺構 279				
1号集石遺構 (279)	2号集石遺構 (279)	3号集石遺構 (281)	1号屋外焼土遺構 (281)	
2号屋外焼土遺構 (281)	3号屋外焼土遺構 (286)	1号性格不明遺構 (286)		
第7節 遺構外出土遺物 287				
土 器 (287)	土 製 品 (329)	石 器 (334)	石 製 品 (337)	獸骨片 (357)
第3章 総 括 358				
付 章1 田子平遺跡における放射性炭素年代 362				
付 章2 田子平遺跡における出土獸骨類 369				
第2編 上平A遺跡（5次調査）				
第1章 調査経過 433				
第1節 遺跡の位置と地形 433				
第2節 調査経過 433				
第3節 調査方法と出土遺物の分類 436				
第2章 遺構と遺物 439				
第1節 遺構の分布と基本土層 439				
第2節 壴穴住居跡 442				
3号住居跡 (442)	17号住居跡 (443)	37号住居跡 (445)	38号住居跡 (446)	
第3節 土 坑 451				
107号土坑 (451)	108号土坑 (451)	109号土坑 (453)		
第4節 遺構外出土遺物 453				
第3章 ま と め 455				

挿図・表・写真目次

序 章

【挿 図】

図1 常磐自動車道位置図	1
図2 浪江町周辺の環境	6
図3 浪江町周辺の遺跡	8

【表】

表1 浪江町周辺の遺跡一覧	7
---------------	---

第1編 田子平遺跡

【挿 図】

図1 田子平遺跡の位置	17
図2 田子平遺跡調査区位置図	18
図3 道構配置図（1）	24
図4 道構配置図（2）	25
図5 道構配置図（3）	26
図6 基本土層	28
図7 1号住居跡	30
図8 1号住居跡出土遺物（1）	31
図9 1号住居跡出土遺物（2）	32
図10 2号住居跡	34
図11 2号住居跡出土遺物	35
図12 3号住居跡	38
図13 3号住居跡出土遺物	39
図14 4・5号住居跡	40
図15 4・5号住居跡出土遺物	41
図16 6号住居跡	42
図17 6号住居跡出土遺物	43
図18 7号住居跡	44
図19 8号住居跡と出土遺物	46
図20 9号住居跡	47
図21 10号住居跡	48
図22 10号住居跡出土遺物	49
図23 11号住居跡	51
図24 11号住居跡出土遺物	52
図25 12号住居跡	54
図26 12号住居跡出土遺物	55
図27 14号住居跡	58
図28 14号住居跡出土遺物（1）	59
図29 14号住居跡出土遺物（2）	60
図30 14号住居跡出土遺物（3）	61
図31 15号住居跡	62
図32 16号住居跡	64
図33 16号住居跡出土遺物	65
図34 17号住居跡	67
図35 17号住居跡出土遺物	68
図36 18号住居跡と出土遺物	69
図37 19号住居跡	71

図4 大熊町周辺の環境	10
図5 大熊町周辺の遺跡	13

図38 19号住居跡出土遺物	72
図39 20・21号住居跡と出土遺物	74
図40 22号住居跡（1）	76
図41 22号住居跡（2）	77
図42 22号住居跡出土遺物	78
図43 23号住居跡	80
図44 23号住居跡出土遺物	81
図45 24号住居跡（1）	83
図46 24号住居跡（2）	84
図47 24号住居跡出土遺物（1）	86
図48 24号住居跡出土遺物（2）	87
図49 25号住居跡と出土遺物	89
図50 26号住居跡（1）	91
図51 26号住居跡（2）と出土遺物	92
図52 27号住居跡と出土遺物	94
図53 28号住居跡	95
図54 28号住居跡出土遺物（1）	97
図55 28号住居跡出土遺物（2）	98
図56 29号住居跡（1）	100
図57 29号住居跡（2）	101
図58 29号住居跡出土遺物（1）	102
図59 29号住居跡出土遺物（2）	103
図60 30号住居跡と出土遺物	105
図61 31号住居跡（1）	107
図62 31号住居跡（2）	108
図63 31号住居跡出土遺物	109
図64 32号住居跡（1）	112
図65 32号住居跡（2）と出土遺物	113
図66 33号住居跡	114
図67 33号住居跡出土遺物	115
図68 34号住居跡と出土遺物	117
図69 35号住居跡と出土遺物	119
図70 35号住居跡出土遺物	120
図71 36号住居跡	122
図72 36号住居跡出土遺物（1）	123
図73 36号住居跡出土遺物（2）	124
図74 37号住居跡と出土遺物	125

■75	1号建物跡（1）	127
■76	1号建物跡（2）と出土遺物	128
■77	2号建物跡（1）	130
■78	2号建物跡（2）と出土遺物	131
■79	3号建物跡と出土遺物	132
■80	4号建物跡（1）	134
■81	4号建物跡（2）と出土遺物	135
■82	5号建物跡	136
■83	6・7号建物跡（1）	138
■84	6・7号建物跡（2）	139
■85	6号建物跡出土遺物	140
■86	7号建物跡出土遺物	142
■87	8号建物跡（1）	144
■88	8号建物跡（2）と出土遺物	145
■89	9号建物跡	146
■90	9号建物跡出土遺物	147
■91	10号建物跡と出土遺物	148
■92	11号建物跡と出土遺物	150
■93	12・14号建物跡（1）	151
■94	12・14号建物跡（2）と出土遺物	152
■95	13・15号建物跡	154
■96	13号建物跡出土遺物	156
■97	16号建物跡	157
■98	18号建物跡	158
■99	19号建物跡と出土遺物	160
■100	20号建物跡	161
■101	21号建物跡	163
■102	21号建物跡出土遺物	164
■103	22号建物跡と出土遺物	165
■104	23号建物跡と出土遺物	167
■105	24号建物跡と出土遺物	169
■106	25号建物跡と出土遺物	170
■107	26・27号建物跡と出土遺物	173
■108	1～6号土坑	207
■109	7～12号土坑	208
■110	13～18号土坑	209
■111	19～25号土坑	210
■112	26～31・33・34号土坑	211
■113	32号土坑と出土遺物	212
■114	35～41号土坑	213
■115	42～48号土坑	214
■116	49～55号土坑	215
■117	56～62号土坑	216
■118	63～70号土坑	217
■119	71～78号土坑	218
■120	79～81号土坑	219
■121	土坑出土土器（1）	220
■122	土坑出土土器（2）	221
■123	土坑出土土器（3）	222
■124	土坑出土土器（4）	223
■125	土坑出土土器（5）	224
■126	土坑出土土器（6）	225
■127	土坑出土土器（7）	226
■128	土坑出土土器（8）	227
■129	土坑出土土器（9）	228
■130	土坑出土土器（10）	229
■131	土坑出土土器（11）	230
■132	土坑出土土器（12）	231
■133	土坑出土土器（13）	232
■134	土坑出土石器（1）	233
■135	土坑出土石器（2）	234
■136	土坑出土石器（3）	235
■137	1～8号埋甕	258
■138	9～12・17・20～24号埋甕	259
■139	13～16・18・19・25・26号埋甕	260
■140	27・28号埋甕と2号集石遺構	261
■141	29～37・43号埋甕	262
■142	38～42・44～48号埋甕	263
■143	49～57号埋甕	264
■144	1～5号埋甕出土遺物	265
■145	6～10号埋甕出土遺物	266
■146	11～15・18号埋甕出土遺物	267
■147	16・17号埋甕出土遺物	268
■148	19～23号埋甕出土遺物	269
■149	24～27号埋甕出土遺物	270
■150	28～34号埋甕出土遺物	271
■151	35・36・38・39号埋甕出土遺物	272
■152	40～46号埋甕出土遺物	273
■153	48・49号埋甕出土遺物	274
■154	50・51号埋甕出土遺物	275
■155	52・53号埋甕出土遺物	276
■156	54・55号埋甕出土遺物	277
■157	56・57号埋甕出土遺物	278
■158	1・3号集石遺構、1～3号屋外焼土遺構、 1号性格不明遺構	282
■159	1号集石遺構出土遺物	283
■160	2号集石遺構出土遺物（1）	284
■161	2号集石遺構出土遺物（2）	285
■162	1・3号屋外焼土遺構出土遺物	286
■163	遺構外出土土器（1）	291
■164	遺構外出土土器（2）	292
■165	遺構外出土土器（3）	293
■166	遺構外出土土器（4）	294
■167	遺構外出土土器（5）	295
■168	遺構外出土土器（6）	296
■169	遺構外出土土器（7）	297
■170	遺構外出土土器（8）	298
■171	遺構外出土土器（9）	299
■172	遺構外出土土器（10）	308
■173	遺構外出土土器（11）	309

図174	遺構外出土土器（12）	310
図175	遺構外出土土器（13）	311
図176	遺構外出土土器（14）	312
図177	遺構外出土土器（15）	313
図178	遺構外出土土器（16）	314
図179	遺構外出土土器（17）	315
図180	遺構外出土土器（18）	316
図181	遺構外出土土器（19）	317
図182	遺構外出土土器（20）	318
図183	遺構外出土土器（21）	319
図184	遺構外出土土器（22）	320
図185	遺構外出土土器（23）	321
図186	遺構外出土土器（24）	322
図187	遺構外出土土器（25）	323
図188	遺構外出土土器（26）	324
図189	遺構外出土土器（27）	325
図190	遺構外出土土器（28）	326
図191	遺構外出土土器（29）	327
図192	遺構外出土土器（30）	328
図193	遺構外出土土製品（1）	331
図194	遺構外出土土製品（2）	332
図195	遺構外出土土製品（3）	333
[写 真]		
1	遺跡全景	373
2	遺跡遠景	373
3	調査区全景	374
4	調査区中央部近景①	375
5	調査区中央部近景②	375
6	調査区南部近景①	376
7	調査区南部近景②	376
8	1号住居跡全景	377
9	3号住居跡全景	377
10	6号住居跡全景	378
11	7号住居跡全景	378
12	8号住居跡全景	379
13	10号住居跡全景	379
14	11号住居跡全景	380
15	12号住居跡全景	380
16	14号住居跡全景	381
17	16号住居跡全景	381
18	17号住居跡全景	382
19	18号住居跡全景	382
20	19号住居跡全景	383
21	22号住居跡全景	383
22	23号住居跡全景	384
23	24号住居跡全景	384
24	26号住居跡全景	385
25	29号住居跡全景	385
26	31～33号住居跡全景	386
27	31～33号住居跡細部	386
28	掘立柱建物跡群近景①	387
29	掘立柱建物跡群近景②	387
30	1号建物跡全景	388
31	1号建物跡細部	388
32	2号建物跡全景	389
33	3号建物跡全景	389
34	4号建物跡全景	390
35	5号建物跡全景	390
36	6号建物跡全景	391
37	6号建物跡細部	391
38	7号建物跡全景	392
39	7号建物跡細部	392
40	8号建物跡全景	393
41	9号建物跡全景	393
42	10号建物跡全景	394
43	11号建物跡全景	394
44	12・14号建物跡全景	395
45	13・15号建物跡全景	395
46	16号建物跡全景	396
47	18号建物跡全景	396
48	19号建物跡全景	397
49	20号建物跡全景	397
50	21号建物跡全景	398
51	21号建物跡細部	398
52	22号建物跡全景	399
53	23号建物跡全景	399
54	24号建物跡全景	400

55	25号建物跡全景	400
56	1～8号土坑	401
57	9～13・15・17・18号土坑	402
58	20・24・25・27～31号土坑	403
59	33～41号土坑	404
60	42～48・50号土坑	405
61	51・53・55～57・60～62号土坑	406
62	66・68～73・77号土坑	407
63	1～4号埋甕	408
64	8・10～12号埋甕	409
65	13～15号埋甕檢出	410
66	13・15・16号埋甕	410
67	18・19号埋甕檢出	411
68	17～20号埋甕	411
69	21・22号埋甕檢出	412
70	21～24号埋甕	412
71	25～27・29・30号埋甕	413
72	32・35・36・38・39・43号埋甕	414
73	41・44～47号埋甕	415
74	48・49号埋甕檢出	416
75	48・49号埋甕	416
76	50～56号埋甕	417
77	1～3号集石道構	418
78	住居跡出土土器（1）	419
79	住居跡出土土器（2）	420
80	住居跡出土土器（3）	421
81	住居跡出土土器（4）	422
82	土坑出土土器	423
83	埋甕（1）	424
84	埋甕（2）	425
85	埋甕（3）	426
86	埋甕（4）	427
87	集石・屋外燒土道構・道構外出土土器	428
88	道構外出土土器	429
89	土製品・石製品	430

第2編 上平A遺跡

[攝 図]

図1	調査区位置図	434
図2	道構配置図（1）	439
図3	道構配置図（2）	440
図4	基本土層	441
図5	3号住居跡・出土遺物	443
図6	17号住居跡	444
図7	37号住居跡	445
図8	38号住居跡（1）	447
図9	38号住居跡（2）・出土遺物	448
図10	38号住居跡出土遺物	449
図11	107～109号土坑・出土遺物	452
図12	道構外出土遺物	454

[写 真]

1	中央調査区調査前現況	459
2	中央調査区全景	459
3	中央調査区南端部全景	460
4	調査区全景・基本土層	460
5	3号住居跡全景	461
6	37号住居跡全景	461
7	38号住居跡全景	462
8	38号住居跡	462
9	107～109号土坑	463
10	38号住居跡出土土器	463
11	道構内出土土器	464
12	道構外出土遺物	464

序 章

第1節 調査に至る経緯

1. 平成19年度までの調査経過

常磐自動車道は、埼玉県三郷市を起点として、千葉県・茨城県・福島県浜通り地方を北進し、宮城県仙台市に至る高速道路として計画された路線である。この内、昭和63年度には三郷インターチェンジ(以下 I Cと略す)～福島県いわき市のいわき中央 I C間の供用が開始され、さらに、平成11年にはいわき四倉 I C、平成14年には広野 I C、平成16年4月には常磐富岡 I Cまでの供用を開始している。

これら供用が開始された福島県内区間のいわき四倉 I Cまでに所在する埋蔵文化財の内、いわき市四倉町大野地区に所在する10遺跡については、福島県教育委員会が財団法人福島県文化センター(現、財団法人福島県文化振興事業団)に発掘調査を委託して、平成6～8年に実施した。また、福島県教育委員会では、いわき四倉 I C以北の福島県内区間に所在する埋蔵文化財に関して、平成6年度より表面調査を実施し、平成10年度までに終了した。さらに、この表面調査の成果に基づき、平成7年度よりいわき四倉 I C～富岡 I C間の試掘調査を実施し、平成9年度から同区間に所在する遺跡の発掘調査も開始した。

平成9年度は、いわき市内の5遺跡と広野町内の1遺跡の計6遺跡について発掘調査を実施した。平成10年度は、いわき市内の4遺跡、広野町内の3遺跡のほか、新たに橋栄町内の3遺跡、富岡町内の2遺跡の計12遺跡について発掘調査を実施した。この平成10年度の調査により、路線予定

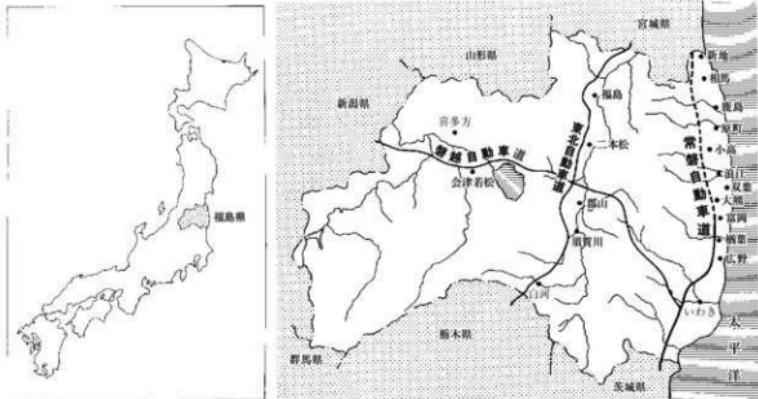


図1 常磐自動車道位置図

序　　章

地内に所在する遺跡の内、いわき市に関する遺跡の発掘調査を全て終了した。

平成11年度は広野町内の4遺跡、柄葉町内の5遺跡の計9遺跡について、平成12年度は広野町内の1遺跡、柄葉町内の7遺跡、富岡町内の5遺跡の計13遺跡について発掘調査を実施した。平成13年度は柄葉町内の1遺跡、富岡町内の5遺跡の計6遺跡について発掘調査を実施し、柄葉バーキングエリアに関わる大谷上ノ原遺跡の一部の調査を残して、柄葉町以南の発掘調査を終了した。

平成14年度は、富岡町の1遺跡、大熊町の2遺跡の計3遺跡について発掘調査を実施した。なお、富岡ICまでの区間については当初、日本道路公団東北支社(現、東日本高速道路株式会社東北支社)いわき工事事務所、富岡IC以北については相馬工事事務所がそれぞれ管轄していたが、7月から富岡IC～浪江町内までの区間についても、いわき工事事務所が管轄することとなった。

平成15年度は、いわき工事事務所管轄区域(以下、いわき工区)の浪江町内で2遺跡、相馬工事事務所管轄区域(以下、相馬工区)の相馬市内で2遺跡の計4遺跡について発掘調査を実施した。平成16年度は、いわき工区で大熊町内の3遺跡、相馬工区で相馬市内の1遺跡、鹿島町内(現、南相馬市鹿島区)の2遺跡の計6遺跡について発掘調査を実施した。平成17年度は、いわき工区で大熊町内の3遺跡、双葉町内の2遺跡、浪江町内の2遺跡、相馬工区で相馬市内の1遺跡、南相馬市内の5遺跡の計13遺跡について発掘調査を実施した。

平成18年度は、いわき工区と相馬工区で計18遺跡の発掘調査を実施した。このうち、いわき工区では大熊町内に所在する上平A遺跡(4次調査)と浪江町内に所在する沢東B遺跡(2次調査)・原B遺跡・朴迫B遺跡・朴迫C遺跡・後田A遺跡・東畠遺跡の計7遺跡で発掘調査を実施した。

平成19年度のいわき工区に関する遺跡発掘調査は、浪江町に所在する仲禅寺遺跡・小追遺跡・朴迫D遺跡・田子平遺跡の計4遺跡で発掘調査を実施した。このうち、小追遺跡・朴迫D遺跡については保存範囲すべて、仲禅寺遺跡は町道・電柱部分を除き、田子平遺跡は保存範囲の南側部分について発掘調査を終了した。

2. 平成20年度の調査経過

平成20年度の常磐自動車道いわき工区に関する遺跡発掘調査は、当初、柄葉町内に所在する大谷上ノ原遺跡と浪江町内に所在する仲禅寺遺跡・沢東B遺跡・田子平遺跡・古堤遺跡の5遺跡を対象に、5名の調査員を配置して開始した。その後、工事計画・設計の変更などがあり、新たに浪江町内に所在する原B遺跡・後田A遺跡・朴迫A遺跡の3遺跡が追加され計8遺跡について調査を実施した。調査面積は総計で15,900m²である。

発掘調査は、工事の優先度が高い仲禅寺遺跡・沢東B遺跡と保存範囲の広い大谷上ノ原遺跡の3遺跡について4月から開始した。

仲禅寺遺跡の調査は、平成19年度に引き続く2次調査で、町道・電柱等の移設部分の100m²を対象に4月14日から開始し、1次調査と同様に近世大堀相馬焼の陶器窯跡に伴う窯道具類と縄文時代の遺物を検出した。4月22日に現地調査を終了し、引渡しを行った。

沢東B遺跡の調査は、平成15・19年度に引き続く3次調査で、道路部分の800m²を対象とし、4

月9日から開始した。2次調査の続きとなる溝跡や掘立柱建物跡等の中・近世の遺構を確認し、5月23日に調査を終了した。その後、連絡所等の撤去を行い5月27日に現地引渡しを行った。

大谷上ノ原遺跡の調査は、平成11・12年度に引き続く3次調査で、横葉バーティングエリアに関する7,000m²を対象とし、4月14日から開始した。調査の進展に伴い、古代の遺構・遺物と縄文時代の遺物が検出されたが、1・2次調査で確認された旧石器時代の遺物は検出できなかった。調査は順調に進み、10月7日に現地調査を終了した。調査区の一部埋め戻し作業や連絡所等の撤去後、10月23日に現地引渡しを行なった。

原B遺跡の調査は、平成18年度に引き続く2次調査で、200m²を対象に5月26日から開始した。数量的には少ないものの縄文時代・弥生時代・平安時代・近世の遺構・遺物が検出され、6月6日に調査を終了し、6月24日に現地引渡しを行なった。

後田A遺跡の調査も平成18年度に引き続く2次調査で、400m²を対象に6月16日から調査を開始した。後田A遺跡は近世大堀相馬焼の陶器窯跡で、今回の調査区からは土坑や掘立柱建物跡が検出され、陶器生産に関する作業場の一部と考えられる。調査は6月30日に終了し、7月3日に現地引渡しを行なった。

朴迫A遺跡は、福島県教育委員会が7月に実施した試掘調査によって、要保存範囲が確定された縄文時代の遺跡で、400m²を対象に9月2日から調査を開始した。縄文時代早・中期の遺構・遺物が検出され、9月26日に調査を終了し、9月30日に現地引渡しを行なった。

古堤遺跡は常磐自動車道いわき工区の中で、最北端に所在する。遺跡までの進入路が整備された10月6日から1,000m²を対象に調査を開始した。縄文時代の落し穴と古代の簡易な木炭窯が検出され、遺跡の性格が縄文時代の狩猟場と古代の製鉄関連遺跡と判明した。調査は11月14日に終了し、11月17日に現地引渡しを行なった。

田子平遺跡の調査は、平成19年度に引き続く2次調査で、6,000m²を対象に5月12日から開始した。5月16日には工事用道路取り付け部分、8月19日には北側部分、10月7日には中央部分、10月23日には南側町道部分と工事計画上、優先部分からの調査・引渡しとなったが、新たな成果を得ることができた。

平成19年度の調査では、縄文時代後期後葉を主体とする集落跡と判明し、多数の竪穴住居跡・埋甕群や祭祀関連と考えられる稀少で多彩な遺物が出土した。今回の調査では、新たに掘立柱建物群や埋甕群の遺構、耳飾りや土笛等の遺物が検出され、集落跡範囲の北東端を確認した。これらの成果を受け、8月23日には福島県教育委員会から委託されている「遺跡の案内人(ボランティア)」事業による現地公開が行われ、雨天にも関わらず多数の見学者が訪れた。

また、今回の調査では、平安時代の竪穴住居跡も検出され、田子平遺跡が縄文時代・平安時代の複合遺跡と判明した。遺構の多くは重なりながら建て替えられており、順次精査を行いながら記録作業を進め12月10日にすべての現地調査を終了し、現地引渡しを行なった。

(山岸)

序　　章

3. 平成21年度の調査経過

平成21年度の常磐自動車道(富岡～浪江)建設予定地に関わる遺跡の発掘調査は、福島県教育委員会との委託契約に基づき、遺跡調査部の職員2名を配置して実施した。調査遺跡は大熊町上平A遺跡の1遺跡のみであり、調査面積は1,200m²である。

今年度の調査は、東日本高速道路株式会社東北支社いわき工事事務所との事前協議を受けて、4月下旬から開始した。4月中は、3カ所に分かれた調査区の表土剥ぎ作業と、作業員の募集説明会を開催し、作業員の雇用を行った。

5月初頭には作業員を投入して遺構の検出作業を行い、中旬には堅穴住居跡3軒、土坑3基を確認した。下旬からはさらに作業員を増員し、順次検出した遺構の調査を行った。調査は順調に進展し、5月25日には、北側調査区を引き渡した。

6月に入ると、南側調査区で農道の付け替え工事を行い、現農道下の調査も行った。中旬には、調査区南端で新たに縄文時代後期初頭の敷石住居跡が1軒確認された。下旬には、これらの調査が全て終了し、器材等を撤収し、6月26日には県教育庁文化財課の立ち会いの下、東日本高速道路株式会社東北支社いわき工事事務所に現地の引き渡しを行った。

現地調査の終了後は、調査員1名により、昨年度まで調査を行った田子平遺跡と本遺跡の整理作業を行い、11月には報告書印刷の入札を行い、年度末に報告書を上梓し、納本した。

その他、平成19・20年度に発掘調査を実施した仲禅寺・朴追A・原B・沢東B・古堤遺跡の報告書を、福島県文化財調査報告書第460集『常磐自動車道遺跡調査報告57』として、大谷上ノ原遺跡を福島県文化財調査報告書第459集『常磐自動車道遺跡調査報告56』として11月に刊行した。(吉　田)

第2節 浪江町周辺の環境

1. 地理的環境

福島県は東北地方南部に位置し、地形的にはおよそ8割が山地で占められ、東部の太平洋に沿って阿武隈高地が、中央部に沿って奥羽山脈がほぼ南北に走っている。これら山地により、県内は太平洋側から「浜通り地方」・「中通り地方」・「会津地方」の三つの地方に区分される。

本書に収録した田子平遺跡は、福島県双葉郡浪江町室原地区に所在する。遺跡の所在する浪江町は、福島県の東側、太平洋に面した浜通り地方のほぼ中央に位置し、北は南相馬市・相馬郡飯館村、西は伊達郡川俣町・双葉郡葛尾村・田村郡都路村、南は双葉郡双葉町・大熊町に接している。町の東部をJR常磐線・国道6号、中央部を主要地方道相馬浪江線・いわき浪江線が南北に縱貫している。また、町の北部を東流する請戸川に沿って、国道6号から分岐した国道114号が東西に走っている。

浪江町の地形は、標高約100mの等高線に沿うように南北に走る双葉断層を境に、西半部が阿武隈高地東縁部の山地、東半分が丘陵・段丘・沖積地となっている。

阿武隈高地東縁部を浸食開拓して町の北部を請戸川、南部を高瀬川が東流し、双葉断層の西側の山間部では急峻な渓谷が形成されている。また、双葉断層の東側では河床勾配が緩やかになり、請戸川・高瀬川の両岸には河岸段丘が発達している。この段丘は、その大部分が隆起扇状地的な山麓河成平坦地と考えられ、標高の高い方から高位・中位・低位の段丘面と区分され、中位の段丘面が最も発達している。

遺跡の所在する室原地区は、浪江町の中央付近に位置する。西側には阿武隈高地の山々が連なり、地区の中央を請戸川が東流し、その川沿いを国道114号が東西に走っている。地形的には、阿武隈高地東縁の丘陵地と請戸川に沿って発達した段丘面に当たる。

2. 歴史的環境

浪江町は北部の請戸川、南部の高瀬川流域を中心として数多くの遺跡が所在するが、これまで発掘調査が実施された遺跡数は少なく、歴史的環境については不明な部分が多いものの浪江町の歴史は、旧石器時代まで遡ることができる。遺跡の数は少ないものの石器の散布地として北上ノ原・酒田原遺跡が確認されている。また、朴迫D遺跡からは、ナイフ型石器・楔型石器・局部磨製石斧・有舌尖頭器などが出土している。

縄文時代の遺跡は、中位段丘面上に多く分布する傾向が認められる。乱塔前遺跡から出土した早期初頭の薄手無文土器が最も古く、中期から後期にかけての遺跡が多く知られている。順礼堂遺跡・中平遺跡・沢東B遺跡などでは、土器・石器類の遺物や竪穴住居跡が検出され、当時の集落跡と考えられている。また、後期から晩期にかけての遺跡である七社宮遺跡からは、埋設土器を伴う土

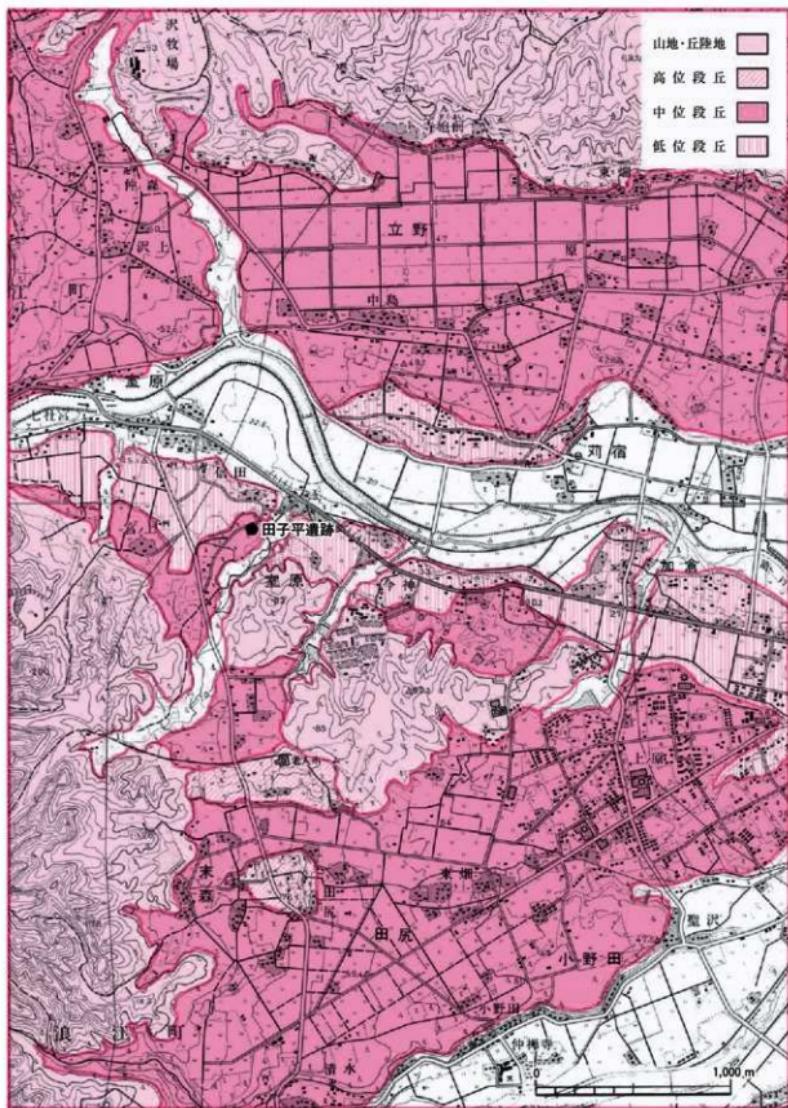


図2 滝江町周辺の環境

坑や配石遺構等の祭祀関連遺構や遺物が多数検出され、縄文時代の祭祀を考える上で重要な資料となっている。

弥生時代の遺跡は少なく、散布地として上原・台・西台・塚ノ前・金ヶ森遺跡等が知られているが、弥生土器片・石庖丁・石斧・紡錘車などが採取されている程度である。

古墳時代では、請戸川・高瀬川流域の中・低位段丘面上に数多くの古墳が作られ、相双地区のなかでも集中して分布が認められる。4~5世紀にかけて築造された本屋敷古墳群や全長60m程の規模を誇る堂の森古墳・狐塚古墳があり、大和王権との密接な関係が伺える。また、集落跡としては鹿屋敷遺跡や塚ノ腰遺跡などが上げられるが、古墳群の数と比べて確認されている集落跡の数が少なく未解明の部分が多い。

奈良・平安時代の集落遺跡としては、鹿屋敷遺跡・植烟遺跡・狐塚遺跡・小追遺跡などがある。

古墳時代と比べると遺跡数は少ない。鹿屋敷遺跡からは竪穴住居跡・掘立柱建物跡が多数確認されている程度となっている。また、平安時代の製鉄関連遺跡として、太刀洗遺跡・朴迫B・C・D遺跡などがあり、阿武隈高地東縁の丘陵地に所在する傾向が認められる。

中世の浪江町は標葉氏の所領で、領地を接する相馬氏と頻繁に戦闘を繰り返した。標葉氏の居城は大平山城・本城館・権現堂城と移り、明応元年(1492)に相馬氏により滅ぼされ、以後相馬氏の領地となる。

近世を代表する遺跡では、立野経塚・出口一里塚や北原御殿跡などがある。また、元禄年間頃には大堀村で陶器生産が行われ、相馬藩の保護と規制のもとで発展し、大堀相馬焼として現在に至っている。遺跡としては、大堀長井屋跡や中平・後田A・仲禅寺遺跡等がある。

(山 岸)

表1 周辺の遺跡一覧

No	遺跡名	遺跡番号	所在地	遺跡の概要
1	仲禅寺遺跡	54700137	浪江町大学小野川字仲禅寺	縄文時代の散布地、近世の陶器窯跡
2	朴迫A遺跡	54700127	浪江町大学原原字朴迫	縄文時代の集落跡
3	屋B遺跡	54700123	浪江町大学原原字屋原	縄文時代の集落跡
4	沢東B遺跡	54700137	浪江町大学立野字沢東	縄文時代の集落跡、中・近世の聚落跡
5	古堤遺跡	54700140	浪江町大学立野字古堤	縄文・平安時代の散布地
6	東畠遺跡	54700115	浪江町大学小野川字東畠	近世の区画溝跡
7	後田B遺跡	54700131	浪江町大学原字後田	近世の聚落跡
8	朴迫C遺跡	54700136	浪江町大学原原字朴迫	平安時代の本居室
9	朴迫D遺跡	54700126	浪江町大学原原字朴迫	縄文時代の集落跡、平安時代の本居室
10	朴迫E遺跡	54700139	浪江町大学原原字朴迫	縄文時代の集落跡、平安時代の本居室
11	小追遺跡	54700142	浪江町大学原原字小追	縄文・平安時代の集落跡
12	田子平遺跡	54700125	浪江町大学原原字田子平	縄文・平安時代の集落跡
13	春雷門屋敷遺跡	56300029	南相馬市小高区神山字春雷門屋敷	縄文時代の散布地
14	林崎遺跡	54700110	浪江町大学立野字林崎	古墳・平安時代の散布地
15	立野古廟跡	54700109	浪江町大学立野字立追前	中世の城郭跡
16	立野経塚	54700089	浪江町大学立野字開ノ倉	近世の塚
17	立野瓶跡	54700066	浪江町大学立野字立野ノ森	中世の城郭跡
18	北海戸遺跡	54700088	浪江町大学立野字北海戸	縄文時代の散布地
19	船札堂遺跡	54700001	浪江町大学立野字船札堂	縄文・奈良・平安時代の散布地
20	立野古墳群	54700012	浪江町大学立野字船札堂	古墳
21	七社宮遺跡	54700010	浪江町大学原原字七社宮	縄文時代の集落跡
22	熊塙古墳	54700017	浪江町大学真宿字熊塙	古墳

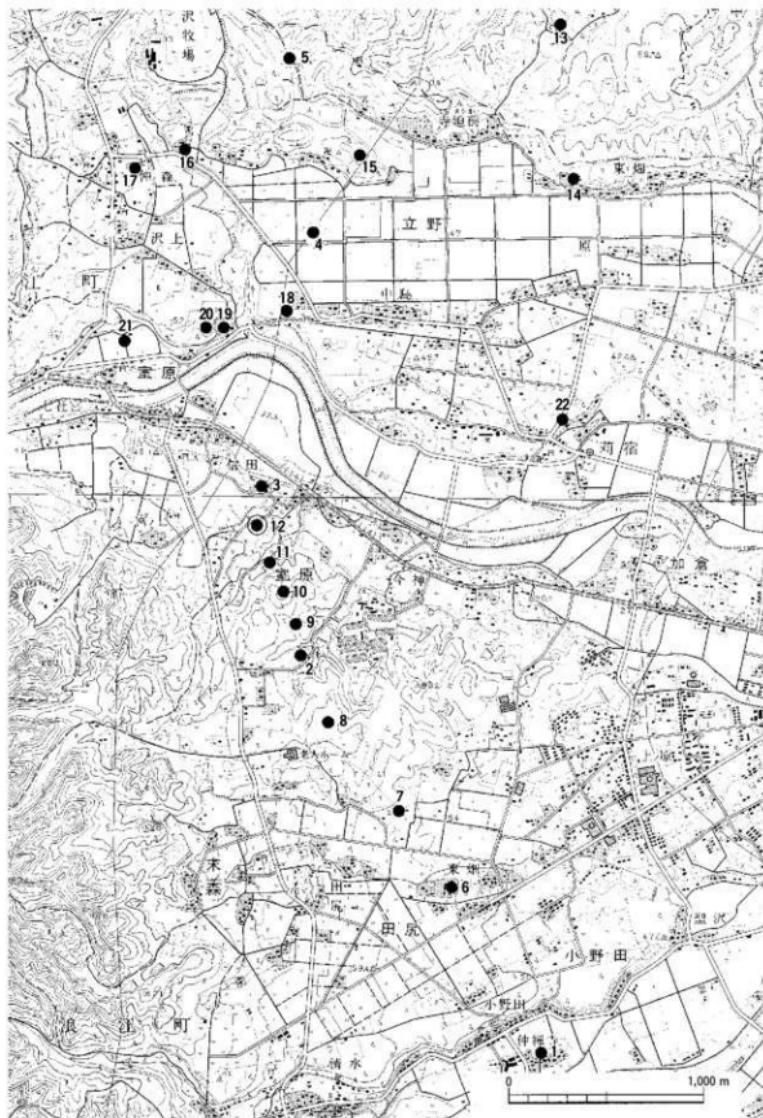


図3 浪江町周辺の遺跡

第3節 大熊町周辺の環境

1. 地理的環境

位置 福島県は東北地方南端に位置し、面積は13,782km²である。県内のおよそ8割は山地で占められ、東部には太平洋に沿って阿武隈高地、中央部には奥羽山脈、西部には越後山脈がある。これらの南北に走る山地により、県内は太平洋側より「浜通り地方」「中通り地方」「会津地方」の三地域に区分される。

上平A遺跡は浜通り地方中央部の双葉郡大熊町に所在する。大熊町中央南端の大川原地区に位置する。双葉郡富岡町上手岡地区と接する。

地形 浜通り地方の地形は、おおむね西の阿武隈高地から東の河岸段丘地帯や海岸低地に向かって標高を減じ、太平洋へと至る。大熊町の西半は、阿武隈高地東縁部の山地で占められる。太平洋から西へ約7kmの阿武隈高地の東縁部には、標高100mの等高線に沿うように双葉断層が南北に継続し、山地と河岸段丘地帯の境界をなしている。河川は阿武隈高地に源を発し、山間部では急峻な樹枝状の渓谷を形成している。大熊町を流れる主な河川は、北から夫澤川・小入野川・熊川である。双葉断層の東では、河床勾配は緩やかとなり、河川の両岸には河岸段丘が発達している。

段丘は標高が高く、年代が古い順から高位・中位Ⅰ・中位Ⅱ・中位Ⅲ・中位Ⅳ・低位Ⅰ・低位Ⅱ面と呼ばれている(久保他1994)。大熊町では主に中位面が発達し、大部分は隆起扇状地的な山麓河成平坦面を形成している。

上平A遺跡は熊川支流の大川原川右岸の中位Ⅱ面とされる段丘面に位置する。標高は約74mである。遺跡の南側には標高差約15mの開折谷が認められる。

地質 大熊町の地質構造は双葉断層を境にして、東西で大きく異なる。断層の西側にあたる阿武隈高地の山間部には、中生代白亜紀の貫入岩の花崗岩類が広く分布している。この阿武隈花崗岩類のなかには、斑頸岩やアブライト、結晶片岩などが散在的に発達している。花崗岩類に伴出する鉱物の中には、磁鐵鉱が認められる。隣接する富岡町には、嘉永6(1853)年より磁鐵鉱の採掘を行った上手岡鉱山がある。双葉断層に沿った周辺では、破碎された未変成・弱変成の古生層である高倉山層や郭公山層が、帶状に発達している。古生層の堆積物には、粘板岩・硬砂岩・チャートなどの堆積岩が含まれる。

中生代から第三紀中新世の地層の分布は希薄である。石器石材として多く用いられている流紋岩は、第三紀中新世に形成された湯長谷層群門平層・五安層に含まれることが指摘されている(根本1991)。流紋岩を本地域で採取することは難しく、楢葉町以南において流紋岩の採取は可能となるようである。

鮮新世に形成された仙台層群は双葉断層東側の丘陵地に広く分布し、第四紀において形成された段丘面の基盤層を形成している。堆積物は半固結のシルト岩・凝灰岩からなり、多くの火山灰層を

序 章

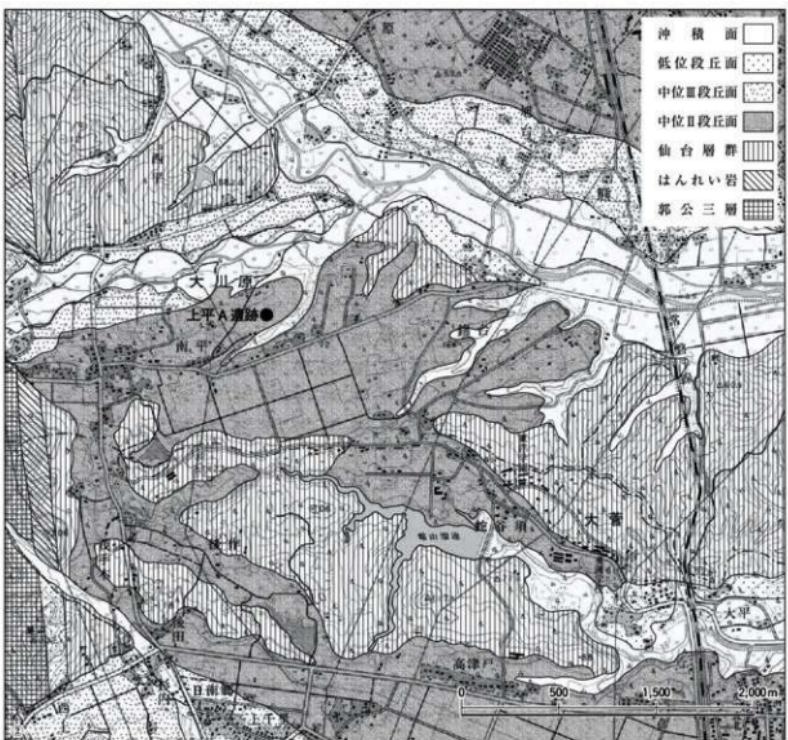
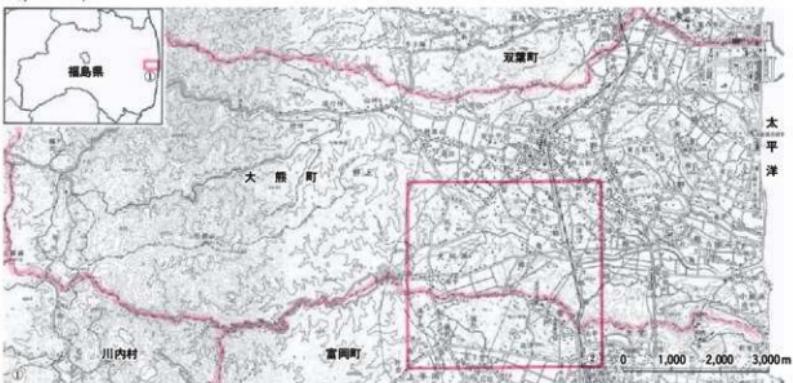


図 4 大熊町周辺の環境

介在している。

2. 歴史的環境

大熊町の原始・古代の遺跡については戦後、竹島國基・檜野照武両氏による精力的な踏査が行われた。その結果大平遺跡をはじめ、数多くの遺跡が確認され、周知されるに至った。また、その後も大熊町教育委員会による発掘調査や町史編纂事業に伴う遺跡分布調査が行われ、「大熊町史第二巻」に収録された縄文時代を中心とする資料は、各市町村史の中でも有用な資料として名高い。

町内の遺跡は熊川・小入野川・夫澤川の各流域に集中して分布する。特に熊川では中流域から下流域にかけて数多く分布しているのが特徴的である。

旧石器時代の遺跡は南金谷遺跡(5)、上総屋敷遺跡(7)、小入野遺跡、北原遺跡、日向遺跡、北台遺跡などが知られている。踏査により槍先形尖頭器や削器・彫器などが表採されている。いずれも後期旧石器時代に属すると考えられている。上総屋敷遺跡から採集した削器・彫器は旧石器時代末期の資料と推測されている。

縄文時代には遺跡数が増加する。草創期の遺跡は長身の尖頭器などが出土した南金谷遺跡や北台遺跡が挙げられる。早期の遺跡では竹島國基が1957年「石器時代第5号」に三戸式類似の沈線文系土器を報告した大平A遺跡(13)や、貝殻沈線文土器や絡条件压痕文土器が多く出土した砂出遺跡などが知られる。前期になると熊川中・下流域や小入野川流域に遺跡数が増加する。1984年に発掘調査された上総屋敷遺跡では浮島I式期の土坑が検出されている。平成15・17~19年度及び今年度発掘調査が行われた上平A遺跡からは大木1式期の集落跡が確認されている。小入野川流域の南澤遺跡からは前期後期から末葉の資料が得られている。

中期も同じく熊川中・上流域や小入野川流域に多く分布している。発掘調査された遺跡はないが蛇保遺跡(18)や砂出遺跡、南澤遺跡・腰巻遺跡からは中期中葉から末葉、後期中葉に至るまでの資料が得られている。いずれも大型の土器片が数多く採集されており、集落跡の存在が推定される。縄文時代後期から晩期の遺跡は、小入野川流域では晩期初頭頃までの遺跡しか確認できていないが、熊川流域においては縄文時代晩期終末から弥生時代まで継続する遺跡が確認されている。道平遺跡(3)や落合B遺跡(8)、砂出遺跡が挙げられる。後期は網取1式から新地式まで認められ、晚期は大洞B式から大洞C式まで継続した後、浮線文系土器が多く出土している。特徴として大洞A式土器が極端に少なくなる様相を示す。

弥生時代の遺跡は比較的少ない。熊川中流域の道平遺跡や落合B遺跡などは縄文時代から継続した遺跡であるが、弥生時代に新たに出現した遺跡となると松ノ下B遺跡(12)程度である。小入野川流域では、北原遺跡や日向遺跡、女追遺跡が確認されている。

古墳時代になると、遺跡数は熊川下流域や夫澤川流域に分布するようになる。前期に属する女追遺跡のような集落遺跡の他に、鰐沢古墳(6)・大塚平古墳や麻平古墳・熊川古墳のような後期古墳が熊川や夫澤川の沖積地を臨む段丘上に立地し、段丘崖には馬具や直刀が出土したことで知られる長者ガ原横穴のような横穴墓群が確認されている。

序　　章

奈良・平安時代の遺跡については羽山獄遺跡(15)や下田子橋遺跡、和尚前遺跡などが知られているが、詳細については不明である。ただ、熊川下流沖積地の久麻川地区には熊川六丁目条里跡があり、わずかな発掘調査であったが条里制の痕跡と考えられる溝跡や畦畔が確認されている。さらに今後の調査によっては、律令以後の様相が明らかになる可能性もある。

中世以降になると、柄葉氏や標葉氏等の在地武士団の歴史が文書等に記されるようになる。小規模な戦争を繰り返しながら群雄割拠していたようである。熊川が柄葉郷と標葉郷との境にあたり、佐山館などの城館跡も確認されている。1492(明応元)年、相馬盛胤は権現堂城において標葉清隆を攻め滅ぼし、標葉郷までが相馬氏の治めるところとなった。現在においても国指定重要無形民俗文化財の相馬野馬追には標葉郷騎馬武者が行列している。この時期の遺跡については、知られている遺跡数も少ないが、大夫澤遺跡のように中世末から近世初頭に属する蓬莱鏡が出土した遺跡もある。詳細な時期は不明であるが、阿武隈高地の山間部では製鉄も行われ、鉄滓が散布している箇所が確認されている。中世から近世末頃までの時期と考えられる。

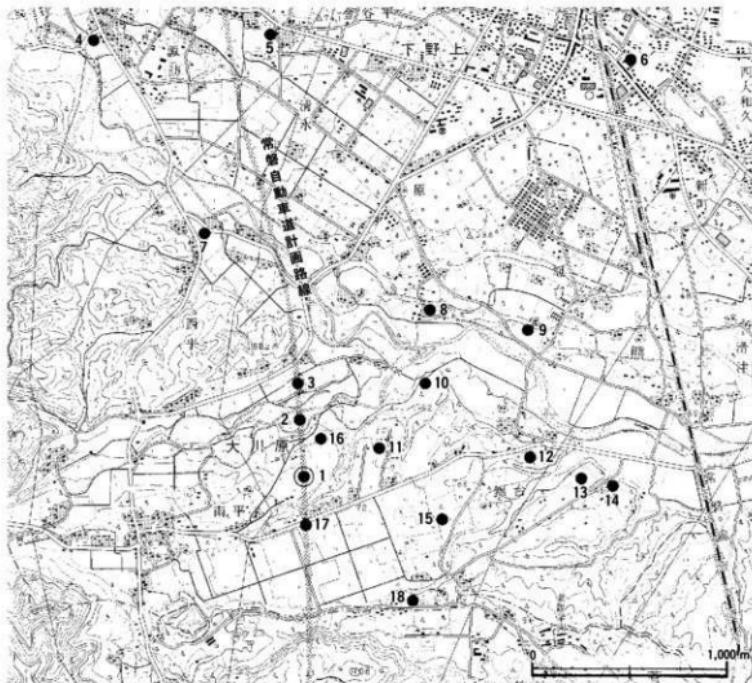
近世では標葉郷は、相馬藩領として存続することとなる。1690(元禄3)年には相馬領大堀村(現浪江町大字大堀)を中心に陶器窯業が、相馬藩の庇護もとで大いに発展し、18世紀後半には100戸を超える窯元が存在していた。18世紀以降浪江町大堀を中心として盛んに行われた陶器窯業が大熊町でも行われるようになり、18世紀後葉頃操業したと考えられる山神窯跡が発掘調査されている。幕末の1868(慶応4)年には相馬藩も戊辰戦争へと突入した。大熊町熊地区では宿駅や本陣が置かれ、激戦地として戊辰戦争の事跡となっている。

近代においては、1871(明治4)年7月廢藩置県により相馬中村藩は中村県となり、同11月には平県と合併し磐前県と改称された。1896(明治29)年には標葉郡と柄葉郡が合併して双葉郡となっている。昭和29(1954)年11月大野村と熊町村が合併して大熊町が誕生した。

現在、東京電力福島第一原子力発電所が立地し、首都圏の電源地帯となっている。　　(三　浦)

引用・参考文献

- 大熊町史編纂委員会編 1984 「大熊町史 第二巻 史料 原始・古代・中世」 大熊町
鈴木啓治ほか 1991 「浪江・磐城富岡」 福島県国土調査・土地分類基本調査 福島県農地林務部農地計画課
根本 守 1991 「地質」「柄葉町史 第一巻」 福島県柄葉町
久保和也ほか 1994 「浪江町及び岩城富岡地域の地質」 地域地質研究報告 地質調査所
通商産業省工業技術院
福島県教育委員会 1996 「福島県遺跡地図 浜通り地方」



No.	遺跡名	遺跡番号	所在地	遺跡の概要
1	上平A遺跡	54500015	大熊町大字大川原字南平	縄文時代の集落跡
2	上平B遺跡	54500040	大熊町大字大川原字南平	縄文時代の集落跡
3	追平遺跡	54500014	大熊町大字大川原字西平	縄文時代の集落跡
4	F谷地遺跡	54500009	大熊町大字野上字瀬詠	近世の窯跡
5	南金谷遺跡	54500010	大熊町大字野上字清水	旧石器時代の散布地
6	解沢遺跡	54500011	大熊町大字野上字大野	古墳
7	上蛇尾敷道跡	54500039	大熊町大字大川原字西平	縄文時代の散布地
8	落合B遺跡	54500012	大熊町大字熊字龜台	縄文・弥生時代の散布地
9	落合A遺跡	54500013	大熊町大字熊字龜台	縄文時代の散布地
10	松ノ下A遺跡	54500017	大熊町大字熊字龜台	縄文時代の散布地
11	越谷地遺跡	54500016	大熊町大字大川原字南平	縄文・奈良・平安時代の散布地
12	松ノ下B遺跡	54500042	大熊町大字熊字龜台	縄文・弥生時代の散布地
13	大平A遺跡	54500019	大熊町大字熊字龜台	縄文時代の散布地
14	大平B遺跡	54500043	大熊町大字熊字龜台	縄文時代の散布地
15	羽山跡遺跡	54500018	大熊町大字熊字龜台	弥生時代の散布地
16	南平A遺跡	54500062	大熊町大字大川原字南平	縄文時代の散布地
17	南平B遺跡	54500063	大熊町大字大川原字南平	近世の散布地
18	蛇保遺跡	54500041	大熊町大字大川原字南平	縄文・古墳時代の散布地

図5 大熊町周辺の遺跡

第1編 田子平遺跡

遺跡記号 N E - T G T
所 在 地 双葉郡浪江町大字室原字田子平ほか
時代・種類 縄文時代・平安時代の集落跡
調査期間 平成19年10月15日～12月20日
平成20年5月12日～12月11日
調査員 山岸 英夫・吉野 澄夫・今野 徹
三浦 武司・中野 幸大

第1章 調査経過

第1節 遺跡の位置と地形

田子平遺跡は浪江町室原字田子平に所在する。遺跡の所在する室原地区は、浪江町の中央付近に位置し、西側には阿武隈高地の山々が連なる。地区の中央を請戸川が東流し、川沿いを国道114号が東西に走る。また、この国道114号から分岐した県道いわき浪江線が地区の西側、阿武隈高地山麓に沿って南北に縱貫している。地形的には、請戸川によって形成された扇状地と段丘面、低丘陵地からなり、主に扇状地は水田、段丘面は畑地、丘陵地は山林として利用されている。

遺跡は室原地区の南東部、請戸川南岸の段丘面上に立地する。この段丘面は、中位の段丘面に相当し、標高が50~45m前後である。段丘面の南側は、堀切川が丘陵裾部に沿って南西から北東方向に流れ、比高差10m程の深い谷が開折されている。このため遺跡の立地する段丘面は、南西側の丘陵地から北東側に舌状に張り出す地形となっており、この段丘面上を町道7156・7223号線が東西に横断している。遺跡はこの段丘面上に広がり、堀切川を隔てた南側の丘陵地に朴迫D遺跡、小迫遺跡が、北側に接する低位段丘面には原B遺跡が所在している。

今回の調査区は、遺跡が広がる中位段丘面の北東端部付近に当たる。南側は堀切川に面した急傾斜地、東から北側にかけては全体的に北東方向に向かう緩斜面で、比高差5m程の段丘崖を隔てて低位段丘面に至る。また、段丘面の北側を町道7156号線が、南側を町道7223号線が東西に走り、調査区を南北に三分している。調査前は、主に畑地として利用されていた。



図1 田子平遺跡の位置

第1章 調査経過

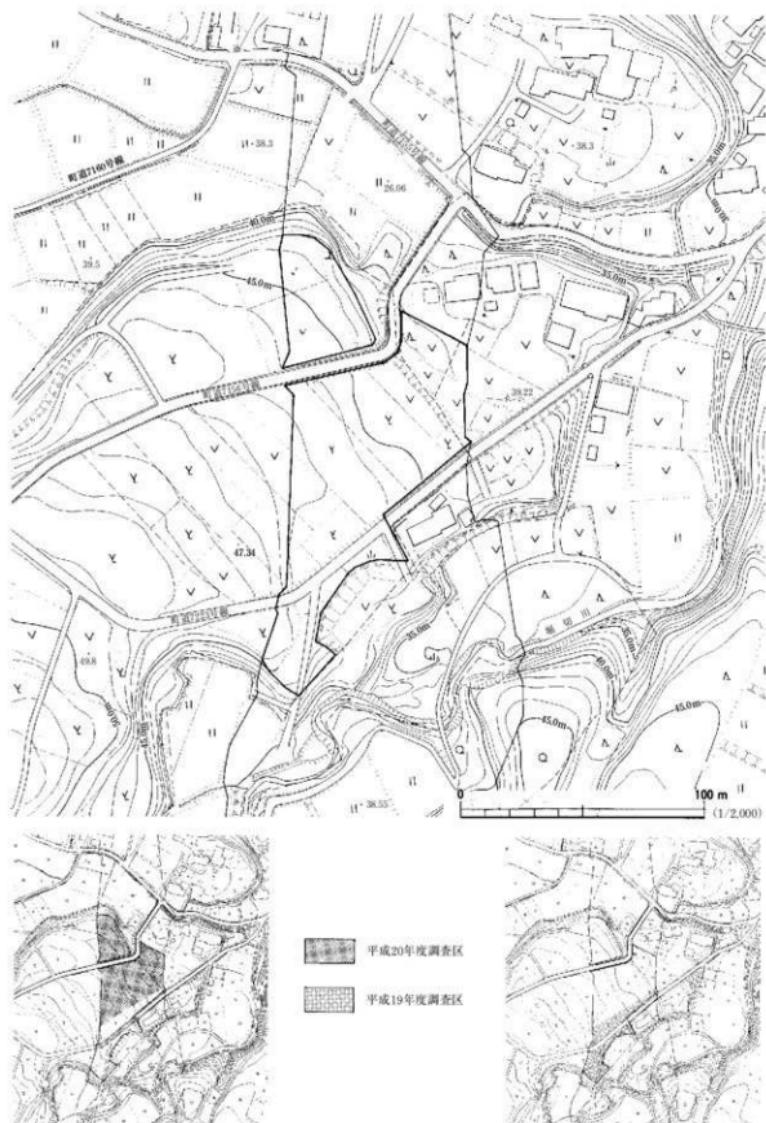


図2 田子平遺跡調査区位置図

第2節 調査経過

田子平遺跡の発掘調査は、平成19年度に1,500m²、平成20年度に6,000m²の計7,500m²を対象として実施した。以下、調査実施年度ごとに調査経過を報告する。

1. 平成19年度の調査経過

平成19年度の発掘調査は、調査範囲の南側を横断する町道7223号線以南と同町道に沿った北側を対象に、10月15日から開始した。

まず、駐車場・連絡所の造成・設置等を行い、これに並行して重機による表土剥ぎを実施した。表土剥ぎは、町道に沿った北側の平坦面から開始し、排土作業が終了した部分から作業員を導入して残土処理と遺構検出作業を行った。

町道北側では表土も浅く、除去作業は順調に進んだが、町道南側では畠地造成の際の盛土が厚く堆積し、本来は南側に開く深い谷地形であることが判明した。このため、表土剥ぎ作業は11月初旬にまでおよび、排土作業全体が終了したのは11月中旬である。

11月中旬には、調査区全域で遺構検出・精査作業が進められ、数多くの遺構・遺物が遺存していることが判明した。遺構では竪穴住居跡が段丘面の南側縁辺部に沿って巡り、重なりながら建て替えられて検出された。また、20基を超える埋甕が町道南側の緩斜面から集中して検出された。遺物では、ほぼ完全形の土器・石器のほか、祭祀関連の遺物と考えられる主面・土偶・土版・石棒など稀少で多彩な遺物が多数出土した。これら遺構・遺物について順次、精査を行いながら記録作業を進めた。

天候にも恵まれ、作業は順調に進み、12月中旬には遺構の精査・記録と遺物包含層の掘り込みをほぼ終了することができた。その後、最終的な調査区全域の遺構確認作業と地形測量・補足調査を実施し、12月20日に今年度の調査区について現地引渡しを行った。

2. 平成20年度の調査経過

平成20年度の発掘調査は、主に調査範囲の南側を横断する町道7223号線以北を対象として実施したが、工事工程上、優先部分からの調査・引渡しとなった。ここでは便宜上、町道7156号線以北を北区、町道間に挟まれた部分を中央区、町道7223号線以南を南区と呼ぶ。

まず、町道7156号線と町道7223号線を結ぶ仮設工事用道路取り付けのため、町道7156号線と接する中央区北西隅の調査を5月12日から開始した。調査範囲が狭く、検出された遺構も土坑1基と少なかったため調査は5月16日に終了し、引渡しを行った。また、これと並行して北区の表土剥ぎを進め、ついで中央区の表土剥ぎと作業を進めた。

5月中旬からは、本格的に作業員を導入し、北区の残土処理と遺構の検出作業を開始した。遺構

・遺物は、平坦部に比較的多く分布し、順次検出した遺構の精査・記録に努めた。また、段丘縁辺部は宅地・畑地造成の際の土取りや削平が広範囲に認められ、部分的に遺物包含層が遺存している程度で、出土する遺物・遺構も少ないことが判明した。8月初旬には、遺跡全体を含めた第1回目の空中写真撮影を行い、8月19日に北区の調査を終了し、引渡しを行った。

中央区の調査は、北区の調査進捗状況を見ながら進めた。表土剥ぎの進展に伴い、排土置場が確保できない状況となつたため、中央区の東側の低位段丘面を仮の排土置場とし、この箇所の調査については仮置排土を中心区の調査終了部分に移動してから行うこととした。排土処理も一段落した6月中旬から本格的に作業員を投入し、遺構検出作業を開始した。

中央区全域に広がって縄文時代の遺構・遺物が確認され、特に南西側に高い密度で分布していた。遺構では堅穴住居跡・土坑・埋甕が多数検出され、新たに掘立柱建物跡が分布していることが確認できた。これら遺構の多くは、平面的に重なり合いながら建て替えられており、個々の遺構の認定に戸惑いながらも順次精査と記録の作業を進めた。遺物では、前年同様に祭祀関連と考えられる多くの土・石製品が出土したが、その多くは畑地の耕作土中に含まれているものが多く、本来の位置を止めているものは少ない。

これらの成果を受け、8月23日には福島県教育委員会から委託されている「遺跡の案内人(ボランティア)」事業による現地公開が行われ、雨天にもかかわらず多数の見学者が訪れた。

その後、天候にも恵まれ調査は順調に進み、10月上旬には遺構の精査・記録を終了することができた。中央区を中心とした第2回目の空中写真撮影を実施し、10月7日に引渡しを行った。引き続き、南区の町道7223号線の道路敷き部分の調査を開始した。前年度調査した浅い谷地形の谷頭にあたる部分で、狭い範囲にかかわらず堅穴住居跡と土坑が検出された。遺構の精査・記録を進め、10月23日には無事終了し、引渡しを行った。また、これと並行して中央部東側の低位段丘面の表土剥ぎと排土処理を進めた。

10月27日には中央区西線に沿った仮設工事用道路の付け替えが終了し、残る調査範囲は中央区西線の旧工事用道路部分と東側の低位段丘面のみとなった。特に中央区西線は、引渡しの終了した中央区の遺構集中範囲の延長部分にあたり、数多くの遺構が平面的に重なり合って検出された。調査の進展により、縄文時代の掘立柱建物跡が半円状に配置されていることが判明した。また、これまで検出されていなかった平安時代の堅穴住居跡が検出され、新たな成果を得ることができた。

中央区東側の低位段丘面では、1mを超える遺物包含層が堆積していたが、包含する遺物量は比較的少なく、順調に作業が進められた。11月中旬には、ほぼ遺物包含層の掘り込みと遺構精査・記録作業を終了し、中央区西線の調査を残すだけとなつた。

11月下旬からは、集中して中央区西線の遺構精査・記録作業を進めた。遺構の精査・記録のほぼ終了した12月上旬に第3回目の空中写真撮影を実施し、併せて地形測量等の補足調査を行つた。その後、12月11日に現地引渡しを行い、田子平遺跡に関する全ての現地調査を終了した。

第3節 調査方法と出土遺物の分類

1. 調査方法

調査にあたってはまず、遺構・遺物のおおまかな出土位置を表示するための方眼を調査区全面に設定し、これをグリッドと呼んだ。グリッドの設定にあたっては20m四方の方眼を設定して大グリッドとし、さらに1辺5mの方眼を16分割して小グリッドとしている。大グリッドの呼称には、北から南に1・2…と算用数字を、西から東にA・B…とアルファベットを用い、これを組み合わせてA1・B2等と呼んだ。また、小グリッドについては、いずれの大グリッドとも北西隅を1、北東隅を4、南西隅を13、南東隅を16となるように分割している。そのため、各小グリッド名は全て「A1-1」のように「大グリッド-小グリッド」の順番で表記されている。

調査は重機を使用して表土部分を除去したが、それ以下の堆積層の除去は全て人力で掘り込みを行った。堆積層の掘り込みはグリッドごとに進め、併せて遺構外出土遺物の記録と取り上げを行った。遺構についてはグリッドにとらわれず、遺構全体を検出してから調査を行った。遺構の遺存状態や特性にあわせ、適宜堆積土観察用の畔を残し、堆積状況や遺物の出土状況に留意しながら精査と記録に努めた。

遺構の個別番号は、遺構の構築年代や位置にかかわらず、遺構の種別ごとに連続した番号とし、検出・精査した順に付けた。また、精査の過程で遺構でないと判明した場合は欠番とした。

遺構の記録については、グリッドを1mの方眼に細分し、その交点を測点として用いた。この測点の表記には、国土座標(平面直角座標系)の下三桁の数値をそのまま使用した。例えば座標値がX 167210, Y 98050の測点である場合、X 210, Y 050と表記した。なお、Xは経線(縦軸)、Yは緯線(横軸)を表し、座標値は北および東方向に増加する。

基本土層については、調査区全体を通観して色調・成分・包含遺物等から区分した。土層番号には略号Lの後にローマ数字のI・II…を用い、遺構内堆積土については基本土層と区別するため略号ℓの後に算用数字1・2…を用いた。

各遺構及び土層の図化に際しては、1/20の縮尺を原則としたが、遺構の規模・性格等に合わせて1/10の縮尺も適宜使用した。また、遺跡基底面の地形図は1/200の縮尺で作成した。

写真は35mm判のモノクロームとリバーサルフィルムを使用し、両者同一被写体で撮影を行った。遺構については土層断面や遺物の伴出状況、完掘状況等を、遺物については出土状況を中心として撮影した。また、調査の進捗状況や周辺地形を含めた遺跡全体の俯瞰写真を撮影するためにラジコンヘリコプターによる空中写真撮影も実施した。

2. 出土遺物の分類

田子平遺跡から出土した遺物の主体を占める土器類については便宜上、下記のような大まかな時期分類を行って報告する。また挿図中には、その分類番号を1点ごとに略表記し、おおよその該当する時代・時期を示した。例えば、IV群1類土器は「IV-1」のように表した。

I 群 繩文時代早期の土器で、3類に分けた。

1類 押型・沈線文系土器群の日計式、三戸式、常世I式土器等

2類 条痕文系土器群の野島式、鶴ヶ島台式、北前式土器等

3類 早期後葉～末葉の土器と判断したが該当する型式名が特定できない土器

II 群 繩文時代前期～中期の土器で、出土量が少ないため2類に大別した。

1類 前期の土器

2類 中期の土器

III 群 繩文時代後期の土器で、最も出土量が多い。さらに4類に分けた。

1類 初頭～前葉の網取式、堀ノ内式土器等

2類 中葉の加曾利B式土器等

3類 後葉～末葉の新地式土器等

4類 後期の土器と判断したが、該当する型式名が特定できない土器

IV 群 繩文時代晚期の土器で、3類に分けた。

1類 初頭～前葉の大洞B～C 1式土器

2類 中葉～後葉の大洞C 2～A'式土器

3類 晩期の土器と判断したが、該当する型式名が特定できない土器

V 群 繩文時代以降の土器

1類 奈良・平安時代の土器

2類 近世の陶器・磁器

石器類については、剥片や特徴の不明瞭な欠損品などを除き図示し、併せて計測値と石質も表記した。また、器種ごとの分類に止め、特別な群・類名は設定していない。

(山岸)

第2章 遺構と遺物

第1節 遺構の分布と基本土層

1. 遺構の分布(図3～5)

田子平遺跡の発掘調査で検出した遺構は、竪穴住居跡36軒、掘立柱建物跡26棟、土坑81基、埋甕57基と集石遺構3基、屋外焼土遺構3基、性格不明遺構1基である。ここではまず、各種の遺構ごとに、その構築時期・分布について大観する。

竪穴住居跡36軒の内、S I 31～33の3軒は平安時代、残りの33軒については、すべて縄文時代に所属する遺構と考えている。分布的には調査区中央部の南西側、標高45.5m前後の段丘平坦面と調査区南部の南東向き斜面、標高43m前後の段丘裾部に沿って集中する傾向にある。平面的に重複する例が多く、同心円状に柱穴が巡る例も認められることから複数時期にまたがって居住地が形成されたと考えている。また、段丘平坦面では耕作による擾乱が激しく、段丘裾部では傾斜面に起因し、全体像が不明瞭な遺構が多い。

掘立柱建物跡26棟については、重複関係と出土遺物からすべて縄文時代後期後葉～晩期前葉に構築された遺構と考えている。分布的には調査区中央部の南西側、段丘平坦面の標高45.5mの等高線に沿って、西側に開く半円状に集中する傾向にある。平面的に重複する例が多く、平面形や柱穴の規模・堆積土に相違が認められることから複数時期にまたがって建て替えが行われたと考えている。

土坑は近代のS K32、平安時代の簡易な炭窯と考えられるS K72・79の3基を除く78基については、形態・堆積土・出土遺物等の比較検討からすべて縄文時代の遺構と考えている。時期的には縄文時代早期・前期・後期・晩期に区分され、後期の土坑が最も多い。分布的には早・前期の土坑が、調査区中央部の北半から北部の段丘平坦面全域に散在し、まとまった特徴は認められない。また、後・晩期の土坑は竪穴住居跡の周辺に比較的まとまって分布する傾向にあるが、一定の地域に集中するまでには至っていない。

埋甕は調査区中央部の南西側、B 6グリッドの平坦面と調査区南部の南側、B 9・10グリッドにまたがる緩斜面の二ヶ所に集中する傾向にある。掘形上で重複する例が僅かに認められるが、古い埋甕を壊し、新たな埋甕を設置している例はない。埋められている土器の特徴から主に縄文時代後期後葉～晩期前葉の遺構と考えられ、連続した時間幅の中で二ヶ所の埋甕域が形成された可能性が高い。

その他の遺構では、屋外焼土遺構3基がいずれも調査区南部の竪穴住居跡と接して分布し、同時期の遺構と考えているが、関連性については判然としない。また、埋甕域に位置する2号集石遺構については、集石下の掘形内から埋設土器が検出されてことから埋甕と同一の性格を考えている。

出土遺物は縄文時代の土器・石器類を主体とし、平安時代・近世の土器類も僅かであるが出土し

ている。これら遺物は調査区全体から出土しているが、調査区北部から中央部にかけては耕作による搅乱が段丘の基盤層にまでおよんでいる部分が多く、基本土層との関係が明確な遺物は少ない。調査区南部では斜面に沿って複数の遺物包含層が堆積し、縄文時代後期を主体とする遺物が出土しているが、包含密度は比較的低く、捨て場のような遺物包含層は形成されていない。

出土遺物の主体である縄文時代の土器は、早期～晚期の各時期にわたっているが、圧倒的に後期の数量が多く、内容も豊富である。また、調査区中央部の南西側から焼けた獸骨片が多数出土している。これら獸骨片は、ほとんどが遺構内堆積土の上位から流込状態で出土しており、検出された

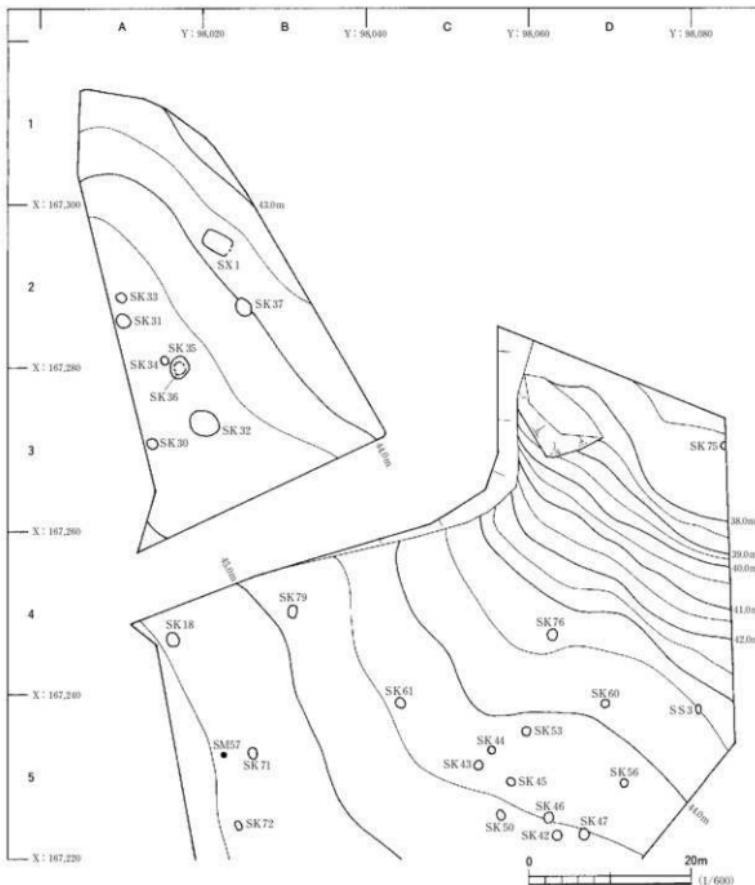


図3 遺構配置図(1)

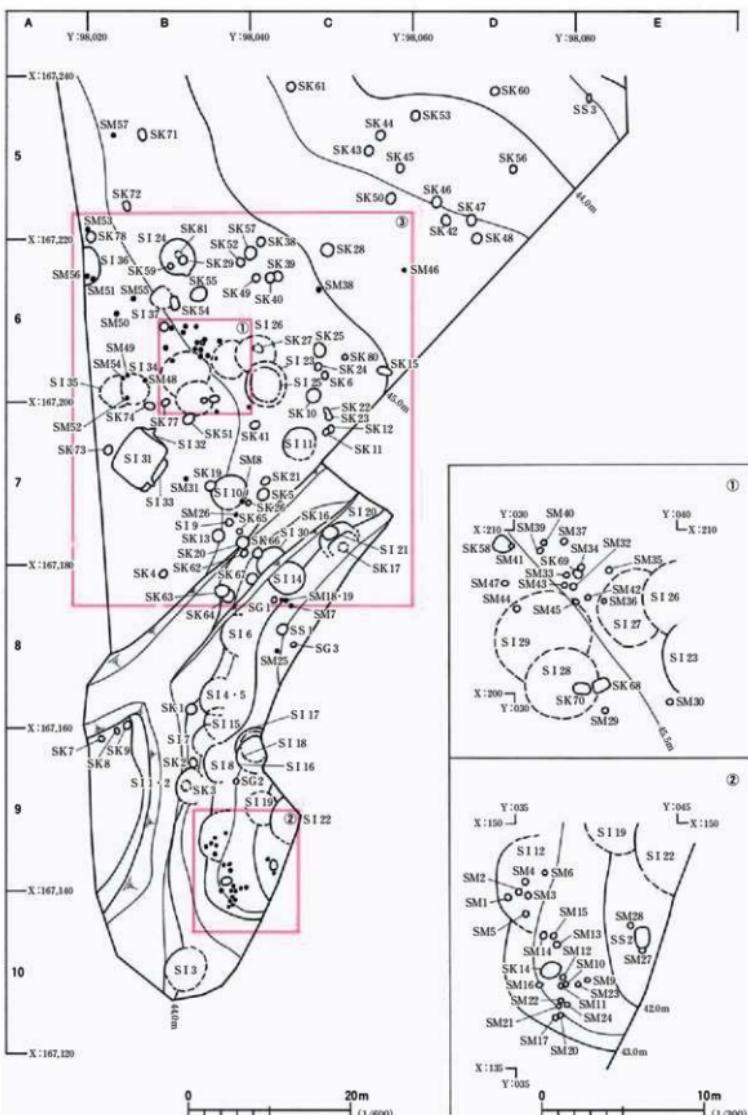


図4 遺構配置図(2)

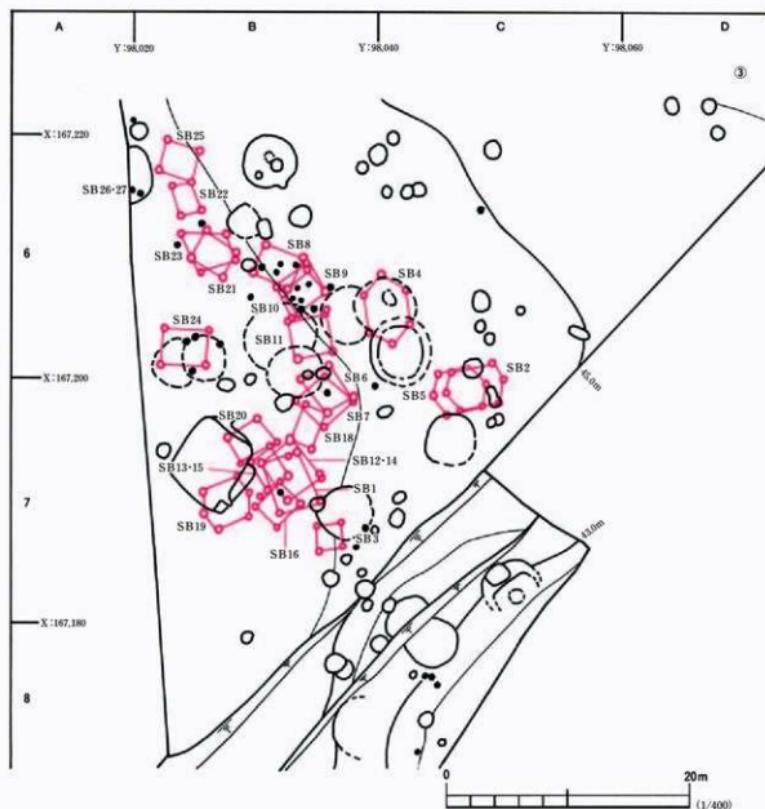


図5 遺構配置図(3)

遺構に直接伴うものではない。これら遺物の特徴については、「本章 第7節」で詳しく述べる。

2. 基本土層(図6)

今回の調査区は、主に畑地として利用されていたことから耕作による擾乱が遺跡の基底層にまでおよんでいる部分が多く、本来の堆積状況を示す部分は少ない。また、地形的に中位段丘面から低位段丘面に相当し、部分的に異なった堆積状況を示している。したがって、基本土層の設定に当たっては調査区全体の土層を通して、包含遺物・遺構等との関係から層位区分を行った。

L I は表土層で、主に耕作土からなる。調査区北部と中央部の中位段丘面では、30cm前後の厚さで堆積し、ほとんどがL III面まで達している。また、耕作によって再包括された縄文時代～近世の遺物を多量に含んでいる。これに対し、調査区中央部東側の低位段丘面と南部の緩斜面部では、畑地造成の際に盛土されたらしく1m前後の厚さで堆積が認められ、L I以下の土層が本来の堆積状況を示しているものと考えている。

L II は調査区北部と中央部の中位段丘面に限定した土層番号で、耕作のため遺存状態は極めて悪い。黒褐色の色調の土層で、本来は縄文時代の遺物包含層と考えているが、部分的に数cmの厚さで堆積が認められる程度で包含遺物・遺構との関係も判然としない。

L II a は調査区南部の緩斜面部にのみ堆積が認められる。畑地造成以前の旧表土と考えられ、縄文時代～近世の遺物を比較的多く含んでいる。

L II b～L II d の3層は、調査区中央部東側の低位段丘面と南部の緩斜面部にのみ堆積が認められる。L II b・c は縄文時代後・晩期の遺物を多量に包含し、L II d は縄文時代早・前期の遺物を少量包含するが、調査区中央部東側の低位段丘面ではほとんど遺物が含まれていない。いずれも斜面上位の中位段丘面から流入した自然堆積土と考えている。

縄文時代後期後葉の遺構との関係では、L II b が全ての遺構の上面に堆積する。L II c では上面に堆積する遺構(S II 12など)と検出面となる遺構(S II 16など)が認められ、短い時間幅の中で堆積した土層と考えている。L II d 以下はすべての遺構の検出面となり、縄文時代後期以前の堆積土と考えられる。

L III は調査区北部と中央部では暗褐色、南部の緩斜面部ではにぶい黄褐色の色調となっている。南部では無遺物層となっているが、調査区北部と中央部では上面から縄文時代早・前期の遺物が少量出土している。

L IV はやや粘土質の褐色土で、調査区中央の一部を除く全域に認められる。本層上面が全ての遺構の最終検出面であることから上面が田子平遺跡の基底面と判断した。

L V は段丘基盤の砂・礫層である。調査区中央部の平坦面では、L IVを欠層しているため本層が遺構の最終検出面となっている。

(山岸)

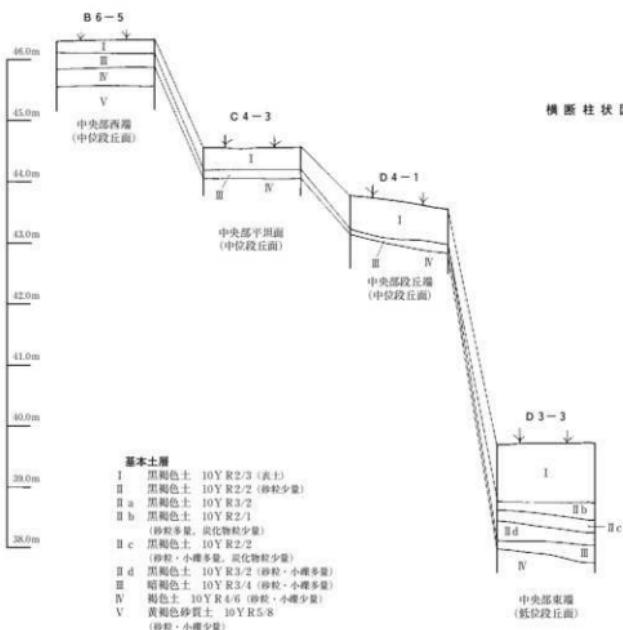
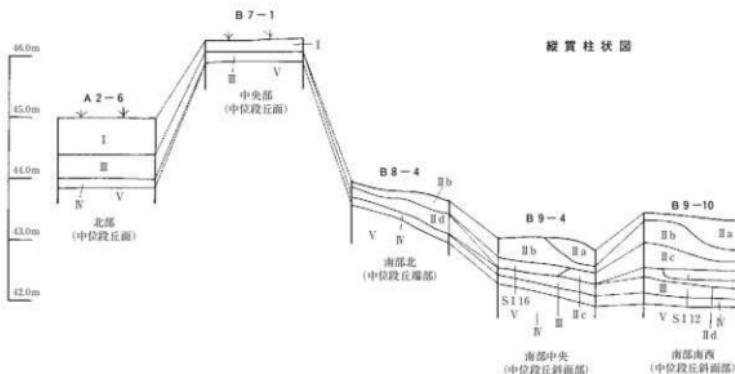


図6 基本土層

第2節 墓穴住居跡

今回の調査で田子平遺跡から検出した墓穴住居跡は36軒である。この内、33軒が縄文時代に所属し、中でも縄文時代後期後葉の住居跡が主体を占める。分布的には調査区中央部の南西側、段丘平坦面から調査区南部の裾部に沿って集中する傾向にある。以下、これら住居跡について所属時期や分布等によらず遺構番号順に記述するが、精査の結果、住居跡と判断できなかったS I 13については欠番とした。

1号住居跡 S I 1

遺構(図7、写真8)

調査区南部のB 9 - 7 グリッドに位置する。周囲は西から東側へと下る斜面地である。本遺構の検出面はL IV上面であり、表土除去段階から黒色土のプランとして確認できた。遺存状態は斜面下方の東側が不明で、造成のために全体の2/3以上を失っている。S I 2・S K 3と重複し、本遺構が最も新しい。遺構内堆積土は3層に分けられ、それぞれレンズ状や三角状に堆積することから自然堆積と考えられる。

平面形は周壁や柱穴などの配置から円形ないし梢円形と考えられる。遺構の規模は南北4.0mを測り、壁高は遺存状態の良い西壁で28cmである。壁の傾斜は床面から急勾配に立ち上る。床面はL Vを掘削し作られており、おむね平坦である。踏み縮りは南北3.5m、東西1.0mの範囲で確認できた。床面全体に少量の炭化物が散っており、中央の西壁際には焼土の散布が認められた。

遺構内施設は石圓炉1基、柱穴13個を確認した。石圓炉は床面中央のやや西側で検出した。平面形は円形で東西70cm、南北60cmを測る。10~15cm大の角礫を8個配しているが、北側半分には石がなく、住居廃絶時に抜き取られたものと考えられる。また、炉の直下にS I 2の炉やS K 3があるため土圧の影響で炉自体が北西側へ傾斜し、落ち込んだ状態で検出されている。炉の堆積土は3層である。I 3が石を固定させるための堆積土、I 2は焼土主体層で上面が炉の使用面となる。

柱穴は壁際に沿うように配列されているため、いずれも壁柱穴と考えられる。直径は18~25cm、深さ5~24cmと小形の柱穴で構成されている。概ね床面に対して垂直に掘り込まれるが、P 3・4はやや西側へ傾いて掘り込まれている。

(中野)

遺物(図8・9、写真78・89)

遺物は縄文土器片約100点、土製品2点、石器3点が出土している。炉内と床面から多くの遺物が出土している。図8-1~13は炉跡出土の土器である。1は無文の胴部下半で、整形・調整とも雑な作りとなっている。2~4・13は無文地上に撫歯状工具による条線を施す土器で、13は全体の器形・文様が分かる。底部から口縁部に向かって直線的に外傾する深鉢形土器で、平口縁に沿って横位に施文後、縦位に垂下させている。垂下する条線には曲線的な蛇行と鋸歯状の蛇行が認められ、

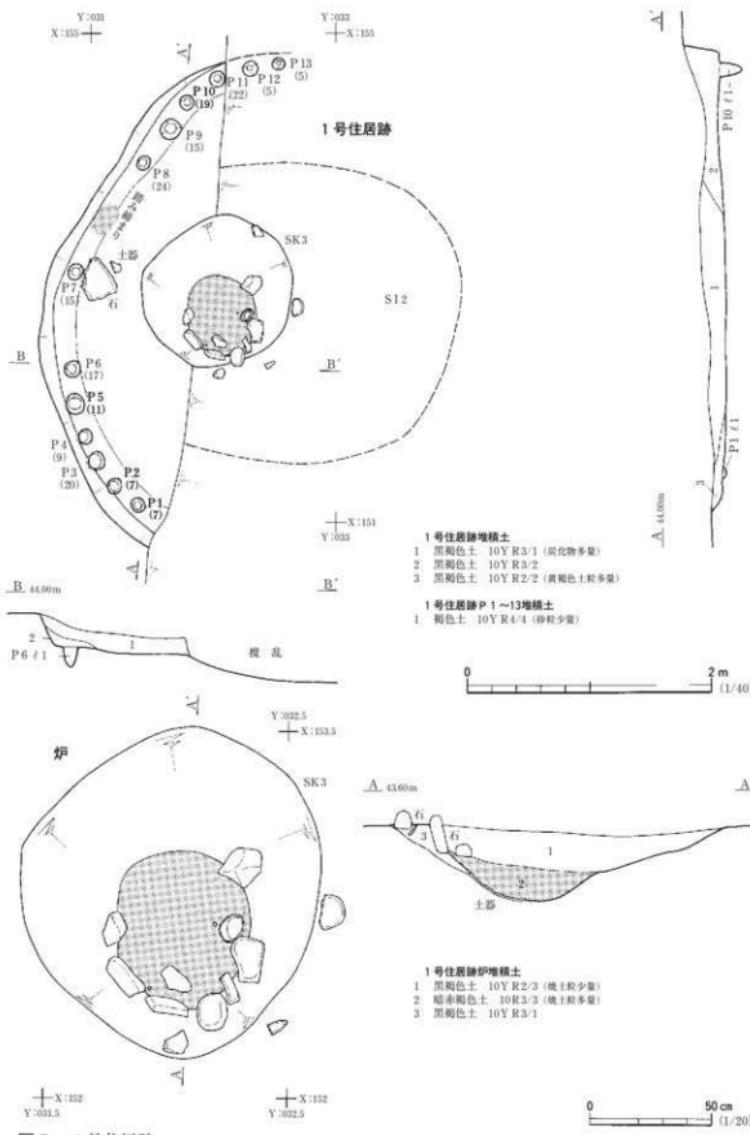


図7 1号住居跡

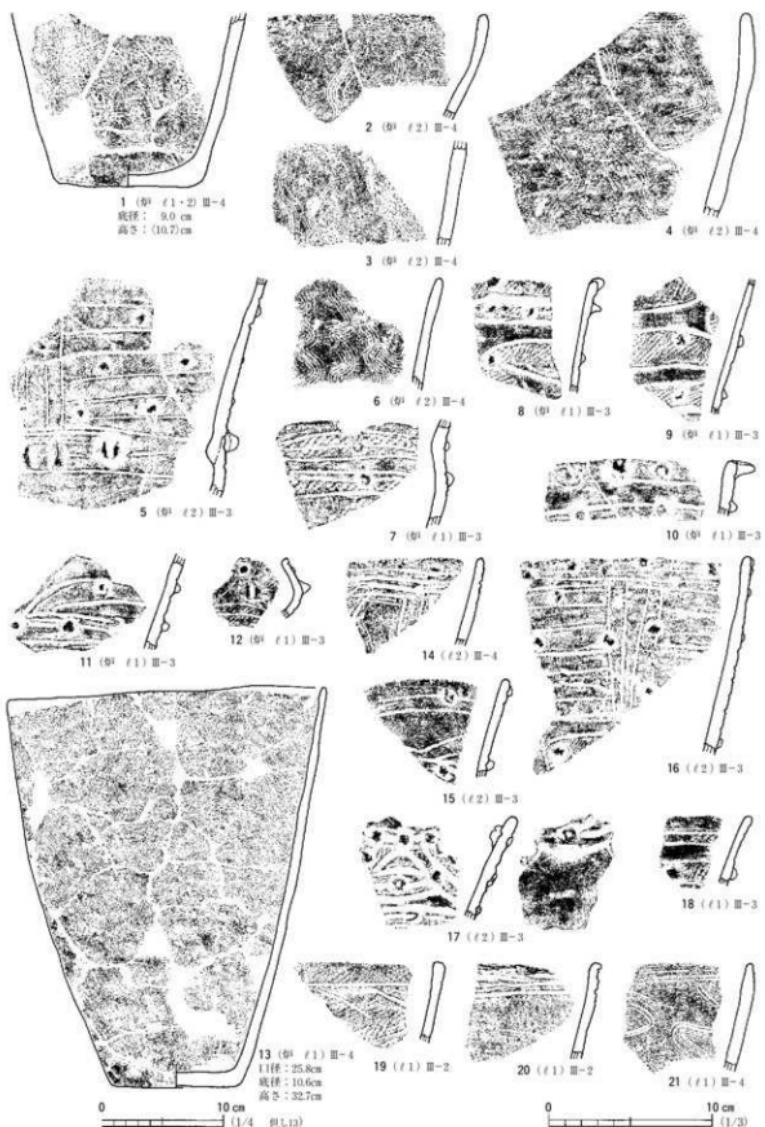


図8 1号住居跡出土遺物(1)

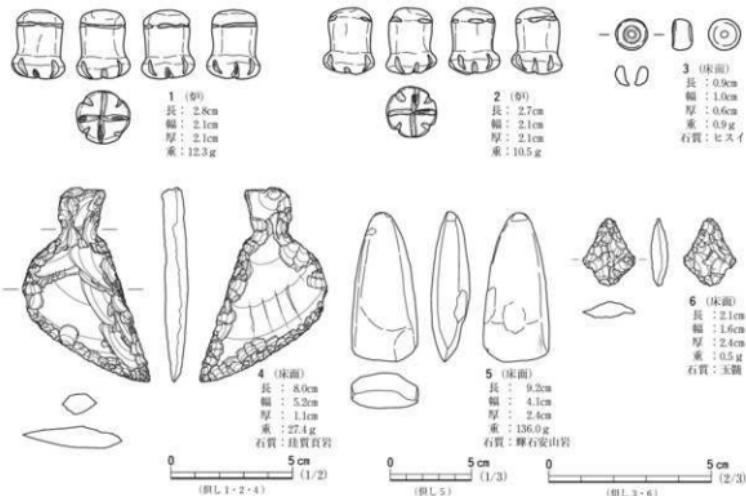


図9 1号住居跡出土遺物(2)

部分的に交差しながら胴部下半にいたる。5と同図16は同一個体で、平行沈線区画帯で縦位と横位に区画し、縄文帯と無文帯を作り出している。縄文帯上には小さなコブが貼り付けられる傾向にあり、無文部には認められない。また、無文の胴部との境の縄文帯上には一对の縦長のコブと中央に刻みを加えたやや大型のコブが認められる。7～12は平行沈線区画帯と帯状の入組文が施された土器で、7～9は区画帯に縄文が施され、10・11は無文となっている。また、区画帯と入組文内には小さなコブが貼り付けられている。12は香炉形土器と考えられ、器面には赤色顔料が付着している。同図14～21は堆積土中から出土している。14は棒状の21は櫛歯状工具で条線が施されている。15・17・18はコブを付加した平行沈線区画文を施し、17・18には縄文を充填している。19は縄文地上に矢羽状の沈線が、20には口縁に沿った多条の沈線が施されている。

図9-1・2は一对の耳栓である。スタンプ形を呈し、沈線で「米」の字状の文様が施されている。いずれも器面は平滑に仕上げられ、赤色顔料の付着が認められる。同図3は片面穿孔の垂飾品で、形状は白玉に近い。同図6は有茎石鏃で、基部の抉りは弱く、幅広の作りとなっている。同図4は縦型の石匙で、簡単な両面加工でつまみと刃部を作り出している。同図5は完全形の磨製石斧である。刃部には使用による潰れと再調整が認められる。

(山岸)

まとめ

本遺構は、東側の大半が失われていたが、おおむね円形ないし梢円形の竪穴住居と考えられる。石器が西側に偏って設置されており、北側半分の石が抜き取れられている。所属時期は出土遺物などから縄文時代後期後葉頃と考えている。

(中野)

2号住居跡 S I 2

遺構(図10)

調査区南部のB 9 - 7グリッドに位置する。S I 1の炉断面を確認するために断ち割りを行ったところ下方から石圓炉を確認し、S I 1の床面を再精査したところ新たな柱穴列を確認したため住居跡とした。S I 1とS K 3と重複する。遺構の新旧関係はS I 1より古く、S K 3よりは新しい。また、北側にS K 2・S I 7、北東側にS I 8が近接する。遺構内堆積土はS I 1が全体的に重複しているため失われていた。

平面形は柱穴が楕円形状に巡ることから、東西方向に長軸を持つ楕円形を呈していたものと考えられる。遺構の規模は不明であるが、柱穴の分布する範囲は南北2.4m、東西3.5mである。床面も不明であるがS I 1と共有していた可能性が考えられる。

遺構内施設は石圓炉1基、柱穴12個を検出した。石圓炉は柱穴分布範囲の中央よりやや西側に位置する。平面形は円形で東西80cm、南北70cmを測り、10~27cmの礫を18個配している。炉内には東側の石が中央にずり落ちていた。また、S K 3の堆積土が土圧によって沈み込んだらしくS I 1の炉と同様に全体が北西側へ傾斜している。

柱穴は12個確認している。楕円形に配列されていることから壁柱穴である可能性が高い。柱穴の直径は12~20cm、深さ10~32cmと小規模なもので構成され、主柱穴と見られる大規模な柱穴はなかった。

(中野)

遺物(図11、写真78)

遺物はいずれも炉跡堆積土中からの出土である。1・2は櫛歯状工具による条線が施されている。1は底部を欠損する深鉢形土器で、平口縁に沿って巡る条線から自由奔放な蛇行曲線が胴部下半に向かって密に描かれている。2は横位方向に弧を描く条線が密に施されている。3は小型の鉢形土器で、調整は雑で全体が歪み整っていない。4~7はコブが付けられた平行沈線区画帯をもつ土器で、無文部は磨かれている。4の区画帯はコブの付加後に繩文が充填されている。5の口縁には刻みを入れた突起が付けられ、区画帯内に無文の帯状入組文が認められる。また、6の区画帯内には繩文が施された木葉状の区画文が認められる。8は球形を呈する胴部片で、沈線区画の上位には網目状の沈線文を施している。

(山岸)

まとめ

本遺構は周壁など大半が失われていたが、柱穴の配置から楕円形の住居と考えられる。炉の位置は西側に偏っていてS I 1の炉を作る際に埋められている。炉の直下にS K 3があるため土圧の影響を受けて床面からだいぶ下がった状態で検出している。遺構の所属時期は、出土遺物と他の遺構との重複関係などから繩文時代後期後葉頃と考えられる。

(中野)

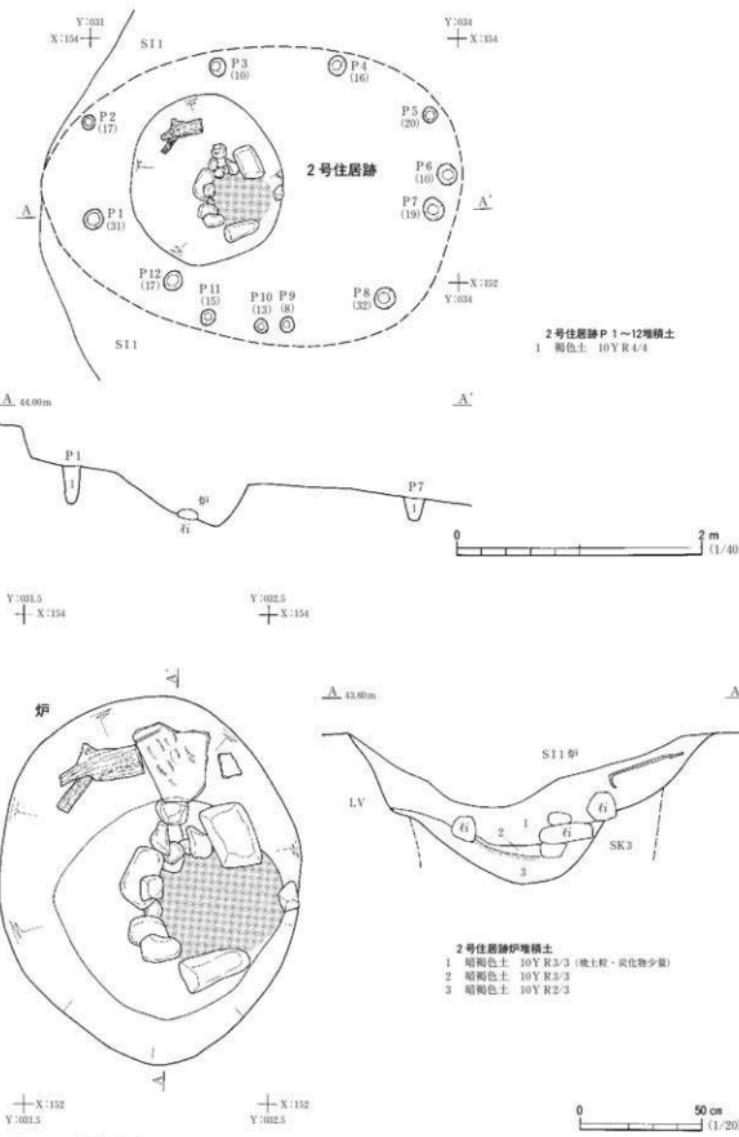


図10 2号住居跡

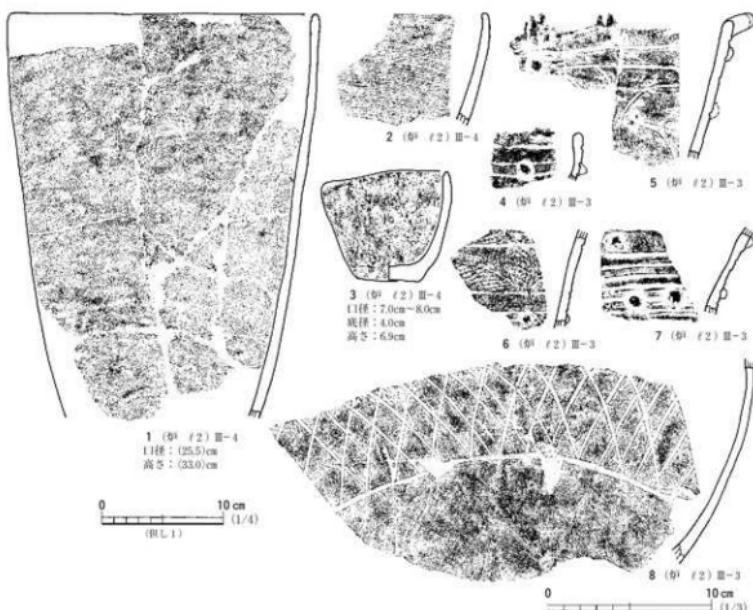


図11 2号住居跡出土遺物

3号住居跡 S I 3

遺構(図12、写真9)

調査区南部南端のB10-7・11グリッドに位置する。周囲は北から南側へと下る緩斜面である。検出面はLIV～Vで、表土除去後に半月形の黒色土のプランが確認出来たので、精査したところ住居跡と判明した。烟造成による搅乱のため東側は不明な点が多い。重複する遺構はない。遺構内堆積土は3層である。暗褐色土で、各層レンズ状や三角状の堆積であることから自然堆積土である。

平面形は残存する周壁や柱穴の分布状況などから南北に長い楕円形と考えられる。遺構の規模は東西4.7m、南北5.5mを測る。壁高は遺存状態の良い西壁で42cmである。壁の傾斜は床面から急角度に立ち上がる。床面はLVを掘削して構築していくおむね平坦である。踏み締りは南北4.4m、東西3.3mの範囲で確認した。床面全体に少量の炭化物が散っており硬く踏み締められていた。

遺構内施設は柱穴62個を確認した。炉は検出できなかったが、P60の南側の搅乱内に15～30cm大の焼けた角礫が8個散乱しており、この付近に石圓炉があったと推測される。柱穴は直径が18～30cm、深さが10～51cmを測る。小形の柱穴が主体であるが、P60は直径30cm、深さ51cmを測り、床面の中央に位置することから主柱穴と考えられる。柱穴堆積土は砂粒を多く含む黒褐色土で、柱痕な

どの痕跡は確認できなかった。

柱穴は壁際に沿うように楕円形に配列されている。残りの良い西壁側では、およそ3列に巡ることから3回の建て替えを行ったものと考えられる。P40(新)とP57(古)、P38(古)とP13(新)の重複関係から、おそらく内側の住居が古く徐々に外側へと拡張していったものと推測される。最初の住居プランはP48~49・62が相当し南北4.2m、東西4.0mを測る。北東から南西に長軸を持つ楕円形を呈する。北東側の柱穴は搅乱などで検出できなかった。次の住居プランはP26~47が相当し南北4.6m、東西4.0mを測る。最初のプランの主軸を踏襲しながら拡張したものと考えられる。最終時のプランはP1~25・60が相当し南北5.5m、東西4.6mを測り、主軸方位をやや西側へずらして拡張している。

(中野)

遺物(図13)

遺物は縄文土器片約400点、剥片類3点が出土している。これら遺物の多くは床面の西側から多く出土している。1~7は主に床面出土の土器である。1・2は斜行縄文が施され、底部付近は磨かれ無文帯が作られている。3は無文の底部片で、小さな台が付けられている。4・5は同一個体と考えられ、4は口縁部で端部がつまみ出され丸みを帯びている。4・5共に太い筋で大柄な網目状の撚糸文を施している。6・7は条線文を特徴とする深鉢形土器である。6は平口縁に沿って条線を巡らせ、その下方から胴部下半に向かって条線をほぼ等間隔で蛇行・垂下させていく。7は平口縁に沿った条線を等間隔に配置後、部分的に蛇行・垂下する条線を施している。

8~16は堆積土中から出土した土器である。8~11は胴部のくびれ部に平行沈線区画帯を巡らすもので、8には小さなコブが付けられている。9は横に刻みを入れた一対の縱長のコブが、10は縱に刻みを入れたコブが付けられている。12~15は条線が施され、12・15は平口縁に沿った条線から蛇行・垂下させている。13・14は平口縁に沿った平行沈線から条線を蛇行・垂下させ、13の平行沈線内には小さなコブが認められる。16は装飾突起と考えられ、両面に沈線と縄文が施されている。左右両端に円孔が開けられ、中央の文様を挟み込むように対向する三叉状の区画文と沈線文が施されている。

(山岸)

まとめ

本遺構は東側の大半が失われていたが、長軸5.5mの楕円形の竪穴住居と考えられる。壁際に3列の壁柱穴が巡ることから、主軸を西側へずらしながら、徐々に拡張を繰り返したものと判断している。所属時期は出土した遺物などから縄文時代晚期前葉頃と考えている。

(中野)

4・5号住居跡 S I 4・5

遺構(図14)

本遺構は、調査区南部B8~11・12・15・16グリッドに位置する。周囲の地形は西側から東側へ下る斜面である。検出面はL Vである。本遺構は南側でS I 15と重複するが新旧関係は不明である。また、西側にS K 1が近接している。

斜面の搅乱を除去していたところ複数の柱穴を確認し、精査を行い住居跡とした。検出当初は地山の段差が大きく2段見られたことから上段をS I 4とし、下段をS I 5として調査を行った。しかししながら、搅乱と遺構内堆積土の区別ができないまま全ての堆積土を掘り切ったために新旧関係・遺構内施設・出土遺物等に不明な点が多く、個別に明示できないことからS I 4・5としてまとめて扱い記述していく。

斜面下位の東側はいずれも遺存していないが、平面形は南北に長い楕円形と考えられる。S I 4の規模は南北約4mを測り、壁高は遺存状態の良い西壁で14cmである。壁の傾斜は搅乱の影響もあるが床面から緩やかに立ち上る。壁際に残る床面はLVを掘削して構築していて踏み締りは弱い。S I 5の規模は下場で南北約3mである。床面は東西1.3mの半円状に遺存するが踏み締まりは認められない。壁は緩く西側に傾斜し、10~20cm前後の段差を持つ個所も見られる。

遺構内施設はS I 4・5合わせて58個の柱穴を確認した。P 1~17がS I 4の柱穴と考えられ、大きくP 1~9とP 10~17に分かれる。P 1~9は周壁に沿うように巡り、規模は直径8~18cm、深さ7~11cmである。P 10~17は床面の北側に偏った弧状の列になり、直径は8~10cm、深さ9~20cmの規模である。いずれも小形の柱穴が主体で、2種類の配列が考えられる。

S I 5の柱穴は大きくP 18~27、P 28~40、P 45~50に分けられ、いずれも弧状の配列となる。規模はP 18~27の直径が8~18cm、深さ7~20cmである。P 28~40は直径12~18cm、深さ7~30cmである。P 45~50は直径16~24cm、深さ10~28cmである。柱穴の規模が小さく、いずれも壁柱穴と考えられ、建て替えの可能性がある。

P 51~58は中央付近に位置し、規模などが比較的大形のものが多いためS I 4・5いずれかの主柱穴と考えられる。P 51~56、P 52~58、P 53~55が対応する柱穴と考えられ、直径は18~38cm、深さ27~54cmで壁柱穴に比べて大形のものが多い。柱痕の痕跡は確認できなかった。 (中野)

遺 物(図15)

遺物は縄文土器片137点が主に搅乱から出土している。1~8~10は口縁部を巡る条線と蛇行・垂下する条線が施されている。また、1には条線の上端に沿った沈線が巡らされている。3はくびれ部を巡る平行沈線区画帶内に小さなコブを貼り付けている。4・5は沈線区画内に刺突を施しているもので、4は「ハ」の字状を呈している。6は縄文を施した沈線区画帶内にコブを、区画帯をつなぐように逆「ノ」の字状のコブを配置している。7は縄文を施した帯状入組文が認められる。11・12は底部で、11の底面は縄文部より低く削りだされ、12は平底となっている。 (山岸)

ま と め

S I 4・5は周壁と柱穴が検出された住居跡である。おそらく複数の住居跡が重複しているものと考えられるが搅乱で壊されているため不明確な点が多い。かろうじて遺存していた柱穴の配置などからS I 4は2期、S I 5は2~3期のプランが考えられる。遺構の所属時期は周囲の遺構との関係や柱穴群の状況から、大枠で縄文時代後期頃の年代と考えている。 (中野)

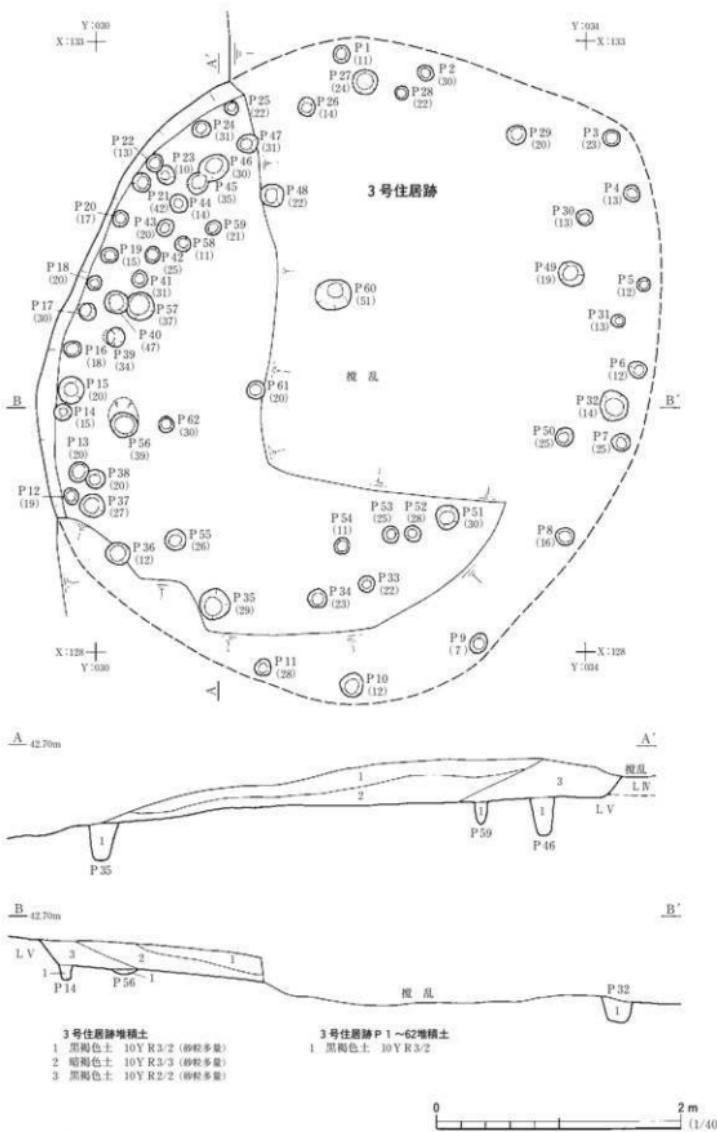


図12 3号住居跡

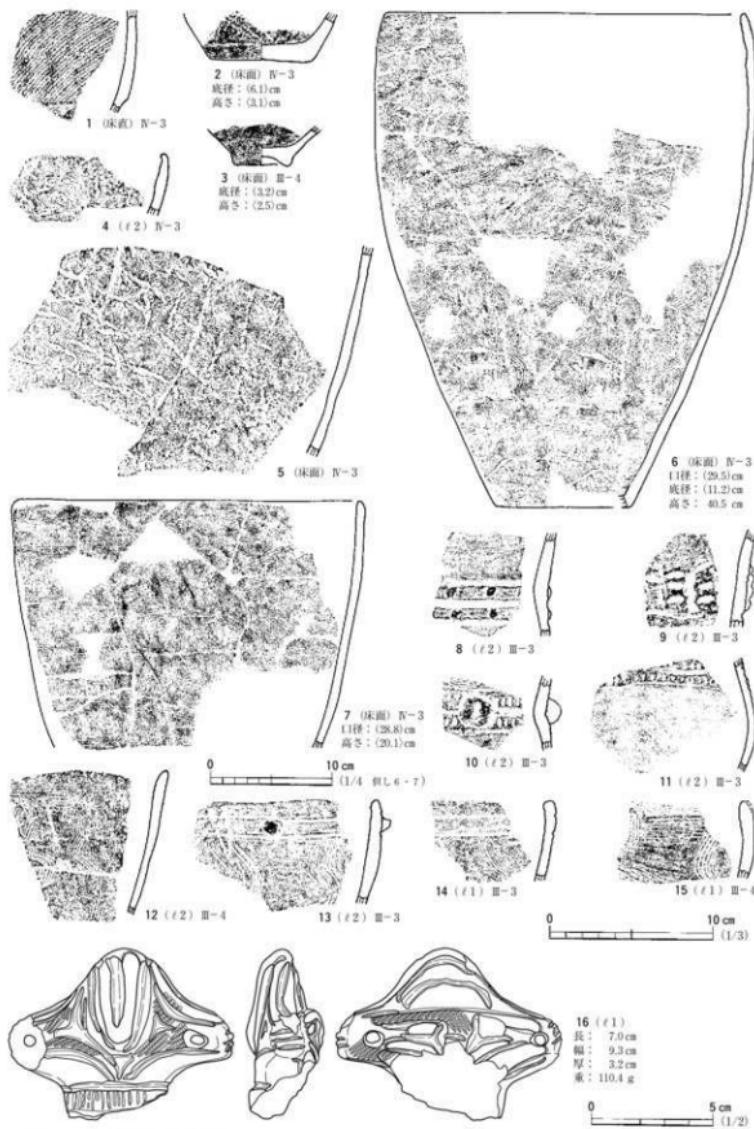


図13 3号住居跡出土遺物

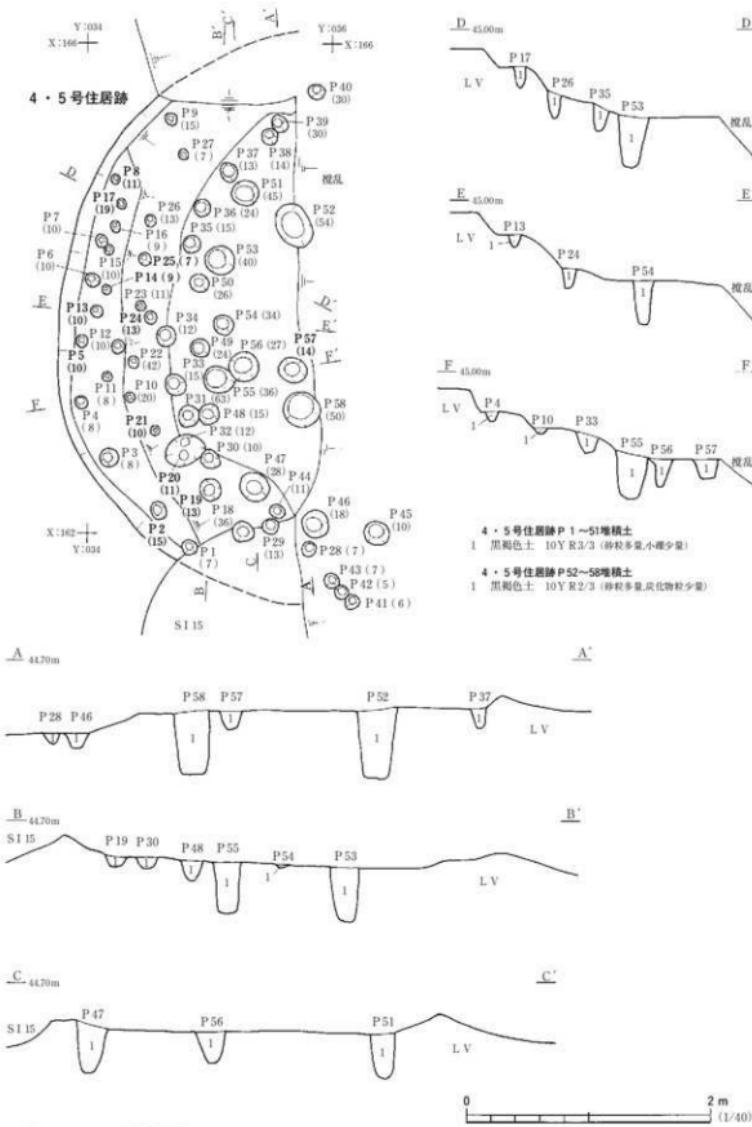


図14 4·5号住居跡

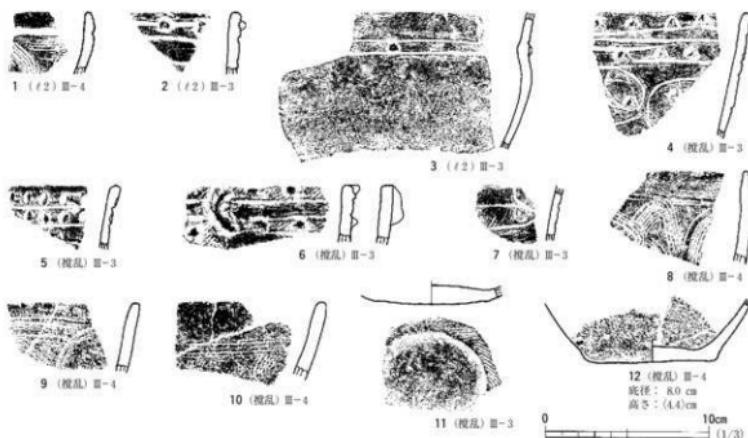


図15 4・5号住居跡出土遺物

6号住居跡 S I 6

遺構(図16、写真10)

調査区南部のB 8-8・12グリッドに位置する。段丘裾部の南東向き緩斜面に立地し、L II cで検出した。重複する遺構は認められないが、斜面下位の東側地点は東向き斜面の上方にある。本住居跡はその西側部分を検出した。

規模は現状で南北が4m、東西が3.6m、壁高は20cm程である。壁は外傾しながら立ち上がり、床面は西から東に向かって緩やかに傾斜している。堆積土は2層に区分した。いずれも壁際からの流入が認められることから、自然流入土と考えている。

住居施設は炉跡・柱穴を検出した。炉跡は石圓炉で、用いられた石は現状で7個である。石は30cm大のものと10cm大のものを組み合わせて、まばらに楕円形に配置されていた。石との間には隙間があることから、廃棄後、欠損したこととも考えられる。炉跡の規模は長軸70cm、短軸60cm、底面までの深さは床面から5cmである。炉跡の底面は ℓ 2上面で焼土が多量に含まれていた。炉跡は楕円形の掘形内に ℓ 2・3を埋めて石を設置していた。掘形の規模は長軸1m、短軸90cm、深さ15cmである。主柱穴はP 1・2でいずれも壁際位置する。その他の柱穴は、径15cm程である。(吉野)

遺物(図17、写真78)

遺物は繩文土器片約190点が、床面と ℓ 1から出土している。1・10・11は条線を主要文様とする土器である。1は完全形の鉢形土器で、底面は揚げ底状に削られている。器面は擬位にナデ調整されているが、胎土に含まれる多量の細粒砂の移動痕を顕著に残す。平口縁部に沿って、無文部を挟みながら三段に条線を巡らせている。10は平口縁に沿って巡る条線下の胴部に、条線を交差させ

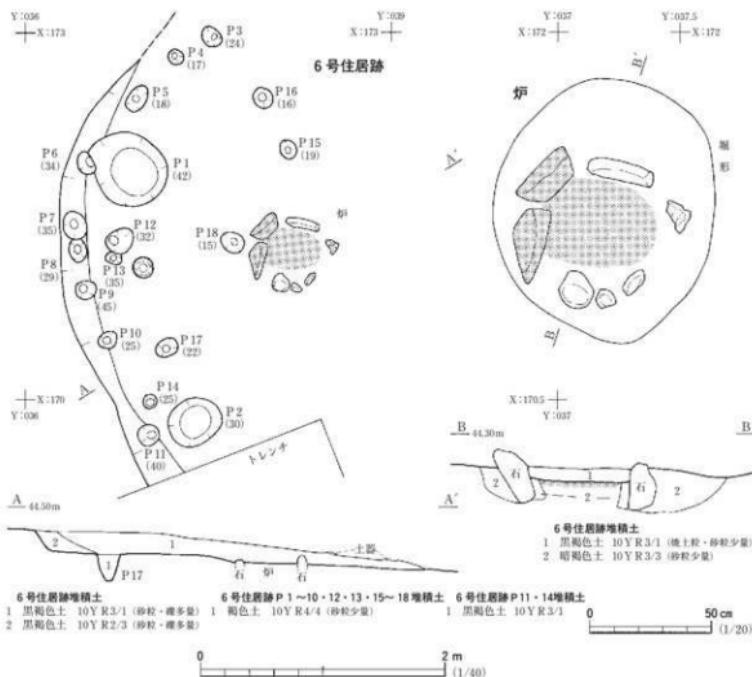


図16 6号住居跡

斜格子状の图形を描いている。11の脇部には、蛇行して垂下する条線がほぼ等間隔に施されている。2・3は無文の、7は縄文施文の平行沈線区画帶内に小さなコブを貼り付けている。4は沈線で連弧状の無文部を区画し、沈線の起点にコブを貼り付けている。5・6は無文地上に、細い沈線で平行沈線区画帯や帯状入組文を描いているが、区画外の磨り消しやコブの貼り付けが認められる。8は壺または注口土器片で、肩部に縄文を施して沈線区画とコブの貼り付けが認められる。9・12は無文の深鉢形土器の底部である。いずれも器面はナデ調整され平滑に仕上げられている。また、12の底面は中央付近が丸く削られ、低い幅広の台状の作り出しが認められる。

ま と め

本住居跡は遺存状態が悪く本来の形状・規模については不明であるが、住居内施設として石圓炉と柱穴の一部を検出することができた。本遺構の所属時期については、出土遺物の特徴から縄文時代後期後葉項と考えている。

(山岸)

第2節 壁穴住居跡

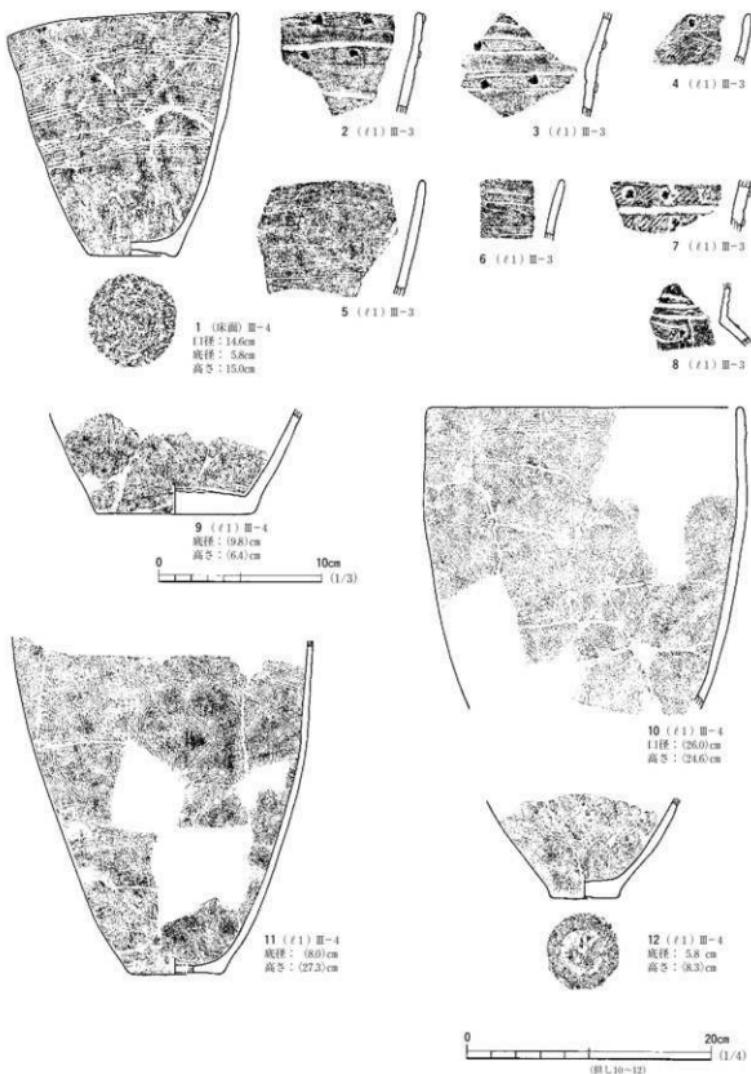


図17 6号住居跡出土遺物

7号住居跡 S I 7

遺構(図18、写真11)

調査区南部のB 9 - 3 グリッドに位置する。周囲は西から東側へと下る斜面地である。検出面はLVで、表土除去後に半月形の黒色土のプランとして確認できた。斜面への畑造成によって東側及び南側周壁と堆積土の大半を失っており、遺存状態は悪い。S I 8・15と重複するが、新旧関係は不明である。また、南側にSK 2が近接する。遺構内堆積土は、1層で砂粒を多く含む暗褐色土である。壁際に僅かに堆積しているに過ぎないため堆積状況は不明である。

平面形は、周壁や柱穴などの配置から円形と考えられる。遺構の規模は遺存範囲で南北3.9m、東西2.1mを測る。壁高は、遺存状態の良い西壁で18cmである。壁の傾斜は床面から急勾配に立ち上る。床面はLVを掘削して床を構築していく、おおむね平坦であるが踏み締まりは弱い。

遺構内施設は、柱穴23個を確認した。P20を除く柱穴は、直径10~17cm、深さ12~26cmと小形の柱穴が主体である。P20は床面の中央に位置し、主柱穴と考えられる。直径22cm・深さ49cmを測る。柱穴内の堆積土は、砂粒を多く含むにぶい黄褐色土であり、柱痕は確認できなかった。



図18 7号住居跡

遺物

本遺構から遺物は出土していない。

まとめ

本遺構は、東側の大半が失われていたが、柱穴の配置などから、概ね円形の竪穴住居と考えられる。遺構の中央には、主柱穴と考えられる柱穴1本が位置する。所属時期は、遺物が出土しておらず不明確な点が多いが、周辺の遺構との関係から、縄文時代後期後葉頃と考えている。(中野)

8号住居跡 S I 8

遺構(図19、写真12)

調査区南部のB 9-4・8グリッドに位置する。周囲は西から東側へと下る斜面地である。検出面はL II cである。石圓炉と複数の柱穴を確認したことから住居跡とした。北側でS I 7と重複するが、堆積土が失われていたため新旧関係は不明である。また、西側にSK 2が近接する。遺構内堆積土は炭化物を少量含む単層の黒褐色土である。

平面形は残存する周壁と柱穴から概ね楕円形をしていたものと考えられる。残存する遺構の規模は南北4.5m、東西2.5mを測り、壁高は遺存状態の良い西壁で11cmである。壁は床面から急角度で立ち上がる。床面はL IIIを掘削して構築し、概ね平坦であるが、全体的に踏み締まりは弱い。

遺構内施設は石圓炉1基、柱穴14個を検出した。石圓炉は床面の中央西側よりに位置している。東側の石は抜き取られたためか失われている。平面形は掘形や遺存した石の配置から東西に長い楕円形と考えられる。長径は85cmを測り、10~16cm大の自然石を10個配している。使用面は西側の一部分が焼けているに過ぎず焼け方は弱い。酸化面の厚さは0.5~1cmである。

柱穴は直径10~23cm、深さ10~37cmを測り小形のものが多い。柱穴内堆積土は砂粒を多く含む暗褐色土で、柱痕などは見られなかった。おおむね床面に対して垂直に掘り込まれているが、P 2・3・5は西側へ傾いて掘りこまれている。柱穴は周壁に沿って巡ることから壁柱穴と考えられる。P 10・11はやや外側に位置し周壁もそれに合わせて外側へ屈曲している。(中野)

遺物(図19)

遺物はℓ 1中から縄文土器片約200点と剥片2点が出土している。1は深鉢形土器の胴部下半である。器面は平滑に仕上げられ、薄く堅緻な作りとなっている。2・3は平行沈線区画帯が施され、要所に小さなコブを貼り付けている。4は沈線区画の曲線图形を描き、区画内に縄文を充填している。5は平口線に沿った条線と、そこからユーターンして垂下する条線を施している。6は多段の平行沈線区画帯を巡らせ、その間に無文帯と刻みを加えた区画帯が交互に認められる。(山岸)

まとめ

本遺構は東側が失れていたが、柱穴の配置から円形から楕円形の住居跡と考えられる。床面中央から石圓炉が検出され、使用面の焼け方が弱い。また、柱穴に建て替えなどの痕跡も見られない。所属時期は出土した遺物などから縄文時代後期後葉頃と考えられる。(中野)

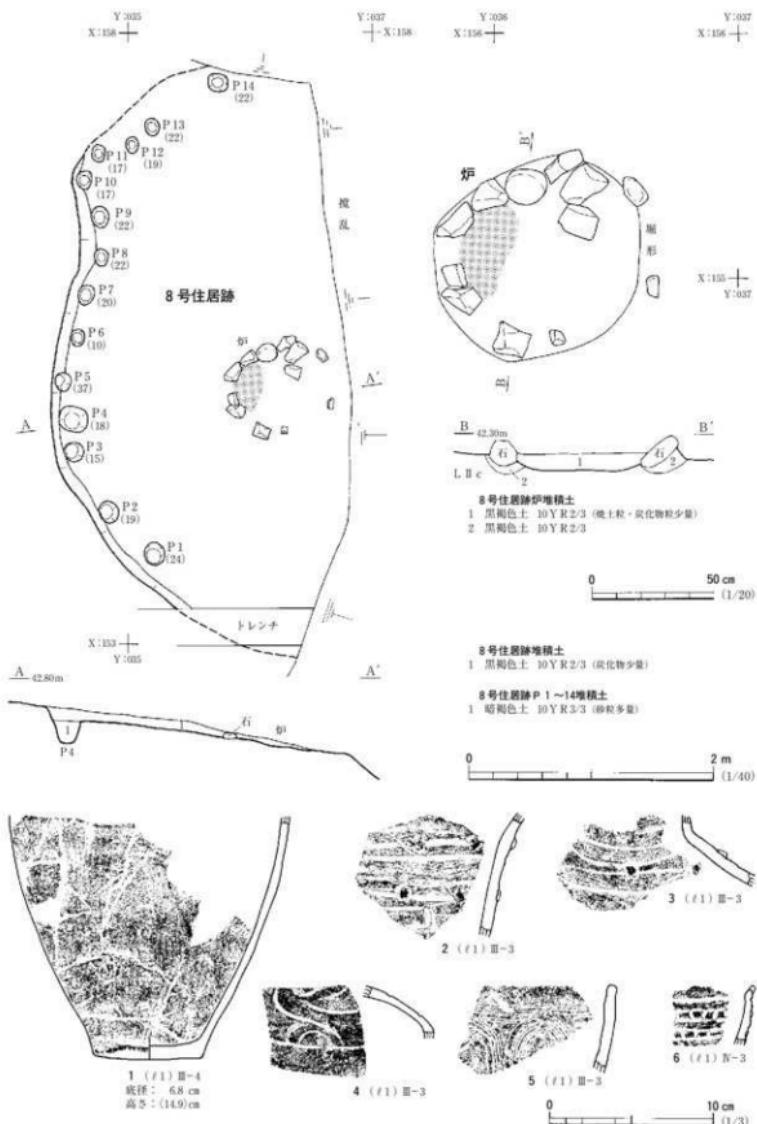


図19 8号住居跡と出土遺物

9号住居跡 S I 9

遺構(図20)

調査区中央部の南西端、B 7 - 12グリッドの平坦面に位置する。L III上面で炉跡のみを検出した。S I 10やS K 13と重複していた可能性が高いが、新旧関係は不明である。

炉跡は石圓炉で、東側部分の石3個が遺存していた。底面はℓ 1上面で焼土粒が多量に含まれていた。

遺物

本遺構から遺物は出土していない。

まとめ

本住居跡は石圓炉の一部を検出したことから、住居跡としたものである。出土遺物がなく時期の特定ができないが、周辺の住居跡の時期を参考にすると縄文時代後期後葉と考えている。(吉野)

10号住居跡 S I 10

遺構(図21、写真13)

調査区中央部の南西端、B 7 - 8・12グリッドL III上面で検出した。SM 8と重複し新旧関係は、本遺構が古い。その他S I 9と重複している可能性が高いが、新旧関係は不明である。

平面形は円形で、規模は径が4.7mである。遺存する壁は外傾しながら立ち上がり、壁の高さは5cm程である。床面はほぼ平坦である。堆積土は2層に区分した。

住居内施設は炉跡・柱穴を検出した。炉跡は石圓炉で、住居跡中央に位置する。現状で10個の石を用いて、円形に配置していた。炉跡には、石が抜けている箇所や炉跡内に倒れている石などがあることから、本来の形状を保っていないと判断した。石が抜けている箇所を補ってみると、本来は13個の石を用いていたものと考えている。規模は径が60cmで、床面からの深さは5cm程である。底面は西側に焼土の堆積がみられた。炉跡は円形の掘形内にℓ 3を埋め戻して、石を直立させていた。掘形の規模は径が75cm、深さが20cmである。

(吉野)

柱穴は35個検出した。柱穴内堆積土は、いずれも黄褐色土の小塊を含む暗褐色土である。これら柱穴のうち、炉跡を取り囲むように六角形の配置となるP 1・3・5・7・9は径が25~40cm、深さが48~64cmと他の柱穴に比べて規模が大きいことから主柱穴と考えている。また、P 1・3・7と重複するP 2・4・8は径が20cmを超え、深さが33cm前後とほぼ一定していることから主柱穴の造り替えが行われた可能性が高い。

壁際に沿って同心円状に検出されたP 14~32については、径が20cm、深さが30cmに満たない柱穴が多く、壁柱穴と考えている。また、北壁際のP 10・11と南東側のP 12・13については、いずれも30cmほどの間隔で溝と連結されている。P 10・11は径が40cm、深さが50cmを超え、P 12・13は径が

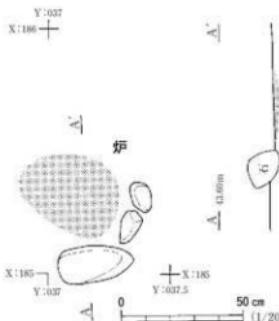


図20 9号住居跡

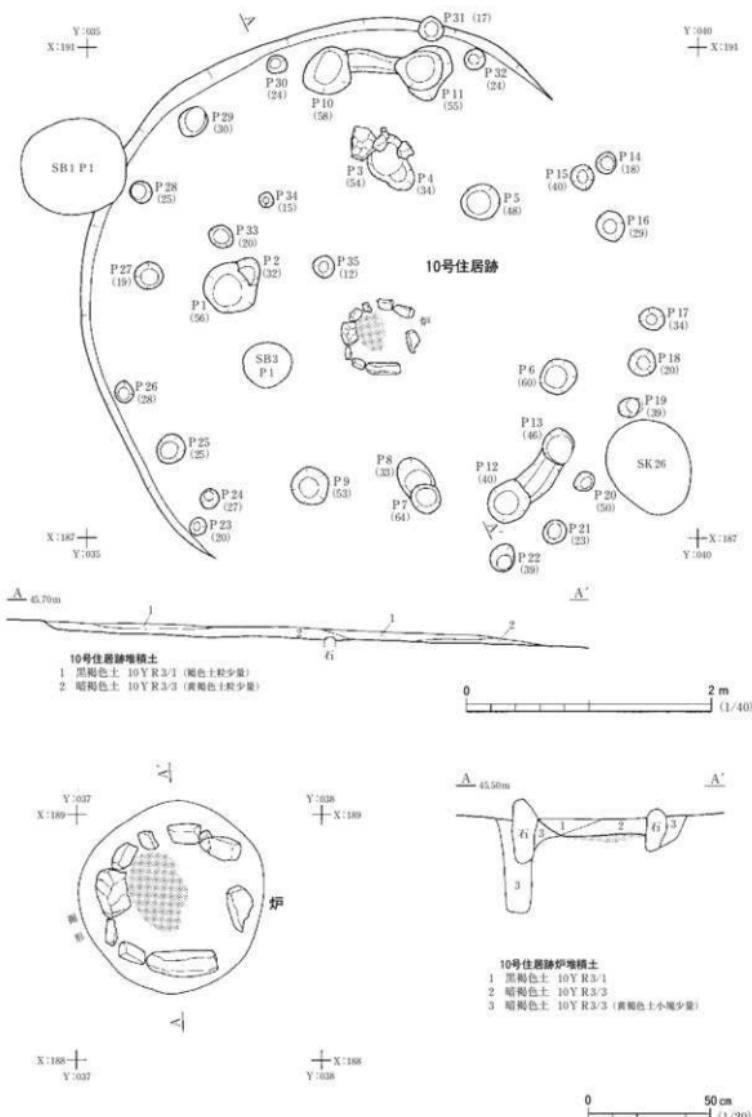


図21 10号住居跡

30・25cmと主柱穴と遜色のない規模である。これら二ヶ所の柱穴については、壁柱穴に近い位置にあることから出入りの施設に関連した柱穴と考えている。ただし、二ヶ所同時に機能していたとは考えにくく、新旧関係は判然としないが主柱穴同様に造り替えが行われた可能性が高い。

遺物(図22、写真78)

遺物はいずれも床面に近い①下部から出土している。1はやや揚げ底ざみの底部から胴部が僅かに外傾し、口縁部でわずかに内湾する器形の深鉢形土器である。平口縁に沿った平行沈線区画帯を胴部下に向かって、無文帯を挟みながら三段に配置している。区画帯内には縄文を充填し、小さなコブをほば等間隔で貼り付けている。2・3は平口縁の深鉢形土器で、いずれも口縁に沿って一条の条線を巡らせ、その条線から胴部下半に向かって強く蛇行する条線を垂下させている。

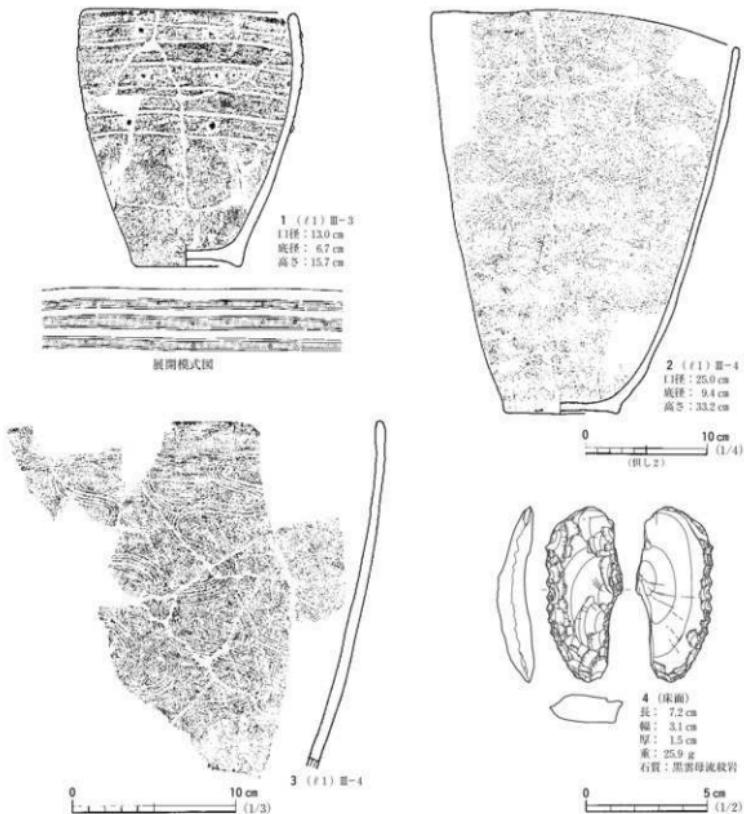


図22 10号住居跡出土遺物

4は横長削片を素材とし、底縁に簡単な両面加工を加えて刃部を作り出している。打点方向にも片面加工が認められるが、素材の厚さを取りきれていない。形状から削器または横長の石匙の未製品の可能性が考えられる。

ま と め

本住居跡は遺存する壁と壁柱穴の配置から径が5m程度と想定され、平面は円形を基調とする。住居内施設は石囲炉1基と柱穴35個を検出した。所属時期については、出土遺物の特徴から縄文時代後期後葉頃と考えている。

(山 岸)

11号住居跡 S I 11

遺 構(図23, 写真14)

調査区中央部南西端のC 7-1・2・5・6グリッドに位置する。周囲の地形は北西側から南側へ下る緩斜面である。検出面はL IV・Vである。遺構検出時に楕円形を呈する黒色土のプランを確認したため精査を行い住居跡と確認した。遺存状態は南側が緩い斜面のため堆積土が失われているが、北側は概ね良好である。S B 5と重複しており本遺構が古い。遺構内堆積土は2層である。いずれも焼土粒やローム粒を含む黒褐色土で、レンズ状に堆積していることから自然堆積土と考えられる。

平面形は東西に長い楕円形を呈する。遺構の規模は東西4.6m、南北4.32mを測り、壁高は遺存状態の良い西壁で24cmである。壁の傾斜は床面から急斜面で立ち上る。床面はL Vを掘削して構築し、概ね平坦である。全体に少量の炭化物が散っていて踏み締りは弱い。

遺構内施設は石囲炉1基、柱穴45個を確認した。石囲炉は床面中央で検出した。平面形は楕円形で、東西63cm、南北73cmを測る。炉石は8~25cm大の角礫を12個配している。炉は、床面を5~10cm窪めて石を配置したものと考えられる。炉の堆積土は3層である。使用面は良く焼けており、酸化面の厚さは3cmに及ぶ。

柱穴は、P 36~44が炉を取り囲むように巡っていることから主柱穴と考えられる。規模は直径20~30cm、深さ17~49cmを測る。P 4~35・45は、壁際に沿うように配列されているため壁柱穴と考えられる。直径15~50cm、深さ7~34cmと小形で構成されている。概ね床面に対して垂直に掘り込まれている。P 1・2は出入口施設に関連した柱穴と考えられる。直径58~60cm、深さは51~55cmを測り、柱穴間を溝で結んでいる。またP 1・2の北西側には、東西92cm、南北120cmの不規則な掘形が見られる。用途は不明だが出入口施設に関連した柱穴の建て替えの可能性もある。住居跡の西壁から北壁には周壁に沿う形で、深さ10~15cmの溝が巡る。

(中 野)

遺 物(図24, 写真78)

遺物は縄文土器片約400点、石器4点が出土している。1は平行沈線と入り組み状の区画帯が施され、その内に小さなコブを貼り付けている。2・3・14・15は平行沈線区画帯と帯状の入組文が施され、区画帯と入組文内に刻み状の連続刺突が加えられている。4は条線地上に平行沈線を巡ら

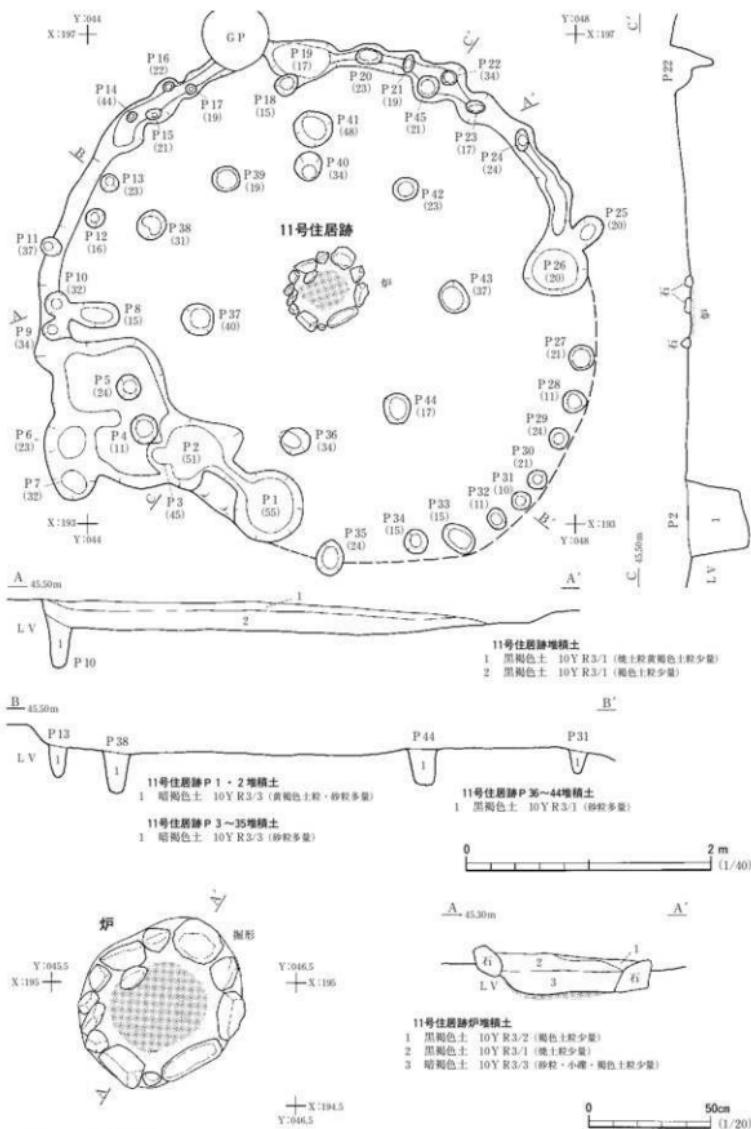


図23 11号住居跡

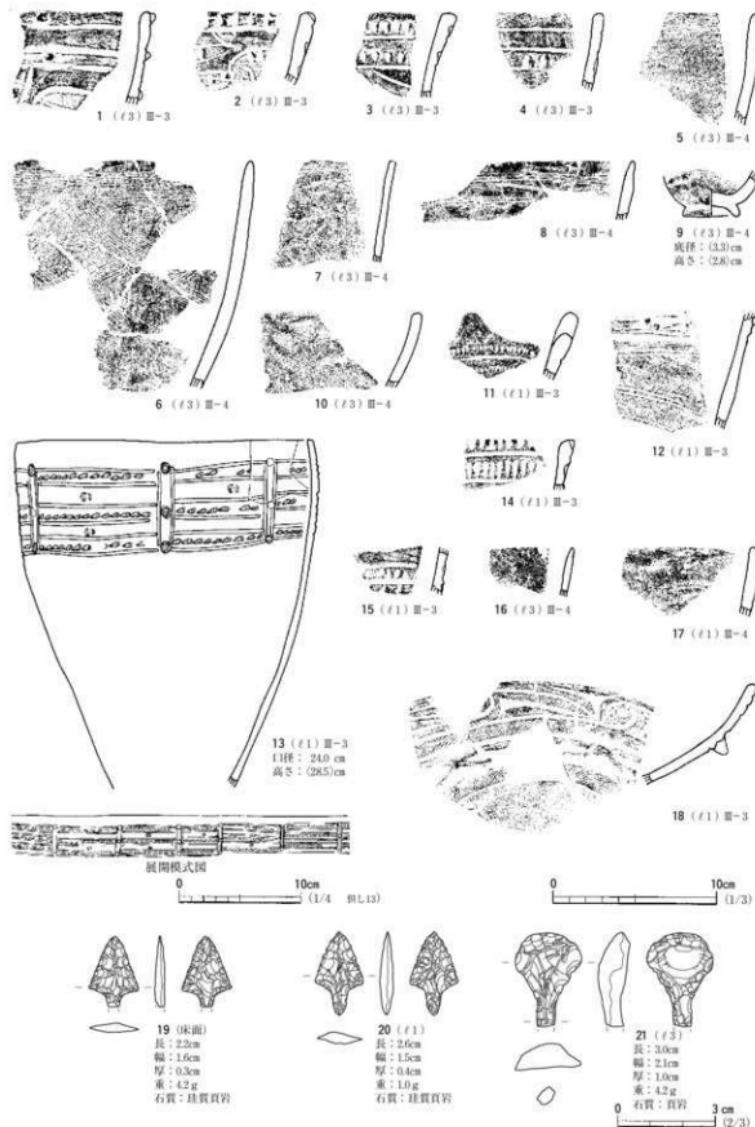


図24 11号住居跡出土遺物

せ、その間に一对の刻み状の刺突を施している。5～8は条線が施され、口縁では横位、胴部では蛇行して垂下する。9は小型の台付き土器の底部、10・16・17は無文の平口縁部である。11は山形状の突起が付けられ、口縁を巡る沈線の上下に沿って櫛歯状工具による連続刺突が施されている。12は平行沈線間にコブが付けられ、その下に横位の条線が施されている。

13は底部を欠損する平口縁の深鉢形土器である。平行沈線による縱位の区画間を、平行沈線で5段に区画し、棒状工具による連続刺突と「ハ」の字状の一対の刺突を交互に施している。また、縱位の区画内には、連続刺突が施される区画部分に刺突を加えたボタン状のコブが貼り付けられている。18は平口縁の浅鉢形土器である。胴部中央に縄文を施した平行沈線区画帯を巡らせ、口縁部方向には帯状の入組文と無文部に三叉状の沈線文が横位展開されている。胴部下には起点にコブを貼り付けた眼鏡状の区画文が施されている。

19・20は有茎石器である。いずれも茎部の抉りは強く、明確な茎部を作り出している。比較的丁寧な両面加工が加えられ、二等辺三角形の整った形状となっている。21は先端部を欠損する石錐である。錐先方向は両面加工で、柄部は簡単な周縁加工で整形されている。
(山 岸)

ま と め

本遺構は、入り口施設や主柱穴などの明確なプランを持つ楕円形の壺穴住居である。入り口施設の北西側には不規則な掘形が認められることから建て替えを行っている可能性もある。所属時期は出土した遺物などから縄文時代後期後葉頃と考えている。
(中 野)

12号住居跡 S I 12

遺 構(図25, 写真15)

本遺構は調査区南部のB 9-11・12・15・16グリッドに位置する。周囲は西から東側へと下る緩斜面地である。検出面はL II dで、複数の角礫と焼土を確認したことから住居とした。西側から東側へ下る斜面地であるため東側半分が土砂の流失などで失われている。SM 1～6と重複し、本遺構の堆積土を掘り込んでいることから本遺構が古い。遺構内堆積土は均質な黒褐色土の単層で、周壁の上場から床面まで均一に堆積している。

平面形は周壁や柱穴などの配置から円形か楕円形と考えられる。遺構の規模は北側を土層観察用トレチで掘り過ぎてしまったため不確定だが、残存長は長軸5.3mを測る。壁高は遺存状態の良い西壁で35cmである。壁の傾斜は床面から急勾配に立ち上る。床面はL IIIを掘削して構築し、西側から東側へ緩く傾斜している。床面全体に少量の炭化物が散っており踏み締まりは弱い。

遺構内施設は石圓炉¹基、柱穴14個である。石圓炉は床面の中央に位置する。平面形は円形で東西60cm、南北70cmを測る。炉石は10～20cm大の角礫を8個配している。北側の一部と東側の炉石がなくなっていることから、住居廃絶時に抜き取られたものと考えられる。使用面は良く焼けていて厚さは5cmである。柱穴は周壁に沿って配列されることから壁柱穴と考えられる。柱穴の直径は12～20cm、深さ8～24cmを測る。柱穴の堆積土は砂粒を少量含む黒褐色土である。
(中 野)

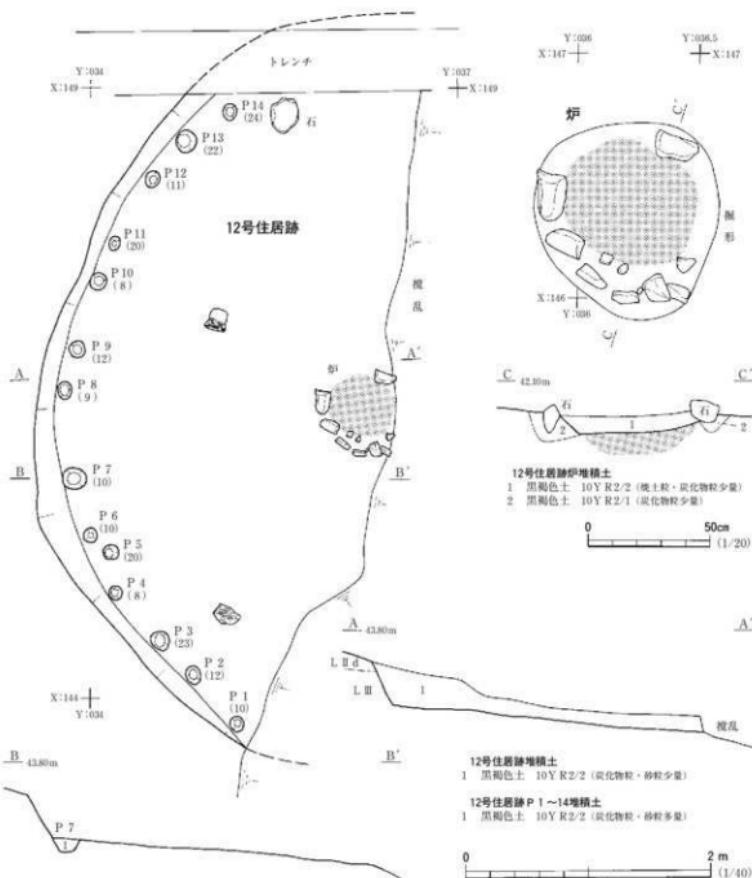


図25 12号住居跡

遺 物(図26、写真79)

遺物は縄文土器約80点が出土している。1は平口縁の鉢形土器で、胴部中央のくびれから口縁にかけて、浅い沈線または植物の茎の回転文を充填した平行沈線区画帯で方形に区画し、区画内の無文部に木葉状の文様を二段重ねに施している。また、縦位の区画の上下に縦位の刻みを入れたコブを、中央には小さなコブを付けている。2・6は網目状の沈線文が施され、6には平行沈線間にコブが付けられている。3・4は条線が施された区画帯内にコブを貼り付けている。5はコブを起点として沈線文が描かれ、口縁では連弧状に、胴部には眼鏡状の图形となっている。7は注口土器

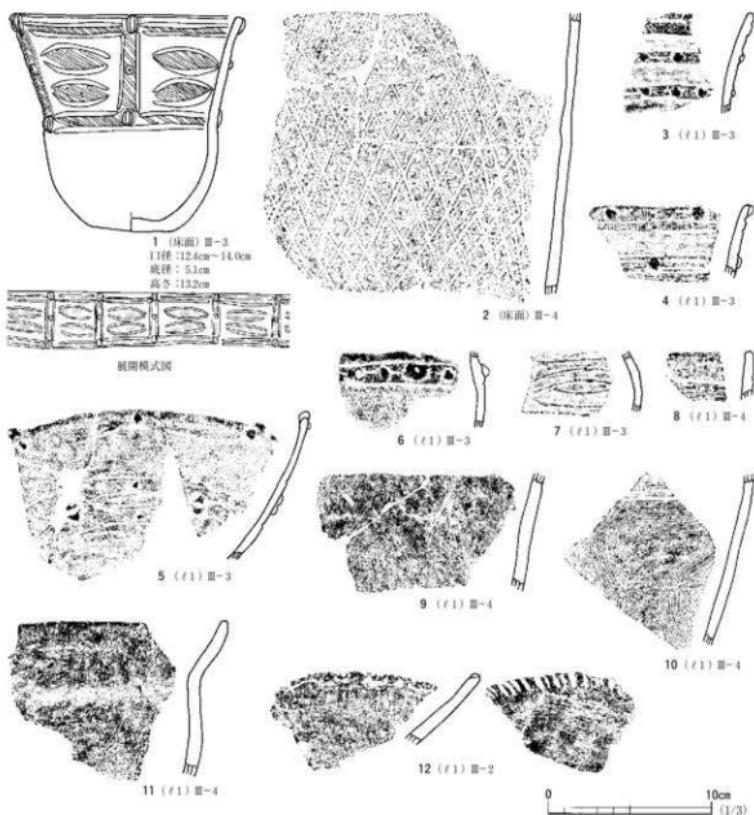


図26 12号住居跡出土遺物

の胴部片で、二条一組の微隆帯を入り組み状に施している。8～10は蛇行して垂下する条線が認められ、8・10は無文部との沈線区画下に施されている。11は口縁部が屈曲して外傾する平口縁の無文土器である。12は無文の浅鉢形土器で、口縁端部内面に連続した刻みが施されている。（山岸）

まとめ

本遺構は東側の大半が失われていたが、円形ないし梢円形の堅穴住居と考えられる。残存する周壁などから推定直軸が6m前後の大型住居跡と考えられる。遺構検出面がL II dであるため、調査区南側斜面部の住居群の中では早い段階に作られた住居跡と考えられる。また堆積土の状況から住居廃絶時に埋め戻された可能性があり、上部から検出された埋甕群との関係が興味深い。所属時期は埋甕との重複関係や出土した遺物などから縄文時代後期後葉頃と考えている。（中野）

14号住居跡 S I 14

遺構(図27, 写真16)

本遺構は、調査区南部のC 8 - 1・2 グリッドに位置する。段丘面の縁辺、南向きの緩斜面上に立地する。遺構検出面はL II c 上面である。斜面上位の北側でS I 30と平面上で重複するが、後世の掘削により直接の新旧関係は不明である。また、南側にはS G 1とS M18・19が隣接している。

遺構内の堆積土は3層に分けた。 ℓ 1はL II bに近い色調の黒褐色土で、炭化物粒を多く含んでいる。 ℓ 2は焼土粒と炭化物粒を多く含む褐色土である。遺構内に不均一な厚さで堆積し、人為的な埋土の可能性が高い。 ℓ 3は壁際や床面上に見られる黒褐色土で、自然堆積したものであろう。

本遺構の平面形は梢円形で、南北長は3.8m、東西長は4.6mである。床面は、斜面の傾斜に沿って南東側が低くなっている。炉の周辺に、顕著な踏み締まりが確認された。周壁の検出面からの高さは、最も残りの良いところで29cmある。斜面下位の南東側の周壁は遺存しなかった。また、この箇所からは大きな自然礫が2個出土した。住居の入口に関する礫の可能性もあるが、遺構に伴うものか否かは明らかにできなかった。

床面のほぼ中央には、石圍炉がある。長径が20cm前後の自然礫9個を、円形に配置している。その大きさは66×54cmである。礫は、小さく掘り溝められた穴に据えられていた。また、南端の炉石は若干ずれている。炉石の内面と炉の底面は、よく焼けていた。

柱穴は36個確認された。P 31・35の堆積土は焼土を含み、 ℓ 2に似た色調である。その他の柱穴内堆積土は、L II c に多く含まれている細かい礫が少ない。またP 22とP 35は重複し、P 35の方が新しい。P 31・35を除く柱穴、特に壁際に巡るP 1~29は、壁柱穴と考えている。柱穴の長軸長は12~24cm、短軸長11~21cm、深さは4~23cmである。

遺物(図28~30, 写真79)

図28-1~10、図29-1・2・17~22は、磨消繩文技法を用いて入組文や弧線文などが描かれたもの、あるいは繩文に代わって細い縦位の条線が沈線間に充填されているもの、貼繪がみられるものなどである。

図28-1~3は、器形が復元できた深鉢である。1は胴部が軽く膨らみ、頸部が緩く括れ、口縁部が直線的に開く器形である。底部には低い高台が付く。また口縁部は平縁で、刻みを施した山形突起が付いている。文様は磨消繩文により描かれている。口縁部文様帶の上段と中段および頸部に横位の沈線が巡り、その間に相対する連続弧線文が描かれている。弧線の内部と上・中段と平行沈線間の繩文が、磨り消されている。胴部は無文でミガキが施されている。2は、1に比べ胴部が大きく膨らみ、頸部の屈曲が明瞭である。口縁には、5単位の低い山形突起が付く。口縁部から頸部にかけて、横位の沈線と横に連結した弧線文が描かれている。平行沈線と弧線文の間には、細かい条線が充填されている。3は、口縁部が緩く内湾しながら開く器形である。口縁には、頂部を壅ませた突起が付く。口縁部文様帶には、横位の沈線と連続する弧線文が多段に描かれている。弧線文

の内側を残し、縦位の条線が充填されている。また、おもに弧線の連結部分に小さな貼瘤がみられる。胴部には櫛歯状条線文が横位に描かれている。

図28-4～6は同一個体とみられる。口縁には刻みを施した小さな突起が並ぶ。口縁部には平行沈線と入組文が描かれ、沈線内には縦位の条線が充填されている。胴部片の6には、斜格子文が描かれている。同図8と図29-1は小さな貼瘤と横位の沈線のみが描かれ、縄文や条線は用いられていない。図29-17の口縁部片は、横位の沈線間に一本描きの短沈線が粗く充填されている。同図20は4mm程度と、他に比べ薄い。入組三叉文が描かれ、LRの細い原体が用いられている。同図21は、LRの地文上に沈線文と綾絡文が施されている。

貼瘤には、いくつかの種類と特徴がみられる。図28-9の貼瘤は、高さがあり粒が大きい。同図10の貼瘤は縦長な点が特徴的で、平行沈線間に並んでいる。図29-2の瘤は高さがあり、その付け根は細い籠状工具で撫でつけられている。同図18の貼瘤は大きく長方形である。

図29-3～5は櫛歯状工具による条線文が描かれた粗製の深鉢である。口縁直下に条線を巡らせた後、同じ工具を用いて縦位の波状文を描いている。工具の歯数は7～10本、幅は12～18mmほどである。同図6～8は無文の土器片である。6の口縁部直下には、横方向のミガキがみられる。7は筒形の土器で、口縁部には貫通孔を有する突起が付くものと推察される。外面には入念なミガキが施されている。8の口縁部片には、焼成前に開けられた貫通孔がみられる。図29-9・10・23・24は底部片である。いずれも文様はみられず、10・24は揚げ底座、23には高台が付く。

図29-11の外面には横位の貝殻腹縁文が、内面にはミガキが施されている。同図12は、細隆起線によって文様が描かれている。同図13には、横位の貝殻条痕文がみられる。同図14・15はLRの地文のみの胴部片である。16は、口縁部が「く」の字に屈曲して内傾する。幅の狭い口縁部文様帶は隆帯で区画され、コンバス文が描かれている。12～16の胎土には、纖維混和痕が観察される。

図30-1・2は磨・敲石である。1の表面と側縁に敲打痕が、側縁には併せて擦痕がみられる。2は側縁に敲打痕が観察される。

ま と め

本遺構は、出土遺物から縄文時代後期後葉に位置づけられる。平面形は梢円形で、床面のほぼ中央には石壠がある。

(今野)

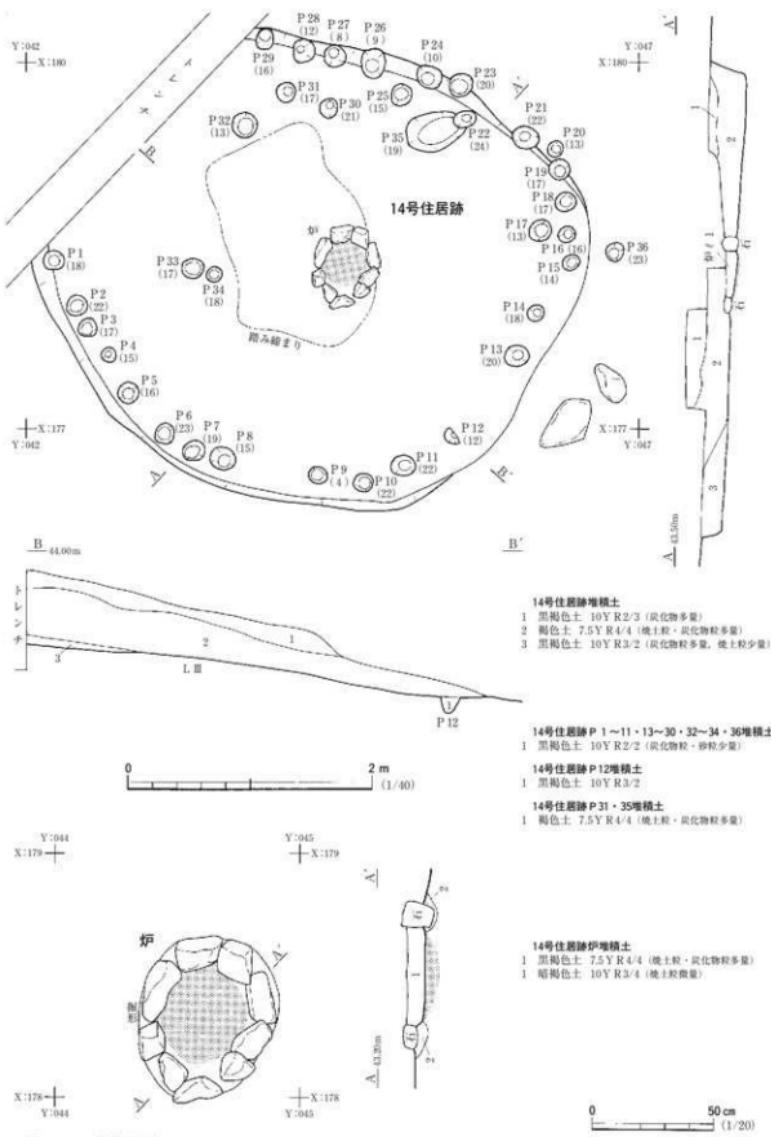


図27 14号住居跡

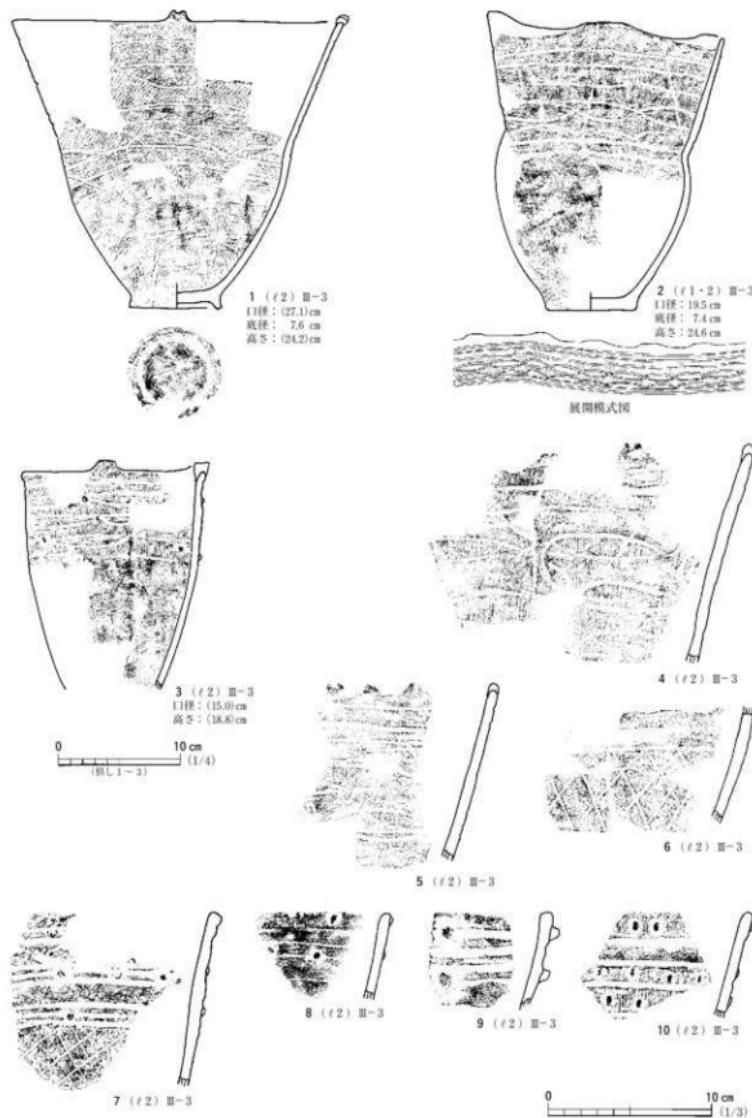


図28 14号住居跡出土遺物(1)



図29 14号住居跡出土遺物(2)

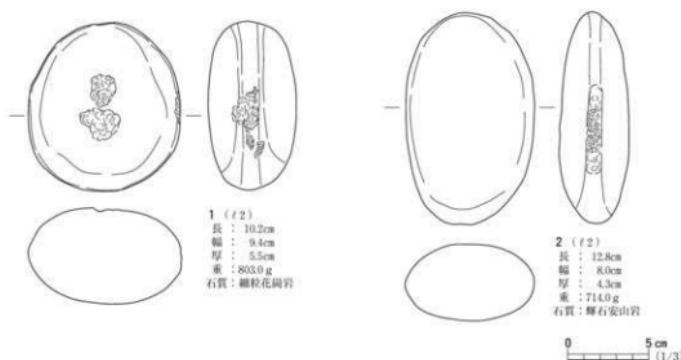


図30 14号住居跡出土遺物(3)

15号住居跡 S I 15

遺構(図31)

本遺構は、調査区南部のB 8-15・16, B 9-3・4グリッドに位置する。周囲は西から東側へと下る斜面地である。検出面は、LVである。農道によって削られた斜面を精査していた際に、壁の一部と複数の柱穴を確認したことから住居跡とした。重複関係は、S I 4・5・7と重複する。堆積土が失われているため、新旧関係は不明である。西側にSK 1が近接する。

平面形は、周壁の多くが壊されていており、柱穴のプランも不規則であるため不明である。遺構の残存する規模は、東西3.3m、南北2.0mを測り、壁高は遺存状態の良い西壁で40cmである。壁の傾斜は、搅乱の影響を受けている可能性があるが、周壁北西側は、比較的良く残っており、床面から急勾配に立ち上る。床面はLVを掘削して構築していて、おおむね平坦であるが、西側から東へ緩く傾斜している。踏みしまりは見られない。

遺構内施設は、柱穴16個を検出した。柱穴は、直径14~18cm、深さは5~31cmを測り小規模なもののがほとんどである。おおむね床面に対して垂直に掘りこまれている。配列はP 1・10~16のように周壁に沿うものもあるが、P 3~8のように中央寄りに位置するものもある。柱穴内堆積土は砂粒を多く含む暗褐色土である。

遺物

遺物は出土していない。

まとめ

本遺構は非常に残りが悪く周壁や床面の大半が失われており不明確な点が多い。柱穴の配置が不規則的であるため、複数の住居の重複も考えられる。また遺構の所属時期は、出土した遺物もないため不明である。

(中野)

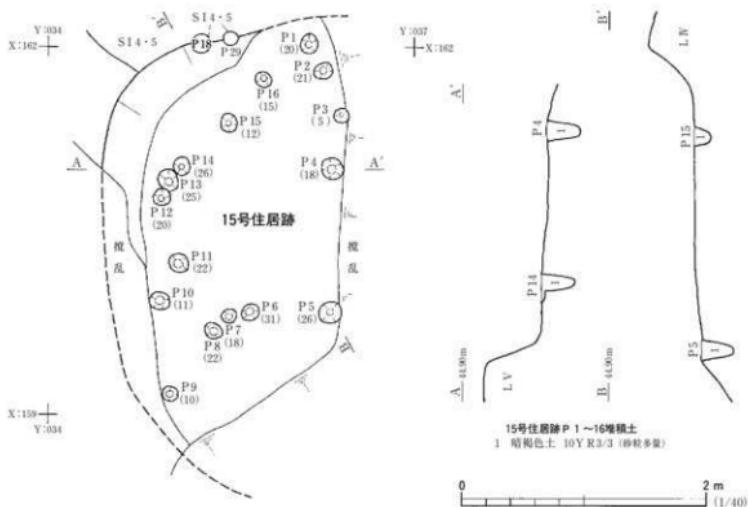


図31 15号住居跡

16号住居跡 S I 16

遺構 (図32, 写真17)

調査区南部のB 9-4・8, C 9-1・5グリッドに位置する。周囲は西から東側ないし南側へと下る緩斜地である。検出面はL II c下面である。L II b～II c掘削時に複数の角礫と焼土の集中する範囲を確認したことから住居跡とした。西側から東側へ下る斜面地であるため遺構の東側及び南東側は土砂が流出して失われている。また炉跡の北東側に新たなが跡が2基確認されたことから3軒の住居跡が重複していることが分かった。東側から検出した順番にS I 17・18として調査した。新旧関係はS I 17より新しくS I 18とは不明である。遺構のすぐ南側にはSG 2, 西側にS I 8が接する。遺構内堆積土は2層である。ℓ 1は炭化物と砂粒を比較的多く含む黒褐色土で自然堆積土と考えられる。ℓ 2は砂粒を多く含む黒色土で貼床の土である。

遺構の平面形は周壁や柱穴などの配置から円形と考えられる。規模は最大で東西3.8m, 南北4.6mを測り、壁高は遺存状態の良い西壁中央部で18cmである。壁の傾斜は床面から比較的緩やかに立ち上る。床面はL II dを掘削して構築していて、西側から東側へ緩く傾斜している。床面全体に少量の炭化物が散っており踏み締まりは弱い。また炉跡付近の床面中央から北西側にかけて黒色土の貼り床が検出された。

遺構内施設は石囲炉1基、柱穴17個を検出した。炉跡は床面中央の西側に位置する。平面形は円形で東西60cm、南北68cmを測る。10~20cm大の円礫と角礫を7個配しているが、要所で石がなく

なっているため住居廃絶時に抜き取られたものと考えられる。使用面の焼け方は弱く^少の西側付近が僅かに焼けていた。厚さは0.5cmである。柱穴は小形のものが主体を占め、直径が12~20cm、深さ10~31cmを測る。周壁に沿って配列されることから壁柱穴と考えられる。柱穴の堆積土は炭化物を少量含む黒褐色土で、柱痕などの痕跡は確認できなかった。

(中野)

遺物(図33)

遺物には縄文土器片188点、石器1点があり、1~2から多く出土している。1は平行沈線区画帶内に刻み状の連続刺突を施している。2は無文の底部片である。3~5・14~16・23は無文地に条線文を施す土器で、主に平口縁の深鉢形土器である。口縁に沿って一単位の条線を巡らせ、その条線を起点として垂下する条線文を施す傾向が認められる。3・5・14・15は蛇行、4は直線的、16・23は鋸歯状に条線文が施されている。17は刻みを付けた平口縁に沿って沈線を巡らせ、沈線下に条線文を施している。

6~8は無文地に平行沈線区画帶を巡らす土器で、6・7は口縁端部に、8は沈線間に小さなコブをついている。20~22も平行沈線区画帶が施された土器で、21は条線が、22は縄文が区画帶内に充填されている。20は胴部下半に区画帶が多段に巡らされ、底部末端が外側に張り出し、低い台状を呈する。13は平口縁の深鉢形土器で、多段の平行沈線区画帶を巡らせている。口縁部付近では区画帶をまたぐように矢羽状の大柄な沈線文を横位に展開させ、胴部との境の区画帶内には「ノ」の字状の短沈線を密に施している。

9・10は平行や弧状の沈線区画の内外に連続刺突を加えた土器で、10には櫛歯状工具による刺突列が充填されている。また、10の弧線文の起点には小さなコブが認められる。

18・19は無文土器で、18の器面には棒状工具による磨きの痕跡が顯著に認められる。19は強く内湾する器形であることから楕円形の浅鉢形土器と考えている。

11・12・24は壺または注口土器片と考えられる。11は胴部との境に一对のコブが付加された縄文帯が巡り、上半には縄文の施された弧状の沈線区画文が描かれている。また、沈線区画文の起点には大・小のコブが付けられている。12・24は無文地に幅の狭い平行沈線区画帶を巡らせ、その間に小さなコブを付加している。

25は有茎石器の未成品と考えている。先端は鈍く膨らみ、側縁は左右非対称で形状は整っていない。剥離は全面に施されているが細かな調整剥離が少なく、比較的雑である。また、全体的に素材の厚みを取りきれていない。

(山岸)

まとめ

本遺構は東側の大半が失われていたが、周壁や柱穴などから長軸が4.6mの円形ないし梢円形の住居跡と考えられる。S I 17・18と重複関係にあり S I 17より新しい。S I 8と同様に^少跡があまり焼けていないことから、短期間使用されて廃絶されたものと考えられる。所属時期は出土した遺物などから縄文時代後期後葉頃と考えている。

(中野)



図32 16号住居跡

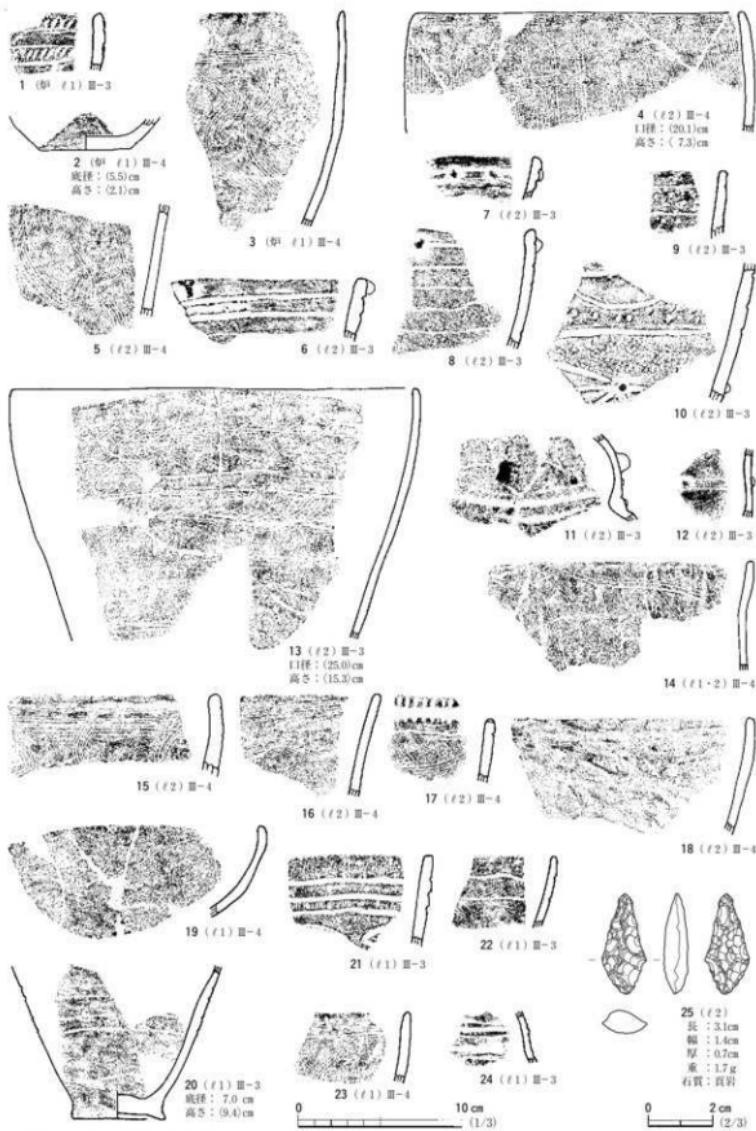


図33 16号住居跡出土遺物

17号住居跡 S I 17

遺構(図34、写真18)

本遺構は調査区南側のB 9-4・8, C 9-1・5グリッドに位置する。検出面はL II c下面で、東側半分が失われている。S I 16床面精査時に炉跡が検出されたため、床面および周辺を精査したところS I 16の北側に暗褐色土のプランを確認したため住居とした。S I 16・18と重複しており本遺構が最も古い。遺構内堆積土は炭化物・焼土粒を含む黒褐色土の単層で、堆積過程は不明である。

平面形は周壁や柱穴などの配置から円形と考えられる。遺構の規模は南壁を失っているが、東西3.8m、南北4.5mを測り、壁高は遺存状態の良い西壁で16cmである。壁の傾斜は床面から比較的緩やかに立ち上る。床面はL II dを掘削して構築していく、西側から東側へ緩く傾斜し踏み締りは弱い。

遺構内施設は石圓炉1基、柱穴18個、埋設土器1基を検出した。炉は床面の中央に位置する。平面形は円形で東西60cm、南北64cmを測る。10~15cmの自然石の角砾を8個配しているが、南東側の4個の石は浮き上がっており原位置を留めていないものと考えられる。石はすべて被熱し赤化している。石が無くなっている炉跡の東側からは石の抜き取り痕と考えられる窪みが3ヶ所検出された。使用面は良く焼けており酸化面の厚さは4cmである。柱穴は直径10~18cm、深さ8~32cmの小形が主体で、周壁に沿って配列されることから壁柱穴と考えられる。主柱穴は確認することができなかった。柱穴堆積土は炭化物を少量含む黒褐色土である。また西壁際において南北110cm、幅14cm、深さ10cmに渡って溝状の掘り込みが検出された。床面南西側からは埋設土器が1基検出された。掘形は東西30cm、南北35cm、深さ36cmを測り、土器より5cm程大きめに掘り込まれている。土器は掘形の底面から6cm浮いた状態で正立して埋設されている。

遺物(図35、写真79)

遺物の出土状況は堆積土や炉跡から少量の縄文土器が出土している。1は埋設土器で胴部に括れを持つ深鉢形土器の完形品である。口縁部直下には補修孔が穿孔されている。口唇部には5単位の瘤を付加する。文様は縦位方向に櫛歯状工具で条線を施した後に、沈線で弧線文と横位沈線を重層的に描いて区画し、区画内の条線を磨り消して要所には瘤が貼り付けられている。胎土には1~3mmの比較的粗い砂粒を多く混ぜ込んでいる。色調は褐色~暗褐色を呈し、部分的に煤が付着する。内面下半部には炭化物の付着が見られる。2は無文の楕形土器である。

まとめ

本遺構は長軸4.6mを測る円形の住居跡である。床面中央に石圓炉が検出され、西側を除いて石が抜き取られていた。また炉石には炉の使用面に接していない範囲にも被熱の見られるものやグズグズに崩れた状態のものが見られることから、住居を移動する際に、古い住居の炉石を持ち出して再度新しい住居の炉石としたものと考えられる。また床面南西側からは埋設土器が検出されている。遺構の所属時期は出土した埋設土器などから縄文時代後期後葉頃と考えている。

(中野)

第2節 壁穴住居跡

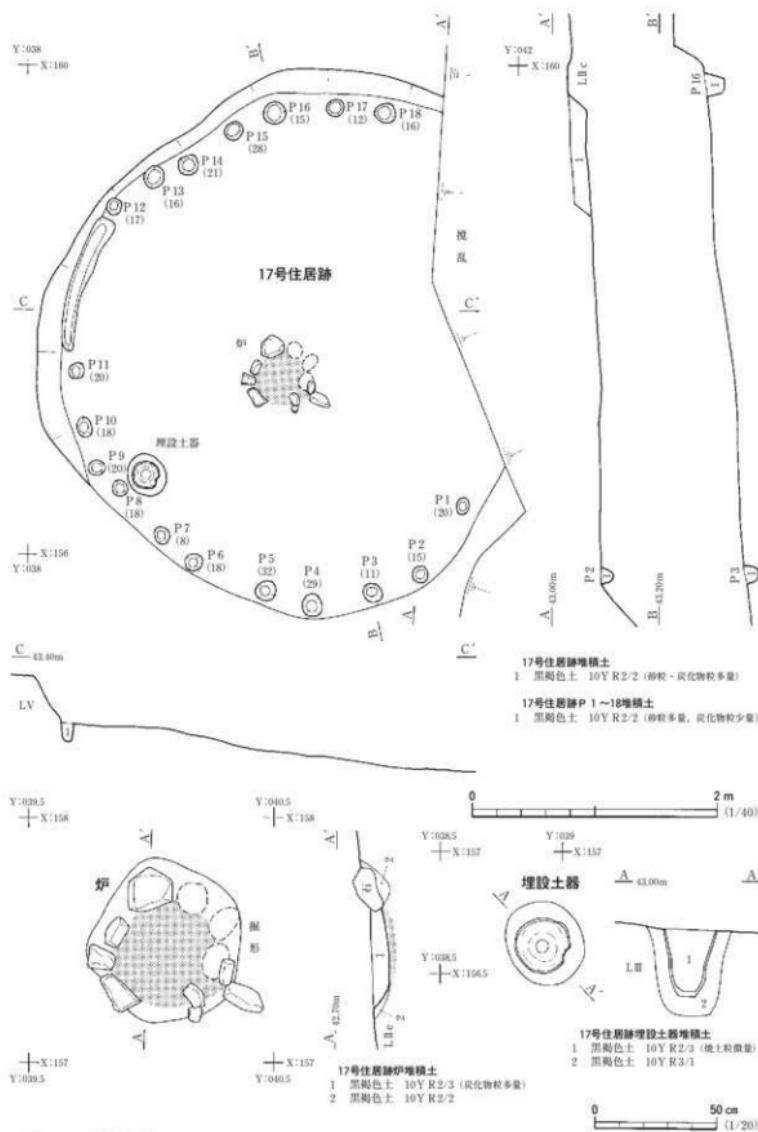


図34 17号住居跡

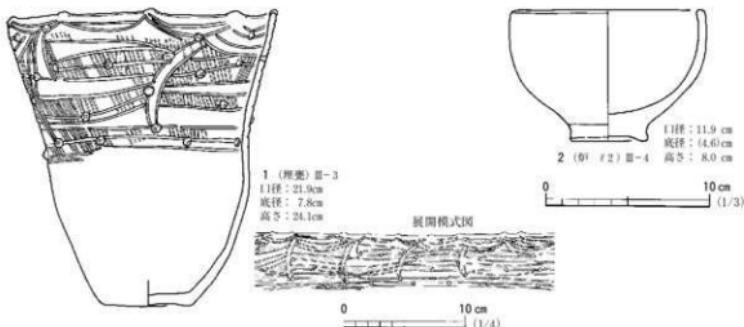


図35 17号住居跡出土遺物

18号住居跡 S I 18

遺構(図36, 写真19)

調査区南部のB 9 - 4・8, C 9 - 1・5グリッドに位置する。検出面はL II c下面である。S I 16・17の炉の東側から炉跡が検出され、床面を精査したところS I 17の内側に柱穴のプランを確認したため住居とした。S I 16・17と重複しておりS I 17より新しくS I 16との新旧関係は不明である。堆積土はS I 16・17の調査によって失われた。

平面形は柱穴などの配置から概ね円形と考えられる。遺構の規模は柱穴の分布範囲から東西約4.6m, 南北約3.4mを測る。床面はS I 17とほぼ同レベルに形成されていたものと考えられる。

遺構内施設は、石圓炉1基、柱穴13個を検出した。炉跡は床面の中央に位置し、平面形は円形で東西72cm, 南北65cmを測る。炉石は6~28cmの角礫を不正八角形状に8個配している。使用面上の石は浮き上がった状態で検出されており、本来南側にあった炉石が意図的に中央に移動されたものと考えられる。炉石は使用面側が強く焼けていて、使用面側でない面も被熱し赤化しているものがある。使用面は良く焼けており酸化面の厚さは6cmである。柱穴は直径が14~18cm, 深さ18~23cmの小形が主体で、壁柱穴と考えられる。柱穴の堆積土は炭化物を少量含む黒褐色土である。

遺物(図36)

遺物は縄文土器片22点が出土している。遺物の出土状況は炉跡からの出土が多い。図36-1・2・4は炉跡から、3はP 1出土土器を示した。

まとめ

本遺構は重複するS I 16・17のため大半が失われていたが、円形ないし稍円形の住居跡と考えられる。床面中央から比較的の残りの良い石圓炉が検出されている。S I 16・17と重複し、S I 17より新しい。所属時期は出土遺物や重複関係から縄文時代後期後葉頃と考えている。

(中野)

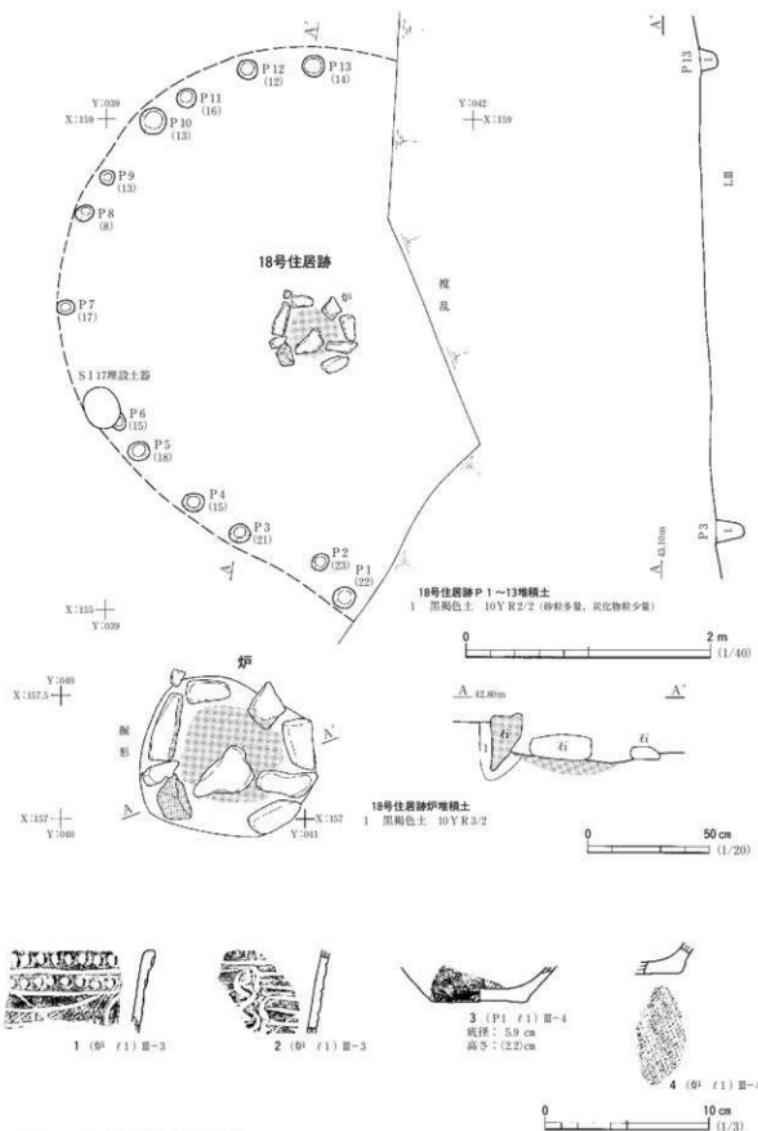


図36 18号住居跡と出土遺物

19号住居跡 S I 19

遺構(図37, 写真20)

調査区南部のB 9 - 8・12, C 9 - 5・9グリッドに位置する。周囲は西から東側ないし南側へと下る緩斜面地である。L II c ~ II d 挖削時に複数の角礫と焼土の集積範囲を確認したことから住居跡とした。遺存状態は良いが住居跡の堆積土と遺物包含層との区別ができずに掘り下げたため周壁と堆積土は失われてしまった。S I 22と重複し本遺構が古いと判断している。

平面形は柱穴などの配置から円形ないし梢円形と考えられる。遺構の規模は最大で東西3.6m, 南北4.0mを測る。床面はL II d ~ IIIを掘削して構築していく、おおむね平坦である。踏み締り範囲は炉跡を中心とする東西2.2m, 南北2.5mを測る。床面全体に少量の炭化物が散っていて踏み締まりは弱い。

遺構内施設は石畳炉1基、柱穴17個を検出した。石畳炉は床面の中央に位置する。規模は東西60cm, 南北65cmを測る。炉石の大きさは10~20cmの大きさで、円礫や角礫を用いている。強く被熱しているため石が焼け爛れて崩れているものもある。石の無い北側及び西側からは炉石の引き抜き痕が3ヶ所確認された。炉の使用面は良く焼けており酸化面の厚さは6cmである。また使用面からは微量の焼骨片が出土している。

柱穴は直径12~25cm, 深さ15~25cmの小形の柱穴で構成される。炉を中心に梢円形状に配列することから概ね壁柱穴と考えられる。炉跡の床面北西側には、長軸62cm, 短軸45cm, 厚さ10cmの不正台形の自然石が置かれていた。何らかの目印とも考え石の下側の断ち割りを行ったが何も検出されなかった。おそらく床面上で台石などに使用したものと考えられる。

(中野)

遺物(図38, 写真79)

L II c 下の床面範囲内から出土した土器については、本遺構に伴う遺物と判断し、1出土と表記して図示した。1は平行沈線で斜位の図形を描き、文様の起点や屈折部にコブを貼り付けている。2は条線文を直線的に垂下させている。3は無文の口縁部片で、端部は膨らみ丸みを帯びている。

4は長頸の壺形土器と考えられ、球形を呈する胴部が頸部で窄まり、口縁部に向かって内傾する器形となっている。口縁端部から頸部にかけて、横位に連続する眼鏡状の沈線区画文を重層して施し、その間に繩文を充填している。また、繩文部には「ハ」の字状の刺突をほぼ等間隔で横位に施している。5~8は平行沈線区画帯が施された土器で、5の区画帶内には条線が充填されている。6は区画帶間に大柄な帶状入組文が施され、6・7の区画帯と入組文内には小さなコブが貼り付けられている。8は区画帯内に刻み状の連続刺突が施され、縱長のコブが一対認められる。

9は弧線を連結した大柄な木葉状の図形が描かれ、図形内には羽状繩文が充填されている。また、口縁端部を巡る平行沈線間と図形の中央に小さなコブが貼り付けられている。10は頸部を巡る区画带上にコブが付けられている。11は無文、12・13は条線文が施された口縁部片である。14は無文の底部で、底面は揚げ底状を呈する。

(山岸)

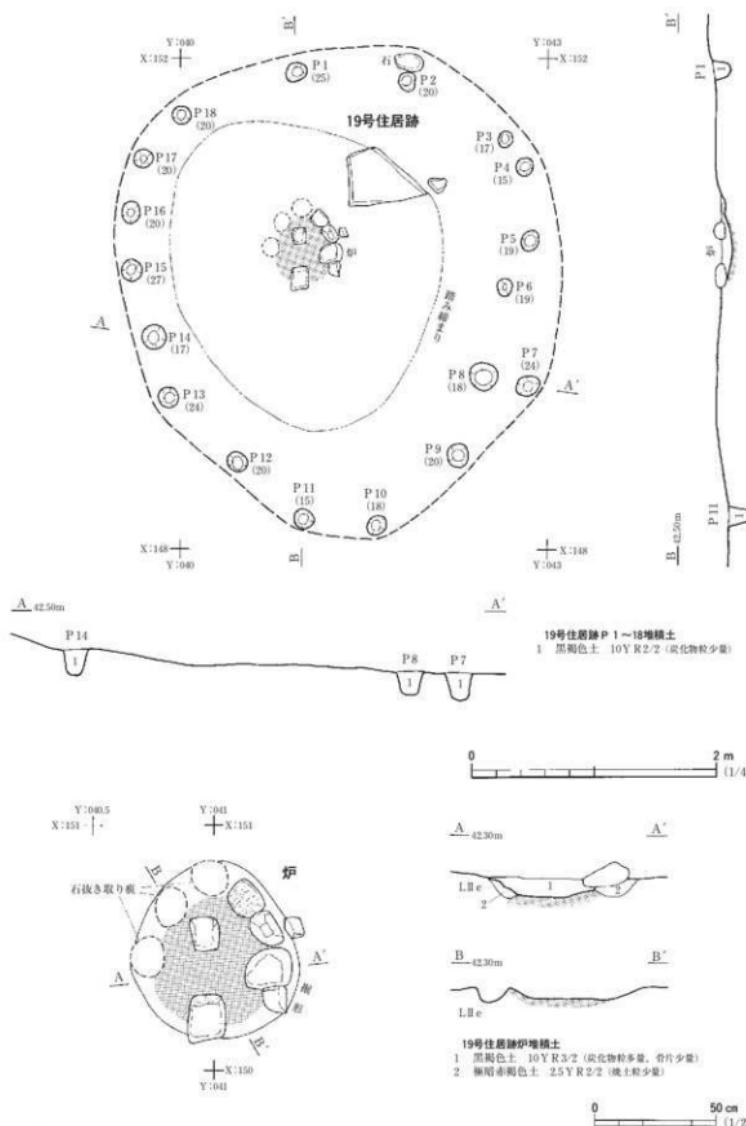


図37 19号住居跡

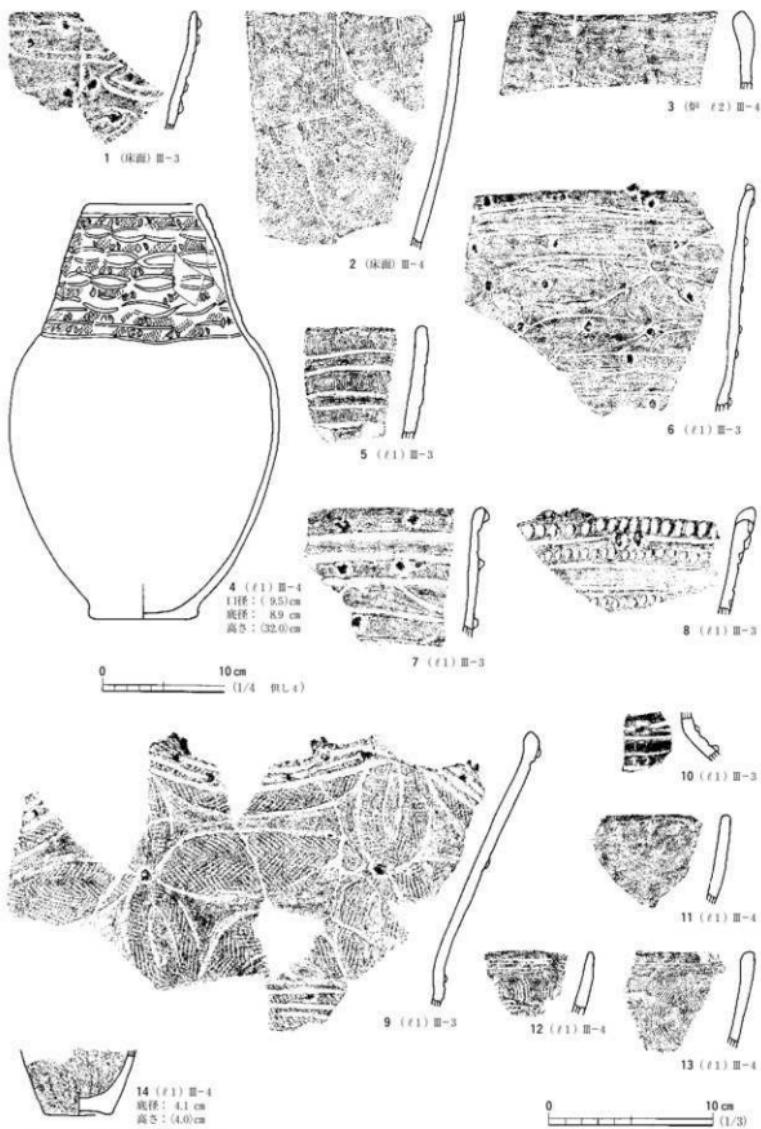


図38 19号住居跡出土遺物

まとめ

本遺構は残存する柱穴の配置や床面の範囲から円形ないし梢円形の住居跡と考えられる。床面の中央には石壠が検出された。床面には壠跡を中心に踏み締まりが見られる。壠の北東側には台石状の自然石が置かれていた。遺構の所属時期は出土した遺物などから縄文時代後期後葉頃と考えられる。

(中野)

20号住居跡 S I 20

遺構(図39)

本遺構は、調査区南部のC 7-10・11・14・15グリッドに位置する。段丘の縁辺に立地し、周囲は南東に下る斜面となっている。L IV上面において、黒褐色土の広がりとして捉えられた。S I 21及びSK 16と重複し、S I 21より新しく、SK 16より古いことを土層断面から確認している。

遺構堆積土は、L IVの粒を含んだ黒褐色土で、自然流入と考えている。南側の周壁が遺存していないが、本遺構の平面形は梢円と推定される。その遺存長は、4.6m×1.5mである。床面は、斜面の傾斜に沿って南東側が若干低くなっている。周壁の検出面からの高さは、最も残りの良いところで9cmである。

ピットは16基確認された。ピット内の堆積土は、締まりのない黒褐色土である。壁際に巡るP 1~7は、壁柱穴と考えられる。その他にも、床面上にP 8~16が不規則に散在している。ピットの長軸長は12~25cm、短軸長は10~21cm、深さは6~37cmである。なお、壠跡は確認されなかった。

遺物

遺物は出土していない。

まとめ

本遺構は、浅いながら掘り込みとピットを有するため、壁穴住居跡と考えている。S I 21より新しいことを確認した。このため、縄文時代前期前葉頃の遺構と考えられる。

(今野)

21号住居跡 S I 21

遺構(図39)

本遺構は、調査区南部のC 7-14・15グリッドに位置する。段丘の縁辺に立地し、周囲は南東に下る斜面となっている。遺構検出面はL II e~IVである。S I 20及びSK 17と重複し、両者よりも新しいことを確認している。

遺構内堆積土は細かい疊を多く含んだ黒褐色土で、自然流入と考えている。焼土粒と炭化物粒が若干観察された。斜面上位にあたる北西側の周壁しか遺存せず、その遺存長は、3.3m×2.1mである。床面は、斜面の傾斜に沿って南東側に下っている。周壁の検出面からの高さは、最も残りの良いところで28cmある。

ピットは、18基確認した。ピット内の堆積土は、いずれも黒褐色土である。壁際に巡るP 1~5

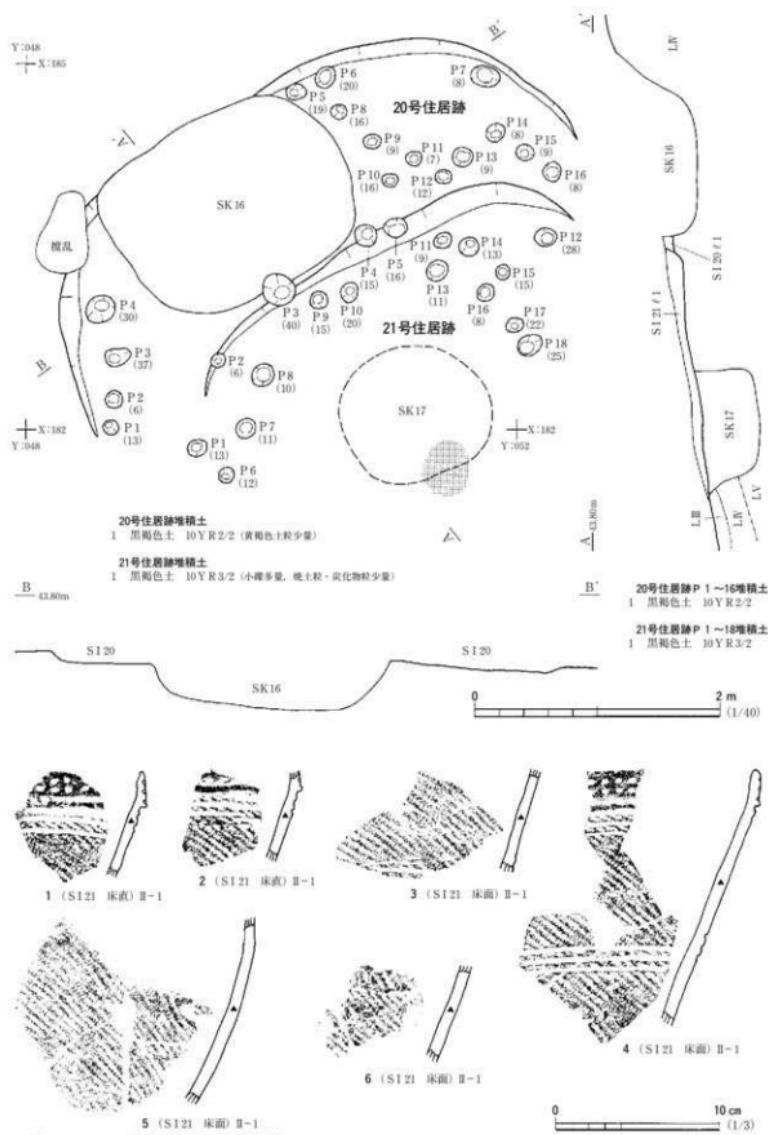


図39 20・21号住居跡と出土遺物

は、壁柱穴と考えている。弧状に並ぶP 6～12も壁柱穴の可能性があり、本遺構は建て替えが行われたものと見られる。ピットの長軸長は12～27cm、短軸長は10～25cm、深さは6～40cmである。また床面には、楕円形に被熱した箇所が確認された。これは火跡の可能性があり、その範囲は長軸長45cm、短軸長37cmである。

遺 物(図39)

1～6は床面上から出土した大木2a式の深鉢片で、同一個体とみられる。1～4は口縁部から胴部上半にかけての破片である。5・6は胴部下半の破片であろう。いずれも胎土中に纖維混和痕が認められ、内面には入念なミガキが施されている。胴部は大きく開き、口縁部が「く」の字に屈曲して直立する器形である。幅の狭い口縁部文様帶は隆帯で区画され、2条の刺突文が描かれている。刺付は角棒状の工具を用いて、右方向から加えられている。また隆帯直下と胴部には、3本一組の沈線が巡る。地文はR Lである。6の外面には被熱によるとみられる変色と、器面の荒れが観察された。

ま と め

本遺構は、遺存状態の悪い堅穴住居跡と考えている。S I 20及びS K 17より新しいことを確認している。出土遺物から、前期前葉に属する可能性がある。
(今野)

22号住居跡 S I 22

遺 構(図40・41、写真21)

本遺構は、調査区南部のC 9-5・6・9・10グリッドに位置する。段丘から下る東向きの緩斜面に立地している。遺物を多く含むL II bを掘り下げていたところ、石圓炉と褐色土の広がり及び柱穴が確認された。土層を観察した結果、本遺構がL II b上面から掘り込まれていることを確認した。西側ではS I 19と重複し、本遺構が新しい。また、南側にはSM27・28、SS 2が隣接してある。

遺構内の堆積土は2層に分けた。 ℓ 1は焼土粒と炭化物粒を少量含む褐色土である。 ℓ 2は、細かい礫を多く含む褐色土で、壁際から床面の直上にかけて堆積している。また床面近くには、炭化物粒が多く見られた。 ℓ 1・2とも、自然堆積土と考えられる。

平面形は、本遺構が調査区外へと広がるため明らかでないが、円形と推定される。遺存している周壁の円弧から推定して、本遺構の直径は7m程度と考えられる。床面は平坦で、顕著な踏み締まりは確認されなかった。周壁の検出面からの高さは、最も残りの良いところで15cmである。ただし、調査区際の土層を見ると、周壁の高さは30cmほどである。

石圓炉は、本遺構の中央付近に設置されている。扁平な礫や亜円礫が9個、円形に配置され、その直径は65cm前後である。礫は、小さく掘り溝めた穴に据えられていた。また炉石の内面と炉の底面は、赤く焼けていた。

ピットは17基確認された。ピット内の堆積土は、L II eに比べやや暗い色調で、細かい礫が少なく、若干締まりがない。壁際から検出されたP 1～13は、壁柱穴と考えられる。壁からやや離れた

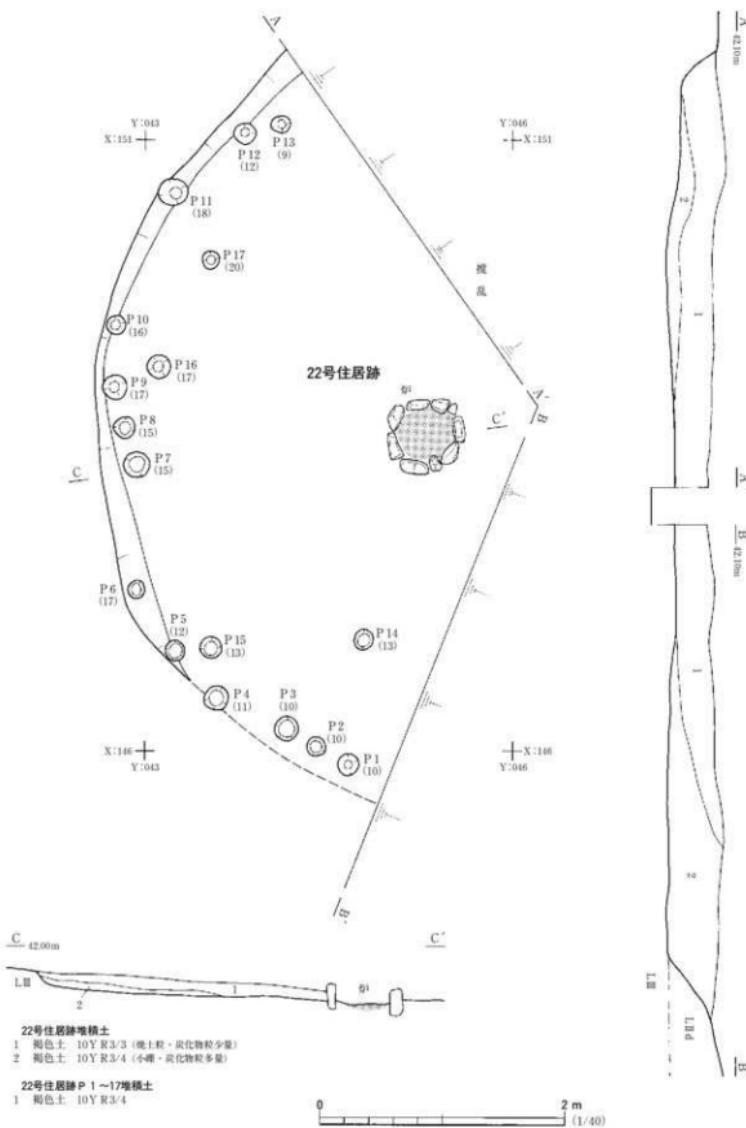


図40 22号住居跡(1)

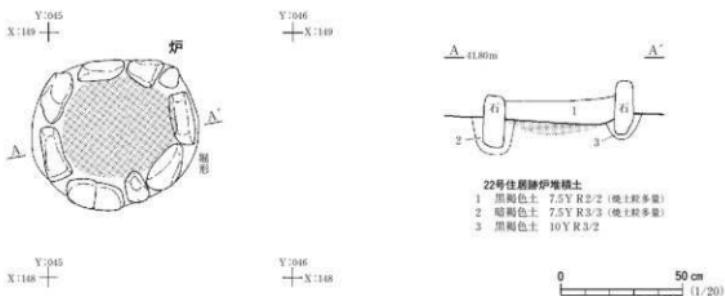


図41 22号住居跡(2)

位置にあるP14~17も柱穴と見られ、住居の建て替えが行われた可能性もある。ピットの長軸長は14~24cm、短軸長は13~22cmと小規模で、床面からの深さは9~20cmである。

遺物(図42)

1・5・6は、胎土中に纖維混和痕が確認できる。文様は地文のみで、原体はRLとみられる。5は内面にも繩文が施されている。また、6には補修孔が穿たれている。

2~4、7~21は磨消繩文手法が多用され、平行沈線や弧線文、入組文などが表出された精製土器である。文様の描出方法として磨消繩文の他に、沈線間に細い縦線の条線を描くもの(11)、模状の短沈線が充填されたもの(17・20)、刺突列が描かれたもの(8・13・14・16・18・19)がある。4・8・11には小さな貼瘤が付く。また8には、橋状の貼付文もみられる。7は爪先で器面の粘土が摘み出され、貼瘤に擬している。9は7に類似し、角棒状工具の先端による2個一対の刺付が縦に並んでいる。

21は浅鉢の口縁部片とみられ、口縁直下に列点文が、体部には雲形文が描かれている。22~24は、粗製土器の口縁部片である。櫛齒状工具による条線文が口縁直下に巡り、胴部にも垂下するものとみられる。25は精製土器の底部片で、底面が揚げ底状となっている。26は無文の土製品である。中心を縦方向に貫くように、焼成前に開けられた孔が通っている。四肢とも思える突起が遺存することから、動物形土製品あるいは土偶と考えている。

まとめ

本遺構は、出土遺物から縄文時代後期後葉に位置づけられる。平面形は円形と推定され、床面の中央付近には石圓炉がある。今回調査された同時期の壺穴住居跡の中では、比較的大型の部類であろう。

(今野)

第2章 遺構と遺物

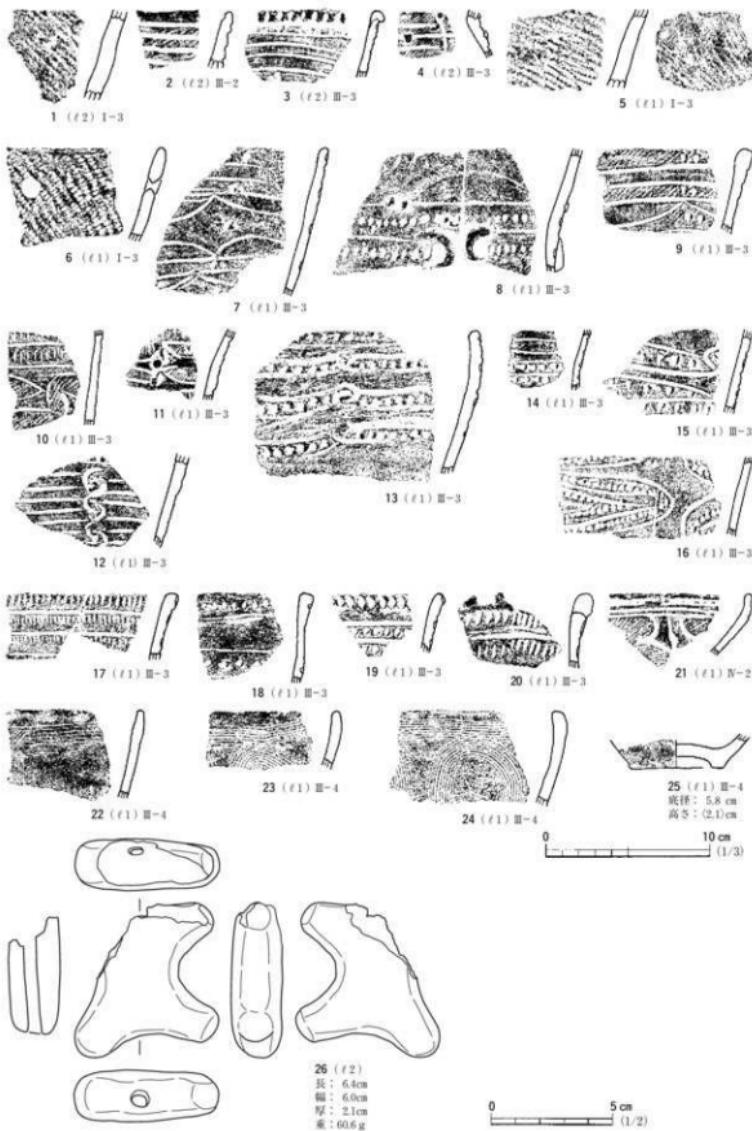


図42 22号住居跡出土遺物

23号住居跡 S I 23

遺構(図43、写真22)

調査区中央部南西側のB 6-16, C 6-13, C 7-1グリッドに位置する。周囲の地形は概ね平坦である。検出面はL IVである。遺存状態は桑畠耕作と風倒木によって壊されているため良くない。S I 25・26, S B 4と重複し、本遺構が最も新しい。遺構内堆積土は3層で ℓ 1・2は黒褐色土である。 ℓ 3は黄褐色土塊を多く含む暗褐色土である。それぞれレンズ状や三角状に堆積することから自然堆積土と考えられる。

平面形は擾乱で周壁などが壊されているがおおむね円形と考えられる。遺構の規模は東西5.2m、南北5.5mを測り壁高は遺存状態の良い西壁で18cmである。壁の傾斜は床面から比較的急角度で立ち上る。床面はL IVとS I 25の ℓ 1を掘り込んで構築していた。床面全体に少量の炭化物が散っており踏み締まりは弱い。

遺構内施設は石圓炉1基、柱穴20個を確認した。石圓炉は、床面中央よりやや東側で検出した。平面形は概ね円形で長軸が67cmを測る。12~18cm大の角礫を使用していて西側で3個、東側に1個が残存していた。それ以外の炉石は抜き取られたものと考えられ北側で3ヶ所、南側で1ヶ所において抜き取り痕が確認できた。炉の使用面は良く焼けていて酸化面の厚さは5~7cmである。P 13・15は柱穴間を溝で結んでいることから出入口施設に伴う柱穴の可能性がある。

P 1~10・12・17~19は壁際に沿うように配列されているため壁柱穴と考えられる。直径7~40cm、深さ8~42cmを測り、大きさや深さにはばらつきが見られる。柱穴の堆積土は炭化物や砂粒を少量含む暗褐色土である。

(中野)

遺物(図44)

遺物には縄文土器片約750点と土製品1点、石器3点があり、遺構内堆積土の各層からまんべんなく出土している。1は丸みをもった胴部の中ほどが括れる深鉢形土器である。口縁には山形状の突起が連続して付けられ、突起の中央に向かってスリットが加えられる。括れ部に巡る平行沈線区画帯を境とした上下に帯状の入組文が横位に展開されている。2は平口縁、3・4は山形状の小突起が付けられた口縁部片で、いずれも口縁端部付近は平行沈線区画による縄文帯となっている。5~7は胴部片で、いずれも縄文が充填された帯状の入組文が施されている。5は入組文間の無文部に三叉状の沈線文が描かれている。6は胴部下半にも斜行縄文が施されている。7は括れ部を巡る沈線区画の縄文帯内に、横位に並ぶ短沈線を加えている。8は条線を地文とし、沈線区画文内を磨り消し、文様の起点に「ハ」の字状に刺突を加え、刺突間をコブ状に高めている。9も8と同様の刺突を区画文内に施している。

10・11は平口縁に沿って沈線を巡らせ縄文帯としている土器で、11は縄文帯下の無文部に縄文が施された木葉状の区画文が認められる。

12は半円状の沈線区画文内に縄文を充填している。13は口縁部に沿った沈線区画帯内に横位の連

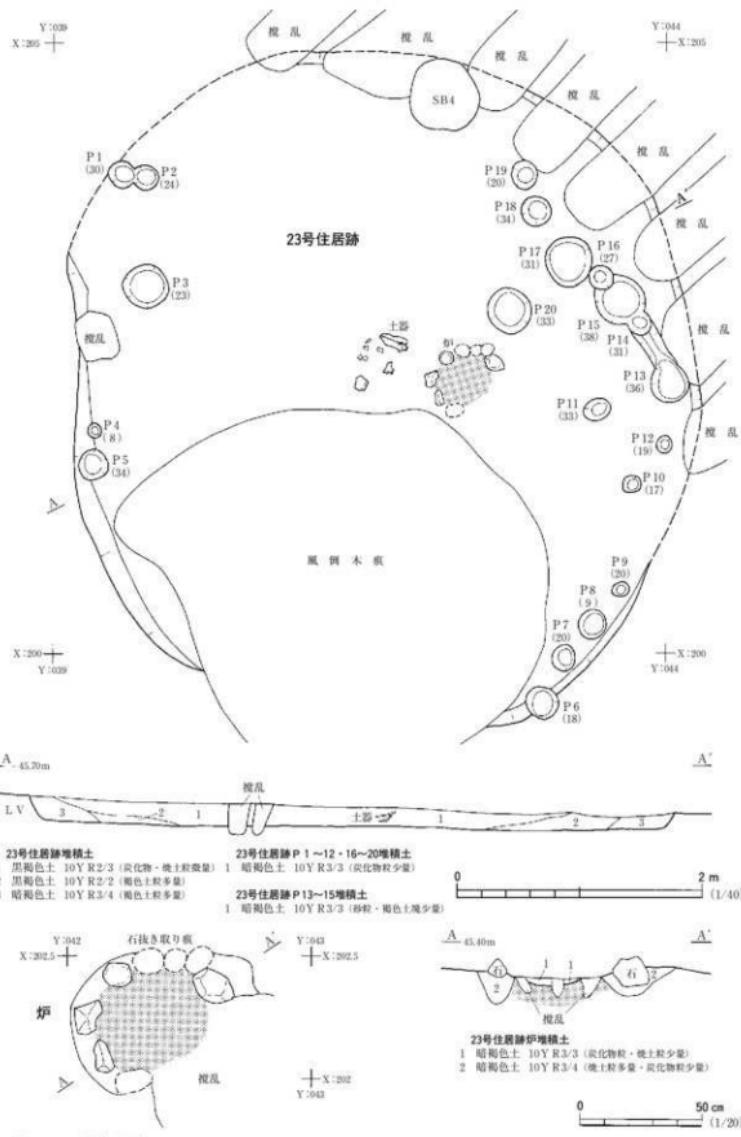


図43 23号居住跡

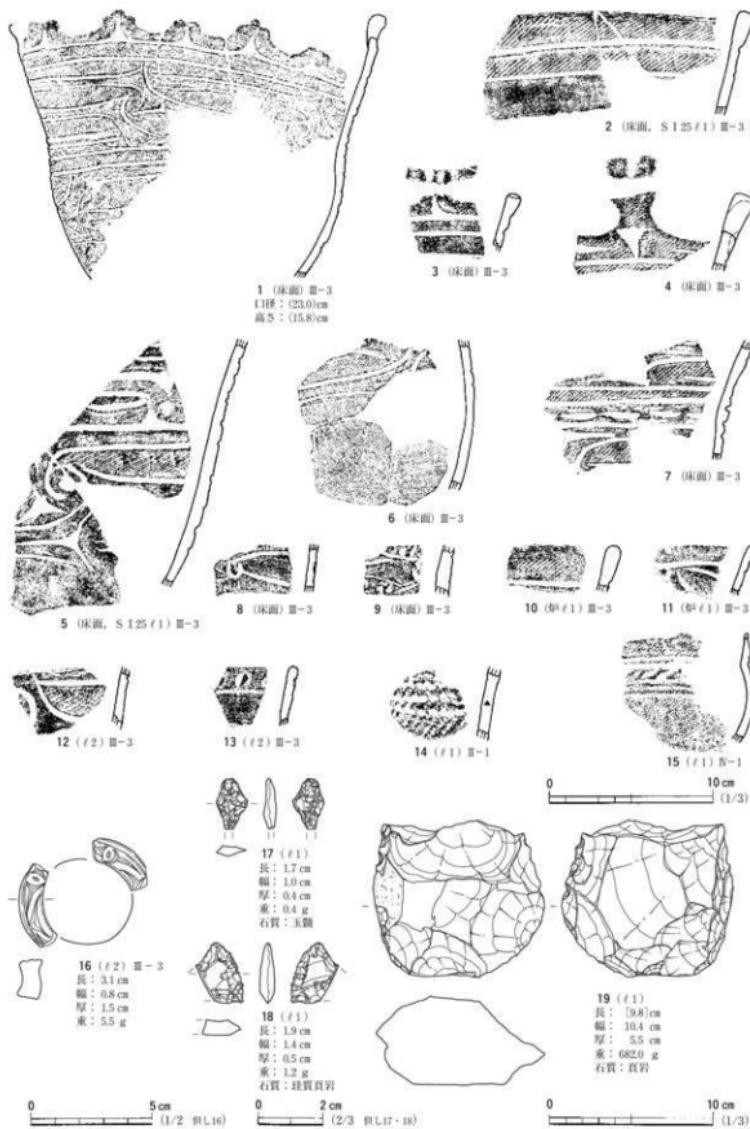


図44 23号住居跡出土遺物

統刺突を施している。14は縄文地上に横位の繩圧痕を施した土器で、胎土には纖維混和痕が認められる。15は口縁の屈折部下に、平行沈線による区画を作り出し、その間に横位の連続入組文を施している。

16は環状の土製品で、耳栓と考えている。器面全体が平滑に仕上げられ、片面には円形の刺突を挟み込むように三叉状の沈線文が交互に巡らされている。

17は先端と茎部を欠損する有茎石鎌で、茎部の抉りは弱く全体の形状も整っていない。18は側縁の片側を欠損する平基の無茎石鎌で、簡単な周縁加工で整形され、両面の中央には素材自体の剥離面を大きく残している。19は大きな剥離痕が両面に認められる礫で、大型の石核とも考えられるが全面が風化している。

(山 岸)

ま と め

本遺構は長軸5.5mの円形の住居跡である。床面からは石圓炉が検出された。床面東側には出入口施設に伴う柱穴を確認した。それ以外の柱穴は概ね壁柱穴と考えられるが大きさに差が見られた。本遺構の周囲にはS I 25~27, S B 4などが重複または近接し、遺構の集中区に位置している。他の住居跡との重複関係から住居群の中でも新しい住居跡と考えている。遺構の所属時期は出土した遺物などから縄文時代後期末葉頃と考えている。

(中 野)

24号住居跡 S I 24

遺 構(図45・46, 写真23)

本遺構は調査区中央部の平坦面B 6 - 2・3 グリッドに位置する。黒褐色土の不整形として、L IIIより検出した。SK 29・59・81と重複している。本遺構はSK 29・59より古く、SK 81よりも新しい。堆積土は、炭化物や骨片を多量に含んだ黒褐色土1層のみ認められた。

平面形は南東壁の一部が丸く張り出した円形を基調とした形である。規模は、わずかに南北方向が長く、南北長4.6m、東西長4.3mである。検出面から床面までの深さは、18cmを測る。張り出した南東壁際では、27cmを測る。周壁は急激に立ち上がる。床面はほぼ平坦であるが、南東部では床面より10cm程度下がる。南東部の底面は凹凸が認められ、硬化の状況は確認できなかった。この南東部の落ち込みは、出入り口状の施設である可能性が考えられる。

北壁際と西壁際の床面上には、粘土塊が置かれていた。北壁際の粘土は高さ21cm、幅43cmを測り、置かれたような状態で認められた。西壁際の床面上の粘土は、拳大である。また、床面東には、石皿(図48-11)の上に磨石(図48-10)が置かれた状態で出土した。また、北壁際の粘土塊近くからは、石器の素材となる剥片が4点重なって出土している。さらに西寄りの床面では、土製耳飾り(図47-28)が出土した。柱穴と考えられるP 12の東床面からは、滑石製の耳飾り(図48-8)などが出土している。

付属施設として床面上より、炉¹基と柱穴17個を確認した。炉¹は床面中央部に位置し、炉¹の長軸方向は南北を示す。炉¹には造り替えが認められた。

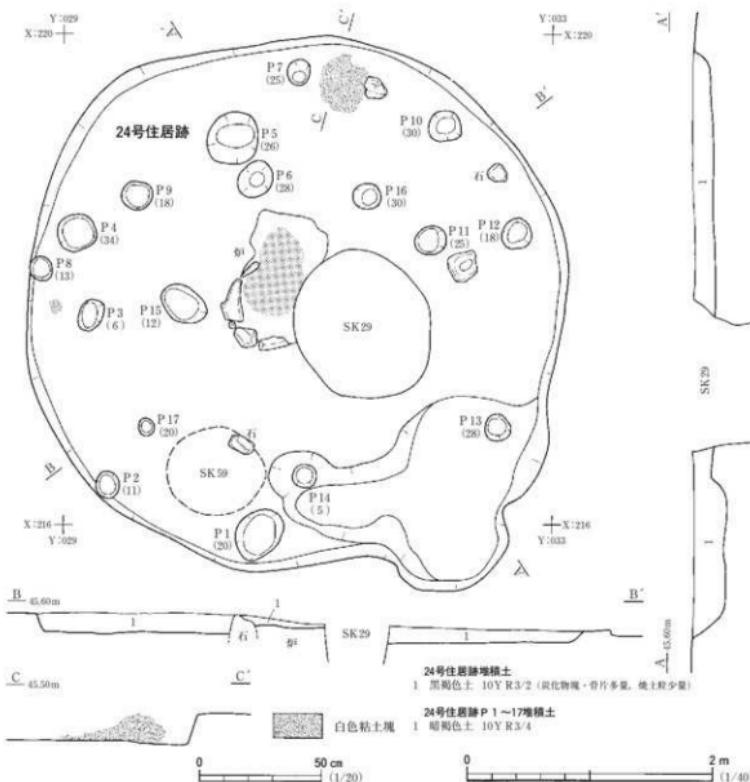


図45 24号住居跡(1)

新しい炉の規模は長軸117cm、短軸90cmである。炉は床面上より25cm程、土盛りして構築されている。炉はSK29に破壊され、東側の一部は遺存していない。縁石は炉の周囲を巡っていたと考えられるが、南と西の一部しか残っていない。北と東西の一部の縁石は、抜き取られたと考えられる。焼土化範囲の長軸方向は、南北を示す。規模は長軸75cm、短軸55cmを測る。焼土化範囲の厚さは最も厚い部分で6cmを測る。堆積土は2層に分けられ、ℓ1は暗赤褐色上で、埋めて炉面として使用している。ℓ2は暗褐色土で盛土部分である。いずれも人為堆積である。

盛土部分であるℓ1・2を掘り下げるに、新炉の炉面より25cm下に、さらに焼土化範囲を確認した。この焼土化範囲は本住居跡に付随する古い炉と考えられ、旧炉と呼称する。縁石が巡る地炉で、東の縁石の一部は遺存していない。旧炉の平面は、不整な楕円形で、長軸方向はわずかに南北方向が長い。規模は長軸69cm、短軸66cmを測る。床面より炉面は10cm程度下がる。焼土化範囲の厚

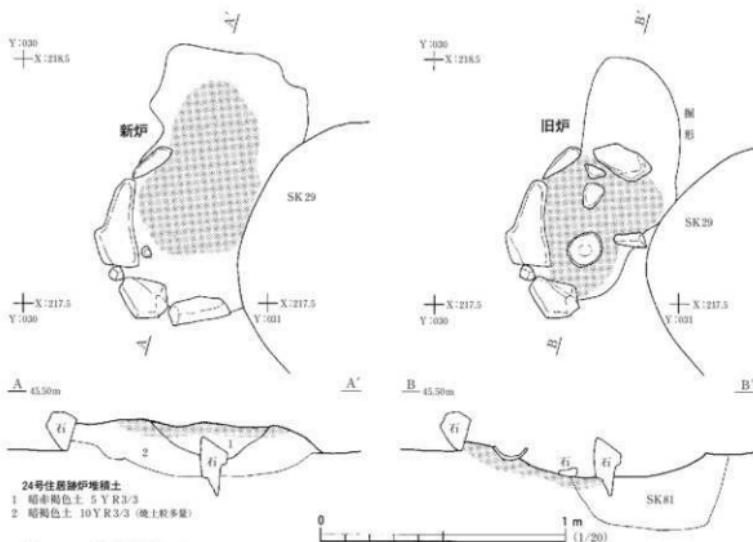


図46 24号住居跡(2)

さは、最も厚い部分で8cmを測る。底面は丸みを帯び、東に傾斜する。底面南寄りには、縄文土器の底部がわずかに埋め込まれた状態で出土した。この出土した土器は、火を受けて脆く、炉に埋設された状態で使用されていたと考えている。

柱穴は床面上から散在して検出できた。平面形は円形または梢円形を基調としている。規模は径20~44cmを測る。床面上から底面までの深さは11~34cmを測る。P13・14は南東部に位置し、出入り口状施設の東西に位置する。柱穴の堆積土は単層または2層で、柱痕は認められなかった。

遺物(図47・48)

本遺構からの出土遺物は、縄文土器1,378点、石器片156点が出土した。

図47には縄文土器及び土製品を掲載した。1~5は沈線間に施された磨り消し縄文が主文様となる資料である。1は胴部が球形となり、口縁部が直線的に外傾する器形である。小窓か浅鉢になるとされる。口縁部文様は玉抱き三叉文が認められる。器表面は丁寧に磨かれている。3・4は胎土や色調から、同一個体の可能性が高い。5は口縁部資料で、口唇部がわずかに肥厚する。炉 ℓ 2からの出土である。被熱により、色調の変化が看取できる。

6~9は浮き彫り手法を用いた資料である。小破片が多く、器形や器種を推定できる資料は少ない。6・8はつぶれた羊歯状文、7は雲形文を描出している。9は魚眼状のモチーフを描く。器表面には、わずかに赤色顔料が認められる。

10~13は羊歯状文や綾络文を特徴とする資料である。10・11はともに口縁部資料であり、口縁部

上半には羊歯状文が認められる。10は胴部から外反して立ち上がり、口縁部に至ってほぼ真上へ直線的に立ち上がる器形である。11は胴部から直線的に立ち上がり、口縁部に至って大きく内湾する器形である。いずれも小型甕と考えられる。12は口縁部資料で、口唇部が直線的に立ち上がり、尖端が窄まる。口縁部文様には、細沈線によりくずれた三叉文のモチーフを描く。しかし、器表面が荒れていて明確ではない。小型の甕と推測される。13は甕の胴部資料である。绳文地文上に沈線や羊歯状文、さらに絞紋を加えた複雑な文様構成をとる。

14~16は櫛歯状工具により施された粗製深鉢である。14は口縁部資料である。条線により直線・曲線文を描く。胎土には長石粒が目立つ。内面は横方向のミガキの痕跡が明瞭に残る。15・16は胴部資料である。

17~25は绳文時代後期後葉に属する資料である。本遺構には直接伴わず、周囲からの流れ込みによる。17は口縁部に取り付けられた突起部分の資料である。粘土紐を巻き付け、頂部が円形となる。18~22は外面に貼り付け瘤が加えられる資料である。18は深鉢胴部上半の資料である。瘤上に2つの刻みを入れた突起が2つ継に並列する。19~21は深鉢の口縁部資料、22は胴部資料である。19の口縁部は外傾しながら立ち上がるが、部分的に外側に折れ曲がる箇所が観察できる。器表面の剥落が激しく明確でないが、沈線により木葉文を描く。沈線間に瘤を貼付する。20は平口縁であるが、丸い棒状工具を押し当てることによる、刻みが施されている。21の口唇部には、突起が付く。丁寧に磨かれている。22は沈線によって、くずれた木の葉状の文様が描出される。文様内には、2個で1セットの瘤が施されている。胎土には砂粒が目立つ。23~25は沈線・刺付と無文帶により文様を構成する資料である。いずれも深鉢器形の口縁部資料である。口唇部には突起が認められる。23は2つの山をもつ突起、24の突起には刻みが施されている。刺突は角棒状の工具により、斜位方向から施している。

26・27には底部資料を図示した。26は底部が四角に成形された底部資料である。胴部が無く器形は不明である。27は台付き土器の底部資料である。胴部ではなく、器形は不明である。焼成が悪く灰白色をしている。作りもやや粗雑な印象を受ける。

28は土製の耳飾りである。住居跡西側の床面上から出土した。薄く非常に精緻に作られ、やや脆い。沈線により、浮き彫り手法により玉抱き三叉文がモチーフとして描かれている。部分的に赤色顔料が残存している。磨き上げられ、丁寧な作りである。

図48には石器及び石製品を掲載した。1~4は石鏃である。いずれも無茎凹基である。1は石鏃の半分が欠損している。遺存する右側縁には、表裏に細かい調整剥離を施している。2は自然面を残した石鏃である。身幅も厚く、厚さを減じきれなかったと考えられる。未完成と判断した。先端部から両側縁の上半にかけて、調整剥離がされている。3・4の形は二等辺三角形で、薄く作られている。表裏とも細かい調整剥離がされる。5は縦長削片を素材とした石匙である。北寄りにある粘土塊近くの床面上より出土した。表裏には大きな剥離を残し、両側縁に細かい調整剥離を施している。摘み部も細かい剥離で作出している。6・7は石錐とした。6は自然面を残し、先端部に

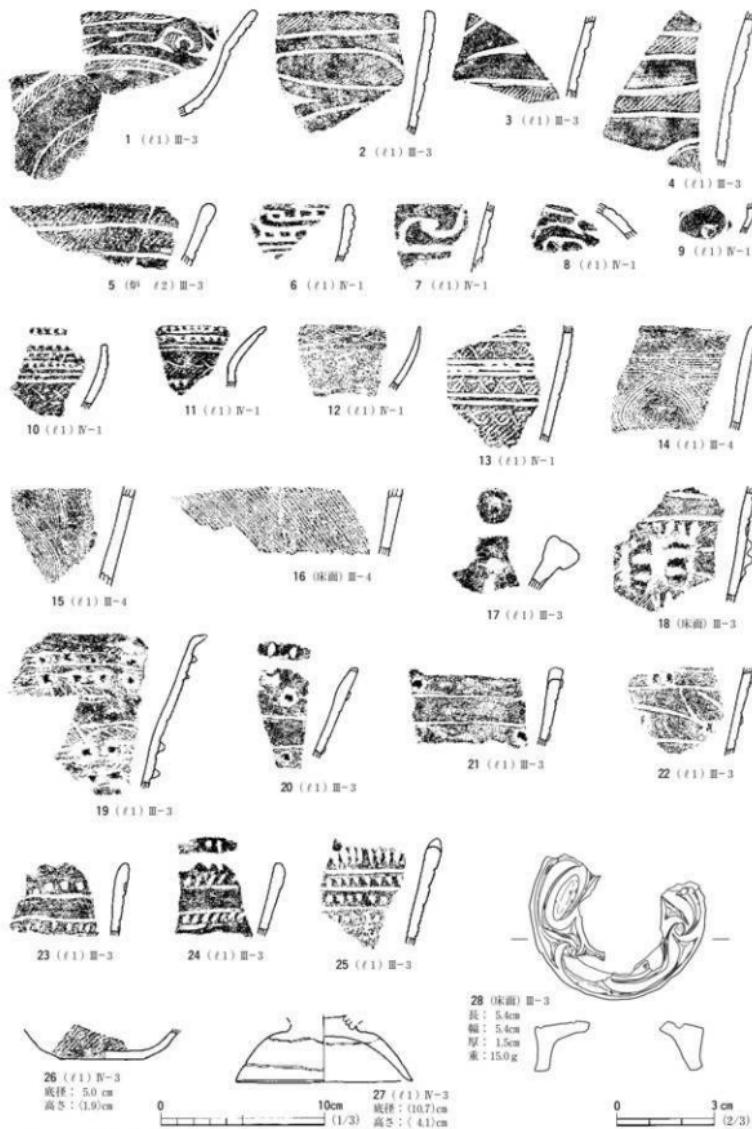


図47 24号住居跡出土遺物(1)

第2節 壁穴住居跡

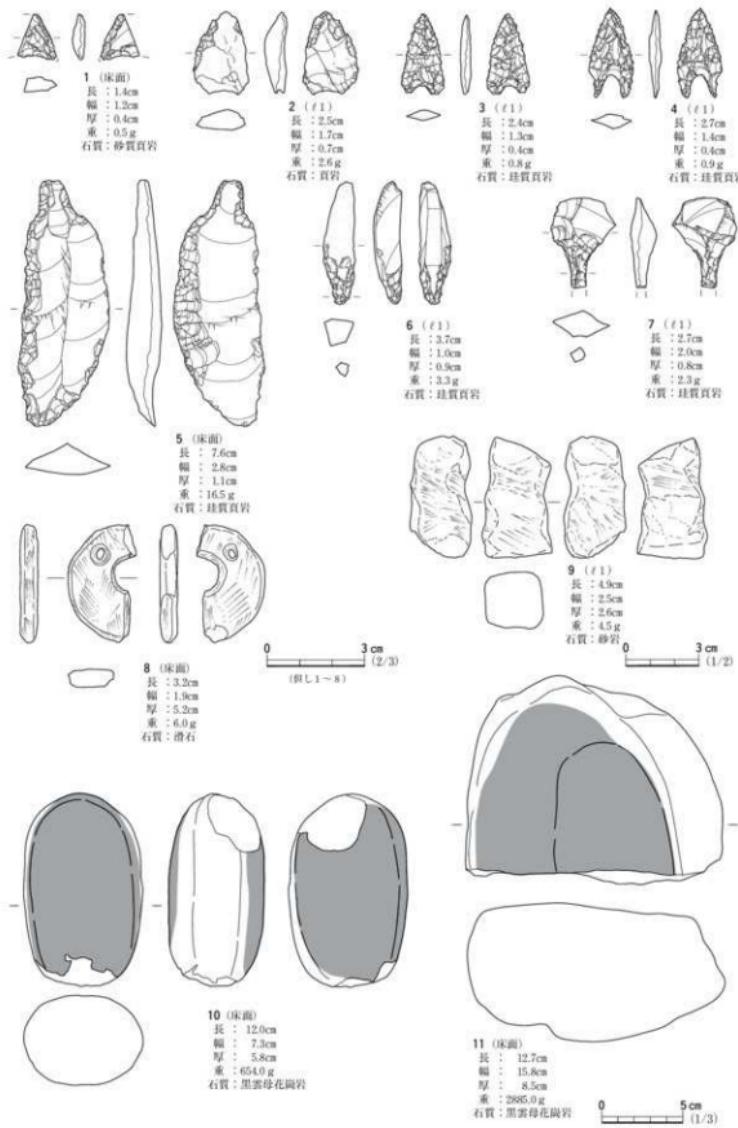


圖48 24號住居跡出土遺物(2)

み剥離を加えている。先端は使用により、摩滅し鈍くなっている。7は小さい基部で、細長い錐の先端部をもつ。錐の先端は欠損している。

8はP12近くの床面上から出土した、滑石製の耳飾りである。両端部は欠損している。厚さは薄く、表面は擦痕が明瞭に観察できる。孔は、表裏から穿孔されている。9は不整形な石器で、いたるところに幅1cm程度の窪みが観察できる。窪みには細かい擦痕が認められる。上下は欠損している。石英粒が多量に含まれる砂岩を用いて、石製品を磨く縄文時代の砥石として使用されたと推測できる。

10・11は住居跡東のP11とP12のほぼ中間の床面上から、セットで出土した。磨石と石皿である。10はいなり型の形状で、風化が著しく表裏の中央に磨耗面がわずかに認められるのみである。11は上面を石皿として使用し、わずかに窪みが観察できる。

ま と め

本遺構は南東壁の一部がわずかに張り出した円形を基調とする竪穴住居跡である。床面上には石器や粘土が置かれた状態で出土した。また土製耳飾りや石製耳飾りの出土も特徴的である。炉は床面中央から検出し、炉の造り替えが認められた。南東に張り出した部分は、出入り口施設の可能性が考えられる。堆積土中には焼いた骨片が多量に認められ、本住居跡埋没中または埋没後に周間に散在した状況を示すと考えられる。

出土遺物は縄文時代後期後葉から晩期中葉まで認められる。床面上から出土した遺物や主体となる遺物から、本住居跡の年代観は縄文時代後期末葉頃と推測できる。

(三浦)

25号住居跡 S I 25

遺 構(図49)

調査区中央部南西側のB6-16, C6-13, C7-1グリッドに位置する。検出面はLIVである。S I 23の床面を断ち割った際に断面に立ち上がりを確認したためセクションベルトを残して精査を行った。そして硬化面や柱穴を検出したので住居跡とした。S I 23・26, S B 4と重複し新旧関係から本遺構が最も古い。遺構内堆積土は単層の黒褐色土で、堆積状況は層厚が薄いため不明である。

平面形は南北にやや長い楕円形である。遺構の規模は東西4.1m, 南北4.7mを測り壁高は遺存状態の良い東壁で6cmである。壁の傾斜は床面から緩やかに立ち上る。床面はLIVを掘削して床を構築していて床面全体に少量の炭化物が散っていて、やや硬く踏み締められていた。

遺構内施設は柱穴16個を確認した。炉跡は検出されなかったが南側の風倒木痕によって壊されている可能性もある。柱穴はP1~3・5・10~16が壁際に沿うように配列されているため壁柱穴と考えられる。直径は10~20cm、深さ10~34cmを測り小形の柱穴で構成されている。P4・P6~8は床面の中央に位置しているが小形で浅い柱穴であるため主柱穴とはいえない。また西壁際において南北2.6m、幅30cm、深さ13cmに渡って溝状の掘り込みが検出された。

(中野)

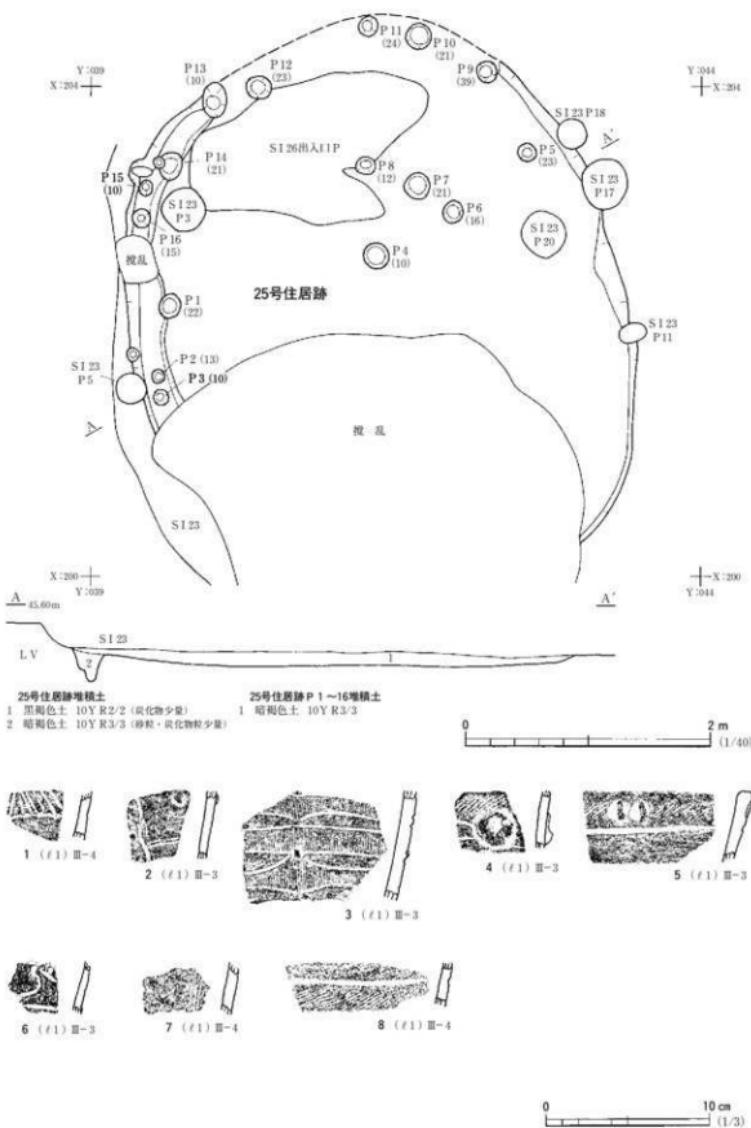


図49 25号住居跡と出土遺物

遺 物(図49)

遺物には縄文土器片約200点と剥片類7点が ℓ 1中から出土している。Ⅲ群4類に比定される細片が多く、図示できた土器は少ない。1は横位の沈線区画の上に斜位の沈線を密に施している。2は沈線で方形状に区画した内に小さなコブを貼り付けている。3は起点にコブを貼り付けた連弧状の沈線文を平行沈線区画帯に沿って展開している。また、連弧状の沈線内は無文部とし、その他の部分には継位の条線を充填している。4は沈線区画の起点にボタン状の粘土を貼り付けている。5は口縁端部を巡る沈線区画の縄文帯に一对の刺突を施し、6は無文地に沈線で曲線图形を描いている。7には継位の条線が認められ、8は横位の沈線で縄文部と無文部を区画している。(山岸)

ま と め

本遺構は、S I 23の直下で検出された指円形の住居跡である。床面は硬く踏み締められていて、周壁西側には深さ13cmの溝が巡っていた。遺構の重複関係などからB 6・7グリッドの遺構集中範囲の遺構の中でも最も早い段階で建てられた住居跡の一つといえよう。遺構の所属時期は出土した遺物や他の遺構との重複関係などから縄文時代後期後葉頃と考えている。(中野)

26号住居跡 S I 26

遺 構(図50・51, 写真24)

調査区中央部南西側B 6-12・16, C 6-9・13グリッドに位置する。周囲の地形は概ね平坦である。検出面はL IVである。L IV検出時に柱穴群と焼土範囲を確認したためこれを住居とした。S I 23・25・27, S B 4, S K 27と重複し、遺構の切り合い関係からS I 23・S B 4より古く、S I 25・27, S K 27よりも新しい。遺構内堆積土は搅乱によって失われていた。

平面形は柱穴などの分布などから判断して円形の住居跡と考えられる。遺構の規模は東西4.9m、南北5.2mを測る。床面はL IVを掘削して床を構築しているが遺存状態が悪く踏み締りは確認できなかった。

遺構内施設は炉跡1基、柱穴93個を確認した。炉跡は床面中央で検出した。焼土の範囲を取り囲むように炉石の抜き取り痕が認められることから本来は石囲炉であったと考えられる。焼土の範囲は東西56cm、南北40cmを測る。使用面は良く焼けており酸化面の厚さは4cmである。

柱穴は床面の中央側に位置する主柱穴と炉跡を中心に半径2~2.5mの範囲に円形に巡る壁柱穴に分かれる。主柱穴はP 83-86・91と考えられる。炉を囲むようにP 82-85-86-90の柱間を結ぶと考えられ、およそ2.0mの正方形のプランで配列している。壁柱穴は炉跡を中心に3重に巡ることから3回の建て替えが行われたものと判断している。柱穴の配置を見ると最も内側を巡る柱穴はP 8-10・56-79・81である。柱穴の分布範囲は、東西4.3m、南北4.6mである。柱穴の直径は16~55cm、深さは13~38cmである。P 7・11・13・40~55は2番目に内側を巡る柱穴である。柱穴の分布範囲は東西4.5m、南北4.8mである。柱穴の直径は15~30cm、深さは10~29cmである。P 14~38は最も外側を巡る壁柱穴である。柱穴の直径は16~30cm、深さは比較的深いものが多く34~48cm

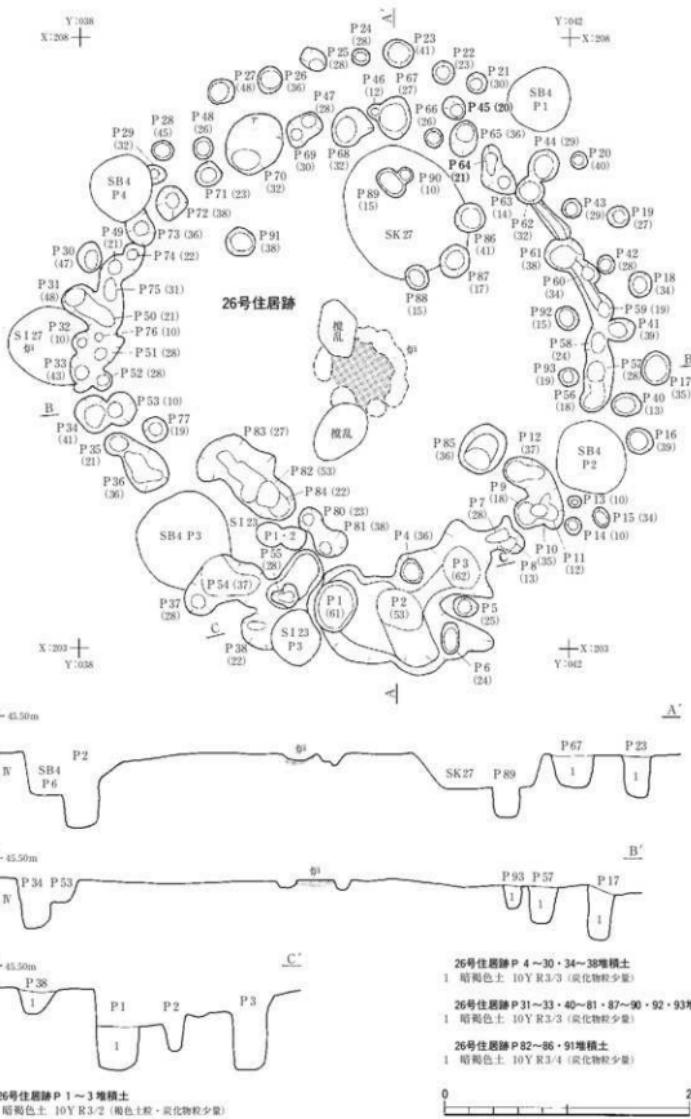


図50 26号住居跡(1)

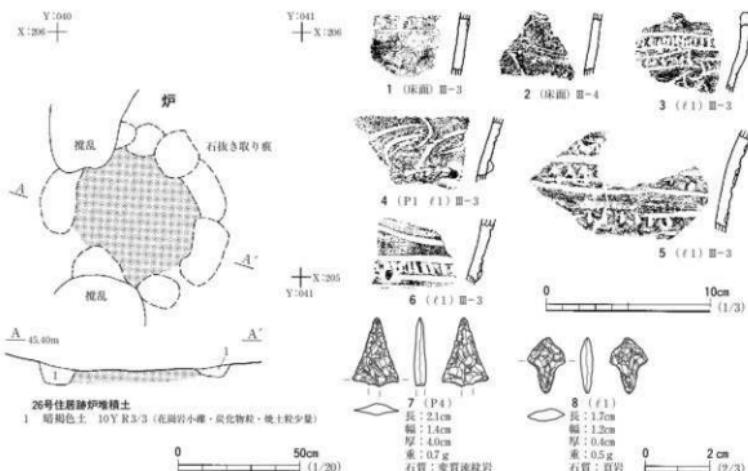


図51 26号住居跡(2)と出土遺物

である。

P 1～3は住居南側に位置する大形の柱穴で、出入口施設に伴う柱穴と考えられる。おそらく2回以上の作り替えを行っており、P 2・3を最初に掘り込んだ後にP 1・3へと拡張して作り変えているものと考えられる。またP 2・3の間には溝状に掘り込み柱穴間を連結している。柱穴の直径は40～60cm、深さ52～62mである。

(中野)

遺 物(図51)

遺物は、縄文土器片約50点、石器3点が出土している。1は平行沈線区画帶内「ハ」の字状の刺突を施している。2には横位と斜位の条線が認められる。3は平行沈線区画帶と帯状の入り組み図形が描かれ、平行沈線間には刻み状の刺突が入り組み図形内には円形の刺突が施されている。4は波頭状の曲線文が描かれ、文様下の沈線に沿ってコブが貼り付けられている。5・6は平行沈線区画帶内の無文部に刻み状の連続刺突を施すもので、6には小さなコブが貼り付けられている。

7・8は有茎石錐で、7は茎部を欠損するが二等辺三角形の比較的整った形状となっている。8は三角形を呈し、茎部が比較的太く、長い作り出しとなっている。

(山岸)

ま と め

本遺構は、長軸5.2mの円形の住居跡である。中央に炉を持ち出入口施設を伴う。出入口施設や壁柱穴の配列状況から建て替えを3回行っており、徐々に住居を拡張していったものと考えられる。このような住居の建て替えを連続して行う行為は集落内において比較的長期に亘って連続的な居住を行っていることを表していると考えられ興味深い。遺構の所属時期は出土した遺物や他の遺構との重複関係などから縄文時代後期後葉～末頃と考えている。

(中野)

27号住居跡 S I 27

遺構(図52)

本遺構は、調査区中央部南西側のB 6 - 12・16、グリッドに位置する。検出面はL IVである。S I 26を検出時にその西側から焼上面と複数の柱穴を検出したため住居とした。遺存状態は悪く耕作により堆積土は失われていた。S I 26、S B 4・11、S M36と重複し、遺構の切り合い関係から本遺構が最も古い。

平面形は柱穴の分布状況などから円形ないし梢円形と考えている。遺構の規模は東西4.5m、南北4.7mを測る。床面はL IVを掘削して床を構築しているが踏み締りは弱い。

遺構内施設は地床炉1基、柱穴41個を確認した。地床炉は床面中央で検出した。平面形は円形で東西40cm、南北48cmを測る。東側をS I 26のP 31～P 33によって壊されている。使用面は焼け方が弱く酸化面の厚さは3cmである。柱穴は住居の床面に散在して分布している。P 5・8・14・17・25～27・32～34・36は炉跡から半径2m前後の範囲に分布するため壁柱穴の可能性が、それ以外の柱穴は炉に近い位置に分布しているものの深さや規模において大きな差がないため主柱穴とは断定できない。柱穴の直径は14～38cm、深さ10～30cmを測り小形の柱穴が多い。柱穴の堆積土はローム粒を含む暗褐色土である。

(中野)

遺物(図52、写真80)

遺物は縄文土器片77点、剥片類6点が主に柱穴から出土している。1は山形状の口縁を呈する浅鉢形土器で、丸く膨らんだ胴部から口縁部が強く外反する。口縁端部に沿って沈線区画の縄文帯を、屈曲する胴部との境には刻み状の連続刺突を二段に施した平行沈線区画帯を巡らせ、その沈線間をつなぐように「X」状のコブを貼り付けている。胴部には底部を基点とした連弧状の沈線文が展開され、縄文部と無文部を区画している。また、沈線文の起点には、いずれもコブの剥落痕が認められる。丸底に近い底面は、円形の沈線で縁取られ、その内を連弧状の沈線文で四分割し、部分的に縄文を充填している。

(山岸)

まとめ

本遺構は長軸4.7mの円形から梢円形の住居跡である。本調査区で唯一地床炉を持つ住居跡である。多くの遺構と重複しており周辺の住居跡の中では、S I 25と並んで古い遺構に位置づけられるよう。遺構の所属時期は出土した遺物などから縄文時代後期後葉頃と考えている。

(中野)

28号住居跡 S I 28

遺構(図53)

本遺構は調査区中央部B 6 - 15、B 7 - 3グリッドに位置する。周囲の地形は概ね平坦である。検出面はL IVである。検出時に南北約8mの黒褐色土の不定形なプランを確認したことから複数の遺構の重複を想定しベルトをキの字形に設定して精査を行った。そして北側に炉跡を1基確認し

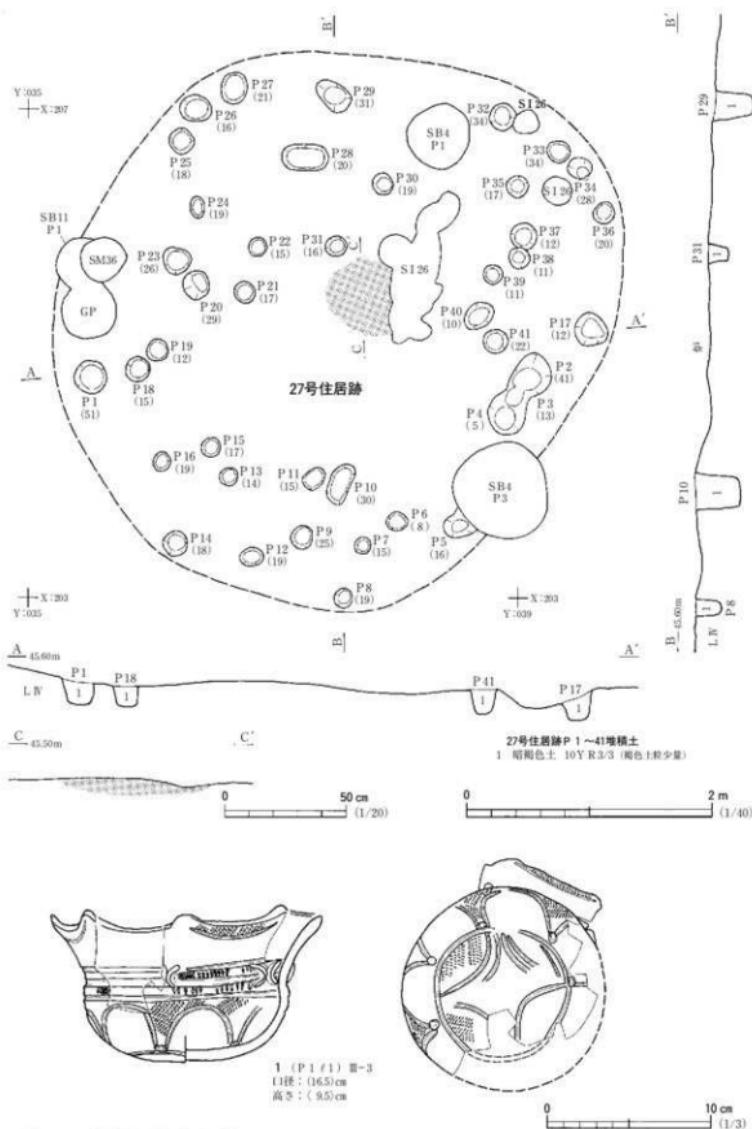


図52 27号住居跡と出土遺物

第2節 壁穴住居跡

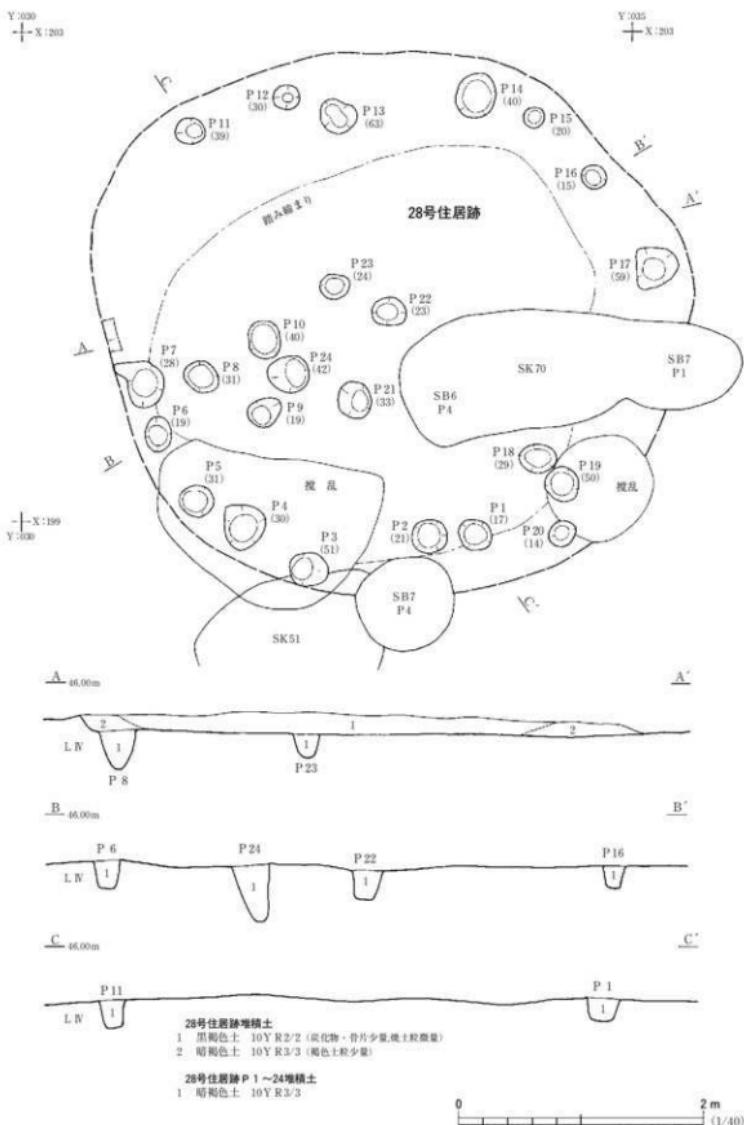


図53 28号住居跡

た。またその南側において集石状の不明確なプランを確認し、その下から硬化面と柱穴群を確認したことからこれを本遺構とし北側の炉跡を持つプランをS I 29とした。非常に遺構が集中的に分布する地点に位置し、S I 29, S B 6・7・11, S K51・68・70と重複する。遺構間の切り合い関係などからS I 29に次いで本遺構が古い。遺構内堆積土は2層である。 ℓ 1は礫や焼骨片を多く含む黒褐色土、 ℓ 2は黄褐色土粒を少量含む暗褐色土である。 ℓ 1は埋没過程において礫や焼骨を廃棄しているものと考えられ、人為的な影響を受けている可能性がある。

平面形は遺存状態が悪く不明確な部分が多いが、柱穴の配列などから東西にやや長い楕円形と考えられる。遺構の規模は東西4.7m、南北4.5mを測り、壁高は西壁で14cmである。壁の傾斜は床面から比較的急角度で立ち上る。床面はL IVを掘削して構築し、踏み締りは東西3.7m、南北3.0mの範囲で確認した。床面全体に少量の炭化物が散在し硬く踏み締められていた。

遺構内施設は柱穴26個を確認した。炉跡は検出していない。柱穴はP 1～7・11～20は、概ね円形に巡って配列されているため壁柱穴と考えている。直径は16～38cm、深さ15～59cmで、小形～中形の柱穴で構成されている。おおむね床面に対して垂直に掘り込まれている。P 21～P 24は床面中央に位置している。主柱穴の可能性もあるが、規模や深さにばらつきが見られることから断定はできない。直径は22～33cm、深さ19～42cmである。堆積土は暗褐色土である。 (中野)

遺 物(図54・55)

遺物は縄文土器片約1,300点と土製品1点、石器13点が ℓ 1を中心に出土している。図54に出土土器を示した。1・2は沈線区画の縄文帯と帶状の入組文が施されている。3は口縁部を巡る多条の平行沈線間に縱長のコブと小さなコブを貼り付けている。4～6は平行沈線区画帶内に刻み状の連続刺突文を施しているもので、4にはボタン状の小さなコブが一対付加されている。7・8は連続刺突が施された平行沈線区画帶間に帶状の入組文を描き、7には縄文を8には刻み状の連続刺突を充填している。9は胴部のくびれ部に沈線を巡らせ、その上にコブを貼り付けている。10～13には沈線区画の縄文帯と帶状の入組文が施されている。14は無文の口縁部と胴部を縄文帯で区画し、口縁部には円形の图形、胴部には三叉状の沈線文を施している。15は刻みの施された二条の隆帯間に小突起が付けられ、口縁部に縄文を充填している。16は無文地上に沈線で曲線图形を描いている。17・18は条線文が施され、17は口縁に沿って巡る平行沈線から蛇行して垂下し、18は横位に弧を描いている。

同図19～26は ℓ 1出土の土器である。19～21は沈線区画の縄文帯をもつもので、20の口縁部には円形の刺突を挟み込むように三叉状の沈線文が、21には波状口縁に沿った連弧状の沈線とスリットが施されている。22・23は平行沈線間に帶状の入組文が描かれ、22には縄文が充填されている。24は口縁に沿って巡る平行沈線間に等間隔で連続刺突を加え、胴部に斜行縄文と結節縄の回転文を施している。25には斜行縄文と結節縄の回転文が認められ、26は無文の注口土器片と考えられる。

図55-1は刻みを入れた先端部方向に湾曲する無文の土製品で、文様が付加されていないが土偶の腕部の可能性がある。



図54 28号住居跡出土遺物(1)

図55-2~9は石鎌である。2・3・4は無茎石鎌で、2・3の側縁は緩やかに湾曲し、基部がやや太い。いずれも細かな調整剥離は少なく、形状は整っていない。5~10は有茎石鎌で、5は正三角形の形状に整えられ基部が小さい。6~9は茎部の抉りが弱く、尖頭部と同様な形状となっているものが多い。10・11は石鎌または石錐の未成品と考えられ、いずれにも使用痕は認められない。12は石鎌の未成品で簡単な周縁加工が施されている。

同図13は楕円形の縁に帯状の溝が作り出され、形状から独鉛石の欠損品と考えている。同図14は敲打痕と擦痕が認められる敲・磨石の欠損品である。
(山岸)

まとめ

本遺構は、長軸4.7mの円形の住居跡である。か跡は確認されていないがSK70などの重複遺構の範囲に存在した可能性もある。遺構の所属時期は出土した遺物などから縄文時代後期末葉頃と考えている。
(中野)

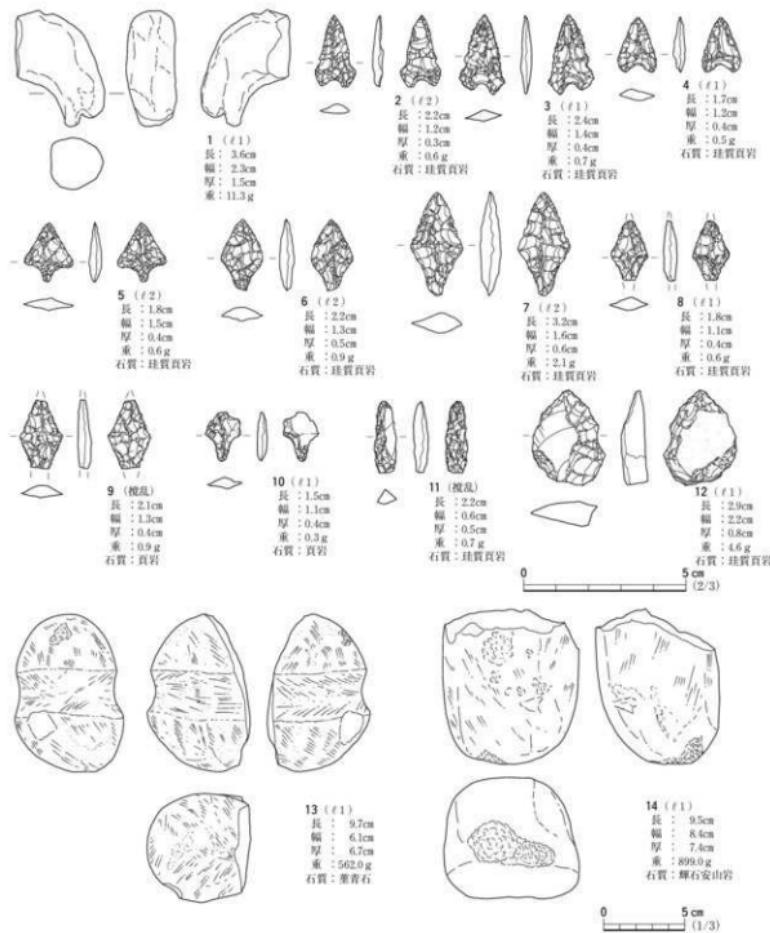


図55 28号住居跡出土遺物(2)

29号住居跡 S I 29

遺構(図56・57, 写真25)

本遺構は、調査区中央部B 6-10・11・14・15グリッドに位置する。検出面はL IVである。遺存状態は畑耕作と風倒木によって壊されているため良くない。S I 28, S B 9-11, S M 44・45と重複し遺構の切り合い関係から本遺構が最も古い。遺構内堆積土は3層である。ℓ 1-3はローム粒を少量含む黒褐色土である。それぞれレンズ状に堆積することから自然堆積土と考えられる。

平面形は柱穴の分布範囲などから東西に長い楕円形である。遺構の規模は東西5.5m, 南北5.1mを測り、壁高は遺存状態の良い北壁で14cmである。壁の傾斜は床面から急角度に立ち上る。床面はL IVを掘削して構築し、炉の周囲は少量の炭化物が散っていて硬く踏み締められていた。

遺構内施設は石囲炉1基、柱穴74個を確認した。石囲炉は床面中央のやや西側で検出した。平面形は不正円形で東西90cm、南北85cmを測る。炉は何度も使用と補修を繰り返したため床面より5-10cm程度掘り窪められている。炉石はほとんど抜き取られたと考えられ北側に3個のみが残存していた。炉石の大きさは8-15cm大の角礫が使用されている。使用面の中央よりやや東側には深鉢の底部を埋設している。炉の堆積土は5層である。ℓ 1・2は炉の廃絶後の堆積土である。ℓ 3は黒褐色土で炉の構築土である。ℓ 5は炉内埋設土器の掘形の堆積土である。

柱穴は主柱穴と壁柱穴に分かれるものと考えられる。P 1・2・62-64・66・67は周壁から炉側の位置に分布することから主柱穴と考えられる。おそらく2回程作り変えているものと考えられ、P 2-P 62-P 66-P 67は台形状に配置され、P 1-P 62-P 63-P 64は東西軸の長方形に配されている。おそらく台形状のプランから長方形のプランへと建て替えているものと推測している。主柱穴は直径20-45cm、深さ41-66cmである。P 3・4・60・61は床面南側に位置し出入口施設に伴う柱穴と考えられる。P 60・61を壊してP 3・4が掘り込まれていることから作り変えを行っているものと判断される。柱穴の深さは直径49-69cmである。P 5-59は壁際に沿うように配列されているため壁柱穴と考えられる。内側を巡るP 5-31とそれより一回り大きいプランのP 32-59がある。直径は16-38cm、深さ13-59cmを測る。

(中野)

遺物(図58・59, 写真80)

遺物は縄文土器片約1,700点、石器12点が出土している。図58-1-7はP 1出土の土器である。1・2は深鉢形土器の胴部下半で、揚げ底気味の底部からやや丸みを持って胴部が膨らむ。いずれも器面はナデ調整されただけの無文地で、1の上端に僅かに沈線が認められる。3・4は平行沈線と連弧状の区画文が描かれ、山形状の口縁部に沿って刺突が施されている。また、丁寧に磨かれた無文部を除き、「ハ」の字状の連続刺突が施されている。5-7は無文地上に横位や木葉状の曲線図形を条線で描き、起点に小さなコブを貼り付けている。8は沈線区画帯に刺突を施し、無文部を丁寧に磨いている。9の底面には木葉痕が認められる。

同図9-11は口縁部が山形状の土器で、10には沈線を挟んで連続刺突が施され、小さなコブが付

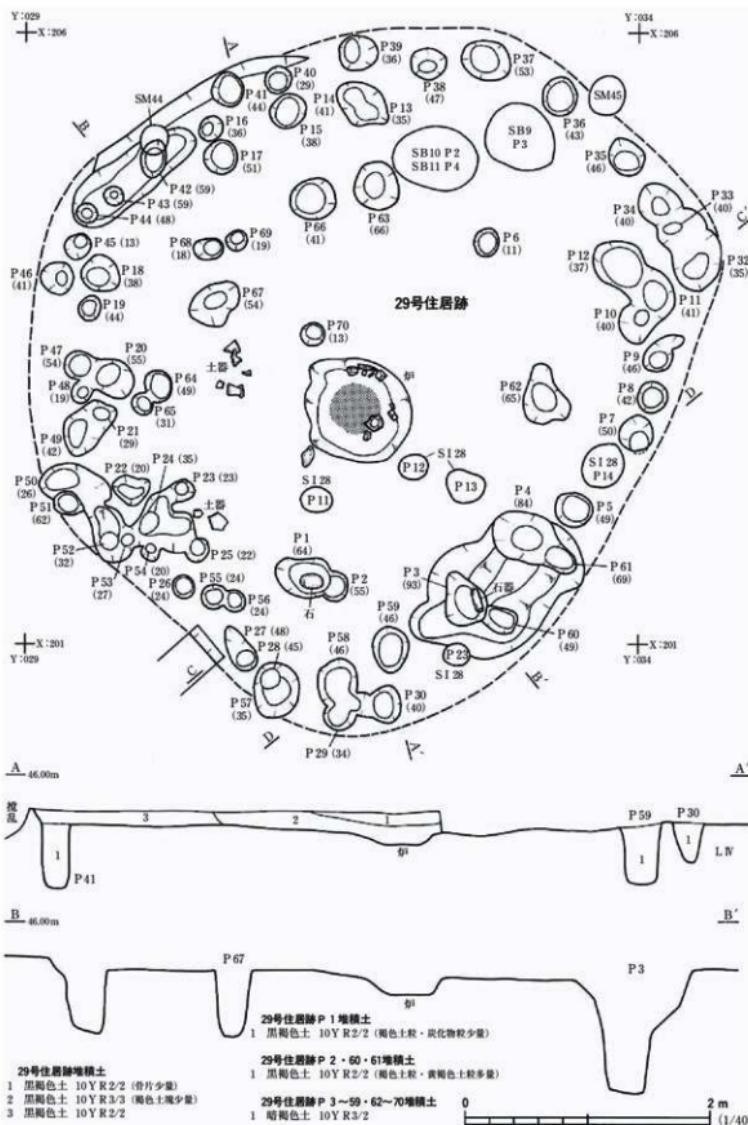


図56 29号住居跡(1)

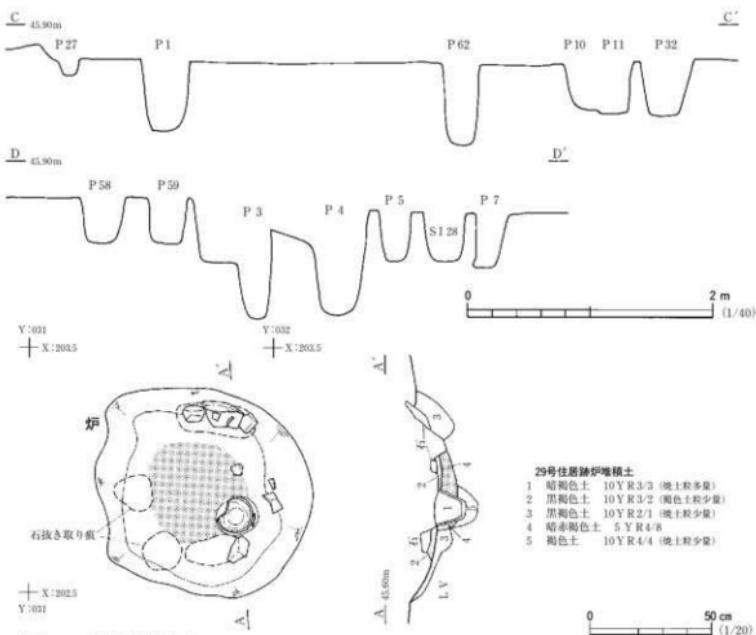


図57 29号住居跡(2)

けられている。11は口縁に沿った沈線とスリットが、12には縦長のコブが縦位に並んで付加されている。13は口縁に沿って巡る多条の平行沈線の中程に連続した刺突を加え、胴部に斜行縄文を施している。14には蛇行して垂下する条線文が認められる。16~21は平行沈線区画帯を特徴とする土器である。16~18は区画帯内に地文の条線を残し、16には連続刺突、17・18には小さなコブを貼り付けている。19・20は区画帯内に連続刺突が、21には連続刺突と縄文が施されている。22は縄文地上に多条の平行沈線を巡らせ、沈線間に一对の「ハ」の字状の刺突を縦位に並べている。23は口縁に沿って巡る平行沈線間にやや大き目のコブを付け、24には斜行縄文を充填した帶状の入組文が認められる。

図59-1は石錐の未成品、同図2~5は有茎石錐で、いずれも茎部の抉りは弱い。また、剥離調整は難で形状は整っていない。同図6は石錐の錐先で、尖端が鋭く作り出されている。同図7は石槍の破損品である。同図8は側縁に片面加工の刃部が認められ、石匙の未製品の可能性が高い。同図9は基部を欠損する磨製石斧、同図10は片面に使用痕が認められる凹石である。同図11は先端部に敲打痕を残す敲石、同図12は片面に擦痕が認められる磨石である。

(山岸)

まとめ

本遺構は、長軸5.5mの楕円形の住居である。床面中央に石壺炉を持ち主柱穴と出入口施設が伴

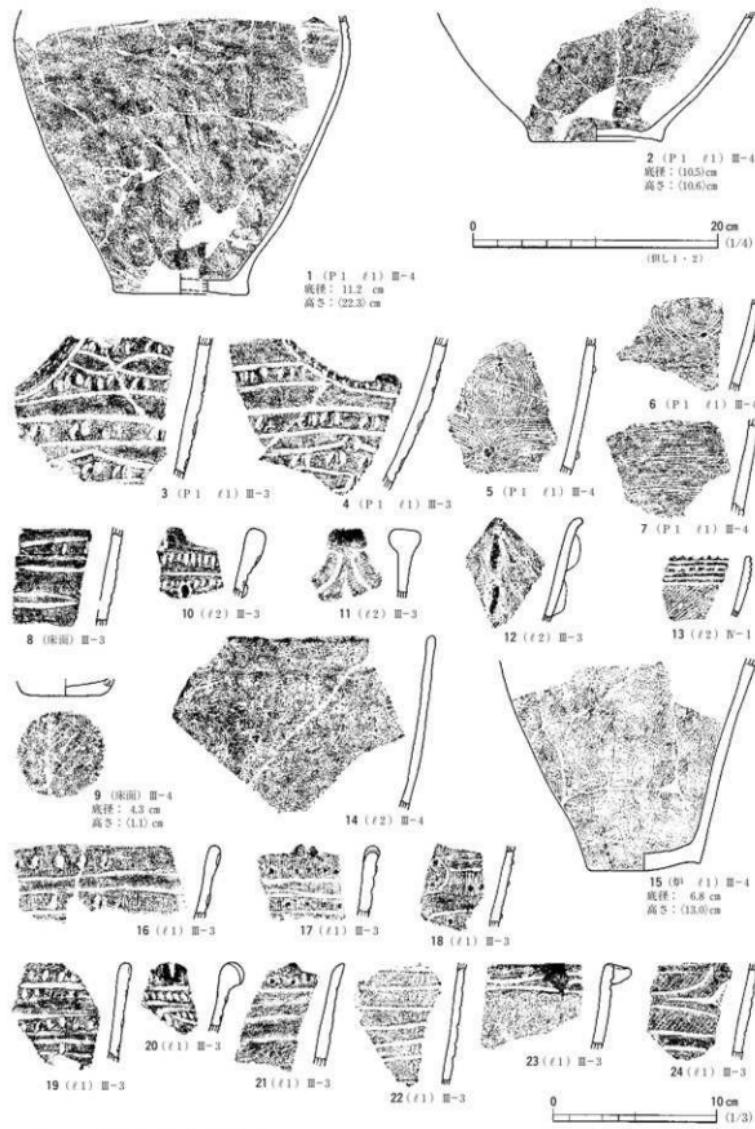


図58 29号住居跡出土遺物(1)

第2節 懸穴住居跡

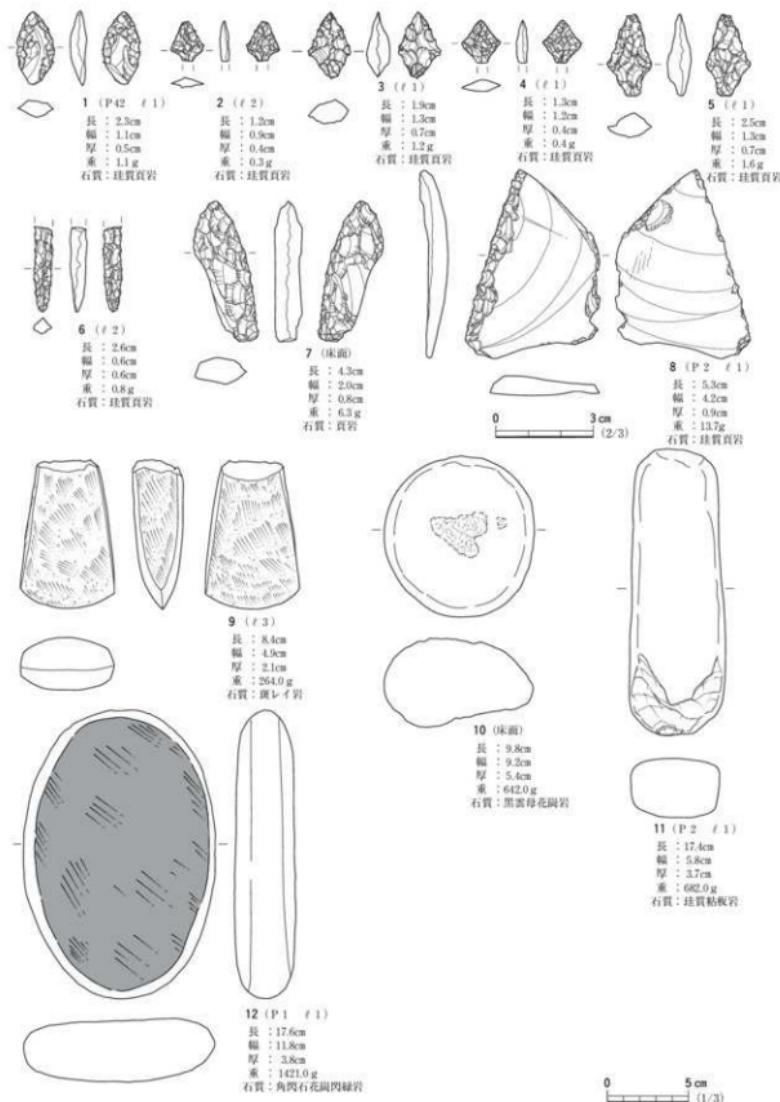


図59 29号住居跡出土遺物(2)

う。また出入口施設の作り替えや壁柱穴の分布状況から2回以上の建て替えを行っているものと判断される。本遺構はS I 11やS I 26と炉の構造や柱穴の配置、出入口施設が南側に配されることなど共通する点が多く関連性が伺われる。遺構の所属時期は出土した遺物などから縄文時代後期後葉頃と考えている。

(中野)

30号住居跡 S I 30

遺構(図60)

本遺構は調査区中央部C 7-13, C 8-1グリッドに位置する。周囲の地形は北西側から南東方向へ下る斜面地である。検出面はL II cである。S I 14, S K 66と重複し、S K 66より本遺構が古い。S I 14との新旧関係は町道造成の掘削のため不明である。

遺構内堆積土は5層である。 ℓ 1は黒色土、 ℓ 2~5は焼土粒や炭化物を微量含む黒褐色土である。それぞれレンズ状や三角状に堆積することから自然堆積土と考えられる。

平面形は周壁のプランなどから、円形から楕円形と考えられる。遺構の規模は東西4.34mを測り壁高は遺存状態の良い西壁で46cmである。壁の傾斜は床面から急角度に立ち上る。床面はL IIIを掘削して構築している。床面全体に少量の炭化物が散っていて踏み締まりは弱い。

遺構内施設は柱穴8個を確認ただけで、炉は検出していない。柱穴はP 1・5・6のように壁側に位置するものも見られるが、それ以外は不規則に分布する。直径は14~22cm、深さ19~24cmを測る。

(中野)

遺物(図60, 写真80)

遺物には縄文土器片約300点と石器2点があり、 ℓ 1からの出土が多い。1・2は床面出土の土器で、1には条線文が施されている。2は平行沈線区画による縄文帯が施され、口縁には刻みが認められる。3は胴のくびれ部に条線が充填された二段の平行沈線区画帯を施し、その間に等間隔でコブを附加している。4・5は無文地の土器で、4は口縁に沿って平行沈線帯を巡らせ、5は胴部に一对の比較的大きなコブを貼り付けている。6~8は条線文が施され、6・7は横位と縱位方向、8は大きく蛇行して垂下している。9は平底、10は低い台状を呈する底部片である。11は外面に斜行縄文、内面に縱位の条痕が施され、胎土に纖維混和痕が認められる。

12・13は有茎石錐である。12は茎部の抉りが弱く、形状が尖頭部とほとんど変わらない。13は簡単な周縁加工を主に片面に加えている程度で、素材の厚みも取りきれていないため未完成の可能性が高い。

(山岸)

まとめ

本遺構は、長軸4.34mの円形から楕円形の住居跡である。炉は検出されていないが住居南側のすでに壊された場所に位置する可能性もある。所属時期は出土した遺物や周辺に分布する遺構などから縄文時代後期後葉頃と考えている。

(中野)

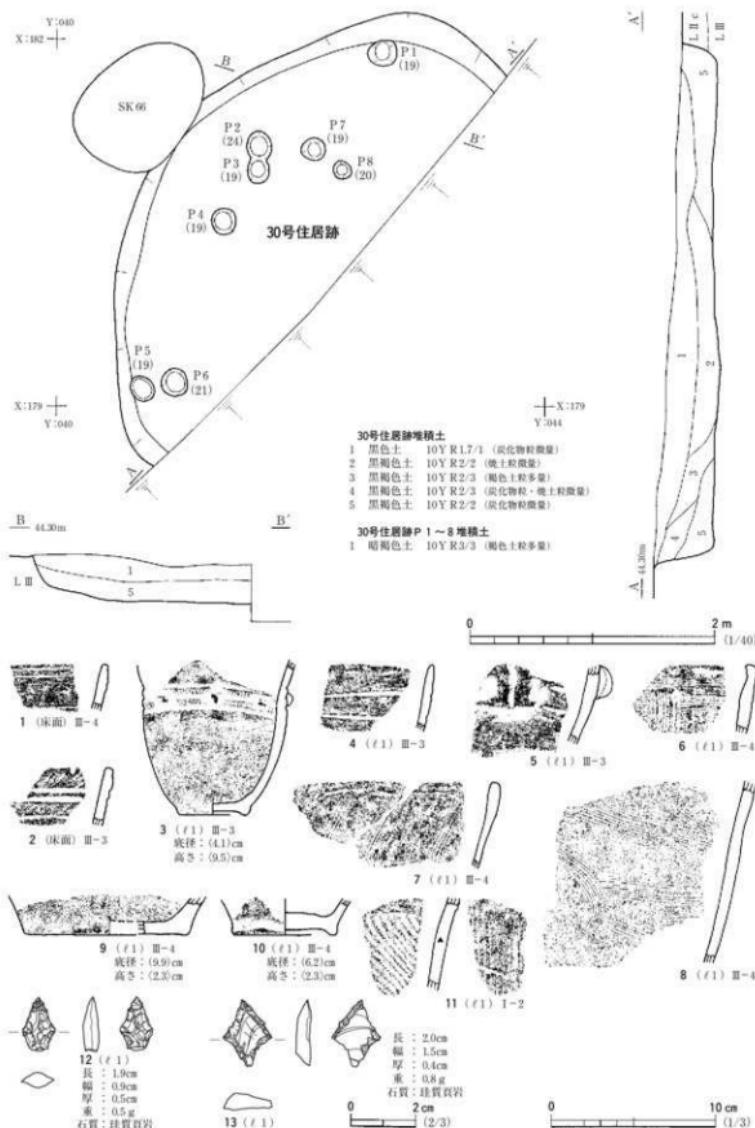


図60 30号住居跡と出土遺物

31号住居跡 S I 31

遺構(図61・62, 写真26・27)

本遺構は調査区中央部B 7-1・2・5・6・9・10グリッドに位置する。検出面はLIVである。LIV上面での遺構検出時に黒色土のプランを確認したため長軸及び短軸方向にベルトを設定して精査を行った。当初は一軒の大形な住居跡と考え全面的に堆積土の掘削を行った。そして南西部よりカマド跡と考えられる礫の集中部を検出した。しかしながらカマドが住居の内側に入りすぎている点や南側堆積土の違いから南側に別の住居跡があることがわかった。さらに調査が経過する中で東側壁面から新たなるカマドが検出されたため最終的には3軒以上の住居跡が重複していることが判明した。ここでは南壁側にカマドを持つ住居を本遺構とし、東カマドの住居をS I 32, S I 31の南に位置する住居をS I 33とした。本遺構はS I 32・33, S B 13・15・19・20と重複しており本遺構が最も新しい。

遺構内堆積土は4層である。ℓ 1は黒色土、ℓ 2は黒褐色土、ℓ 3は黄褐色土粒を多く含む灰黄褐色土でそれぞれ自然堆積土と考えられる。ℓ 4は貼床土である。

平面形は南壁を掘り過ぎてしまったが西壁や北壁の状況から東西に主軸を持つ隅丸長方形の住居跡である。長軸方向の南壁と北壁の中点を結んだ線を基準として、N36°Eとなる。遺構の規模は東西6.5m、南北5.6mを測り、壁高は遺存状態の良い北壁で22cmである。壁の傾斜は床面から比較的急角度で立ち上る。床面はLVを掘削して床を構築している。床面全体に多量の炭化物が散っていて踏み締まりは弱い。

遺構内施設はカマド1基、被熱範囲2箇所、ピット9基を確認した。カマドは住居跡の南東に作られている。左右の袖が残存していたが遺存状態は良くない。カマド内堆積土は5層に分けられた。ℓ 1～3は煙道内堆積土、ℓ 4は燃焼部堆積土である。カマドは基底部で計測すると右袖が長軸100cm・幅25cm・高さ16cmを測る。左袖は長軸70cm、幅34cm、高さ15cmを測る。袖は焼土粒を多く含む暗褐色土で構築されていて粘土などは使われていない。8～20cmの礫を芯材として使用していたと考えられる。燃焼部全長は60cm、焚口幅は45cmである。燃焼部内は、強く被熱し、酸化面の厚さは、3cmである。煙道は、全長120cm、幅は下場で30～35cmを測る。

被熱範囲は、床面西壁側に2基検出し、北側を炉1、南側を炉2とした。当初鍛冶炉の可能性を考え土壤サンプルを行ったが鍛造剥片などは確認されていない。また西壁に近い位置であることから、カマドの残骸とも考えたが西壁からは煙道等の痕跡は検出されなかったため用途は不明である。被熱範囲の長軸は炉1が37cm、炉2が54cmである。共に強く被熱し酸化面の厚さは3cmである。柱穴はP 5・6と考えられ西壁際に並行するように位置する。長軸は40～62cm、深さ48・49cmである。おおむね床面に対して垂直に掘りこまれている。P 1～4・9は、床下ピットである。P 3からは炭化材が出土している。

(中野)

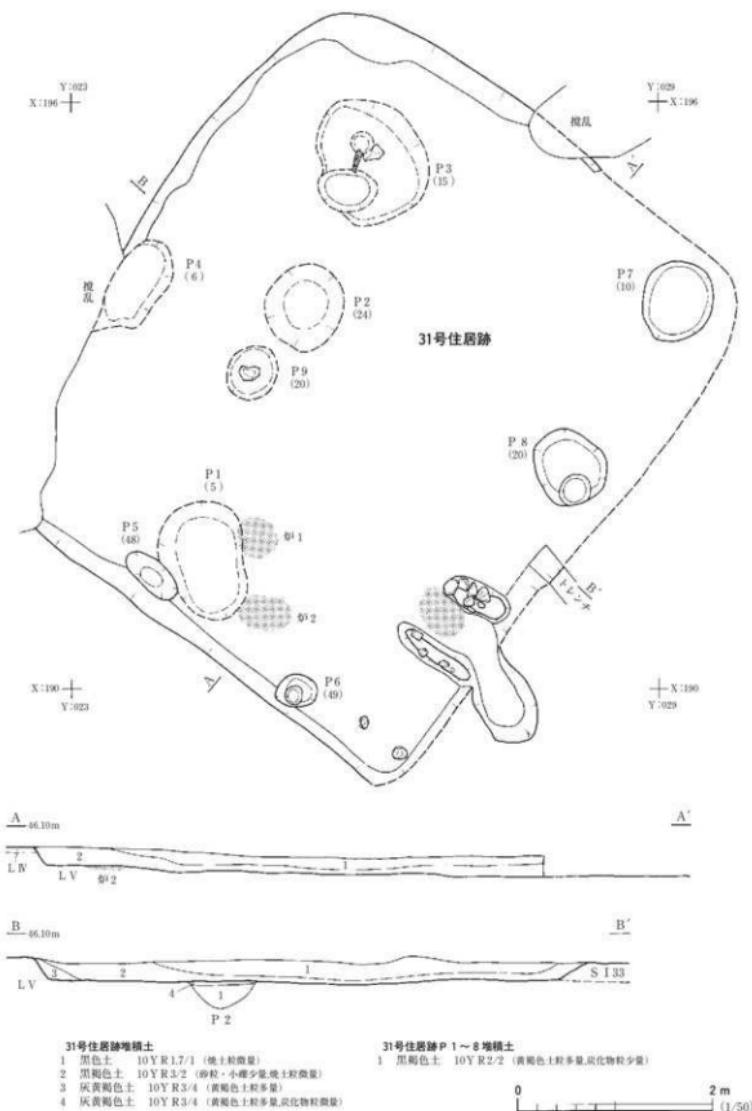


図61 31号住居跡(1)

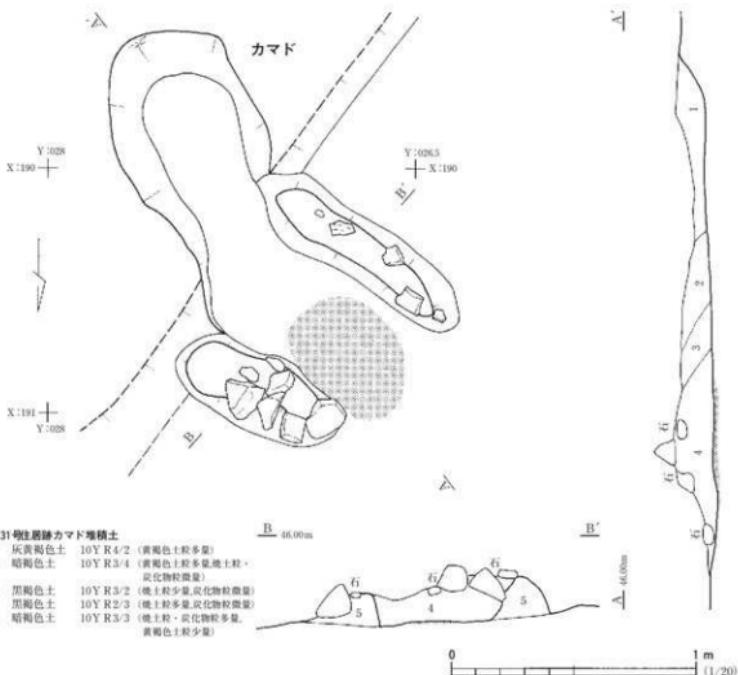


図62 31号住居跡(2)

遺 物(図63, 写真81)

遺物は繩文土器287点、土師器1932点、須恵器2点、石器110点、土製品1点が出土している。1～6はロクロ整形による土師器である。1・2・4・5は杯で、底部の切り離しは回転糸切りである。2は底部の切り離し後、体部下端にナデ調整をしている。さらに、体部外面には油煙の付着がみられる。4・5の内面にはヘラミガキ・黒色処理がなされている。5は底部の切り離しの後、体部下端にヘラケズリ調整をしている。3は高台付杯で、内外面ともにヘラミガキ・黒色処理がなされている。6は壺である。ロクロナデの後、外面では縦方向のヘラケズリ、内面では横方向のヘラナデを施している。

7～10は流れ込みによるもので、本住居跡に伴う遺物ではない。7が凹基無茎の石錐で、8・9が凸基有茎の石錐である。いずれも両側面に微細な剥離が施されている。8の基部にはアスファルトの付着がみられる。9は両側縁が綫長で、二等辺三角形状となっている。

10は土錐である。形状は小判形で、径5mmの孔が貫通している。紐を掛けるためか、両側面に沈線が巡り、これと直交するように横方向にも沈線が巡っている。

(吉野)

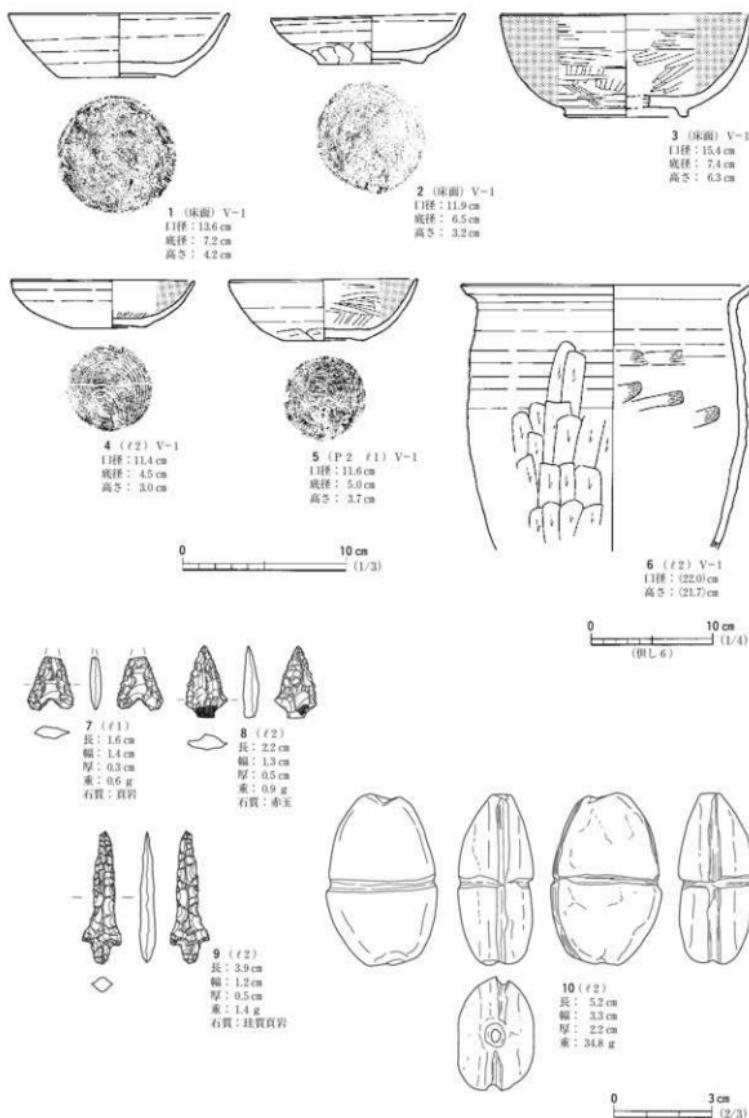


図63 31号住居跡出土遺物

ま と め

本遺構は長軸6.5mの比較的大形な住居である。カマドは南側に位置し礎を芯材としている。また床面西壁側近くには2ヶ所の被熱範囲を確認したが用途などは不明である。遺構の所属時期は出土した遺物から9世紀末から10世紀初頭頃と考えている。

(中野)

32号住居跡 S I 32

遺 構(図64・65、写真26・27)

本遺構は、調査区中央部B 7 - 1・2・5・6・9・10グリッドに位置する。検出面はL IVである。S I 31・33、S B 13・15・19・20と重複し本遺構がS I 31より古くそれ以外の遺構よりは新しい。遺構内堆積土はS I 31によって失われている。

平面形は東西軸の長方形でS I 31とプランを共通し東西5.2mを測る。壁高は遺存状態の良い北壁で18cmである。壁の傾斜は床面から比較的急角度で立ち上る。

遺構内施設はカマド1基、ピット13基を確認した。カマドは住居跡の東壁中央に作られている。袖は失われており燃焼部の一部と煙道部が遺存していた。カマド内堆積土は5層に分けられた。 ℓ 1～3は煙道内堆積土、 ℓ 4は燃焼部堆積土である。 ℓ 5は煙出しピットの堆積土である。煙道は全長90cm、幅は下場で20cmを測る。煙出しピットは楕円形で、直径30cm、深さ28cmである。柱穴はP 9・10と考えられ、東壁から西側に1.2～1.3mのところに並列している。柱穴の芯之間は1.7mである。長軸は25～60cm、深さ50・63cmである。P 1は住居南東隅に位置していることなどから貯蔵穴の可能性がある。

(中野)

遺 物(図65)

遺物は繩文土器17点、土師器280点が出土している。1・2はロクロ整形の土師器甕である。1・2とも口縁部が屈曲し、口唇部が上方に向かって摘みあげられている。器面調整はロクロナデを施した後、内面にヘラナデを加えている。

(吉野)

ま と め

本遺構は、S I 31と主軸を共にする比較的大形の住居跡である。カマドは袖が壊され東壁側に燃焼部の一部と煙道部が検出された。S I 31と主軸方位や平面プランが共通するためS I 32をS I 31に立て替えた可能性も考えられるが断定できなかった。遺構の所属時期は出土した遺物などから9世紀後半～10世紀初頭頃と考えている。

(中野)

33号住居跡 S I 33

遺 構(図66、写真26・27)

本遺構は調査区中央部B 7 - 1・2・5・6・9・10グリッドに位置する。検出面はL IVである。S I 31・32、S B 13・15・19・20と重複し、S I 31・32より古くそれ以外の遺構よりは新しい。

遺構内堆積土は焼土粒や炭化物粒を含む暗褐色土の単層で、堆積過程は不明である。

平面形は残りの良い南壁や東壁などから方形と考えられる。遺構の規模は東西5.1m、南北5.5mを測り壁高は遺存状態の良い南壁で22cmである。壁の傾斜は床面から比較的急角度で立ち上る。

遺構内施設は被熱範囲2箇所、ピット12基を確認した。カマドは検出されていないが南壁際の床面中央にP10に壊されている被熱範囲が確認できることからここにカマドがあったと思われる。また床面中央よりやや北側にも、もう一箇所被熱範囲を検出した。被熱範囲の長軸は、100cmである。強く被熱し酸化面の厚さは3cmである。

柱穴はP4・5とP7・8が考えられる。P4・5は東壁際に並列して設置されていたものと考えられ柱穴どうしの芯々間は1.4mである。柱穴の長軸は18cm、深さ24・34cmである。P7・8は南壁側から北側に1.4mのところに2基並列しているため主柱穴の可能性がある。柱穴どうしの芯々間は2.8mである。柱穴の長軸は40~45cm、深さ57・73cmである。P6・9は大形でそれぞれ住居の南西と南東隅に位置していることなどから貯蔵穴と考えられる。P9の堆積土中から多量の焼土粒や炭化物、甕や筒形土器などの土師器片が多数出土していることから住居を廃絶する際にカマドを壊してカマドで使用されていた土師器を埋めたものと思われる。

(中野)

遺物(図67、写真81)

遺物は繩文土器35点、土師器738点出土している。図67には土師器を図示した。そのうちの11の筒型土器を除いたすべてが、ロクロ整形によるものである。1~4は杯で、底部の切り離しは回転糸切りである。3には油煙の付着が内外面にみられる。4の内面にはヘラミガキ・ヘラナデ・黒色処理がなされている。ヘラナデはヘラミガキの後に、放射状に加えられている。

5~8は高台付杯である。5は小型なもので完形品である。内外面にヘラミガキがなされ、内面に黒色処理されている。6・7は内面にヘラミガキ・黒色処理されている。7の底部の切り離しは回転糸切りである。8は高台が欠損しているものである。体部下端の外側には回転ヘラケズリ調整が、内面にはヘラミガキが施されている。9・10は底部が欠損しているが、器形をみると高台付杯と推定している。いずれも、内面にヘラミガキ・黒色処理が施されている。

11は筒型土器で、体部下半から底部にかけて欠損している。手捏により成形され、内外面に指頭圧痕がみられる。

12~14は甕で、そのうち13は小型甕である。いずれも器面に炭化物の付着がみられる。12はロクロナデの後、ヘラナデを施している。13の体部上半にはロクロナデがなされ、体部下半の外側では回転ヘラケズリ、さらに体部下端にヘラナデを施している。内面ではヘラナデがなされている。14はロクロナデの後、外側ではヘラケズリ、内面にヘラナデを施している。

(吉野)

まとめ

本遺構は、長軸4.4mの方形の住居跡である。カマドは検出されていないが南壁側中央の焼土範囲に存在したと考えている。また貯蔵穴からは比較的まとまった遺物が出土している。遺構の所属時期は出土した遺物などから9世紀末頃と考えている。

(中野)

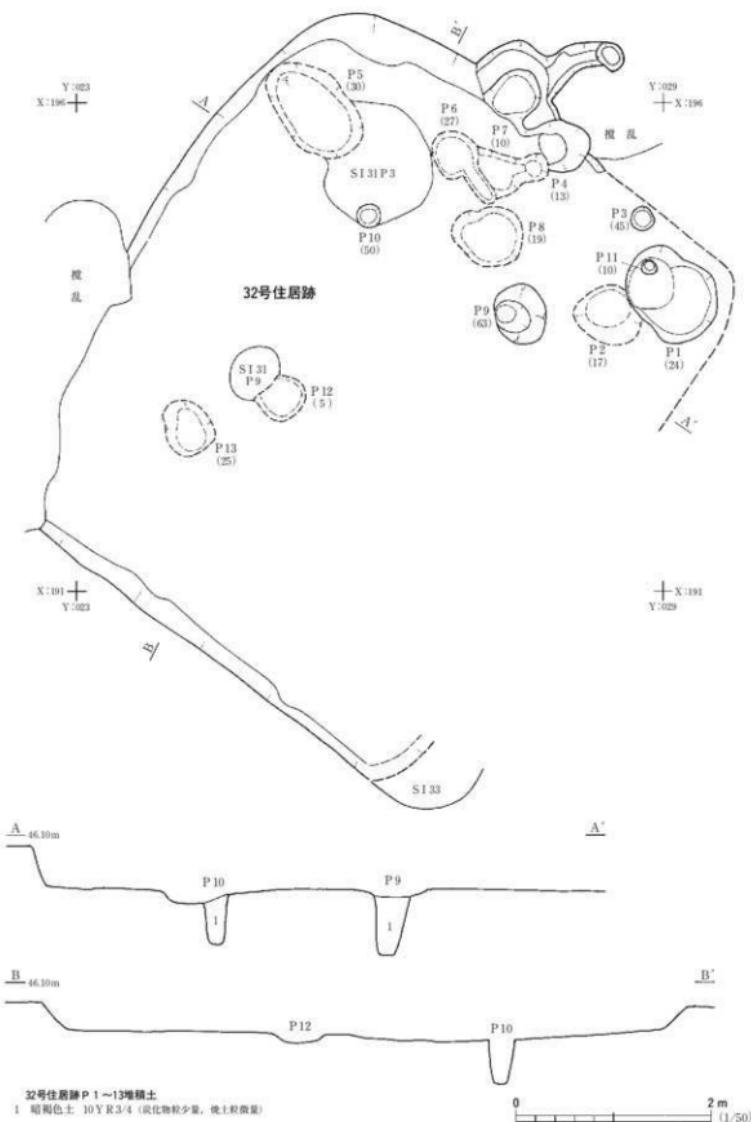


図64 32号住居跡(1)

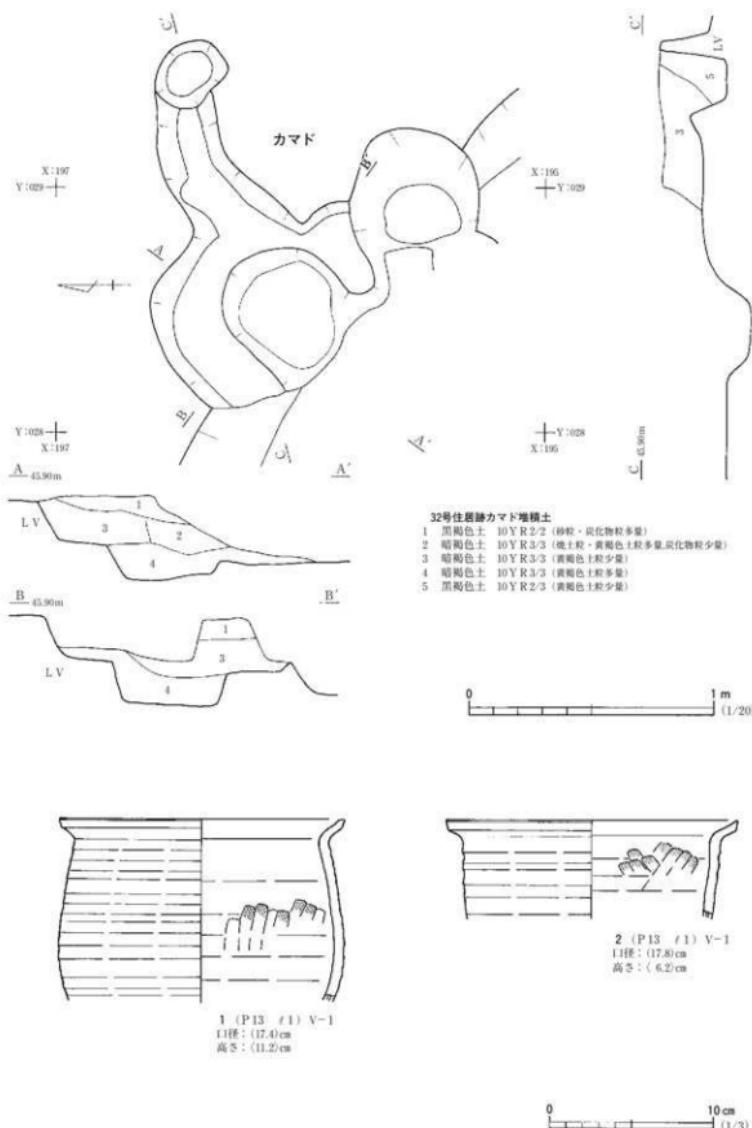


図65 32号住居跡(2)と出土遺物

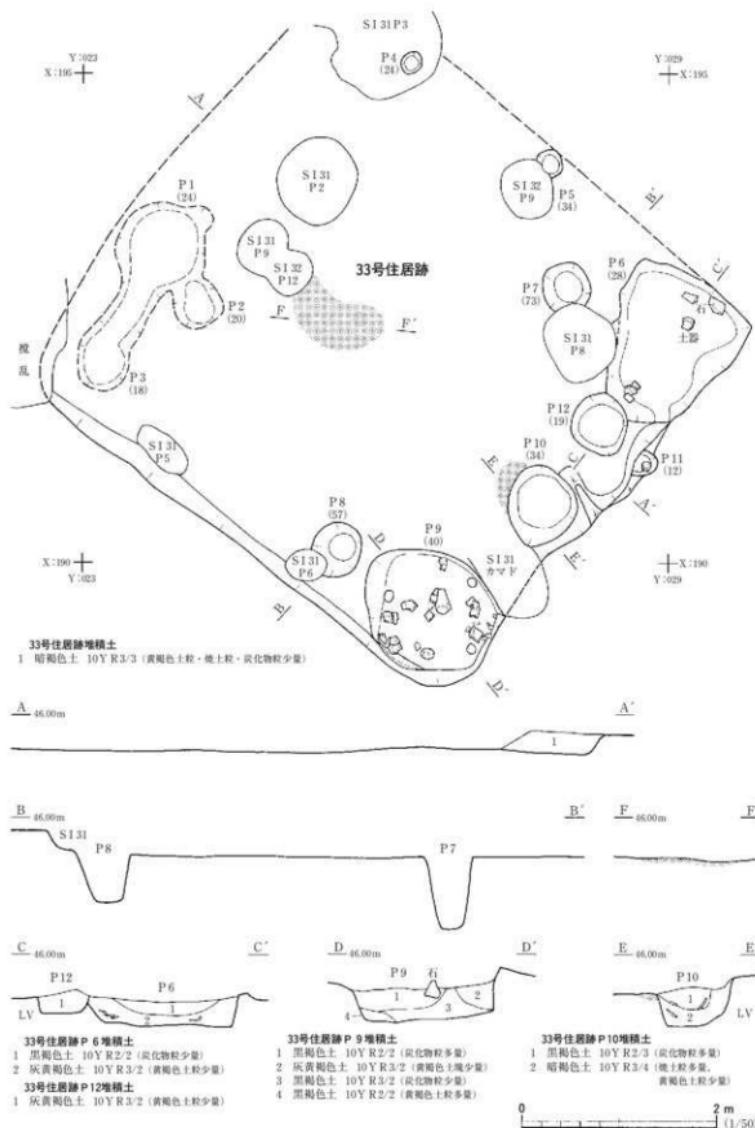


図66 33号住居跡

第2節 壁穴住居跡

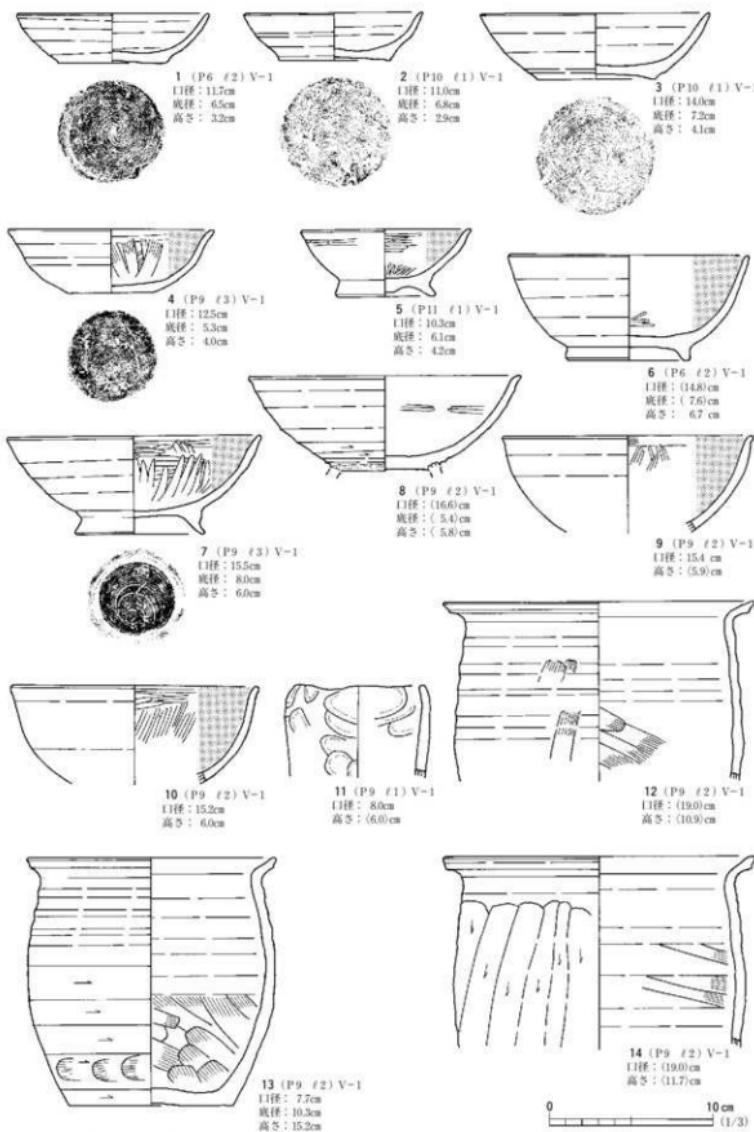


図67 33号住居跡出土遺物

34号住居跡 S I 34

遺構(図68)

調査区中央部の南西側、B 6 - 14グリッドに位置する。L I直下のL IV上面において石圓炉を検出したことから住居跡とした。西側でS I 35、S B24と重複し、S I 35より新しく、S B24より古い。また、S M48・49・52・54は、いずれも本遺構の検出面から口縁端部が覗く状態で出土し、半径2m内に所在していることから本遺構より僅かに新しいか、伴う可能性がある。

本遺構は炉と焼土、一部の柱穴を検出したのみで、全体の平面・規模については不明である。炉周辺は平坦で、L IVの黄褐色土を基調とし、シミ状の黒褐色土が含まれていたが、踏み締まりは確認できなかった。

炉は径が約80cm、深さ7cm前後の円形の掘形を設け、その縁にそって亜角礫を埋め込んだ石圓炉である。南西側の3個の縁石が遺存し、いずれも炉内方向の面が火熱を受けて変色している。炉内堆積土に焼土・炭化物粒を含んでいるが、炉底面には焼けが認められなかった。

焼土は炉の東側に接し、径25cm程の不整円形の範囲を検出した。やや中央付近が盛り上がり、全体が堅く締まっている。焼けは5cmの深さまで、皿状に認められる。

柱穴は14個検出され、炉の南側に集中する傾向が認められる。いずれも柱穴内堆積土は、炉内堆積土に類似した黒褐色土である。最も南側に位置し、溝で連結されたP 9・10は径が28・32cm、深さ49・44cmと規模が大きい。また、これら柱穴の東側に対応するように位置するP 11・13は径が25cm前後、深さ39・46cmとP 9・10について規模が大きく、炉を床面の中央と想定した場合、これら二ヶ所の柱穴については、P 12・14を含め出入口の施設に関連した柱穴の可能性が高い。その他の柱穴は、径が10~20cm、深さが19~32cmの規模で、散在する傾向にあり、まとまった分布的特徴は認められない。

遺物(図68)

遺物は炉内と炉周辺から繩文土器片33点が出土している。1は先端が丸く尖り出す口縁部片で、口縁に沿って山形状の沈線文を施している。2・7は斜行縄文、3・6は縦位の条線文が施されている。4は口縁に沿って連続刺突が、5は沈線区画による帯状の入組文が施されている。

まとめ

本住居跡の全体の形状・規模については不明であるが、石圓炉1基と柱穴を検出した。所属時期については、重複関係と出土遺物から縄文時代後期後葉頃と考えている。

(山岸)

35号住居跡 S I 35

遺構(図69)

調査区中央部の南西側、B 6 - 13グリッドに位置する。L I直下のL IV上面で、暗褐色土の不整な円形の広がりとして検出した。S I 34、S B24、S M49・54と重複し、本遺構が古い。また、南

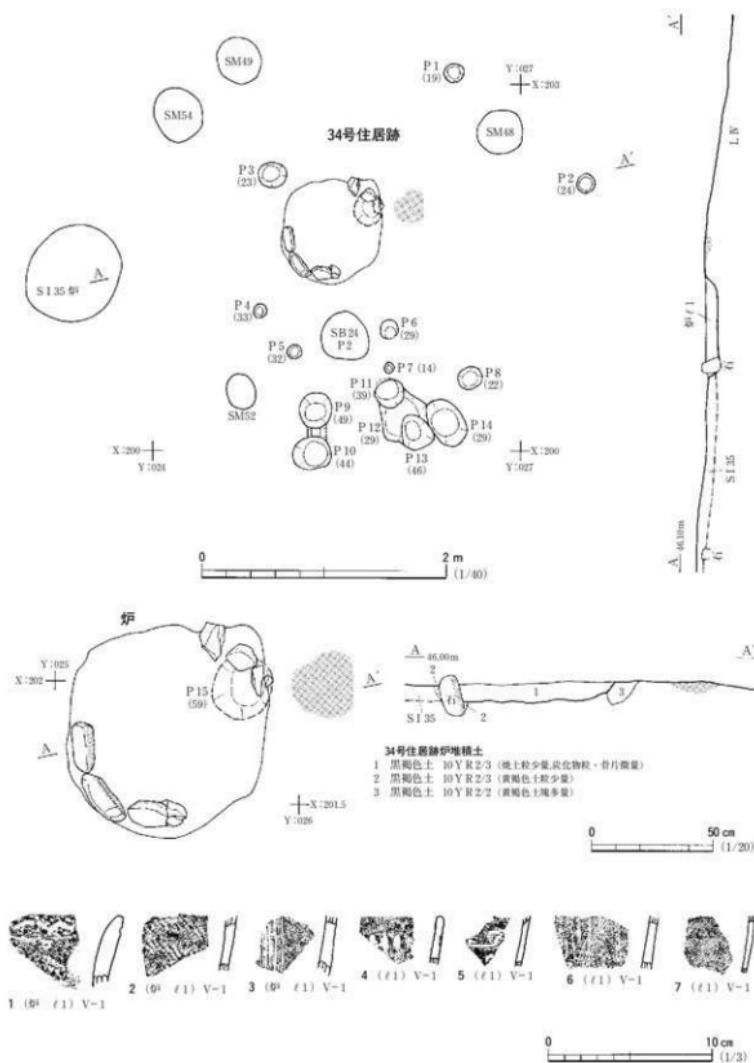


図68 34号住居跡と出土遺物

東側の床面から口縁端部が突き出すように検出したSM52については、壊されていないことからSM52が僅かに新しいか本住居跡に伴う可能性もある。

平面・規模については壁が遺存していないため不明瞭であるが、柱穴の分布から南北4.5m、東西4m程の楕円形を基調とする住居と想定できる。床は炉周辺を中心としてほぼ平坦であるが、踏み縮まり等は確認できなかった。住居内堆積土は暗褐色土で、炉跡を中心に薄く堆積し、自然堆積と考えている。

炉は径が約80cm、深さ5cm前後の円形の掘形を設け、その縁に沿って亜角礫7個を並べて埋め込んだ石圓炉である。各礫は間隔を開けて配置され、いずれの礫も炉内方向の面が焼け変色している。炉底面は縁石内の範囲で焼けが認められ、約5cmの深さまで断面が皿状に焼土化していた。炉内には黒褐色土が堆積し、その上面から鉢形土器が横倒しの状態で出土している。住居廃棄後、炉の上面を再利用した痕跡が認められないことから炉の廃棄に際して、一端炉内を人為的に埋めた後、横位または立位状態で土器を置いたものと考えている。また、炉底面の中央からは、無文の鉢形土器底部が正立状態で僅かに埋められた状態で出土している。

柱穴は15個検出され、いずれも黄褐色土粒を含む暗褐色土が堆積していた。これら柱穴の内、P2~4は径が18~25cm、深さ31~47cmの規模で、炉を取り囲むような三角形の配置となっていることから主柱穴と考えている。P5~7・10~15は径が12cm前後、深さ18~28cmの規模で、ほぼ楕円形の配置となることから本来は壁際に沿って巡っていた壁柱穴と考えている。また、壁柱穴と同一の配置で南側から検出されたP8・9については、径が20cm前後で、深さ42・56cmと他の壁柱穴より大規模であることから出入口の柱穴の可能性が高い。

北側から検出したP1は径30cm、深さ43cmの規模で、壁柱穴の配置上に位置するが、中からほぼ正立した鉢形土器とその口をふさぐように亜円礫の凹石が出土している。性格については判然としないが、出土土器を埋設するための小穴と想定している。

遺物(図69・70、写真80)

図69は炉内出土遺物である。1は炉内堆積土の上面から横位で潰れた状態で出土した鉢形土器である。平口縁で、ほぼ均一な厚さに仕上げられ、文様は付加されていない。2はペーゴマ形を呈する小型の杯で、器面は比較的平滑に仕上げられている。3は無文地に平行沈線化した帯状の入組文を描き、その中に刻み状の連続刺突を施している。4は炉底面に埋められていた底部である。器面は荒れ、部分的に灰色や赤褐色に変色している。

図70-1は口縁の一部を欠損する鉢形土器である。平口縁には山形の小突起と細かな刻みが加えられ、無文地の口縁端部から胴部上半に沈線文が施されている。文様の上下に平行沈線区画帯を巡らせ、その間に平行沈線化した帯状の入組文を三段に横位展開させている。また、入組文と胴部の沈線区画内には、刻み状の連続刺突を密に加えている。同図2~5は床面出土の土器で、2は無文の口縁部、3は揚げ底状の底部である。4は繩文が施された沈線区画で幾何学的文様を描き、5は胴のくびれ部を巡る平行沈線区画帯内に中央に刻みを入れた綫長のコブを貼り付けている。

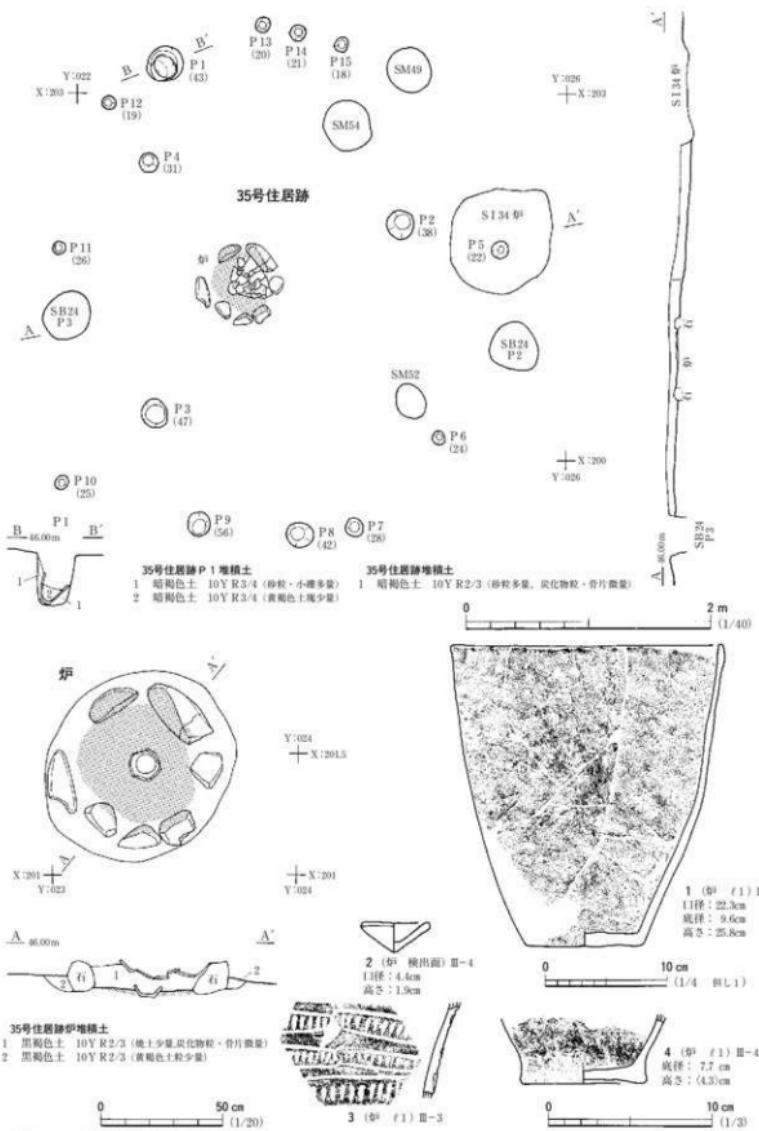


図69 35号住居跡と出土遺物

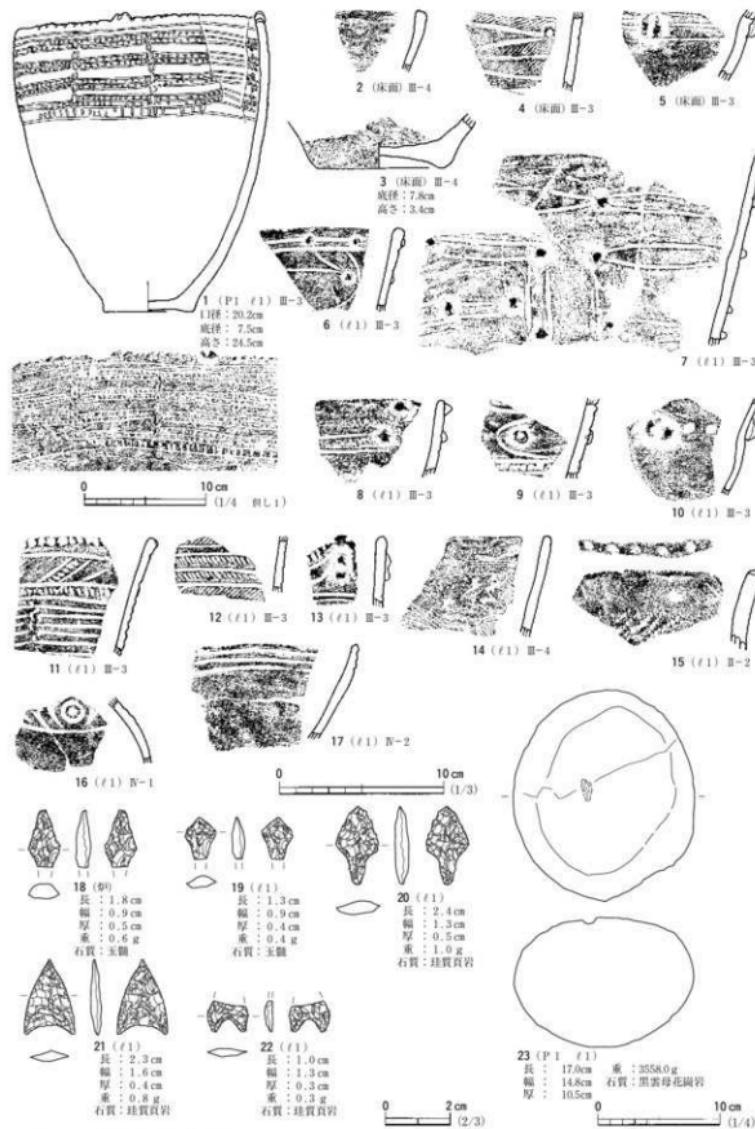


図70 35号住居跡出土遺物

同図6～17は ℓ 1出土土器である。6～10は無文地に沈線区画の图形を描き、文様の起点や要所にコブを貼り付けている。11・12は平行沈線区画文を主要文様とし、区画文内に刻み状の連続刺突と縄文が分かれ施されている。13は山形状の口縁に沿って、縄文施文の沈線区画と縦位のコブを貼り付けている。14には条線文が、15は無文の口縁端部に円形の刺突文が施されている。16の無文の胴部には同心円を挟むように三叉状の沈線が認められる。17は平口縁の浅鉢形土器片で、口縁端部に沿って三条の沈線が巡らされている。

図70～18～20は有茎の21・22は無茎の石礫である。18・19は抉りが弱く、幅広の茎部を欠損する。20は茎部の抉りが明瞭で、比較的整った形状となっている。21は緩い抉りが広く、基部の両端が尖り出す。比較的丁寧な剥離調整が施され、薄く整った形状を呈する。22は尖端部分を欠損する。基部が膨らむ形状で、抉りはやや深い。同図23は凹石で、球状に近い円礫の片面の中央付近に凹部が認められる。

ま と め

本遺構は床面のほぼ中央に石囲炉が位置する住居跡で、柱穴の配置から平面は楕円形と想定される。所属時期については、重複関係と出土遺物から縄文時代後期後葉頃と考えている。(山 岸)

36号住居跡 S I 36

遺 構(図71)

本遺構は調査区中央部西端A 6-4・8、B 6-1・5グリッドに位置する。周囲の地形は平坦であり住居跡の西側は調査区外へと続いている。検出面はLⅢである。LⅢでの遺構検出時に黒褐色土の半月形のプランを確認したことから、精査を行い住居と認定した。SM51・56、SB26・27と重複しており本遺構が最も古い。すぐ東側にはSB25、北側にSK78が近接する。

遺構内堆積土は4層である。 ℓ 1～4は黄褐色土粒や炭化物を含む黒褐色土で、それぞれ自然堆積土と考えられる。また ℓ 3・4が堆積した後にSB26が掘り込まれている。

平面形は住居の半分以上が調査区外に位置することから不明確な点も多いが、検出した周壁のプランから円形から楕円形と考えている。遺構の規模は南北3.9mを測り、壁高は遺存状態の良い南壁で48cmである。壁の傾斜は床面から急角度に立ち上る。床面はLⅣを掘削して構築していて、全体に少量の炭化物が散っており、硬く踏み締められている。

遺構内施設は柱穴6個を確認した。炉は検出していないが床面の中央より西側に行くにしたがって、床面炭化物が徐々に多くなることから、調査区の外に炉が存在するものと考えられる。柱穴はP5・6が床面中央に位置することから主柱穴と考えられる。柱穴の長軸は20cm、深さは50・55cmである。P1～4は壁際に沿うように配列されているため壁柱穴と考えられる。長径は18～30cm、深さは21～25cmを測り小形の柱穴で構成されている。

遺 物(図72・73、写真80)

遺物は縄文土器片約700点、剥片類約20点が、主に ℓ 1・2から出土している。図72-1は全体

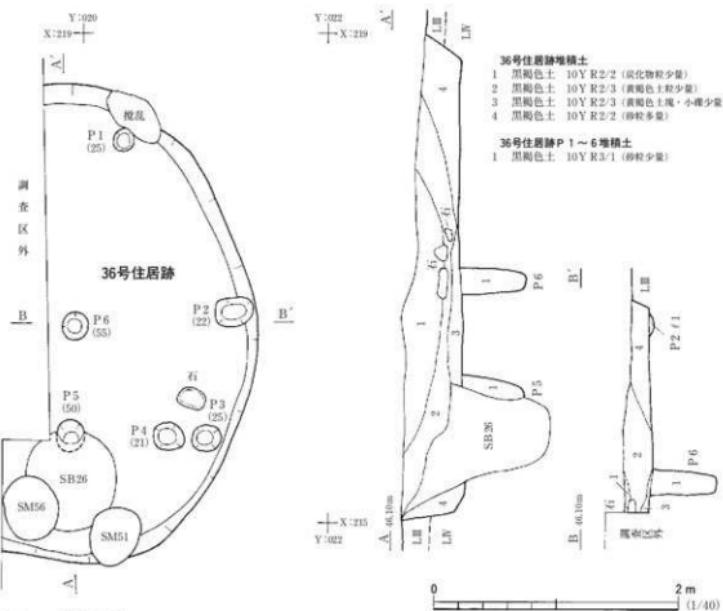


図71 36号住居跡

形の分かる深鉢形土器で、口縁には山形状の小突起が波状に巡る。口縁に沿って平行沈線区画帯を巡らせ、その間の無文部に平行沈線区画の入組文を横位に展開させている。沈線下の胴部には無文の底部付近を除き斜行繩文が施されている。2は繩文が施された深鉢形土器で、口縁部付近は斜位に、胴部では横位に回転方向を変えている。

3は平行沈線区画内に連続刺突を、4には連続する刺突文と爪彫文を施している。5には繩文施文の沈線区画文とコブが認められる。6・7は胴部に繩文が施され、6は平行沈線を境とした無文の口縁部に三叉文が認められる。また、7の口縁は磨かれ、小波状を呈している。

8は口縁に沿って刺突と結節縄の回転文が、9は波状の沈線文を境に斜行繩文が施されている。10・11は無文地上に沈線文と連続刺突文が認められる。12~15には繩文施文の帶状の沈線区画文、16~18には円形の文様を挟み込むように三叉状の沈線文が施されている。19は蛇行・垂下する条線が施されている。20は端部がやや丸い平底の、21・22は台付き土器の底部である。

ま と め

本遺構は長軸3.9mの円形か梢円形の住居跡である。S B26, S M51・56と重複し、本遺構の廃絶後間もなくしてからS B26が掘り込まれ、さらにその柱穴が埋まった後にS M56が掘り込まれている。所属時期は重複する遺構や出土遺物などから繩文時代晩期前葉頃と考えている。（中野）

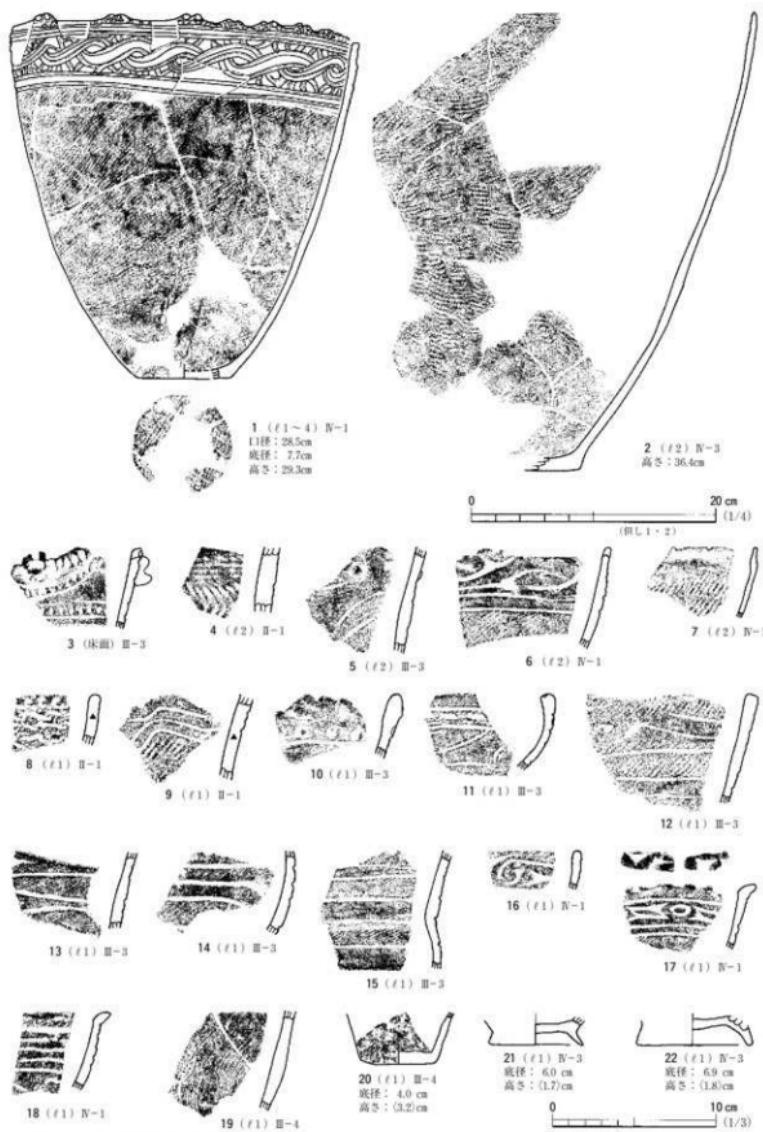


図72 36号住居跡出土遺物(1)

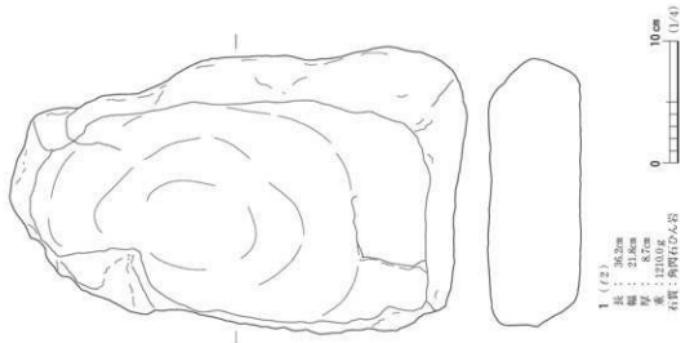


図73 36号住居跡出土遺物(2)

37号住居跡 S I 37

遺構(図74)

本遺構は調査区中央部西側B 6 - 6 グリッドに位置する。検出面はL IIIである。L IIIを掘削している際に石圓炉を検出したため住居跡と判断した。遺存状態は東側の半分を耕作によるよって壊されているため良くない。S K54と重複しているが搅乱などが著しかったため新旧関係は不明である。遺構のすぐ南西側にはS B21・23、SM55が位置する。

遺構内堆積土は2層である。ℓ 1・2は黄褐色土粒や炭化物を含む黒褐色土でそれぞれ自然堆積土と考えられる。

形状は東側半分が搅乱などによって壊されているため不明確な点も多いが比較的残りの良い西側の周壁のプランから円形から稍円形と考えている。遺構の規模は、南北2.5m、壁高は遺存状態の良い北壁で22cmである。壁の傾斜は床面から比較的急角度に立ち上る。床面はL IVを掘削して構築していて、踏み締まりは弱い。

遺構内施設は石圓炉1基、柱穴6個を確認した。石圓炉は床面中央に位置する。平面形は円形で東西53cm、南北54cmを測る。炉石は5~18cm大の角礫を8個配している。炉石の東側の一部は抜き取られていて、そのすぐ東側の床面から3個の焼けた角礫が検出された。炉の堆積土は褐色土で炉石の掘形の堆積土である。使用面は良く焼けており、酸化面の厚さは3cmである。P 2・P 5は比較的大形の柱穴で直径50~60cm、深さ19~20cmを測る。擂鉢状に浅く掘り込まれていて柱穴以外の用途も考えられる。P 1・3・4・6は直径16~18cm、深さ20~24cmの小形の柱穴で構成されている。

(中野)

遺物(図74)

遺物は繩文土器約200点と石器1点が出土している。1・2は斜行縄文が施され、2の内面には

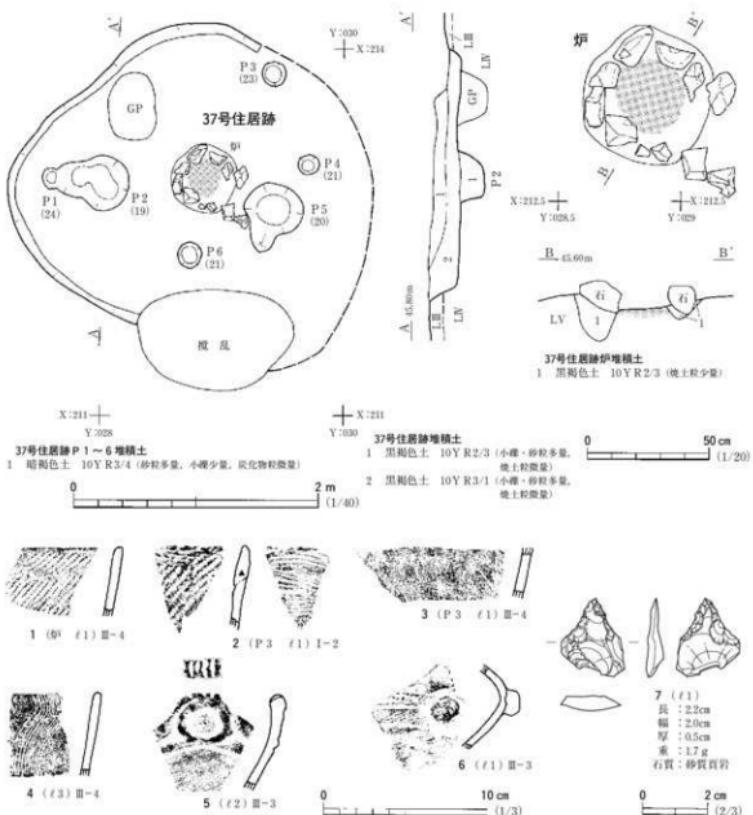


図74 37号住居跡と出土遺物

横位の条痕と胎土に纖維混和痕が認められる。3は無文土器、4は無文地上に口縁端部から条線を蛇行・垂下させている。5は縫部に刻みを加えた山形状の口縁部にリング状の低い粘土縁を貼り付け、それを挟み込むように三叉状の弦線文を施している。6は壺または注口土器片で、胴最張部に二条の縦文を施した平行弦線区画帯を巡らせ、ボタン状の比較的大きなコブを貼り付けている。7は石錐の未製品で、尖頭部のみが簡単な両面加工で作り出されている。

(山岸)

まとめ

本遺構は南北2.5mの小形の住居跡である。住居の規模に反して石圓炉がしっかり作られている点も特徴的である。遺構の所属時期は出土した遺物などから縄文時代後期末葉頃と考えている。

(中野)

第3節 掘立柱建物跡

今回の調査で検出した掘立柱建物跡は26棟である。構築時期については、いずれも縄文時代後期後葉～晩期中葉の間と考えられるが、明確に時期決定できる建物跡は少ない。また、平面・規模等に企画性はほとんど認められず、直接または平面上で重複関係にある建物跡は比較的多い。分布状況では、調査区中央部の南西側、標高45.5mの等高線に沿って南北に集中し、西側に開く半円形に分布する傾向にある。以下、遺構番号順に記述するが、S B17については欠番とした。また、出土遺物の内、柱穴堆積土から検出された遺構に直接伴わない獸骨片については、「本章 第7節」で詳しく述べる。

1号建物跡 S B1

遺構(図75・76、写真30・31)

調査区中央部の南西側、B 7-6・7・10・11グリッドに位置する。S B12～16・18と共にL III中で検出し、精査・記録はL IV上面で行った。S B12・14、S K19と重複し、本遺構が最も新しい。

本遺構は、P 1～4の柱穴で構成される東西・南北各1間の建物跡と考えた。平面はややゆがんだ長方形を呈し、南北方向に長い。東側のP 1～3を結んだ軸線方向はN22°Wである。全体の規模は、北側のP 4～3で3.4m、東側のP 3～1で4.5m、南側のP 1～2で3.4m、西側のP 2～4で4.6mを測る。

柱穴掘形の平面は、いずれも円形を基調とする。底面はほぼ平坦で、断面は比較的整った筒状を呈する。規模は径70～90cm、深さ102～130cmといずれも大型ではほぼ一定している。掘形内堆積土は4層に分けられ、いずれもℓ 1は柱痕、ℓ 2～4は埋土と考えられる。柱痕はいずれの柱穴にも認められ、掘形のほぼ中央付近の底面にまで達している。底面での平面はいずれも円形で、径30～35cmである。柱痕の芯間の距離は北側のP 4～3で3.4m、東側のP 3～1で4.5m、南側のP 1～2で3.4m、西側のP 2～4で4.6mと東西・南北がほぼ等しい。埋土は、いずれも基底層の黄褐色土と砂砾を多量に含み堅く締まっている。

遺物(図76)

遺物は縄文土器片181点、石器1点と剥片4点が各柱穴の掘形埋土から主に出土している。縄文土器は器面の荒れた細片が多く、図示できるものは少ない。1～6はP 1出土の土器片で、1は厚みをもつ口縁端部に沿った沈線間に縄文を充填している。2は口縁部に沿って巡る条線文から更に、条線を蛇行して垂下させている。3は平行沈線による区画帶内に条線状の連続刺突文を充填している。4の口縁部付近には平行沈線と羊歯状文が、胴部には非結束の羽状縄文が施されている。5は沈線区画による曲線的な图形内に縄文を充填している。7・8はP 2出土の土器片で、いずれにも斜行縄文と結節縄の回転文が施されている。9～11はP 4出土の土器片で、いずれも平行沈線

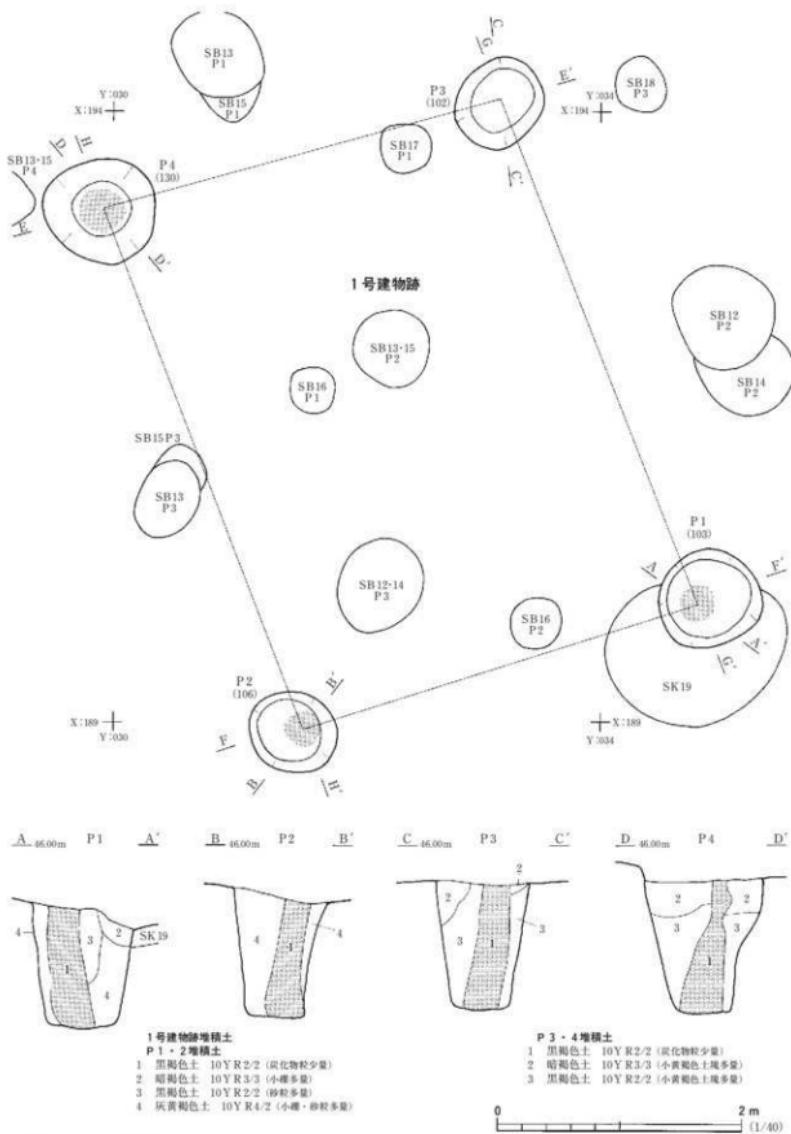


図75 1号建物跡(1)

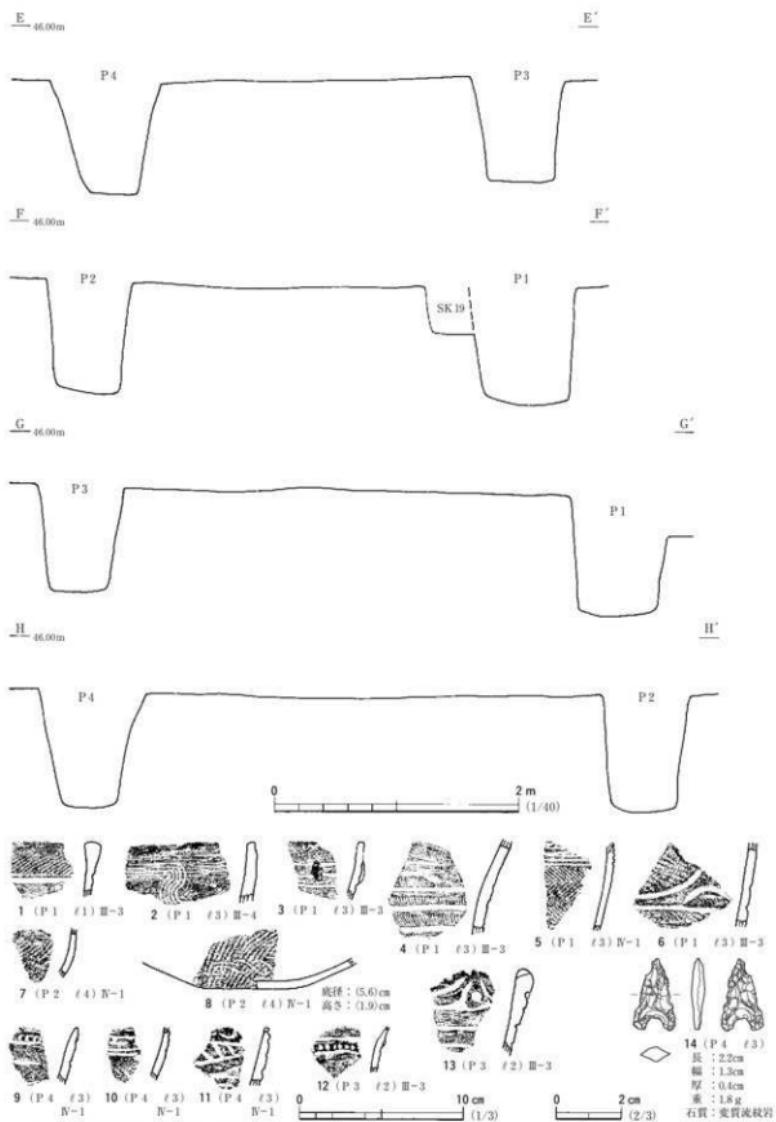


図76 1号建物跡(2)と出土遺物

間に刻みを加え羊歯状文を表出している。12・13はP 3出土の土器片で、12は頸部を巡る細い隆帯上に刻みを施している。13の口縁部には円孔を挟み込むように三叉状の沈線が描かれている。

14はP 4出土の二等辺三角形を呈する凹基の石鏡で、基部が太く比較的抉りが強い。剥離調整は難で、全体の形状は整っていない。

ま と め

本遺構は東西・南北各1間の掘立柱建物跡で、平面は南北に長い長方形を呈する。柱痕から径35cm前後の丸柱を使用した東西3.4m・南北4.5mの建物跡が想定される。本調査区から検出された建物跡では最大の規模を持ち、大型の建物跡の中で最も南に所在する。構築時期については、出土遺物の特徴から縄文時代晚期前葉と考えている。また、重複関係から周辺に所在する建物跡の中では最も新しい。

(山 岸)

2号建物跡 S B 2

遺 構(図77・78、写真32)

本遺構は調査区中央部の南側のC 6-13~15、C 7-1~3グリッドに位置する。周囲の地形は北側から南側への極めて緩い斜面上に位置する。本遺構の検出面はLVである。S I 11の北側壁面を壊している大形な柱穴を確認したため、周囲を精査したところ複数の柱穴を確認した。当初は4本柱の掘立柱建物跡を想定していたが、調査過程において主柱穴4本に対して2本の柱が付随する2棟の建物跡が東西に位置をずらしながら並列して建てられていることが判明した。そこで東側に位置しているものを本遺構とし、西側のものを5号建物跡とした。本遺構はSK 22と重複し、切り合い関係から本遺構が新しい。SB 5との新旧関係は不明である。

本遺構は4個の柱穴で構成される1×1間の建物跡である。遺構の主軸方位はP 1~4間を基準とする場合N75°Eである。北隅で検出された柱穴から時計回りにP 1~4とした。各柱穴の芯芯間の距離はP 1~2は3.4m、P 3~4は3.36m、P 1~4は3.58m、P 2~3は3.34mを測る。平面形は東西軸の長方形である。建物の主軸上には東西にそれぞれ本遺構に付属する柱穴が存在する。P 1~2間の柱穴をP 5、P 3~4間の柱穴をP 6とした。P 5~6間との間は4.92mを測る。

P 1~6の平面形は円形から梢円形を呈する。柱穴の規模はP 1~4とP 5~6との規模に大きな差が見られず、直径40~49cm、検出面からの深さは54~68cmを測る。柱穴の底面標高は44.7m前後に深さを掘り揃えている。P 1~6からは柱痕が検出された。堆積土の状況から柱を建てて掘形の廃土でしっかりと固定している。柱痕の太さは14~26cmを測り、ほぼ垂直に柱が建てられたものと考えられる。P 3は西壁側の状況や堆積土から柱を引き抜いて再度建て替えを行っているものと考えられる。P 2~4~5は褐色および黒褐色土の単層で堆積過程は不明である。

遺 物(図78)

遺物はP 4~5のℓ 1から縄文土器片30点が出土している。1~2は並行沈線による区画帶内に小さな瘤が貼り付けられている。いずれも無文部は磨かれている。3は斜行縄文と綾格文が施され

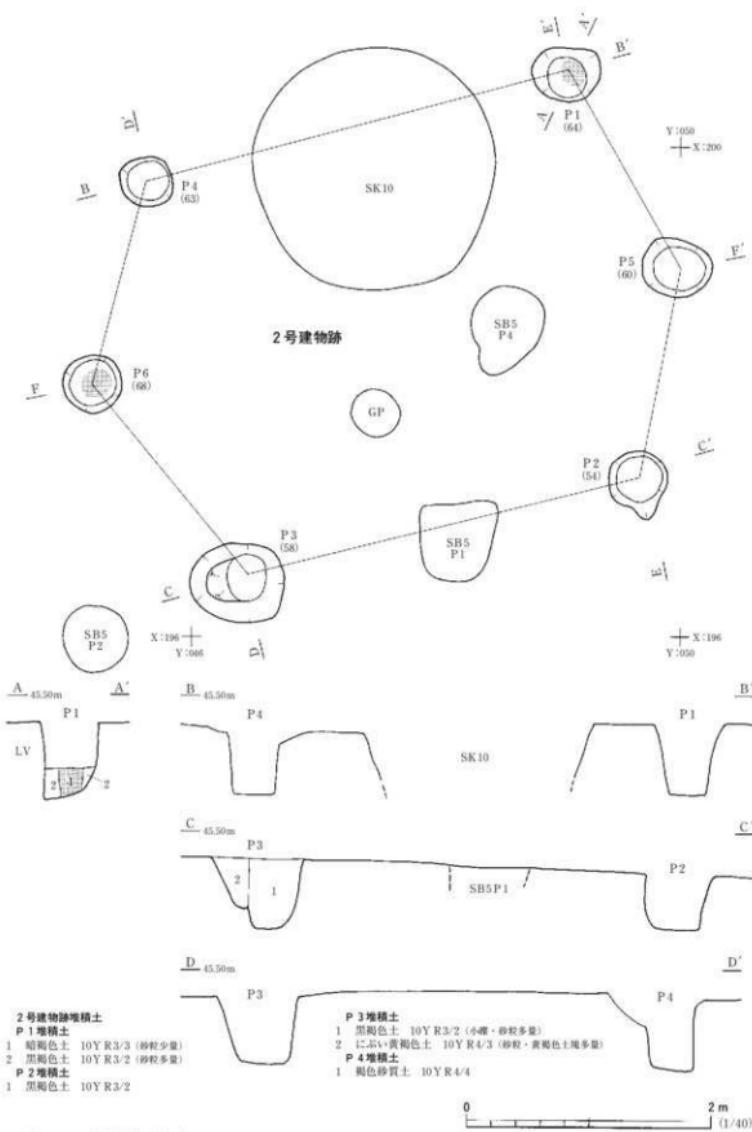


図77 2号建物跡(1)

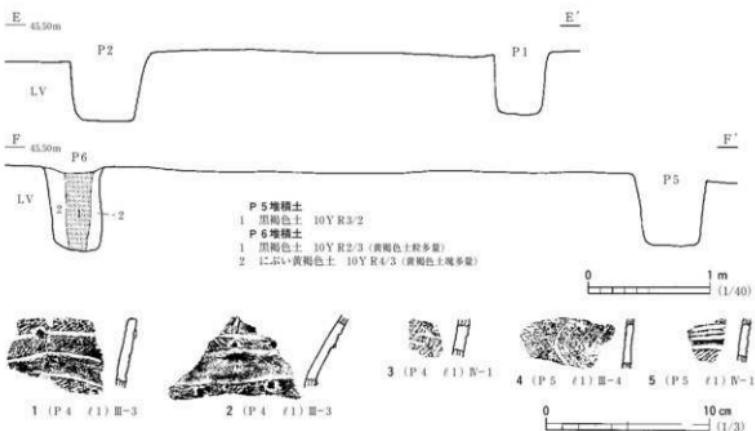


図78 2号建物跡(2)と出土遺物

ている。4は櫛歯状工具を用いた波状文を描いている。5は二段の並行沈線文と縄文を施している。

まとめ

本遺構は 1×1 間の建物跡である。P5・6が付属するため平面形が六角形を呈する。P1・6からは14~26cmの柱痕を確認した。東西2本の柱は棟持ち柱的な用途をなしていたことが想定できる。またSB5と主軸方位をほぼ同じくして建て替えを行っていることからお互いの位置を意識して作り直しているものと思われる。つまり2棟の建物は極めて近い時間内に建て替えられたものと判断している。遺構の所属時期は出土した遺物などから縄文時代後期末~晩期初頭頃と考えている。

(中野)

3号建物跡 SB3

遺構(図79, 写真33)

調査区中央部の南西側、B7~11・12グリッドに位置する。SI10の精査中、南西側でP1~8を検出し、柱穴の規模・配置から建物跡と判断した。SI10と重複し、本遺構が新しい。

本遺構は、P1~4の柱穴で構成される東西・南北各1間の建物跡で、平面はややゆがんだ方形を呈する。東側のP1~2を結んだ軸線方向はN10°Wである。全体の規模は、北側のP4~1で2.5m、東側のP1~2で2.4m、南側のP2~3で2.5m、西側のP3~4で2.6mを測る。

柱穴掘形の平面は、いずれも円形を基調とするが整っていない。いずれも径が40cm前後、深さは45~67cmの規模で、斜面下位にあたるP2・3がやや深い傾向にある。掘形内堆積土は、いずれも黒褐色土の1層で、柱痕は確認できなかった。

遺 物(図79)

遺物はP 1のℓ 1から8点の縄文土器片、P 4のℓ 1から9点の縄文土器片と1点の剥片が出土している。1・2・5は蛇行して垂下する条線を施した深鉢形土器の胴部片、3・4は平行沈線で区画した縄文帯に「ハ」の字条の刺突を加え、刺突間にコブ状の高まりを残している。

ま と め

本遺構は一辺が2.5m程の方形の建物跡と考えられる。本調査区から検出された建物跡では最も南端に位置する。構築時期については、出土遺物の特徴から縄文時代後期後葉以降と考えられ、重複するS I 10より新しい。(山 岸)

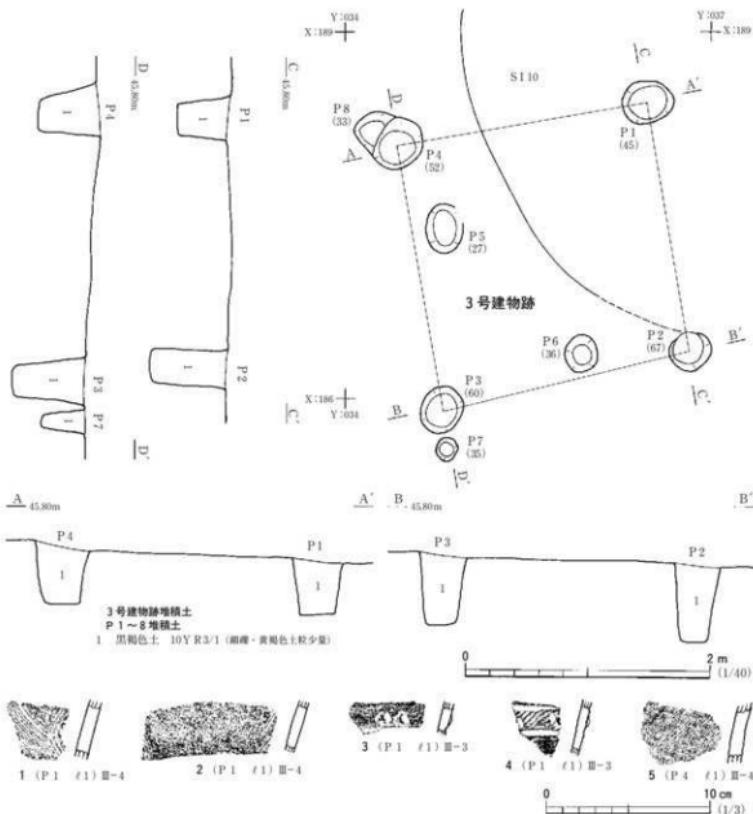


図79 3号建物跡と出土遺物

4号建物跡 SB4

遺構(図80・81、写真34)

本遺構は調査区南側のB 6-12・16、C 6-9・13グリッドに位置する。周囲の地形は平坦面上に位置する。本遺構の検出面はLIVである。SI 26精査時に住居の柱穴を壊している大形の柱穴を4本確認したことから建物跡とした。周囲を精査したところさらに北側に位置する柱穴1基とSI 26の柱穴と重複する柱穴を1基確認したため、SB2と同様な建物跡であることが判明した。SI 23・25・26と重複し、遺構の切り合い関係から本遺構がSI 23より古くSI 25・26より新しい。

遺構の主軸方位はP 1~4間を基準とするならN80°Eである。本遺構は4個の大形柱穴で構成される。北東隅で検出された柱穴から時計回りにP 1~4とした。各柱穴の芯芯間の距離はP 1~2が2.94m、P 3~4が2.90m、P 1~4が3.48m、P 2~3は3.35m。平面形は東西軸の長方形である。遺構の南北の中心線上には南北それぞれに柱穴が存在する。P 2・3間の柱穴をP 5、P 1・4間の柱穴をP 6とした。P 5~6の芯々間の距離は5.60mを測る。

柱穴の平面形態は円形ないし梢円形を呈する。柱穴の規模はP 1~4は直径49~76cm。検出面からの深さは65~83cm、柱穴底面の標高は44.5~44.7mを測る。柱痕はP 1で確認できた。柱痕の太さは24cmで、底面からほぼ垂直に柱が造っていたと考えられる。P 5・6の直径は40~52cm、検出面からの深さは40~45cmを測る。柱穴底面の標高は44.8m前後を測りP 1~4に比べてやや浅く掘り込まれている。

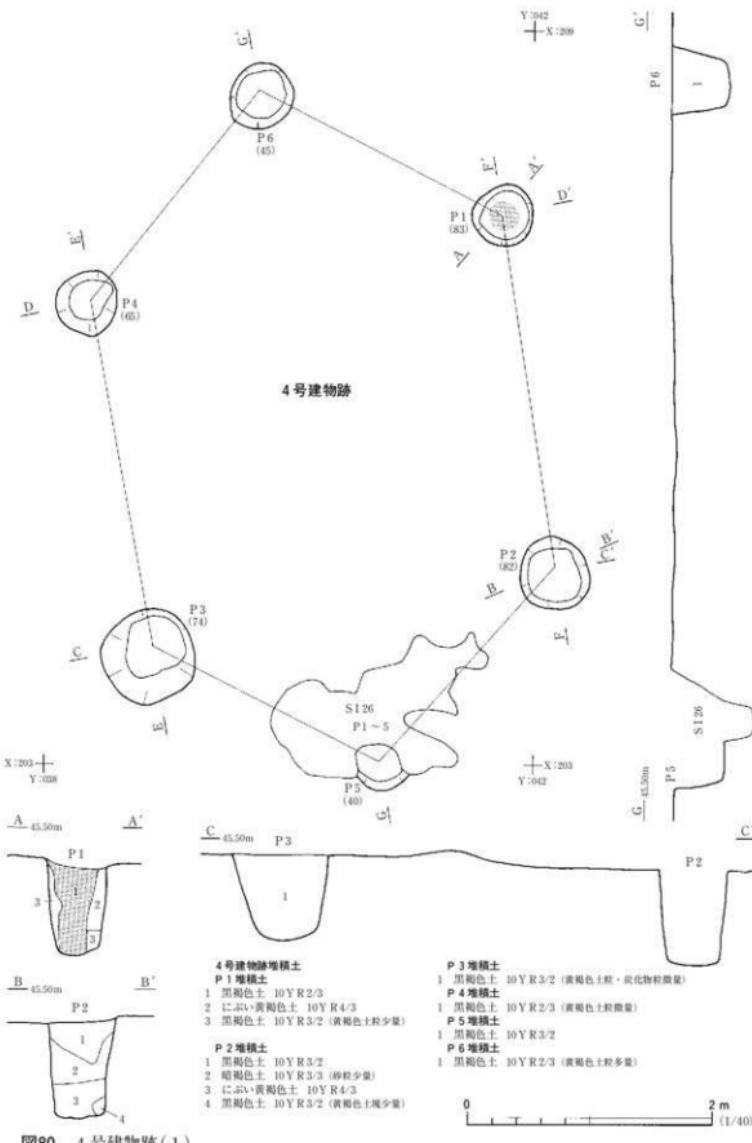
遺物(図81)

遺物は繩文土器片34点、洞片2点が出土している。1は並行沈線による区画帯内に縄文を施している。2は並行沈線による無文の区画帯内に小さな瘤を貼り付けている。3は口唇部には刻みを加えた山形状の小突起が付けられ、沈線で区画された半円状の無文部に小さな瘤が貼り付けられている。4は丁寧なナデ調整が施され、文様は付加されない。胎土には1mm前後の細かい砂粒が含まれている。

まとめ

本遺構は1×1間の南北主軸の建物跡である。P 4・5が付属し、平面形はSB2と同様な六角形状をなすものと考えられる。P 1からは24cmの柱痕を確認した。P 1~4に比べP 5・6の深さが浅く、柱の機能上の理由で柱穴の掘削深度が異なるものと考えている。複数の遺構と重複関係にありSI 25・26より新しく、SI 23よりは古いと考えている。現段階においては具体的な機能や構造については不明な点が多く断言できない。遺構の所属時期は重複関係や出土した遺物などから繩文時代後期末頃に所属するものと考えている。

(中野)



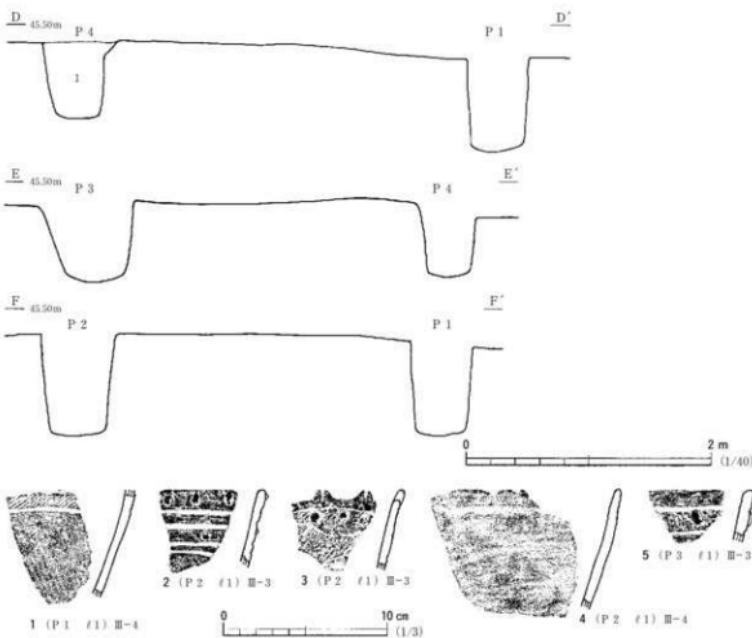


図81 4号建物跡(2)と出土遺物

5号建物跡 S B 5

遺構(图82, 写真35)

本遺構は調査区中央部南側のC 6-13・14, C 7-1・2グリッドに位置する。周囲の地形は南北への極めて緩い斜面上に位置する。本遺構の検出面はLVである。S I 11, SK 10と重複し本遺構が新しい。遺構の主軸方位はP 1~2間を基準とするならN74°Eである。本遺構の大形柱穴の構成は3個で構成される。SK 10の位置に北東隅の柱穴が存在したものと考えられるが、SK 10の掘削時に気づかずかれていたものと考えられる。

南東隅で検出された柱穴から時計回りにP 1~3とした。各柱穴間の距離はP 1~2は3.00m, P 2~3は3.5mを測る。平面形は南北軸の長方形を呈する。また、このほかに東西主軸の中心ライン上には東西それぞれ1基の付属する柱穴を確認した。P 1の北東に位置する柱穴をP 4, P 2・3間の柱穴をP 5とした。P 4~5間の距離は4.30mを測る。

柱穴の平面形態は円形ないし梢円形と考えられる。柱穴の規模は直径50~64cm。検出面からの深さは56~76cmを測る。柱穴底面の標高44.5~44.7mを測る。柱痕はP 2とP 5で確認できた。柱痕

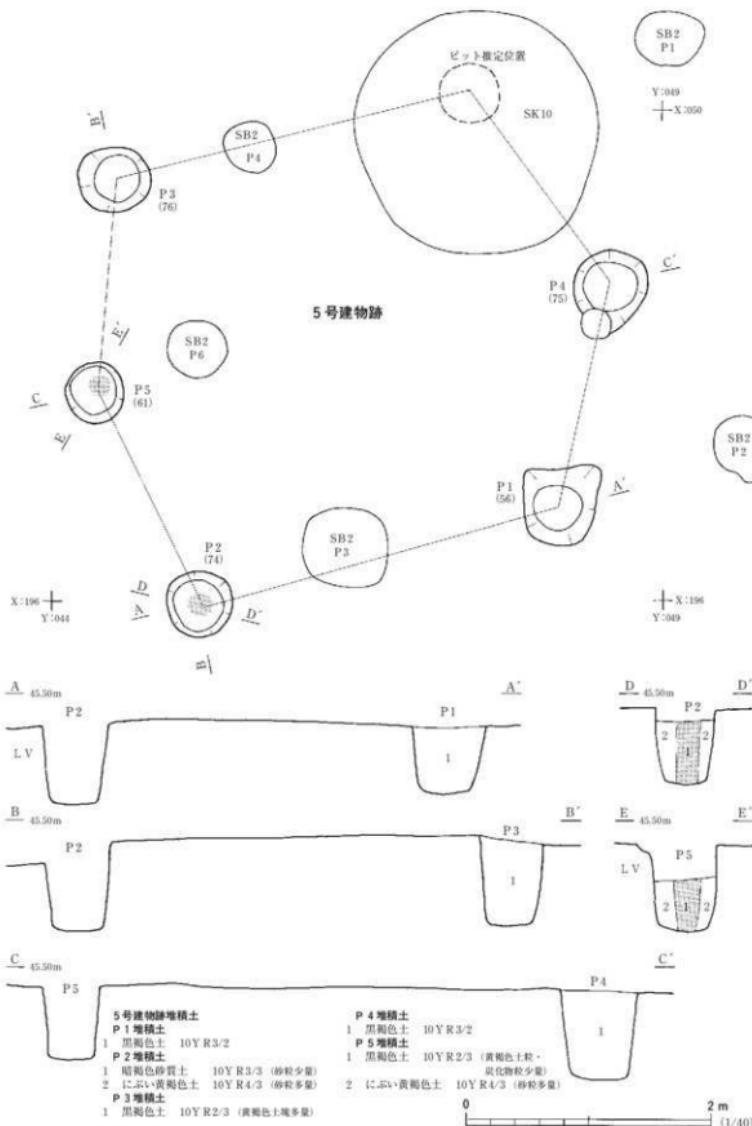


図82 5号建物跡

の太さは14~16cmで、底面からほぼ垂直に柱が建っていたものと考えられる。

遺 物

遺物は縄文土器片7点がP4内から出土したが細片のため図示できなかった。また、所属時期を特定できる土器片もない。

ま と め

本遺構は1×1間の東西主軸の建物跡である。P4・5が付属し平面形は六角形状をなすものと考えられる。P2・5からは14~16cmの柱痕を確認した。SB2・4と同様な構造を呈するものの、現段階において機能を特定することはできていない。遺構の所属時期は遺物が出土していないため不明確な点が多いがSI11との重複やSB2との関係から縄文時代後期末~晩期初頭頃に所属するものと考えている。

(中野)

6号建物跡 SB6

遺 構(図83・84、写真36・37)

調査区中央部の南西側、B6-15・16、B7-3・4グリッドに位置する。重複するSB7と共にLⅢ中で検出し、精査・記録はLⅣ上面で行った。SB7・18、SI28、SK70と重複し、本遺構が最も新しい。

本遺構は、P1~4の柱穴で構成される東西・南北各1間の建物跡と考えた。平面は整った長方形を呈し、南北方向に長い。東側のP1~2を結んだ軸線方向はN34°Wである。全体の規模は、北側のP4~1で2.4m、東側のP1~2で3.4m、南側のP2~3で3.4m、西側のP3~4で3.4mを測る。

柱穴掘形の平面は、いずれも円形を基調とする。底面はいずれもほぼ平坦で、断面は筒状を呈するが左右非対称で整っていない。規模は径60~80cm、深さは60~76cmとほぼ一定している。掘形内堆積土はP1~3は3層に分けられ、ℓ1が柱痕、ℓ2・3が埋土と考えている。柱痕はいずれも不整であるが、掘形のほぼ中央付近に堆積し、底面にまで達している。また、P4の堆積土は不明であるが、底面の中央付近に僅かに窪んだ堅い面が認められ、柱痕と考えた。各柱痕の底面での平面は円形で、径14cmのP4を除き径が26cm前後とほぼ等しい。また、柱痕の芯間距離は北側のP4~1で2.4m、東側のP1~2で3.4m、南側のP2~3で2.4m、西側のP3~4で3.4mと東西・南北が等しい。

遺 物(図85)

遺物は縄文土器片約230点、剥片類7点と石器1点が、P1~3のℓ1を主体に出土している。SB7について出土量は多いが、Ⅲ群4類に比定される器面の荒れた細片が多数を占めている。1~11はP1出土の土器片である。1は沈線区画の無文帶に小さなコブが、2には短沈線を施した大きなコブ状の突起が付けられている。3は沈線を境に口縁部を無文帶とし、胴部に斜行縄文を施している。4はコブを付加した胴部のくびれ部に、連続刺突を加えた平行沈線区画帯を2段に巡ら

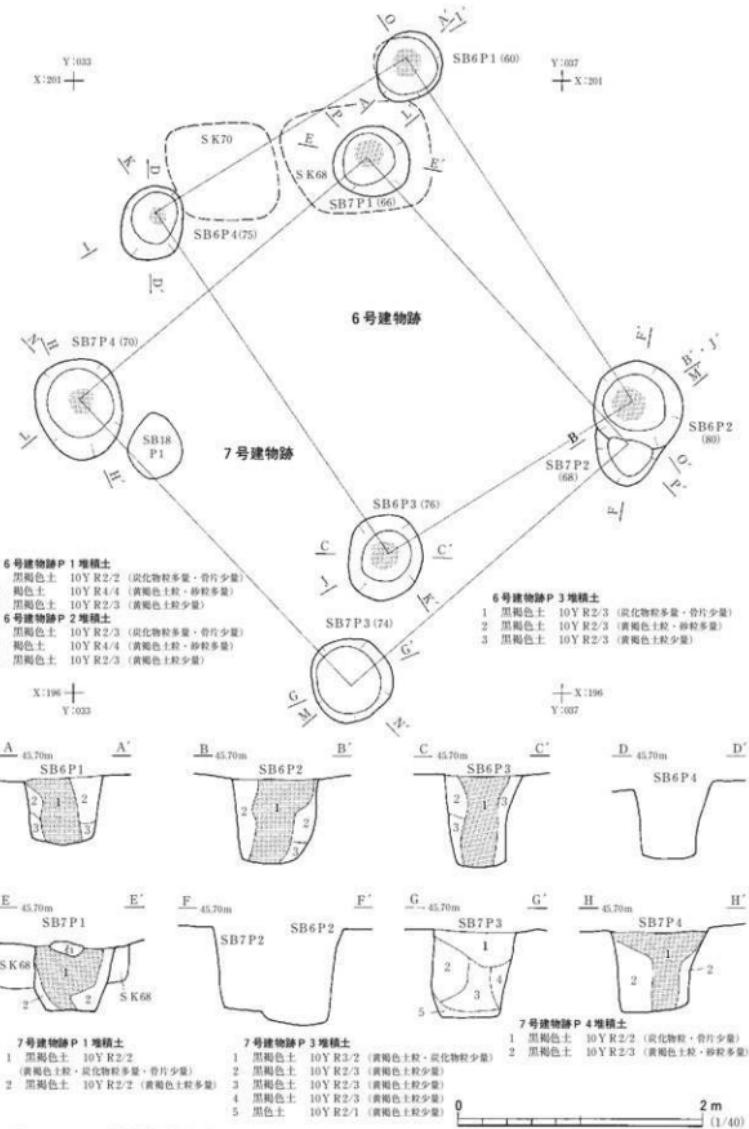


図83 6・7号建物跡(1)

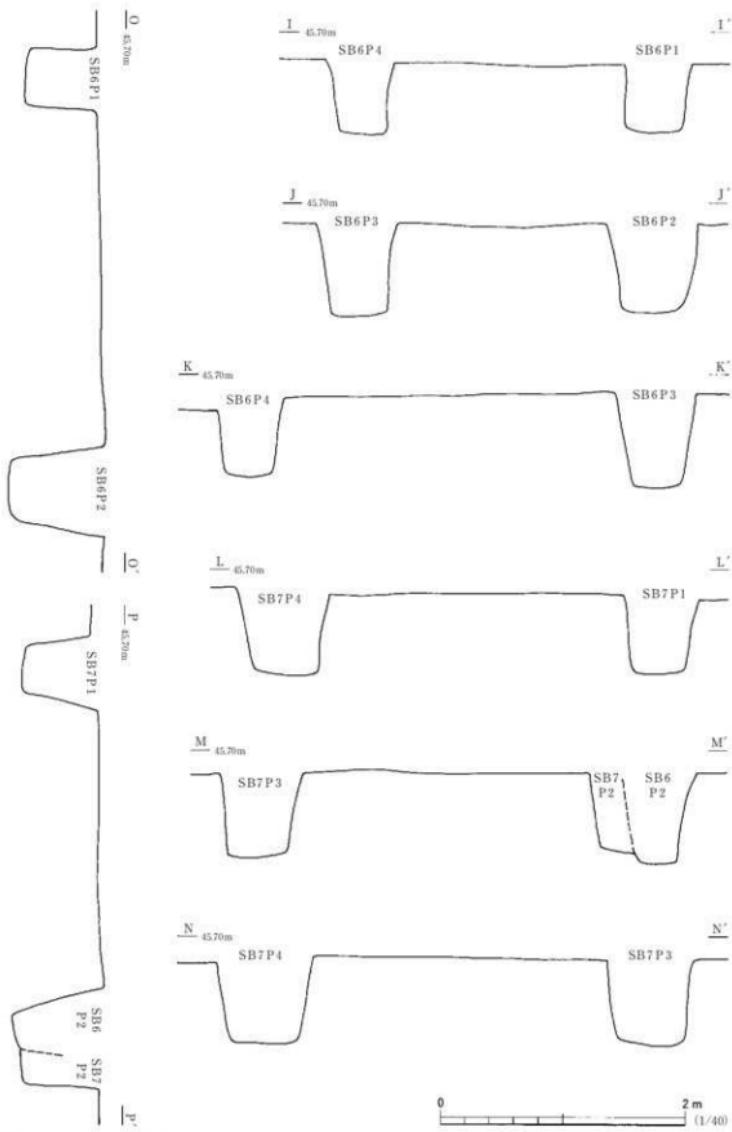


図84 6・7号建物跡(2)

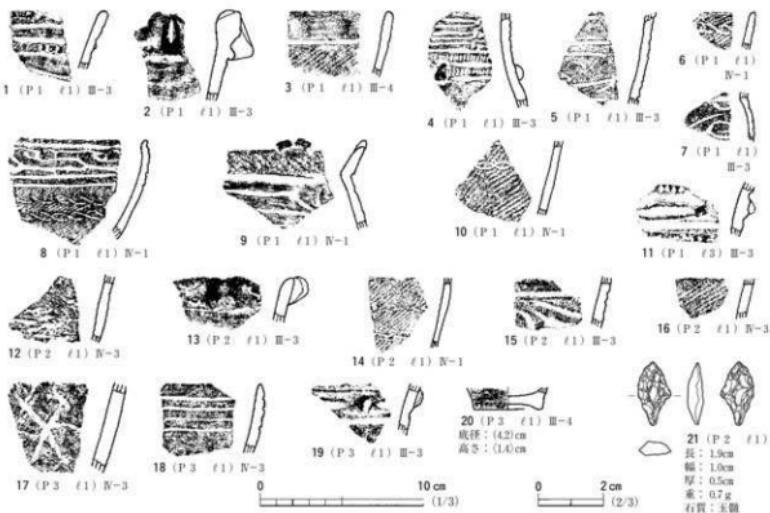


図85 6号建跡出土遺物

せ、口縁部方向には多段の平行沈線とそれを縦位に区画する一对の刺突列を施している。5は沈線区画による帯状の入組文、6・10は結節繩の横位回転文が施されている。7は無文地上に半円や渦巻き状の曲線图形を描いている。8・9は口縁部に沿った平行沈線の区画帶内に入組状や三叉状の沈線文を描いている。10は平行沈線で区画されたコブを配した眼鏡状の文様の上下に連続刺突を施している。

12~16・21はP2、17~20はP3から出土している。12・17は網目状の撚糸文が施され、焼成は比較的堅緻で胎土に纖維痕和痕が認められない。13の口縁部と19の胴部には一对のコブが付けられている。14・16は斜行繩文が施され、14には結節繩の回転文が付加されている。15は帯状の入組文を施したもの、18は多条の平行沈線を口縁部に沿って巡らせている。20は無文の底部で、中央をくぼませ台状に作り出している。21は有茎の石錐である。基部側縁の抉りは片側のみで、左右非対称の形状となっている。

ま と め

本遺構は東西・南北各1間の大型の掘立柱建物跡で、平面は南北に長い整った長方形を呈する。柱痕から径26cm程度の丸柱を使用した東西2.4m、南北3.4mの建物跡が想定される。同様な建物跡であるSB7・18と重複し、本建物跡が最も新しい。構築時期については、重複関係と出土遺物の特徴から繩文時代晚期前葉頭と考えている。また、南側に所在するSB1よりやや小規模であるが、平面形・軸線方向等がほぼ等しく、同一時期の建物跡の可能性が考えられる。

(山岸)

7号建物跡 SB7

遺構(図83・84、写真38・39)

調査区中央部の南西側、B6-16、B7-3・4グリッドに位置する。重複するSB6と共にLⅢ中で検出し、精査・記録はLⅣ上面で行った。SB6、SI28、SK51・68と重複し、SB6より古く、その他遺構より新しい。

本遺構は、P1~4の柱穴で構成される東西・南北各1間の建物跡と考えた。平面は整った方形を呈し、西側のP4~3を結んだ軸線はN43°Wである。全体の規模は、北側のP4~1が約3.1m、東側のP1~2が約3.2m、南側のP2~3が遺存値で3.0m、西側のP3~4が約3.2mである。

柱穴掘形の平面は、いずれも平面を基調とする。いずれも底面はほぼ平坦で、断面は筒状を呈するがやや整っていない。規模は径60~70cm、深さ66~74cmと重複するSB6とほとんど変わらない。掘形内堆積土は、P1・4が2層に分けられ、ℓ1が柱痕、ℓ2については埋土と考えている。柱痕の断面は不整であるが、掘形の中央底面にまで達している。底面での平面は円形で、径が25cm前後である。はまた、P3は5層に分けられ、ℓ3が柱痕に対応すると考えられるが堆積土中位にのみ認められ判然としない。P2については不明で底面にも痕跡は認められなかった。

柱痕の芯間と掘形底面の中心での距離は、北側のP4~1が約3.1m、東側のP1~2が約3.2m、南側のP2~3が約3m、西側のP3~4が約3.2mとほぼ等しい。

遺物(図86)

遺物は縄文土器片約450点と土製品1点、剥片類9点と石器・石製品5点が出土している。建物跡では最も出土量が多く、中でもP1・4のℓ1からは100点を越す遺物が出土している。

1~18はP1出土の土器片である。1~4は帯状の沈線区画内に横位の連続刺突文を、5・6・9~12は弧線や入り組み状の沈線区画内に充填縄文を施している。7・8・17は無文地に曲線图形や三叉文を、26は条線文を施している。14・15は斜行縄文と結節縄の回転文が施され、16の無文地には粘土積み上げ痕が認められる。17は丸底に小型の台が付いた底部片である。

19~21はP3、22~28はP4から出土している。19・21・22は帯状の区画文、24は曲線图形内に充填縄文を施している。23は平行沈線で縄文部と無文部を区画している。20・25は平行沈線の区画内に、20は円形、25は刻み状の刺突文を施している。26は口縁部を巡る平行沈線から蛇行する条線文を垂下させている。27・28は斜行縄文と横位の結節縄の回転文が施されている。

29~33は石器・石製品である。29・30は無茎石鏽で、29は簡単な周縁加工によって整形された素材の剥離面を残す。30は尖端を欠損するが、剥離調整は全面に加えられ、二等辺三角形の整った形状となっている。31は有茎石鏽で、茎部の抉りはやや弱く緩やかな弧を描く。全体的に整った三角形で、茎部方向に厚みを残す。32は棒状の石錐と考えられるが使用痕は認められない。全面に剥離調整が施され、両端ともに鋭い作り出しがなっている。33は石棒の欠損品で、遺存する器面は平滑に磨かれている。

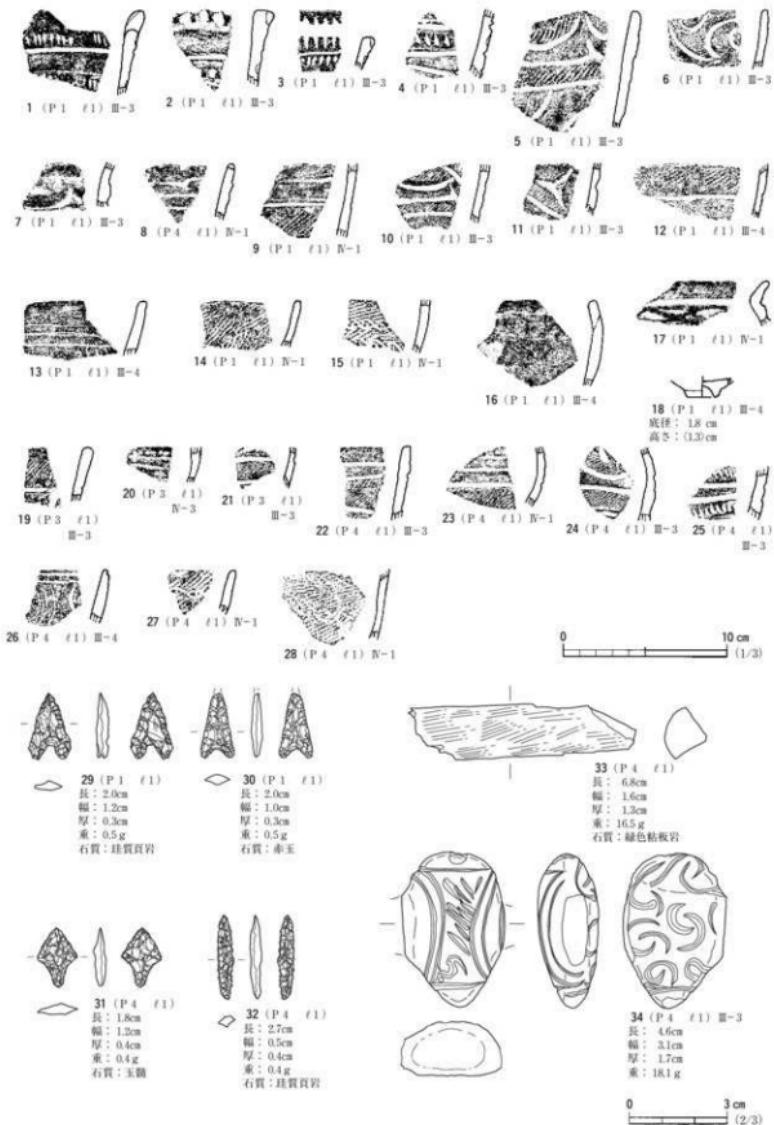


図86 7号建物跡出土遺物

34は中空の土製品で、形状は「湯たんぽ」に近い。両側縁にヒレ状の突起の剥落痕が認められ、上端の中央には円孔が開けられている。表面にはヒレ状の剥落に沿った長方形状の沈線区画内に、斜位の短沈線と「S」状の沈線を施している。裏面には入り組み状の弧線が、ほぼ全面に描かれている。

ま と め

本遺構は東西・南北各1間の大型の掘立柱建物跡で、平面は整った方形を呈する。柱穴掘形と柱痕から一辺3m程の建物跡が想定される。構築時期については、出土遺物の特徴から縄文時代晚期前葉頃と考えている。また、重複関係から平面が長方形を基調とするSB6より本建物跡が古い。

(山 岸)

8号建物跡 SB8

遺 構(図87・88、写真40)

本遺構は調査区中央部西側のB6-7・10・11グリッドに位置する。周囲の地形は平坦である。本遺構の検出面はLIIIである。LIII面で遺構検出を行っている際に複数の大形の柱穴を確認し柱穴断面への断ち割りなどを行った結果、4基の建物跡が重複していることが判明した。最も南側に位置するSB11が古く、SB10→SB9→本遺構へと徐々に北側に位置をずらしながら建て替えを繰り返したものと考えられる。またSK54・58とも重複し切り合い関係から本遺構が最も新しい。

遺構の主軸方位はP1~4間を基準とするならN64°Wである。本遺構の大形柱穴の構成は4個である。東隅で検出された柱穴から時計回りにP1~4とした。各柱穴間の距離はP1~2が3.10m、P3~4が2.90m、P1~4が3.34m、P2~3が3.26mを測り、それらの柱穴を結ぶと平面形が東西軸の長方形となる。

柱穴の平面形は円形で、規模は直径46~80cm、深さは76~90cmを測る。柱穴底面の標高は、44.5~44.7m前後を測り、P3以外は概ね深さを掘り揃えている。P1・2・4からは柱痕が検出された。柱を建てて掘形の廃土を用いて柱を固定している。柱痕の太さは14~24cmを測り、底面からは垂直に柱が建っていたものと考えられる。

遺 物(図88)

遺物は縄文土器片35点、剥片類8点が出土している。1は口縁部片で沈線による三叉文が施されている。2は無文の深鉢形土器の底部である。3は櫛歯状工具を用いて、口縁部では横位に胴部では縱位方向に波状文を描いている。4は壺形土器で、膨らんだ胴部に並行沈線による区画帯を巡らせ等間隔で小さな瘤を貼り付けている。

ま と め

本遺構は1×1間の方形プランの掘立柱建物跡である。P1・2・4からは14~24cmの柱痕を確認した。SB8~11の重複関係を見ていくと南側の建物から北側の建物へと建て替えを繰り返しているものと判断される。遺構の機能などは不明だが断続的に建物が建てられていたと考えられる。

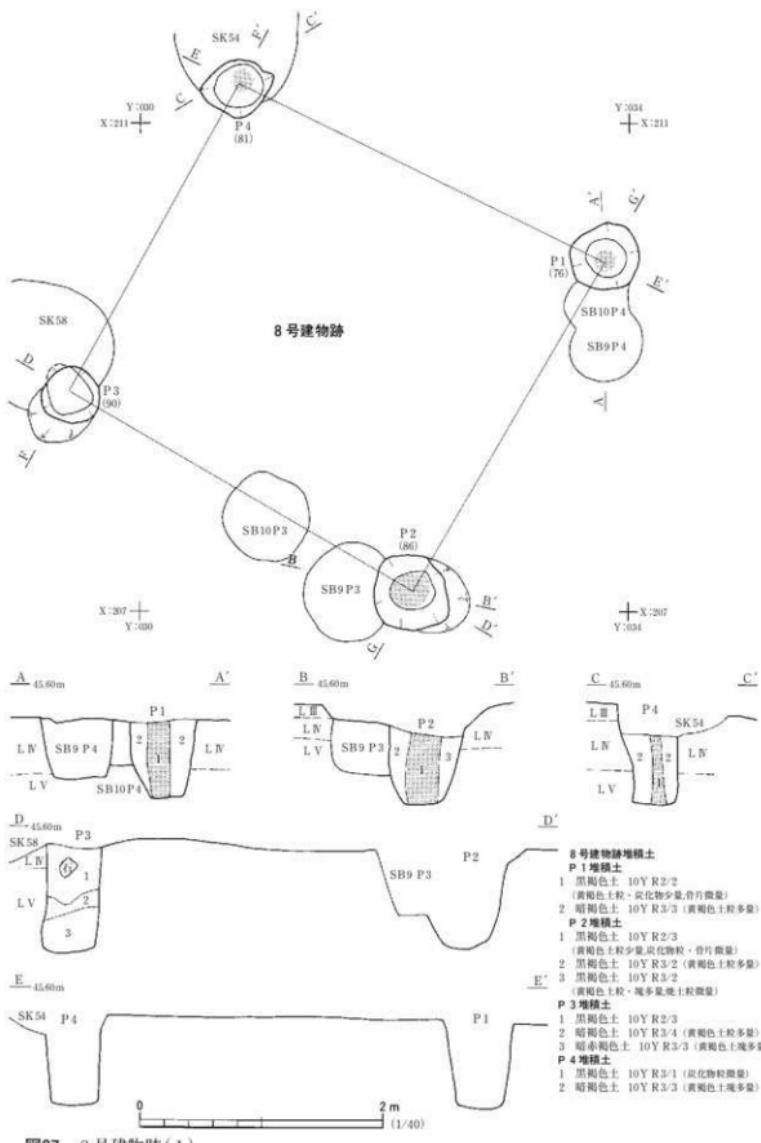


図87 8号建物跡(1)

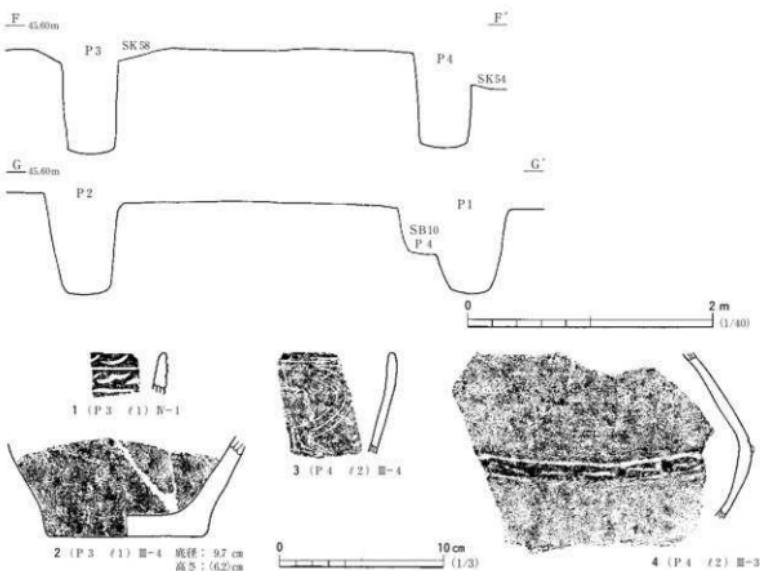


図88 8号建物跡(2)と出土遺物

遺構の所属時期はSB9・10, SK54・58より新しい点や出土した遺物から縄文時代晩期初頭～前葉頃に所属するものと考えている。

(中野)

9号建物跡 SB9

遺構(図89, 写真41)

本遺構は調査区中央部西側のB6-11・12グリッドに位置する。周囲の地形は平坦である。本遺構の検出面はLⅢである。遺存状態は比較的良好である。SB8・10, SK69と重複し、遺構の切り合ひ関係からSB8より古く、SB10, SK69より本遺構が新しい。

遺構の主軸方位はP1～4間を基準とするならN30°Wである。本遺構の大形柱穴の構成は4個である。東隅で検出された柱穴から時計回りにP1～4とした。各柱穴間の距離はP1～2が2.58m, P3～4が2.80m, P1～4が2.8m, P2～3は2.49mを測り、それらの柱穴を結ぶと南北軸の不正長方形となる。

柱穴の平面形は円形ないし楕円形で、規模は直径62～80cm、深さは52～62cmを測る。柱穴底面の標高は44.80m前後を測り深さを掘り揃えている。柱痕はP1・3・4で確認できた。柱痕の太さは20～30cmで、底面からほぼ垂直に柱が建っていたものと考えられる。

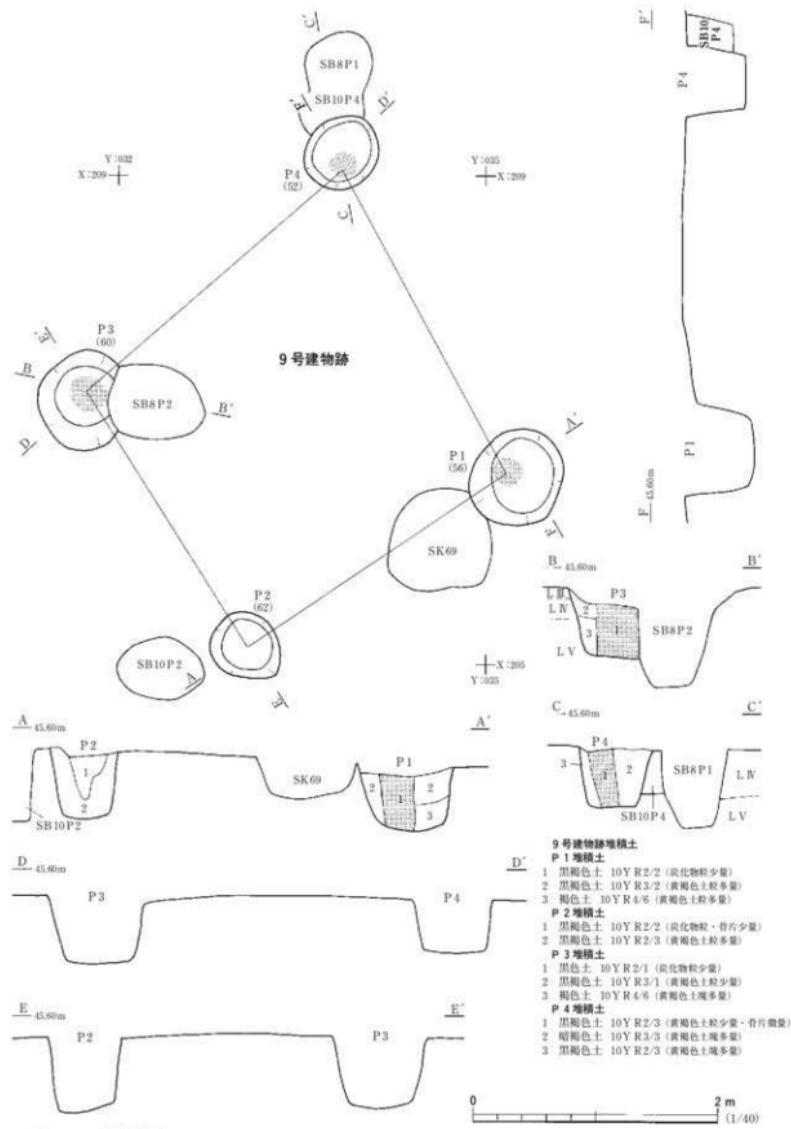


図89 9号建物跡

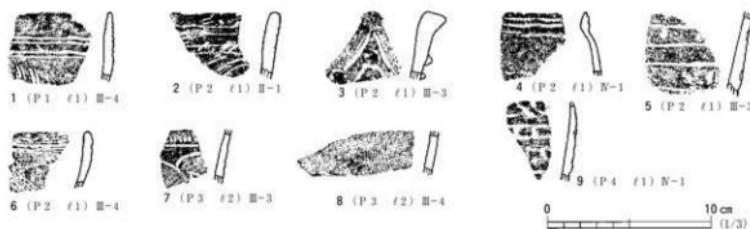


図90 9号建物跡出土遺物

遺 物(図90)

遺物は縄文土器片104点、剥片類4点出土している。1は櫛歯状工具による波線文、2は半裁竹管による並行沈線文が描かれている。3は山形状の口縁部に沿って沈線文が描かれ要所に瘤が付けられている。4は口縁部に並行沈線、胴部には斜行繩文と綾絡文を施す。5は無文の並行沈線間に刺突を施している。6・8は無文地に細かい櫛歯状工具を用い波線文を描いている。7は沈線区画の図形内に繩文を充填している。9は三叉文が施されている。

ま と め

本遺構は 1×1 間の不正長方形プランの掘立柱建物跡である。P 1・3・4からは直径16~30cmに及ぶ大形の柱痕を確認した。具体的な機能などは他の建物と同様に不明である。遺構の所属時期は重複する遺構や出土した遺物などから縄文時代晩期初頭~前葉頃に所属するものと考えている。

(中野)

10号建物跡 S B10

遺 構(図91、写真42)

本遺構は調査区中央部西側のB 6・11・12・15グリッドに位置する。周囲の地形は平坦である。本遺構の検出面はL IIIである。重複関係はS B 8・9・11、SK 69と重複し、遺構の切り合い関係からS B 8・9より古く、S B 11、SK 69より新しい。

遺構の主軸方位はP 1~4間を基準とするならN29°Wである。本遺構の大形柱穴の構成は4個である。南東隅で検出された柱穴から時計回りにP 1~4とした。各柱穴間の距離はP 1~2が3.35m、P 3~4が3.25m、P 1~4が3.38m、P 2~3は3.18mを測り、それらの柱穴を結ぶと東西軸の方形のプランとなる。

柱穴の平面形は円形ないし楕円形で、規模は直径56~78cm、深さは40~64cmを測る。柱穴底面の標高は44.80m前後を測り深さを掘り揃えている。柱痕はP 2・3で確認できた。柱痕の太さは20cmで底面からほぼ垂直に柱が建っていたものと考えられる。

遺 物(図91)

遺物は縄文土器片18点出土しているが、III・IV群土器のいずれかに比定される無文土器細片がほ

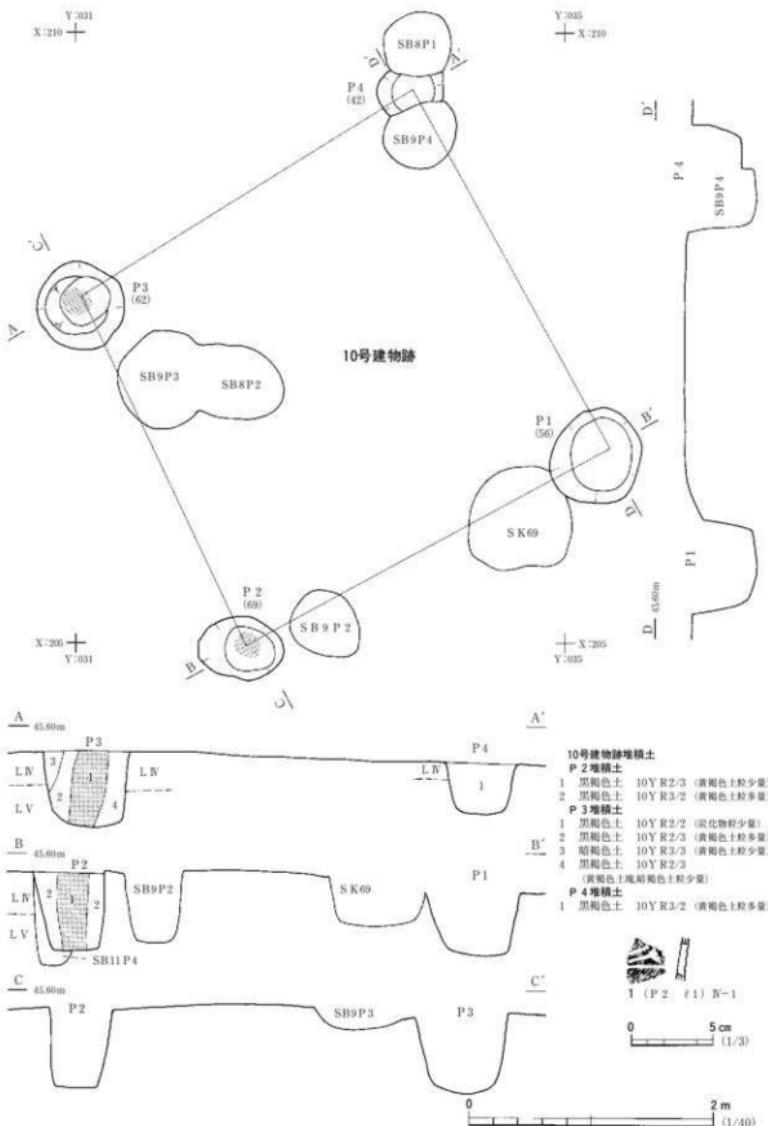


図91 10号建物跡と出土遺物

とんどである。1は沈線区画の無文部に三叉状の沈線文を施している。

まとめ

本遺構は1×1間の方形プランの掘立柱建物跡である。P2・3からは20cmの柱痕を確認した。遺構の所属時期は遺構の重複関係や出土した遺物が縄文時代後期末葉～晩期初頭頃に所属するものと考えている。
(中野)

11号建物跡 S B11

遺構(図92, 写真43)

本遺構は調査区中央部西側のB6-12・15・16グリッドに位置する。周囲の地形は平坦である。本遺構の検出面はLⅢである。重複関係はS I29, S B10, S M36と重複し本遺構が新しい。遺構の主軸方位はP3～4間を基準とするならN15°Wである。本遺構の柱穴構成は4個である。北東隅で検出された柱穴から時計回りにP1～4とした。各柱穴間の距離はP1～2が3.40m, P3～4が3.24m, P1～4が3.26m, P2～3は3.00mを測り、それらの柱穴を結ぶと南北軸の方形のプランとなる。

柱穴の平面形は円形ないし楕円形で、規模は直径46～50cm、深さは70～90cmを測る。柱穴底面の標高は44.80m前後を測り、底面の深さを概ね掘り揃えている。柱痕は確認できなかった。

遺物(図92)

遺物は縄文土器片10点、利刀2点出土している。1・2は沈線による横位の区画帶内に条線状の連続刺突文を施している。

まとめ

本遺構は1×1間の方形プランの掘立柱建物跡である。柱痕などから大形の建築物が建てられていた事は容易に想定できるものの、現段階においては具体的な機能や構造について不明としか言いようがない。所属時期はS M36を壞している点や出土した遺物から縄文時代後期末～晩期初頭頃と考えている。
(中野)

12号建物跡 S B12

遺構(図93・94, 写真44)

調査区中央部の南西側、B7-3・7グリッドに位置する。S B1・13・15等と共に検出し、柱穴の規模・配置から建物跡と判断した。西隅に相当する柱穴は、S B1のP4と重複し、遺存していない。また、南側のP2・3に重複が認められ、古い柱穴をS B14とした。

本遺構は東西・南北各1間の建物跡と考えた。平面は長方形を基調とし、僅かに南北方向が長い。東側のP1～2を結んだ軸線方向はN39°Wである。全体の規模は、東側のP1～2で4.6m、南側のP2～3で4.3mを測る。

柱穴掘形の平面は、いずれも円形を基調とするが整っていない。規模は径が60～85cmとばらつく

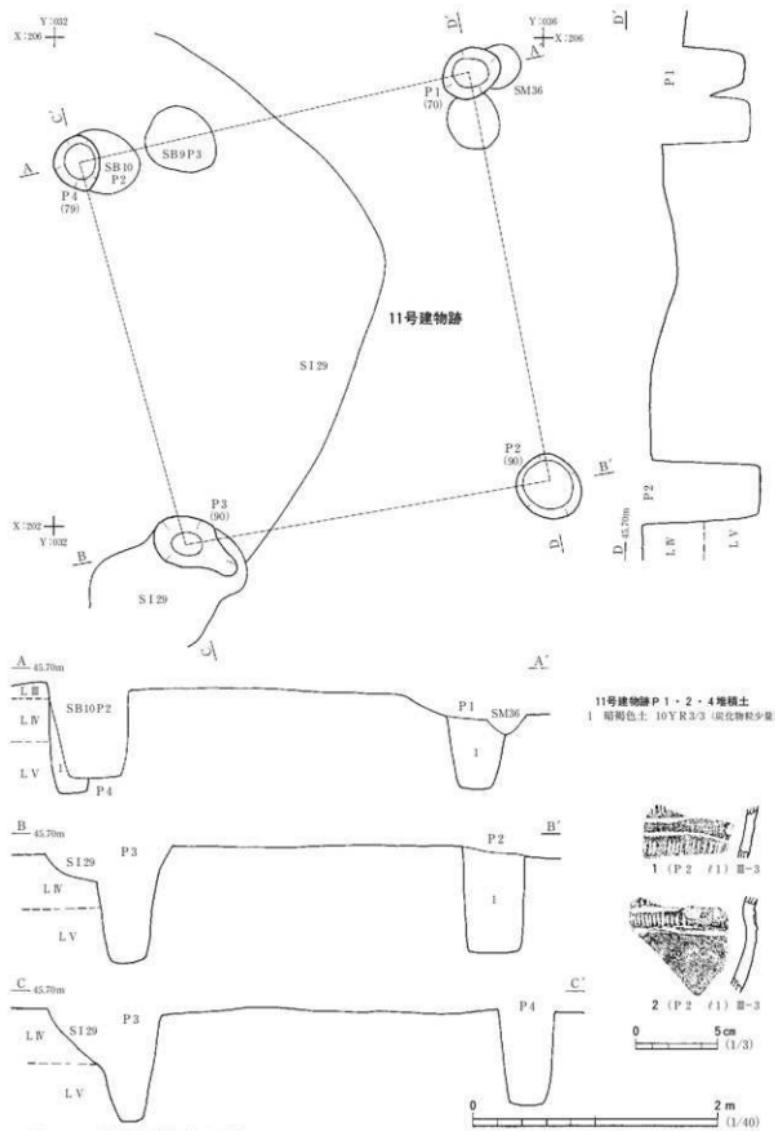


図92 11号建物跡と出土遺物

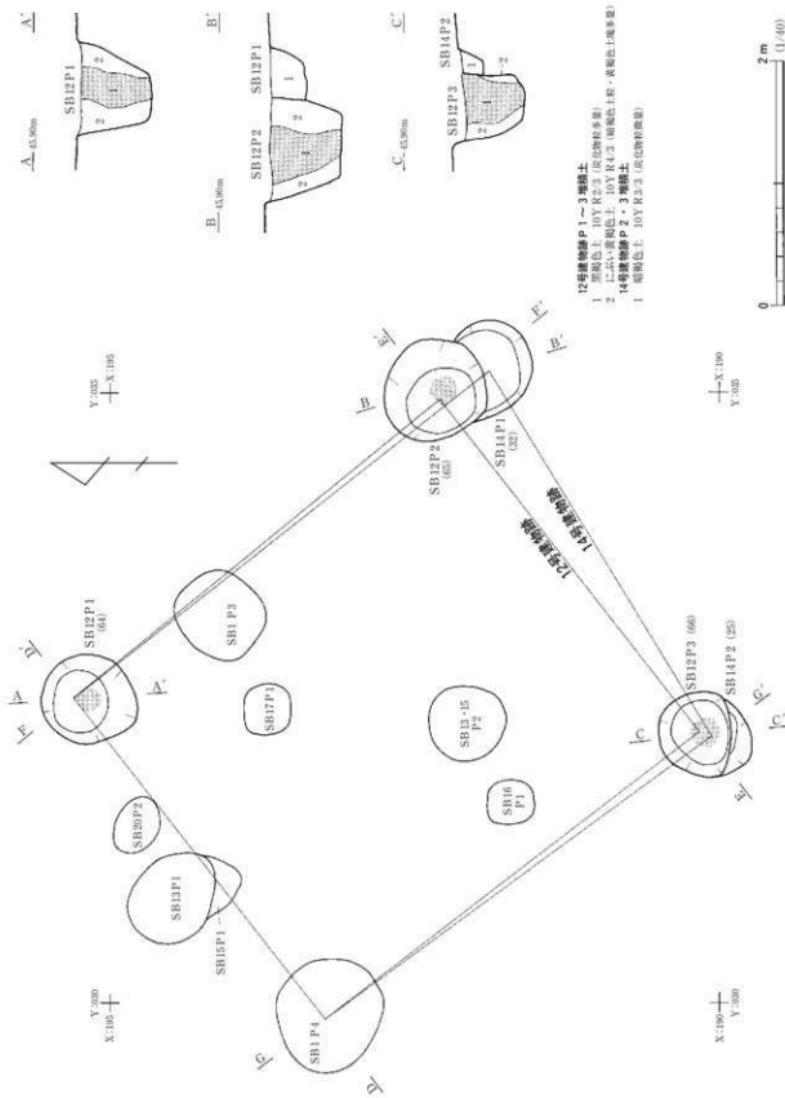


図93 12・14号建物跡(1)

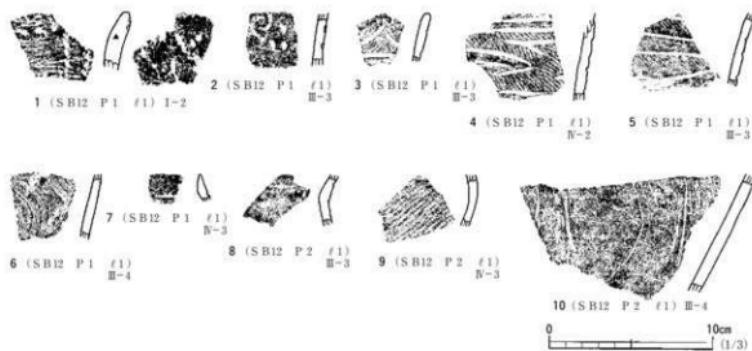
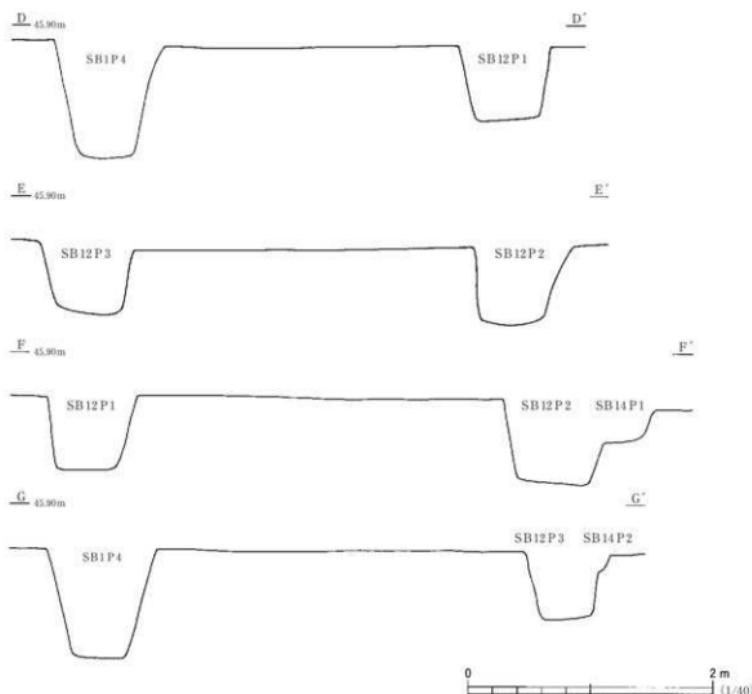


図94 12・14号建物跡(2)と出土遺物

ものの、深さは65cm前後とほぼ一定している。掘形内堆積土は2層に分けられ、 ℓ 1が柱痕、 ℓ 2が埋土である。柱痕の断面はいずれも不整であるが、掘形のはば中央付近に堆積し、底面にまで達している。各柱痕の底面での平面は円形で、径が22cm前後とほぼ等しい。また、柱痕の芯間距離は東側のP 1～2で3.9m、南側のP 2～3で3.5mを測る。

遺 物(図94)

遺物はP 1～3から縄文土器片79点と剥片1点が出土している。中でもP 1から48点と多量に出土しているが器面の荒れた細片が多い。1～7はP 1出土の土器で、1は横位の条痕を地文とし、口縁部に沿った二条の連続刺突文と縦位の縄圧痕文を施している。また、胎土には纖維混和痕が認められる。2は平行沈線による無文の区画内に、縦位に入り組ませた「S」字状の沈線と連続刺突文を施している。3は沈線区画の三角形の图形内に、縄文を充填している。4は縄文部に沈線で区画した图形内を磨り消している。5は横位の沈線区画の图形内に充填縄文を施し、縄文部と無文部を交互に表現している。6は蛇行する細かな条線文、7は短い口縁部の沈線区画内に充填縄文を施している。

8～10はP 2出土の土器である。8は頸部を巡る平行沈線による無文の区画帶内にコブを付加している。9は斜行縄文が、10はやや太目の間隔のあいた工具による条線文が施されている。

ま と め

本遺構は東西・南北各1間の掘立柱建物跡で、平面は南北が僅かに長い長方形を呈する。また、柱痕から径22cm程度の丸柱を使用した東西3.5m、南北3.9mの建物が想定される。平面上で重複するSB 1・13・15と柱穴掘形の径は同規模であるが、やや浅い傾向が認められる。構築時期については、出土遺物の特徴から縄文時代晚期前葉頃と考えている。また、重複関係からSB 1より古く位置づけられる。

(山 岸)

13号建物跡 SB 13

遺 構(図95、写真45)

調査区中央部の南西側、B 7～6・7グリッドに位置する。平面上で重複するSB 1・12・14と共に検出し、柱穴の規模・配置から建物跡と判断した。検出面はL IIIであるが、精査・記録はSB 12・14と合わせてL IV上面で行った。北隅のP 1と南隅のP 3に重複が認められ、古い柱穴をSB 15とした。

本遺構は、P 1～4の柱穴で構成される東西・南北各1間の建物跡と考えた。平面は整った長方形を呈し、南北方向に長い。東側のP 1～2を結んだ軸線はN31°Wである。全体の規模は、北側のP 4～1で2.9m、東側のP 1～2で3.5m、南側のP 2～3で2.9m、西側のP 3～4で3.5mを測る。

柱穴掘形の平面は、いずれも円形を基調とするが、全体的に歪み整っていない。底面はほぼ平坦で、断面は長い筒状を呈する。規模は径が50～65cm、深さは110～125cmと周辺の建物跡の中で最も

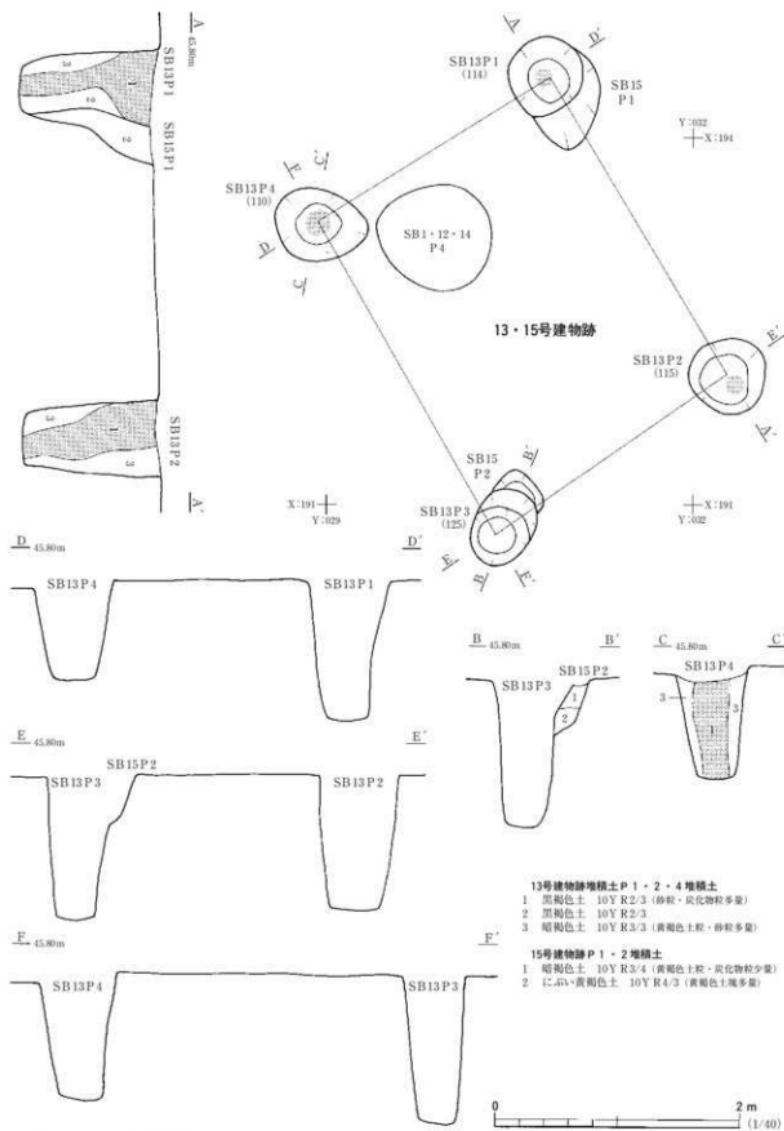


図95 13・15号建物跡

深い。掘形内堆積土は3層に分けられ、 $\ell 1$ が柱痕、 $\ell 2 \cdot 3$ が埋土と考えている。柱痕はP 3を除く柱穴に認められ、断面は不整であるが掘形の中央付近に堆積し、底面にまで達している。各柱痕の底面での平面は円形で、径はP 1が16cm、P 2・4は22cmである。また、柱痕の芯間距離は北側のP 4～1で2.2m、東側のP 1～2で2.9mを図る。

遺 物(図96)

遺物はP 1・2の $\ell 1$ 中から約100点の縄文土器片が出土し、Ⅲ群4類に比定される細片が主体を占める。1～3はP 1出土の土器である。1は胴部のくびれ部に刻みを加えた綫長のコブが付けられている。2・3は小さなコブが付加された平行沈線の上下に沈線区画文を描いている。4～7はP 2出土の土器である。4は帯状の沈線区画内に綫長の連続刺突文が施されている。5は蛇行して垂下する条線文で、鎖状の图形を描き出している。6は無文の口縁部片で、細粒砂の移動による横位の擦痕が顕著に認められる。7は無文の底部で、底面の中央を窪ませて小さな台状の作り出しになっている。

ま と め

本遺構は東西・南北各1間の掘立柱建物跡で、平面は南北に長い整った長方形を呈する。また、柱痕から東西2.2m、南北2.9mの規模の建物跡が想定される。構築時期については、柱穴掘形の規模・堆積土の特徴から縄文時代晚期前葉頃と考えている。また、平面上で重複するSB12・14との新旧関係は不明である。

(山 岸)

14号建物跡

遺 構(図93・94、写真44)

調査区中央部の南西側、B 7・3・7グリッドに位置する。SB12の精査中、南側のP 2・3の柱穴掘形で重複を確認し、その配置からSB12と同一平面上で重複する建物跡と判断した。北隅に相当する柱穴はSB12のP 1と西隅に相当する柱穴はSB1のP 4と重複し、遺存していないと考えている。

本遺構は東西・南北各1間の建物跡で、平面は南北に長い長方形と考えた。遺存するP 1～2の全長は4.2mを測る。柱穴掘形の平面は円形を基調とし、径が60～70cm程度である。深さは30cm前後と浅く、掘形内堆積土は1層で柱痕は不明である。

遺 物

本遺構から遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、平面上で重複するSB12と遺存するP 1・2の配置から東西・南北各1間の掘立柱建物跡で、平面は南北に長い長方形と考えた。また、規模についてもSB12よりやや大きい東西3.5m、南北4mの建物と想定される。構築時期については、重複関係と柱穴掘形の規模・堆積土から縄文時代晚期前葉頃と考えている。

(山 岸)

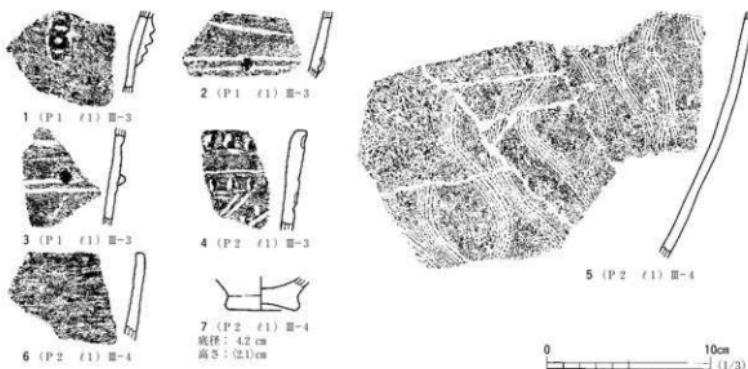


図96 13号建物跡出土遺物

15号建物跡 S B15

遺構(図95, 写真45)

調査区中央部の南西側、B 7 - 6・7 グリッドに位置する。S B13の精査中、北隅のP 1と南隅のP 3の柱穴彫形で重複を確認し、その配置からS B13と同一平面上で重複する建物跡と考えた。東隅と西隅に相当する柱穴はS B13のP 2・4によって壊され、遺存していないと考えている。

本遺構は東西・南北各1間の建物跡で、平面は南北方向に長い長方形と考えた。全体の規模は不明であるが、S B13とはほぼ同一と考えている。遺存するP 1・2の平面は不整な円形であるが、断面と共に本来の形状を止めていない。掘形内堆積土は2層に分けられ、ℓ 1は廃絶後の自然堆積、ℓ 2は埋土と考えている。

遺物

遺物はP 2のℓ 1中からIII群4類に比定される土器細片が2点出土しただけである。

まとめ

本遺構は、平面上で重複するS B13と遺存する柱穴の配置から東西・南北各1間の掘立柱建物跡と考えた。構築時期についてもS B13と同様の縄文時代晩期前葉頃と考えられ、S B13より古い。

(山岸)

16号建物跡 S B16

遺構(図97, 写真46)

調査区中央部の南西側、B 7 - 7・11グリッドに位置する。周辺にはS B1・12~15と建物跡が密集しているが、重複する遺構はない。同規模のS B17と共に検出し、柱穴の配置から建物跡と判断した。

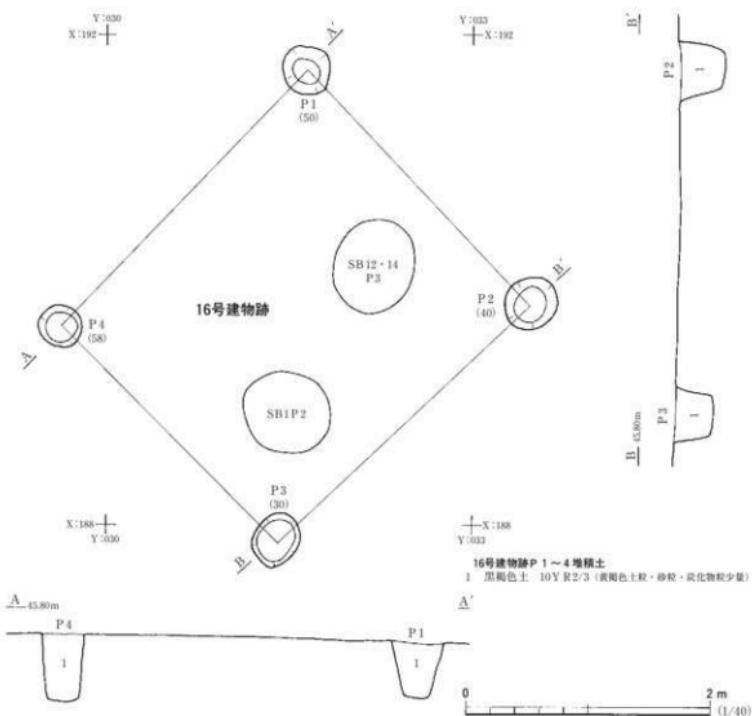


図97 16号建物跡

本遺構は、P 1～4 の柱穴で構成される東西・南北各1間の建物跡と考えた。平面は整った長方形を呈し、やや東西方向に長い。東側のP 1～2を結んだ軸線はN 43° Wである。全体の規模は、北側のP 4～1で3.3m、東側のP 1～2で3.1m、南側のP 2～3で3.3m、西側のP 3～4で2.9mを測る。

柱穴掘形の平面はいずれも円形を基調とし、断面は筒状を呈するが全体的に整っていない。規模は径40cm前後とほぼ一定しているが、深さは30～58cmとばらつきが認められ、南側のP 3・2よりも北側のP 4・1が深い。掘形内堆積土はいずれも黒褐色土1層で、柱痕と埋土との区別はできなかった。

遺 物

P 1堆積土中より縄文土器片が3点出土したが、いずれも細片のため図示できなかった。また、明確な帰属時期も不明である。

ま と め

本遺構は東西・南北各1間の掘立柱建物跡で、平面は東西方向にやや長い長方形を呈する。柱穴底面の中心間距離から東西3m、南北2.6m程の建物跡が想定される。構築時期については、掘形内堆積土の比較から縄文時代後期後葉以降と考えている。

(山 岸)

18号建物跡 S B18

遺 構(図98、写真47)

調査区中央部の南西側、B 7 - 3・4・7・8グリッドに位置する。S B 6・7・12・14と共に検出し、その配置関係から建物跡と考えた。北東隅に相当する柱穴はS B 6のP 3、南西隅に相当する柱穴はS B 12のP 1と重複し、いずれも遺存していない。

本遺構は東西・南北各1間の建物跡と考えた。平面は南北に長い長方形を呈し、軸線方向は東に傾く。遺存するP 1・2と重複する柱穴の位置関係から東西2.2m、南北3.2m程の規模を想定している。P 1・2の平面は円形を基調とし、径が45cm、深さ50cm前後とはほぼ等しい。掘形内堆積土は1層で、柱痕は不明である。

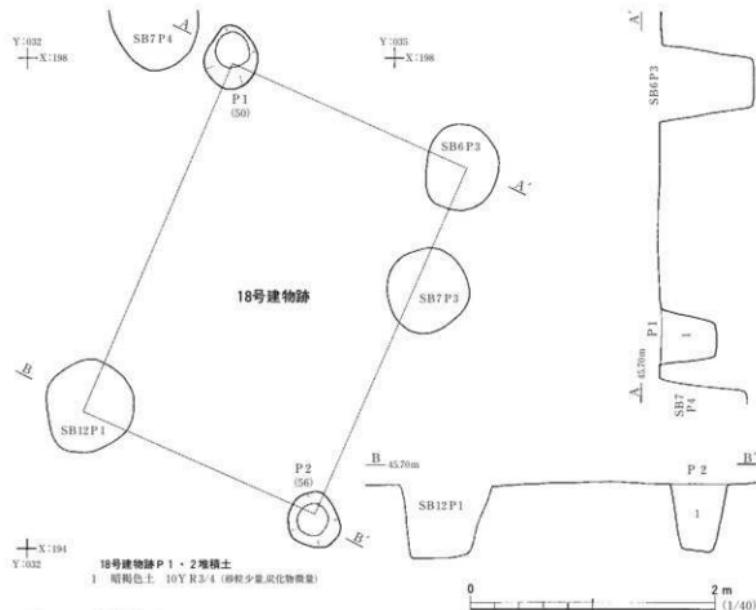


図98 18号建物跡

遺 物

本遺構から遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は東西・南北各1間の建物跡で、平面は南北に長い長方形と考えた。また、規模については東西2.2m、南北3.2m程と想定している。構築時期については、重複関係と柱穴掘形の規模・堆積土の比較から縄文時代後期後葉以降と考えている。
(山 岸)

19号建物跡 S B19

遺 構(図99、写真48)

調査区中央部の南西端、B 7-6・10グリッドに位置する。S I 33の精査中、南側でP 1~7の柱穴を検出し、その規模・配置等から建物跡と考えた。北側でS I 33と重複し、本遺構が古い。

本遺構はP 1~7の内、P 2・3に重複が認められることから本来は6個の柱穴で構成される建物跡と考えた。全体の平面はやや歪んだ六角形を呈し、東西方向に長い。各柱穴間の距離は、北側のP 7~1で2.7m、東側のP 1~2で1.3m、P 2~4で1.6m、南側のP 4~5で2.4m、西側のP 5~6で1.3m、P 6~7で1.3mを測る。また、東側の両隅のP 1~4で3.1m、西側の両隅のP 5~7で2.9mを測る。

柱穴掘形の平面はいずれも円形を基調とし、断面は筒状を呈するが全体的に整っていない。S I 33と重複する北側のP 7・1は径35cm、深さ20cm前後、その他の柱穴は径40cm、深さ50~64cmの規模である。掘形内堆積土はいずれも1層で、東・西側のP 3・6では黄褐色土の混入量が多い。また、いずれも柱痕は不明である。

遺 物(図99)

遺物はP 3・4から縄文土器片が出土している。1は平口縁の深鉢形土器で、縦位の条線文を地文としている。半円状や帯状の沈線区画文内を磨り消し、条線部分に小さなコブを付加している。同図2・3は蛇行して垂下する条線を施すもので、2の条線は太く沈線に近い。

ま と め

本遺構は、柱穴の配置から平面が六角形の建物跡と考えたが、東西に膨らむP 2・6を棟持柱とするならば東西3m、南北3.5m程の各1間の建物跡も想定できる。構築時期については、出土遺物の特徴と柱穴掘形の規模・堆積土の比較から縄文時代後期後葉以降と考えている。
(山 岸)

20号建物跡 S B20

遺 構(図100、写真49)

本遺構は調査区中央部の南西側、B 7-2・3・6・7グリッドに位置する。S B13・15と共に検出し、その規模・配置から建物跡と考えた。南西側でS I 31と重複し、本遺構が古い。

本遺構は、P 1~4の柱穴で構成される東西・南北各1間の建物跡と考えた。平面は歪んだ長方

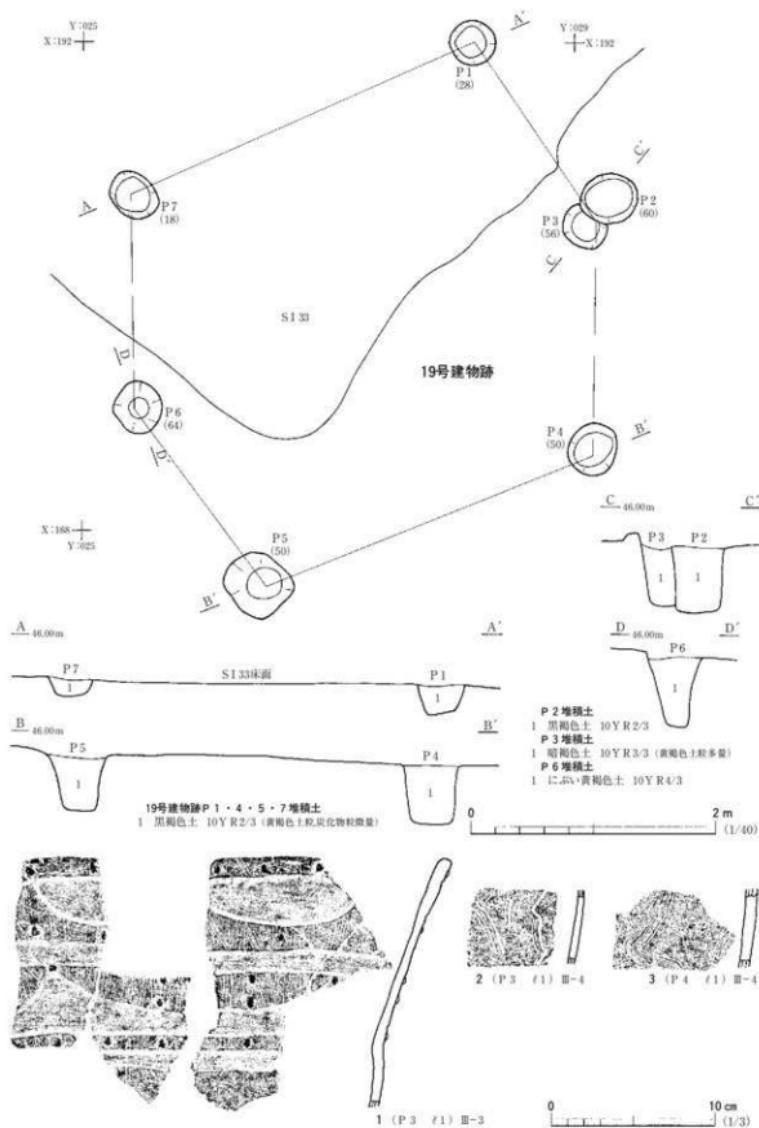


図99 19号建物跡と出土遺物

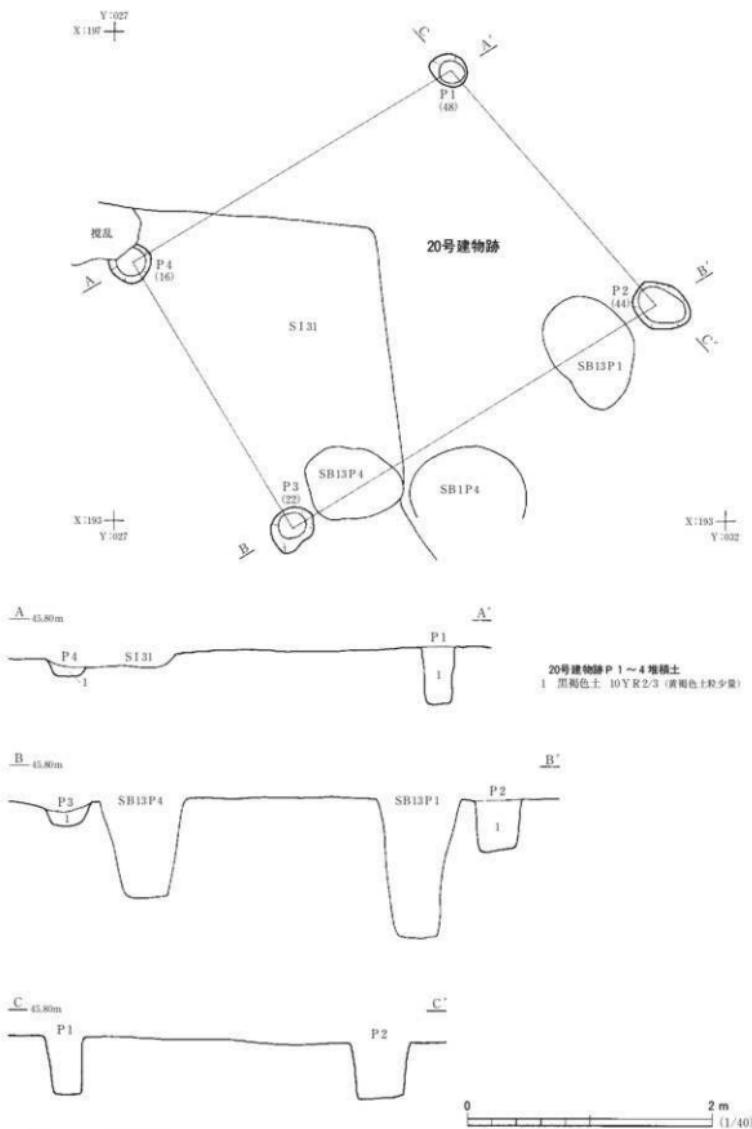


図100 20号建物跡

形を呈し、東西に長い。東側のP 1～2を結んだ軸線はN42°Wである。全体の規模は、北側のP 4～1で3.4m、東側のP 1～2で3m、南側のP 2～3で3.9m、西側のP 3～4で2.9mを測る。

柱穴掘形の平面は円形を基調とするが、いずれも歪んで整っていない。径は30～45cm、深さは東側の柱穴で45cm前後、西側は20cm前後が遺存している。掘形内堆積土は、いずれも黒褐色土の1層で、柱痕は不明である。

遺 物

本遺構から遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は東西・南北各1間の建物跡で、平面は東西に長い不整な長方形を呈する。南辺がやや長いものの南北2.5m、東西3.1～3.5mの建物跡が想定できる。構築時期については、柱穴の規模・堆積土の比較から縄文時代後期後葉以降と考えている。(山 岸)

21号建物跡 S B21

遺 構(図101、写真50・51)

本遺構は調査区中央部西側のB 6～5・6・9・10グリッドに位置する。周囲の地形は平坦である。本遺構の検出面はLⅢである。遺存状態は比較的良好である。重複関係はS B23、S M55と重複し本遺構が新しい。

遺構の主軸方位はP 3～4間を基準とするならN60°Wである。本遺構の大形柱穴の構成は4個である。北隅で検出された柱穴から時計回りにP 1～4とした。各柱穴間の距離はP 1～2、P 3～4が3.3m、P 1～4が2.5m、P 2～3は2.18mを測り、それらの柱穴を結ぶと平面形は東西軸の長方形となる。

柱穴の平面形は円形ないし稍円形で、規模は直径58～76cm、深さは76～92cmを測る。柱穴底面の標高は44.80m前後を測り深さを掘り揃えている。P 1・3・4からは柱痕が確認できた。柱痕の太さは26～30cmを測る。柱は底面から垂直に建てられ、掘形の廃土で固めて固定している。P 2からは柱痕が確認できない。(中 野)

遺 物(図102)

遺物は縄文土器片約370点、剥片類約10点、石製品1点が、各柱穴の主にP 1中から出土している。1は、全体の器形・文様構成のほぼ分かる小型の深鉢形土器で、丸みをもって膨らむ胴部の中央付近でくびれ、口縁部が直線的に外傾する器形となっている。口縁部は平口縁で、底部には僅かに外側に張り出した小さな台が付けられている。口縁下と胴部のくびれ部、胴部中央に沈線区画の縄文帯を巡らせ、その間に充填縄文を施した帶状の入組文を横位に展開させている。また、くびれ部の縄文帯には短沈線を刺突文風に施している。

2～5はP 1から出土した。2は丸底状の底部に筋の細かな斜行縄文が施されている。3は竈状の垂飾品の破損品で全体形は不明である。4・5は口縁部に沿って沈線を巡らせ、4は口縁部方

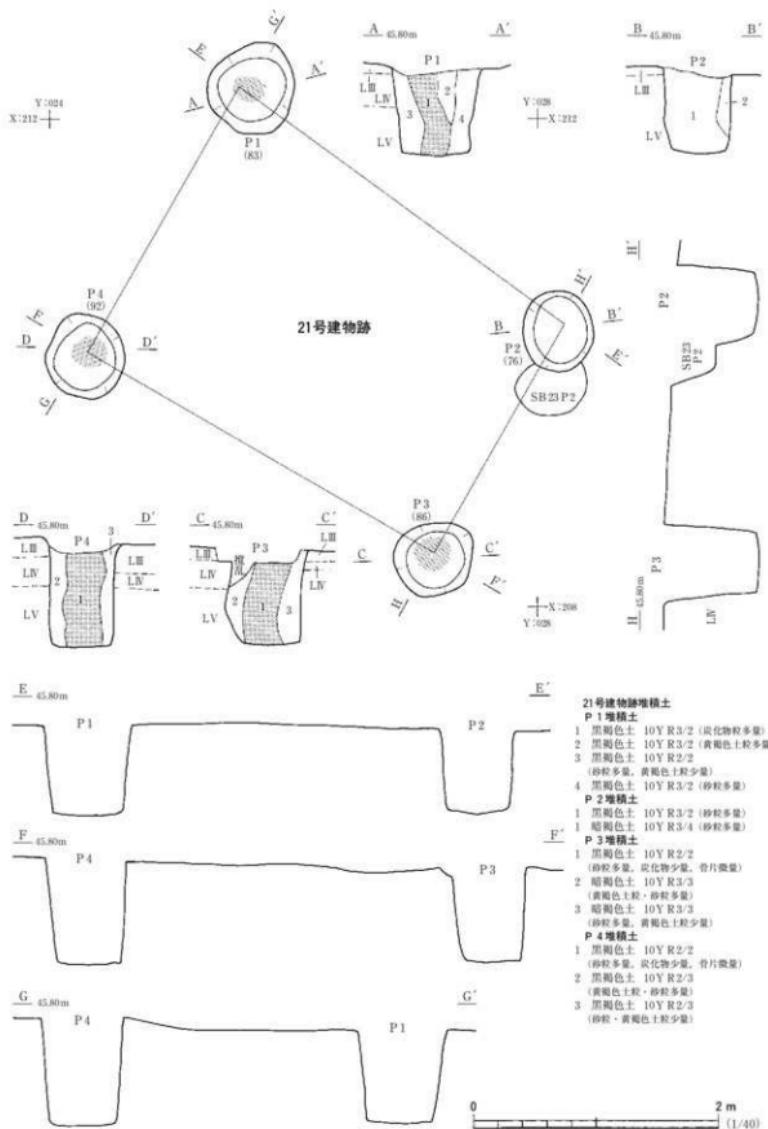


図101 21号建物跡

向、5は脇部方向に斜行縄文を充填している。

6～8はP2出土の土器片で、6は沈線区画の無文帯と眼鏡状の図形の起点に小さなコブを付加している。7は注口土器の肩部片で黒色の器面に羊歯状の沈線文が描かれている。8は平行沈線間に斜行縄文と結節縄の回転文が施されている。

9～14はP3、15～17はP4から出土した。9は円形の図形が縄文充填の平行沈線によって描かれ、一对のコブが付加されている。10・11は帯状の入組文を横位に展開させている。12は皿の底面全体に雲形状の曲線図形が描かれ、部分的に筋の細かな縄文が充填されている。13は三叉状の沈線間に継長の大きなコブを一对付加している。14には沈線文と斜行縄文が施されている。15は平行沈線による区画帯内に刻みや斜行縄文、結節縄の回転文を施している。16には沈線区画の曲線図形が、17には口縁部を巡る条縞文が描かれている。
(山 岸)

ま と め

本遺構は 1×1 間の長方形プランの掘立柱建物跡である。P1・3・4からは30cm近くに及ぶ大型の柱痕を確認した。柱痕などから太い柱の建築物が建てられていた事は容易に想定できるものの、居住を行っていたかも断定できない。現段階においては具体的な機能や構造について不明である。遺構の所属時期はSM55を壞している点や出土した遺物が縄文時代晩期初頭～前葉頃の遺物が多く見られことからその段階に所属するものと考えている。
(中 野)

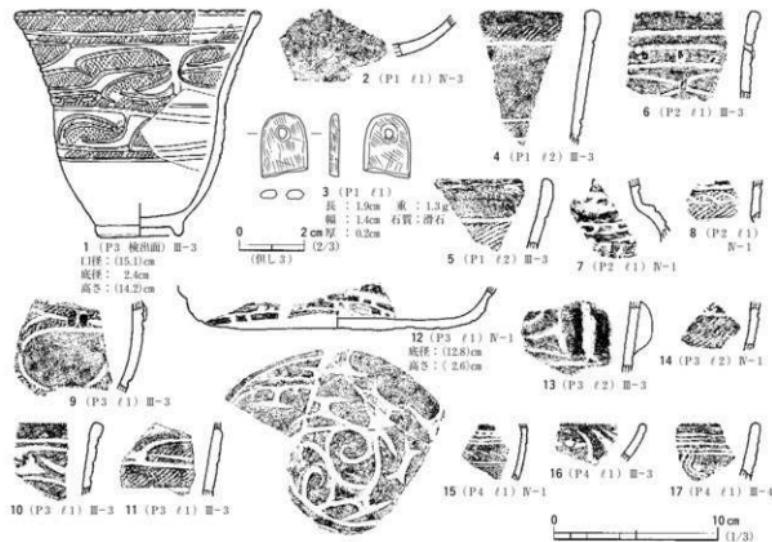


図102 21号建物跡出土遺物

22号建物跡 S B 22

遺構(図103、写真52)

本遺構は調査区中央部西側のB 6 - 1・5・6グリッドに位置する。本遺構の検出面はLⅢである。遺存状態は比較的良好である。重複関係はS B 25と重複し、柱穴間切り合い関係から本遺構が古い。南側にS B 21・23、北西側にS I 36が近接する。

遺構の主軸方位はP 3~4間を基準とするならN18°Wである。本遺構の柱穴の構成は4個である。北東隅で検出された柱穴から時計回りにP 1~4とした。各柱穴間の距離はP 1~2が2.56m、P 3~4が2.8m、P 1~4が1.6m、P 2~3は1.68mを測り、それらの柱穴を結ぶと南北軸

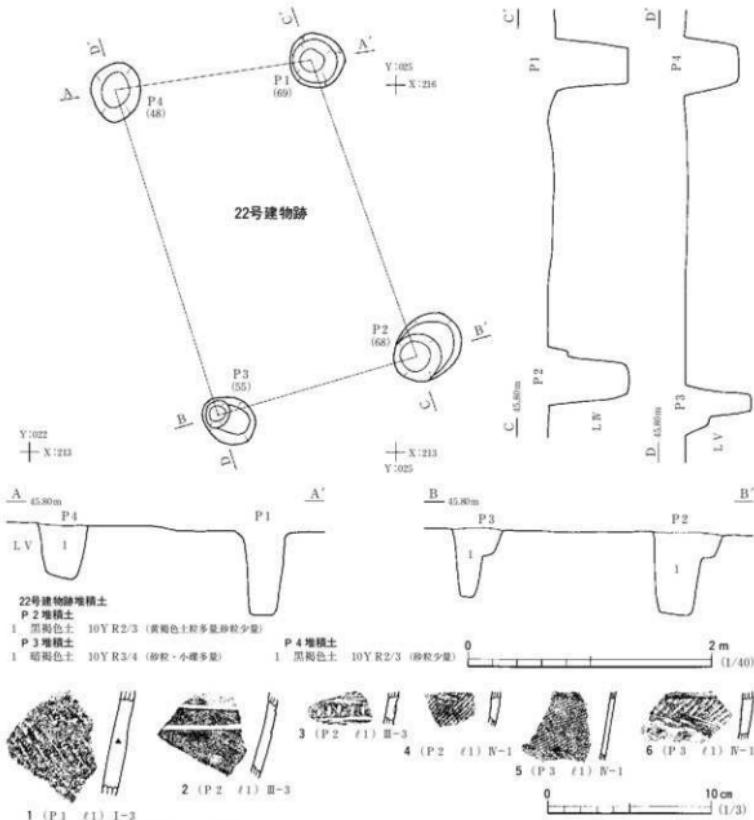


図103 22号建物跡と出土遺物

の長方形のプランとなる。

柱穴の平面形は円形ないし梢円形で、規模は直径40~60cm、深さは48~68cmを測る。柱穴底面の標高は44.87~45.15m前後を測り深さにばらつきが見られる。柱痕は認できなかった。

遺 物(図103)

遺物は縄文土器片35点が出土している。1は縦位の縄文を施している。胎土には纖維混和痕が認められる。2・3は並行沈線による区画帯を施し、3の区画帯には横位の刻みを連続して加えている。4は縄文を、5・6は縄文地に綾络文を施している。

ま と め

本遺構は1×1間の長方形プランの掘立柱建物跡である。本調査区内で検出された中では最も小規模である。所属時期はSB25に壊されている点や出土した遺物から縄文時代晚期初頭頃に所属するものと考えている。

(中野)

23号建物跡 SB23

遺 構(図104、写真53)

本遺構は調査区中央西側のB 6-5・6・9・10グリッドに位置する。本遺構の検出面はLⅢである。遺存状態は比較的良好である。SB21と重複し本遺構のP2がSB21 P2に壊されているため本遺構が古い。東側にSI37、北側にSM55、西側にSM50が近接する。

遺構の主軸方位はP2~3間を基準とするならN74°Eである。本遺構の柱穴の構成は4個である。北東隅で検出された柱穴から時計回りにP1~4とした。各柱穴間の距離はP1~2が2.40m、P3~4が3.5m、P1~4が3.86m、P2~3は3.2mを測りそれらの柱穴を結ぶと東西軸の不正台形のプランとなる。P4が北側にずれて位置しており、当初は検出ミスの可能性も考えてP1の北側やP3・4間に慎重に検出を行ったもののそれ以外の柱穴は確認できていない。

柱穴の平面形は円形で、規模は直径36~60cm、深さは32~55cmを測る。柱穴底面の標高はP2~4は45.1m前後を測り深さを掘り揃えている。P1は、やや浅く45.3m前後となる。柱穴の堆積土は砂粒を多く含む黒褐色土で、各柱穴からは柱痕は確認できなかった。

遺 物(図104)

遺物は縄文土器片27点、剥片類4点が出土している。1は縄文が施された胴部片で、胎土には1mm前後の比較的細かい砂が含まれている。2は並行沈線による区画内に入組文を施している。3・4は口縁部に沿った並行沈線間に刻みが付けられている。5は胎土に1mm前後の細かい砂が含まれ文様は付加されていない。

ま と め

本遺構は1×1間の不正台形のプランの掘立柱建物跡である。平面形態が歪んでいるが柱穴の堆積土などから掘立柱建物跡と判断した。遺構の所属時期はSB21に壊されている点や出土した遺物から縄文時代晚期初頭頃に所属するものと考えている。

(中野)

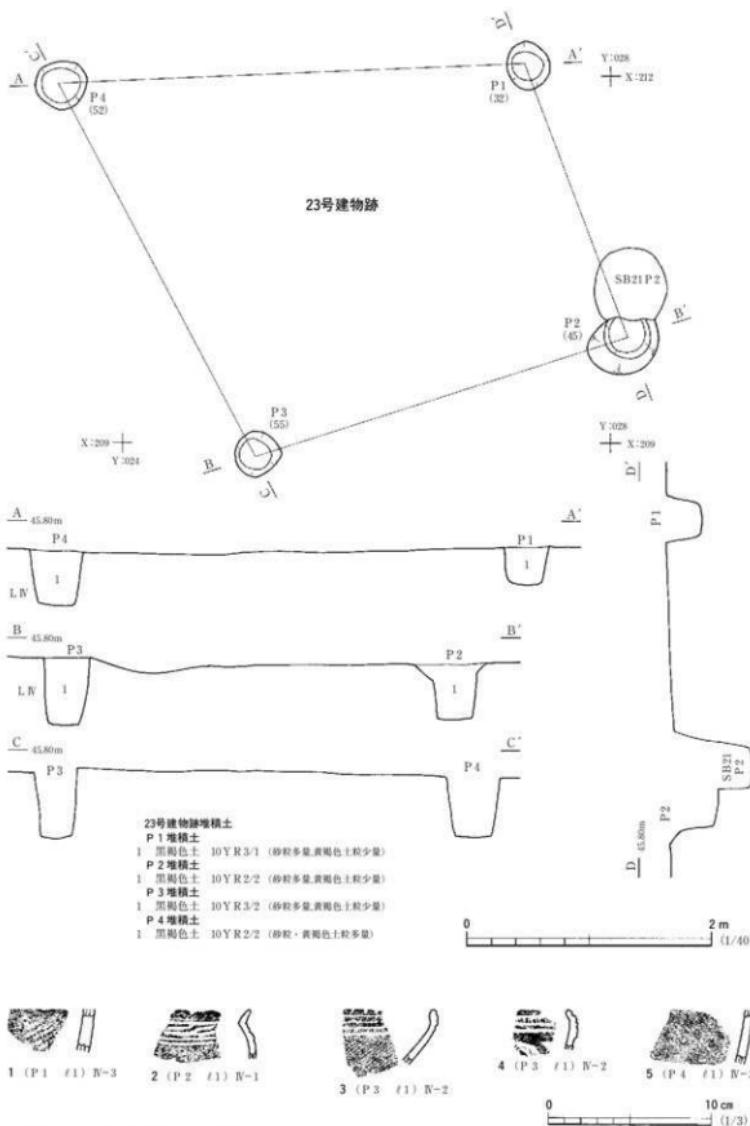


図104 23号建物跡と出土遺物

24号建物跡 S B24

遺構(図105, 写真54)

調査区中央部の南西側, B 6 - 13・14グリッドに位置する。半円状に分布する建物跡群の中央付近に単独で所在する。S I 34・35の精査中, 床面と北側から柱穴を検出し, その規模・配置から建物跡と判断した。S I 34・35と重複し, 本遺構が新しい。また, 重複する建物跡はない。

本遺構は, P 1 ~ 4 の柱穴で構成される東西・南北各1間の建物跡と考えた。平面は長方形を基調とし, やや東西に長い。西側のP 1 ~ 4 を結んだ軸線方向はN81°Wである。全体の規模は, 北側のP 4 ~ 1 で4.4m, 東側のP 1 ~ 2 で3.6m, 南側のP 2 ~ 3 で4.1m, 西側のP 3 ~ 4 で3.6mを測る。

柱穴掘形の平面は, いずれも円形を基調とする。底面は平坦で, 断面は整った筒状を呈する。規模は径が40cm前後, 深さ52~58cmとほぼ一定している。掘形内堆積土はいずれも1層で, 柱痕と埋土の区別はできなかった。

遺物(図105)

遺物はP 2 の堆積土中から縄文土器片28点, 土製品1点が出土している。1は横位の条痕を地文とし, 半截竹管による細い沈線で「X」字状の文様が描かれ, 口唇部には断面が半円状の浅い刻みが施されている。また, 胎土には纖維混和痕が認められる。2は平行沈線間にコブを附加したもの, 3には条線文が密に施されている。4は断面がやや内側に膨らんだ凸レンズ状を呈する。器面は平滑に調整され, 焼成も比較的堅硬である。

まとめ

本遺構は東西・南北各1間の掘立柱建物跡で, 平面は東西にやや長い長方形を基調とする。東辺がやや歪むものの東西4m程, 南北3.2mの建物跡が想定される。構築時期については, 重複関係と出土遺物の特徴から縄文時代後期後葉以降と考えられ, S I 34・35よりは新しい。(山岸)

25号建物跡 S B25

遺構(図106, 写真55)

本遺構は調査区中央部西側のB 6 - 1・2グリッドに位置する。周囲の地形は平坦である。本遺構の検出面はL IIIである。遺存状態は比較的良好である。重複関係はS B22と重複し, 本遺構のP 1 がS B22のP 1 を壊しているため本遺構が新しい。

遺構の主軸方位はP 2 ~ 3間を基準とするならN70°Wである。本遺構の大形柱穴の構成は4個である。北東隅で検出された柱穴から時計回りにP 1 ~ 4とした。各柱穴間の距離はP 1 ~ 2 が2.64m, P 3 ~ 4 が2.56m, P 1 ~ 4 が2.86m, P 2 ~ 3 が2.94mを測り, それらの柱穴を結ぶと東西軸の長方形のプランとなる。

柱穴の平面形は円形ないし梢円形で, 規模は直径58~76cm, 深さ63~82cmを測る。柱穴底面の標

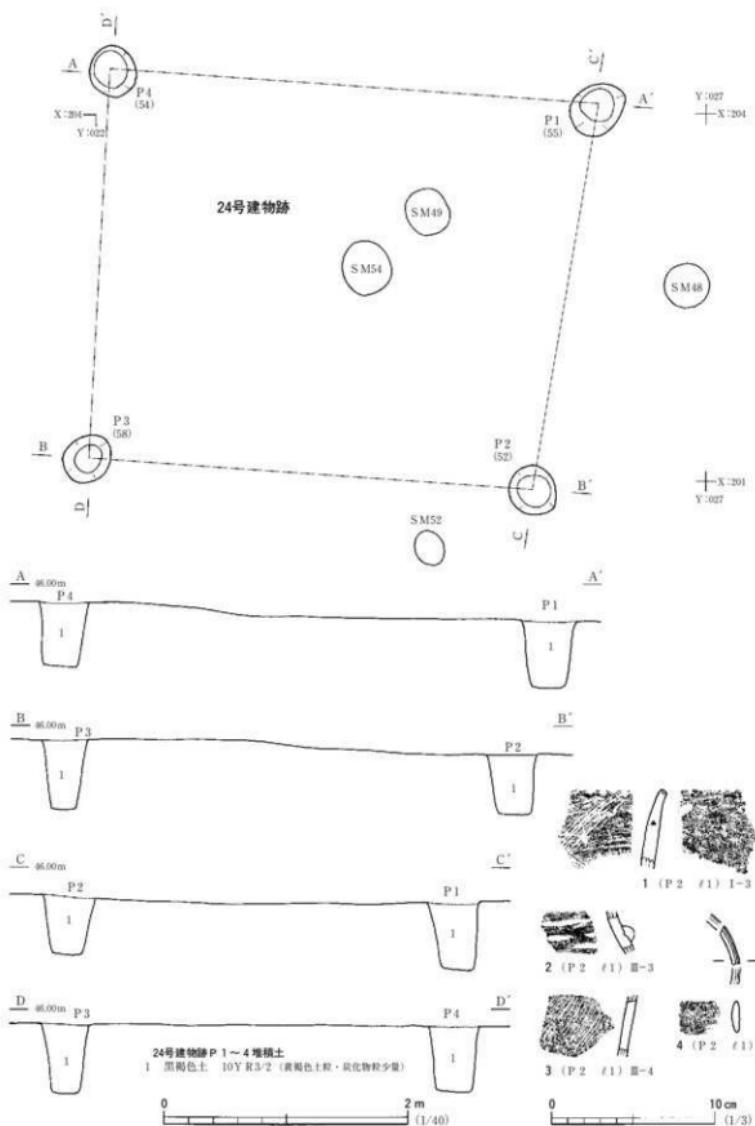


図105 24号建物跡と出土遺物

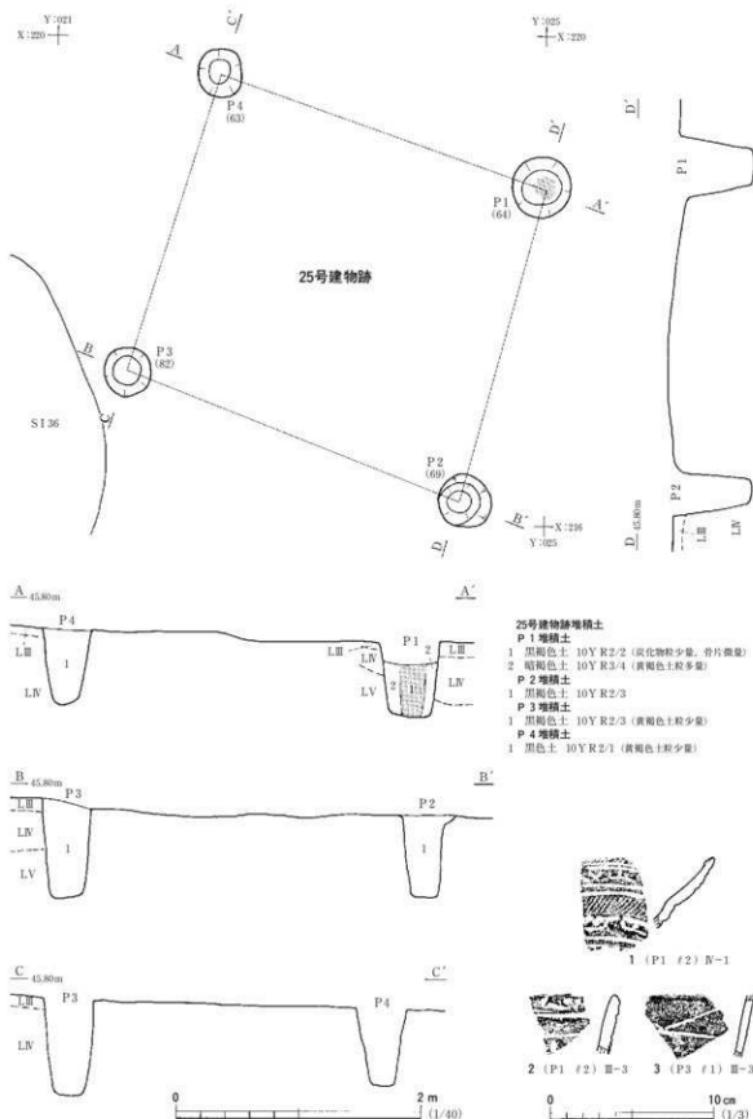


図106 25号建物跡と出土遺物

高は44.98m前後を測り、深さを掘り揃えている。柱痕はP 1で確認できた。柱痕の太さは底面径が16cmで、底面からほぼ垂直に柱が建っていたものと考えられる。P 2～4から柱痕は確認できなかつた。

遺 物(図106)

遺物は縄文土器9点、剥片1点が出土している。1は浅鉢形土器片である。並行沈線による区画帯の中央に縄文を、上下の無文部に羊歯状文を施している。2・3は並行沈線による横位の区画文を施し、2には刻みが付加されている。

ま と め

本遺構は1×1間の長方形プランの掘立柱建物跡である。P 1からは直径16cmの柱痕を確認した。柱痕などから建築物が建てられていた事は想定できるが機能については断定できない。遺構の所属時期は出土した遺物が縄文時代晩期初頭～前葉頃の遺物であることから、その段階に所属するものと考えている。

(中野)

26号建物跡 S B26

遺 構(図107)

調査区中央部の西端、B 6-1グリッドに位置する。S I 36の精査中、S M56と共に大型の柱穴を検出し、建物跡と考えた。重複するS I 36の堆積土中から掘り込まれ、上位にはS I 36のℓ 1・2が堆積している。また、西側に接するS M56よりも古い。

本遺構は調査区の西端に位置し、周辺から他の柱穴が検出でなかったことから他の柱穴は調査区外に所在するものと考えた。全体の平面・規模は不明であるが、周辺の建物跡と同様な東西・南北各1間の建物跡と想定され、P 1とした柱穴は、この建物跡の南東または北東隅に相当すると考えている。

柱穴掘形の平面は円形を呈し、S I 36の床面での規模は径80cm、深さ90cmであるが、土層断面で確認できた規模は、径・深さ共に100cmを超える。掘形内堆積土は3層に分けられるが、柱痕は不明である。

遺 物(図107)

遺物はℓ 1からほぼ完全形の注口土器や鉢形土器がまとまって出土している。1は平口縁の注口土器である。内側下方にややめり込んだ肩部から口縁部に向かって直線的に内傾し、胴部下半が球形を呈する。肩部から口縁部にかけて羊歯状文を主要文様とし、「X」字状の圓形を彫刻的な手法で描き出している。また、注口の剥落部とその下方の胴部から底部にかけて、接着材に使用したアスファルトと考えられる黒色物質の付着が認められる。

2は小型の鉢形土器で、波状の口縁部は磨かれ胴部と区画されている。斜行縄文は胴部上半にのみ施され、下半は無文地のまま残されている。色調は全体的に黒褐色系で、器内・外面には底部を除き炭化物の付着が認められる。

ま と め

本遺構は建物跡の南東または北東隅の柱穴に相当し、その他の柱穴は西側の調査区外に所在するものと考えている。このため全体の平面・規模は不明であるが、他の建物跡と同様に東西・南北各1間の建物跡を想定している。構築時期については、重複関係と出土遺物の特徴から縄文時代晩期前葉と考えている。

(山 岸)

27号建物跡 S B27

遺 構(図107)

調査区中央部の西端、B 6 - 1グリッドに位置する。S I 36の床面から柱穴と重複して検出した。南側に近接するS B26と同様に、検出できたのは建物跡の南東または北東隅に相当する柱穴で、その他の柱穴は西側の調査区外に所在するものと考えている。

柱穴掘形の平面は円形を基調とし、比較的整っている。規模は径約70cm、深さ56cmである。掘形内堆積土は3層に分けられ、 ℓ 1についてはS I 36床面整地の際の埋土、 ℓ 2が柱痕、 ℓ 3が埋土と考えている。底面での柱痕の平面は円形で、径が20cmである。

遺 物

本遺構から遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は建物跡の南東または北東隅の柱穴に相当し、S B26と同様に他の柱穴は西側の調査区外に所在すると考えている。このため全体の平面・規模は不明であるが、周辺から検出されている建物跡と同様な東西・南北各1間の建物跡を想定している。構築時期については、縄文時代晩期前葉頃と考えているが、重複するS I 36より古い。

(山 岸)

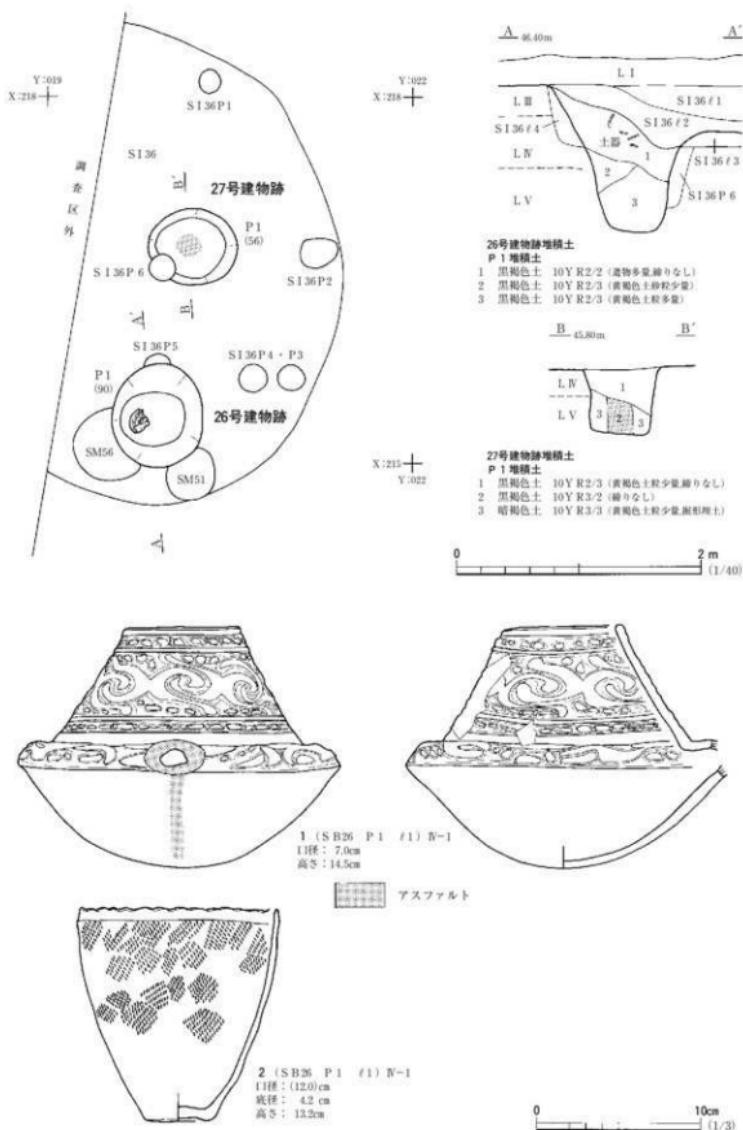


図107 26・27号建物跡と出土遺物

第4節 土 坑

今回の調査で検出した土坑は81基である。構築時期別の内訳は、縄文時代78基、平安時代2基、近世1基、不明1基である。このうち縄文時代の土坑は更に、早期・前期・後期・晩期の各期に細別され、後期の土坑が最も多い。これら縄文時代の土坑の分布を見ると、早・前期の土坑は調査区中央部と北部の段丘平坦面全体に散漫に分布し、まとまった特徴は認められない。これに対し、後・晩期の土坑は同時期の堅穴住居跡の周辺に比較的まとまって分布する傾向にあるが、一定の範囲に集中するまでには至っていない。また、調査区中央部では耕作による擾乱がL IV上面にまで及んでおり、遺存状態は良くない。

以下、これら土坑について時期別や分布などによらず、遺構番号順に個別に述べて行く。

1号土坑 SK 1(図108・121、写真56)

調査区南部の中央北側、B 8-15グリッドの緩斜面上に位置する。段丘面の南側縁辺部に所在し、畠地造成の際の削平を受けているため遺構検出面はL IV上面である。重複する遺構はないが、南東側の斜面下位に接して堅穴住居跡群が巡っている。平面は円形で、斜面下位方向の壁は遺存していない。規模は径が140cm前後、深さ20cmである。遺存する壁は、ほぼ平坦な底面から急角度で外傾している。遺構内堆積土は2層に分けられ、いずれも自然堆積と考えている。

遺物は縄文土器片13点、剥片1点が ℓ 1中から出土したが、無文や条線文の施された細片が多い。図121-1は深鉢形土器の口縁部片である。沈線による区画文内が無文で、微小のコブが積極的に付加されている。また、区画文は無文部よりやや高まった表現となっている。

本土坑の構築時期については、出土遺物の特徴と周辺遺構との比較検討から縄文時代後期後葉頃と考えられ、斜面下位に接する堅穴住居跡群に関連した貯蔵穴の可能性が高い。(山岸)

2号土坑 SK 2(図108、写真56)

調査区南部の中央付近、B 9-3グリッドの緩斜面上に位置する。段丘面の南側縁辺部に所在し、L IV上面で検出した。重複する遺構はないが、南側にS I 1・2、北側にS I 7が近接する。平面は不整な円形で、断面は丸い鍋底状の底面から壁が緩やかに外傾している。規模は径が120cm前後、深さが35cm程度である。遺構内堆積土は4層に分けられ、いずれも斜面上位の西側からの流入状況を示していることから自然堆積と考えている。遺物は出土していない。

本土坑の構築時期については、周辺遺構との比較検討から縄文時代後期後葉頃と考えられ、近接する堅穴住居跡に関連した貯蔵穴の可能性が高い。(山岸)

3号土坑 SK3(図108・121, 写真56)

調査区南部の中央付近, B 9 - 7 グリッドの緩斜面上に位置する。S I 1・2 のか跡下から検出し, 本遺構が古い。また, 北側に SK 2 が近接する。平面形は概ね円形で, 底面は平らに掘削され, 断面は円柱状を呈する。規模は東西106cm, 南北104cm, 深さが80cmを測る。遺構内堆積土は3層に分けられ, レンズ状や三角状の堆積を示すことから自然堆積と考えている。

遺物は縄文土器片21点, 刺片1点がℓ 2 中から出土している。図121-2・3は沈線による帯状の区画内に連続刺突文を施している。同図4は縦位方向に連続的に波状文を描いている。同図5は壺の頸部と考えられ, 並行沈線による区画内に縄文を施す。

本遺構は形態などから貯蔵穴と考えられ, 遺構の所属時期は S I 1・2との重複関係や周辺遺構などから縄文時代後期後葉頃と考えられる。
(中野)

4号土坑 SK4(図108・121, 写真56)

調査区中央部の南西端, B 8 - 2 グリッドの平坦面上に位置し, 遺構検出面は L III である。周辺に遺構は認められずほぼ独立して分布する。平面は円形で, 平坦な底面から壁が急角度で外傾している。規模は径が130cm前後で, 深さが35cm程である。遺構内堆積土は3層に分けられ, 壁際には壁面崩落に起因する ℓ 3 が堆積しており, 本来の断面はフラスコ形であった可能性が高い。また, いずれも自然堆積と考えている。

遺物は ℓ 1 から縄文土器片が44点と刺片4点が出土している。図121-6は沈線区画の図形内に, 縦位の条線を充填している。同図7は無文地の台と底部の境に沈線を巡らせている。同図8・9は斜行縄文が施され, 9には結節縄の回転文が付加されている。

本土坑の構築時期については, 出土遺物に縄文時代晚期前葉の遺物が含まれるもの, いずれも堆積土上位に自然堆積する ℓ 1 中であることから縄文時代後期後葉頃と考えている。また, 規模と形状から貯蔵穴としての性格が考えられる。
(山岸)

5号土坑 SK5(図108・121, 写真56)

調査区中央部の中央南端, C 7 - 9 グリッドの平坦面上に位置する。検出面は L IV 上面で, 北側から西側にかけて SK 21・26が近接し, 南側には竪穴住居跡群が立地する浅い谷地形が広がる。平面は円形を基調とし, ほぼ平坦な底面から壁は急角度で立ち上がっているが, 全体的に北半側は基底層に含まれる砂礫に起因し, 平面・断面ともに不整となっている。規模は径が150cm, 深さ50cm前後である。遺構内堆積土は3層に分けられ, いずれも自然堆積と考えている。

遺物は ℓ 1 中から縄文土器片164点が出土している。図121-10は地文の条痕上に多条の細い隆線を等間隔に施している。同図11・13は沈線による帯状の区画内に, 11は斜線を13は縄文を充填している。同図12は口縁部に太い平行沈線を, 脊部には連続した山形状の沈線を縄文地上に描いてい

る。同図14・15は渦巻き状の条線を地文とし、相対する連弧状や木葉状の图形を沈線で描き、その内を磨り消して無文部としている。同図16・17は沈線による区画文内に地文の条線を残し、同図18は縄文を充填している。いずれも微小なコブが付加され、無文部は磨かれやや低くなる。同図19・20は無文地に条線を施した深鉢形土器片、同図21・22は頸部に沈線を巡らせた壺形土器片である。

本土坑の構築時期は、出土遺物から縄文時代後期後葉頃と考えている。また、規模と形状から貯蔵穴としての性格が考えられ、南側に立地する竪穴住居跡群との関連性が高い。
(山 岸)

6号土坑 SK 6(図108・121、写真56)

調査区中央部の南側、C 6-14グリッドの平坦面上に位置し、L IV上面で検出した。北側にはS K 24・25、南側にはS K 10・S B 2・5が所在する。平面は円形、断面は丸い鍋底状に近い。規模は径が100cm、深さ50cm前後である。遺構内堆積土は4層に分けられ、ℓ 2としたにぶい黄褐色土が不規則に堆積していることから人為堆積の可能性が高い。

遺物はℓ 1中から縄文土器片21点が出土した。図121-23は沈線で区画した帯状の图形内に、斜行縄文を充填している。同図24は無文地上に蛇行する条線文を垂下させている。同図25は無文の口縁部片で、縦位の成形痕が認められる。

本土坑の構築時期は、出土遺物から縄文時代後期後葉頃と考えられ、廃棄の際に埋め戻された可能性が高い。また、規模と形状から貯蔵穴と考えている。
(山 岸)

7号土坑 SK 7(図109・121、写真56)

本遺構は、B 9-1グリッドに位置し、調査区南部西端の段丘平坦面に立地している。遺構検出面はL V上面である。なお、本遺構周辺はL IVを欠層していた。本遺構と重複する遺構はなく、北東方向にS K 8・9が隣接している。また、東側の斜面部に多くの竪穴住居跡が分布している。遺構内の堆積土は3層に分けた。堆積土中には、周壁から崩落したとみられる礫が混入していた。また、いわゆるレンズ状堆積を成すため、いずれも自然流入土と考えている。平面形は梢円形で、長軸長は67cm、短軸長は60cmである。底面は中央付近が窪み、周壁は急角度で立ち上がっている。検出面からの深さは、53cmである。

遺物は、堆積土中から後・晩期の土器片11点と比較的大型の焼骨片が出土している。図121-26・27は深鉢の頸部片である。26は縄文地上に沈線が巡り、27には非結束の羽状縄文が施されている。

骨片は、イノシシの可能性の高い頭蓋骨と肋骨と同定され、食料の残滓が本遺構の堆積過程で流入したと考えている。

段丘平坦面で検出された小規模な土坑である。SK 8・9と東西方向に直線的に並んでいる。堆積土や出土土器から、縄文時代後~晩期の遺構と考えている。その性格については、明らかにできなかった。
(今 野)

8号土坑 SK 8(図109・121, 写真56)

本遺構は、B 9 - 1 グリッドに位置し、調査区南部西端の段丘平坦面上に立地している。遺構検出面は、LV上面である。本遺構と重複する遺構ではなく、南西方向にSK 7が、北東方向にSK 9が1.5mほどの距離をおいて隣接している。また、東側の斜面部に多くの豊穴住居跡が分布している。遺構内堆積土は、2層に分けた。 ℓ 1は褐色土、 ℓ 2は灰黄褐色土で、ともに周壁から崩落したとみられる径10cm前後の礫が多く含まれていた。 ℓ 1・2とも、自然堆積と考えられる。平面形は不整な梢円形で、長軸長101cm、短軸長92cmである。底面は中央付近が緩く窪み、周壁は急角度で立ち上っている。検出面からの深さは、81cmである。

遺物は、堆積土中から縄文時代後～晩期と見られる土器細片15点と焼骨片が出土している。図121-28は深鉢の胴部片で、非結束の羽状縄文が施されている。骨片はイノシシの可能性のある大型獣類の四肢骨片で、出土量も少なく詳細は不明である。

段丘平坦面上で検出された土坑である。SK 7・9と直線的に並んでいる。堆積土や出土土器から縄文時代後～晩期の遺構と考えている。その性格については、明らかにできなかった。(今野)

9号土坑 SK 9(図109・122・134, 写真57)

本遺構は、調査区南部西端のB 8 - 14・B 9 - 2 グリッドに位置し、段丘平坦面上に立地する。遺構検出面は、LV上面である。本遺構と重複する遺構ではなく、南西方向にSK 7・8が隣接している。また、東側の斜面部には多くの豊穴住居跡が分布している。遺構内堆積土は、3層に分けた。 ℓ 1～3とも、径10cm前後の礫を含んでいる。また、 ℓ 3には焼土粒が多く含まれていた。いずれも、自然堆積土と考えている。平面形は、不整な方形である。長辺は160cm、短辺は134cmである。底面は概ね平坦で、中央付近が若干低くなっている。周壁は、垂直に近い角度で立ち上がる。検出面からの深さは、55cmである。

遺物は、縄文時代後期後葉と見られる粗製土器の破片が多く出土している。その多くは、同一個体の可能性があり、図122-1～4に示した。歯数3本程度の比較的太目の工具による条線文が描かれた粗製の深鉢である。口縁直下に連弧文状に条線を巡らせた後、同じ工具を用いて縦位の波状文を描いている。図134-1は、基部が太く長い有茎石器である。側縁は湾曲し、全体的に形状は整っていない。

段丘平坦面上で検出された土坑である。SK 7・8と直線的に並んでいる。堆積土や出土土器から、縄文時代後～晩期の遺構と考えている。その性格については、明らかにできなかった。

(今野)

10号土坑 SK 10(図109・122, 写真57)

調査区中央部の南側、C 6 - 14グリッドの平坦面上に位置する。検出面はLV上面である。SB 5

と重複し、本遺構が新しい。また、北側にはSK6・24・25が、南側にはSK22・23が近接している。平面は楕円形で、東西にやや長い。規模は長径が200cm、短径が170cm、深さが100cm前後と大型である。壁はいずれも垂直に近い角度で立ち上がり、底面はほぼ平坦である。遺構内堆積土は6層に分けられ、いずれも黒褐～暗褐色系の色調で流入状態を示していることから、自然堆積と考えている。

遺物はℓ2から縄文土器片28点が出土した。図122-5は平行沈線間に細かな刻みと円形の刺突文を充填している。同図6は口縁部に沿った平行沈線間に、「ハ」の字状の刺突を施している。同図7は沈線で区画した帯状の区画文内に、粘土の高まりをコブ状に残した刺突を加えている。また、区画文外の無文部は磨かれ弱い光沢を帯びている。同図8は深鉢形土器の胴部上半である。平口縁に沿って巡る沈線から山形状に蛇行する細く多条の条線文を垂下させている。

本土坑の構築時期は、出土遺物から縄文時代後期後葉以降と考えている。また、規模・形状から大型の貯蔵穴と考えている。(山岸)

11号土坑 SK11(図109、写真57)

調査区中央部の南側、C7-2グリッドに位置し、LIV上面で検出した。SK12と重複し、本土坑が新しい。平面は楕円形を基調とし、南北方向にやや長い。規模は長径が100cm、短径が80cm、深さは15cmと浅い。壁は緩やかに外傾し、底面はほぼ平坦である。遺構内堆積土は2層に分けられ、いずれも自然堆積と考えている。遺物は出土していない。

本土坑の構築時期は、SK12との重複関係から縄文時代後期後葉～晩期前葉頃と考えている。性格については判断できない。(山岸)

12号土坑 SK12(図109・122、写真57・82)

調査区中央部の南側、C7-2グリッドに位置する。SK11の精査中、東側壁面で重複しているのを確認した。新旧関係は本土坑が古い。平面は楕円形を基調とし、南北方向にやや長い。規模は長径100cm、短径80cm、深さ60cmである。壁は急角度で外傾するが、周壁は全体的に整っていない。また、底面は平坦であるが、北側から南側に向かって僅かに傾斜している。遺構内堆積土は3層に分けられ、ℓ3とした黒褐色土が底面から厚く堆積していたが、堆積過程は判断できない。

遺物はℓ2からℓ3下位にかけて、ほぼ完全形の深鉢形土器が横位状態で出土した。図122-9は丸みをもって膨らむ胴部の中央付近がくびれ、口縁部に向かって直線的に外傾する器形で、底部にはやや外側に張り出した小さな台が付けられている。平口縁下と胴部のくびれ部に平行線で区画した縄文帯を巡らせ、その間に充填縄文による大柄な帯状の入組文を横位に展開させている。また、入組文の起点には円形の刺突が施され、無文部にはこの刺突文を挟み込むように、対向する三叉状の沈線文が描かれている。

本土坑の構築時期は、出土遺物から縄文時代後期後葉と考えられる。形状がやや異なるが、その規

模から貯蔵穴としての性格を考えている。また、出土土器の性格については判然としない。(山 岸)

13号土坑 S K13(図110・122, 写真57)

調査区中央部の南端、B 7 - 16グリッドに位置する。検出面はL IVである。重複する遺構はないが、北側にS B 3、東側にS K 65・20・62が所在する。平面は比較的整った円形で、規模は径が150cm、深さ45cmである。底面・周壁ともに整っており、平坦な底面から壁が直線的に外傾している。遺構内堆積土は4層に分けられ、いずれも流入状況を示していることから自然堆積と考えている。

遺物は ℓ 1・2から縄文土器片が124点出土している。図122-10・11は無文地の深鉢形土器の平口縁部片で、10には口縁部に沿った沈線が、11には密な条線文が施されている。同図12・13は沈線区画による帯状の圓形内に縄文を充填している。同図14・15は浅鉢形土器の口縁部片と考えられ、圓形の刺突文を挟み込むように三叉状の沈線文が描かれている。同図17・18は同一個体で、異形土器または土製品の一部と考えられる。本来の形状は不明であるが、平行沈線による区画内に三叉状の沈線文が施され、僅かであるが赤色顔料の付着が認められる。同図16・19は壺形土器の胴部片で、丁寧に磨かれた器面には沈線による曲線圓形が描かれている。

本土坑の構築時期は、出土遺物と周辺遺構との比較検討から縄文時代後期後葉頃と考えている。また、性格については規模・形状から貯蔵穴と考えている。

(山 岸)

14号土坑 S K14(図110・123, 写真82)

調査区南部の南西端、B 9 - 16グリッドの緩斜面上に位置する。遺構検出面はL II c上面である。重複する遺構はないが、周辺には埋甕が集中している。平面は整った梢円形で、東西に長い。規模は長径134cm、短径100cm、深さが26cmである。壁は緩やかに外傾し、底面はほぼ平坦であるが斜面下位の東側に僅かに傾く。遺構内堆積土は1層で、堆積過程は判断できない。

遺物は深鉢形土器3個体が堆積土中から散在して出土した。図123-1は平口縁の断面が三角形状にやや内側に膨らむ。口縁に沿って沈線を巡らせ、無文の口縁部と縄文地の胴部を区画している。胴部には底部付近を除き、斜行縄文が密に施されている。また、器面には細かな炭化物の付着が認められる。同図2は櫛歯状工具による不連続な条線文が斜位方向に施され、曲線圓形を描かない。無文の胴部下半は部分的に橙色に変色し、底面には本葉の圧痕が認められる。同図3は無文の胴部下半で、器面は緩から斜位方向に比較的丁寧に磨かれている。

本土坑の性格については不明であるが、構築時期については出土遺物から縄文時代後期中葉頃と考えている。

(山 岸)

15号土坑 S K15(図110・123, 写真57)

調査区中央部の南側、C 6 - 16グリッドに位置する。遺構検出面はL IV上面で、近接する遺構はない。平面は不整な梢円形で、東西に長い。規模は長径180cm、短径120cm、深さ70cmである。壁は

やや内側に膨らむように立ち上がり、底面は中央付近に高まりが認められる。遺構内堆積土は2層に分けられ、 $\ell 1$ は自然堆積と考えているが、 $\ell 2$ の堆積過程については判断できない。

遺物は $\ell 1$ から縄文土器片8点が出土している。図123-4~6はいずれも焼成が堅敏な土器片で、4には密な条痕文が縦位に施され、胎土に金雲母片が含まれている。5・6の内面には条痕文が顕著に認められる。

本土坑の構築時期は、出土遺物と堆積土の比較から縄文時代早期後葉頃と考えている。性格については、形状がやや異なるものの、その規模から貯蔵穴と考えている。
(山岸)

16号土坑 SK16(図110)

本遺構は、調査区南部のC 7-10・11・14・15グリッドに位置する。段丘縁辺部の南東方向に下る緩斜面部に立地している。L IV上面でS I 20とともに検出された。S I 20よりも、本遺構の方が新しいことを確認している。遺構内の堆積土は、2層に分けた。 $\ell 1$ は、細かい礫を多く含む黒褐色土で、炭化物粒の混入が見られた。 $\ell 2$ は、黒褐色土と周壁から崩落したとみられるL IVの混合土である。 $\ell 1$ ・ 2 とも、自然堆積土と考えられる。平面形は隅丸方形で、長辺は192cm、短辺は153cmである。底面はほぼ平坦で、細かい凹凸が見られた。周壁は、急角度で立ち上がっている。検出面からの深さは46cmである。遺物は出土していない。

本遺構は、S I 20と重複し、本遺構の方が新しい。のことから、縄文時代前期前葉以降のものと考えられる。その性格については、明らかにできなかった。
(今野)

17号土坑 SK17(図110・123、写真57)

本遺構は、調査区南部のC 7-15グリッドに位置する。周囲の地形は、南東向きの斜面となっている。S I 21の掘り込みを行ったところ、その床面で本遺構の平面形が捉えられた。確認面は、斜面下位にあたる部分がL II、斜面上位側はL III~IVである。遺構内の堆積土は3層に分けた。 $\ell 1$ は焼土粒をわずかに含む黒褐色土である。 $\ell 2$ ・ 3 は、周壁から崩落したと見られるL IVの塊を含んでいる。いわゆるレンズ状堆積をしていること、周壁の崩落土が見られることから、 $\ell 1$ ~ 3 は自然堆積と考えられる。平面形は円形に近く、長軸長は125cm、短軸長は118cm、検出面からの深さは33cmである。底面は中央付近が若干低く、周壁は垂直に近い角度で立ち上がっている。

遺物は、 $\ell 2$ から縄文土器細片8点が出土した。図123-7・8は、深鉢の胴部片である。7の外側には縄文、内面には条痕文がみられる。8の文様は地文のみで、原体はRLとみられる。いずれも胎土中に纖維混和痕が認められる。

本遺構は、その規模や円形であること、周壁が垂直に近いことなどから、貯蔵穴の可能性がある。S I 21と重複し、本遺構の方が古い。のことから、縄文時代前期前葉より古い時期の遺構と考えられる。
(今野)

18号土坑 S K18(図110・123・134、写真57)

調査区中央部の北西端、A 4-12グリッドの平坦面上に位置する。L III上面で検出した。重複する遺構はなく遺構の希薄な場所に位置する。平面形は南北にやや長い楕円形で、底面付近は段面が円柱状を呈し、周壁の上部は緩やかに立ち上がる。規模は東西170cm、南北194cm、深さが84cmを測る。遺構内堆積土は5層に分けられた。レンズ状や三角状に堆積することから自然堆積と考えられる。

(中野)

遺物は縄文土器約200点、剥片類4点と石器1点が、 ℓ 3~5にかけて比較的多く出土している。図123-9・12は口縁部に沿って縦条体压痕が施されている。同図10・11は貝殻腹縁による押引き状の刺突と連続した山形状の浅い沈線文を、同図13は平行沈線の区画内に貝殻腹縁による連続刺突文を施している。同図14・16~18は貝殻条痕が施され、内面では横位に、外面では縱位に施される傾向が認められる。また、14には貝殻腹縁による連続刺突文が施されている。同図19・20は無文土器で、色調は黒褐色を呈し、焼成は堅密である。

図134-2は無茎石錐で、基部の抉りは比較的弱く弧を描く。剥離調整は全体に施され、整った形状となっている。

本土坑は規模・構造から貯蔵穴を、構築時期については出土遺物から縄文時代早期中葉頃を考えている。

(山岸)

19号土坑 S K19(図111・123)

調査区中央部の南西側、B 7-11グリッドに位置する。L IV上面で、S B 1のP 1と共に検出した。北半側でS I 10, S B 1と重複し、本土坑が最も古い。平面は円形を基調とするが、南北方向がやや長い。壁は、内側に傾く南西部を除き、いずれも直線的に外傾する。底面はほぼ平坦であるが、壁際から中央に向かって僅かに傾いている。規模は長径150cm、短径120cm、深さ20cm程である。遺構内堆積土は2層に分けられ、壁際から底面には壁の崩落に起因する ℓ 2が堆積しており、いずれも自然堆積と考えている。また、本来の断面はフラスコ形であった可能性が高い。

遺物は縄文土器片21点、剥片1点が出土している。図123-21は平口縁部に沿った沈線区画帶内に小さいコブを等間隔で付加している。同図22は沈線で区画された半円状の圓形内に斜行縄文を充填している。

本土坑の構築時期については、出土遺物と重複関係から縄文時代後期後葉頃と考えられる。また、その形状・規模から貯蔵穴と考えている。

(山岸)

20号土坑 S K20(図111・124・134・135、写真58・82)

調査区中央部の南西端、B 7-16グリッドの南側への緩斜面上に位置する。検出面はL Vである。重複する遺構はないが、西側にS K13、北側にS K65、南側にS K62・66が接する。平面形

は南北にやや長い楕円形で底面は平らに掘削されていた。段面は円柱状を呈するが西壁側はオーバーハンプする。規模は東西162cm、南北180cm、深さが74cmを測る。遺構内堆積土は4層に分けられた。レンズ状や三角状に堆積することから自然堆積と考えられる。

(中野)

遺物は縄文土器約1,000点、剥片約20点と石器4点が出土している。遺構内堆積土の各層からまんべんなく出土し、一括廃棄等の特殊な行為は認められない。

図124-1～3は底面からℓ4にかけて出土した土器片である。1は平行沈線と半円状の区画文内に縄文を充填し、小さなコブを貼り付けている。2・3は壺または注口土器の口縁部片で、平行沈線の区画帶内に小さなコブが認められる。

同図4～11はℓ2～3の出土土器である。4はほぼ完全形の鉢形土器で、口縁部には山形状の小突起がつけられている。胴部には並行沈線による区画帯を3段に巡らせ、その内に斜行する短沈線を充填している。5・9～11は条線文が施された土器で、5・9は横位方向に、10・11は横位と蛇行して垂下する条痕文を施している。6は胎土に纖維痕和痕が認められる。7には蛇行して垂下する沈線文が施されている。8は平行沈線の区画帶内に小さなコブを貼り付けている。

同図12～19はℓ1出土の土器である。12～15は平口縁に沿って巡る平行沈線区画帯内に主要文様を描く土器である。12の口縁部には山形状の小突起が付けられ、連弧状の沈線文と綫長のコブが、沈線の起点に付けられている。13は縄文帯内に小把手を配し、それを起点として横長の眼鏡状の無文部を沈線で区画している。14・15は沈線区画内に向対する連弧状の沈線文を、区画外には斜行する短沈線を連続して施している。16は山形状の突起に沿った平行沈線の区画の起点に、17は沈線区画による曲線图形内に小さなコブが付けられている。18は壺形土器の口縁部付近と考えられ、口縁端部と頸部の屈曲部に平行沈線による区画帯を巡らせ、その内に小さなコブを等間隔に配置している。19は帯状の沈線区画内に縄文を充填している。

図134-3～5は石錠である。3・4は有茎石錠で、4は茎部を欠損する。いずれも側縁と茎部は内湾気味に緩やかな弧を描く。3は剥離調整が全体に施され整った形状となっている。4は背面中央に素材の剥離面を大きく残している。5は無茎石錠の未成品と考えられ、全体的に剥離は大きく、素材の厚みも残している。図135-6は磨石で、亜円錐の両面中央付近に使用痕が認められる。また、片面の中央には敲打による潰れがある。

本土坑は形状から貯蔵穴と考えられ、構築時期については出土遺物などから縄文時代後期後葉頃と考えている。

(山岸)

21号土坑 SK21(図111)

調査区中央部の南端、C7-5・9グリッドの南側への緩斜面上に位置する。LV上面で検出した。重複する遺構はないが、西側にS110、南側にSK5が近接する。平面形は東西に長い楕円形で、底面は平らに掘削され、周壁は緩やかに立ち上がる。規模は東西115cm、南北100cm、深さが14cmを測る。遺構内堆積土は黒褐色の单層で、堆積状況は不明である。

遺物は縄文土器片6点、利刀片1点が出土している。縄文土器はいずれも細片で図示できない。

本遺構は浅い土坑であるが機能については不明である。遺構の所属時期は他の遺構との関係から縄文時代後期後葉頃と考えられる。

(中野)

22号土坑 S K22(図111)

調査区中央部の南側、C 7-2グリッドの南側への緩斜面上に位置する。LV上面で検出した。SK23と重複するが、擾乱と誤認して掘り過ぎたため新旧関係は不明である。南側にSK11・12が近接する。平面形は東西に長い梢円形で、底面は平らに掘削され、断面はポール状を呈する。規模は東西110cm、南北76cm、深さ44cmを測る。遺構内堆積土は黒褐色の単層で、堆積状況は不明である。遺物は出土していない。

本遺構は断面がポール状を呈する土坑であるが機能については不明である。遺構の所属時期は他の遺構との関係から縄文時代後期後葉頃と考えられる。

(中野)

23号土坑 S K23(図111・124)

調査区中央部の南側、C 7-2グリッドの南側への緩斜面上に位置する。LV上面で検出した。SK22と重複するが新旧関係は不明である。また、SB5と重複し本遺構が古い。南側にSK11・12が近接する。平面形は円形で、底面は平らに掘削され断面はポール状を呈する。規模は東西100cm、南北100cm、深さ30cmを測る。遺構内堆積土は黒褐色の単層で堆積状況は不明である。

遺物は縄文土器片が24点出土している。図124-20は櫛歯状工具を用いて縱位に垂下する波線文を描いている。

本遺構はSK22と同様な断面がポール状を呈する土坑である。機能については不明である。遺構の所属時期は他の遺構との関係から縄文時代後期後葉頃と考えられる。

(中野)

24号土坑 S K24(図111、写真58)

調査区中央部の南側、C 6-14グリッドの南側への緩斜面上に位置する。LVで検出した。重複遺構はなく、南側にSB2・5、SK6、北側にSK25が位置する。平面形は円形で、底面は平らに掘削され断面はポール状を呈する。規模は東西90cm、南北90cm、深さ18cmを測る。遺構内堆積土は砂粒を多く含む黒褐色の単層で堆積状況は不明である。

遺物は縄文土器片が1点出土しているが、細片のため図示できない。

本遺構は円形で断面がポール状を呈する土坑であるが機能などは不明である。遺構の所属時期は他の遺構との関係から縄文時代後期後葉頃と考えられる。

(中野)

25号土坑 S K25(図111・124・135、写真58)

調査区中央部の南側、C 6-10・14グリッドの平坦面上に位置する。LVで検出した。重複する

第2章 遺構と遺物

遺構はなく南側にS B 2・5, S K 6・24, 東側にS K 80が位置する。平面形は南北にやや長い楕円形で、底面は平らに掘削され、底面付近は段面が円柱状を呈し、周壁の上部は緩やかに立ち上がる。規模は東西160cm、南北164cm、深さが44cmを測る。遺構内堆積土は2層に分けられた。レンズ状に堆積することから自然堆積と考えられる。

遺物は全体形がほぼ分かる縄文土器1点、剥片2点と石器1点が出土している。図124-21は砲弾形を呈する深鉢形土器で、口縁部は低い山形が連続した作りとなっている。山形の基点に継位の隆帯を貼り付け、その上に二本一組の角棒状工具による押引き文が認められる。同一の工具による押引きで口縁端部と隆帯の下端を結び、その間に三角形状の区画を表出している。地文として刷毛状の工具による細かな条痕が施されているが、器内面の胴部下半を除き、ナデによる再調整が行われ、部分的にしか遺存していない。色調は全体的に黒褐色で、胎土には白色の細粒砂を含み、焼成は堅緻である。図135-7は磨石で、亜円碟の一側縁に磨面を持つ。

本遺構の機能は断面形から貯蔵穴と考えられる。遺構の所属時期は出土遺物などから縄文時代早期中葉頃と考えられる。

(中野)

26号土坑 S K 26(図112)

調査区中央部の南西端、B 7-12グリッドに位置し、L IV上面で検出した。重複する遺構はないが、西側にS I 10とS M 8が隣接する。平面は検出面で楕円形を呈するが、底面は整った円形となっている。断面はピーカー形を呈するが、底・壁面とともに凹凸が認められ、全体的に整っていない。規模は検出面で長径80cm、短径65cm、深さ35cm、底面は径60cmである。遺構内堆積土は1層で、堆積状況は判断できない。遺物は出土していない。

本土坑の構築時期については、周辺遺構との堆積土の比較から縄文時代後期後葉頃と考えている。また、性格については小型の貯蔵穴と考えられ、近接する竪穴住居跡との関連性が高い。(山岸)

27号土坑 S K 27(図112・135・136、写真58)

調査区中央部の南側、C 6-9グリッドの平坦面上に位置する。L IV上面で検出した。S I 26, S B 4と重複し本遺構が古い。平面形は東西に長い楕円形で、底面は平らに掘削され断面は円柱状を呈する。規模は東西96cm、南北116cm、深さ40cmを測る。遺構内堆積土は2層に分けられた。堆積過程から人為的に埋め戻された可能性がある。

遺物は石器が2点出土したのみで、土器片は出土していない。図135-8は敲石で円碟の表裏面と側縁の中央付近に敲打による潰れが認められる。図136-1は石皿の破損品で扁平な楕円碟を素材とし、上面に皿状に僅かに窪む使用面が認められる。

遺構の所属時期は他の遺構との関係から縄文時代後期後葉頃と考えられる。

(中野)

28号土坑 S K28(図112・125, 写真58・82)

調査区中央部の南側, C 6 - 2 グリッドの平坦面上に位置する。L IVで検出した。重複する遺構はない。平面形は概ね円形で、底面は平らに掘削され、底面付近は段面が円柱状を呈し、周壁の上部は緩やかに立ち上がる。規模は東西135cm、南北140cm、深さが48cmを測る。遺構内堆積土は4層に分けられた。堆積状況は自然堆積と考えられる。

(中野)

遺物は縄文土器片約400点、剥片・蝶類15点が出土している。遺物は出土層位をℓ 2・3として取り上げ、図125に層位ごとに示したが、本来はℓ 4上面に一括して帰属するものである。

1・2・5・8・10・11は深鉢・鉢形土器である。1は胴部から口縁部に向かって直線的に外傾する器形で、平行沈線で区画された文様帶が胴部上半に位置する。文様帶内には末端がUターンする平行沈線を一段置きに配置している。また、文様帶部分のみ斜行する条線を地文としている。10も同様の器形と文様帶を持つ土器で、条線を地文として斜行沈線を施し、更に平行沈線を加えている。2は口縁部との境に屈曲部をもつ土器で、屈曲部には竹管による連続刺突が施されている。胴部には沈線区画の大柄な曲線图形が描かれ、图形内には充填縄文が施されている。5には斜行縄文が、11には斜行する条線が施されている。

3・4・6・9は深鉢か広口の壺形土器と考えられる。3・9は口縁部片で、3は縄文、9は条線施文後、平口縁に沿って沈線が巡らされている。4は胴最張部付近に沈線を巡らせ、縄文部と無文部を区画している。6は胴部下半で、斜行縄文は底部付近には施されていない。また、底面には網代編圧痕が認められる。

7・12は長口縁の壺形土器である。7は平口縁に沿って沈線で区画した縄文帯を巡らせ、胴部との境を沈線で区画し、胴部に充填縄文を施した大柄な曲線图形を描いている。12は斜位や横位に縄文の回転方向を変えて施文している。13の器形は判然としないが、平行沈線の区画内に刻みを加えている。

本土坑は規模・形状などから貯蔵穴と考えている。出土遺物については、使用しなくなった貯蔵穴に一括廃棄したものと考えている。構築時期については、出土遺物などから縄文時代後期中葉頃と考えられる。

(山岸)

29号土坑 S K29(図112・126・134・135, 写真58)

本遺構はB 6 - 3 グリッドに位置する。S I 24と重複している。S I 24内堆積土を掘り込み、炉を壊していることにより、本遺構が新しい。骨片を含んだ黒色土の円形として、S I 24堆積土より確認した。

平面形は径約1.1mの円形を基調としている。検出面から底面までの深さは102cmを測る。底面は蝶層を掘り込んで造られている。底面は丸みを帯びて壁面に到る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、開口部で大きく開く。この開口部は壁面の崩落による広がりの可能性もある。

堆積土は2層確認した。黒色土を主体とした層で、炭化物や骨片、土器片が多量に混入する。いずれの層も人為堆積と判断した。

本遺構からは947点の土器片、67点の石器片が出土している。図1・2からそれぞれ多量に出土した。出土遺物は図126-1~14に図示した。

1は小型甕である。器壁は薄く、精緻である。口縁部には2つの頂部をもつ突起が、1cm程度の間隔で付加される。口縁部文様帶には羊歯状文が描出されている。胴部文様帶には斜縄文を施文後、4条の綾縦文を加えている。2は大きく内湾する口縁部資料である。注口土器か浅鉢器形になると思われる。口縁部文様帶は狭く羊歯状文を描出している。口唇部には、2つの頂部をもつ突起が付加される。胴部には斜縄文が施文されている。3は小型甕の口縁部破片である。口縁部文様帶には、くずれた三叉文が看取できる。4は口縁部に2条の横位沈線が引かれた、深鉢または甕の口縁部資料である。地文は縄文のみである。5は口縁部文様帶がわずかに認められることから、口縁部に近い胴部資料である。器形は深鉢になると推測できる。口縁部文様帶には、器表面を磨いた後に2条の横位沈線を施文する。6は丸みを帯びた器形で、口縁部に近い資料と考えられる。浅鉢か注口土器と考えられる。わずかに認められる口縁部文様帶には、浮き彫り手法による文様を描いているが、遺存する幅が狭いためモチーフは明確ではない。胴部には縄文に3条の綾縦文が加えられている。7は甕または深鉢の胴部資料である。つぶれた羊歯状文が認められる。縄文に綾縦文が認められる。この1~7は文様の特徴から縄文時代晩期に比定され、V群1類から2類にかけての資料と考えられる。

8は口辺突起の頂部に、棒状工具により2つの刻みが施されている。外面には縄文施文後、沈線を引いている。胎土には白色砂粒が混入する。9は甕または深鉢の口縁部である。おそらく三叉文のようなモチーフを描くと思われる。丁寧に磨かれた精緻な土器である。10は口唇部がやや肥厚する堅質な土器である。沈線間に瘤を付している。11も口縁部資料で、堅質な土器である。口唇部は角頭状となり、突起が付加される。縁位に短い沈線が、密に施されている。12は深鉢土器の胴部資料である。口縁部文様帶と胴部文様帶の境部分の資料である。口縁部文様帶には沈線によりモチーフを描き、モチーフ内には磨り消し縄文が認められる。胴部文様帶は、沈線間に棒状工具により列点を施している。13は粗製深鉢の口縁部資料である。13は内湾する器形である。条線により直線・曲線文を描く。14は注口土器のミニチュアである。無文で注口部を欠損している。8~13はIV群2類の範疇に入る資料である。

石器は図134・135に8点図示した。図134-6~11は石鏃を掲載した。6~9は無茎凹基、10は木葉形をした有茎石鏃、11は未成品と判断した。6・7・9はそれぞれ欠損が見られるが、縁辺部は丁寧な押圧剥離による剥離調整を行っている。8は小型であり、やや平基に近い。断面形は菱形となる。10は有茎石鏃である。平面の形は菱形に近い。11は裏面に大きく剥離面を残している。一側縁には剥離調整をしているが、もう一側縁に剥離調整は行われていない。厚さを減じ切れなかったと考えられる。

図135-2は自然面を大きく残した打製石斧として用いられたと考えられる。主要剥離面を大きく残し、側縁にも加撃を与えて形態を整えている。刃部は剥離により、急激な角度を作り出している。同図3はよく磨かれた石製品である。全周囲が磨かれ、細かな擦痕が認められる。下部は欠損している。

本遺構は平面形や断面形から貯蔵穴の機能を有した土坑であると考えられる。後に土器捨て場として、または骨片が多量に出土する状況から、祭祀を行った遺構である可能性が考えられる。時期については出土遺物より、縄文時代晚期前葉と考えられる。

(三 浦)

30号土坑 S K30(図112・126・134, 写真58)

本遺構は調査区北部の平坦面であるA 3-8・12グリッドに位置する。近接して、北東4mにSK32が位置する。検出面はL IVで、暗褐色土のほんやりした円形として確認した。

平面形は径約1.2mの円形を基調とする。検出面から底面までの深さは41cmを測る。底面はほぼ平坦である。壁面は丸みを帯びながら立ち上がり、垂直になる。南壁と底面の一部は、擾乱により壊されている。

堆積土は4層に区分した。 ℓ 1・2は流入土で自然堆積、 ℓ 3は層境が不自然であるため人為堆積土の可能性が高い。 ℓ 4は壁面崩落土と判断した。

本遺構からの出土遺物は縄文土器片133点、石器片13点である。図126-15~19に図示した。15は口縁部資料で、波状口縁の深鉢となる。口縁部には横位の断面三角形の隆帯が貼り付けられ、その隆帯上下には、押引き文が施文されている。胎土には雲母の混入が目立ち、意識して混入しているようである。16~19は深鉢の胴部資料である。16は口縁部に近い資料と考えられる。半裁竹管によるコの字状の押引きが横位に施されている。胎土には長石粒が目立つ。17は外面に条痕文、18は内外面に条痕文が認められる。19は器壁が薄く、胴部下半の資料である。内外面は磨かれている。

石器は石鏨を2点図示した。図134-12・13はいずれも無茎凹基石鏨であり、形は二等辺三角形となる。13は一側縁が大きく欠損している。

本遺構は円形を基調とした土坑である。平面形や断面形より貯蔵穴と考えられる。堆積土の状況や出土遺物の年代観より、縄文時代早期中葉と考えられる。

(三 浦)

31号土坑 S K31(図112・126, 写真58・82)

本遺構は調査区北部平坦面のA 2-10・11・14・15グリッドに位置する。近接して北1mにSK33が位置する。暗褐色土のほんやりした円形として、L IVより検出した。

平面形は径約1.7mの円形を基調とする。検出面から底面までの深さは1mを測る。底面は平坦に造られている。壁面は垂直に立ち上がり、開口部に剝る。断面形は長方形となる。

堆積土は8層に分けた。 ℓ 1~4はレンズ状堆積となることから流入土である。暗褐色土を基調とした土層である。 ℓ 7の直上の ℓ 4からは、縄文時代早期中葉の完形土器(図126-20)が出土した。

ℓ 7は層境も不自然であることから人為堆積の可能性を考えている。ℓ 5・6は壁面崩落土で自然堆積である。ℓ 8はℓ 7とともに人為堆積と考えられる。

本遺構からの出土遺物は縄文土器片156点、石器片5点である。多くの遺物は、図126-20とともにℓ 7直上のℓ 4より出土している。図126-20~30に図示した。20はℓ 4内からつぶれた状態で出土した。4つの波頂部をもち、各頂部から隆帯が垂下する。頂部間の最も低い口縁部の位置には、それぞれ小突起が付加されている。隆帯上には横向きの縦条体圧痕が認められる。隆帯間には隆帯同士を連絡するように、5条の縦条体圧痕が施文されている。この縦条体圧痕と隆帯とで、口縁部文様帯を形成している。土器内面には底部から胴部下半にかけてコゲが付着している。また、外面には口縁部から胴部上半にかけてコゲが付着している。胎土には白色砂粒がわずかに認められるのみで、胎土を選別して用いたようである。

21は大波状口縁となる資料である。波頂部からは、縦条体圧痕を施した隆帯が垂下する。22・23は口縁部資料である。外面には2条の縦条体圧痕が施文される。24は横位の平行沈線文が施文されている。25は口縁部に近い胴部資料である。縦条体圧痕2条を1組として、山状に施文している。26の外面には沈線と押引きが観察できる。27は器壁が薄い、胴部下半にあたる資料である。28は条痕地文にヘラ状工具による押引きが認められる。29・30は地文のみの資料である。29は外面に条痕が施文される。30の外面は無文、内面には条痕が施文されている。

本遺構は出土遺物より縄文時代早期中葉の時期の土坑である。この時期の土坑としては比較的規模が大きい土坑である。機能は規模や形態より、貯蔵穴と考えられる。

(三浦)

32号土坑 SK 32(図113・134・136)

本遺構は調査区北部平坦面のA 3-8、B 3-5グリッドに位置する。近接して南西4mにSK 30、北4mにSK 35・36が位置する。大きな黒褐色土のはんやりした円形として、検出した。調査当初、堅穴住居跡と判断し、土層観察帯を十字に設定して調査を開始した。掘り下げるに人頭大の礫や大堀相馬焼が出土することから、住居跡ではなく、井戸跡または土坑と判断し、さらに底面が深くなると想定できることから、土層観察帯を再設定し、2分割法を用いて調査を進めた。

平面形は径約3.6mの円形を基調としている。検出面から底面までは、3.6mを測る。底面はLVを掘り込んで造られている。底面は凹凸が激しく、大きくオーバーハングする部分やLVが残っている部分など、形を整えながら掘り込んでいる意図は認められない。また、崩落も影響しているとも考えられる。

堆積土は24層に区分したが、大きくはℓ 1~5、ℓ 6~17、ℓ 18~24の3つに分層される。ℓ 1~5は近代の大堀相馬焼や人頭大の礫が含まれる層である。いずれも人為堆積によるものと考えている。ℓ 6~17では出土遺物はなく、黄褐色粘土が堆積土に含まれる。黒褐色土と黄褐色粘土の互層となる。主に壁面崩落土や流入土である。ℓ 18~24は黄色粘土と砂質土、暗褐色土の3種の土層の互層となる。壁面崩落土が主であると考えている。

本遺構からの出土遺物は陶磁器片20点、縄文土器片74点、石器片18点である。図113・134・136に示した。陶器片はすべて大堀相馬焼と考えられ、近隣で焼成され廃棄された資料と考えられる。

図113-1～6には陶器を図示した。1～3は碗で、細かい貫入が入った灰釉が施されている。釉薬の発色や胎土も近似することから、同一の製作による製品である可能性が高い。1は丸碗である。2は腰折碗である。底部から体部にかけて丸みを帯びて立ち上がり、体部から口縁部にかけて直立して立ち上がる器形である。3は窯体内で重ね焼きされた際に、何らかの影響で上下の碗が付着してしまった資料である。重なっている碗の大きさは同じで、同一規格の下で作られた製品である。大量生産である可能性が高い。

4は1次焼成のみの片口である。注口は欠損している。外面胴部下半はケズリ調整の痕跡が明瞭に残る。5・6はすり鉢である。5は鉄釉が施され、6条1単位の工具により条線を引いている。6は1次焼成のみの、すり鉢底部である。内部底面にまで6条1単位の工具により、条線を引いている。重量感のある資料である。

7～11は縄文土器を掲載した。すべて流れ込みによる資料である。7は小突起が貼り付けられた胴部破片である。器表面はよく磨かれている。IV群1類に該当する資料である。8・9は縄文施文の口縁部資料である。8は口縁直下に連続する山形の沈線を描く。II群1類土器である。10は沈線により曲線文を描いた粗製深鉢土器の胴部資料である。11は口縁部に近い胴部資料である。半裁竹管による押引き文を描くことから、縄文時代前期後半の資料であると推測できる。

石器は2点を図示した。すべて縄文時代の石器と考えられ、流れ込みによる。図134-19は縱長剥片を素材とした石匙である。摘み部が欠損している。左側縁は鋭角に、右側縁は急角度に刃部を作り出している。図136-2は重さ10kgを超える縄文時代の石皿である。上面全体に磨り部が認められる。

本遺構は3.5mを超える開口部と底面まで3.6mを測る非常に大きな土坑である。壁面や底面は整えられず、掘り下げたままである。LVは礫層と粘土層が交互に重なった互層であり、この粘土層を目的に掘り下げた土坑であると考えている。LVの粘土層を採取し、大堀相馬焼の窯元で、粘土を焼成していただいた。ゼーゲルコーンを用いて、耐火度測定を行った。粘土そのままで800℃、水蒸した粘土で1,200℃との結果を得られた。良質の粘土層ではなく、この粘土のみでは陶器粘土としての使用は難しいとの判断であった。

本土坑の時期は、上層より出土した遺物より近世から近代にかけてと考えられる。明確な時期の特定は困難であるが、図113-3のような資料が出土することから、大量生産品を製作する19世紀後半以降の時期を想定している。室原地区には3軒の大堀相馬焼の窯家があったとされている。1ヶ所は本遺跡より50m程度の宅地内にあり、家の建て替え時に壊したそうである。その窯家が粘土を採取するために掘り下げた可能性も想像できる。

(三 浦)

33号土坑 SK 33(図112、写真59)

本遺構は調査区北部のA 2 - 10・11グリッドの平坦部に位置する。重複関係はなく、南1mにSK 31が近接する。検出面はL IVで、褐色土の円形として認識した。

平面形は径約1.2mの円形を基調としている。検出面から底面までは13cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁面は丸みを帯びて立ち上がる。堆積土は暗褐色土1層のみ確認した。出土遺物は認められなかった。

本遺構は調査区北部のやや北よりで検出した土坑である。底面まで浅く、堆積土が明確であった。堆積土の状況から近世頃の可能性が考えられる。機能は不明である。
(三 浦)

34号土坑 SK 34(図112・127、写真59)

本遺構は調査区北部のA 2 - 16グリッド平坦部に位置する。重複する遺構はなく、すぐ東にSK 35が位置する。検出面はL IVである。

平面形の規模は長軸115cm、短軸99cmの楕円形である。検出面から底面までの深さは、17cmを測る。底面は平坦であるが、わずかに東が下がる。壁面は丸みを帯びて立ち上がる。堆積土は黒褐色土の1層のみである。礫が多量に含まれることより、人為堆積の可能性がある。

本遺構より縄文土器片61点、石器片1点が出土した。図127-1～9に図示した。1・3～8は縦条体圧痕を横位や斜位に施している。内面には条痕や擦痕が観察できる。2は縦位に隆帯を貼付し、隆帯上に縦条体圧痕を施している。4～6は胎土や色調から同一個体と考えられる。口縁部文様帶と胴部文様帶との境に段を有し、縦条体圧痕を施している。7は口縁部に近い資料であり、外面上にはコゲが看取できる。9は内外面条痕施文である。

本遺構は調査区北部のやや北よりで検出した土坑である。底面まで浅いが、小型の貯蔵穴と考えられる。時期は出土遺物より、縄文時代早期中葉と判断した。
(三 浦)

35号土坑 SK 35(図114・127、写真59)

本遺構は調査区北部のA 2 - 16、A 3 - 4の平坦部に位置する。本遺構の底面より、SK 36の平面形が認められた。本遺構の堆積土中には、SK 36の掘り込みが認められないことから、本遺構が新しい。すぐ西にSK 34が位置する。検出面L IVで、黒褐色土のほんやりとした円形として確認した。

平面形は径約2.7mの円形を基調とする。検出面から底面までの深さは55cmを測る。底面は中央部から周壁にかけて緩やかに傾斜する。壁面は南北壁ではほぼ垂直に立ち上がり、東西壁では傾斜して立ち上がる。堆積土は4つに分層した。①～3は流入土、④は壁面崩落土である。いずれの層も自然堆積と判断した。

出土遺物は縄文土器片12点が出土した。内2点を図示した。図127-10・11とも条痕が認められ

る胴部資料である。

本遺構は直径2.7mを測る規模の大きい土坑である。平面形や断面形より貯蔵穴であると考えられる。時期は出土遺物より、縄文時代早期中葉である。

(三 浦)

36号土坑 S K36(図114, 写真59)

本遺構は調査区北部のA 2 - 16, A 3 - 4 グリッドの平坦部に位置する。S K35の底面より検出した。S K35と重複し、本土坑が古い。

平面形は径約1.5mの円形を基調としている。検出面から底面までの深さは、35cmを測る。S K35の検出面であるL IV上面からの深さは83cmを測り、構築当初は規模の大きい遺構であったことが推定できる。底面は平坦に造られている。壁面は丸みを帯びて立ち上がる。堆積土は暗褐色土の1層のみ認められた。本遺構からは縄文土器片1点が出土したが、図示していない。

本遺構はS K35の底面から検出した、古い土坑である。土坑の上半はS K35により壊されて遺存していないが、形態より貯蔵穴と考えられる。時期は出土遺物とS K35との重複関係より、縄文時代早期中葉以前と考えられる。

(三 浦)

37号土坑 S K37(図114・127・135・136, 写真59)

本遺構は調査区北部の北東緩斜面のB 2 - 9・10グリッドに位置する。検出面はL IVで、ほんやりした黒褐色土の円形として認識した。

規模は径約1 mの円形である。検出面から底面までの深さは23cmを測る。底面はほぼ平坦に造られている。壁面は丸みを帯びて立ち上がる。南東壁の一部は搅乱により壊されている。堆積土は4層確認した。ℓ 1は炭化物が含まれた黒褐色土で、流入土である。ℓ 2・3は疊が混入された暗褐色土で、人為堆積と考えている。ℓ 4は壁面崩落土である。

本遺構からは縄文土器片18点、石器2点である。縄文土器片3点と石器2点を図示した。土器は図127-12~14である。12は口縁部資料で沈線により、波状文を描出す。13は深鉢の胴部資料である。横位の沈線内に縄文を充填する。14は深鉢器形の胴部資料である。縦位の沈線が引かれていく。胎土には多量の砂粒の混入が認められた。

石器は、図135-9の凹石と図136-3の石皿である。

本遺構は形態から貯蔵穴と考えられる。時期は出土遺物より、縄文時代後期前葉と考えられる。

(三 浦)

38号土坑 S K38(図114・127, 写真59)

本遺構は調査区中央部C 5 - 13, C 6 - 1 グリッドに位置する。検出面はL IVで、円形の黒褐色土として認識した。近接して1 m南にS K57が位置する。

平面形は径約90cmの円形である。検出面から底面までは25cmを測る。底面は平坦である。壁面は

北西壁において、底面から丸みを帯びて立ち上がり、壁面中程で内側に押まる。南北東壁では、ほぼ垂直に立ち上がる。おそらくオーバーハングしていた壁面が崩れてしまった状態であると考えられる。堆積土は3層に分けた。 ℓ 1は流入土、 ℓ 2・3は壁面崩落土及び流入土である。

本遺構からの出土遺物は、縄文土器片158点、石器片2点である。図127-15~17に図示した。15は縄文地文のみの口縁部資料である。16は口縁部と胴部の変換点が屈曲する器形で、浅鉢となると推測している。屈曲部より下は縄文施文後、鋸歯状の短沈線を施文している。内外面ともに丁寧に磨かれている精緻な土器である。17は地文縄文のみの深鉢土器の胴部資料である。粘土が柔らかい状態で縄文施文を行っているためか、粘土のヨレが看取できる。

本遺構は残存する北西壁から、フ拉斯コ状の土坑であったことが推測される。機能は形態より、貯蔵穴であると判断した。時期は出土遺物より、縄文時代後期中葉に属す。

(三 湖)

39号土坑 SK 39(図114、写真59)

本遺構は調査区中央部C 6-5・9グリッドに位置する。検出面はL IVで、ほんやりとした暗褐色土の円形として認識した。SK 40と重複して、本遺構が古い。

平面形は不整な格円形である。西壁はSK 40に壊されて遺存していない。遺存規模は長軸130cm、短軸116cmを測る。底面はほぼ平坦に造られている。壁面はほぼ垂直に造られている。堆積土は暗褐色土の1層のみ認められた。本遺構からの出土遺物は認められなかった。

本遺構はSK 40と重複し古いことから、本遺構の時期は縄文時代早期中葉以前と推測している。機能は断言できないが、形態より貯蔵穴の可能性が考えられる。

(三 湖)

40号土坑 SK 40(図114・127、写真59)

本遺構は調査区中央部C 6-5・9グリッドに位置する。SK 39と重複し、本遺構が新しい。検出面はL IVで、ほんやりとした暗褐色土の円形として認識した。

平面は不整な円形で、規模は長軸147cm、短軸135cmである。検出面から底面までの深さは、50cmを測る。底面は平坦に造られている。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。

堆積土は3つに分層した。 ℓ 1は流入土、 ℓ 2・3は疊が混入していることから人為堆積の可能性が考えられる。

本遺構からの出土遺物は、 ℓ 1より縄文土器片17点、石器片2点出土した。図127-18に1点のみ図示した。18はやや丸みを帯びて立ち上がる深鉢土器の口縁部資料である。コの字状の押引きを、横または斜位に施している。口唇部には棒状工具により、刻みを施している。

本遺構は平面形や断面形から貯蔵穴と考えられる。時期は出土遺物より、縄文時代早期中葉と推測される。

(三 湖)

41号土坑 S K41(図114・127, 写真59)

調査区中央部の南西側, C 7-1 グリッドに位置する。検出面はL IVで、北側に堅穴住居跡群が近接している。平面は楕円形を呈し、南北方向にやや長い。断面は丸い鍋底状の底面から壁が緩やかに外傾している。底面・壁共に凹凸が認められ整っていない。規模は長径100cm, 短径80cm, 深さ20cmである。遺構内堆積土は1層で、一部赤変した人頭大・拳大の礫と焼土粒を含み、人為堆積の可能性が高い。

遺物は縄文土器片41点、剥片2点が ℓ 1から出土している。図127-19・20は無文地上に条線文を施すもので、19はやや幅広の、20は細く密な工具を利用している。

本土坑の構築時期については、出土遺物の特徴から縄文時代後期後葉～晚期前葉頃と考えられ、堆積土中に礫・焼土粒を含むことから古い石圓炉を廃棄した土坑の可能性が高い。
(山 岸)

42号土坑 S K42(図115・127, 写真60)

調査区中央部の中央南側, D 5-13グリッドに位置する。本土坑の北側から東側にかけて近接するS K46~48と共に、L IV上面で検出した。平面は円形を基調とするが、南北方向がやや長い。壁は内側に傾く南西部を除き、垂直に近い角度で外傾している。底面はほぼ平坦であるが、壁際から中央に向かって僅かに傾く。規模は長径140cm, 短径120cm, 深さ50cm前後である。遺構内堆積土は7層に分けられ、いずれも壁際からの流込状況を示していることから自然堆積と考えている。また、壁際には、壁の崩落に起因する ℓ 7が堆積していることから本来の断面はフラスコ形であつた可能性が高い。

遺物は縄文土器片26点と剥片類2点が出土している。縄文土器はI群3類に比定される土器片が16点と主体を占めているが、図示できなかった。図127-21は平行沈線間を、「ノ」の字の短沈線で縦位に区画している。同図22は沈線区画の上位に条線状の連続刺突文を、下位に斜行縄文を充填している。いずれの土器片も堆積土の上位からの出土である。

本土坑の構築時期については、出土遺物と周辺の土坑との比較から縄文時代早期後葉頃と考えている。また、その形状・規模等から貯蔵穴としての性格が考えられる。
(山 岸)

43号土坑 S K43(図115, 写真60)

調査区中央部の中央付近, C 5-7グリッドに位置する。北側に近接するS K44と共に、L IV上面で検出した。平面は整った円形を呈する。壁は全体的に内側に傾き、断面はフラスコ形に近い。規模は径100cm, 深さ35cmである。遺構内堆積土は1層で、堆積状況は判断できない。

遺物は縄文土器細片1点、剥片2点が出土したが図示できなかつた。

本土坑の構築時期は、周辺の土坑との比較から縄文時代後期中葉～後葉頃と考えている。また、性格については貯蔵穴を考えている。
(山 岸)

44号土坑 SK 44(図115・128・135, 写真60)

調査区中央部の中央付近、C 5 - 8 グリッドに位置する。南側に近接するSK 43と共に、LV上面で検出した。平面はほぼ円形を呈する。壁は内側に傾く東側を除き、垂直に近い角度で外傾している。規模は径95cm、深さ35cmである。遺構内堆積土は3層に分けられ、いずれも自然堆積と考えている。また、ℓ 2・3には壁の崩落に起因する黄褐色土が含まれていることから本来の断面はフ拉斯コ形と考えている。

遺物はI群3類とIII群2類に比定される土器片11点と石器1点が出土している。図128-1は胎土に多量の細粒砂を含む無文土器で、調整の際の砂粒の移動痕を器面に残している。図135-10は楕円窓の側縁に使用痕が認められる磨石である。

本土坑の構築時期は、出土遺物と周辺の土坑との比較から縄文時代早期後葉頃と考えている。また、性格についても貯蔵穴と考えている。(山岸)

45号土坑 SK 45(図115, 写真60)

調査区中央部の中央付近、C 5 - 12 グリッドに位置する。LV上面で、暗褐色土の広がりとして検出した。平面は円形を基調とするが、全体的に歪み整っていない。底面はほぼ平坦で、壁は急角度で外傾している。規模は径100cm、深さ40cmである。遺構内堆積土は褐色土が主体で、3層に分けた。いずれも自然堆積と考えているが、ℓ 3については判然としない。遺物は出土していない。

本土坑の構築時期については、周辺の土坑との堆積土の比較から縄文時代早期～前期頃と考えている。(山岸)

46号土坑 SK 46(図115・128, 写真60)

調査区中央部の南側、D 5 - 9・13 グリッドにまたがって位置する。南側に近接するSK 42・47と共に、LV上面で検出した。平面は円形を基調とするが、やや整っていない。壁は全体が内側に傾き、断面はフ拉斯コ形を呈するが、底面・壁共に凹凸が認められる。規模は検出面で径110cm、深さ85cm、底面は径130cmである。遺構内堆積土は9層に分けられ、暗褐色土を主体とする。不規則に盛り上がって堆積するℓ 3・6については人為堆積、その他の土層については自然堆積と考えている。

遺物は縄文土器片112点が堆積土中から出土している。図128-2は全体形がほぼ分かれる小型の鉢形土器である。丸底と推定される底部から胴部上半に向かって直線的に外傾し、口縁部で僅かに外反する器形となっている。口縁部は2個1対の山形状の小突起をもった波状口縁で、器内・外面に斜行縄文が施されている。胎土には粗粒砂を含み、纖維混和痕が認められる。同図3は横位の貝殻腹縁文を多段に施している。同図4・5は内面に条痕文、外面に斜行縄文が施され、胎土には纖維混和痕が認められる。

本土坑の構築時期は、出土遺物と周辺の土坑との堆積土の比較から縄文時代早期後葉頃と考えている。性格については、規模・形状等から貯蔵穴の可能性が高い。

(山 岸)

47号土坑 S K47(図115・128・135, 写真60)

調査区中央部の南側、D 5-14に位置する。本土坑の西側から南側にかけて近接するS K46・42・48と共に、L IV上面で検出した。平面は円形を基調とするが全体的に整っていない。断面はフラスコ形に近く、底面・壁ともに凹凸が認められ整っていない。規模は径が100cm、深さ30cmと浅い。遺構内堆積土は2層に分けられ、ℓ 2については自然堆積と考えている。多量の土器片を含み、中央に堆積するℓ 1については人為堆積の可能性が高い。

遺物は縄文土器片約250点と剥片類6点と石器1点が、ℓ 1中から散在状態で出土している。図128-6~8は斜行縄文が施された平口縁の深鉢形土器片で、6・7の口縁部はやや湾曲しながら直上気味に立ち上がっている。8の口縁部は外側に開き、口縁端部が平坦に整えられている。いずれも色調は橙色を呈し、胎土に白色の細粒砂を含む。同図9~12は櫛歯状工具による条線を施す深鉢形土器片である。いずれも縦位や斜位に、条間を開けずに比較的短い長さで施され、一筆描きの条線は認められない。同図13・14は深鉢形土器の胴部片で、沈線区画の曲線图形内に縄文を充填する。いずれも無文部は丁寧に磨かれ、弱い光沢を帯びている。色調は橙色を呈し、胎土に白色の粗粒砂を少量含み、焼成は堅緻である。

図135-1は石刀の未成品と考えられる。板状の素材の両側縁に厚みをとるための剥離が加えられ、僅かであるが研磨痕が認められる。

本土坑は、その規模・形状等から本来は貯蔵穴と考えている。出土遺物については、使わなくなった貯蔵穴に、焼土粒等を含む黒褐色土と共に廃棄した可能性が高い。また、本土坑の構築時期については、出土遺物の特徴から縄文時代後期中葉頃と考えられ、南側に近接するS K48と極めて共通点が多い。

(山 岸)

48号土坑 S K48(図115・129・130, 写真60・82)

調査区中央部の南側、D 5-14, D 6-2にまたがって位置する。北側に近接するS K47等と共に、L IV上面で検出した。平面は円形を基調とするが全体的に整っていない。壁はやや内側に傾き、断面はフラスコ形に近く、底面には小さな段差が不規則に認められる。規模は径130cm、深さが30cm前後である。遺構内堆積土は2層に分けられ、ℓ 2については自然堆積、多量の土器片を含み中央付近に堆積するℓ 1については人為堆積と考えている。

遺物は縄文土器片約200点と剥片類2点がℓ 1中から散乱状態で出土している。図129-1~8は深鉢形土器である。1は平口縁に沿って巡る沈線で、無文の口縁部と縄文が施された胴部を区画している。2は口縁に沿って巡る平行沈線区画帶内に斜行縄文を充填している。3・4は無文の口縁部と胴部の境に屈曲部をもち、屈曲部下の胴部には地文の条線上に多条の平行沈線と縦位の短沈線

を施している。5は平口縁で斜行縄文が施されている。6・7は無文の土器で、6は胴部下半が筒状を呈し、底面には網代編圧痕が認められる。7の口縁部片には、砂粒の移動による擦痕が顕著に認められる。

同図9は平口縁の浅鉢形土器で、胴部を区画する平行沈線内に斜位の沈線を連続して施している。同図10、図130-1は壺形土器である。10は頸部から口縁部が強く屈折し、口縁部の形状は筒形に近い。平口縁で、器面全体に斜行縄文が施されている。1は口縁部がラッパ状に開く、無文の口縁部である。図130-2は丸底で小型の杯形を呈する無文土器である。同図3は小さなヒレ状の有孔突起で4面に区画し、各面に大きな窓が付けられた無文の吊手土器である。全体的にかなり重んでいるが、器面は丁寧に磨かれている。全体的に褐色系の色調で、焼成は比較的堅致である。同図4・5は注口土器の注口部片である。同図6は無文の裝飾突起と考えられ、中央に比較的大きな円孔が開けられている。全体が丁寧に磨かれ、弱い光沢が認められる。

本土坑の性格については、規模・形状から貯蔵穴と考えている。出土遺物については、SK47と同様に使わなくなった貯蔵穴に、焼土粒等を含む黒褐色土と共に廃棄した可能性が高い。また、構築時期については、出土遺物の特徴からSK47と同時期の縄文時代後期中葉頃と考えている。

(山 岸)

49号土坑 SK49(図116・130・135)

調査区中央部の中央付近、C 6-1グリッドの平坦面上に位置する。検出面はLIVである。重複する遺構はなく北側にSK52・57、東側にSK39・40が位置する。平面形は円形で、底面は平らに掘削され、段面の中ほどがやや内側に張り出す。規模は東西90cm、南北89cm、深さ70cmを測る。遺構内堆積土は4層に分けられ、掘立柱建物跡に類似した堆積状況を示す。

遺物は縄文土器片約100点、剥片類8点と石器1点がℓ1を主体に出土している。図130-7・8は深鉢の口縁部で、7には斜行縄文、8には櫛歯状工具による条線文が施されている。同図9は平行沈線で区画した胴部に斜行縄文を施す。同図10は椀状の浅鉢形土器で、底部には細い粘土が貼り付けられ、斜行縄文が施されている。図135-11は磨石で、円柱状の礫の両端と一側縁に磨面が認められる。

本遺構の性格は堆積土の状況から、柱を建てた可能性も考えられる。近接するSK52には柱痕状の堆積が見られることから、SK52と関連して何らかの施設が建てられていた可能性も考えられる。遺構の所属時期は出土遺物などから縄文時代晚期前葉頃と考えられる。

(中 野)

50号土坑 SK50(図116・130・133・134、写真60)

調査区中央部の中央付近、C 5-12・16グリッドの平坦面上に位置する。検出面はLIVである。重複する遺構はなく北側にSK45、東側にSK46が近接する。平面形は円形で、底面には凹凸が見られるものの概ね平らに掘削されている。断面はフラスコ状を呈する。規模は東西120cm、南北116

cm、深さ34cmを測る。遺構内堆積土は単層で、人為的に埋め戻された可能性がある。 (中野)

遺物は縄文土器片約100点、剥片類9点と石器2点が出土している。図130-11は肥厚した口縁端部に傾いた突起が付けられ、沈線の区画内に斜行縄文が充填されている。同図12は平口縁に沿って巡る沈線下に斜位の沈線文が施されている。同図13は複数の棒状工具による条線を、器面全体に半円状に描いている。同図14は無文の、同図15は斜行縄文が施された深鉢形土器の平口縁部である。

図134-14は側縁の一部を欠損する有茎石鏃で、茎部は短く、小さな作り出しとなっている。同図15は石鏃の未成品と考えられる。剥離整形は比較的稚で、基部に素材の厚みを残す。 (山岸)

形状などから本遺構は貯蔵穴と考えられる。遺構の所属時期は出土遺物などから縄文時代後期中葉から後葉頃と考えられる。 (中野)

51号土坑 S K51(図116・130、写真61)

調査区の中央部南西側、B 7-3 グリッドの平坦面上に位置する。検出面はLIVである。重複関係からS I 28より新しく、S B 7より古い。平面形は円形で底面は平らに掘削されている。規模は東西120cm、南北116cm、深さ34cmを測る。遺構内堆積土は2層に分けられた。搅乱により大きく壊されているが、概ね堆積状況は自然堆積と考えられる。

遺物は縄文土器38点、2点が出土している。図130-16~19を示した。16は斜行縄文と綾格文が施された口縁部である。17は沈線区画内に条線を充填し、口縁部に綫長の瘤を付加している。17は口縁部に沿って櫛歯状工具による条線文を施している。19は並行沈線の区画内の無文部に横位の入組文を施している。

形状などから本遺構は貯蔵穴と考えられる。遺構の所属時期は出土遺物や遺構の重複関係から縄文時代晚期前葉頃と考えられる。 (中野)

52号土坑 S K52(図116・130)

調査区中央部の中央付近、B 6-4 グリッドの平坦面上に位置する。検出面はLIVである。重複する遺構はなく北東側にS K57、南東側にS K49が近接する。平面形は円形で、底面には凹凸が見られる。規模は東西90cm、南北100cm、深さ45cmを測る。遺構内堆積土は2層に分けられ、掘立柱建物跡と同様な堆積状況を示す。周辺に対応する柱穴が検出できなかったことから、ここでは土坑として取り扱った。

遺物は縄文土器片19点、剥片類2点が \ominus 1から出土している。Ⅲ群4類に比定される土器細片がほとんどで図示できたのは図130-20の1点である。沈線区画帶に充填縄文と刻み状の連続刺突を施している。

本遺構の性格は堆積土の状況から、柱を建てた可能性も考えられる。近接するS K49と関連して何らかの施設が建てられていた可能性が考えられる。遺構の所属時期はS K49と同時期の縄文時代晚期前葉頃と考えられる。 (中野)

53号土坑 SK53(図116・130, 写真61)

調査区中央部の中央東側、C 5-4・D 5-1 グリッドに位置する。黒褐色土の広がりとして、L IV上面で検出した。平面は円形を基調とし、南側方向がやや整っていない。壁は全体的に内側に傾き、断面はフラスコ形を呈するが、底面・壁共に凹凸が認められる。規模は検出面で径110cm、深さ40cm程である。遺構内堆積土は黒褐色土を主体とし、4層に分けた。いずれの層にも炭化物・焼土粒が含まれ、 ℓ 1は自然堆積、 ℓ 2~3については人為堆積と考えている。

遺物は縄文土器片3点、剥片類4点が ℓ 1から出土している。図示できたのは1点のみで、図130-21は陰線で縄文部と無文部を区画した深鉢形土器の胴部片である。II群2類土器に比定されるが ℓ 1からの出土であり、本遺構に直接伴う遺物とは考えていない。

本土坑の構築時期については、周辺に分布する土坑との比較から縄文時代後期中葉～後葉頃と考えられるが、判然としない。また、その規模・形状から貯蔵穴と考えている。
(山 岸)

54号土坑 SK54(図116・130・134・135)

調査区中央部の南西側、B 6-7 グリッドに位置する。S I 37と共に、L I直下のL IV上面で検出した。このため S I 37との新旧関係は不明である。また、S B 8のP 4と重複し、本遺構が古い。

平面は南北に長い不整梢円形を呈し、全体的に整っていない。底面はほぼ平坦であるが、東側に段差を持っている。検出面での規模は、南北200cm、東西110cm、深さは中央から西側が30cm程、東側が10cm前後と浅い。遺構内堆積土は2層に分けられ、いずれも自然堆積と考えている。

遺物は縄文土器片約350点、剥片類約30点と石器2点が ℓ 1を主体として出土している。図130-22は屈折する口縁下の無文部に三叉状の沈線文が横位に施されている。同図23~25は口縁下の無文部に、平行沈線と刻みを加えた沈線文が認められる。同図26は横位と斜位の条線文が施されている。同図27は平口縁に一对の山形状の小突起が付けられた深鉢形土器で、無文の平行沈線区画帶内に小さなコブを等間隔で配置している。また、区画帯間の無文部には弧線状の沈線文を横位に対向させ、起点では縱位に区画している。

図134-16は有茎石錐で、尖頭部の側縁が緩く内湾する。茎部の抉りも弱く弧を描き、尖頭部とほとんど変わらない形状と大きさに作り出されている。図135-4は磨製石斧の基部で、先端部は敲打によって潰されている。

本土坑の性格については不明であるが、構築時期については出土遺物と重複関係から縄文時代晚期初頭～前葉頃と考えている。
(山 岸)

55号土坑 SK55(図116・131, 写真61)

調査区中央部の南西側、B 6-7 グリッドに位置する。検出面はL IV上面で、西側にSK54が近接する。平面は整った円形を、断面はフラスコ形を呈する。底面は平坦で、全体的に整った形状と

なっている。規模は検出面で径160cm、深さ60cm、底径170cmと比較的大型である。遺構内堆積土は6層に分けられ、いずれも自然堆積と考えている。

遺物は縄文土器片約300点、剥片3点が、遺構内堆積土の各層から出土している。図131-1~4は帶状の区画文内に繩文を充填し、無文部に沈線文が施される。1は突起の付いた波状口縁に沿って山形状や三叉状の沈線文が認められる。3・4は沈線区画文の起点に、円形状に入り組んだ沈線文と円形の刺突を施している。同図5・6は平行沈線区画帶内に小さなコブを密に認められ、5は充填繩文上に、6は無文地上に貼り付けている。7は頸部に平行沈線の区画が認められ、8には横位と縱位に蛇行する条線文が施されている。

本土坑の性格については、その形状から比較的大型の貯蔵穴と考えている。また、構築時期については、出土遺物から縄文時代後期後葉頃と考えている。
(山岸)

56号土坑 S K56(図117・131・134、写真61)

調査区中央部の中央東側、D 5-11グリッドに位置する。検出面はL IV上面で、南西側にS K42・46~48が所在する。平面は整った円形を、断面はフ拉斯コ形を呈する。壁は、ほぼ平坦な底面から曲線を描き内傾する。規模は検出面で径100cm、深さ50cm、底径120cmである。遺構内堆積土は7層に分けられ、いずれも黄褐色土粒を含み自然堆積と考えている。

遺物は縄文土器片約50点と石器1点が堆積土中から散在状態で出土している。図131-9~11は深鉢形土器の口縁部片、12は胴部片で、いずれの胎土にも纖維混和痕が認められる。9は条痕を地文とし、縱位と斜位の沈線文を施している。10は外面と口縁部内面に繩文、内面に条痕を施す。11は縄文が施されているもので、繩文は口縁端部から内面にまで認められる。12は外面に斜行繩文が、内面には横位の条痕文が施されている。

図134-20は器種不明の未成品と考えられる。両面に剥離が施され、小型の打製石斧の形状に近いが刃部は作り出されていない。

本土坑の構築時期については遺構内堆積土の色調と出土遺物から縄文時代早期末葉頃を、性格については貯蔵穴と考えている。
(山岸)

57号土坑 S K57(図117・131、写真61)

調査区中央部の南西側、B 6-4・C 6-1グリッドにまたがって位置する。検出面はL IV上面で、重複する遺構はないが北東側にS K38、南西側にS K52が近接する。平面は不整な梢円形で、南北方向に長い。規模は長径180cm、短径150cm、深さ50cmである。底面はほぼ平坦であるが全体的に北側に傾き、壁はやや曲線的に外傾している。遺構内堆積土は3層に分けたが、いずれにも少量・多量の黄褐色土塊が含まれており人為堆積の可能性が高い。

遺物は縄文土器片がℓ 1~2から散在状態で出土している。図131-13は無文の深鉢形土器である。平口縁で、底部末端が僅かに張り出し低い台状に作り出されている。器面には縱位の整形痕が

認められ、文様は付加されていない。胎土には比較的多量の粗粒砂を含み、色調は全体的に暗褐色を呈する。同図14は帯状の沈線区画内に充填縄文を施した深鉢形土器の口縁部である。

本土坑の構築時期については、出土遺物から縄文時代後期後葉頃と考えている。また、性格については、形状・堆積状況から土坑墓の可能性も考えられるが、関連性の高い遺物が出土していないため判然としない。

(山 岸)

58号土坑 S K58(図117・131・135)

調査区中央部の南西側、B 6 - 10グリッドに位置する。SM41、SB 8 のP 3と共にL IV上面で検出し、本土坑が最も古い。平面は比較的整った梢円形で、東西方向に長い。規模は長径130cm、短径110cm、深さ25cmである。壁は緩やかに外傾し、底面は部分的に高まりが認められ整っている。遺構内堆積土は1層で、堆積状況は判断できない。

遺物はℓ 1内から縄文土器片と石器1点が出土している。図131-15は無文地の口縁部に三叉状の入組文を沈線で施している。同図16は無文地上に沈線で三角形状の図形を描く。図135-5は基部を欠損する磨製石斧である。器面の研磨整形は丁寧に施され、整った長方形を呈する。刃部は鋭く作り出され、使用痕と考えられる擦痕と摩滅が認められる。

本土坑は、重複関係から縄文時代後期後葉頃の構築と考えられ、性格については判然としない。

(山 岸)

59号土坑 S K59(図117・131)

本遺構は調査区中央部のB 6 - 3グリッドに位置する。SI 24を掘り下げた床面上から認められた。SI 24堆積土からは認められず、SI 24よりも本遺構が古い。炭化物・焼土などを含んだ黒褐色土の円形として、認識した。

平面形は長軸70cm、短軸63cmの東西にわずかに長い梢円形である。検出面から底面までの深さは73cmを測る。断面形は検出面よりも底面が広がるフラスコ状の形態となる。底面から開口部にむけて、大きくオーバーハングをする。底面形は、径91cmの円形である。底面は疊層を掘り込んで造られている。壁面は底面から大きく抉れて立ち上がり、底面から60cm程の高さで最も抉れる。この括れから開口部に向けて開く。

堆積土は2層確認した。ℓ 1は黒褐色土を主体とした層で、炭化物や焼土、小礫が混入する。ℓ 2は暗褐色土層である。いずれの層も人為堆積と考えられる。

本遺構からは50点の縄文土器片、7点の石器片が出土している。出土遺物は、図131-17に1点のみ図示した。17は甕の波状口縁部である。8つの波頂部をもち、内4つの頂部下に文様が施される。波頂下の口縁部文様は、刺突と沈線により魚眼状の三叉文のモチーフを描く。胴部文様帶には入組文が帯状に変化し、文様の繋ぎ目部分に小瘤を貼付している。胎土は均質で精製されている。

本遺構は平面形や断面形から貯蔵穴の機能を有した土坑であると考えられる。SI 24床面上から

検出した点や出土遺物から、時期は縄文時代後期末葉と考えられる。

(三 浦)

60号土坑 S K60(図117, 写真61)

調査区中央部の中央東側、D 5 - 2・3 グリッドに位置する。検出面はL IV上面で、近接する遺構はない。また、北東部分は擾乱によって大きく壊されている。平面は円形を基調とするが、全体的に整っていない。ほぼ平坦な底面から垂直に近い角度で壁が立ち上がり、整った長方形状の断面となっている。規模は径130cm、深さ40cmである。遺構内堆積土は3層に分けられ、いずれも自然堆積と考えている。遺物は出土していない。

本土坑の構築時期については、出土遺物がないため判然としないが、遺構内堆積土の特徴から縄文時代後期以降と考えている。

(山 岸)

61号土坑 S K61(図117, 写真61)

調査区中央部の中央北側、C 5 - 1 グリッドに位置する。検出面はL IV上面で、近接する遺構はない。平面は円形を、断面はフラスコ形を呈するが全体的に整っていない。底面の中央はやや高まり、壁は内側に傾く。規模は径が約100cm、高さ20cm、底径120cmである。遺構内堆積土は1層で、堆積状況は判断できない。遺物は出土していない。

本土坑の構築時期については遺構内堆積土の特徴から縄文時代早期末～前期初頭を、性格については形状から貯蔵穴と考えている。

(山 岸)

62号土坑 S K62(図117・131・135, 写真61)

調査区南部の中央北端、B 7 - 16 グリッドに位置する。東側に近接するS K66と共に、町道直下のL V上面で検出した。重複する遺構はないが、北西側でS K20と接している。平面は円形を基調とし、断面はフラスコ形を呈するが全体的に整っていない。底面はほぼ平坦で、壁は曲線を描いて内側に傾く。規模は径125cm前後、深さ90cm、底径約140cmである。遺構内堆積土は6層に分けられ、壁際からの流入状況を示していることから自然堆積と考えている。

遺物は縄文土器片約100点、石器2点が出土している。Ⅲ群4類に比定される条痕文・無文土器の小破片が主体を縮める。図131-18はやや太目の平行沈線間に節の大きな斜行縄文を充填している。胎土には粗粒砂を比較的多く含み、焼成は堅緻である。同図19は円孔が施された口縁部の小突起で、平行沈線と充填縄文が認められる。同図20は平行沈線による区画文と横位の連続刺突文を、同図21は鋭く蛇行する条線文を無文地上に施している。

図135-12は磨石で、精円碟の片面に平坦な磨面が認められる。同図13は凹石で、亜円碟の片面に凹状の浅い敲打痕が認められる。

本土坑の性格は、その規模・形状から貯蔵穴と考えている。構築時期については、出土遺物の特徴から縄文時代後期後葉頃と考えられ、本土坑の南側に分布する同時期の竪穴住居跡との関連性が

高い。

(山 岸)

63号土坑 SK 63(図118・132・134)

調査区南部の中央北側、B 8 - 4 グリッドに位置する。南東側で重複するSK 64と共に、町道直下のLV上面で検出した。平面は円形を基調とするが、SK 64と重複する南東側が大きく歪んでいる。断面は筒状に近いが、底面・壁共に曲線的で整っていない。規模は径が約140cm、深さ100cmである。遺構内堆積土は黒褐色土を主体とし5層に分けられ、いずれも自然堆積と考えている。

遺物は縄文土器片約300点、剥片類8点と石器1点が、ℓ 5を除く各層から出土している。図132-1~6はℓ 4・3出土の土器である。1は刻みを加えた山形状の小突起が平口縁に、弧状の平行沈線区画帶内に小さなコブが密に付けられている。2は無文地に眼鏡状の沈線文と対向する弧線を描き、文様の起点にコブを貼り付けている。3は平口縁に沿って巡る条線と蛇行して垂下する条線を施している。4は口縁端部を巡る連続刺突文の沈線区画下に、刺突を充填した帯状の区画文を施している。5は沈線区画帶に縄文を、6は平行沈線区画帶内にコブを施している。

図132-7~10はℓ 2・1出土の土器である。7は縱位の条線を地文とし、沈線文を施している。8は平行沈線で胴部の縄文部と口縁部の無文部を区画し、口縁端部の弧線を挟みこむように対向した三叉状の沈線文を施している。9は縄文を充填した帯状の入り組み文と無文部に三叉状の沈線を沿わせている。10は平口縁に沿った条線から縱位に条線を垂下させている。

図134-17は有茎石錐で、尖頭部が短く正三角形に近い。茎部の抉りは比較的弱く、尖頭部に比べて長い作り出しどうっている。簡単な周縁加工によって整形され、背面に素材の剥離面を大きく残している。

本土坑の構築時期は、出土遺物の特徴から縄文時代後期後葉頃と考えられ、重複関係からSK 64より新しい。性格については、規模・形状から貯蔵穴と考えている。

(山 岸)

64号土坑 SK 64(図118・132・134)

調査区南部の中央北側、B 8 - 4 グリッドに位置する。北西側で重複するSK 63と共に、町道直下のLV上面で検出した。遺存部での平面は円形を基調とし、断面は筒状を呈する。底面はほぼ平坦で、壁も直線的に立ち上がっている。遺存部での径は150cm、深さ70cmである。遺構内堆積土は2層に分けられ、ℓ 1については拳大の砾と多量の焼土粒を含むことから人為堆積と考えている。

遺物は縄文土器片約60点、石器1点がℓ 2中を主体に出土している。図132-11・12・14・15は平行沈線区画帶を特徴とする。11は口縁端部にコブ状の突起が付けられ、区画帶内に縄文を充填し、小さなコブを附加している。12・14は無文の区画帶内に小さなコブを付けている。15は壺または注口土器の胴部上半で、無文地上に区画帶を巡らせており、頸部には小さいコブとやや大きめのコブが認められ、胴最張部には大きなコブを配置している。同図13・16は無文地の平口縁部片で、13には蛇行して垂下する条線文が施されている。

図134-18は石鐵の未製品と考えられる。簡単な周縁剥離を加え先端部を作り出し、素材の形状をそのまま残している。

本土坑の構築時期は、出土遺物の特徴から縄文時代後期後葉頃と考えられ、重複するSK63より古い。性格については、堆積土の状況から石圓炉を廃棄した土坑と考えている。
(山 岸)

65号土坑 SK65(図118)

調査区中央部の南西端、B7-16グリッドに位置する。検出面はLV上面で、斜面下位の南側は遺存していない。重複する遺構はないが、南側にSK20が接する。遺存部での平面は円形を基調とするが、東側が整っていない。壁は緩やかに外傾し、断面は鍋底状に近い。遺存部での径は100cm程度で、深さ20cmと浅い。遺構内堆積土は1層で、堆積状況は判断できない。遺物は出土していない。

周辺の土坑との比較から構築時期は縄文時代後期後葉頃と考えているが、性格を含めて判然としない。
(山 岸)

66号土坑 SK66(図118・132、写真62)

調査区南部の中央北側、C7-13グリッドに位置する。南東側で重複するSI30と共に、町道直下のLV上面で検出した。平面は円形を基調とするが、南北にやや長い。壁は平坦な底面から南側が直線的に立ち上がり、北側は緩やかに外傾している。規模は南北110cm、東西100cm、深さ25cmである。遺構内堆積土は2層で、斜面上位の北側からの自然堆積と考えている。

遺物はℓ1中から深鉢形土器片と剥片6点が出土している。図132-17・18は同一個体の無文の胴部片で、全体的に垂み器形は整っていない。内面は横位のナデ、外面はミガキ調整され、比較的平滑である。胎土に粗粒砂を多量に含むが、焼成は比較的堅緻である。

本土坑の構築時期は、出土遺物の特徴から縄文時代後期後葉頃と考えられ、重複するSI30より古い。性格としては、小型の貯蔵穴を考えている。
(山 岸)

67号土坑 SK67(図118・132)

調査区南部の中央北側、B8-4・C8-1グリッドに位置する。町道直下のLV上面で検出した。重複する遺構はないが、北東側でSI30と接している。また、南東側は道路造成の際に削られ遺存していない。遺存部の平面は整った円形を呈し、断面は筒状に近い。壁は平坦な底面から急角度で外傾しているが、全体的に凹凸が認められる。規模は径が150cm程度で、深さ70cmである。遺構内堆積土は7層に分けられ、いずれも自然堆積と考えている。

遺物は縄文土器片19点が出土している。図132-19は条間が不ぞろいな条線文を、不規則な斜位方向に施している。同図20は横走する縄文部と無文部を沈線で区画している。

本土坑は、出土遺物の特徴から縄文時代後期前葉～中葉頃の構築と考えられ、規模・形状から貯蔵穴としての性格を考えている。
(山 岸)

68号土坑 SK68(図118, 写真62)

調査区中央部の南西側、B 6 - 16グリッドに位置する。S I 28精査の際、西側に接するSK70、重複するSB6・7のP1と共に検出した。新旧関係は、S I 28より新しく、SB6・7より古い。平面は長方形を基調とし、東西に長い。平坦な底面から壁が垂直に近い角度で直線的に外傾し、断面も長方形に近い。規模は長辺120cm、短辺90cm、深さ50cmである。遺構内堆積土は多量の黄褐色土粒を含む黒褐色土1層で、人為堆積と考えている。遺物は出土していない。

本土坑は形状・堆積土の状況から土坑墓の可能性も考えられるが、関連するような遺物が出土していないため判然としない。また、構築時期については縄文時代後期後葉頃と考えているが、S I 28より新しい。

(山 岸)

69号土坑 SK69(図118, 写真62)

調査区中央部の南西側、B 6 - 11グリッドに位置する。検出面はL IV上面で、重複するSB9のP1と共に検出した。平面は円形を基調とするが、全体的に整っていない。断面は、丸い鍋底状の底面から壁が緩やかに外傾している。規模は径90cm程度、深さが35cmである。遺構内堆積土は1層で、堆積状況は判断できない。

遺物は縄文土器片60点が出土したが、いずれもⅢ・Ⅳ群土器に比定される無文と器面の荒れた条線文が施された細片で、図示できなかった。

本土坑は堆積土の状況から縄文時代晚期前葉頃の構築と考えられるが、重複するSB9より古い。また、性格については不明である。

(山 岸)

70号土坑 SK70(図118, 写真62)

調査区中央部の南西側、B 6 - 15グリッドに位置する。S I 28精査の際、東側に接するSK68と共に検出した。平面は不整な長方形で、東西が僅かに長い。底面は階段状を呈し、東側が低い。

壁は僅かに内傾する東側を除き、いずれも垂直に近い角度で外傾している。規模は長辺90cm、短辺80cm、深さは45cm前後である。遺構内堆積土は黒褐色土1層で、多量の黄褐色土を含むことから人為堆積と考えている。遺物は出土していない。

本土坑は、東側に接すSK68と形状・堆積土の状況が類似することから同時期の縄文時代後期後葉頃に、同じ性格のもとに構築されたと考えている。

(山 岸)

71号土坑 SK71(図119・133, 写真62)

調査区中央部の中央西側、B 5 - 6グリッドに位置する。検出面はL IV上面で、重複する遺構はない。平面は不整な梢円形を、断面はフラスコ形を呈するが全体的に整っていない。底面・壁共に不規則な曲線を描き、一定していない。規模は南北120cm、東西95cm、深さ40cm、底面では南北125

cm、東西100cmである。遺構内堆積土は3層に分けられ、底面上に厚く堆積するℓ 3については人為堆積、ℓ 1・2については自然堆積と考えている。

遺物は堆積土中と底面から同一個体の深鉢形土器(図133-1)が、東西の壁際近くに分かれて出土している。斜行縄文が施された胴部下半は丸みをもち、上半が直線的に外傾する器形となっている。上半には横走する「ハ」の字状の連続爪形文と指頭による半円状の浅い連続した窪みが交互に施されている。

本土坑の性格については形状から貯蔵穴を、構築時期については出土遺物の特徴から縄文時代前期中葉頃と考えている。
(山 岸)

72号土坑 S K72(図119・133、写真62)

調査区中央部の中央西側、B 5-13グリッドに位置する。検出面はL IV上面で、重複する遺構はない。平面は南北に長い楕円形を呈する。断面は丸い鍋底状に近いが、底面には段差が認められ整っていない。また、壁には火熱による弱い酸化が部分的に認められる。規模は南北95cm、東西55cm、深さは南側が20cm、北側が30cmである。遺構内堆積土は3層に分けられ、いずれも多量の炭化物を含むが堆積状況は判断できない。

遺物は、堆積土中から縄文土器片37点が出土している。遺存状態の悪い小片が多く、図示し得たのは図133-2の1点のみである。鉢形土器の胴部片で、斜行縄文と横走する結節縄の回転文が施されているが、直接遺構に伴う遺物とは考えていない。

本土坑については、堆積土中から縄文土器片が出土しているが、形状と堆積土の状況、壁に認められる部分的な酸化からS K79と同様な平安時代の簡易な木炭窯と考えている。
(山 岸)

73号土坑 S K73(図119・133、写真62)

調査区中央部の南西端、B 7-5グリッドに位置する。検出面はL IV上面で、北東側を搅乱によつて壊されている。重複する遺構はないが、東側にはS I 31-33が近接している。平面は比較的ととのった円形を、断面はフ拉斯コ形を呈する。底面は大きく波打ち、西側に傾き整っていない。規模は径130cm、深さ40cmである。遺構内堆積土は5層に分けられ、いずれも自然堆積と考えている。

遺物はℓ 1-3中から縄文土器片28点と剥片3点が出土している。図133-3は沈線区画による曲線图形内に縄文を充填している。同図4は端部が尖る口縁部片、同図5は胴部片でいずれも斜行縄文が施され、胎土には纖維混和痕が認められる。

本土坑は形状・規模から貯蔵穴を、堆積土の状況と出土遺物の特徴から縄文時代後期後葉頃の構築と考えている。
(山 岸)

74号土坑 S K74(図119)

調査区中央部の南西側、B 7-2グリッドに位置する。全体の検出面はL V上面であるが、西側

はLⅢを掘り込んでいるのを確認している。重複する遺構はないが、北側にSⅠ34、東側にSK77が近接している。平面は不整な楕円形を呈し、東西に長い。平坦な底面から壁は緩やかに外傾し、断面は鍋底状に近い。規模は東西160cm、南北110cm、深さ15cmと浅い。遺構内堆積土は2層に分けたが、堆積状況は判断できない。遺物は出土していない。

本土坑については、堆積土の状況から縄文時代後期後葉頃の構築と考えているが、性格については不明である。

(山岸)

75号土坑 SK75(図119)

本遺構はE3-5グリッドに位置する。調査区中央部の北東端に位置し、標高37.6mの平坦面に立地する。今回の調査区内の他の遺構よりも、一段低い段丘面に造られている。周囲には遺構は認められず、最も近い遺構で約30m南西に位置するSK76である。検出面はLⅣ面である。LⅡ・Ⅲを掘り下げた後、黒褐色土の円形として認識した。

調査区壁により平面形の一部は確認できなかった。平面形は径50cmの円形を基調としていると推測される。検出面から底面までの深さは10cmと浅い。底面は北側をやや低く造っている。壁面は底面から緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形状となる。

堆積土は暗褐色土の単層で、混入物等が少なく均質の土質であることから、自然堆積と考えられる。本遺構からは出土遺物は認められなかった。

本遺構は、本調査区において最も低い位置から検出できた遺構である。出土遺物もなく、詳細な時期は特定できないが、LⅡ・Ⅲ以下において検出できたことから縄文時代前期以前と考えられる。機能についても不明である。

(三浦)

76号土坑 SK76(図119)

本遺構は調査区中央部北東のD4-9・10グリッドに位置する。北側に向かって傾斜する段丘端部に立地している。周囲には遺構は認められず、近接する遺構で約9m南東にSK60が位置する。風倒木痕の半裁作業時に、底面が平坦になることから土坑が重複していると認識した。風倒木痕に破壊されていない層位について、本遺構堆積土と判断し、調査を進めた。風倒木痕に破壊されているものの、検出面はLⅣ面である。

風倒木痕に破壊されているが、遺存する平面形は東西1.5m、南北1.3mの楕円形である。遺存する堆積土から、底面までの深さは43cmを測る。底面は平坦であり、一部オーバーハングが認められる。壁面は底面の近くのみ認められ、急激に立ち上がるようである。

堆積土は4層に分けた。 ℓ 1は人頭大の礫を含み、にぶい黄褐色土であることから人為堆積と考えている。 ℓ 2~4はレンズ状堆積や三角堆積の状況を示すことより、自然堆積と考えられる。本遺構からは出土遺物は認められなかった。

本遺構は風倒木痕により大きく破壊され、底面近くのみが遺存していた遺構である。形態より貯

第4節 土 坑

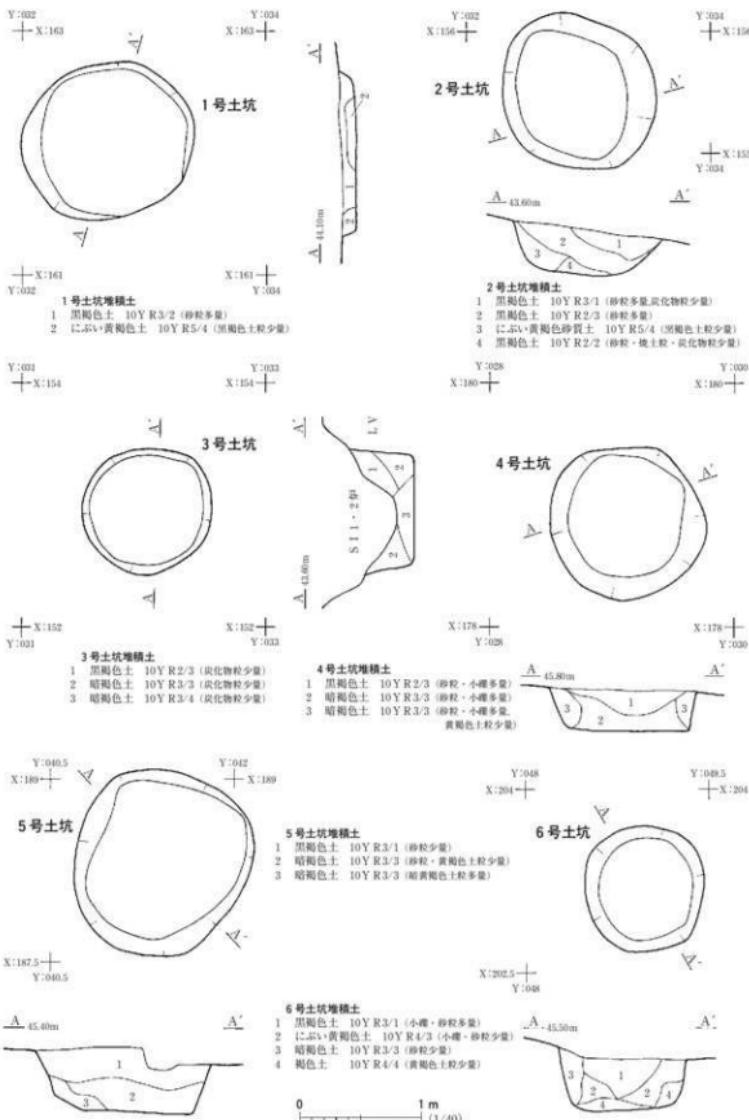


図108 1～6号土坑

第2章 遺構と遺物



図109 7~12号土坑

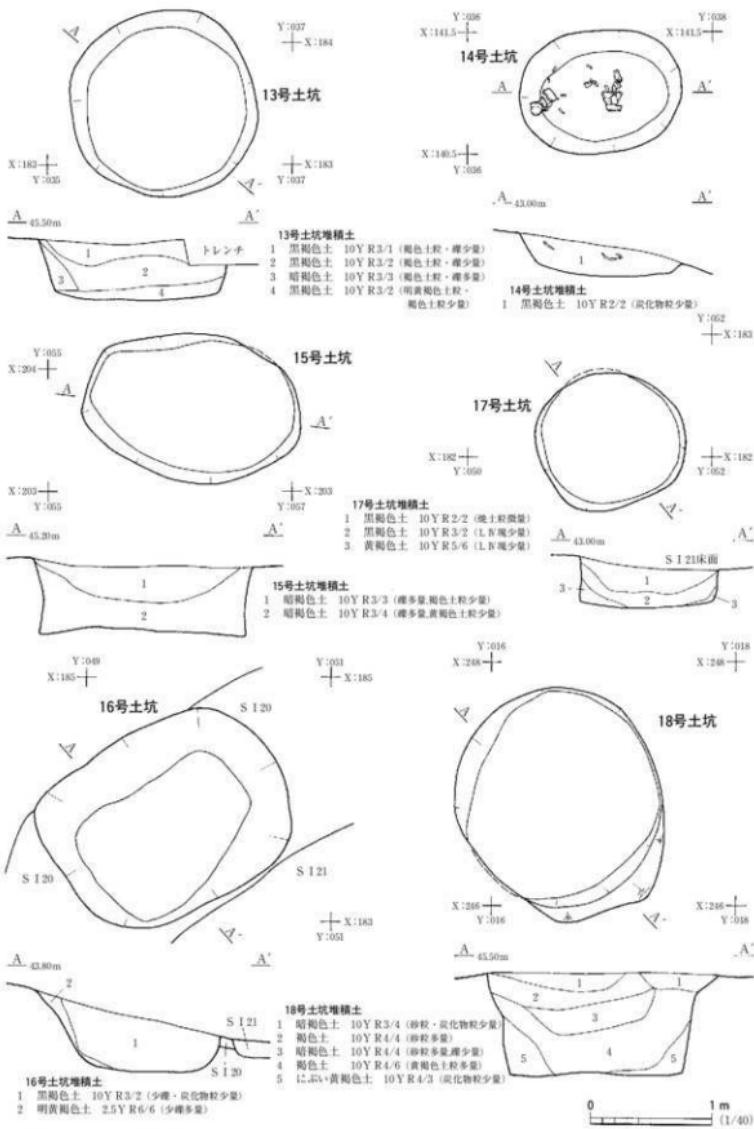


図110 13~18号土坑

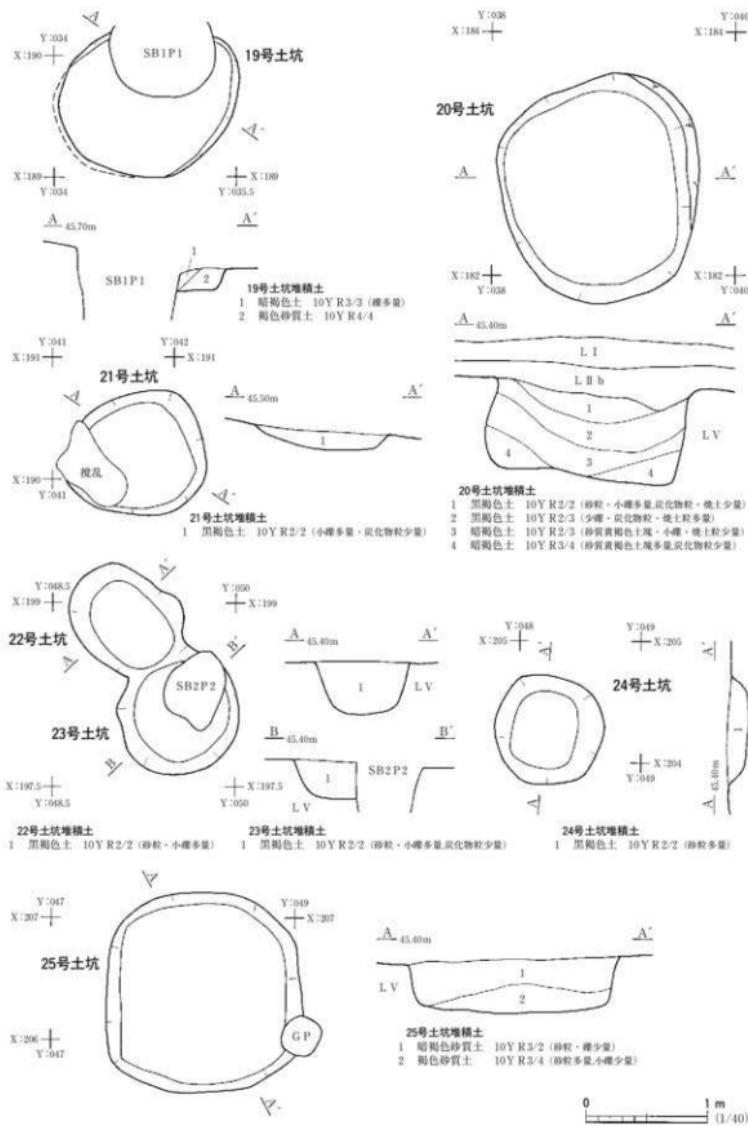


図111 19~25号土坑

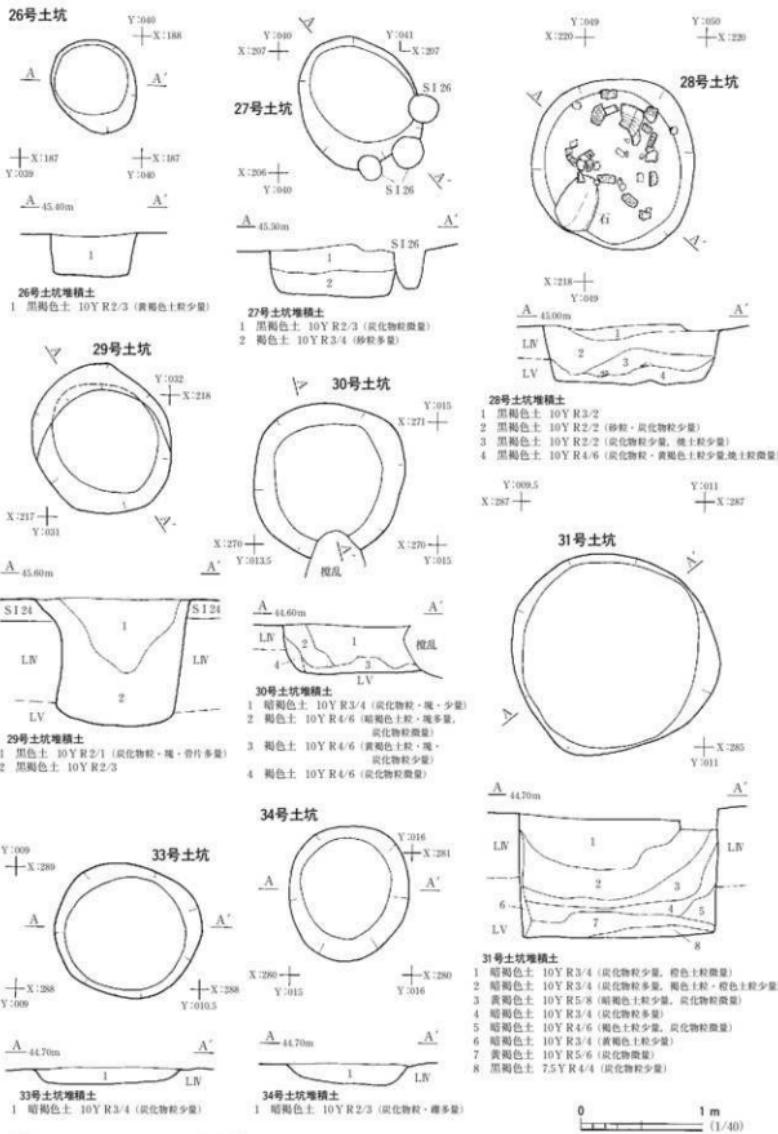


図112 26~31・33・34号土坑

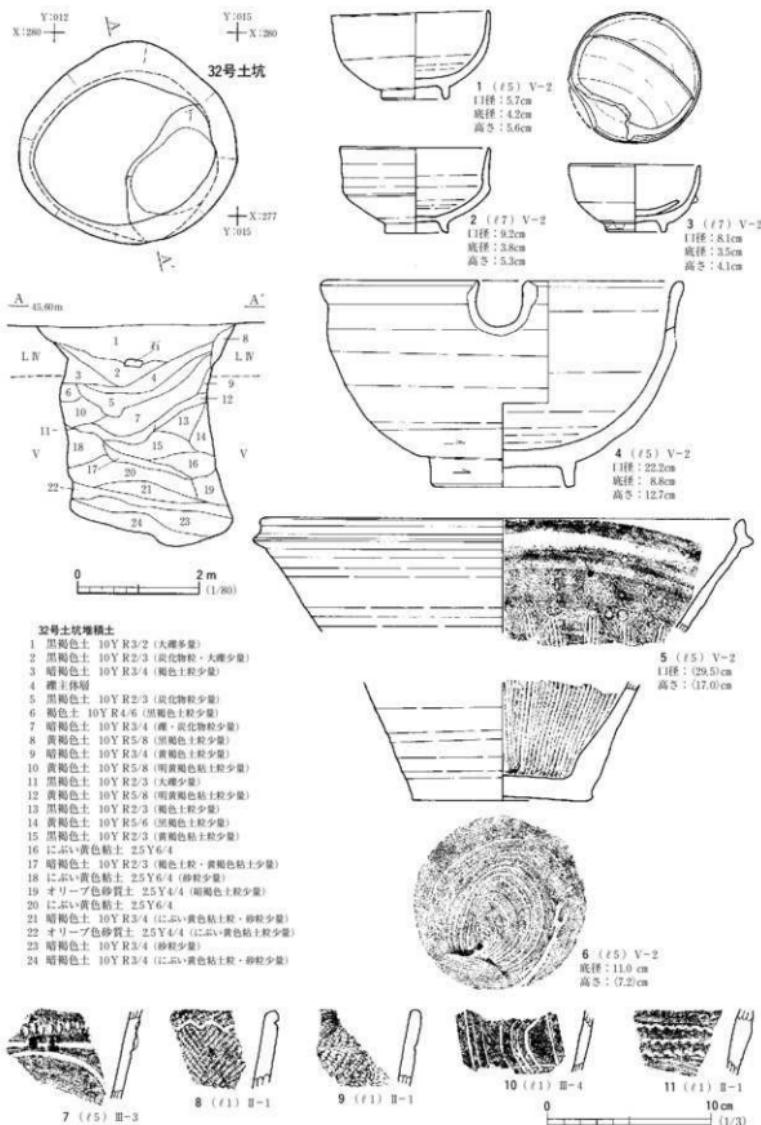


図113 32号土坑と出土遺物

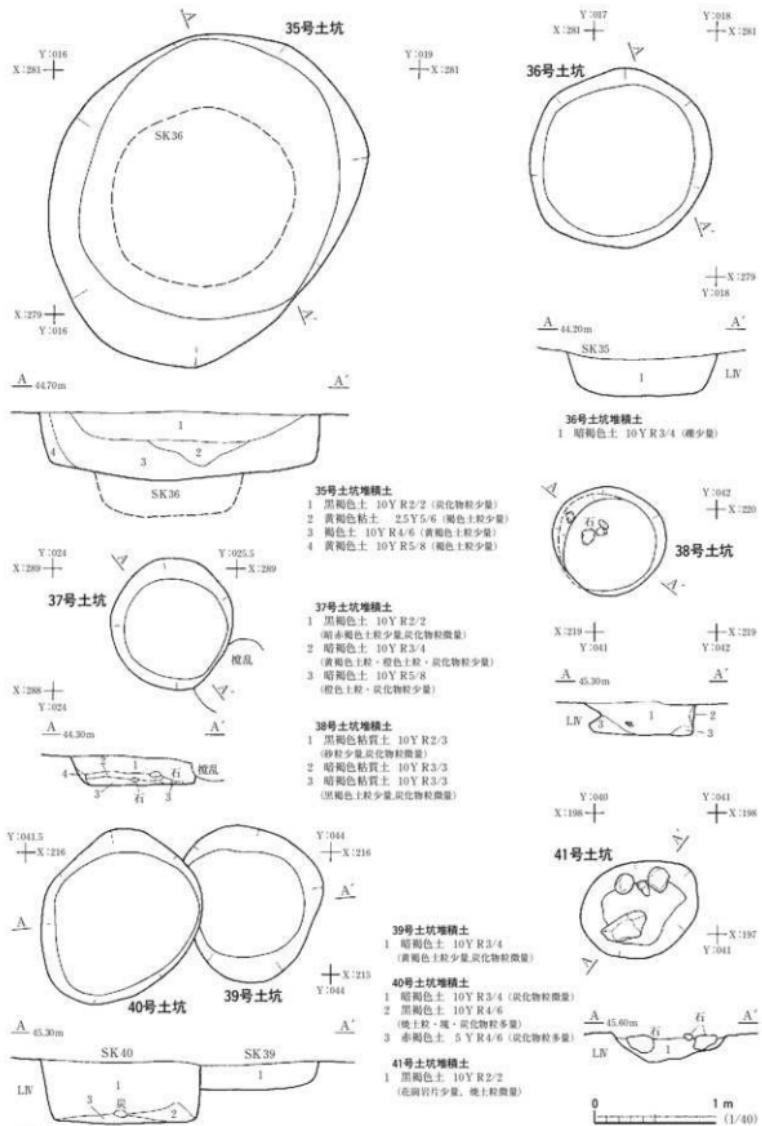


図114 35~41号土坑



図115 42~48号土坑



図116 49~55号土坑

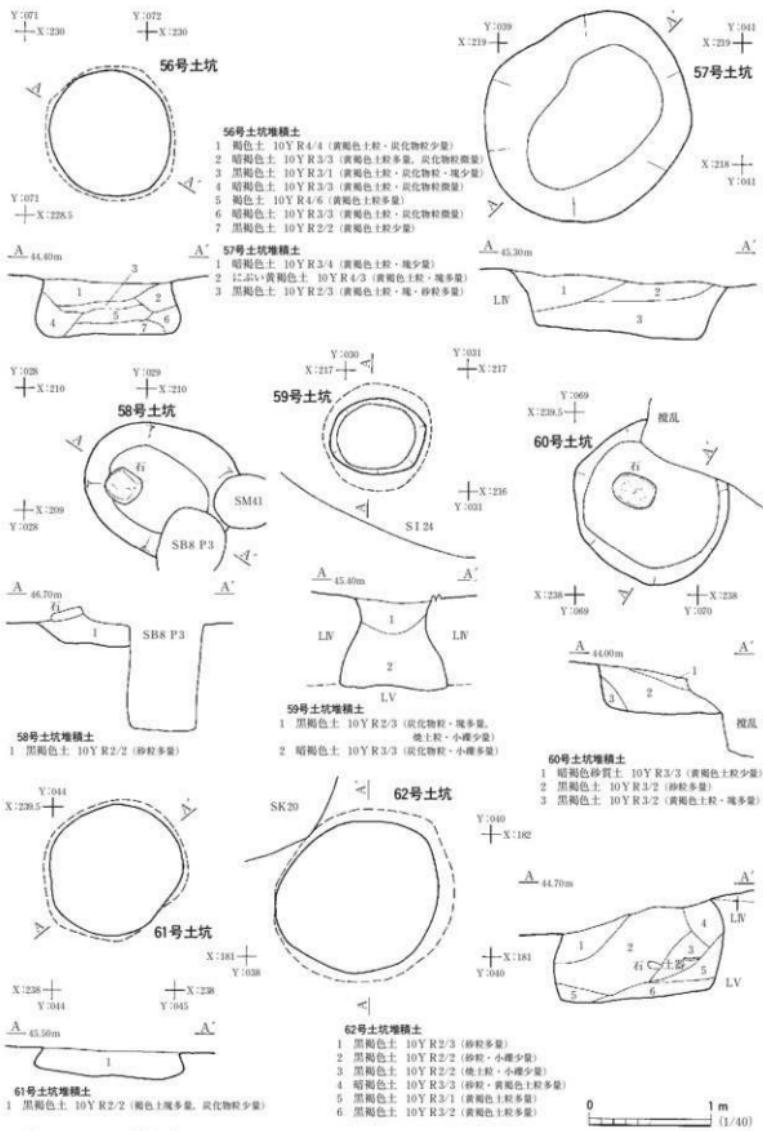


図117 56~62号土坑

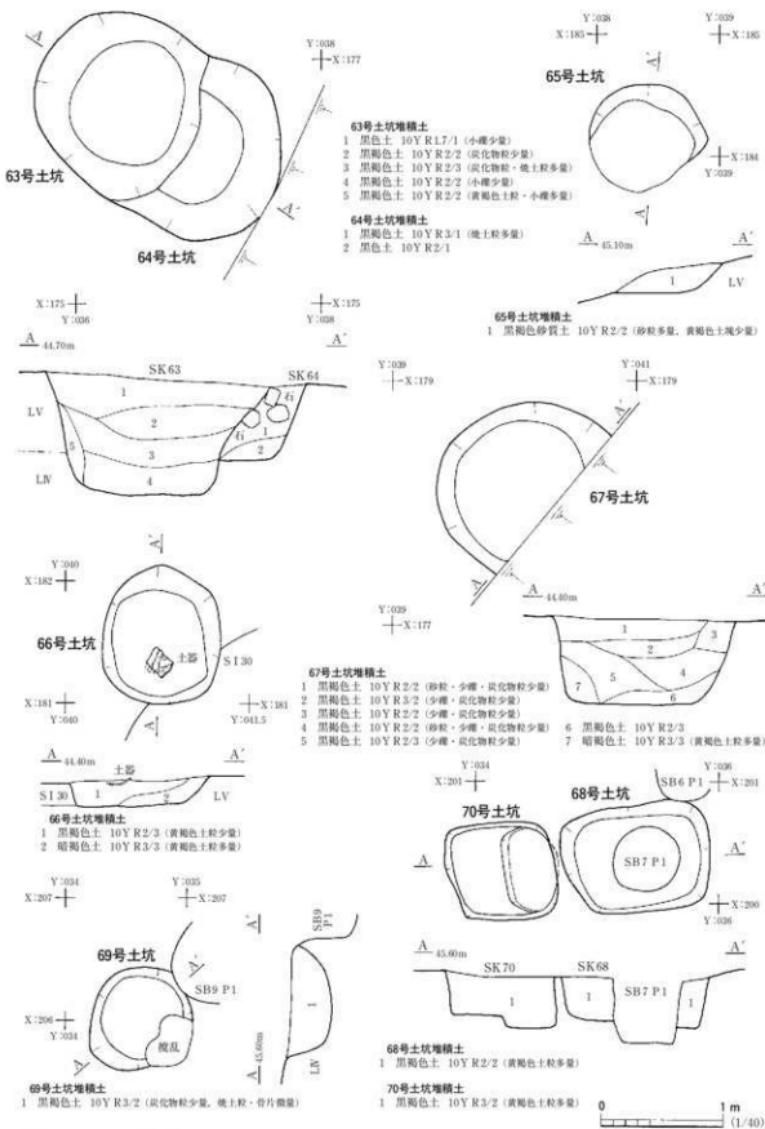


図118 63~70号土坑

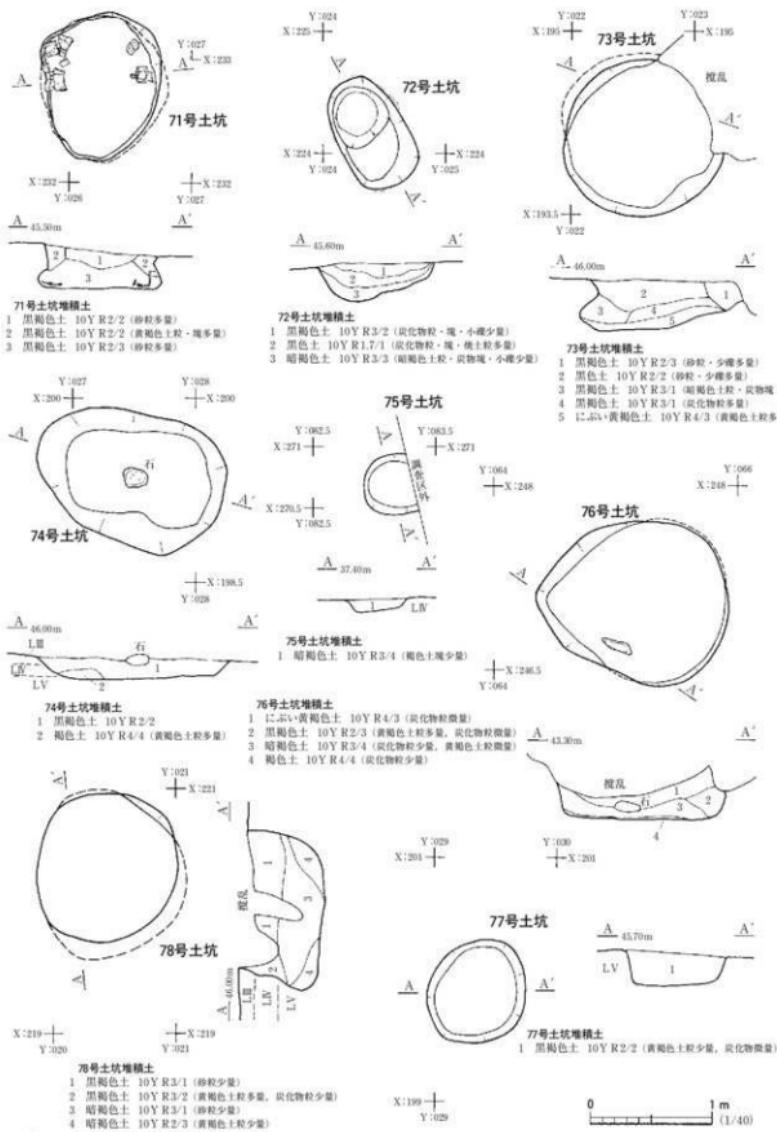


図119 71~78号土坑

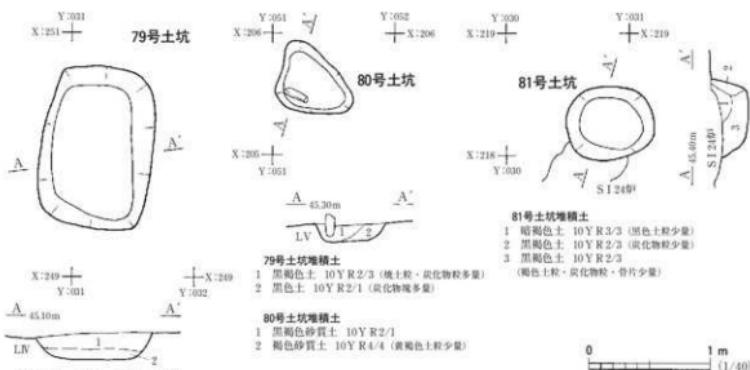


図120 79~81号土坑

藏穴の機能を有していたと考えられる。出土遺物はなく、時期は不明である。

(三 浦)

77号土坑 S K77(図119・133, 写真62)

調査区中央部の南西側、B 6-14・B 7-2 グリッドにまたがって位置する。検出面は LV 上面で、西側に接する S K74と共に検出した。平面は円形を基調とするが、やや整っていない。ほぼ平坦な底面は僅かに西側に傾くが、断面は簡略に近い。規模は径85cm、深さ30cmと比較的小型である。遺構内堆積土は1層で、堆積状況は判断できない。

遺物は堆積土中から縄文土器片43点が散在状態で出土している。無文と条線が施された細片がほとんどで図示できるものは少ない。図133-6・7は口縁部片で、いずれも端部が厚みをもった作り出しがなっている。平口縁に沿って巡る沈線区画内に充填縄文を施し、7の沈線上には2個一対の綫長の小さいコブが付加されている。

本土坑は、堆積土の状況と出土遺物から縄文時代後期後葉頃の構築と考えている。 (山 岸)

78号土坑 S K78(図119・133)

調査区中央部の中央西端、B 5-13・B 6-1 グリッドに位置する。検出面は LV 上面で、北側に S M53、南側に S I 36が接続している。平面形は円形を、断面はフラスコ形を呈するが、壁の崩落によって全体的に整っていない。規模は径120cm、深さ70cmである。遺構内堆積土は4層に分けられ、いずれも自然堆積と考えている。

遺物は縄文土器片314点と剥片2点が、堆積土全般にわたって散布状態で出土している。図133-8は短い口縁部が「く」の字状に外傾する鉢形土器で、胴部上半の平行沈線の区画内に対向する三叉状の沈線文を横位に施している。9は口縁部の無文部に、平行沈線と綫位の刻みを加え羊歯状の沈線文を描いている。10・11はやや厚手の口縁部片で、平行沈線で区画した縄文带上に対向する三

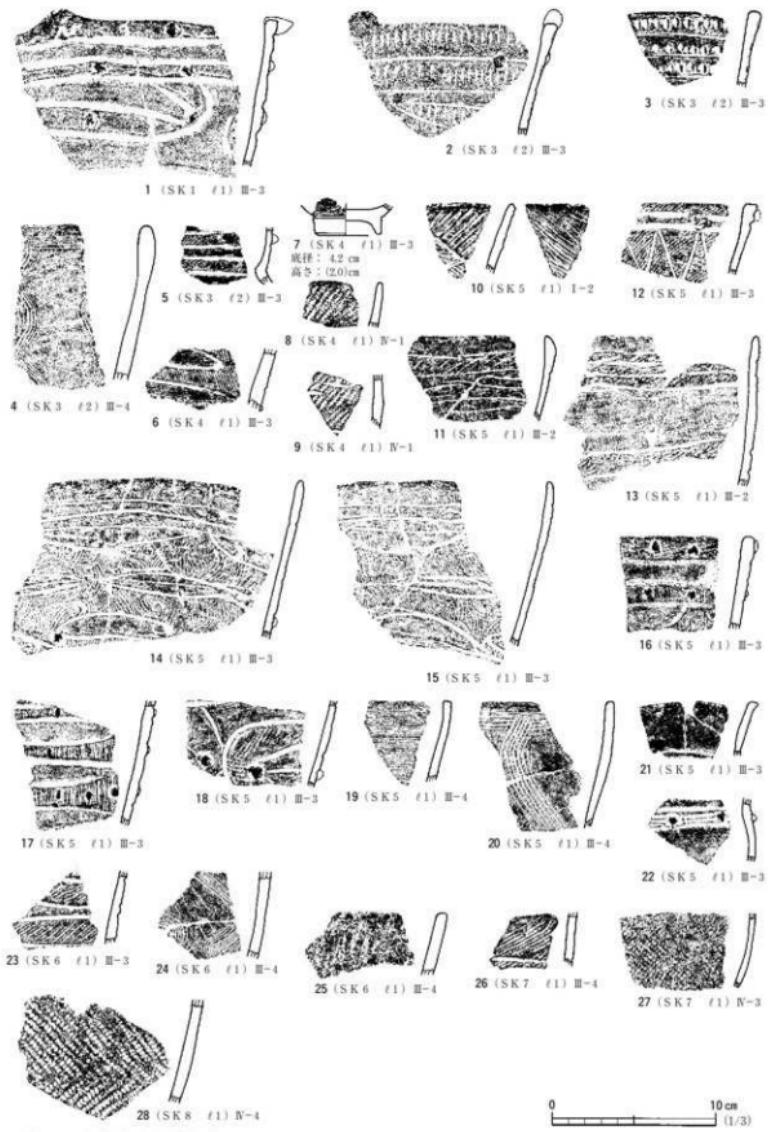


図121 土坑出土土器(1)

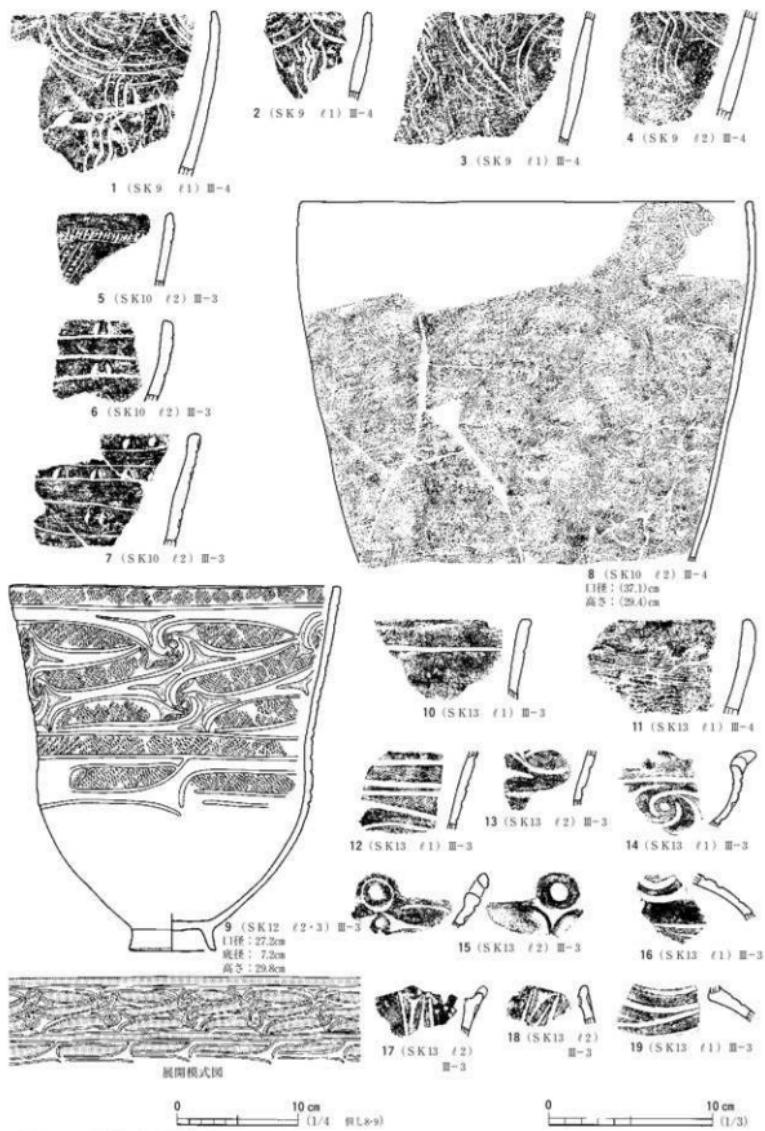


図122 土坑出土土器(2)

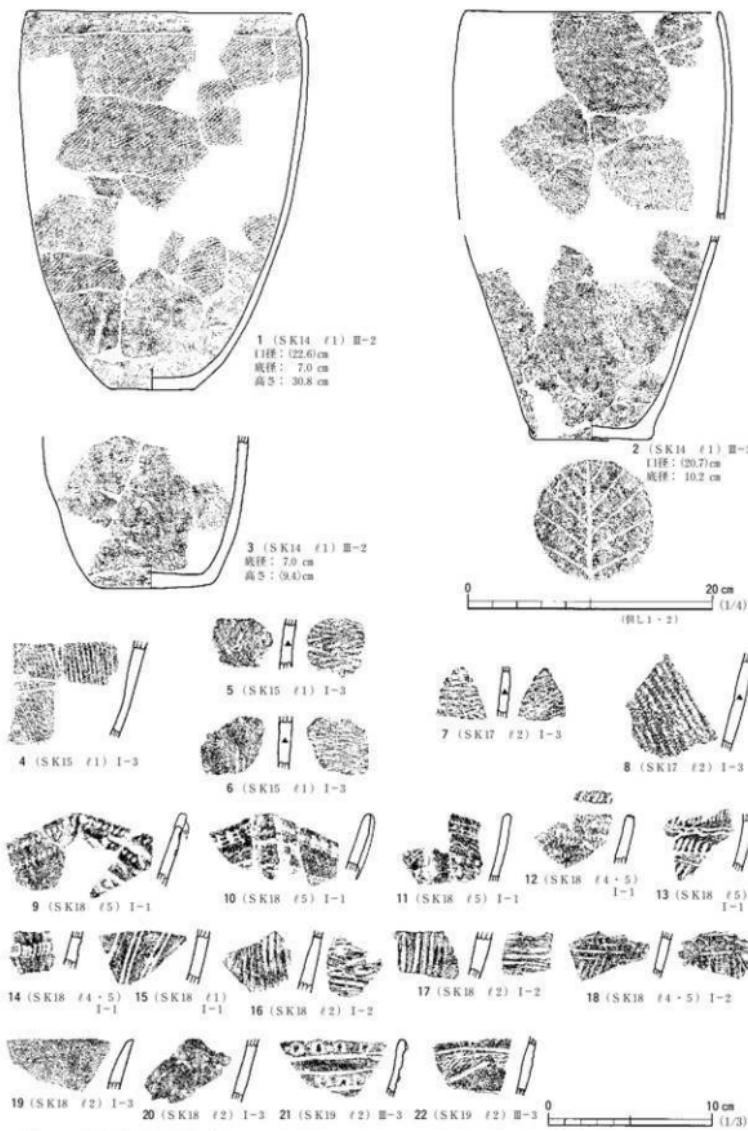


図123 土坑出土土器(3)

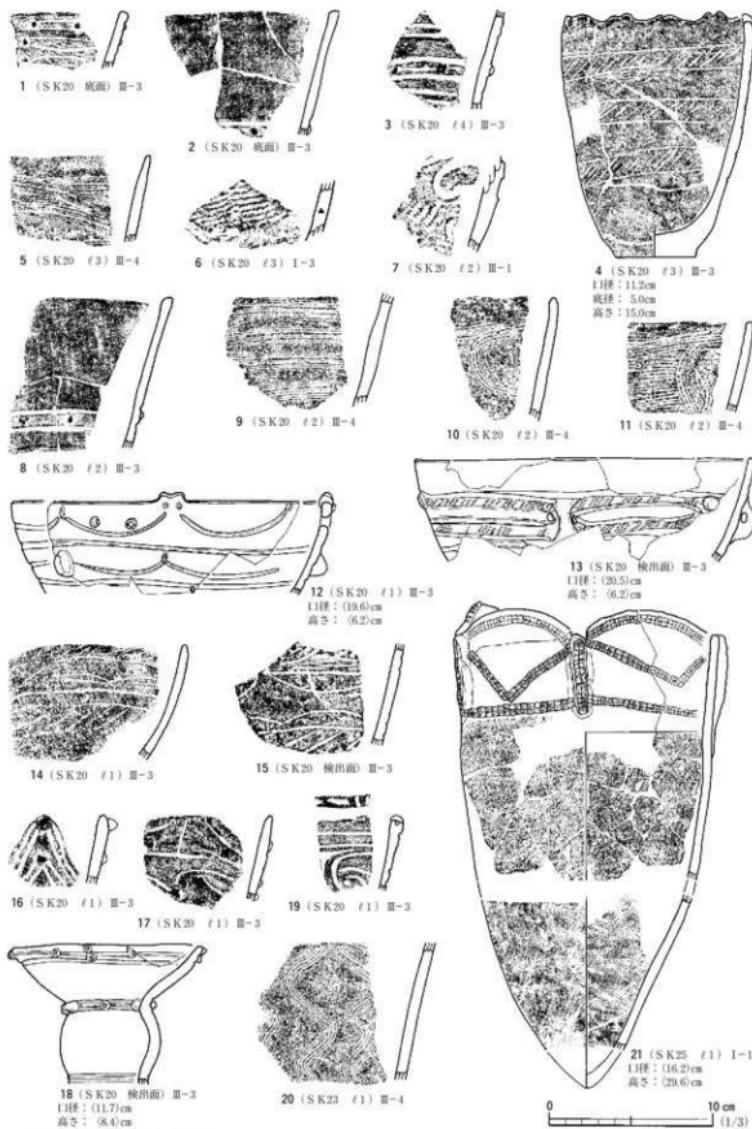


図124 土坑出土土器(4)

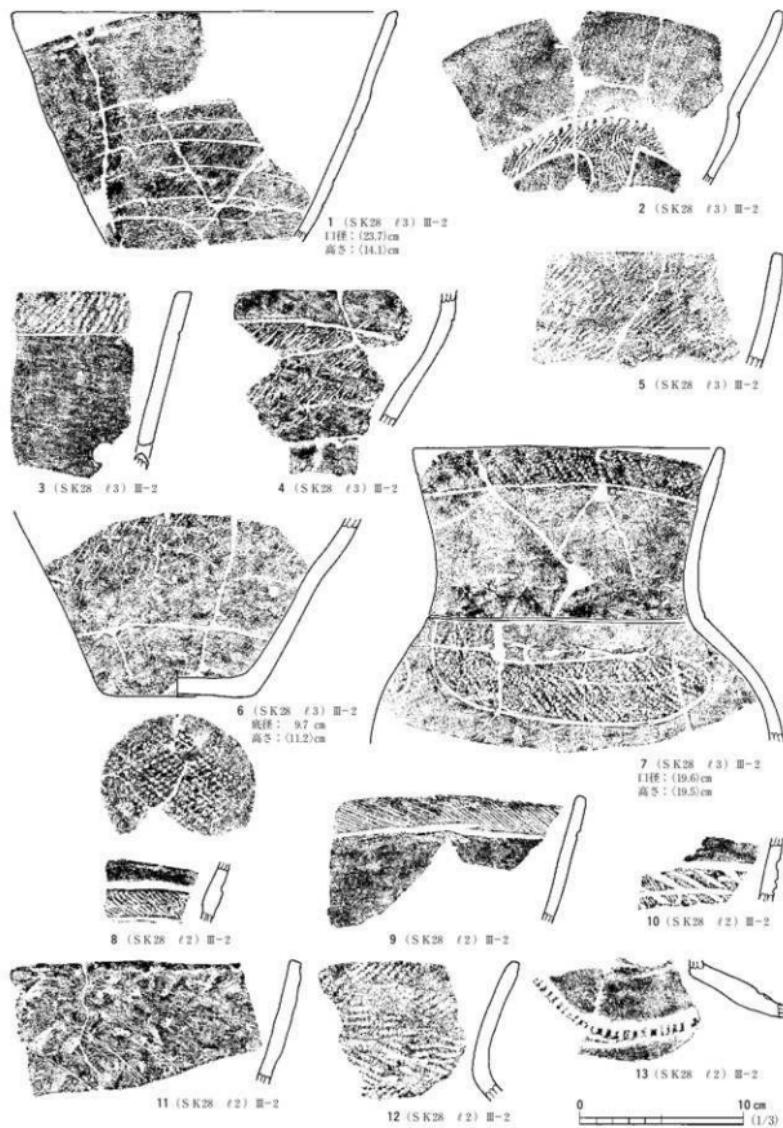


図125 土坑出土土器(5)

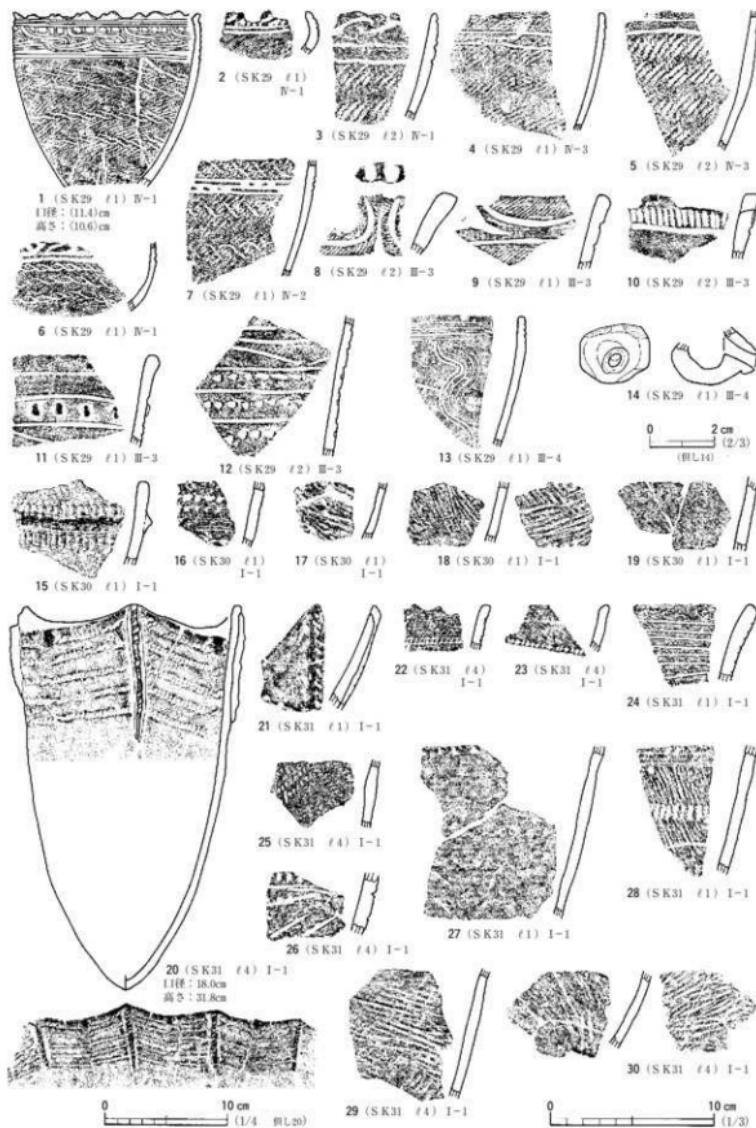


図126 土坑出土土器(6)

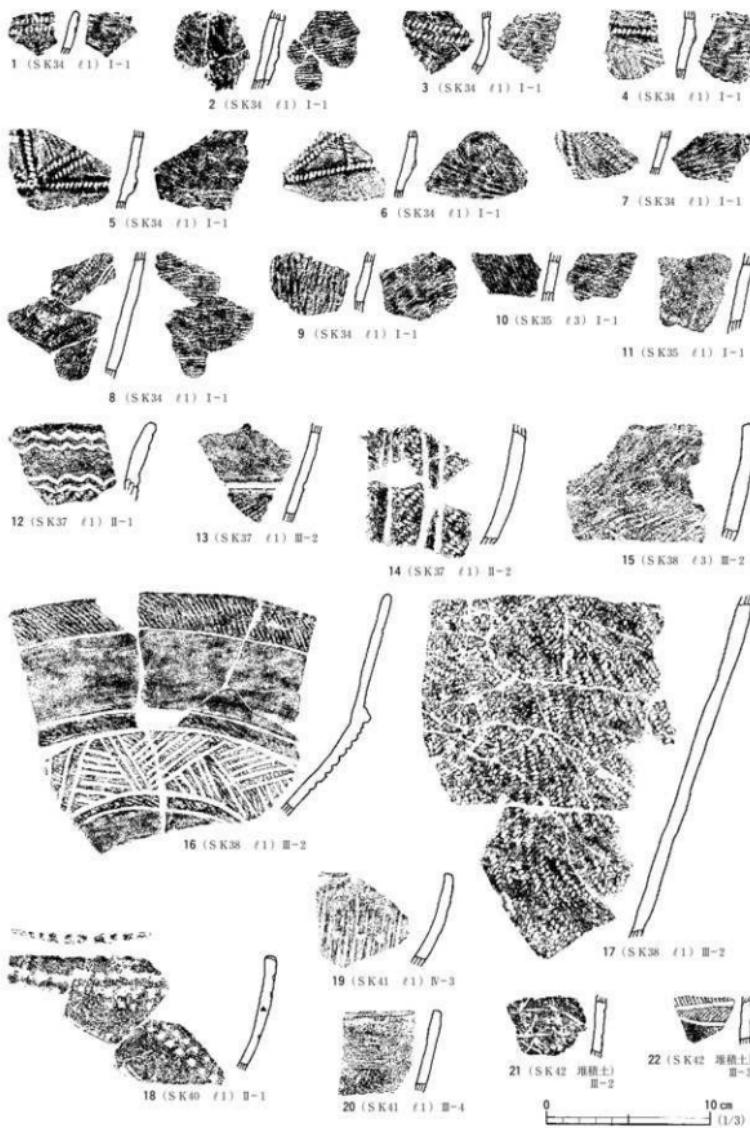


図127 土坑出土土器(7)

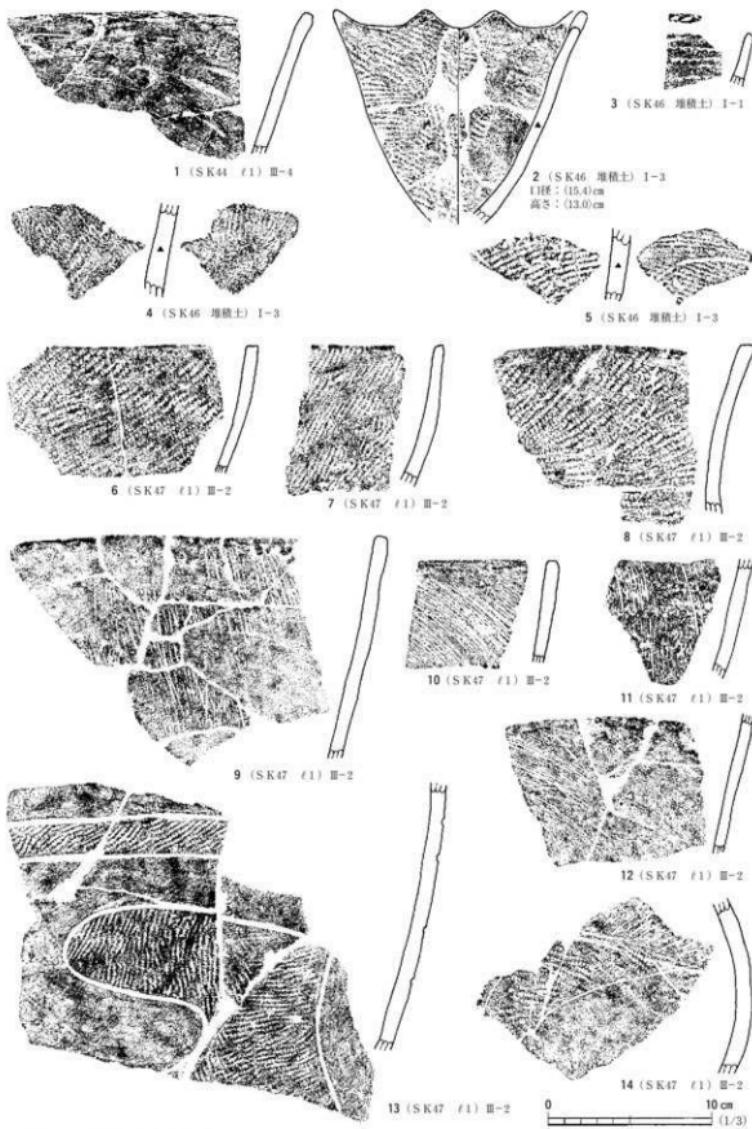


図128 土坑出土土器(8)

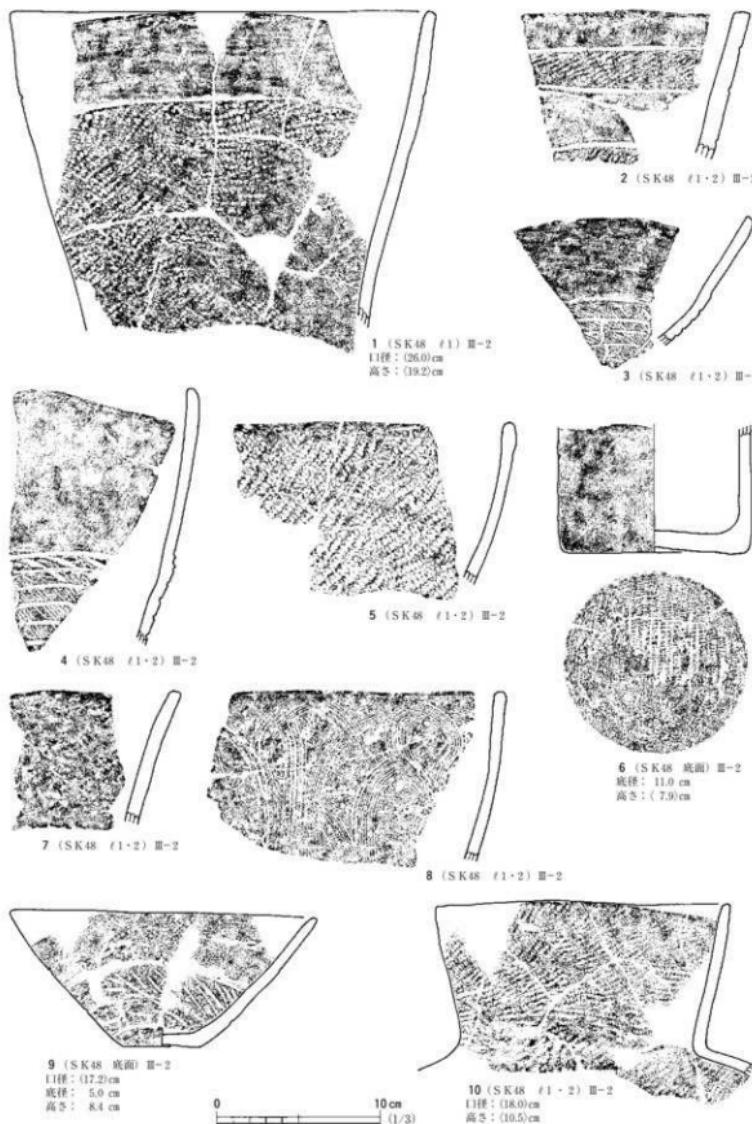


図129 土坑出土土器(9)

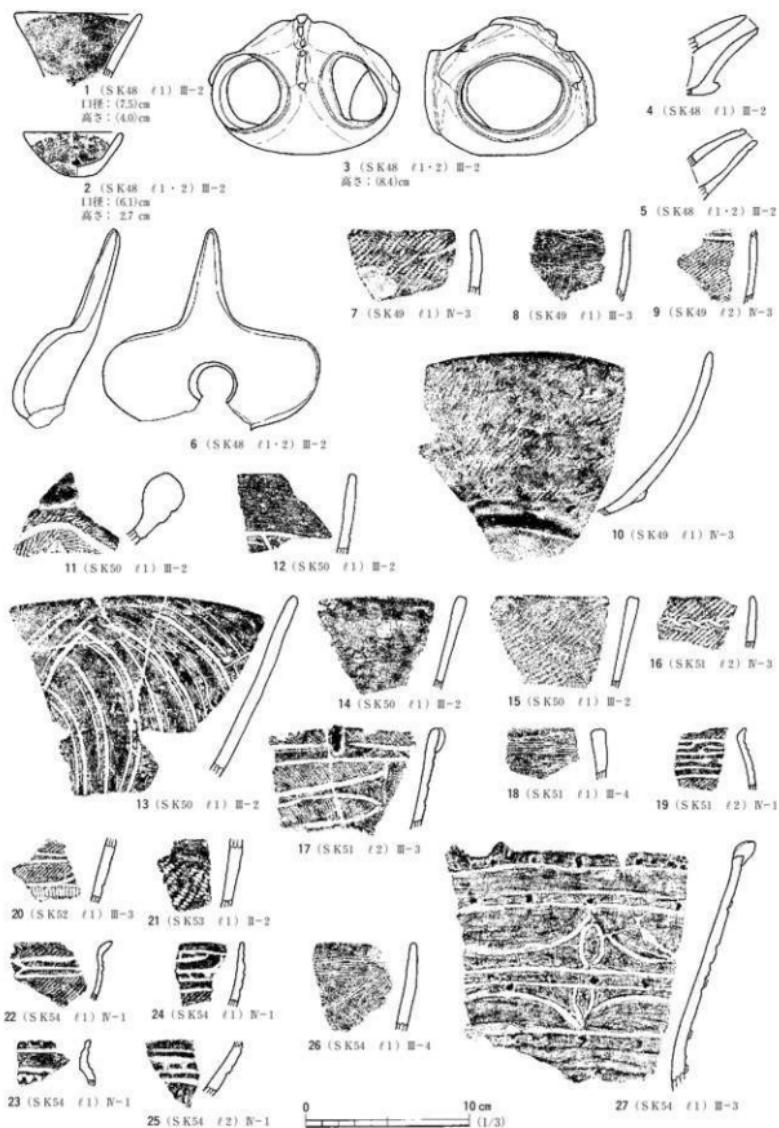


図130 土坑出土土器(10)

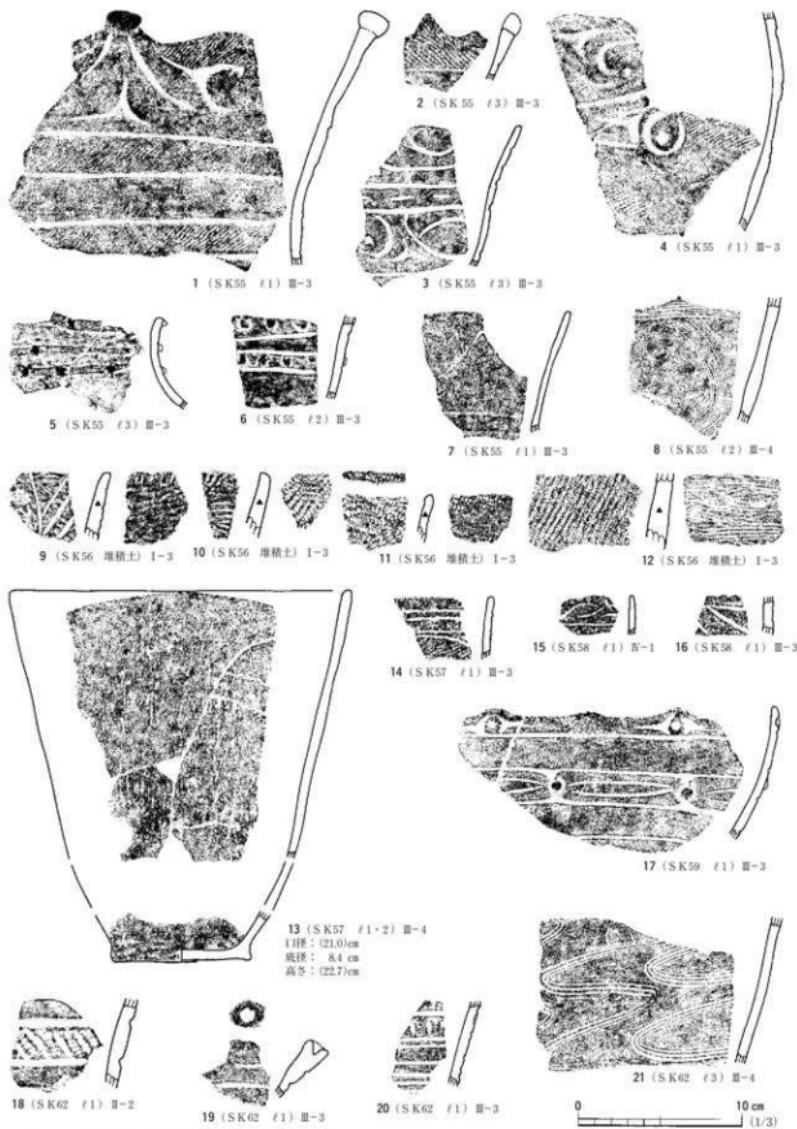


図131 土坑出土土器(1)

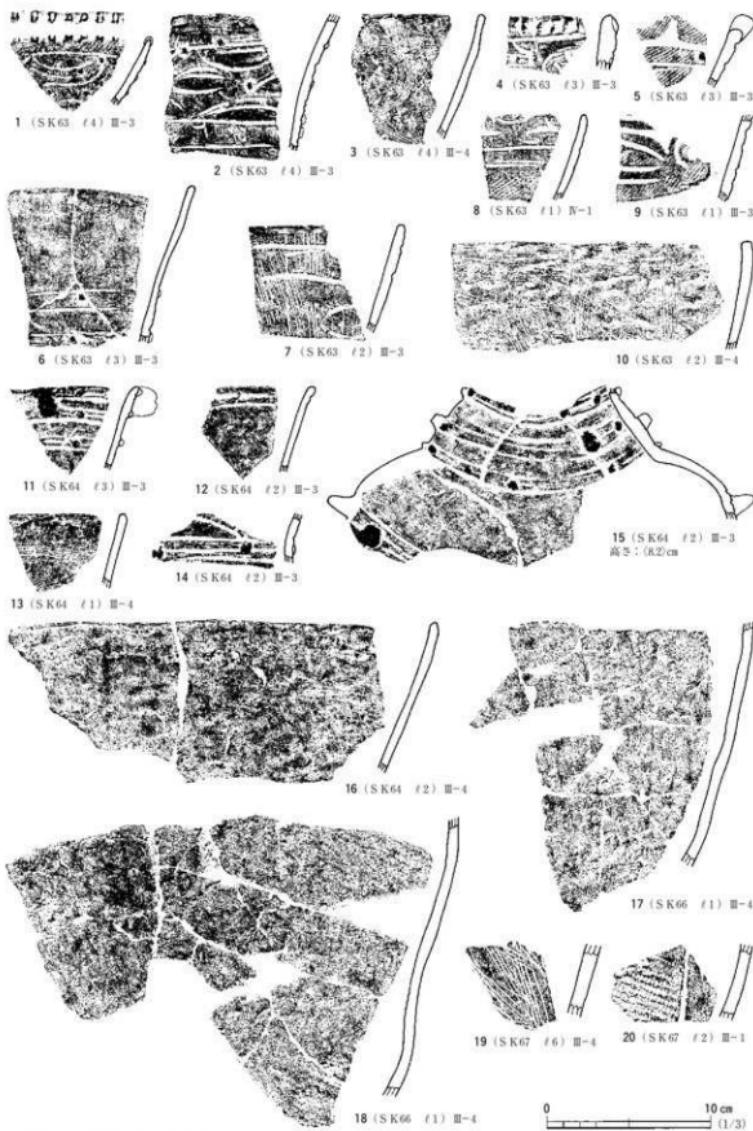


図132 土坑出土土器(12)

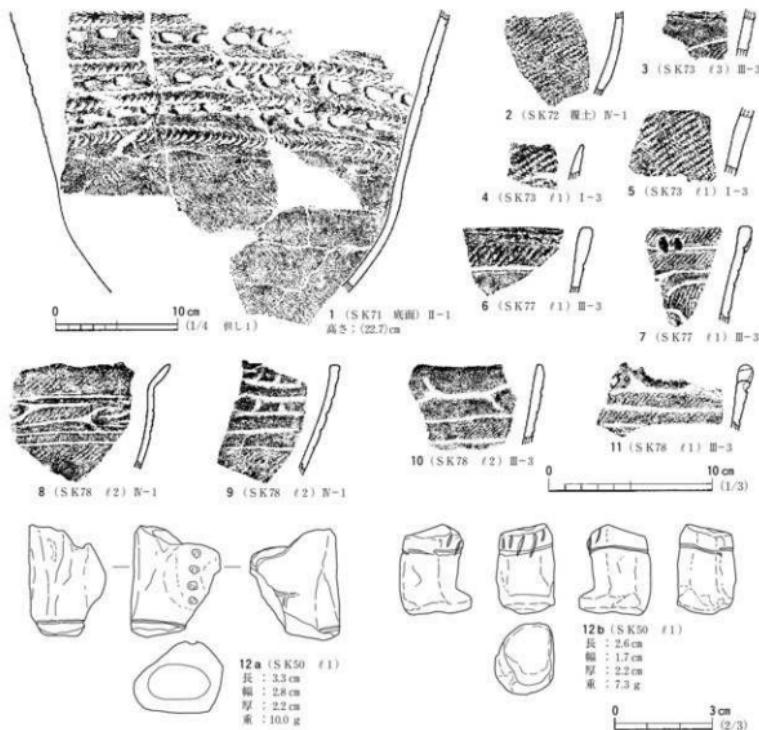


図133 土坑出土土器(13)

又状の沈線文を施している。

本土坑は形状・規模から貯蔵穴を、堆積土と出土遺物の特徴から縄文時代晩期前葉頃の構築と考えている。
(山岸)

79号土坑 SK79(図120)

調査区中央部の北西側、B 4 - 7・11グリッドに位置する。検出面はL IV上面で、重複する遺構はない。平面は長方形を基調とし、南北に長い。断面は鍋底状に近く、壁は曲線的に外傾する。規模は長辺130cm、短辺90cm、深さ25cmである。遺構内堆積土は2層に分けられ、多量の炭化物を含むが堆積状況は判断できない。遺物は出土していない。

本土坑については、形状・堆積土の状況からSK72と同様な平安時代の簡易な木炭窯跡と考えている。
(山岸)

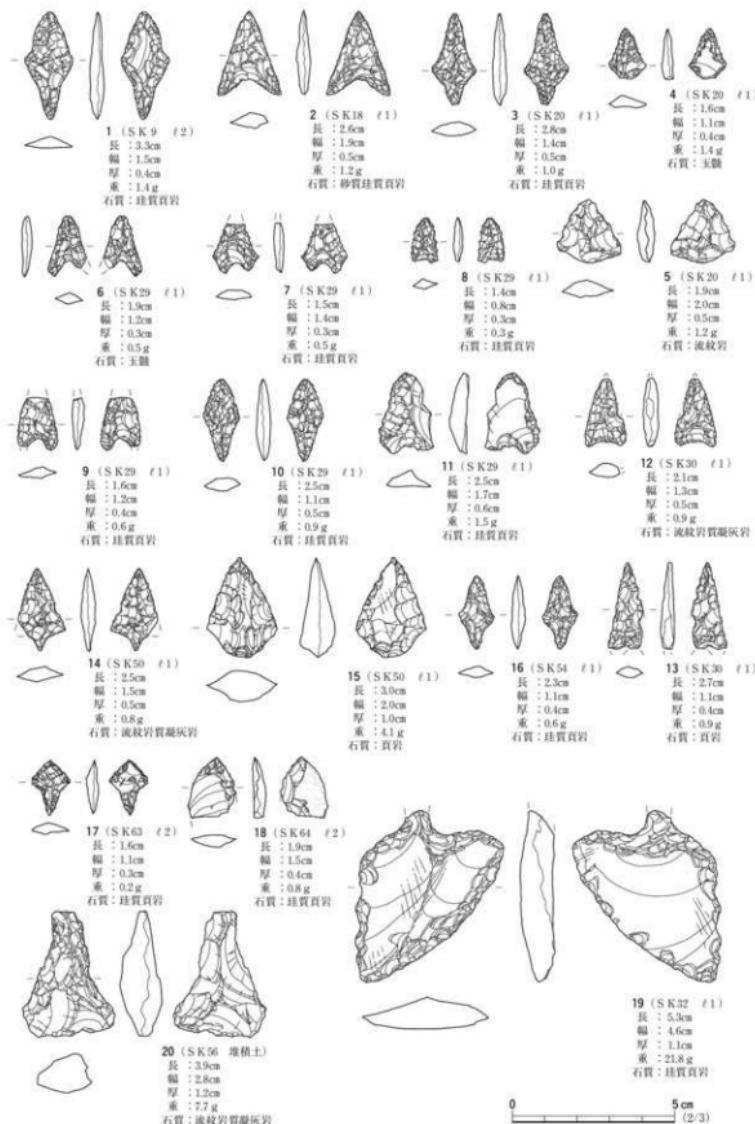


圖134 土坑出土石器(1)

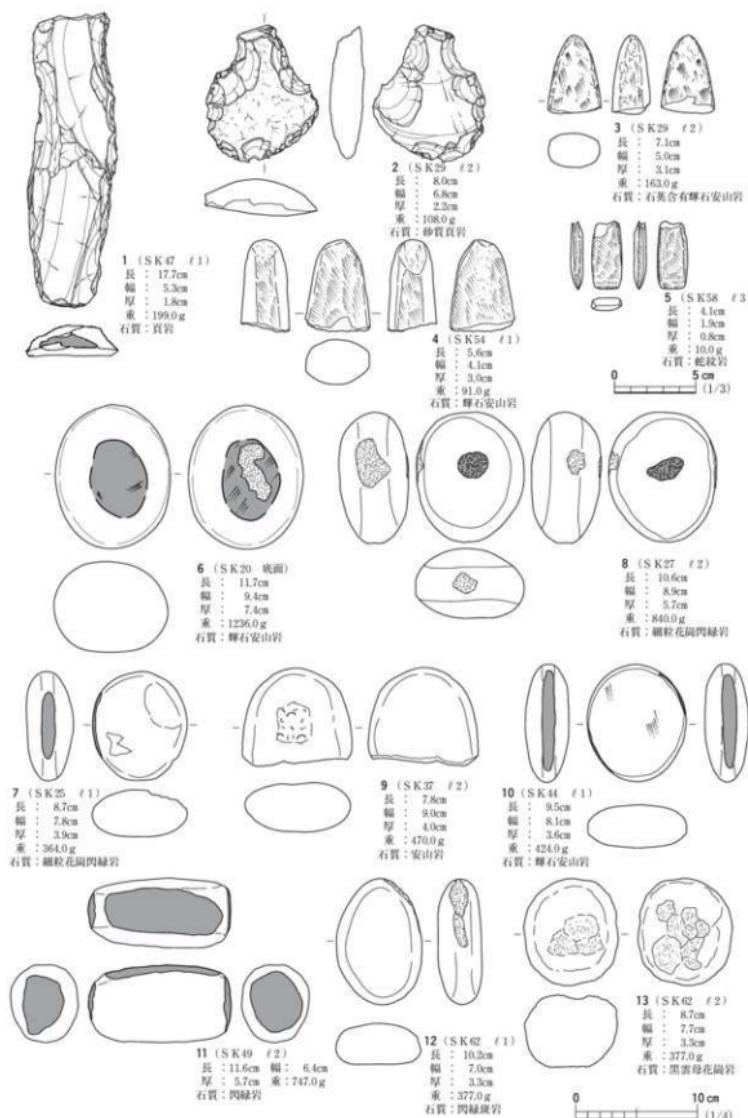


図135 土坑出土石器(2)

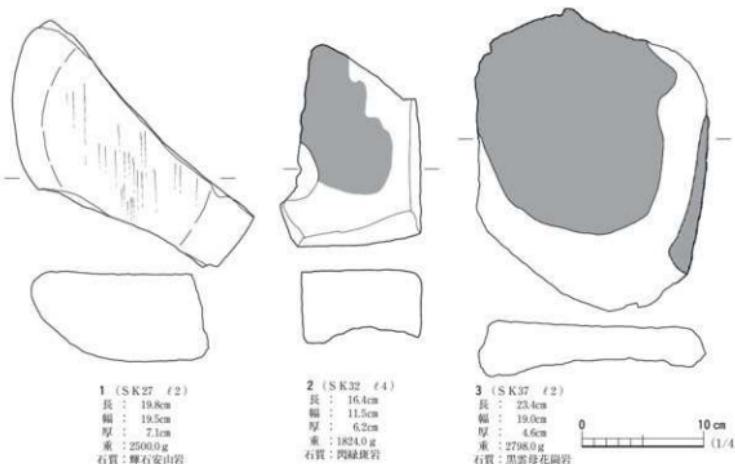


図136 土坑出土石器(3)

80号土坑 SK80(図120)

調査区中央部の中央南側、C 6 - 11グリッドに位置する。検出面はLV上面で、西側にSK24・25が所在する。平面は不整な三角形状を呈し、東西方向に長い。平坦な底面から壁は緩やかに外傾し、断面は鍋底状に近い。規模は東西70cm、南北50cm、深さ15cmと浅い。遺構内堆積土は混入物の違いから2層に分けたが、1回で埋められた人為堆積と考えている。遺物は出土していない。

本土坑の性格については、堆積土の状況から石圓炉を廃棄した土坑と考えられ、周辺遺構との関連性から縄文時代後期後葉頃の構築と考えている。
(山岸)

81号土坑 SK81(図120)

本遺構は調査区中央部平坦面のB 6 - 3グリッドに位置する。SI 24の旧炉を断ち割り時に炉よりも古い暗褐色土の円形の遺構を確認した。SI 24の旧炉よりも古い遺構である。

平面は径約70cmの円形を基調とする。検出面から底面までの深さは、31cmを測る。底面はやや丸みを帯びる。壁面は緩やかに立ち上がる。堆積土は3つに分層した。いずれの層も人為堆積の可能性がある。本遺構からの出土遺物はない。

本遺構はSI 24が構築される以前に造られた土坑である。平面形や断面形より、貯蔵穴と考えられる。本遺構の時期は重複関係より、縄文時代晚期前葉以前と考えられる。
(三浦)

第5節 埋 蔽

今回の調査で検出した埋葬は57基である。時期的には、縄文時代後期後葉～晩期前葉の範疇に納まるが、後期後葉に帰属する埋葬が最も多い。分布的には、調査区南部の南西端、B-9・10グリッド東側の南東向き緩斜面と調査区中央部の南西側、B-6グリッド南半の平坦面付近に比較的集中する傾向が認められる。また、調査区中央部では耕作による擾乱がLIV上面にまで及んでいる部分が多く、埋葬の遺存状態は悪い。

1号埋葬 SM1(図137・144、写真63)

調査区南部のB-9-11グリッドに位置する。検出面はS I 12のℓ1上面で、本遺構が新しい。また、東側にSM2～4が近接する。掘形の平面形態は円形で、規模は東西33cm・南北31cm、深さは22cmを測り、土器より大きく掘り込まれている。周壁は底面から比較的急角度で立ち上がり、底面は平らになっている。掘形堆積土は砂粒の多く混じる黒褐色土、土器内堆積土は均質な黒褐色土である。土器は掘形の底面から浮いた状態で、口縁部をやや東側に傾いた状態で埋納されていた。

図144-1は深鉢形土器で、底部から胴部上半までが遺存している。文様は幅2cm、条数8本の櫛歯状工具によって縦位方向に連続した波状文を描いている。内面調整は横ナデを施している。胎土には比較的粗粒の砂が多く含まれている。色調は底部から胴部下半においては黄褐色や赤褐色で、胴部上半は暗褐色を呈し、部分的には煤が付着する。おそらく煮炊きに使用した土器を利用したと考えられる。

所属時期は出土した土器から縄文時代後期後葉頃と考えている。

(中野)

2号埋葬 SM2(図137・144、写真63)

調査区南部のB-9-12グリッドに位置する。S I 12のℓ1で、比較的大形の石がまとまって出土し、その下側と周辺から埋葬を3基検出した。石の南側で検出した2基の埋葬をSM2・3とし、そのすぐ北側の埋葬をSM4とした。掘形の平面形態は円形で東西47cm、南北52cm、深さ37cmを測る。土器は掘形の底面から僅かに浮いた状態で正立して埋納されている。堆積土は掘形内・土器内共に砂粒の多く混じる黒褐色土である。

図144-2は大形の深鉢形土器で、底部から口縁部まで復元できた。外面や底部を丁寧にナデ調整した後に口縁部直下に横位方向に沈線を施す。胴部上半から下半にかけて幅1.3cm、条数5本の櫛歯状工具を用いて縦位方向に波状文を連続的に描いている。内面調整は丁寧な横ナデを施している。胎土には比較的細粒の砂を含んでいる。色調は底部から胴部下半付近は赤褐色で、胴部上半から口縁部においては暗褐色を呈し、部分的に煤や炭化物が付着する。

遺構の所属時期は出土した土器から縄文時代後期後葉頃と考えている。

(中野)

3号埋葬 SM3(図137・144、写真63・83)

調査区南部のB 9-12グリッドに位置する。検出面はS I 12のℓ 1上面で、本遺構が新しい。掘形の平面形は円形で、東西46cm、南北37cm、深さは31cmを測る。土器より大きく掘り込まれ、周壁は垂直に近い状態で立ち上がる。土器は掘形の底面から口縁部を東側へ斜めに傾けた状態で出土している。堆積土は掘形は黒褐色土、土器内は暗褐色土である。

図144-3は平口縁の深鉢形土器である。外面や底部を丁寧にナデ調整した後に、幅2cm、条数1本の先端のやや鋭利な櫛歯状工具を用いて梯子状の图形を描いている。内面調整は丁寧な横ナデを施している。胎土には比較的細かい砂粒が含まれている。色調は暗褐色を呈しており部分的には煤が付着する。日常的に使用していた土器を利用したと考えられる。

遺構の所属時期は出土した土器から縄文時代後期後葉頃と考えている。

(中野)

4号埋葬 SM4(図137・144、写真63・83)

調査区南部のB 9-12グリッドに位置する。検出面はS I 12のℓ 1である。遺存状態は比較的良好。S I 12と重複し本遺構が新しい。南側にSM2・3が近接する。埋葬の上には、16×16cmの焼けた石が置かれていた。掘形の平面形態は円形で、東西35cm・南北37cm、深さ30cmを測り、土器より一回り大きく掘り込まれている。土器は掘形の底面からやや浮いた状態で正立して埋納されている。堆積土は掘形内が暗褐色土、土器内は均質な黒褐色土で8×15cm大の自然礫が入っていた。

図144-4は平口縁の深鉢形土器で、完形に近い状態で遺存している。外面や底部を丁寧に横ナデ調整した後に、口縁部と胴部上半の括れ部に2~3条の横位の並行沈線を描いて区画し、区内には部分的に弧線文を描く。並行沈線上には、2個一对の瘤が部分的に貼り付けられる。内面調整は丁寧な横ナデを施している。胎土には細かい砂粒が含まれている。色調は全体的に赤褐色を呈し、内面には煤が付着している。使用した土器を利用したと考えられる。

遺構の所属時期は出土した土器から縄文時代後期後葉頃と考えている。

(中野)

5号埋葬 SM5(図137・144)

調査区南部のB 9-16グリッドに位置する。検出面はS I 12のℓ 1である。南側半分以上が削れおり遺存状態は悪い。S I 12と重複し本遺構が新しい。北側にSM2~4・6が近接する。掘形の平面形は上端を失っているが、南北33cm、深さは16cmを測る。掘形は土器に対して5~10cm前後大きく掘り込まれている。土器は遺存状態が悪いためどのような状態で設置されていたのかは不明である。堆積土は単層の砂粒を多く含む黒褐色土である。

図144-5は深鉢形土器の口縁部の大破片である。外面を丁寧に継ナデ調整した後に、目の細かい櫛歯状工具を用いて口縁部に沿って横位方向に条線を描き、胴部にむかって縱位方向にS字状に連続波状文を描いている。内面調整は丁寧な横ナデを加えている。胎土には粗細砂粒を含んでい

る。色調は褐色～暗褐色を呈しており外面には部分的に煤が付着する。

遺構の所属時期は出土した埋設土器から縄文時代後期後葉頃と考えている。

(中野)

6号埋甕 SM 6 (図137・145)

調査区南部のB 9 - 12グリッドに位置する。検出面はS I 12のℓ 1上面で、本遺構が新しい。遺存状態が悪く上部はすでに削られていた。掘形の平面形態は円形である。東西33cm、南北36cm、深さ18cmを測り、ボール状に土器より一回り大きめに掘り込まれていた。土器は底面から浮いた状態で北側に傾いていた。底部が正立している点から、本来正位に設置されていたものが土圧などの影響で潰れて現状になったものと考えている。堆積土は炭化物を少量含む黒褐色土で、土器内には直徑8cmの大の礫が入っていた。

図145-1・2は胴部に括れを持つ深鉢形土器である。同一個体の底部から口縁部外までの破片であるが遺存状態が悪く接合していない。外面を横ナデ調整した後に横位方向への並行沈線を描いて区画し、区画内に入り組み文を描いている。文様内は磨き調整され、横位の区画内や入り組み文の起点には瘤が貼り付けられる。胴部下半には沈線で格子目文を描く。内面調整は一度粗く横ナデした後に仕上げの磨き調整を加えている。胎土には細かい砂粒が多く含んでいる。色調は底部から口縁部にかけて黄褐色から暗褐色である。表面には部分的には煤が付着する。

遺構の所属時期は出土した土器から縄文時代後期後葉頃と考えている。

(中野)

7号埋甕 SM 7 (図137・145)

本遺構は、調査区南部のC 8 - 1・5グリッドに位置する。南東に下る緩斜面に立地し、近くにSM 18・19やSG 1、SS 1などがある。検出面はL II c上面である。深鉢形土器の底部破片が正立状態で埋納されていた。掘形の径は約30cm、深さは7cmほどである。掘形内の堆積土は、L II cに比べ若干柔らかく、小礫の混入が少ない。

(今野)

図145-3は深鉢形土器の胴部下半である。遺存部は全て無文で、器表面は丁寧に磨かれ部分的に光沢を帯びている。また、底面には僅かに網代編状の痕跡が極一部に遺存している。胎土には比較的多くの細粒砂を含むが焼成は良好で、色調は明赤褐色を呈する。また、胴部内面には炭化物の付着が認められる。

本遺構については、検出状況と周辺遺構との関係からほぼ同時期の縄文時代後期後半頃に所属すると考えている。

(山岸)

8号埋甕 SM 8 (図137・145、写真64)

調査区中央部の南側、B 7 - 12グリッドに所在する。S I 10と重複し、本遺構が新しい。土器は掘形内に、やや南西側に傾いた正立状態で埋められていたが、ほぼ土器が掘り上がった状態で埋甕と確認したために、掘形の平面は不明である。断面で確認できた掘形は長径65cm、深さ25cmの規模

で、不整な土坑状に掘り込まれていた。土器は、この掘形の南西側の壁に接して置かれ、黒褐色土で周囲を埋めて固定している。このため土器は、正立状態であるが掘形の傾斜に沿って南西側に傾いている。土器内の堆積土は1層で、特別な堆積状況・遺物等は認められない。

図145-4は口縁部を欠損する深鉢形土器で、底部から胴部に向かって直線的に開き、胴部上半が直立ぎみに立ち上がる。器面には縦位の整形痕が僅かに認められる程度で、文様は付加されていない。また、部分的に細かな炭化物が付着している。全体的に暗褐色系の色調を呈するが、再火熱を受けたようで、器面は脆く、部分的に浅黄橙に変色している。

本遺構の所属時期は、無文土器のため判然としないが、縄文時代後期後葉～晩期前葉頃と考えている。また、器面に炭化物の付着や火熱による変色部分が認められることから煮沸に使用した土器を埋設したと考えている。

(山岸)

9号埋甕 S M 9(図138・145)

調査区南部のB 9-16グリッドに位置する。検出面はL II d上面である。遺存状態は悪く土器片が折り重なるような状態で検出された。重複遺構はなくSM23がすぐ西側へ近接する。掘形の平面形は円形である。東西37cm、南北34cm、深さ12cmを測り、土器に対して5cm程大きく掘り込んでいる。土器は潰れて破片状になっていたが底部付近は正を保っているため、土圧で潰れて上部が内側に落ち込んだものと考えている。掘形の堆積土は炭化物を微量含む黒褐色土である。

図145-5は深鉢形土器である。底部から胴部下半まで遺存している。外面や底部を丁寧に縦ナデ調整した後に、幅1.5cm、条数7本の撫歯状工具を用いて、縦位方向に波状文を連続的に描いている。内面は丁寧な横ナデ調整を施している。胎土には比較的細かい砂粒を含んでいる。色調は底部付近が黄褐色、胴部下半では暗褐色を呈し、部分的に煤が付着する。内面には炭化物の付着が見られ使用の痕跡が看取できる。

遺構の所属時期は、出土した土器から縄文時代後期後葉頃と考えている。

(中野)

10号埋甕 S M10(図138・145、写真64・83)

調査区南部のB 9-16、B 10-4グリッドに位置する。検出面はL II cである。西側に位置するSM11、北側に位置するSM12と共に検出した。また、SM11と重複しており本遺構が古い。掘形の平面形は円形で、規模は東西37cm、南北38cm、深さ18cmを測り、土器に対して10cm程大きく掘り込んでいる。土器は割れて掘形の周壁間に広がった状態で検出された。胴部下半は正位を保って埋納されている。土器内・掘形内堆積土は共に黒褐色土である。

図145-6は深鉢形土器である。ほぼ完形で遺存しているが、口径が歪んでいて稍円形を呈する。外面や底部を丁寧に縦ナデ調整した後に、3条1組の沈線で、口縁部では並行に施し、胴部では縦位方向の波状文を連続的に描いている。内面調整は丁寧な横ナデ及び縦ナデを施している。胎土には粗細砂粒を含んでいる。色調は暗赤褐色から暗褐色を呈しており部分的には煤が付着する。内面

にも煤の付着が見られる。

遺構の所属時期は、出土した土器から縄文時代後期後葉頃と考えている。

(中野)

11号埋甕 S M11(図138・146, 写真64)

調査区南部のB 9 - 16, B 10 - 4 グリッドに位置する。検出面はL II cである。S M10と重複し本遺構が新しい。掘形の平面形は概ね円形である。東西35cm, 南北34cm, 深さは20cmを測る。掘形は土器の外形に合わせるように摺鉢形を呈し、土器より大きく掘り込んでいる。土器は口縁部を失っていたが胴部以下は比較的残りが良く正立して納められていた。土器内・掘形内の堆積土は共に黒褐色土である。

図146-1は深鉢形土器で、底部から胴部下半まで遺存している。文様は外面や底部を丁寧にナデ調整した後に、幅2.1cm, 条数7本の先端が扁平な櫛歯状工具を用いて縱位方向に波状文を連続的に描いている。胎土には粗い砂粒が含まれている。色調は暗褐色を呈しており部分的に煤が付着する。内面は丁寧なナデ調整を施し下半部には炭化物が付着する。

遺構の所属時期は、出土した土器から縄文時代後期後葉頃と考えている。

(中野)

12号埋甕 S M12(図138・146, 写真64・83)

調査区南部のB 9 - 16グリッドに位置する。検出面はL II cである。重複遺構はないがS M10・11と近接する。掘形の平面形は円形である。東西32cm, 南北38cm, 深さ16cmを測る。掘形は土器より2cm程大きく掘り込んでいる。土圧の影響のため土器の上部が割れて掘形側に広がっているが、底部は正立して埋納されている。堆積土は土器内・掘形内共に黒褐色土である。

図146-2は胴部に括れを持つ平口縁の深鉢形土器である。口縁と胴部の括れに沈線区画による2条の無文帯を巡らせ、無文帯の区画内に大柄な入り組み状の图形を描いている。これら文様間は磨かれ、小さい瘤が貼り付けられた無文帯や入り組み状の图形は立体的な表現となっている。胴部下半には沈線で格子目文を描く。胎土には細かい砂粒を含んでいる。色調は底部から胴部下半付近は黄褐色から赤褐色を呈し、胴部上半から口縁部にかけては暗褐色で部分的に煤の付着が認められる。

遺構の所属時期は、出土した埋設土器から縄文時代後期後葉頃と考えている。

(中野)

13号埋甕 S M13(図139・146, 写真65・66)

調査区南部のB 9 - 16グリッドに位置する。検出面はL II cである。重複遺構はないが、西側にS K14、北側にS M14・15が近接して検出された。遺構は、擾乱などによって上部をほとんど失っており、胴部下半から底部付近が検出された。土器内堆積土は暗褐色土、掘形内堆積土は黒褐色土である。掘形の平面形は円形である。規模は、東西30cm・南北30cm, 深さ10cmを測る。掘形は、土器が底面から5cm程浮いた状態で検出されたことから、土器に対して比較的大きめに掘り込んでい

たと考えられる。土器は底部の遺存状態から正立して埋納されていたものと推測される。

図146-3は深鉢形土器で、底部から胴部下半まで遺存している。条数は不明だが、櫛歯状工具を用いて、縦位や横位方向に波状文を描いた後に、底部付近に丁寧なナデ調整を行っている。それによって部分的に波状文が磨り消されている。内面調整は、丁寧な横ナデを施している。胎土には比較的粗めの砂粒を含んでいる。色調は、全体的に暗黄褐色を呈しており、煤の付着は見られない。

遺構の所属時期は、土器から縄文時代後期後葉頃と考えている。

(中野)

14号埋瓦 S M14(図139・146, 写真65)

調査区南部のB 9-16グリッドに位置する。検出面はL II cである。重複遺構はないが、S M13・15と近接する。上部を搅乱などで失っており、土器の底部と堀形の底面付近がかろうじて検出された。堆積土は、1層で黒褐色土である。堀形の平面形は円形である。東西25cm・南北25cm、深さは5cmを測る。土器は、底部の出土状況から正立して埋納されていたと考えられる。

図146-4は鉢形土器の底部である。内面調整はナデを施している。胎土には比較的粗めの砂粒を含んでいる。色調は暗褐色を呈しており内面には炭化物が付着する。

遺構の所属時期は、出土した土器から縄文時代後期後葉頃と考えている。

(中野)

15号埋瓦 S M15(図139・146, 写真65・66)

調査区南部のB 9-16に位置する。検出面はL II cである。重複遺構はないが、S M13・14と近接する。S M13・14と同様に上部を搅乱などで失っており、土器の底部と堀形の底面付近がかろうじて検出された。堆積土は、1層で黒褐色土である。堀形は円形で、東西20cm・南北20cm、深さは12cmを測る。土器は正立して埋納されている。

図146-5は深鉢形土器で、底部から胴部下半まで遺存している。外面や底部を丁寧にナデ調整した後に、幅1.8cm、条数9本の櫛歯状工具を用いて、縦位方向に波状文を連続的に描いている。内面調整は、丁寧な横ナデを施している。胎土には比較的粗めの砂粒を含んでいる。色調は、全体的に暗褐色を呈しており、部分的には煤が付着することから日常的に使用していた土器を利用したと考えられる。

所属時期は、出土した土器から縄文時代後期後葉頃と考えている。

(中野)

16号埋瓦 S M16(図139・147, 写真66)

調査区南部のB 9-16グリッドに位置する。検出面はL II d上面である。遺存状態は悪く、土器が潰れて破片が折り重なるような状態で検出された。重複遺構はなく、S M11・12が東側へ近接する。堆積土は1層で、炭化物を少量含む黒褐色土である。堀形の平面形態は円形で、東西40cm・南北40cmで深さは13cmを測る。堀形は土器に対して4cm前後大きめに掘りこまれている。土器は底面

から浮いた状態で設置されたものと考えられる。土器は潰れて破片状になっていたが、胴部下半は正位に保っている個所もあり、土圧で潰れて土器の口縁部などが内側に落ち込んだため、現状のようになつたものと考えている。

図147-1は、口縁部から底部にかけてやや丸みを持ちながら窄まる深鉢形土器である。文様は粗くナデ調整した後に、幅1.4cm、条数8本の先端が鋭利な櫛歯状工具を用いて、口縁部直下に横位方向へ施した後に縦位や斜位方向に垂下する波状文を連続的に描いている。内面調整は丁寧なナデを施している。胎土には細かい砂粒を含んでいる。色調は黄褐色から暗褐色を呈している。部分的に煤が付着する。胴部下半の内面には炭化物が付着している。

所属時期は、出土した土器から縄文時代後期後葉頃と考えている。

(中野)

17号埋甕 S M17(図138・147、写真68・83)

調査区南部のB10-4グリッドに位置する。検出面は、L II c下面である。L II c掘削時にSM17を確認した。そして土層確認のための断ち割りを行ったところ、東側より新たな埋設土器を確認したためこれをSM20とした。遺存状態は比較的良い。SM20をSM17が壊しているためSM17が新しい。土器内堆積土は砂礫を多く含む黒褐色土、掘形内堆積土は砂粒を少量含む黒褐色土である。掘形の平面形態はおおむね円形と考えられ、東西42cm、南北38cm、深さ28cmを測る。掘形は土器に対して3~5cm前後広めに掘りこまれており、土器は底面から2cm浮いた状態で正位に設置されている。周壁は底面から急角度で立ち上がる。

図147-2は平口縁の深鉢形土器である。幅1.1cm、条数6本の目の細かい櫛歯状工具を用いた条痕文を地文とし、口縁部から胴部上半にかけて縦位方向に、胴部下半には横位方向に施している。主要文様は、口縁端部から括れにかけて3条の並行沈線による上下二段の横位の区画帯内に施されている。区画帯内は二重の木葉状の弧線で縦位に区画され、その間に沈線を挟んで上下に相対する弧線を描き、弧線内の条痕文を磨り消している。区画帯と主要文様の要所には小さな瘤が張り付けられ、口縁端部には更に山形に尖り出す大型の瘤と縦長の刻みを持つ瘤が認められる。また、中央の区画帯にはボタン状の瘤が貼り付けられている。胎土には粗細砂粒を含んでいる。色調は、底部から胴部下半付近は黄褐色から赤褐色を、胴部下半においては暗褐色を呈し、部分的に煤が付着する。また、内面下半部には炭化物の付着が見られることから、使用していた土器を利用したと考えられる。

所属時期は、出土した埋設土器から縄文時代後期後葉頃と考えている。

(中野)

18号埋甕 S M18(図139・146、写真67・83)

調査区南部のC8-1グリッドに位置する。検出面はL II cである。SM19と共に検出し、精査の結果、SM18の掘形を壊しているためSM19が新しい。堆積土は2層で、土器内堆積土のℓ1は黒褐色土である。微量の骨粉が検出されたが、二次的な流れ込みなどの可能性がある。掘形内堆積

土の ℓ 2は炭化物を少量含む黒褐色土である。掘形の平面形態は円形で、東西38cm、南北38cm、深さは25cmを測る。掘形は土器に対して2~5cm前後深く掘りこまれている。土器は、底面から2cm浮いた状態で正立して設置されている。

図146-6は口縁部がやや窄まる平口縁の深鉢形土器である。文様は粗くナデ調整した後に、幅1.4cm、条数8本の櫛歯状工具を用いて波状文を描いている。口縁部直下に横位施文後、縦位や斜位方向に連続的に垂下させている。内面調整は丁寧なナデを施している。胎土には細かい砂粒を含んでいる。色調は暗褐色を呈し、部分的に煤や炭化物が付着する。

遺構の所属時期は、出土した土器から縄文時代後期後葉頃と考えている。

(中野)

19号埋甕 S M19(図139・148、写真67・68)

調査区南部のC8-1グリッドに位置する。検出面は、LIIcである。SM18を壊していることから本遺構が新しい。掘形の平面形態はおおむね円形と考えられる。規模は東西45cm、南北53cm、深さは23cmを測る。断面形はボール状を呈する。土器は遺存状態が悪く潰れて破片状になっていた。土圧で潰れたため現状のようになったものと考えていたが、正立する部分が見られない点から埋設した時から横や斜めに埋設されていた可能性もある。堆積土は単層で粗粒の黒褐色土である。

図148-1は網目状撚糸文を施した深鉢形土器である。口縁部から胴部にかけての大破片で、胎土には細かい砂粒を含んでいる。色調は黄褐色から赤褐色を呈する。

遺構の所属時期は、出土した土器から縄文時代晩期初頭頃と考えている。

(中野)

20号埋甕 S M20(図138・148、写真68・84)

調査区南部のB10-4グリッドに位置する。検出面はLIId上面である。SM17と重複し、本遺構が古い。堆積土は2層である。 ℓ 1は砂粒を少量含む黒褐色土である。 ℓ 2は砂粒を多量含む黒褐色土である。掘形の平面形態は円形で東西40cm、南北41cm、深さは40cmを測る。掘形は土器に対して3~5cm前後広めに掘りこまれている。土器は底面から2cm浮いた状態で正立して設置されている。周壁は底面から急角度で立ち上がる。

図148-2は深鉢形土器である。口縁部の一部を除いて良好に遺存している。粗く縦ナデ調整した後に、幅2cm、条数10本の櫛歯状工具を用いて、口縁部に沿って横位方向に描いた後に、縦位方向に波状文を連続的に描いている。内面調整は口縁部が横ナデ、胴部下半が縦ナデを施している。胎土には細かい砂粒を含んでいる。色調は黄褐色を呈している。部分的に黒斑状の個所が見られるが、使用された形跡は見当たらない。

遺構の所属時期は、出土した土器から縄文時代後期後葉頃と考えている。

(中野)

21号埋甕 S M21(図138・148, 写真69・70・84)

調査区南部のB10-4グリッドに位置する。検出面は、L II cである。L II c掘削時に、S M21・22・24の3基の埋甕を確認した。S M21・22のプランがS M24の掘形を壊しているためS M21・22が新しい。S M21とS M22の新旧関係は土層観察からは解らなかった。本遺構とS M22は、同時に掘形を作り、埋納した可能性も考えられる。堆積土は2層である。 ℓ 1は砂粒を多量に含む黒褐色土である。 ℓ 2は均質な黒褐色土である。規模は東西50cm, 南北45cm, 深さ35cmを測る。埋設土器は北東側の周壁に沿うように置かれ、掘形底面からは4cm浮いている。土器自体は正立して埋設されている。

図148-3は平口縁の深鉢形土器である。文様は粗くナデ調整した後に、幅2.5cm, 条数10本の先端が鋭利な櫛歯状工具を用いて波状文を描いている。口縁部直下に横位方向へ施しした後に縦位方向に連続的に垂下させている。また、垂下する波状文を描く際には細い沈線で範囲を下描きし、それに沿って波状文を描いているのが観察できた。内面調整は丁寧なナデを施している。胎土にはやや粗めの砂粒を多量に含んでいる。色調は底部から胴部下半にかけては被熱により赤褐色を、口縁部から胴部上半は暗褐色を呈し、部分的に煤が付着する。

遺構の所属時期は、出土した土器から縄文時代後期後葉頃と考えている。 (中野)

22号埋甕 S M22(図138・148, 写真69・70・84)

調査区南部のB10-4グリッドに位置する。検出面はL II cである。掘形の平面形態はおおむね円形と考えられる。規模は東西33cm, 南北27cm, 深さは20cmを測る。掘形は土器の形に沿って掘り込まれている。掘形の一部がS M21と重複しているが新旧関係は断面からは確認できなかった。堆積土は2層で共に粗粒の黒褐色土である。土器は掘形底面からはやや浮いた状態で、正立して埋設されている。

図148-4は樽形をした深鉢形土器である。口縁部の一部を除いて良好に遺存している。平口縁に沿って並行沈線を施し、胴部には幅2cm, 条数10本の先端が鋭利な櫛歯状工具を用いて縦位方向に垂下する波状文を連続的に描いている。内面調整は丁寧なナデを施している。胎土には細かい砂粒を含んでいる。色調は黄褐色から暗褐色を呈し、部分的に煤が付着する。

遺構の所属時期は、出土した土器から縄文時代後期後葉頃と考えている。 (中野)

23号埋甕 S M23(図138・148, 写真70・84)

調査区南部のB9-16グリッドに位置する。検出面はL II d上面である。重複遺構はなくS M9が東側に、S M10-12が西側に近接する。掘形の平面形態は円形である。掘形の規模は東西33cm, 南北32cm, 深さ20cmを測る。掘形は土器に対して4cm前後大きく掘り込まれ、土器は正立して底面から浮いた状態で設置されている。堆積土は2層で共に均質な黒褐色土である。

図148-5は平口縁で胴部に括れを持つ深鉢形土器である。外面を磨き調整した後に、口縁部と括れに沈線によって横位方向への並行沈線を描いて区画し、区画内にクランク文や弧線文を描いている。横位の区画文内には小さい瘤が張り付けられる。胴部上半には沈線で格子目文を描く。底部には僅かに網代の痕跡が見られるが意図的に磨り消されている。胎土には非常に細かい砂粒を含んでいる。色調は、底部から口縁部にかけて黄褐色から赤褐色を呈し、内面は暗褐色である。表面には部分的には煤が付着する。使用した土器を利用したと考えられる。

所属時期は、出土した土器から縄文時代後期後葉頃と考えている。

(中野)

24号埋甕 S M24(図138・149、写真70・84)

調査区南部のB10-4グリッドに位置する。掘形内に土器が潰れて破片が折り重なるような状態で検出された。S M21・22に掘形を壊されているため、本遺構が古い。掘形の平面形は、南北に長い長楕円形である。東西53cm・南北76cm、深さ25cmを測る。断面はボール状に掘り込まれていて、周壁は緩やかに立ちあがる。堆積土は単層の黒褐色土である。掘形内からは2個体の土器が検出された。2基の埋甕の重複の可能性も考えたが、断面などからは判断できなかった。南側の土器は横倒し状になって出土し、北側の比較的小形の土器は正立して設置されていた可能性がある。

図149-2は南側の土器である。口縁部が僅かに内湾する平口縁の深鉢形土器で、口縁部の一部を欠損している。粗くナデ調整した後に、幅1.9cm、条数11本の先端が鋭利な櫛歯状工具を用いて、口縁部に沿って横位に施文後、縱位や斜位方向に垂下する波状文を連続的に描いている。内面調整は丁寧なナデ調整を施している。胎土には粗粒の砂を含んでいる。色調は底部から胴部にかけて赤褐色を、口縁部は暗褐色を呈する。表面には部分的に煤が付着する。

図149-1は北側の土器である。口縁部が僅かに内湾する小形の深鉢形土器である。口縁部には補修孔が開けられている。文様は粗くナデ調整した後に幅2cm、条数16本の先端が鋭利な櫛歯状工具を用いて、口縁部直下から胴部にかけて横位方向へ直線的な条線を口縁部では密に、胴部では間隔をあけて施している。内面調整は丁寧なナデ調整を施している。胎土には粗粒の砂を含んでいる。色調は暗褐色を呈する。

遺構の所属時期は、出土した埋設土器から縄文時代後期後葉頃と考えている。

(中野)

25号埋甕 S M25(図139・149、写真71)

調査区南部のC8-9グリッドに位置する。検出面はL II cで、ほぼ単独で所在し、重複する遺構はない。土器は斜面下位の南東側にやや傾いた正立状態で埋められていた。掘形の平面は径25cmの円形で、断面は深さ12cmの半円形状に掘り込まれている。土器は、この掘形の中央に置かれ、堀形と接していない。土器内の堆積土は焼土粒を少量含む黒褐色土で、堆積状況は判断できない。

図149-3は深鉢形土器の胴部下半で、底部が外側に張り出す。器面には横位・斜位の粗雑な整形痕認められる程度で、全体的に整っていない。胎土には比較的多くの粒砂を含むが、焼成は堅緻

である。全体的に橙色系で、部分的に灰褐色系のにぶい色調となっている。

本遺構の所属時期は、検出状況と土器の特徴から縄文時代後期後葉以降と考えている。(山岸)

26号埋甕 SM26(図139・149、写真71)

調査区中央部の南西側、B 7 -12グリッドに位置する。検出面はL IV上面で、重複する遺構はないが、北側にSM 8が所在する。掘形は土器の径よりかなり広く、平面は円形を基調とし、不整な土坑状に掘り込まれている。径50cm、深さ15cmの規模で、褐色土粒と小礫を多量に含む暗褐色土で埋め戻されている。土器は、この掘形の中央やや南西寄りに正立状態で埋められ、掘形とは接していない。土器内の堆積土は1層で、特別な堆積状況・遺物等は認められない。

図149-4は深鉢形土器の胴部下半である。胴部がやや丸みを持ち、底部はやや揚げ底上となっている。胴部には横走ぎみに節の細かな斜行縄文が施され、底部付近は無文となっている。胎土には比較的多くの粗粒砂を含むが、焼成は堅緻で、色調は灰褐色系のにぶい色調である。

本遺構の所属時期は、土器の特徴から判断して縄文時代晚期前葉頃と考えている。また、北側に所在するSM 8と掘形に類似性が認められる。(山岸)

27号埋甕 SM27(図140・149、写真71)

調査区南部のC 9 -13グリッドに位置する。検出面はL II d上面である。遺存状態は比較的良好が上部を失っている。SS 2と重複し本遺構が古い。堆積土は1層で、炭化物を少量含む均質な黒褐色土である。堆積土中より図149-6の石鏃が出土した。掘形の平面形態は南北に長い梢円形である。掘形の規模は東西41cm、南北57cm、深さ20cmを測る。掘形は埋設土器に対して7cm前後大きめに掘りこまれている。土器は底面から浮いた状態で正位に設置されているが、土圧のためか周壁側へ広がった状態で出土した。周壁は底面から比較的緩やかに立ち上がる。

図149-5は無文の深鉢形土器で、口縁部から胴部上半にかけて遺存している。底部は外側から穿孔されている。表面は粗くナデ調整し、内面調整は丁寧なナデを施している。胎土には細かい砂粒を含んでいる。色調は黄褐色から暗褐色を呈している。部分的に煤が付着する。胴部下半の内面には炭化物が付着している。

遺構の所属時期は、出土した埋設土器から縄文時代後期後葉頃と考えている。(中野)

28号埋甕 SM28(図140・150、写真85)

調査区南部のC 9 -13グリッドに位置する。検出面はL II cである。遺存状態は比較的良好が上部を一部失っている。重複遺構はないが、南西側にSM27、SS 2が近接する。掘形の平面形態は円形で、東西29cm・南北30cm、深さ20cmを測る。掘形は埋設土器に対して4cm前後大きめに掘りこまれている。土器は底面から浮いた状態で横倒しに設置されている。周壁は底面から急角度で立ち上がる。堆積土は土器内と掘形内の2層に分けられ、共に黒褐色土である。

図150-1は粗製の深鉢形土器である。器形の2/3が遺存している。外面や底部を丁寧に横ナデ調整した後に口縁部から胴部上半の7cm幅に縱位に縄文を施す。内面調整は丁寧な横ナデを施している。胎土には比較的細かい砂粒を含んでいる。色調は褐色から赤褐色を呈しており部分的には黒斑状になっている個所もある。

遺構の所属時期は、埋設土器から縄文時代後期後葉頃と考えている。

(中野)

29号埋甕 S M29(図141・150, 写真71)

調査区中央部の南西側、B 7-4 グリッドに位置する。平面上で重複する S B 6・7と共にL IV上面で検出したが、直接的な重複関係はない。北西側に S I 28、東側に S M30が所在する。掘形は土器より一回り大きく、径30cmの円形で、深さ15cmの規模である。土器は、この掘形の底面と東半部の壁際に密着させた正立状態で置かれていた。土器内の堆積土は1層で、堆積状況は判断できない。また、遺物等は出土していない。

図150-2は深鉢形土器の胴部下半である。胴部には横位の斜行縄文が施され、底部付近は無文となっている。胴部内面には多量の炭化物が付着しているが、底部内面には付着が認められない。胎土には比較的多くの粗粒砂を含み、器面は脆い。色調は全体的には褐色系であるが、底部付近は火熱を受けたためか橙色系となっている。

本遺構の所属時期は、出土土器の特徴から判断して縄文時代後期中葉頃と考えている。(山岸)

30号埋甕 S M30(図141・150, 写真71)

調査区中央部の南西側、B 7-4 グリッドに位置する。検出面は L IV 上面である。重複する遺構はないが、北側に S I 23・25が近接し、西側に S M29が所在する。掘形は土器より僅かに大きい円形に掘り込まれ、径18cm、深さ8cmの規模である。土器は掘形中央の底面に接した正立状態で置かれ、壁際との隙間は極めて狭い。土器内の堆積土は1層で、特別な堆積状況・出土遺物は認められなかった。

図150-3は深鉢形土器の胴部下半で、底部末端が外側に張り出している。器外面には横位の粗雑な整形痕が認められる程度で、全体的に整っていない。底部は低い台付状を呈し、中央付近には梢円形の孔が認められ、径2×3cm程の範囲が外側から内側に向かって打ち欠かれている。胎土には多量の粗粒砂を含むが、焼成は堅緻で、全体的に褐色系の色調となっている。

本遺構の所属時期は判然としないが、出土土器の特徴から判断して縄文時代後期後葉頃と考えている。

(山岸)

31号埋甕 S M31(図141・150)

調査区中央部の南西側、B 7-7 グリッドに位置する。S B 12・14 P 3の北側に近接した L IV 上面で、正立状態で底部を検出したことから埋甕とした。風倒木痕によって東半部を大きく壊されて

おり、本来の形状を止めていない。土器よりやや広い掘形が、南西側に僅かに遺存し、褐色土粒を含む暗褐色土が堆積していた。土器は底部が本来の位置に遺存していると考えているが、胴部は東側の風倒木痕堆積土中に流れ込んで検出されている。また、土器内堆積土は1層であるが、本来の堆積土かの判断はできない。

図150-4は深鉢形土器の胴部下半である。比較的粗雑な器面調整の無文地上に、蛇行する条線文を垂下させている。胎土には多量の粗粒砂を含むが、焼成は比較的良好である。色調はぶい橙色系で、器外面と内面の胴部下半には炭化物の付着が認められる。同図5は胴部片と共に出土した無茎石鏃で、本遺構に直接伴う遺物とは考えていません。剥離調整は全面に施されているが、基部の抉りは弱く、全体の形状も整っていない。

本遺構は、出土土器の特徴から縄文時代後期後葉～晩期前葉の範囲に所属するものと考えているが明確な時期は不明である。(山岸)

32号埋甕 S M32(図141・150、写真72)

調査区中央部南西側のB 6-11グリッドに位置する。検出面はL IVである。耕作による擾乱が著しく埋設土器の上部は失われている。重複する遺構はないが西側にSM43が近接する。掘形の平面形は円形で東西42cm、南北34cm、深さ18cmを測る。掘形は土器よりやや大きく掘り込まれ、断面形はポール状を呈する。埋設土器は正立して底面から浮いた状態で設置され、底部を打ち欠いて穿孔している。堆積土は1層で、多量の褐色土粒を含む黒褐色土である。

図150-6は深鉢形土器で底部直上から胴部下半が遺存する。底部は穿孔されている。文様は幅1.8cm、条数4本の間隔の広い櫛歯状工具を用いて縱位方向に垂下する波線文を連続的に描いている。内面にはナデ調整を施している。胎土には非常に粗い砂粒を含んでいて、器面もざらついている。色調は赤褐色を呈し、部分的に炭化物が付着する。

遺構の所属時期は出土した土器から縄文時代後期後葉～晩期前葉頃と考えている。(中野)

33号埋甕 S M33(図141・150)

調査区中央部南西側のB 6-11グリッドに位置する。検出面は、L IVである。擾乱などによって上部をほとんど失っており、掘形の底面付近と埋設土器の胴部下半から底部にかけて検出された。重複する遺構はないが、南側にSM32・43が近接する。掘形の平面形は円形で、東西24cm、南北20cm、深さ10cmを測る。堆積土は2層で、 ℓ 1は土器内の黒褐色土、 ℓ 2は掘形内の暗褐色土である。埋設土器は正立して底面からやや浮いた状態で設置されている。

図150-7は深鉢形土器で、底部から胴部下半が遺存する。文様は付加されていない。表面は粗いナデ調整、内面はナデ調整を施している。胎土には非常に粗い砂粒を含んでいる。色調は赤褐色を呈する。

遺構の所属時期は出土した土器から縄文時代後期後葉頃と考えている。(中野)

34号埋窩 S M34(図141・150)

調査区中央部南西側のB 6 - 11グリッドに位置する。検出面はL IVである。搅乱により上部の大半を壊されていて掘形の底面付近と埋設土器の胴部下半から底部にかけて検出された。重複する遺構はないが西側にS M33が近接する。遺存する掘形の平面形は円形と考えられ、東西28cm、南北19cm、深さ14cmを測る。掘形は土器よりやや大きく掘り込まれ、埋設土器は正立して底面からやや浮いた状態で設置されている。堆積土は黒褐色土の単層である。

図150-8は深鉢形土器で、底部から胴部下半まで遺存する。文様は縄文のみである。表面は粗くナデ調整し、内面調整は丁寧なナデを施している。胎土には粗い砂粒を含んでいる。表面は被熱し脆くなつており色調は黄褐色を呈する。

遺構の所属時期は出土した土器から縄文時代後期後葉～晩期前葉頃と考えている。 (中野)

35号埋窩 S M35(図141・151、写真72)

調査区中央部南西側のB 6 - 12グリッドに位置する。検出面はL IVである。掘形の底面付近と埋設土器の胴部から底部にかけて検出された。重複する遺構はないが西側にS M34が近接する。遺存する掘形の平面形は円形で東西34cm、南北33cm、深さ19cmを測る。掘形は土器より広く掘り込まれ、埋設土器は正立して底面から浮いた状態で設置されている。堆積土は2層でいずれも褐色土粒や炭化物粒を含む黒褐色土である。

図151-1は深鉢形土器で、底部から胴部上半にかけて遺存している。文様は粗くナデ調整した後、幅1.7cm、条数5本の間隔の広い櫛歯状工具を用いて縱位方向に垂下する波線文を連続的に描いている。内面調整は丁寧なナデを施している。胎土には細かい砂粒を含んでいる。色調は底部から胴部にかけて暗褐色を呈し、部分的に煤が付着する。同図2は掘形堆積土中から出土した石器で、石鎌の未成品と考えている。

遺構の所属時期は出土した埋設土器から縄文時代後期後葉頃と考えている。 (中野)

36号埋窩 S M36(図141・151、写真72)

調査区中央部南西側のB 6 - 12グリッドに位置する。検出面はL IVである。掘形と埋設土器の上部を耕作で削られているが下部は比較的良好に遺存していた。重複する遺構はないが、西側にS M42・45が近接する。遺存する掘形の平面形は円形で、東西33cm、南北34cm、深さ22cmを測り、鉢形に掘り込まれている。土器は正立した状態で設置されている。また、埋設土器内から10cm前後の自然石と別個体の大破片が割れ折り重なるように出土した。堆積土は掘形埋土が褐色土粒を含む黒褐色土、土器内が黒褐色土に分けられた。

図151-3は深鉢形土器で、底部から胴部にかけて遺存している。文様は付加されず無文である。内外面共に丁寧なナデ調整を施している。胎土には細かい砂粒を含んでいる。色調は底部から胴部

にかけて暗褐色を呈し、部分的に煤が付着する。

図151-4は埋設土器内から出土した深鉢形土器である。横位の沈線による区画文内に縄文と瘤が施されている。

遺構の所属時期は出土した埋設土器から縄文時代後期後葉頃と考えている。

(中野)

37号埋甕 S M37(図141)

調査区中央部南西側のB 6-11グリッドに位置する。検出面はL IVである。遺存状態が悪く土器片が折り重なるような状態で検出された。重複する遺構はないが、西側にS M39・40が近接する。堆積土は1層で炭化物粒を微量含む黒褐色土である。遺存する掘形の平面形は円形で、東西28cm、南北25cm、深さ10cmを測る。土器は摩滅した小破片で折重なるように出土した。非常に脆く図示できなかったが、縄文を施した深鉢形土器の胴部片である。

遺構の所属時期は出土した土器から縄文時代後期後葉頃と考えている。

(中野)

38号埋甕 S M38(図142・151、写真72・85)

調査区中央部のC 6-6グリッドに位置する。検出面はL Vである。遺存状態が悪く南側半分を耕作による搅乱で失っている。重複する遺構はない。遺存する掘形の平面形は円形で東西59cm、深さ28cmを測る。掘形は埋設土器より大きく掘っている。土器は正立して設置されている。堆積土は5層でℓ 1・2は埋設土器内、ℓ 3~5が掘形内である。

図151-5は深鉢形土器である。文様は丁寧なナデ調整後に横位方向に縄文を施し、口縁部に横位の沈線を施した深鉢形土器である。内面には丁寧なナデ調整を施している。胎土には比較的粗い砂粒を含んでいる。色調は褐色から暗褐色を呈する。

遺構の所属時期は出土した埋設土器から縄文時代後期中葉頃と考えている。

(中野)

39号埋甕 S M39(図142・151、写真72)

調査区中央部南西側のB 6-11グリッドに位置する。検出面は、L IVである。遺存状態は比較的良好な状態で検出した。重複する遺構はないが、北側にS M40が近接する。堆積土は2層で、混入物から分けた。遺存する掘形の平面形は円形で、東西43cm、南北40cm、深さ40cmを測る。土器は正立して設置されている。

図151-6は深鉢形土器である。文様は粗くナデ調整した後、幅2.2cm、条数5本の先端扁平な櫛歯状工具を用いて、口縁部直下には弧線文を、胴部には縱位方向への波線文を連続的に描いていく。内面には丁寧なナデ調整を施している。胎土には非常に粗い砂粒を含んでいる。色調は底部から胴部にかけて赤褐色で、口縁部から胴部にかけて暗褐色を呈する。

遺構の所属時期は出土した埋設土器から縄文時代後期後葉～晩期前葉頃と考えている。(中野)

40号埋窓 S M40(図142・152)

調査区中央部南西側のB 6 - 11グリッドに位置する。検出面は、L IVである。搅乱が著しいため遺存状態は悪く、掘形と埋設土器の南西部分が僅かに残っていた。重複する遺構はないが、南側にS M39が近接する。掘形の平面形は大きく壊されているため不明で、残存する掘形の深さは17cmを測る。堆積土は単層の黒褐色土である。埋設土器は正立して置かれていたものと考えられる。

図152-1は深鉢形土器で、底部から胴部下半が遺存している。文様は付加されず、器面は被熱しているため脆くなっている。胎土には非常に粗い砂粒を含んでいる。色調は赤褐色を呈する。

遺構の所属時期は出土した埋設土器から縄文時代後期後葉～晚期前葉頃と考えている。(中野)

41号埋窓 S M41(図142・152、写真73)

調査区中央部南西側のB 6 - 10・11グリッドに位置する。検出面はL IVである。遺存状態は上部が耕作で失われておりあまり良くない。S K58と重複し、本遺構が新しい。掘形の平面形は円形で東西50cm、南北45cm、深さ18cmを測る。掘形は土器より大きく掘り込まれており、土器は正立して設置されていて、土圧のためか周壁側に広がった状態であった。堆積土は2層で共に砂粒と炭化物を含む黒褐色土である。

図152-2は粗製の深鉢形土器である。文様は粗くナデ調整した後、幅1.6cm、条数6本の先端が扁平な櫛歯状工具を用いて縱位方向への波線文を連続的に描いている。内面にはナデ調整を施している。胎土には比較的粗い砂粒を含んでいる。色調は暗黄褐色を呈し、部分的に煤が付着する。

遺構の所属時期は出土した埋設土器から縄文時代後期後葉頃と考えている。(中野)

42号埋窓 S M42(図142・152)

調査区中央部南西側のB 6 - 11グリッドに位置する。検出面は、L IVである。搅乱が著しいため遺存状態は悪く、掘形の西側と埋設土器の底部付近が僅かに残っていた。重複する遺構はないが、東側にS M36、西側にS M45、北西側にS M32が近接する。堆積土は単層の黒褐色土である。掘形の平面形は不明で、遺存する掘形の深さは14cmを測る。土器は正立して設置されていたものと考えられる。

図152-3は鉢形土器の底部片である。文様は付加されず丁寧なナデ調整が施されている。胎土には細かい砂粒が含まれている。色調は暗褐色を呈する。

遺構の所属時期は出土した埋設土器から縄文時代後期後葉頃と考えている。(中野)

43号埋窓 S M43(図141・152、写真72)

調査区中央部南西側のB 6 - 11グリッドに位置する。検出面はL IVである。S M32の断割りを行った際に検出された。搅乱が著しいため遺存状態は悪く、掘形の西側と埋設土器の底部付近が僅

かに残っていた。重複する遺構はないが東側にSM32、北側にSM33が近接する。掘形の平面形は概ね円形と考えられ、径38cm、深さは14cmを測る。土器は正立して設置されていたものと考えられる。堆積土は単層の黒褐色土である。

図152-5は深鉢形土器で、底部から胴部下半が遺存する。文様は4本一組の並行沈線で垂下文を描く。胎土には比較的細かい砂粒を含んでいる。色調は黄褐色から赤褐色を呈する。

遺構の所属時期は出土した埋設土器から縄文時代後期後葉頃と考えている。(中野)

44号埋甕 SM44(図142・152、写真73・85)

調査区中央部南西側のB 6-10・11・15グリッドに位置する。検出面はLIVである。SI29と重複し、本遺構が新しい。掘形の平面形は円形で東西27cm、南北30cm、深さ23cmを測る。掘形は土器より大きく掘り込まれており断面形は円柱状をなす。埋設土器は正立しているが口縁部がやや南側に傾斜している。堆積土は掘形埋土と土器内の2層で共に黒褐色土である。

図152-6は平口縁の小形の深鉢形土器である。口唇部に刻みを持つ2つ一組の瘤が4単位で付けられ、それ以外に文様は付加されない。胎土には粗い砂粒を含んでいる。内面には丁寧なナデ調整を施す。色調は暗褐色から暗赤褐色を呈し、内外面共に煤の付着が見られる。

遺構の所属時期は出土した埋設土器から縄文時代後期後葉頃と考えている。(中野)

45号埋甕 SM45(図142・152、写真73・85)

調査区中央部南西側のB 6-11グリッドに位置する。検出面は、LIVである。SI29と重複し、本遺構が新しい。東側にSM42、北側にSM32・43が近接する。掘形の平面形は円形で径27cm、深さ14cmを測る。埋設土器は正立し、底部がやや東側に傾斜して設置されている。また、土器内部から台付土器の底部片が出土した。埋設土器に対して蓋として利用されたものが土圧などの影響で内側に落ち込んだと考えられる。堆積土は黒褐色土の単層である。

図152-7は平口縁の鉢形土器である。底部は揚底状になっている。文様は縄文のみである。胎土には非常に細かい砂粒を含んでいる。内面には丁寧なナデ調整を施す。色調は黄褐色から赤褐色を呈し、内面は暗褐色である。煤や炭化物の付着は認められない。同図8は台付き土器の底部片である。

遺構の所属時期は出土した埋設土器から縄文時代晩期前葉頃と考えている。(中野)

46号埋甕 SM46(図142・152、写真73)

調査区中央部南西側のC 6-4グリッドに位置する。検出面はLIllである。遺構の希薄な地点に位置し、重複する遺構は無い。掘形の平面形は円形で東西35cm、南北30cm、深さ15cmを測る。掘形の断面はボルト状を呈し、埋設土器は正立しているが口縁部がやや西側に傾斜している。堆積土は掘形埋土と土器内堆積土の2層である。

図152-9は深鉢形土器である。文様は斜行縄文上に結節の回転文が施されている。内面には丁寧なナデ調整を施している。胎土には細かい砂粒が含まれている。色調は底部から胴部にかけて黄褐色から暗褐色を呈する。

遺構の所属時期は出土した埋設土器から縄文時代晩期前葉頃と考えている。

(中野)

47号埋壺 S M47(図142、写真73)

調査区中央部南西側のB 6-10グリッドに位置する。検出面はL IVである。遺存状態が悪く埋設土器が潰れて破片が折り重なるような状態で検出された。重複する遺構はないが、南側にS I 29, S M44が近接する。掘形の平面形は不明確だがおおよそ円形と考えられ、径25cm、深さは14cmを測る。堆積土は2層で、 ℓ 2の暗褐色土が掘形堆積土と考えられる。埋設土器は残りが悪いためどのように設置されていたかは不明である。

埋設土器は遺存状態が悪く図示できなかったが、網目状撚糸文が施された深鉢形土器の胴部片である。胎土には粗い砂粒が含まれ、色調は暗黄褐色を呈する。

遺構の所属時期は出土した埋設土器から縄文時代晩期初葉頃と考えている。

(中野)

48号埋壺 S M48(図142・153、写真74・75・85)

調査区中央部の南西側、B 6-14グリッドに位置する。本遺構の西側に所在するS M49・52・54と共に、S I 34の床面直上において検出した。いずれの埋壺もS I 34の床面から口縁端部が覗く状態で検出されており、ほぼ同一時期の遺構と考えている。また、S I 34に伴う可能性も高い。掘形は土器より僅かに広い筒状に掘り込まれ、径27cm前後、深さ43cmの規模である。土器は、この掘形に接して正立状態に置かれ、土器の屈曲部分に黒褐色土の堆積が僅かに認められる。土器内の堆積土は2層に分かれ、胴部上半から底部にかけて埋土と考えられる褐色土を含む暗褐色土が、口縁部にはS I 34堆積土と同様な黒褐色土が堆積していた。いずれからも遺物は出土していない。

図153-1は大型の深鉢形土器である。胴部上半のくびれは弱く、無文の口縁部は平口縁でやや外反する。底部中央には径4.5cmの円形の孔が認められ、外側から内側に向かって打ち欠かされている。また、底面は再調整され、僅かに網代編の痕跡が残されている。胴部上半には2条1組の平行沈線によって区画された広い文様帶が位置し、上位には眼鏡状の、下位には帯状の入組文と連弧状の图形を描き、图形内に角棒状工具による押し引き状の連続刺突文を充填している。また、2個1対のX形状や縦長、ボタン状のコブが主に文様の交点に配されている。胎土には細粒砂を含み、焼成は良好である。器面の調整は良好で、全体が弱い光沢を帶びている。色調は全体的に暗褐色系で、炭化物の付着は認められない。

本遺構は検出状況からS I 34, S M49・52・54と極めて関連性が高い。土器は底部中央に孔が開けられている大型の深鉢形土器で、土器内は口縁部下まで埋土されている。また、所属時期については、出土土器の特徴から縄文時代後期後葉頃と考えている。

(山岸)

49号埋甕 S M49(図143・153, 写真74・75・85)

調査区中央部の南西側、B 6 - 13グリッドに位置する。本遺構の南西側に近接するS M54、東側のS M48、南側のS M52と共に、S I 34の床面直上で検出した。掘形は土器より一回り広い不整な筒状に掘り込まれ、径45cm、深さが40cm前後の規模となっている。掘形内には ℓ 4とした褐色土混じりの黒褐色土が堆積し、土器との関係から埋土と考えている。土器は、この掘形の中央に底部を接した正立状態で置かれ、その後に土圧等によって崩れたと考えている。土器内の堆積土は3層に別れ、 ℓ 1は自然、 ℓ 2・3について褐色土の混入状況から人為堆積と考えている。

図153-2は大型の深鉢形土器である。丸みを持った胴部下半から口縁部に向かって直線的に外傾する器形で、平口縁には2個1組の山形状の小突起が付されている。底部中央には径4.5cmの整った円形の孔が開けられている。無文地の胴部中央に、2個一对のX形状のコブが5単位配置されているだけで、その他の文様は認められない。器面の調整は比較的良好で、外面には弱い光沢が認められる。胎土には比較的多くの粗粒砂を含むが、焼成は堅緻である。色調は全体的に橙色系で、部分的に焼成時の黒斑が認められるが、炭化物の付着は認められない。

本遺構は検出状況からS I 34、S M48・52・54と極めて高い関連性が考えられる。土器は底部中央に整った孔が開けられた大型の深鉢形土器で、コブ以外の文様は付加されていない。土器内は口縁部まで埋土されていたが、内部から遺物は出土していない。所属時期については、出土土器の特徴から縄文時代後期後葉頃と考えている。

(山 岸)

50号埋甕 S M50(図143・154, 写真76・86)

調査区中央部南西側のB 6 - 5グリッドに位置する。検出面は、L IIIである。重複する遺構はないが、東側にS M55が近接する。掘形の平面形は東西に長い梢円形で東西51cm、南北56cm、深さ32cmを測る。掘形は埋設土器の大きさに合わせるように掘り込まれていて、南壁側では土器が周壁に接している。埋設土器は正立し胴部下半から底部を打ち欠いている。堆積土は3層で、 ℓ 1・2は土器内堆積土で共に暗褐色土、 ℓ 3は掘形埋土でにぶい黄褐色土である。

図154-1は深鉢形土器である。文様は幅1.1cm、条数3本の先端が扁平な櫛齒状工具を用い、口縁部直下には弧線文を、胴部には縱位方向への波線文を連続的に描いている。内面には丁寧なナデ調整を施している。胎土には比較的粗い砂粒を含んでいる。色調は口縁部から胴部上半にかけて暗褐色を呈し、多くの炭化物が付着する。

遺構の所属時期は出土した埋設土器から縄文時代後期後葉頃と考えている。

(中 野)

51号埋窓 S M51(図143・154、写真76)

調査区中央南西側のB 6 - 1・5グリッドに位置する。検出面はL IVである。S I 36と重複し本遺構が新しい。西側にS M56が近接する。掘形の平面形は円形で東西40cm、南北51cm、深さ28cmを測る。掘形は土器より大きく掘り込まれ底面は平坦である。堆積土は掘形埋土と土器内堆積土の2層に分かれ共に黒褐色土である。土器は上部を擾乱によって失われていたが正立して埋設され、底部は打ち欠いて穿孔されている。

図154-2は胴部の膨らむ深鉢形土器である。底部は外側から穿孔されている。文様は縄文のみである。胎土には比較的粗い砂粒を含んでいる。内面には丁寧なナデ調整を施す。色調は底部付近が黄褐色から赤褐色、胴部上半は暗褐色を呈し煤や炭化物が付着する。

遺構の所属時期は出土した埋設土器から縄文時代晚期前葉頃と考えている。(中野)

52号埋窓 S M52(図143・155、写真76・86)

調査区中央部の南西側、B 6 - 13グリッドに位置する。本遺構の北側に所在するS M48・49・54と共に、S I 34の床面直上で検出した。S I 34の床面から口縁端部が突き出すように検出され、壊されていないことから時間差はほとんどないものと考えている。掘形は土器より僅かに広い不整な筒状に掘り込まれ、径30cm、深さは20cm程の規模で、土器との隙間に黒褐色土が堆積していた。土器は、この掘形に接して正立状態で置かれ、その後の土圧等によってやや崩れている。土器内の堆積土は1層で、堆積状況は判断できない。また、遺物等も出土していない。

図155-1は胴部と口縁部との境に強いくびれを持つ平口縁の深鉢形土器である。器面の調整は良好で、外面は全体的に磨かれ弱い光沢が認められる。くびれ部には2個一対のボタン状のコブが貼り付けられ、その後に沈線による主要文様が無文地上に描かれている。口縁直下とくびれ部に平整状工具による連続刺突文を充填した沈線区画帯を巡らせ、その間に帶状の入組文を二段に描いている。胎土には細粒砂が比較的多く含まれ、焼成は堅緻である。全体的に褐色系の色調で、外面の口縁部と内面の胴部のほぼ全体にわたって煤の付着が認められる。

本遺構は検出状況からS I 34、S M48・49・54と関連性が高く、ほぼ同時期と考えている。所属時期については、出土土器の特徴から縄文時代後期後葉と考えている。(山岸)

53号埋窓 S M53(図143・155、写真76・86)

調査区中央部南西側のA 5 - 16・B 5 - 13グリッドに位置する。検出面はL IIIである。掘形の平面形は円形で東西45cm、南北40cm、深さ28cmを測る。掘形は土器よりやや大きく掘り込まれている。土器は、この掘形の北壁側に沿うように埋設されていた。堆積土は3層でいずれも黒褐色土である。

図155-2は胴部に括れを持つ深鉢形土器である。口唇部にはM字形の大突起と小突起が交互に

付けられる。文様は横位沈線で区画された口縁部と胴部に帶状の入組文を描き、内部には斜行縄文を施す。内面は丁寧なナデ調整を施す。色調は暗黄褐色から暗褐色を呈し、煤や炭化物が付着する。

遺構の所属時期は出土した埋設土器から縄文時代後期末葉頃と考えている。(中野)

54号埋甕 S M54(図143・156、写真76・86)

調査区中央部の南西側、B 6-13グリッドに位置する。北東側に近接するS M49、東側のS M48、南側のS M52と共に、S I 34の床面直上で検出した。掘形は土器よりやや広い不整な筒状に掘り込まれ、径50cm、深さ40cmの規模である。土器は、この掘形の南側に沿って正立状態で置かれて、口縁部が崩れ落ちていた。また、底部中央(図156-2)は剥落状態で遺存しておらず、精査中に土器内から出土したが接合できなかった。土器と掘形の隙間には ℓ 3とした黒褐色土が堆積し、中から石鏃が1点出土したが本遺構に直接伴う遺物とは考えていない。土器内の堆積土は2層に分かれ、底部から胴部上半に堆積する ℓ 2については人為的な埋土と考えている。また、土器の口縁部はこの ℓ 2の上面に沿って崩れ落ちていた。

図156-1は大型の深鉢形土器で、土器の大きさに対して底部の径が小さい。平口縁で、胴部との境に弱いくびれを持っている。器面調整は良好で、外面は全体的に磨かれ弱い光沢が認められる。くびれ部には2個一対の縱長のコブが貼り付けられ、その後に沈線で主要文様が描かれている。口縁部直下とくびれ部のコブをつなぐように平行沈線を巡らせ、その中に平盤状工具による連続刺突文を部分的に充填している。この平行沈線による区画帶内に、主要文様である帶状の入組文を2段交互に描いている。全体的に橙色の明るい色調で、煤等の付着物は認められない。同図3は有茎石鏃で、茎部側縁の抉りが弱い形状となっている。

本遺構は検出状況からS M49と同時期と考えている。また、S I 34、S M48・49と関連性が高い。土器内は胴部上半まで埋められていたが、中から遺物は出土していない。所属時期については、土器の特徴から縄文時代後期後葉頃と考えている。(山岸)

55号埋甕 S M55(図143・156、写真76・86)

調査区中央部西側のB 6-6グリッドに位置する。検出面は、L IIIである。S B21P 1と重複し、本遺構が古い。掘形の平面形は円形で東西25cm、南北24cm、深さ16cmを測る。土器は周壁の北西側に接しながら南西側に口縁部を傾斜させて埋設されている。堆積土は1層で黒褐色土である。

図156-4は浅鉢形土器である。底部から口縁部にかけて直線的に外傾し、口唇部には2個1組の小突起が2単位付けられる。文様は縄文と綾絡文が横位方向に施されるが、底部付近では無文である。胎土には砂粒を含んでいる。色調は褐色から暗褐色を呈する。

本遺構は調査区内で唯一浅鉢形土器を埋設した遺構である。遺構の所属時期は出土した土器から縄文時代晚期前葉頃と考えている。(中野)

56号埋窩 S M56(図143・157, 写真76・86)

調査区中央部南西側のA 6 - 4・8グリッドに位置する。検出面は、LⅢである。S I 36, S B 26と重複し本遺構が新しい。また、東側にS M51が近接する。掘形の平面形は東側を掘削してしまい失っているが、概ね円形と考えられる。径42cm、深さ38cmを測る。土器は正立して埋設している。また、土器内から別個体の深鉢形土器が割れて折り重なるような状態で出土した。また、土器底部直上の堆積土中からは赤色顔料が小塊状で出土した。堆積土は1層で黒褐色土である。

図157-1は深鉢形土器である。文様は付加されず表面は粗くナデ調整され、内面は比較的丁寧なナデ調整を施している。胎土には比較的粗い砂粒を含んでいる。表面は被熱しているためか脆くなっていて、色調は黄褐色から赤褐色を呈する。

図157-2は埋設土器内から出土した深鉢形土器である。胴部上半から底部にかけて遺存する。文様は縄文のみが施されている。胎土には比較的細かい砂粒を含んでいる。色調は褐色から暗褐色を呈し、表面には煤の付着がみられる。

本遺構は2個体分の土器が出土している点から合わせ口の埋窩の可能性が高い。また、土器内から小塊状で出土した赤色顔料については、櫛等の製品に塗られていた可能性が考えられる。遺構の所属時期は出土した埋設土器から縄文時代晚期前葉頃と考えている。 (中野)

57号埋窩 S M57(図143・157)

本遺構はB 5 - 5グリッドの平坦面に位置する。検出面はLⅣである。本遺構の平面形は不整な梢円形で、規模は長軸37cm、短軸29cmである。検出面からの深さは19cmを測り、土器より大きく掘り込まれている。周壁は底面からほぼ垂直で立ち上がる。底面は、西側に向かってやや下がる。堆積土は黒褐色土の1層とした。掘形堆積土と埋設土器内埋土には、明確な土質の差異は認められなかった。埋設土器は掘形の底面からわずかに浮いた状態で、口縁部方向をやや東側に傾けた状態で埋納されている。埋設当初から斜位に埋設されていたかは不明である。

図157-3は、埋設されていた残存高23cmを測る深鉢形土器である。底部から胴部下半まで遺存している。文様は縦位の条線がまばらに施されるのみである。内面底部から胴部下半にコゲが付着する。おそらく煮炊きに利用していた深鉢を再利用したと考えられる。

本遺構の時期は出土した土器が粗製土器で明確にはできない。縄文時代後期後葉から縄文時代晚期と推測できる。 (三浦)

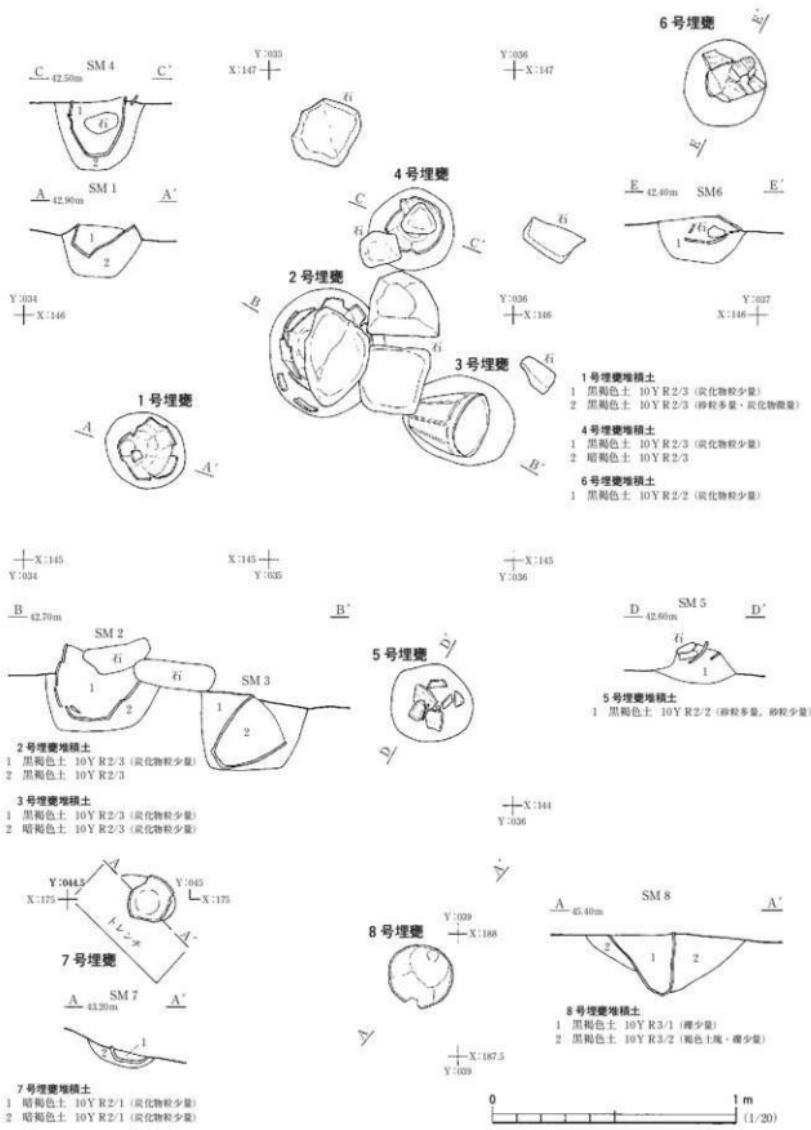


図137 1～8号埋葬

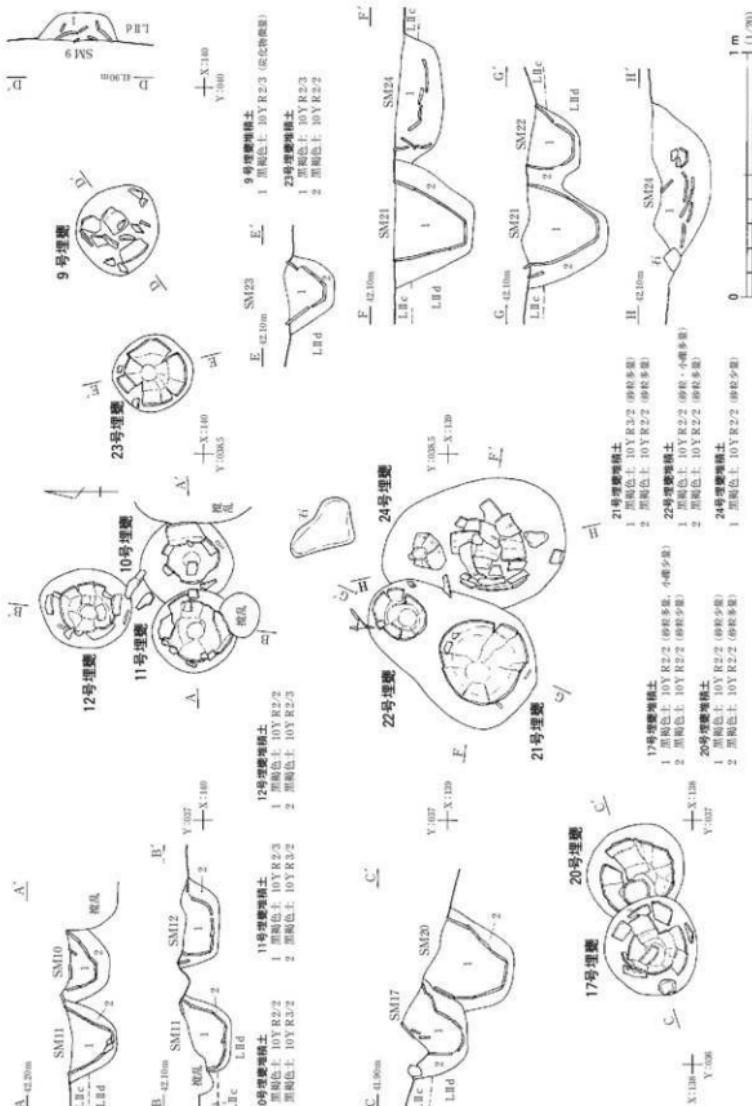


图138 9~12·17·20~24号裂隙

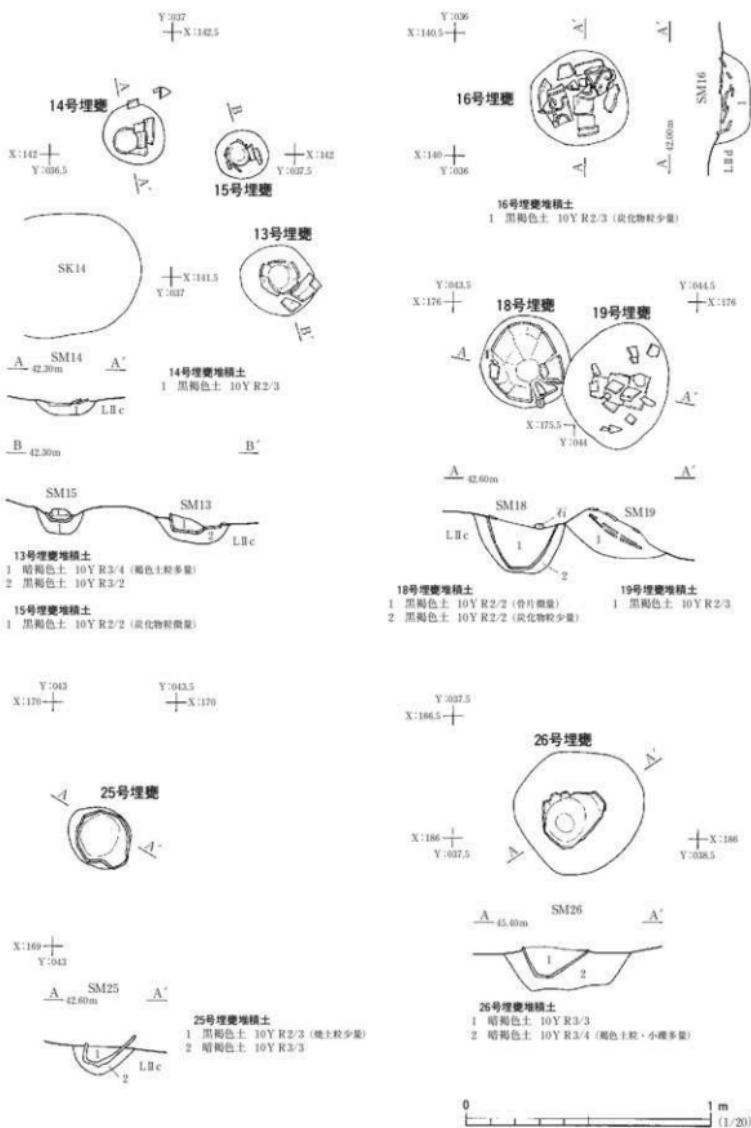


図139 13~16・18・19・25・26号埋甕

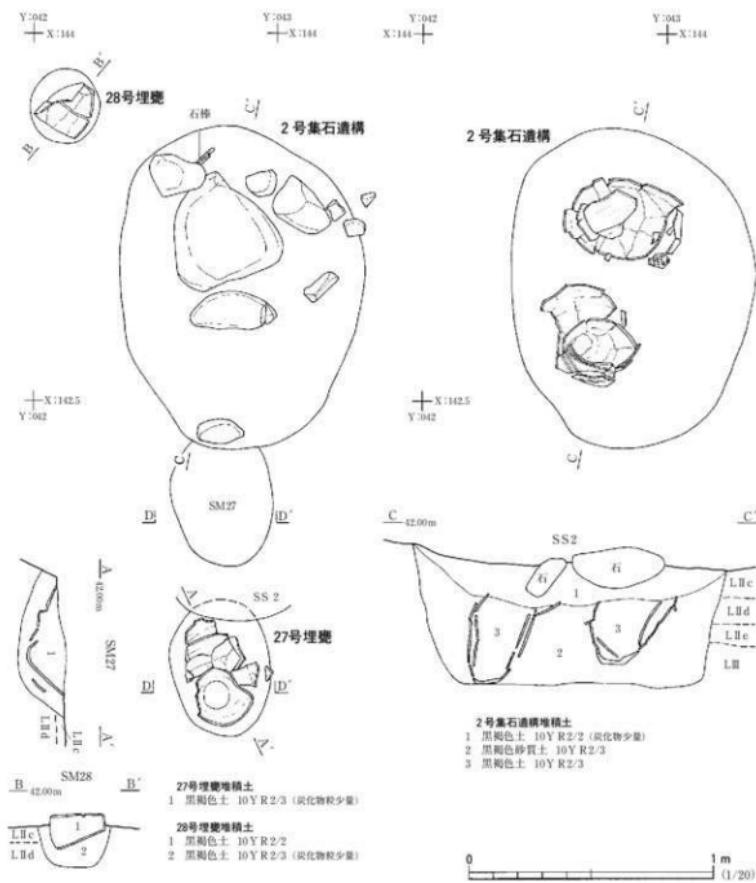


図140 27・28号埋窓と2号集石遺構

第2章 退耕と遺物

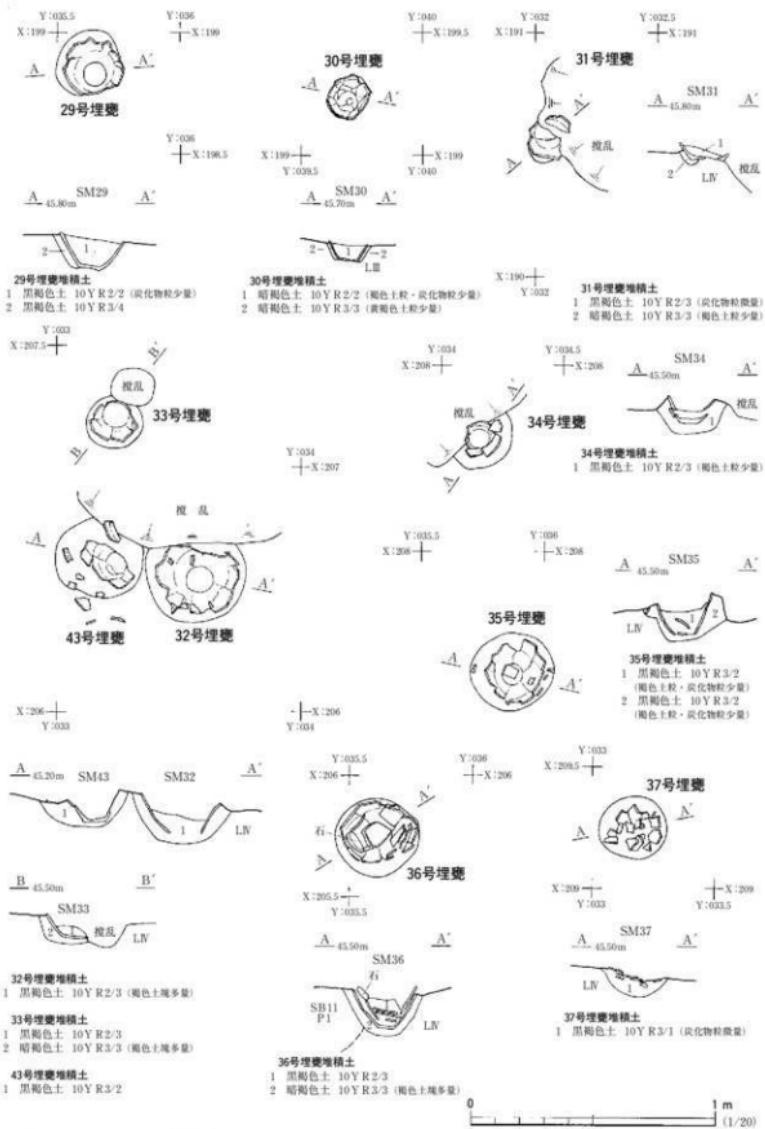


図141 29~37・43号埋甕

第5節 埋 葬

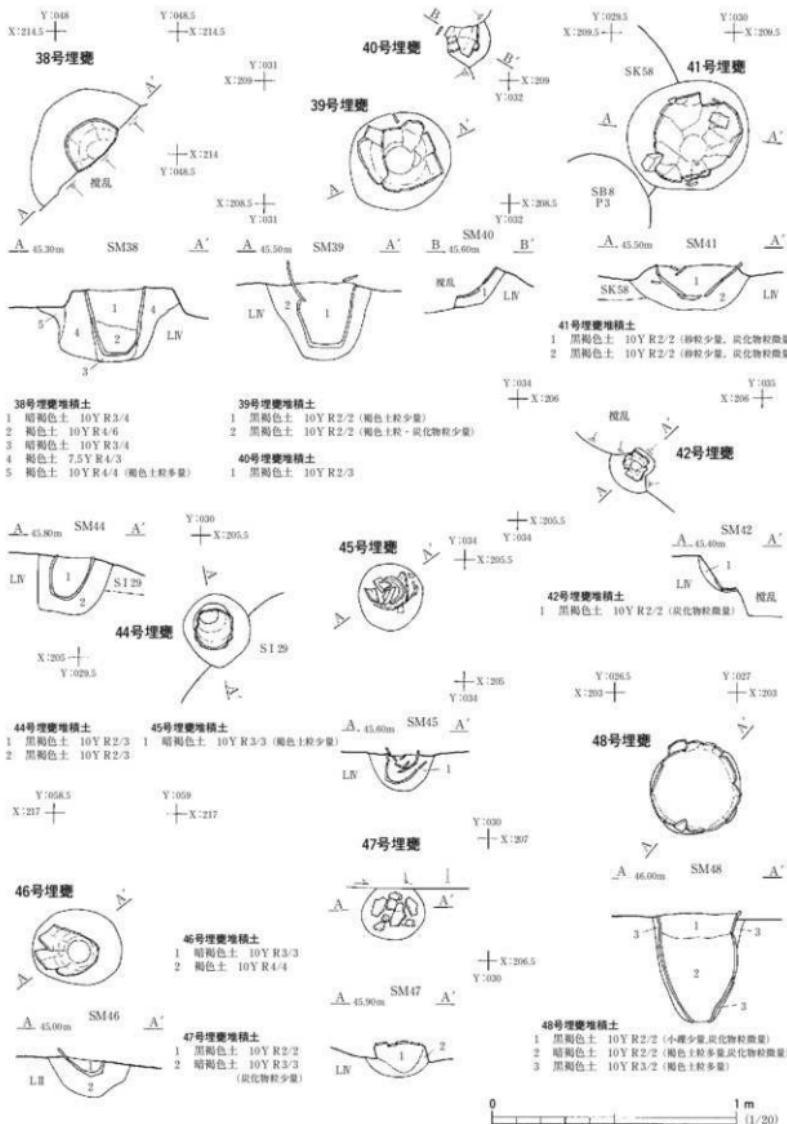


図142 38~42・44~48号埋葬

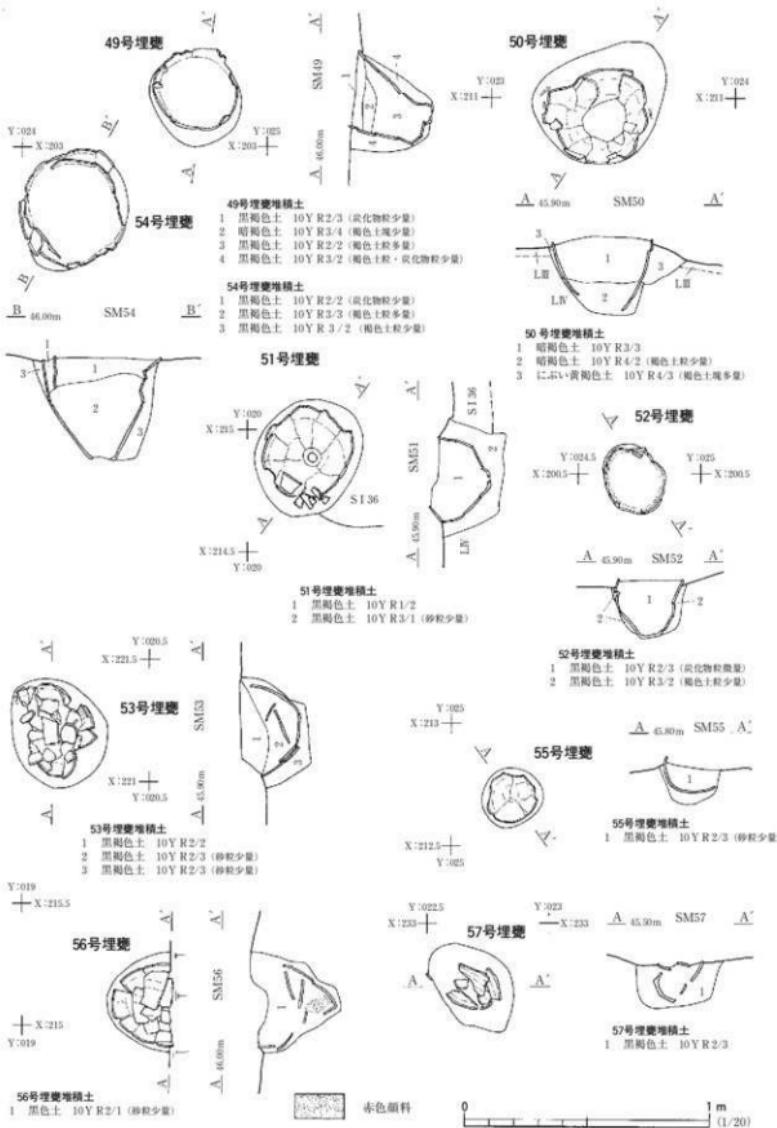


図143 49~57号埋甕

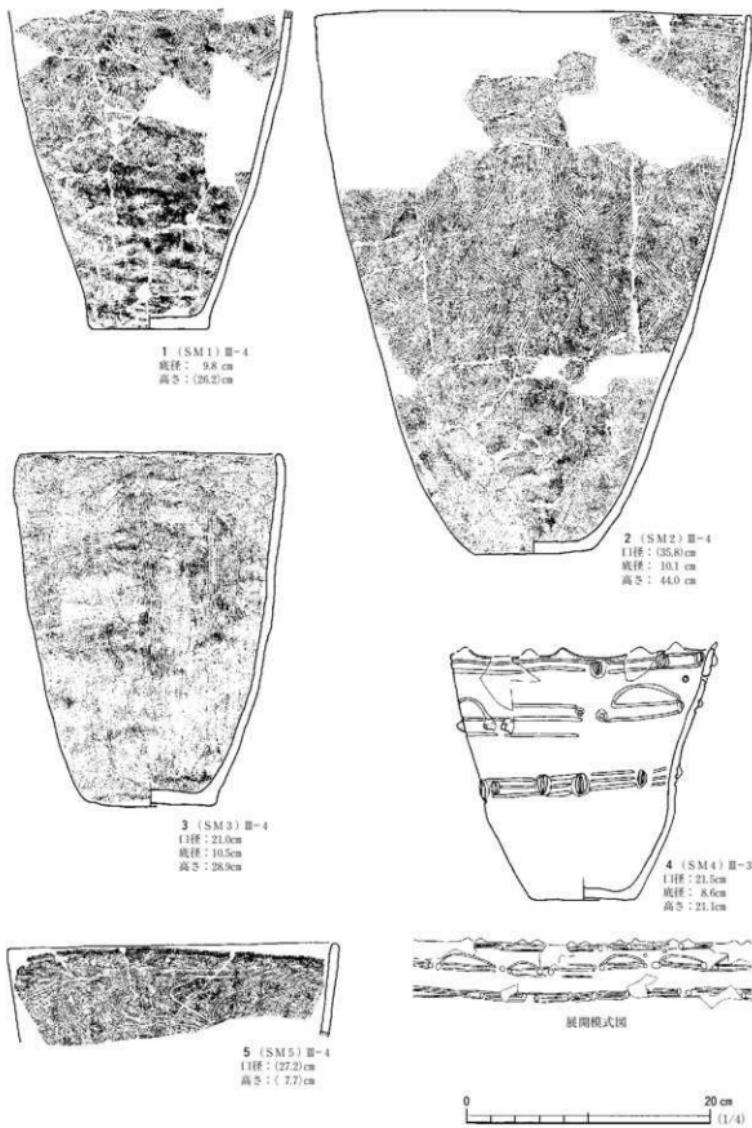


図144 1～5号埋甕出土遺物

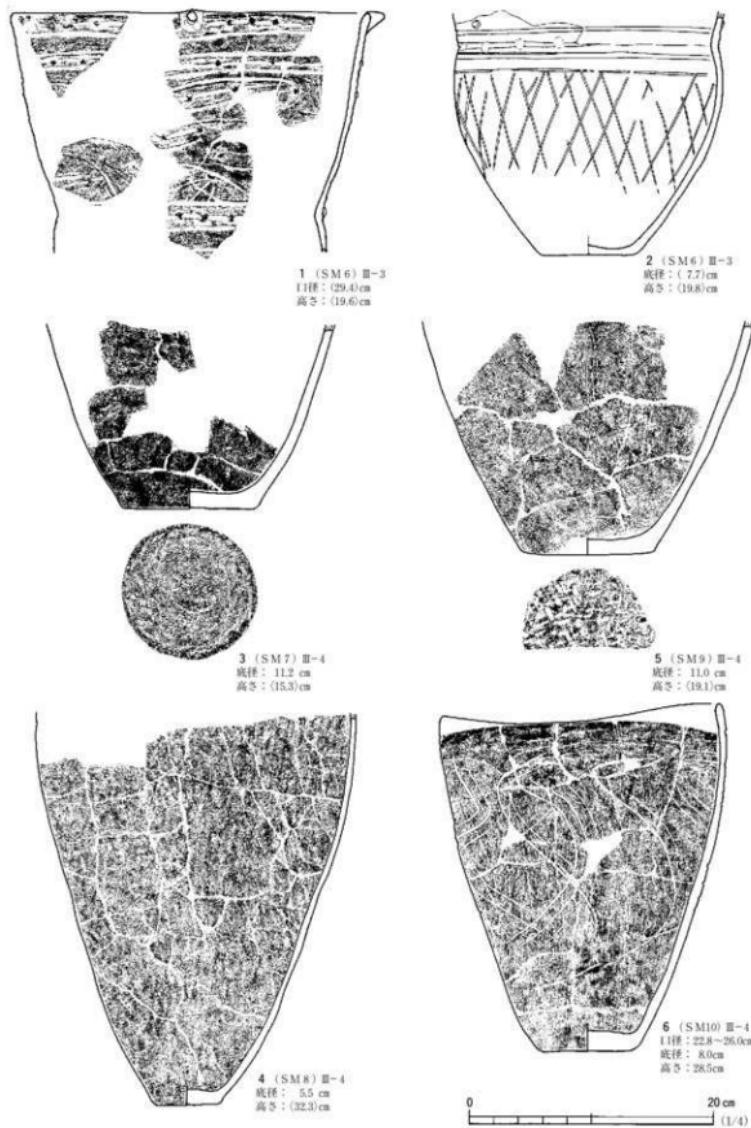


図145 6～10号埋甕出土遺物

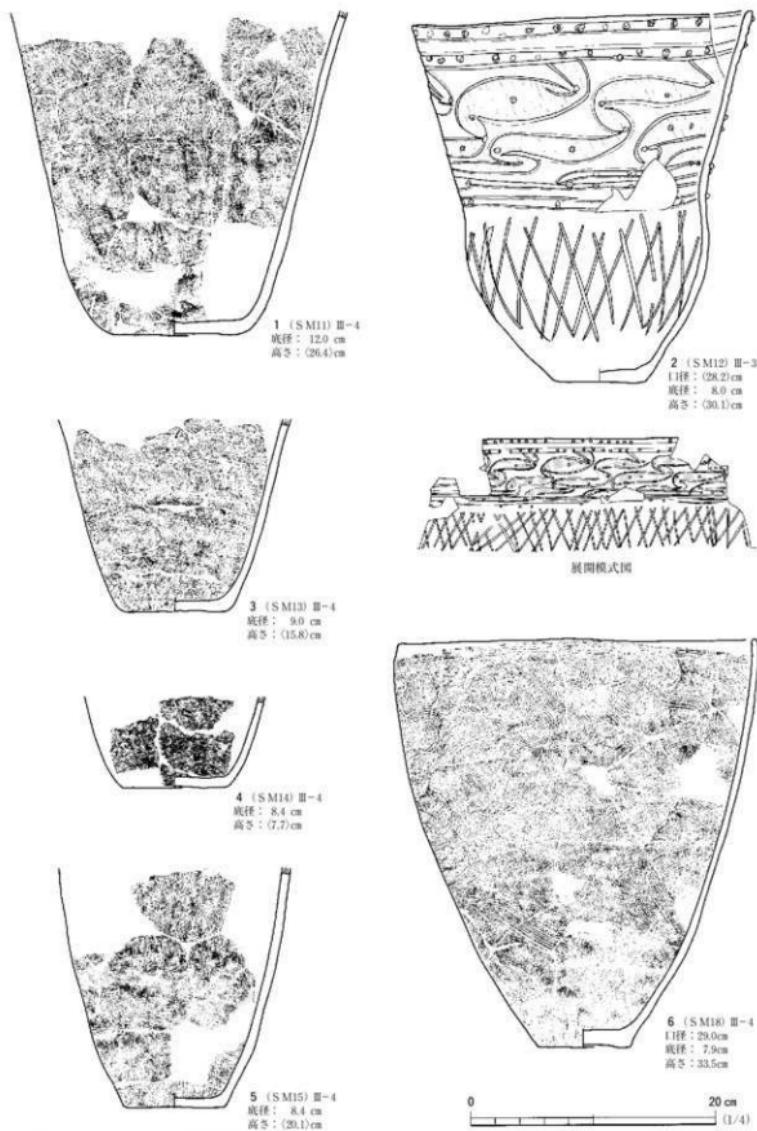


図146 11~15・18号埋甕出土遺物

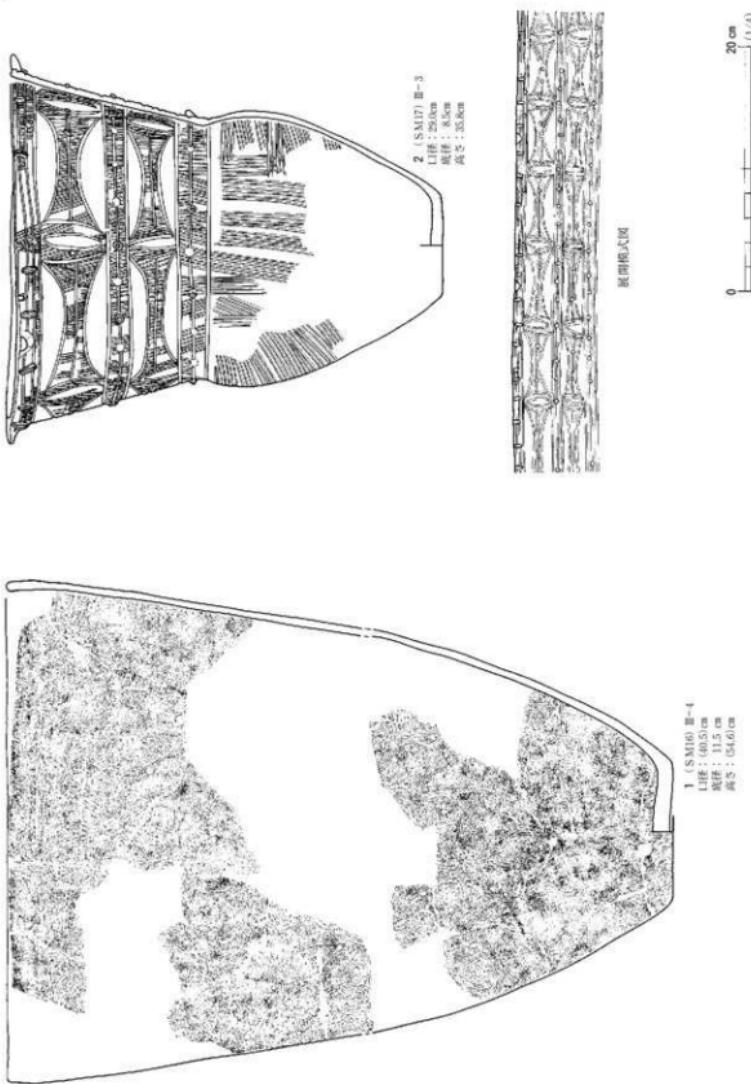


図147 16・17号埋甕出土遺物



図148 19~23号埋罨出土遺物

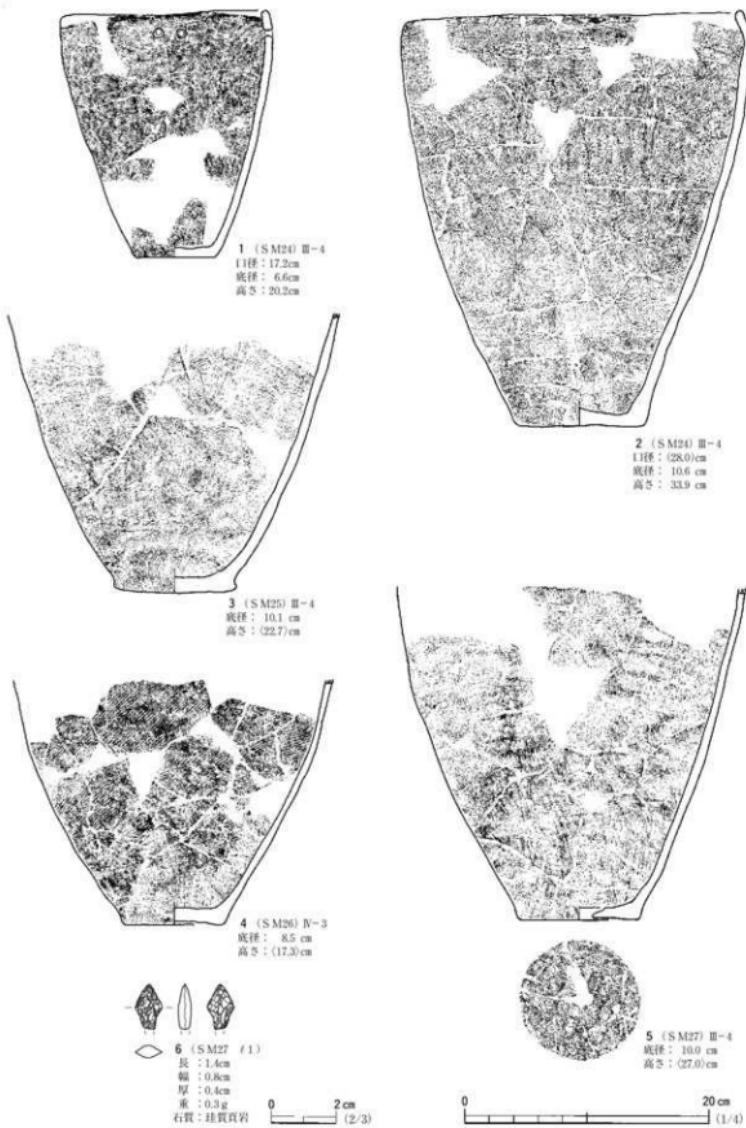


図149 24~27号埋甕出土上遺物

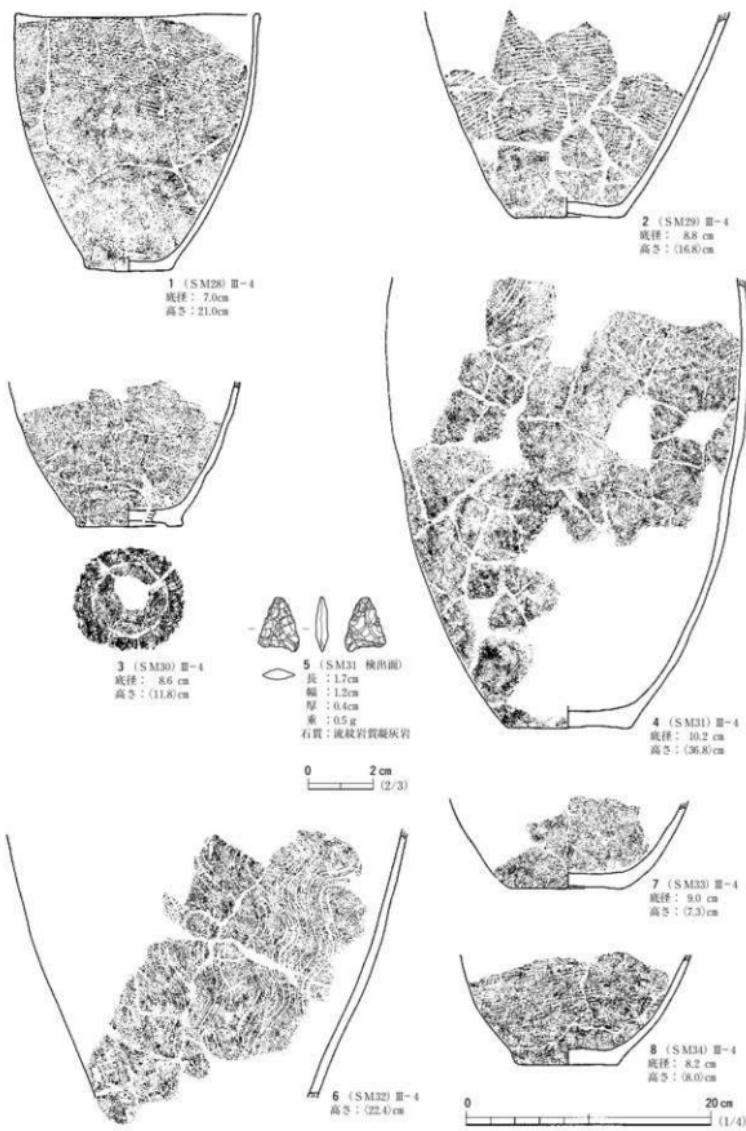


図150 28~34号埋葬出土遺物

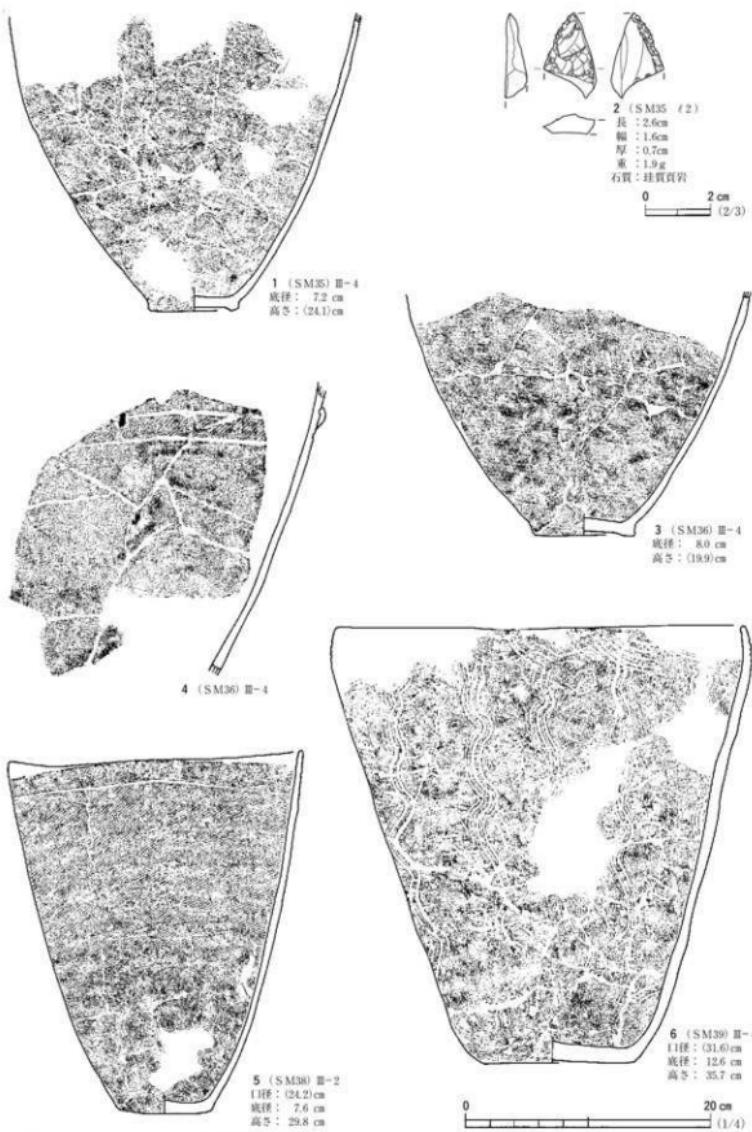


図151 35・36・38・39号埋甕出土遺物

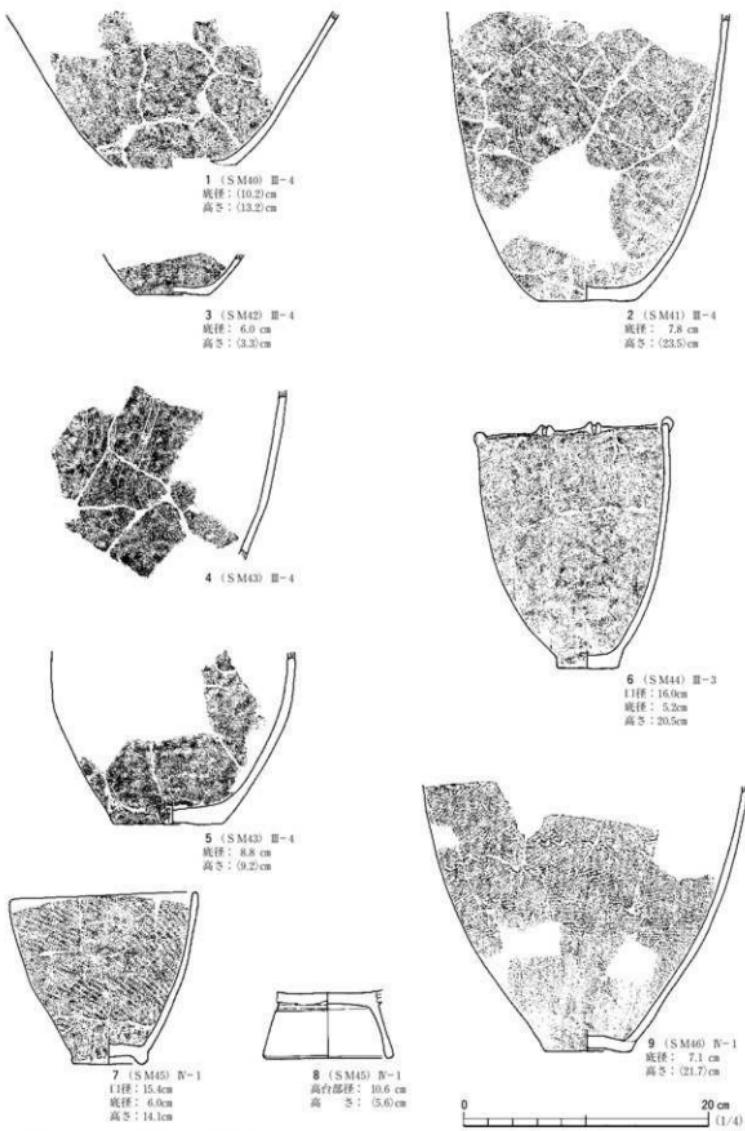


図152 40~46号埋窯出土遺物

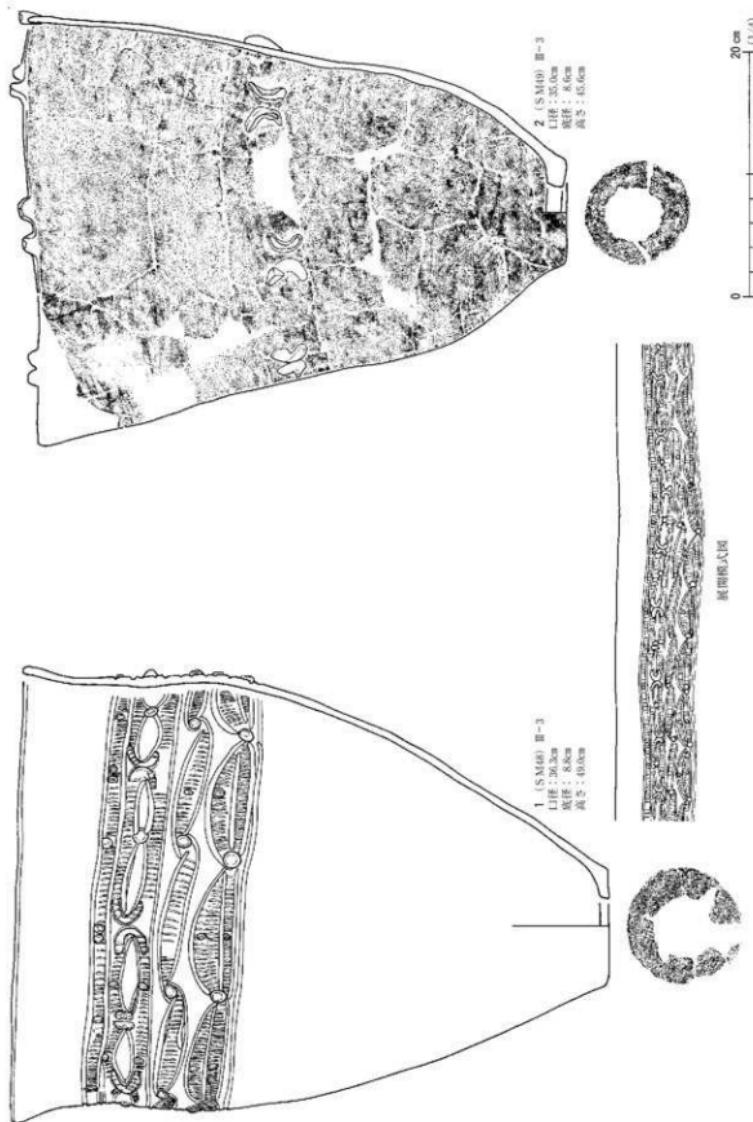
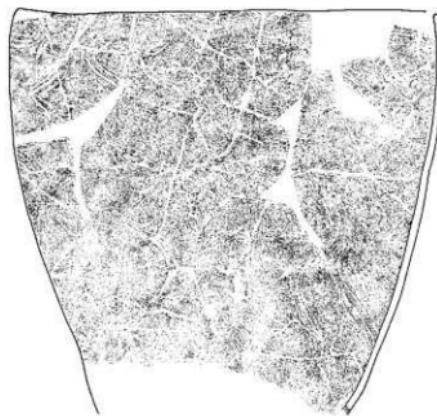
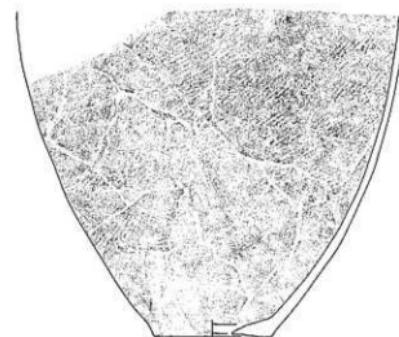


図153 48・49号埋甕出土遺物



1 (SM50) N-3
底径 : 34.4 cm
高さ : (33.0) cm



2 (SM51) N-1
底径 : 9.8 cm
高さ : (26.3) cm

0 20 cm (1/4)

図154 50・51号埋壺出土遺物

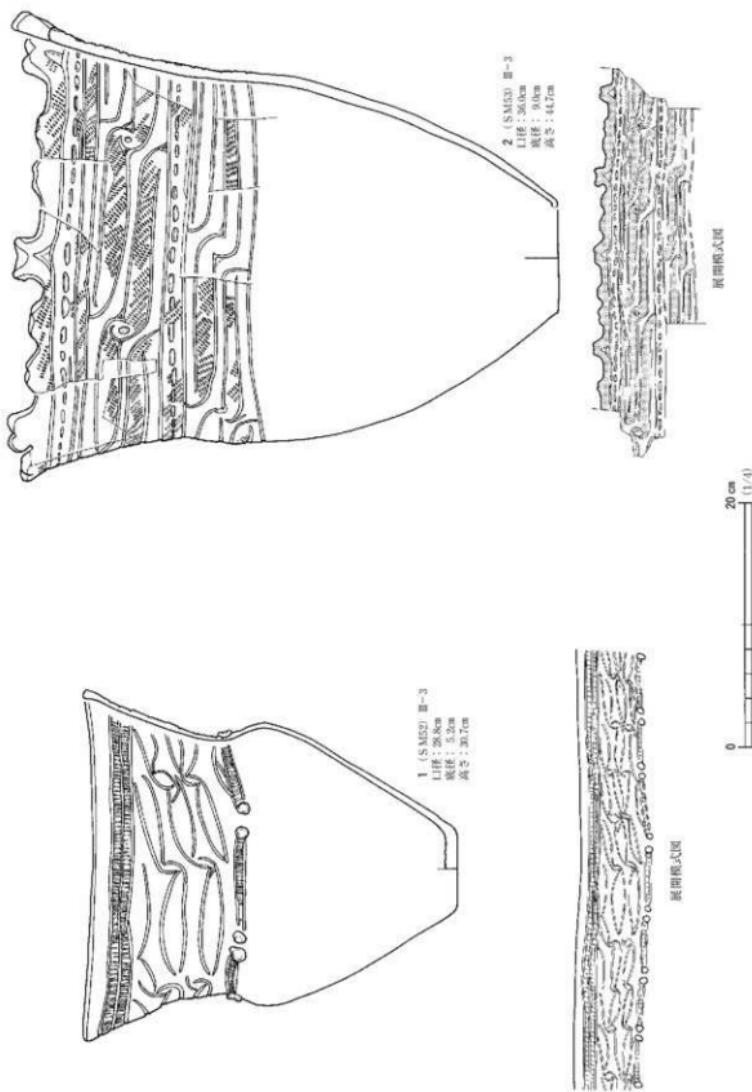


図155 52・53号埋甕出土遺物

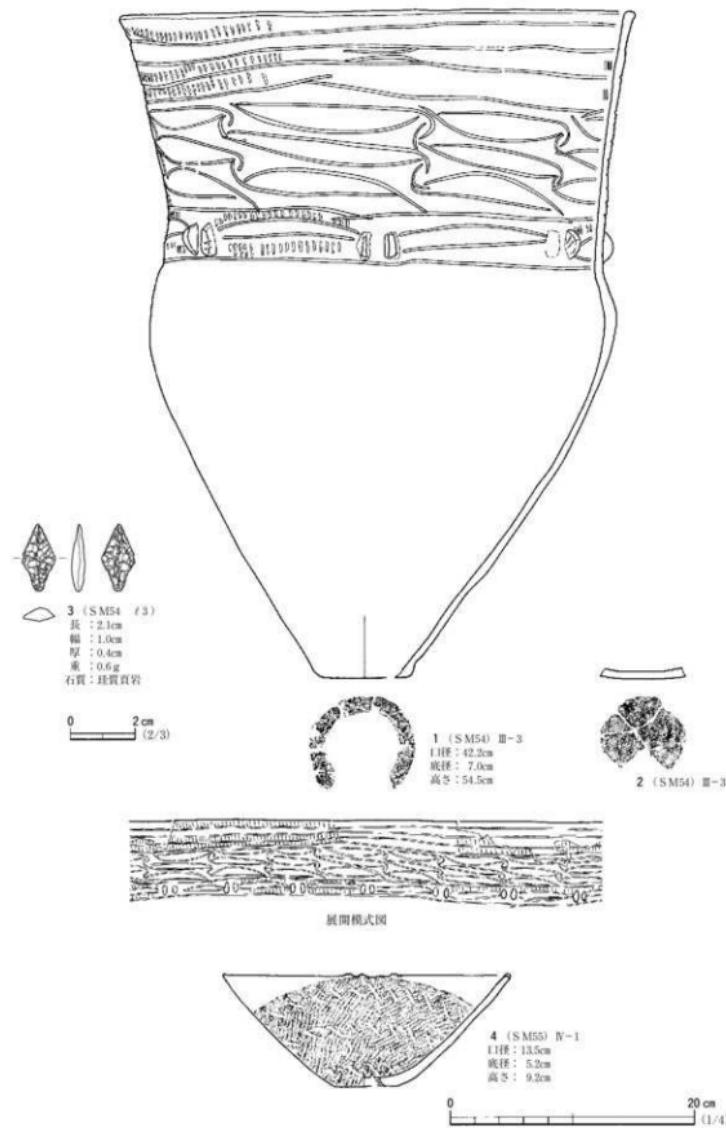


図156 54・55号埋葬出土遺物

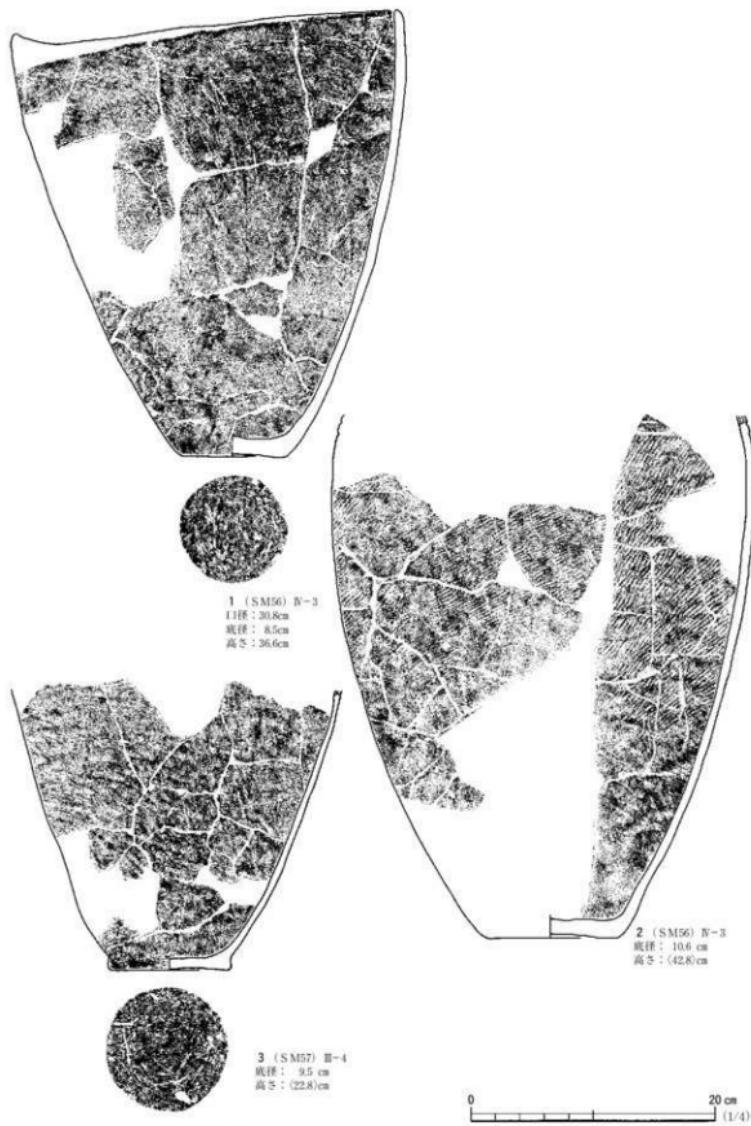


図157 56・57号埋甕出土遺物

第6節 その他の遺構

その他の遺構には、集石遺構3基と屋外焼土遺構2基、性格不明遺構1基がある。いずれも単独で検出され、まとまった特徴はない。

1号集石遺構 S S 1(図158・159、写真77)

本遺構は調査区南部の北側、C 8-6グリッドに位置する。検出面はL II c上面で、重複する遺構はない。集石は径120cmの範囲に10~30cm大の礫を集めたもので、集石の下には、東西1.6m、南北1.2mの掘形がある。掘形内堆積土は2層に分けられ、堆積状況は判断できないが、ほとんどの礫は ℓ 1内に含まれる。

遺物は約300点の縄文土器片と1点の石製品が、 ℓ 1を主体に出土している。図159-1・2は ℓ 2出土の土器片で、1は平行沈線で区画された無文の口縁部に入り組み状の沈線文が施されている。2は平行沈線区画帶内に交互に刻みを施している。同図3・4は縄文地に弧状や対向する三叉状の沈線文を描いている。同図5~9は帯状の区画内に刻み状の連続刺突や縄文を充填し、コブを附加している。同図10は平行沈線区画帶間に斜格子状の沈線文を施している。同図11~13は沈線区画内に縄文と小さなコブを施している。同図14~16は平口縁に沿って巡る条線から更に、条線を蛇行して垂下させている。同図17は胎土に纖維混和痕が認められる。同図18・19無文の底部片で、19は低い台状に端部が作り出されている。同図20は石棒の破損品で、遺存する器面は丁寧に磨かれ、断面が整った円形となっている。

本遺構の所属時期については、出土遺物から縄文時代晩期前葉頃と考えている。 (山岸)

2号集石遺構 S S 2

遺構(図140、写真77)

本遺構は調査区南部の南西側、C 9-13グリッドに位置する。L II c掘削中に、比較的大形の石がまとまって検出されたため集石遺構とした。また、集石の下には土坑状の掘形があり、その中に大形の土器が正位で並列して埋設されていた。他遺構との重複関係はS M27と重複し本遺構が新しい。また北側にSM28が近接する。

集石は東西100cm、南北80cmの不整形の範囲に、長軸45cm、幅18cmの平石を中心にして8~35cm大の石を配置する。中心となる平石以外は角礫が多く、一部被熱している石も見られることから住居の炉石などを集めたものかもしれない。また、集石の北側からは図161の石刀が出土した。

掘形の平面形は南北に長い楕円形を呈する。規模は東西100cm、南北130cm、深さ50cmを測る。底面はおおむね平坦に掘られ、周壁は垂直に近い角度で立ち上がる。堆積土は3層である。 ℓ 2は埋設土器を設置するための土で、 ℓ 1はその上に集石を固定するための土と考えられる。土器内の ℓ

3からは骨片や他の遺物などは出土しなかった。

埋設土器は集石下の南側と北側に2基設置されていた。南側の土器は掘形の底面に接するように正位に設置され、2個体の土器が入れ子状になっていた。北側の土器は精製の大形深鉢で、掘形底面から少し浮かせた状態で正位に設置している。またこの埋設土器の内側からは、別の深鉢の大破片が落ち込んだ状態で出土した。

遺 物(図160・161、写真87・89)

遺物は4個体分の埋設土器の他に繩文土器片43点と石製品1点が出土している。図160-1は北側埋設土器の本体の土器である。口縁部は外反し頸部が大きく括れる深鉢形土器である。底部には外側から穿孔されている。口唇部には二山と一山の波状口縁が交互に5単位で付けられる。文様は横位沈線で区画し連続刺突文や無文帯、帯状組文などが重層的に施文される。頸部には2個一組のボタン状貼付文が付けられ、無文帯には入念な磨き調整をしていて光沢を持っている。内面調整はナデ調整した後さらに磨き調整を加えている。胎土は細粒の砂を含んでいる。色調は黄褐色から暗褐色を呈し部分的には煤が付着する。2次的な被熱痕などは見られない。図161-1は北側埋設土器内の土器である。口縁部から胴部上半にかけての口径の半分程度が遺存している。文様は付加されず丁寧なナデ調整を施している。内面調整は丁寧な綻ナデを施している。胎土は細粒の砂を含んでいる。色調は褐色を呈し部分的には煤や炭化物が付着する。

図161-2は南側埋設土器の本体の土器で、完形の深鉢形土器である。文様は外面や底部を丁寧に綻ナデ調整した後に幅1.4cm、条数8本の櫛歯状工具を用いて施文する。口縁部直下には横位方向に、胴部上半から下半にかけては縦位方向に波状文を連続的に描いている。文様は器面が比較的乾燥してから施文したためか、条線が不鮮明な個所も見られる。内面調整は丁寧なナデ調整を施している。胎土には比較的細粒の砂を用いている。色調は底部から胴部下半付近は黄褐色で胴部上半から口縁部においては暗褐色を呈し部分的には煤や炭化物が付着する。日常的に使用していた深鉢を埋設土器に再利用したと考えられる。図161-3は南側埋設土器の外側の大形の深鉢形土器である。口縁部から胴部にかけての口径の半分が遺存する。文様は外面を丁寧にナデ調整した後に幅1.7cm、条数9本の櫛歯状工具を用いて施文している。口縁部に直下には横位方向に沿って条線を施し、胴部にはZ字状に条線を連続的に描いている。内面調整は丁寧なナデ調整を施している。胎土には比較的粗粒の砂を用いている。色調は胴部下半付近が赤褐色で胴部上半から口縁部においては暗褐色を呈し部分的には煤や炭化物が付着する。

図161-4は石刀の先端部で、全体的に剥落が激しく脆い。剥離整形後、部分的に磨かれ、鈍い刃部が作り出されている。

ま と め

本遺構は集石の下側に土坑状の掘形を持ち、掘形内に正位で埋設土器を2個体並べて同時に設置する極めて特異な形態の遺構である。土器の埋設された順番は南側の埋設土器が掘形の底面に接していることから最初に埋設されたものと考えられ、続いて北側の土器を設置したものと考えられ

る。埋設土器を入れ子状にしている点や底部を穿孔していることなどからも土器棺墓として機能した可能性が考えられる。遺構の所属時期は出土した遺物などから縄文時代後期末頃と考えられる。

(中野)

3号集石遺構 S S 3(図158、写真77)

本遺構はE 5 - 1 グリッドに位置する。重複遺構はない。L IVより検出した。検出時において、こぶし大の礫が集中して出土したことから確認できた。東側は掘削時に破壊してしまった。

礫の範囲は南北60cm、東西50cmの範囲内に認められる。角礫や円礫など、また小礫も混入している。火を受けた礫も確認できたが、本遺構上での被熱の痕跡は認められなかったため、他所で被熱を受けた礫が、持ち込まれたようである。

集石の下には、土坑状の掘形が認められた。掘形埋土内にも礫が混入していた。堆積土は単層で、にぶい黄褐色土を主体とした層である。本遺構からは土器片は出土していない。また、明確に使用した痕跡が認められる礫も確認できなかった。

本遺構は掘形をもつ集石遺構である。掘形内にも礫が混入している。時期は出土遺物がなく、明確ではないが、縄文時代であると推測できるが、詳細な時期については言及できない。(三浦)

1号屋外焼土遺構 S G 1(図158・162、写真87)

調査区南部の北側、C 8 - 1 グリッドに位置する。検出面はL II c 上面で、東側にS M18・19が近接する。重複する遺構はない。焼土の平面は東西に長い楕円形を呈し、長径60cm、短径46cmの規模である。断面では検出面から最大6cmの深さまで熱変化が認められた。

図162-1は検出の際に南東側から出土した土器で、共伴する遺物と考えている。山形状の小突起が付けられた深鉢形土器片である。刻み状の連続刺突が施された平行沈線区画帯を上下に配置し、その間に縄文を充填した帶状の沈線区画帯を、重層的に横位展開させている。また、胴部中央の区画帯内には比較的大き目のコブが付けられている。

本遺構の所属時期は、遺構検出面と出土遺物から縄文時代後期後葉頃と考えている。(山岸)

2号屋外焼土遺構 S G 2(図158)

本遺構は調査区南部北側のB 9 - 8 グリッドに位置する。検出面はL II c である。遺存状態は比較的良い。重複遺構はなくすぐ北側にS I 16~18が近接する。平面形は東西55cm、南北65cm、焼土の厚さは最大6cmである。検出された位置が住居の集中する範囲であったことから当初は住居跡の炉の可能性を考え周辺の精査を行った。しかしながらすでに周辺の掘削を進めてしまったため柱穴や踏み締まりなどを確認することができなかった。遺構の所属時期はL II c で検出していることから縄文時代後期頃に位置づけられよう。(中野)

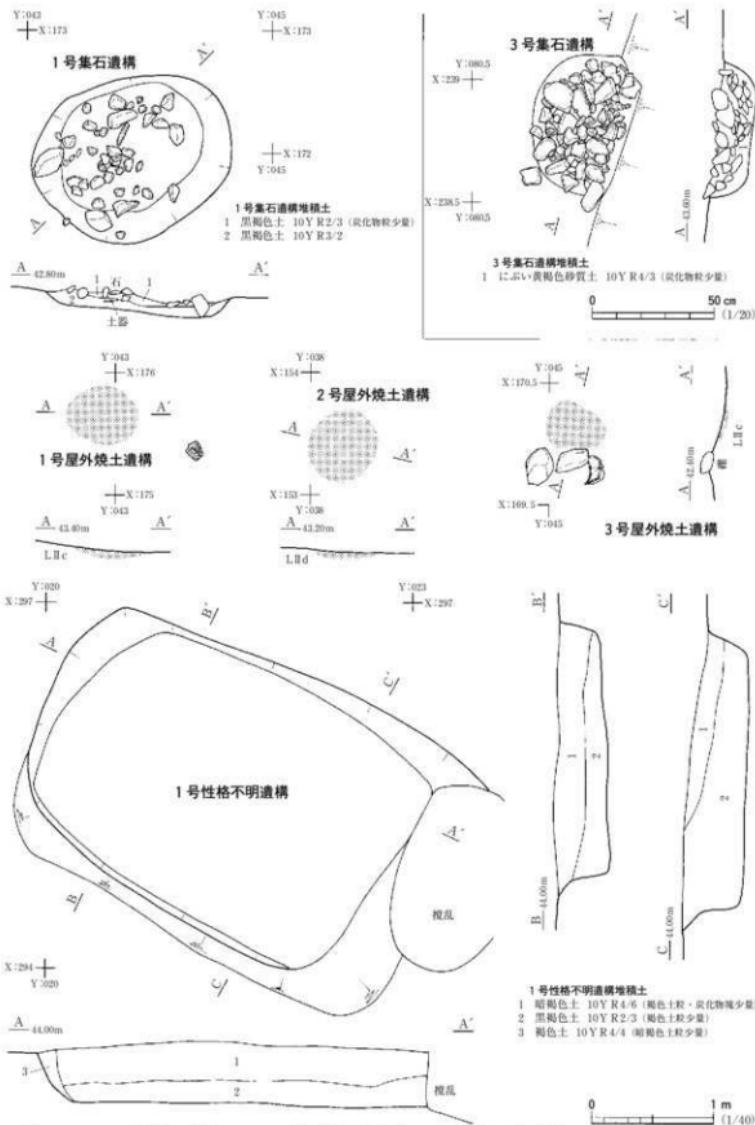


図158 1・3号集石遺構、1～3号屋外焼土遺構、1号性格不明遺構

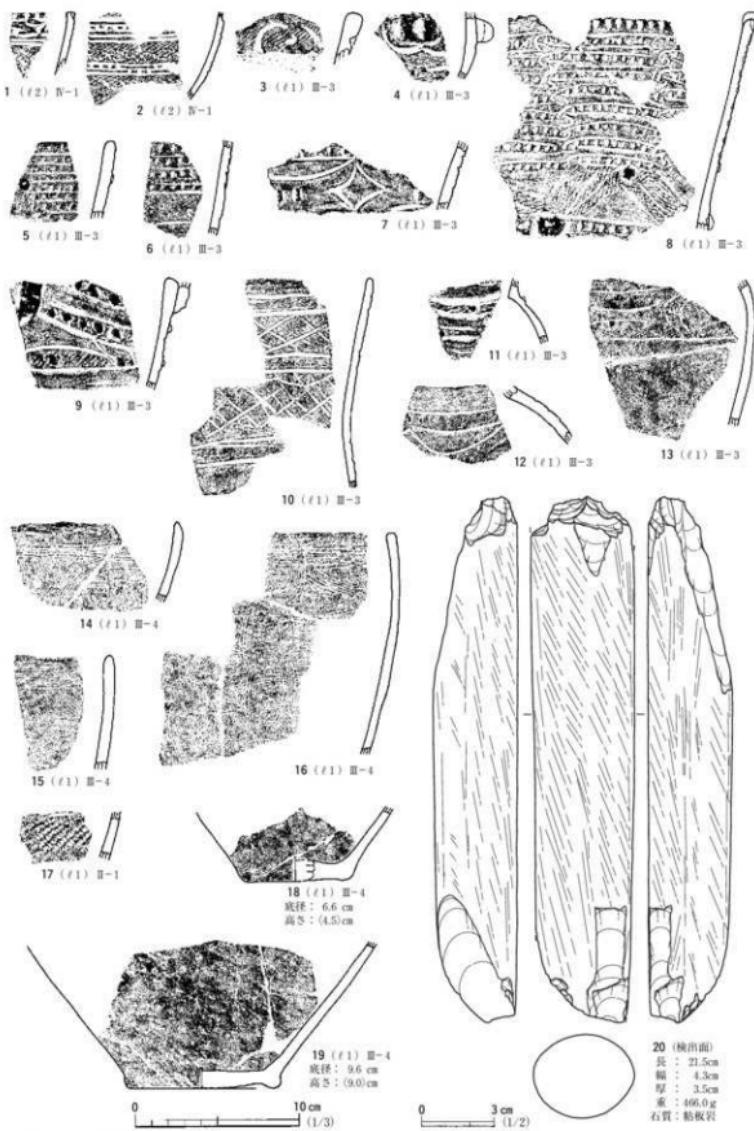


図159 1号集石遺構出土遺物



図160 2号集石遺構出土遺物(1)

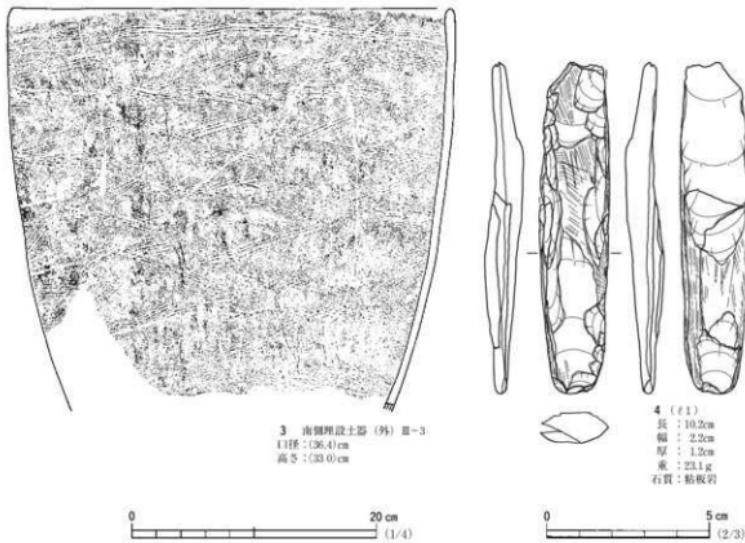
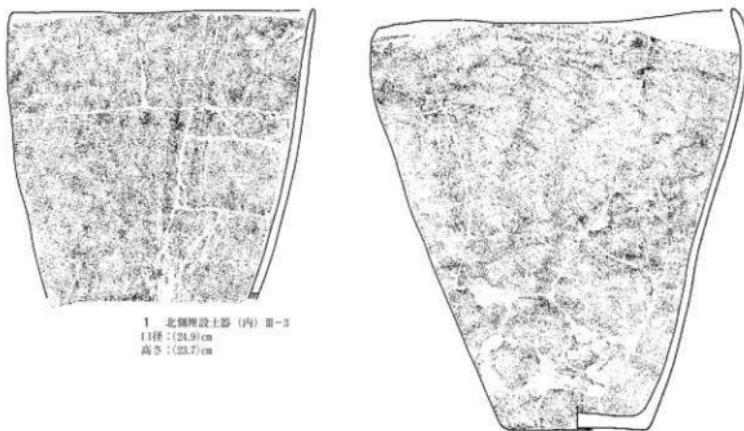


図161 2号集石遺構出土遺物(2)

3号屋外焼土遺構 SG 3(図158・162)

本遺構は調査区南部の北側、C 8 - 6 グリッドに位置する。L II c 上面で、南側に接した礫と繩文土器片と共に検出した。精査の結果、周辺に柱穴や踏み締まりが検出できず、礫の焼けや掘形も確認できなかったことから焼土遺構とした。重複する遺構はないが、北側に S S 1 が近接している。焼土の平面は東西にやや長い不整な楕円形で、規模は長径70cm、短径60cmである。断面では、検出面から最大5cmの深さまで焼けが認められた。

図162-2は深鉢形土器の胴部である。胴部中央付近に沈線を巡らせ、沈線下に沿って小さなコブを配置している。

本遺構の所属時期は、遺構検出面と出土遺物から縄文時代後期後葉頃と考えている。(山岸)

1号性格不明遺構 SX 1(図158)

本遺構は調査区北部の平坦面から東斜面への肩部にあたるB 2 - 1・5 グリッドに位置する。検出面はL IVで、褐色土の長方形として確認した。

平面形は長方形で、長軸方向は北西-南東を示す。規模は長軸3.56m、短軸2.56mである。検出面から底面までの深さは50cmを測る。底面は平坦面を意識して構築しているが、わずかに凹凸が認められる。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。南東壁は傾斜がやや緩やかとなる。さらに南東壁の一部は、擾乱により壊されていて遺存していない。堆積土は3層に区分した。ℓ 1・2は流入土、ℓ 3は壁面崩落土である。ℓ 1・2はしまりの悪いボソボソとした土が堆積している。

本遺構からは繩文土器片18点、剥片4点、陶器片2点が出土した。出土した陶器片は、胎土や釉薬の特徴から大堀相馬焼と考えられる。出土遺物は小破片のため、図示していない。

本遺構は長方形をした竪穴状の遺構である。堆積土の状況より、比較的新しい遺構であると考えられる。出土遺物に大堀相馬焼が認められることから、SK 32と同時期の近世頃の可能性が考えられる。

(三浦)

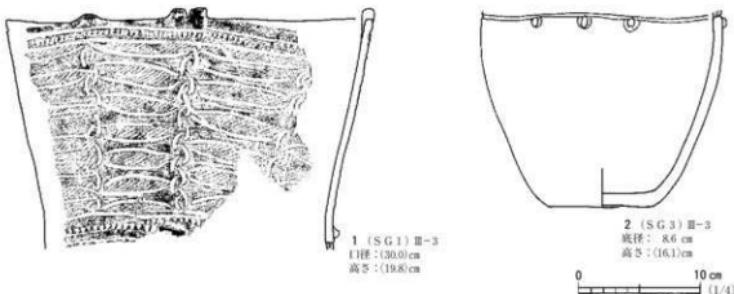


図162 1・3号屋外焼土遺構出土遺物

第7節 遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物には土器、土製品、石器、石製品等がある。耕作による搅乱が遺跡の基底層にまで及んでいる部分が多いため、本来の遺物包含層であるLⅡ～ⅢよりもLⅠに再包括された遺物が多く、時期的にも混在状態にある。したがって、ここでは遺物包含層出土遺物も含め遺構外出土遺物として、項目ごとに記述していく。

土 器(図163～192)

出土遺物の主体を占めるもので、破片数にして約50,000点出土している。時期的には縄文時代・平安時代・近世の土器がある。中でも縄文時代の土器が圧倒的に多く出土し、全体の95%以上を占めている。これら土器の記載にあたっては「第1章 第4節」に示した分類にしたがって行く。

I群土器(図163～166)

図163は1類土器としたものである。1は押型の横位回転による多重山形文が施され、胎土に纖維混和痕が認められる。2は斜行する平行沈線間に細かい格子目状の沈線を充填している。胎土に細粒砂を比較的多く含み、焼成は脆い。3～8は貝殻腹縁文を特徴とするもので、器面が平滑に仕上げられている。いずれも橙色系の明るい色調で、胎土に白色の細粒砂を含み、焼成が比較的良好である。3は平行沈線区画帶内に、沈線と平行した二条の貝殻腹縁文を施している。4～6・8は無文地上に、横位の貝殻腹縁を連続して施している。7は口縁部片で、端部内面に棒状工具による幅広の刻みを加え、縦位の貝殻腹縁文を施している。同図9も口縁部片で、刺突を施した平行沈線と斜位の短沈線が認められる。

同図10～21は貝殻腹縁や棒状工具等による刺突文を特徴とする土器で、にぶい黄褐色系の色調が多い。胎土に雲母片を含み、焼成も比較的堅緻で、薄い作りの土器が多い。10～15は口縁部片で、10・11は口縁部に沿って貝殻腹縁による連続刺突を施している。12は平棒状工具による連続刺突を山形状の口縁に沿って二段に施している。13は小さな山形状の口縁に縦位の隆帯を施し、端部に沿って爪形状の連続刺突を加えている。14は貝殻腹縁による連続刺突と波状の浅い沈線文を横位に描いている。15は潰れた竹管状の工具で、押し引き状に連続刺突を多段に施している。16～21は主に貝殻腹縁による連続刺突が施された胴部片で、18・19の内面には貝殻条痕文が認められる。同図22・23は縦状体圧痕文が施された口縁・胴部片である。

同図24～26は沈線文が施された土器で、24は三条の沈線で斜位と蛇行する文様を描いている。25・26斜格子状の沈線が描かれ、25の器面には斜位の条痕が認められる。同図27・28は貝殻条痕文とする。同図29は尖底部である。縦位の整形痕が認められるが調整は比較的難で、全体的に歪んでいる。

図164は2類土器としたもので、内外面の条痕文を特徴とする。1～5は薄手の土器で、橙色系の明るい色調となっている。焼成は堅緻で、胎土に纖維混和痕が認められない。1・2は縦・斜位

方向に、微隆起線が等間隔で施されている。3～5は条痕文だけが認められ、内面では横位、外面では縦・斜位方向に施される傾向にある。また、外面の条痕はほぼ平行して施され、条痕間は微隆起線状に高まっている。

図6～17は厚手の土器で、橙～明褐色系の明るい色調が多い。焼成は比較的脆く、胎土に多量の纖維混和痕が認められる。6～15は口縁部片、17は口縁部と胴部の境の屈折部と考えられる。6・8の口縁端部には刻みが、7は口縁に沿って繩圧痕が施されている。6には半裁竹管による横位の刺突列が、7・9～11には細い集合沈線によって、縦位や斜位に交差する图形、交差部に同心円を描くなど幾何学的な区画文が施されている。17は屈折部に浅い刻みが巡り、口縁部方向には幅広の浅い沈線を斜位に施している。同図16は胴部片、17・18は平底の底部片で、17は底面にまで条痕文が施されている。地文の条痕は、口縁部付近では横位に、胴部から底部かけては縦位方向に施される傾向が認められる。

図165・166は3類土器としたもので、I群土器の中で最も出土数が多い。橙～褐色系の色調で、胎土に比較的多くの纖維混和痕が認められる。また、焼成は比較的良好である。図165・166-1～16は外面の縄文と内面の条痕文を特徴とする土器である。図165-1～7は地文以外の文様が、外面に付加された土器である。1は横位の条痕下に二段の繩圧痕が、2～5は0段の斜行縄文が施されている。6は半裁竹管による横位の押引文が、7は横位や斜位の平行した沈線文が縄文地上に施されている。同図8～12は口縁部片で、いずれも端部は尖り出す傾向が認められる。また、8・9は口縁端部に指頭による押圧を加え、波状口縁を作り出している。外面には斜行縄文、内面には横位方向の条痕文が施されている。

図165-13～17・図166-1～16は胴部片で、器面には凹凸が認められ整っていない土器が多い。外面の斜行縄文は単節が多く、図166-5～9のように細かな節の土器も認められる。内面の条痕は、縦・横・斜位と施文方向に規則性は認められない。これら条痕の多くは貝殻によるものと考えられるが、図166-5・711・14・16のように刷毛目や櫛歯状の工具による土器も認められる。

図166-17・18は内外面に縄文が施される土器で、出土数は2点と極めて少ない。外面は斜位に、内面では横位に縄文が施されている。胎土には纖維混和痕が認められ、焼成は比較的良好である。同図19・20は底部片で、いずれも底面にも縄文が施されている。

II群土器(図167・168)

図167、図168-1～39は1類土器としたものである。図167-1～8は斜行縄文を地文とする土器である。1～3は頸部が強く屈折する器形の深鉢形土器で、屈折部と口縁部に三条の沈線を巡らせている。また、口縁の沈線下には沈線と同一工具による刺突を沿わせている。4は口縁部が内傾する土器で、口縁端部には半裁竹管による浅い刺突が施されている。5～8は深鉢形土器の胴部片で、5・7・8は単節の、6は複節の斜行縄文を地文としている。これら土器の色調は、いずれも暗い褐色系で、胎土に比較的多量の纖維混和痕が認められる。また、焼成はやや軟調で、脆い土器が多い。

図167-9～15は撲糸文を特徴とする土器である。9・10はやや目の粗い、11～13は崩れた網目状の撲糸文を、14・15は横走する撲糸文を密に施している。同図16～24は結節繩の回転文を特徴とする土器である。16・17は口縁部に沿った横位の回転文が、繩文地上に施されている。18～21は胴部片で、18・20は比較的密に、19・21はまばらに施されている。22は無文地上に、二条の回転文を口縁部に沿って巡らせた後、縱位に垂下させている。23・24は斜行繩文地上に、横位の回転文を巡らせている。

図167-25～29は二条一組の波状コンパス文を特徴とする土器である。25は低い山形状の口縁端部に、指頭による刻みを施した深鉢形土器片である。無文の口縁部に三組のコンパス文を横位に巡らせ、結節繩の回転文を境とした胴部に斜行繩文を施している。26～28は横位と縱位区画のコンパス文が認められ、口縁部は無文、胴部には繩文が施されている。橙色系の明るい色調で、胎土に纖維混和痕が僅かに認められる。

図167-30～33、図168-1～6は波状沈線文を特徴とする土器である。図167-30～33は無文の口縁端部に沿って沈線文が巡らされ、30は平行沈線、31～33は一本描きとなっている。また、30・31には縱位、33には弧状の区画文が認められる。図168-1～3は斜行繩文を地文とする口縁端部に波状の沈線文を巡らすもので、1・2は一本描き、3は平行沈線で施されている。同図4は無文の口縁部に三条の波状沈線を巡らせ、沈線下の胴部には回転方向を変えた斜行繩文が認められる。同図5は無文地の口縁部で、端部を巡る細かな波状沈線と平行沈線による大柄な波状图形が描かれている。同図6は繩文地文の胴部に波状沈線が施されている。これら土器の多くは橙色系の色調で、胎土に微量の纖維混和痕が認められる。

図168-7～16は沈線や刺突、細い隆帯が付けられた土器である。7は無文の口縁部に平行沈線を巡らせ、8は上下の波状沈線間に平行沈線を斜位に施している。9は低い山形状の口縁部から先端が弧状に垂下する隆帯を貼り付け、口縁端部から連続した刻みを加えている。また、無文の口縁下部には、大きな山形状の波状沈線を横位に施している。10には短沈線風、11には円形の刺突文が施されている。12は口縁部に沿って巡る沈線上に連続刺突文を加えている。13・15・16は細い隆帯を貼り付け、その隆帯上に刻み状の刺突を施している。

図168-17～26は斜行繩文が施された土器である。17～19は繩の回転方向を変えて、縱位の羽状風に交差させている。20～26は概ね同一方向に繩を回転させ、条は斜位方向に走っている。これらの土器は橙色系の色調で、胎土に微量の纖維混和痕が認められるものが多い。また、胎土に細粒砂を比較的多く含み、焼成は良好である。

図168-27～36は無文地上に多条の沈線や連続刺突文を施す土器である。27・28は口縁部片で、27は間隔の開いた多条の平行沈線を施している。28は平行沈線間に爪形状の浅い刺突を押引き状に施している。29～34は多条の平行沈線で、三角・菱形状の幾何学的な图形を描いている。35・36は工具の支点を交互に変えながら連続した浅い刺突を鋸歯状に施している。これら土器の多くは暗い褐色系の色調で、胎土に細粒砂を比較的多く含み、焼成は良好である。

図168～37は半裁竹管による押引文が密に施されている。同図38・39は細い粘土紐を貼り付けて文様としているもので、39は粘土紐上に細かな刻みを加えている。

図168～40・41は2類とした土器で出土数は極めて少ない。40は太い沈線、41は隆線で曲線的な图形を描き、無文部と縄文部を区画している。いずれも胎土に白色の細粒砂を多く含み、焼成は堅緻である。

Ⅲ群土器(図169～187)

今回の調査で出土数が最も多い土器群である。なかでも3類土器が全出土土器の7割を占めるほど出土比率が高い。

図169～1～23は1類土器としたもので、Ⅲ群土器では出土数が最も少ない。1～8は沈線区画の縄文部と無文部が認められるもので、比較的厚手の作りとなっている。沈線によって大柄な曲線图形が描かれているが、全体が分かれるものはない。無文部が主要文様となるらしく、4・5では地文の縄文を明確に磨り消している。いずれもにぶい黄橙色の色調を呈し、胎土に粗砂粒を比較的多く含み、焼成が良好な土器が多い。

9～16は無文地上に沈線文を描く土器である。9は口縁部全体を区画する幅広の平行沈線間に、矢羽状の沈線文を横位に連続して施している。11には平行沈線と鍵の手状の沈線区画文が認められる。10・15は沈線区画内に条線が認められ、16は幅の狭い平行沈線区画内に円形の刺突文を充填している。12～14は壺形土器の口縁部片と考えられ、12は頭部に平行沈線を、13・14は口縁端部に沿って沈線を巡らせている。

17は平口縁の深鉢形土器で、口縁内面の端部に沿って一条の沈線が巡らされている。一条の沈線を巡らせ、無文の口縁部と縄文が施された胴部を区画している。無文の口縁部は平滑に磨かれ、一対の補修孔が二ヶ所に認められる。18～20・23は沈線で、平行や横長の蛇行曲線を描き、沈線文間に縄文を施している。いずれも器面は平滑で薄い作りとなっている。21は沈線区画の無文部に、梢円形の刺突をランダムに施している。22は台付土器の底部で、台との境付近に平行沈線を巡らせ縄文を施している。また、かなり厚みを持つ底部底面には、きめ細かい網代編み圧痕が認められる。

図169～24～27、図170・171は2類土器としたもので出土数は3類土器について多い。図169～24～27は平行沈線を主要文様とし、文様帯が胴部上半に位置する。24・25は縄文施文後に、末端がUターンする平行沈線が描かれている。26・27の口縁部は無文で、全体が磨かれ平滑に仕上げられている。

図170～1～13は深鉢・鉢形土器の口縁部片である。1・2は山形状、3・4は平口縁でいずれも無文となっている。器面は内外共に丁寧に磨かれ平滑に仕上げられている。また、口縁端部に向かって肥厚する傾向が認められる。5・7・11・12は口縁部に沿って一条の沈線を巡らせ、口縁部と胴部を区画している。いずれも口縁部は無文で、7・11の胴部には縄文が、12には条線が施されている。8・9・13は無文の平行沈線区画帯が施されているもので、8は山形状の口縁に沿って、9・13は口縁と胴部の区画として施されている。6・10は粘土紐による装飾が施され、いずれ

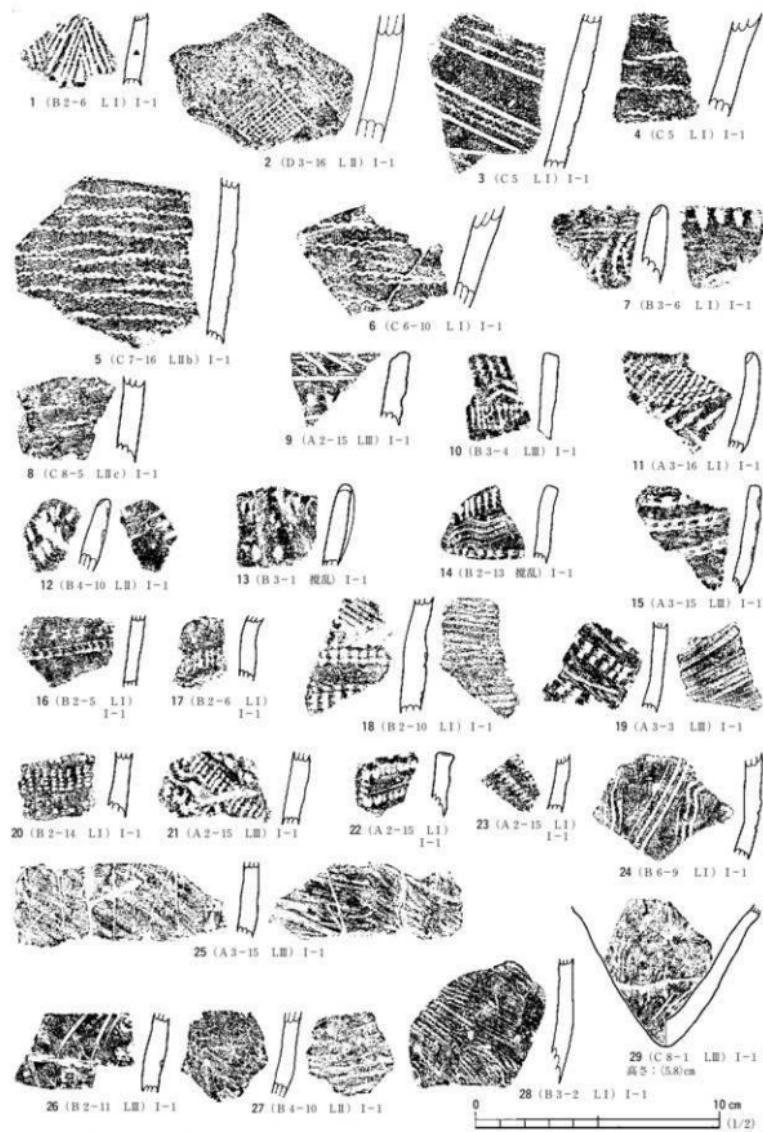


図163 遺構外出土土器(1)

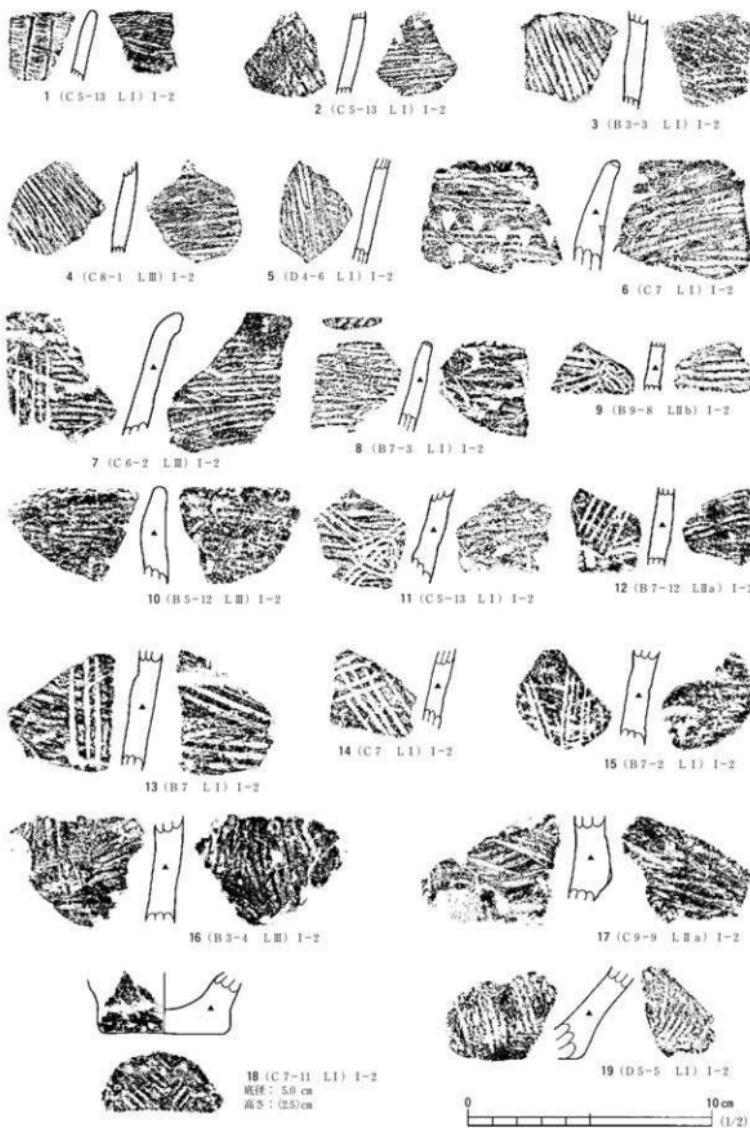


図164 遺構外出土器(2)

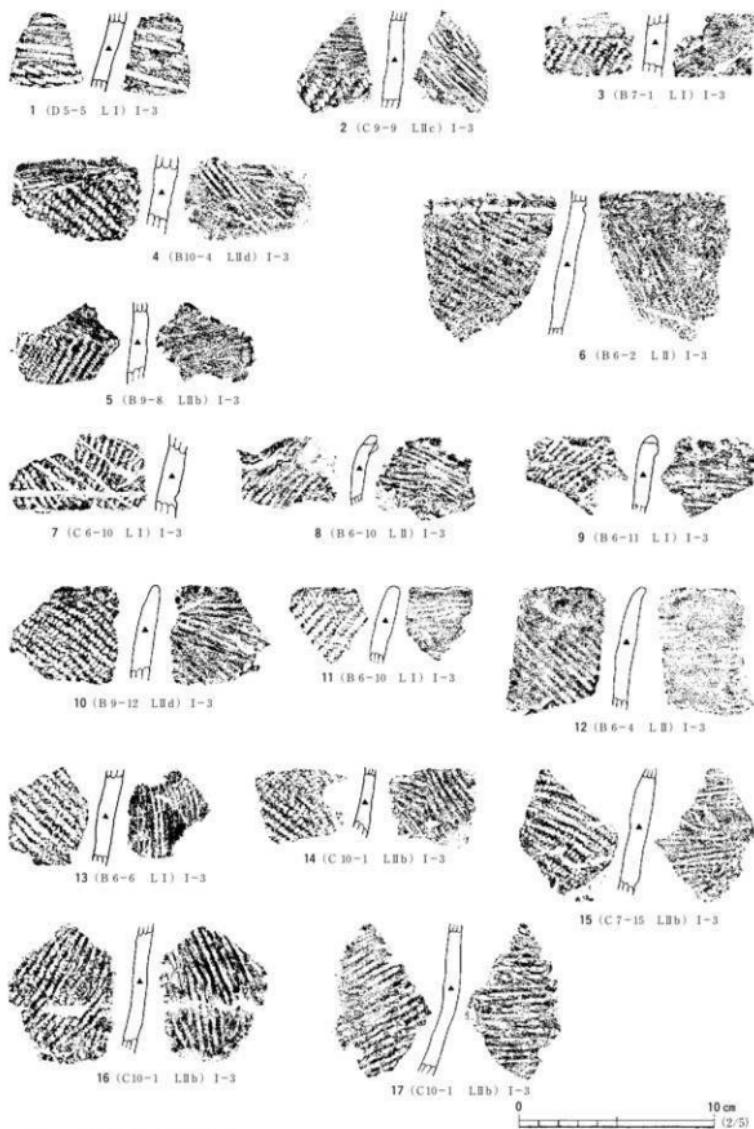


図165 造構外出土土器(3)

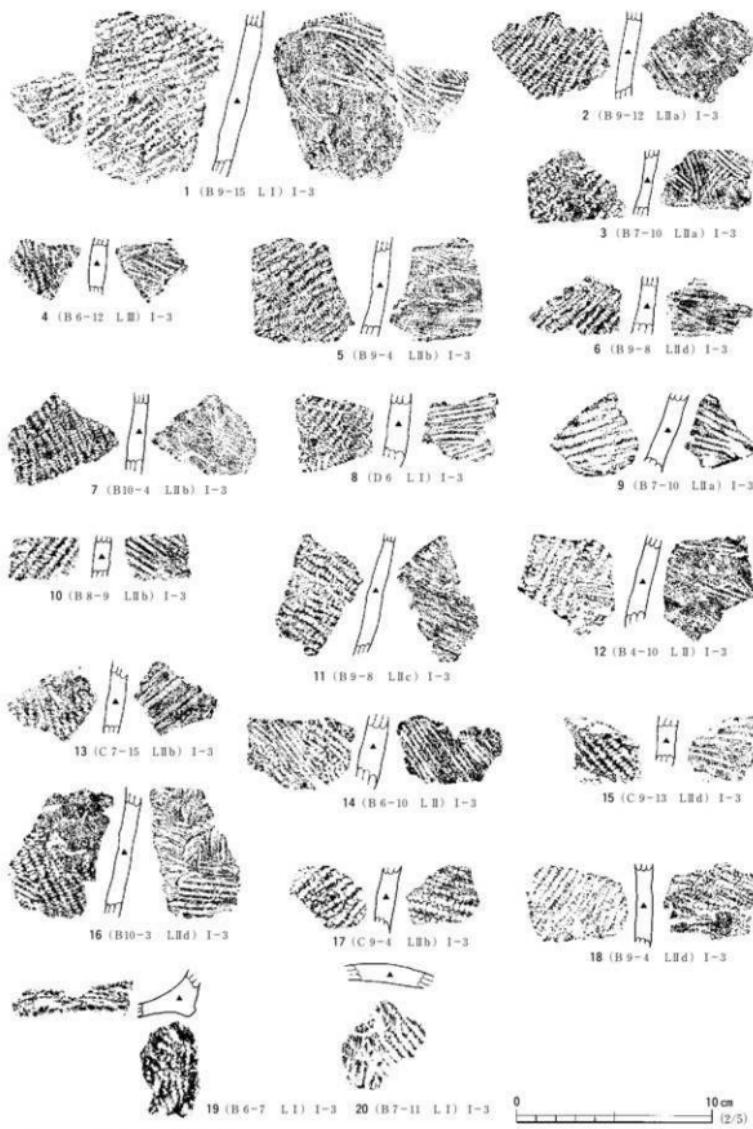


図166 遺構外出土器(4)

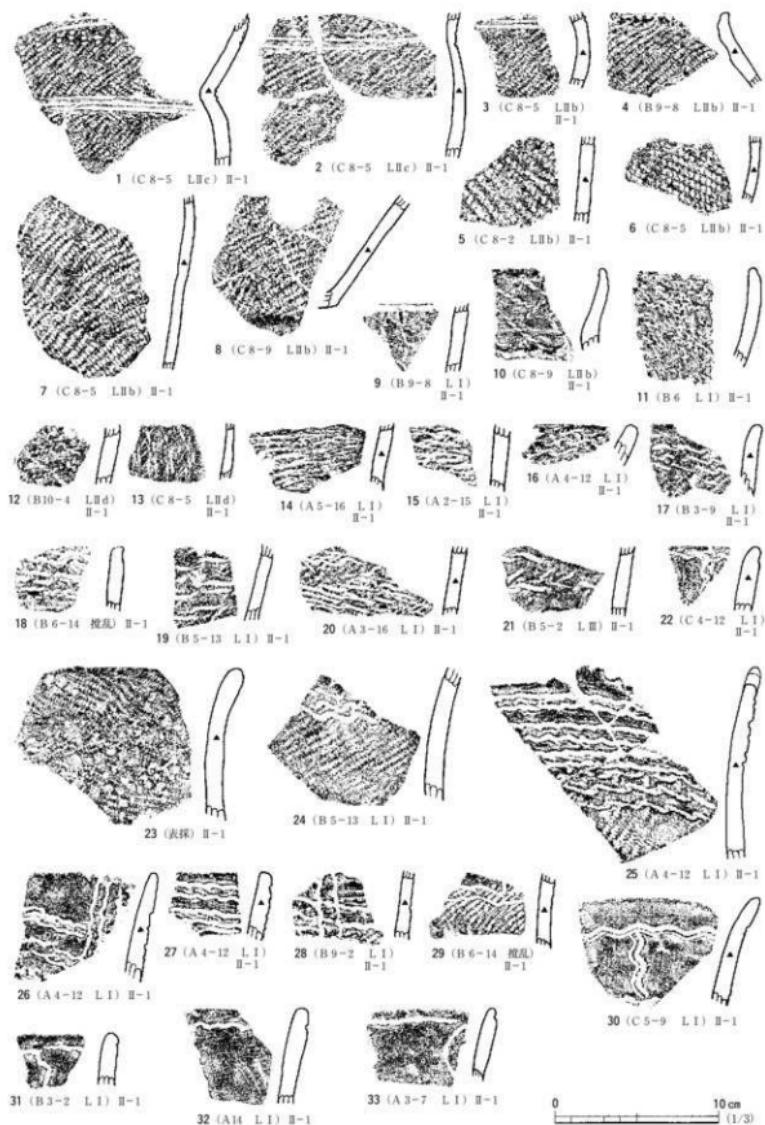


図167 遺構外出土遺物(5)

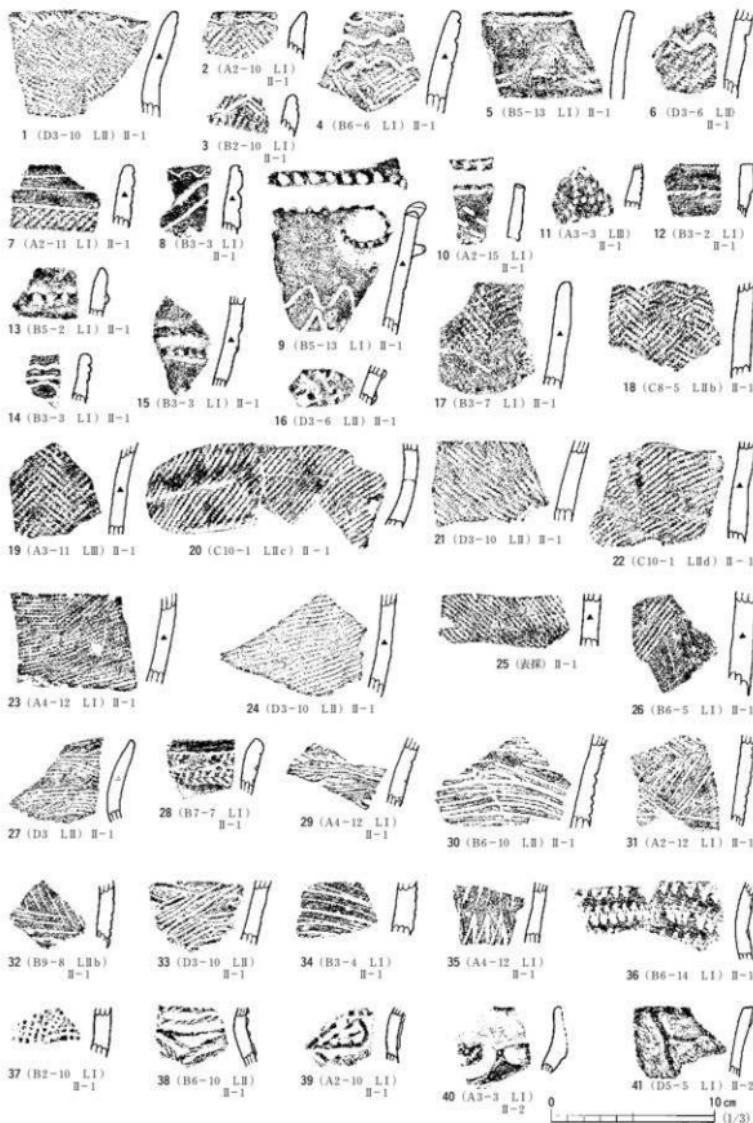


図168 遺構外出土器(6)

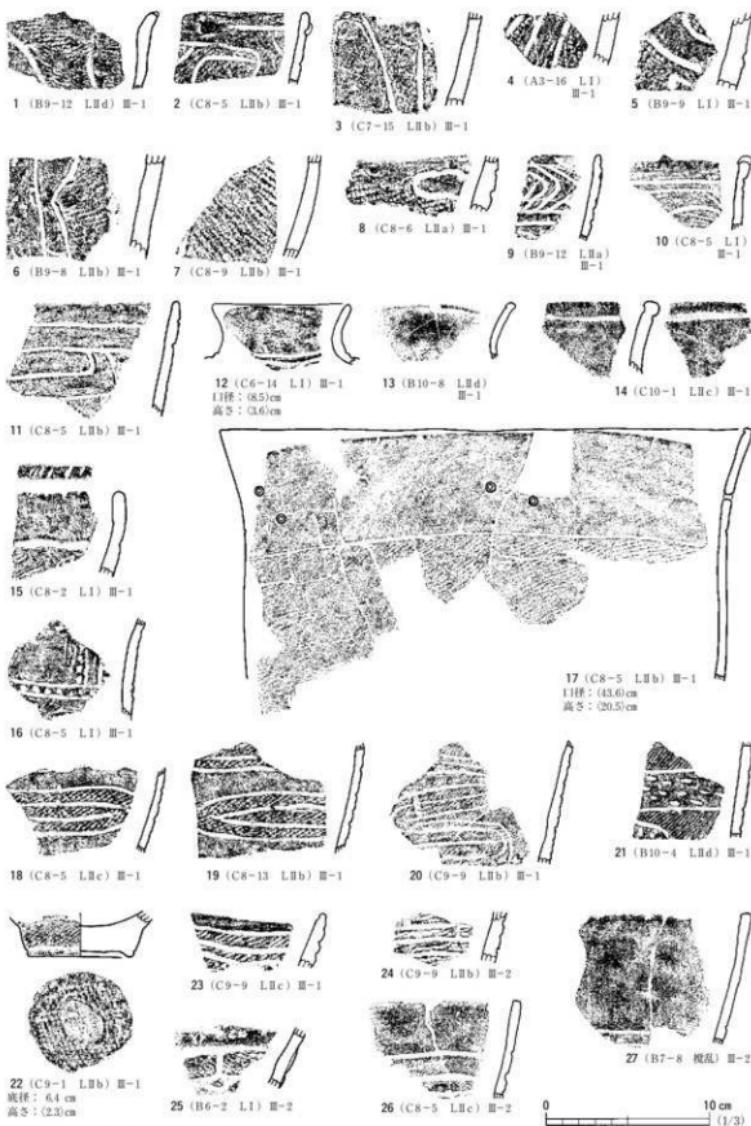


図169 遺構外出土土器(7)

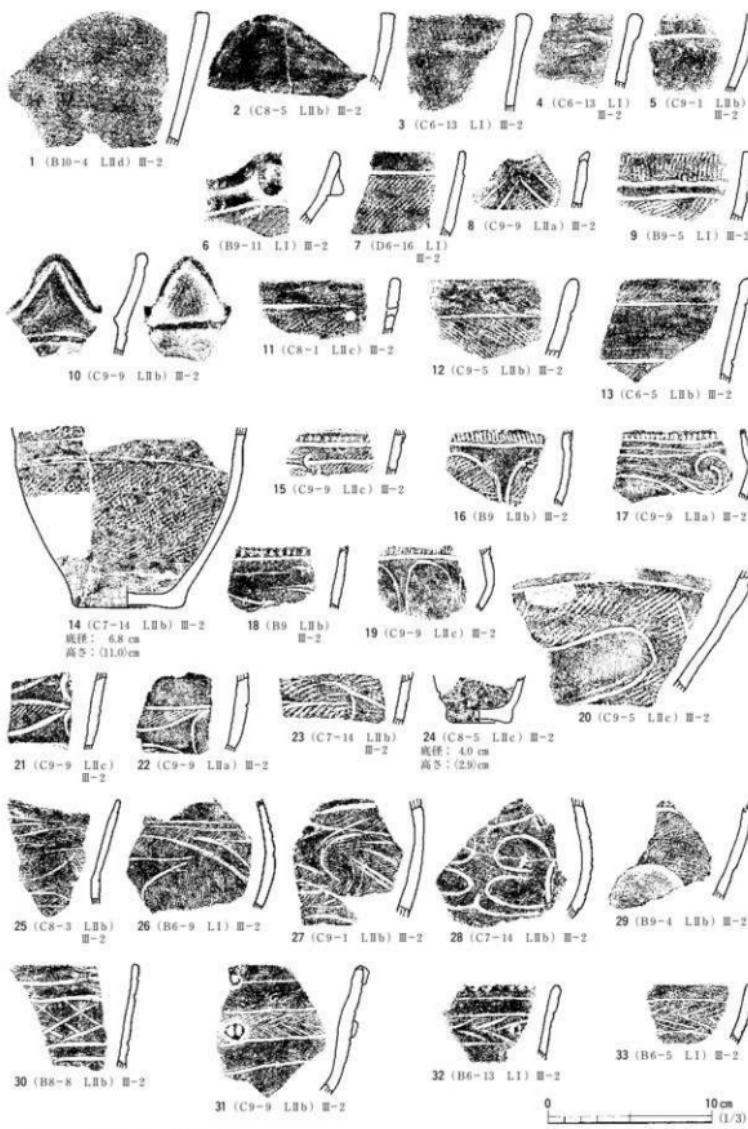


図170 遺構外出土器(8)

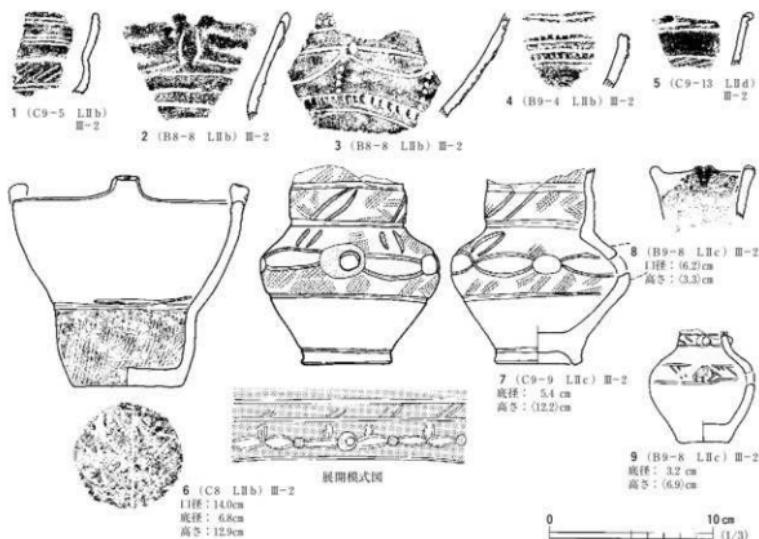


図171 遺構外出土土器(9)

も山形状を呈する。同図14は口縁部を欠損する鉢形土器で、胴部上半に平行沈線区画帯を巡らせて いる。器面には斜行縄文が施され、底部付近と区画帯内は磨かれ無文となっている。

図170～15～29は広義の磨消手法による沈線区画の曲線文が施された土器である。15～19は口縁部との境に刻み状の刺突を施した平行沈線が巡り、胴部には大柄な沈線区画文が描かれている。20～24は弧状や入り組み状の大柄な曲線文を横位に展開させている。25～29は弧状や入り組み状の曲線を組み合わせ複雑な図形を描いている。

図170～30～33、図171-1～5は無文地に沈線文を描いた土器である。図170～30は平行沈線間に斜格子状の、同図31～33は矢羽状の沈線文を施している。図171-1は平行沈線間が微隆起線状に高まる。同図2～5は平行沈線と弧状の区画文を施し、円形や刻み状の刺突文で加飾している。

図171-6は胴部にくびれをもつ鉢形土器で、口縁部には頂部に刺突を加えた4単位の山形状突起が配されている。くびれ部には沈線が巡り、沈線下には縱位の条線が密に施されている。また、底面には木葉痕が認められる。同図7～9は注口土器である。8は山形状の小突起が付けられた口縁部片で、口縁端部に向かって外傾する。7・9は口縁部と注口部を欠損するが、ほぼ全体の特徴が分かる上器である。沈線を巡らせ各部位を区画し、注口部を中心とした胴部上半に主要文様を展開させている。7のコブは全て剥落しているが、胴最張部に注口部と共に等間隔で配し、その間を橢円形状の沈線区画文で連結している。8は頸部と胴最張部に縄文を施した平行沈線区画帯を巡らせ、注口部を含めて4分割するようにコブを配置している。

図172～181は3類土器としたもので、遺構外出土土器の中で最も出土数が多い。全体形の分かることは少ないが、器種には深鉢・鉢形、浅鉢形、壺形、注口土器等が認められ、深鉢・鉢形土器が主体を占める。深鉢・鉢形土器では、主要文様が平行沈線による横位の区画帯に挟まれた胴部上半に施され、沈線区画による主要文様は無文部よりやや高まった表現となるものが多い。また、主要文様の加飾には縄文、条線文、無文、連続刺突文と粘土粒を貼り付けた「コブ」が認められる。色調では明褐色～暗褐色と一定していないが、比較的暗い色調の土器が多い。胎土に少量の細粒砂を含む土器が多く、焼成は良好で堅緻な土器が多い。

図172-1～19は主要文様に縄文とコブを加飾している土器である。1・2は同一個体で、口縁端部には山形状の小突起が付けられている。この小突起から縱長のコブを3段に整列させ、各コブ列の間に帶状に長い楕円形の沈線区画文を横位に施している。また、区画文は各列のコブとコブの間に位置し、区画内は平滑に磨かれている。3・4は口縁端部に沿った二条の平行沈線を縄文地上に巡らせ、その平行沈線間をつなぐように縱長と微小のコブを貼り付けている。5は縄文地上に、等間隔に平行沈線を巡らせ、沈線間のほぼ中央に微小のコブを縱列させている。

6～10は弧状の沈線区画文を特徴とする。6は口縁端部と胴部のくびれ部に微小のコブを付加した沈線区画の縄文帯を巡らせ、さらに二条の縄文帯で区画した中に、縄文帯を挟んで対称する連弧状の沈線区画文を施している。縄文帯内の無文帯と連弧状の区画文内は磨かれ、縄文部より低くなっている。また、いずれの縄文帯にもほぼ等間隔で微小のコブが付けられ、連弧状の区画文の各基点のコブの中央には円形の刺突が認められる。7～9は口縁部に沿って巡る平行沈線区画帯内に、微小のコブが積極的に付加されている。いずれも弧状の区画文内は磨かれて低く、無文部となっている。10は弧状の区画文内の縄文を残し、周りを磨り消して無文部としている。このため、6～9の土器と逆に区画文の外側が低くなっている。

11～16・18・19は連結した木葉状や弧状の沈線区画文を特徴とする。いずれも区画文内には縄文が施され、無文部は磨かれ低くなっている。また、いずれの区画文内にも微小のコブが加飾されている。14～16は連結した木葉状の区画文が施され、区画文の末端や中央、連結部分に微小のコブが付けられている。また、14のコブは中央に縱長の刺突が加えられている。18・19は区画文が入り組み状に連結し、18のくびれ部には縦の刻みを加えた比較的大きなコブが、19の平行沈線区画帯内には連続刺突が施されている。17は比較的大きなコブが付けられた縄文帯がくびれ部を巡り、下方に網目状の沈線文が施されている。

図173-1～13は条線文とコブを特徴とする。1はやや内湾気味の口縁で、端部に小さな山形状突起が付けられている。縦位の条線を地文とし、中央の無文帯を上下に挟み、微小のコブを起点とした連弧状の沈線文と細長い眼鏡状の沈線区画文を横位に展開している。2～6は沈線区画文内に地文の条線を残し、2・3・5・6は区画文内に、4は無文部にコブが付加されている。また、3には曲線的、8には角張った区画文が認められる。7は幅の狭い平行沈線区画帯を、間隔を空けて巡らせ、口縁端部に沿ってコブを配している。無文部はいずれも条線を磨り消し、平滑に整えてい

る。8・9は沈線区画に沿って、横位方向に条線が施されている。10・12は横位の条線を地文とし、平行沈線と縦長のコブが施されている。11は連弧状の平行沈線区画文と条線文を上下に施し、区画文内に刻みを加えている。また、いずれの文様もコブを起点として施されている。13は縦位の条線と同一工具で、コブの付けられた平行沈線間に矢羽状の沈線が施されている。

同図14～29はコブと沈線・刺突を特徴とする。14は頂部がくぼむ山形状の突起が付けられ、沈線区画内に横長の刺突がまばらに施されている。また、突起の下方には刻みを加えたコブが並んで配されている。15・16は弧状の沈線区画内を無文とし、その他の部分に刺突や短沈線を施している。また、15は櫛歯状工具による刺突を縄文風に施している。17はコブを付けた平行沈線区画帶間に、斜格子状の沈線文を描いている。18はコブを起点とした木葉状の沈線区画文を描き、櫛歯状工具による短い条線を充填している。19は条線の施された平行沈線区画文上に、沈線を加えた縦長と微小、ボタン状の三種類のコブを貼り付けている。20・21は山形状の突起で、21は口縁に沿った平行沈線間に刺突を加えたコブと微小のコブを貼り付けている。21は突起に沿って沈線を沿わせ、中央に縦長のコブを付けている。22・23は口縁に沿った平行沈線区画帶内に微小のコブを密に配し、山形状の小突起下に刻みで三分割した縦長のコブを貼り付けている。24～26は突起に沿って沈線と刻みを施し、中央に縦長のコブが付けられている。27～29は櫛歯状工具による刺突と刺突風に短い条線を施している。

図174～1～22は沈線区画による主要文様内が無文で、微小のコブが積極的に付けられている。1～5は口縁部片で、口縁に沿って平行沈線区画帶を巡らせ、微小のコブを配している。区画帶間の無文部は磨かれ、弱い光沢を帯びている。6～10は弧状の連結文、11～20には入り組み状の曲線文が施され、区画帶内と文様の起点に微小のコブが付けられている。6は平口縁の深鉢形土器で、胴部下半を欠損する。口縁と胴部にコブを付けた平行沈線区画帶を巡らせ、その間に横長の眼鏡状の区画文を二段に展開させている。また、区画帶間と区画文内は磨かれ、その他の無文部の器面はざらついている。21・22弧状の沈線を連結させ、縦・横位の区画文を描き、主に連結部にコブを配している。器面は全体的に平滑であるが、部分的なミガキは施されていない。また、22の平行沈線区画帶内には連続刺突が施され、ボタン状のコブが認められる。

同図24～30は平行沈線区画帶内に「ハ」の字状の刺突文を施した土器で、刺突の中央は小さなコブ状に高まる傾向が認められる。24・25・28は縄文帶上に刺突が施され、28の胴部には縄文が充填された連弧状の区画文が認められる。26は密な連続刺突が施された平行沈線区画帶と無文帶を交互に重ね、無文帶は磨かれ弱い光沢を帯びている。27・29の口縁端部には、中央に刻みを加えた小突起が付けられ、平行沈線間には等間隔で刺突が施されている。

図175～1～8は区画文内に連続刺突と縄文、微小のコブが施される土器である。1～3の口縁端部には山形状突起が付けられ、1にはリング状、2にはボタン状の粘土の貼り付けが突起直下に認められる。1・2は口縁端部付近の平行沈線区画内に、3・6では帶状の区画文の交点にコブが施されている。4・5は対向する連弧状や円・楕円形の区画文が施され、コブは区画文間の縄文部

に認められる。7・8は蛇行・垂下する帯状の区画文の頂部にコブが付けられている。

図175-9~20、図176-1~11は区画文内に連続刺突と繩文が施されるが、微小のコブが認められない土器である。図175-9・10・16・18・19は口縁端部を巡る区画帶と主要文様区画帶の間に無文帶が認められ、10では二段の、その他は一段の区画となっている。同図11~15は区画帶が連続し、無文帶が認められない。いずれも胴部上半の広い範囲を文様帶が占め、沈線で区画された帯状の曲線文内には繩文が施されている。また、同図17は胴部の区画帶を挟んだ上下二段に文様を展開している。図176-1・2・4は平行沈線間に主要文様が施され、区画帶が認められない。文様帶の幅は狭く、口縁部付近に位置する。同図5~11は胴部片である。いずれも胴部のくびれ付近に連続刺突が施された平行沈線区画帶が巡り、胴下半から底部にかけて無文となっている。

また、9・11のように横や中央に刻みを加えた大きめのコブを一对貼り付ける傾向が認められる。

図176-12~24は区画文内に連続刺突と微小なコブが施された土器である。12~16は口縁部の平行沈線区画帶間に継長の小さなコブを一对貼り付けている。20は胴部の区画带上に認められるが、弧状の沈線の交点に当たっているため一对とは判断できない。17~20は帯状の区画文の交点に微小のコブを、21は区画文内にボタン状の小さなコブを貼り付けている。22~24は刺突による粘土の高まりをコブ状に残しているもので、厳密にはコブは付けられていないが、文様の交点や中央等のコブが付けられる部分にも意識して刺突が施されている。

図177・178は区画文内に連続刺突のみを施す土器で、丸棒・角棒・櫛歯状の工具等による刺突が認められる。図177は口縁部片である。1~4は口縁端部に山形状の小突起が付けられ、粘土紐によるリング・眼鏡状の加飾が施されている。1・2には棒状工具による連続の、3・4には櫛歯状工具による刻み状の刺突が認められる。5~10は口縁端部の二段の刺突列下に帯状の沈線区画文が施され、7・8には櫛歯状工具による円形の刺突列が認められる。14~17・25は二段の刺突列下に無文帶が巡り、無文帶内は平滑に磨かれ低い。また、13・14には角棒状工具による刺突が施されている。18~24・26・27は口縁端部に一段の刺突列が巡り、直下に平行沈線や入り組んだ平行沈線が重層して施されている。幅の狭い沈線間には、いずれも櫛歯状工具による円形の刺突が施されている。また、器面は無文部も含め全体が平滑に整えられている。同図28~32、図178-1~4は一段の刺突列下に無文帶が巡り、28・29には3個一組、30・32は2個一組の山形状の小突起が付けられている。1~4の無文帶は磨かれ、刺突の施された区画帶より確かに低い。図178-5~16は胴部片で、5・9・11~14は入り組んだ帯状の区画文内に連続刺突を加えている。6~8は重層する平行沈線間に連続刺突を施し、6・7は無文帶を挟んでいる。

図178-15~26はその他の土器である。15~19・21は沈線文が施され、刺突は加えられていない。15・16は入り組んだ帯状の区画文、17~19・21は対向する弧状の沈線が施されている。20・22・23・25・26は胴のくびれ部に刺突を施した平行沈線が巡り、20には「X」の字状、23には一対のボタン状、26には中央に刻みを加えたやや大型のコブが付けられている。24は平口縁の端部に刻みを加えた小突起を配し、無文の胴部に刻みを付けたコブを2個施している。

図179・180は広義の磨消手法による帶状入組文を特徴とする土器である。図179-1～7は平口縁の鉢形土器である。1・2は同一個体と考えられ、沈線区画内に条線と繩文が施されている。口縁端部に1条、胴部に2条の区画帯が巡り、区画帯内には縦位の密で調った条線が施され、縱長の小さなコブが一对で付けられている。区画帯間には沈線区画による帶状の区画文が上下に配され、上の区画内には条痕が、下の区画内には細かな斜行繩文が施されている。3・4は区画帯間に繩文が施された帶状の入組文が横位に展開されている。3は口縁端部と胴部に2条の区画帯が巡り、区画帯内の中央の沈線上に縦長の小さなコブが一对貼り付けられている。5～7には無文帯と繩文帯が交互に配され、繩文の施された帶状の区画文が横位に展開されている。

図179-8～10は山形状の突起が付けられた口縁部片で、8の突起には平行沈線が巡り、9・10は突起の縁に沿って連弧状の沈線区画が施され、沈線下の無文部に9では短い三叉状の、10には三角形のスリットが加えられている。同図11・12は胴部片で、11は胴のくびれ部を巡る繩文帯の下方にも帶状入組文が施されている。12は直線的な胴部で、平行沈線区画内の帶状入組文のみに繩文が施されている。同図13は口縁端部が平坦に整えられ、山形状の小突起の頂部が尖り出している。平行沈線区画部に繩文が施され、胴部は無文となっている。同図14は球形の胴部に帶状入組文が施され、壺形土器の胴部の可能性が高い。

図179-15～26、図180-1～4は帶状入組文の交点の無文部に三叉状の沈線文が描かれている。図179-15は平口縁の鉢形土器で、底部には「ハ」の字状にやや外側に張り出した小さな台が付けられている。胴部の中央付近がくびれ、口縁部が外反する器形となっている。胴のくびれ部を巡る平行沈線区画帯を挟んで、口縁部方向には整った帶状入組文、胴部方向には帶状の区画文を施している。また、帶状入組文の交点の中央には円形の刺突が施され、交点外側の沈線は無文部で分岐し、対向する三叉状の图形となっている。同図16～26は口縁部片である。16・17では帶状入組文の交点から三叉状の沈線が離れ、無文部に独立した沈線文となっている。8・19は平行沈線区画帯内に楕円形の連続刺突が認められる。20・21は口縁部に山形状の突起が付けられ、20には円形の刺突と三叉状の沈線文、21には縁に沿った弧線と突起の中央に向かって尖る三角形のスリットが加えられている。また、いずれも帶状入組文の区画沈線が交点で分岐し、無文部に延びる三叉状の表現となっている。22～24・26は口縁端部に比較的限定されて認められる文様で、22・23は円形の沈線文を、24・26は円・楕円形の刺突を挟んで対向する三叉状の沈線文が描かれている。25は曲線的な帶状入組文の区画沈線が交点で分岐し、三叉状の表現となっている。

図180-5～10は隆帶による区画文上に横長の刺突を加え、連續した眼鏡状の表現となっている。同図11～17は口縁端部の突起で、縁に沿った沈線と中央に向かう山形状のスリットを施している。図180-18、図181は浅鉢・壺形、注口土器を一括した。図180-18は台の付いた浅鉢形土器で、平口縁に沿った平行沈線区画内に中央が突き出た「8」の字状の突起を配し、三叉状の沈線を対向させている。図181-1～6も浅鉢形土器で、いずれも平行沈線区画内に縦長や微小さなコブが貼り付けられている。同図8～31は壺形・注口土器である。8～16は沈線区画による曲線文が描かれ、

コブは文様の交点や区画带上に付けられる傾向にある。同図17～31は無文地上に沈線で区画帯や曲線文が描かれ、沈線間に微小のコブが積極的に付けられる傾向が認められる。

図182～187は4類とした土器である。図182～1は小型の杯、同図2は胴部が球形を呈する小型の土器で、沈線下の胴部には斜行縄文が施されている。同図3は丸底状の胴部下半で、雑な調整の無文地上にランダムな沈線が引かれている。同図4は口縁部が丸く膨らむ深鉢形土器片で、他の4類土器と器形・調整等が異なるためここに分けた。平口縁で、器面は平滑に仕上げられ、全体的に薄く均一の作りとなっている。櫛歯状工具による細く密な条線が、器面全体にランダムに施されている。また、器面全体に炭化物の付着が認められる。

図182～5～8・図183～187は条線や地文だけが施される土器と底部資料のため該当する類が特定できない土器を一括した。

図182～5～8は地文縄文の土器で、出土数は極めて少ない。5・6は斜行縄文が施された土器で、5は口縁端部から内面にかけて丁寧に磨かれ、6は折り返し状の口縁部となっている。7は胴部との境にくびれを持つ平口縁の鉢形土器で、口縁端部は磨かれ胴部には斜行縄文が密に施されている。8は胴部片で、非結束の羽状縄文が横位方向に施されている。

同図9～25は無文の土器である。9～24は深鉢・鉢形土器の口縁部片で、やや内湾気味の器形が多い。器面の調整は比較的雑であるが、胎土に粗砂粒を含み、焼成が堅緻な土器が多い。25は壺形土器の口縁部片と考えられ、他の無文土器と同様に調整は雑である。

図183～184は条線文が施された土器で、出土数は最も多い。櫛歯状工具による細かな条線を一単位とするものが多く、図183に示したように器種は平口縁の深鉢・鉢形土器に限られるようである。また、器面調整が比較的雑な無文地上に施文しており、その他の地文はほとんど認められない。

図184～1は平口縁に沿って、無文部を挟んだ条線を多段に巡らせている。同図2～6は、口縁部を巡る区画文が施されない土器で、2は口縁端部から細かな条線を密に蛇行・垂下させている。

5～6は口縁部に沿って磨かれた無文帯が巡り、その下方から条線文が施されている。3は間隔を空けて斜位に、5は格子目状に、6は密に細かな条線文を垂下させている。4は比較的太く、間隔の空いた条線を蛇行・垂下させている。

同図7は沈線を、8は棒状工具で浅く太い沈線を巡らせ、口縁の無文部と区画している。7には弧状を描く、8には蛇行・垂下する条線が施されている。図183～7は胴部下半に沈線を巡らせ、胴部下の無文部と区画しているもので、沈線上には交差する弧状の条線が認められる。

図183～1・3、図184～9～24、図185は、口縁部に沿って条線を巡らせた後に、条線を垂下させている土器である。口縁を巡る条線は1単位で、口縁端部と平行し、蛇行するものは認められない。蛇行・垂下する条線がほぼ等間隔で施文されるものが多く、図184～9～24のように緩やかな蛇行曲線を描くもの、図185～1～5のように鋸歯状に垂下するもの、同図7～9・11～13のように弧状に交差するもの、同図14～18のように方向を変えて異なった形の条線で幾何学的な图形を描くものが認められる。また、同図19～21・図183～8のように斜位に交差させて格子目状の無文部

を作り出しているもの認められる。

これら条痕文が施される土器については、概ねⅢ群3類土器に比定できるものと考えているが、口縁に沿って条線を巡らせないものや条線が沈線状のものはⅢ群2類に比定される可能性があるためここではすべて4類とした。

図186・187は底部資料である。図186-1～9・14は平底で、比較的大型の土器が多く、底面がナデやケズリで平坦に調整されている。同図11～13、15～18はやや揚げ底ぎみの底部で、比較的小型の土器に多く認められ、底面はナデ・ケズリで調整されている。図187-1～5は揚げ底状で外縁が張り出し、小さな台状となる。Ⅲ群3類土器の深鉢・鉢形土器に比較的多く認められ、無文のものが多い。同図6～12は「ハ」の字状に開く台で、小型の台は壺形土器に多く認められる。また、同図13は底面の中央を円形に削り込み、内を台状として高めているもので、注口土器の底部に類例が認められる。

同図15～17は底面の調整が明瞭な平底の底部で、縁から円を描くように再調整が加えられている。同図18は禾本科植物の茎と考えられる圧痕が、同図19～22には木葉の圧痕が認められる。同図23～25網代編圧痕が認められ、23はかなり粗い目、24・25はきめが細かく整った編み方となっている。また、24・25の周縁はドーナツ状に磨り消されている。

IV群土器(図188～191)

図188・189-2～7は1類とした土器で、IV群土器の中では出土数が多い。全体の器形が分かる資料はないが、器種には鉢・浅鉢・壺・注口土器等が認められる。にぶい褐色系の色調で、胎土に細粒砂を含み、焼成が良好な土器が多い。

図188-1～12・14～28は鉢形土器と考えられ、器面に炭化物の付着が認められる土器が多い。器形には1～4のように口縁部が直線的に外傾するもの、14～17のように胴部から口縁に向かって緩やかに湾曲するもの、18のように口縁部が強く内湾するもの、5・24のように口縁部が外折するものが認められる。また、三叉文・羊歯状文等の沈線文を主要文様とし、平行沈線によって区画された無文の口縁部付近に施文する傾向が認められる。

1～8は円形の刺突を挟んで対向する三叉文を特徴とする。1～4・6～8は無文の口縁部に横長の三叉文を交互に施し、沈線下の胴部にはいずれも横位回転の斜行繩文が施され、7には結節繩の回転文も認められる。また、いずれも口縁部には山形状の小突起が付けられている。5は繩文が施された平行沈線区画帯間に無文部に、横長の三叉文を巡らせている。

9は口縁に平行した入組状の沈線、胴部に斜行繩文と結節繩の回転文を施している。10は口縁端部に開く弧線とその間に三角形のスリットを、11は対向した弧線間に菱形状の沈線を施している。12には弧状や入り組み状の曲線文が描かれている。

14～22は羊歯状文を特徴とする土器で、いずれも口縁端部には刻みが加えられている。14～16には沈線区画した、17～22には沈線と刺突で羊歯状文を表現している。14は胴部にも入組状の沈線区画文が、横位に巡らされている。いずれも胴部には横位回転の斜行繩文が施され、14・15・17・20

には結節縄の横位回転文が加えられている。

23~28は平行沈線間に刻みや刺突を施しているもので、23・26のように2段に連続するものと24・25のように上下交互に一定の幅をもって施されるものが認められる。また、26~28には入り組み状の結節縄の横位回転文が認められる。

同図29~32は浅鉢形土器片と考えられ、口縁端部には刻みと沈線によって一対の装饰小突起が付けられている。29・30は平行沈線と刻みを加えた平行沈線を巡らせており、縄文施文部には結節縄の回転文が認められる。また、口縁端部内面にも刻みを加えた平行沈線が巡っている。31も平行沈線で区画した口縁端部の内・外間に、沈線による曲線的な装饰が施されている。32は口縁部が強く内湾する器形で、湾曲した口縁に羊歯状文を巡らせ、平行沈線下の胴部には沈線区画の大柄な曲線图形を描き、縄文部と無文部を作り出している。

図188-33~36・図189-2は壺形土器と考えられる。図188-33は肩部片で、無文の平行沈線区画の縄文帯に入り組み状の曲線文を描いている。34・35は短い口縁が上方に作り出されている広口壺形土器片で、無文の肩部付近に沈線区画の羊歯状文が描かれ、比較的丁寧に磨かれている。36も短い口縁が上方につまみ出されている。無文で形状は注口土器の肩部に近い。

図189-3~7は注口土器である。3は頸部を巡る沈線と注口部に沿った沈線とスリットが施される以外は無文となっている。胴部は球形を呈し、底部は円形に削り込まれ台状に作り出されている。4は口縁部片で、無文地上に刻みを加えた平行沈線と羊歯状の沈線文を施している。5~7は胴部片で、羊歯状と弧状の曲線图形が沈線で描かれている。いずれも器面は丁寧に磨かれ、にぶい光沢を帯びている。

図189-1・8~27・図190-1~18は2類土器である。器種には鉢・浅鉢・壺・注口・香炉形土器等がある。胎土には細~粗粒砂を含むが焼成は良好な土器が、色調ではにぶい褐色~橙色系のやや明るい土器が多い。

図189-8~14・16は鉢形土器片で、8・13は胴部上半が内に屈折する、9は口縁部が外折する、10・11が直線的に外傾する、14が緩やかに内湾する、12が強く内湾する器形をとる。口縁端部に刻みを加えるものが多く、8~14は口縁部の平行沈線間に連続刺突を巡らす。8~13の胴部には、斜行縄文が施され、9~12には横位の結節縄の回転文も認められる。また、14の胴部には沈線区画内に縄文を施した雲形文が認められる。16は平行沈線間にきめの細かい刻みを巡らせている。

同図15・18~22・24も鉢形土器片で、無文の口縁部に巡る平行沈線を特徴とする。21・24は口縁部が「く」の字状に外折する器形をとる。15の胴部には施文方向を変えた斜行縄文を羽状風に施している。また、19・24の胴部には斜行縄文と結節縄の回転文が認められる。22は胴部片で、沈線区画内に縄文が施された曲線的な雲形文を描いている。無文部は深く削られ、縄文部が立体的に表現されている。

同図1・17は壺形土器で、いずれも頸部を巡る平行沈線間に連続刺突が施されている。1は無文地で、胴部上半が最も膨らみ、17の胴部には斜行縄文が施されている。同図23・25・26は胴部が丸

みを帯びた浅鉢形土器である。いずれも口縁に沿った平行沈線間に連続刺突が巡り、胴部には曲線的な雲形図形が施されている。図形内の縄文は、25が密に、23・26はまばらに施されている。同図27は注口土器の肩部片と考えられる。最張部には中央に刻みを加えた山形状の小突起が付けられ、それに沿って刻みが施された平行沈線が巡らされている。肩部全面に曲線図形の雲形が施され、図形内には縄文が充填され、無文部は磨かれている。

図190-1~9は胴部が直線的に外傾する浅鉢形土器で、口縁端部には小さな装飾突起がつけられている。1~6は口縁端部に沿って平行沈線が巡り、胴部には大柄な雲形の曲線図形が描かれ、縄文が施されている。7の雲形図形は無文であるが立体的に表現され、器面は磨かれている。8・9は内面にも平行沈線と縄文が施されている。

同図10は注口土器片と考えられるが小片のため詳細は不明である。同図11はほぼ完全形の香炉形土器である。そろばん玉状の胴部に、「ハ」の字状に聞く無文の台が付けられている。口縁部には透かしが入れられ、胴部上半には連続刺突が加えられた平行沈線と縄文が施された雲形の図形が描かれている。また、胴最張部には装飾把手が付けられ、刻みを加えた突起が巡らされている。平行沈線で区画された胴部下半には筋の細かな斜行縄文が施され、台との境にリング状の低い帯が巡らされている。無文の台も含め、器面は丁寧に磨かれ、部分的であるが外面に赤色顔料の付着が認められる。

同図12~14は無文地上に平行沈線と沈線で眼鏡状の図形を、同図15・16は胴部のくびれ部に多条の平行沈線を巡らせている。また、12の沈線間には部分的に赤色顔料の付着が認められる。同図17は屈折する口縁部を無文とし、胴部に斜行縄文を施している。同図18は無文の口縁端部に粘土帯を貼り付け、胴部と同一の縄文施文後に細かな波状口縁を作り出している。これら土器は橙色系の明るい色調で、炭化物の付着したものは認められない。また、胎土に微量の雲母片を含み、焼成も良好である。

図190~19~26、図191は3類土器である。地文だけが施された土器で、出土数は少ない。図190~19~26は斜行縄文と結節縄の回転文が施された土器である。24・25は球状の器形から壺形土器または蓋の破片とも考えられ、その他は鉢形土器片である。いずれにも横走する結節縄の回転文が施され、19~24はリング状、25・26は細かな波状を呈する。

図191~1~9は網目状の撚糸文が施されている。平口縁の深鉢形土器で、口縁部が緩く内湾気味に傾くものが多い。全体的に網目は粗く、形が崩れているものが多い。また、撚糸自体も比較的大い。同図10~13には撚糸文が施され、11~13は同一個体である。きめの細かな撚糸文が施され、色調は橙色を呈し、焼成は堅緻である。

同図14~17は斜行縄文が施された土器で、14は小型の鉢形土器である。平口縁で、やや底部が揚げ底状を呈している。15~17はいずれも平口縁部片で、15の端部は丸く尖り出している。16・17の端部は平坦に磨かれ、細かな条の斜行縄文が比較的密に施されている。色調は暗褐色系で、焼成は比較的堅緻である。

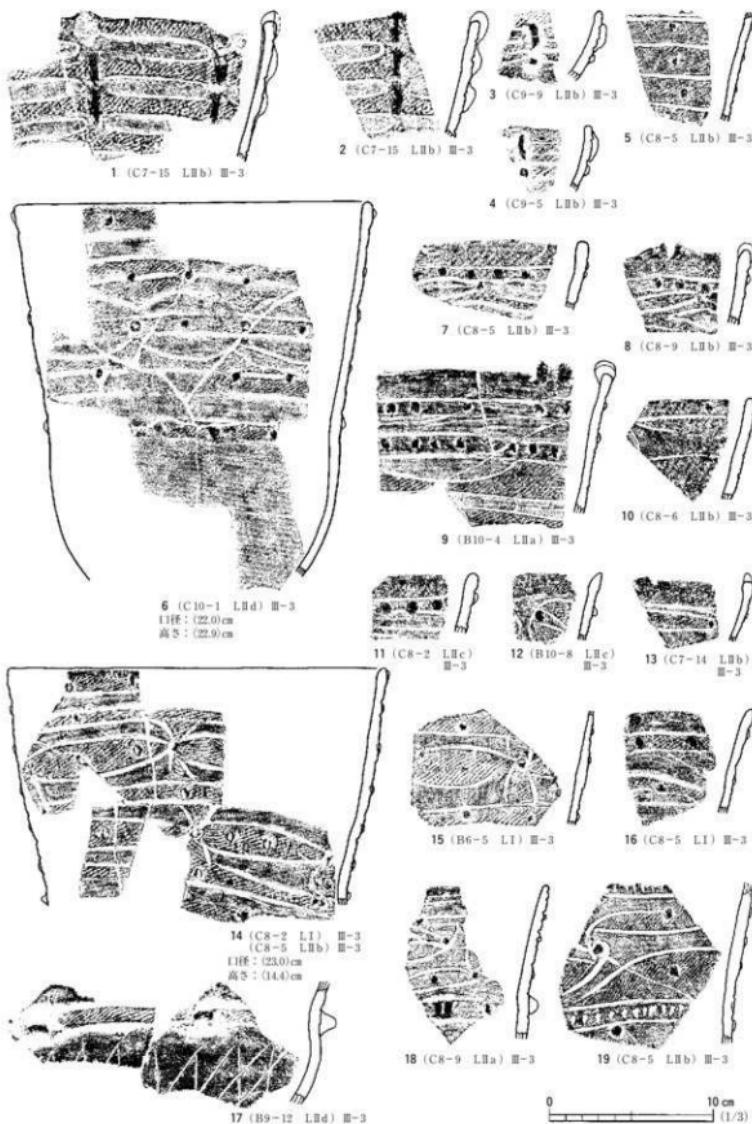
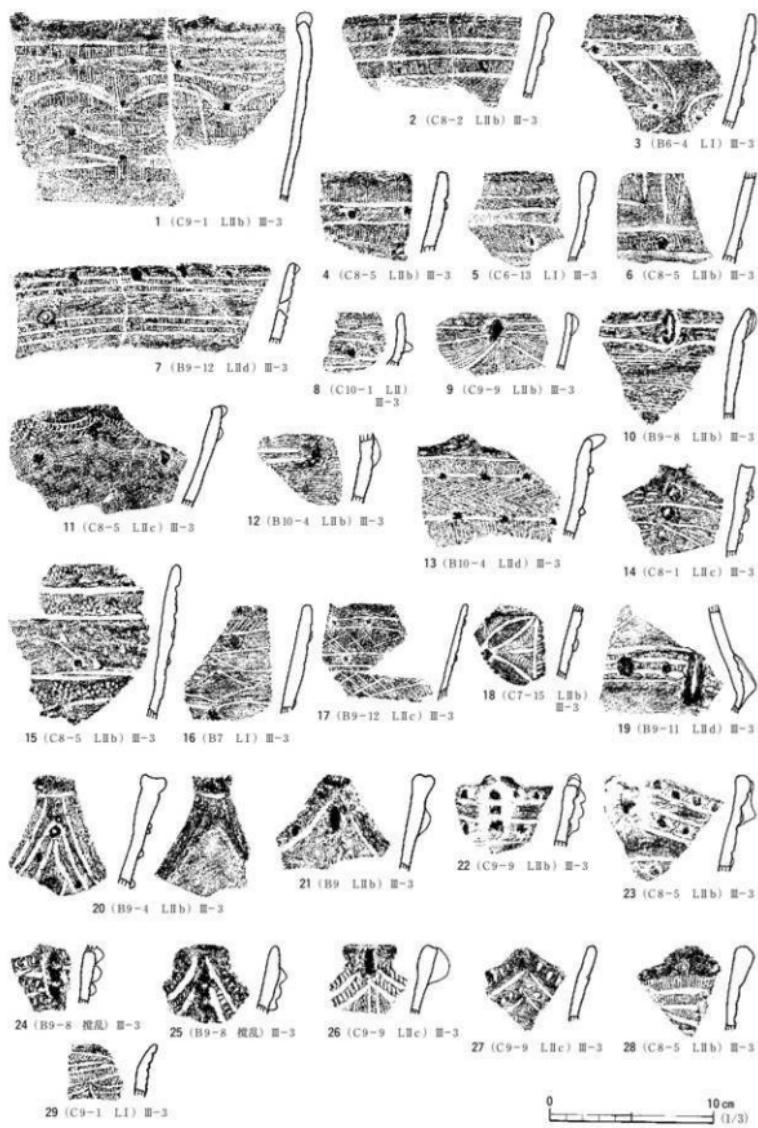


図172 遺構外出土器(10)



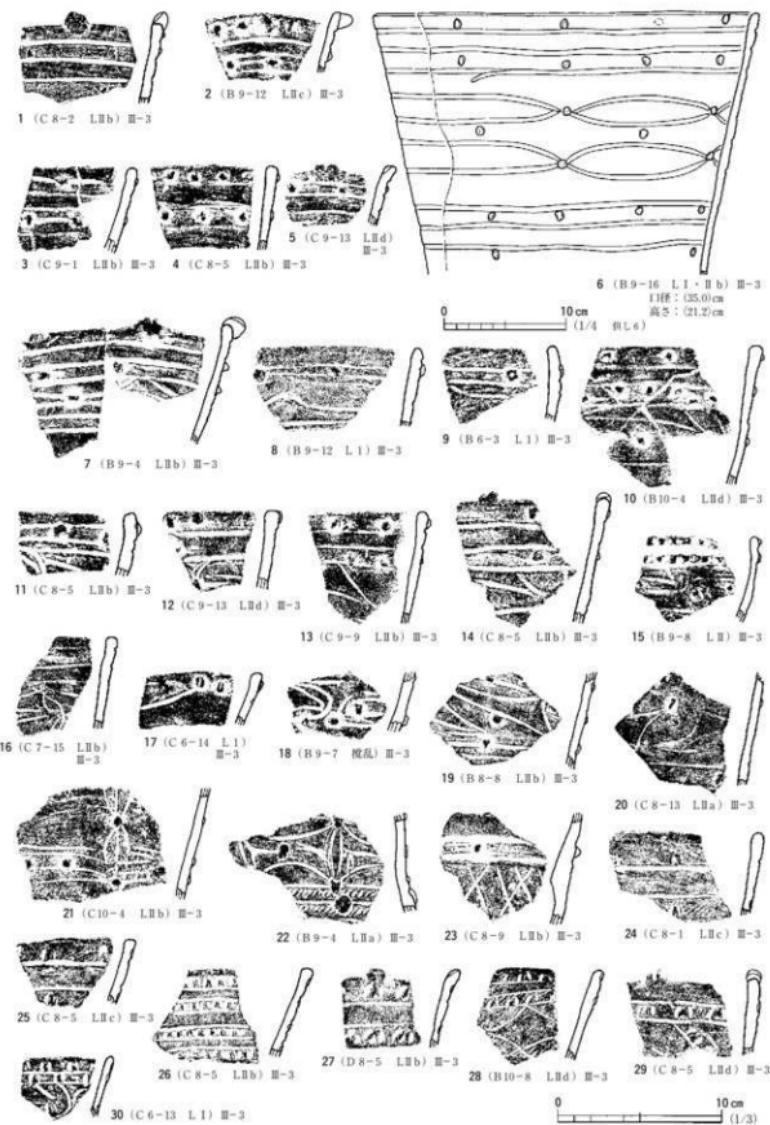


図174 遺構外出土器(12)

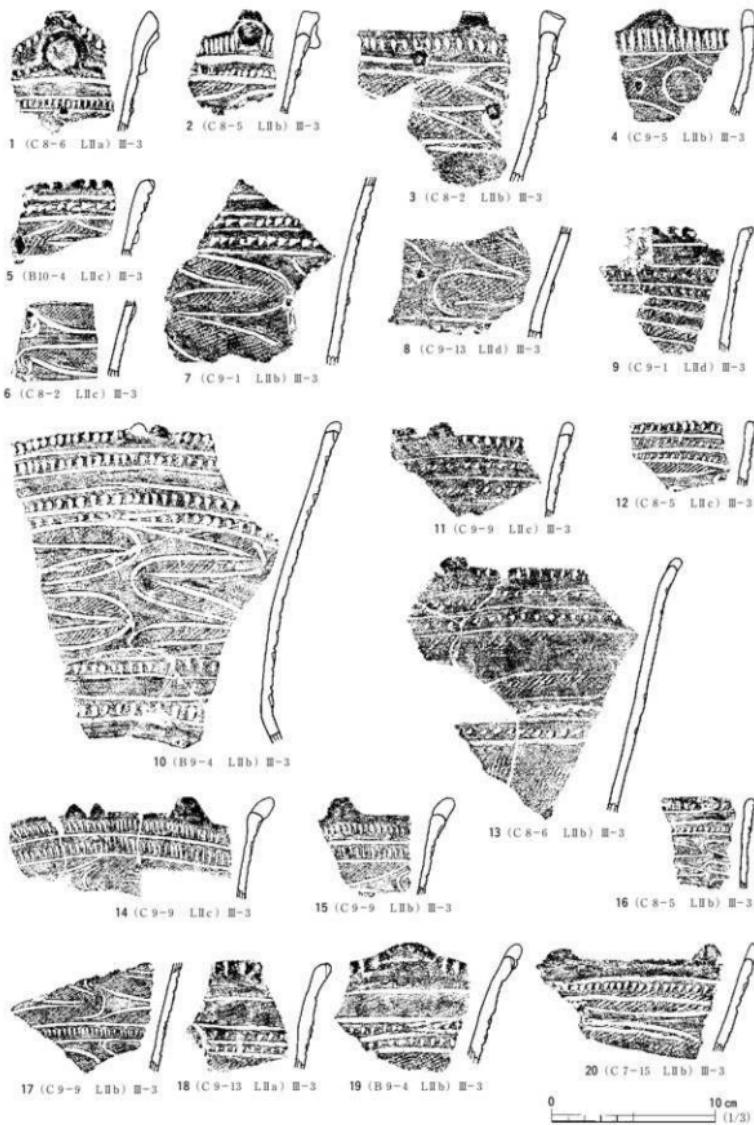


図175 遺構外出土土器(13)



図176 遺構外出土器(14)

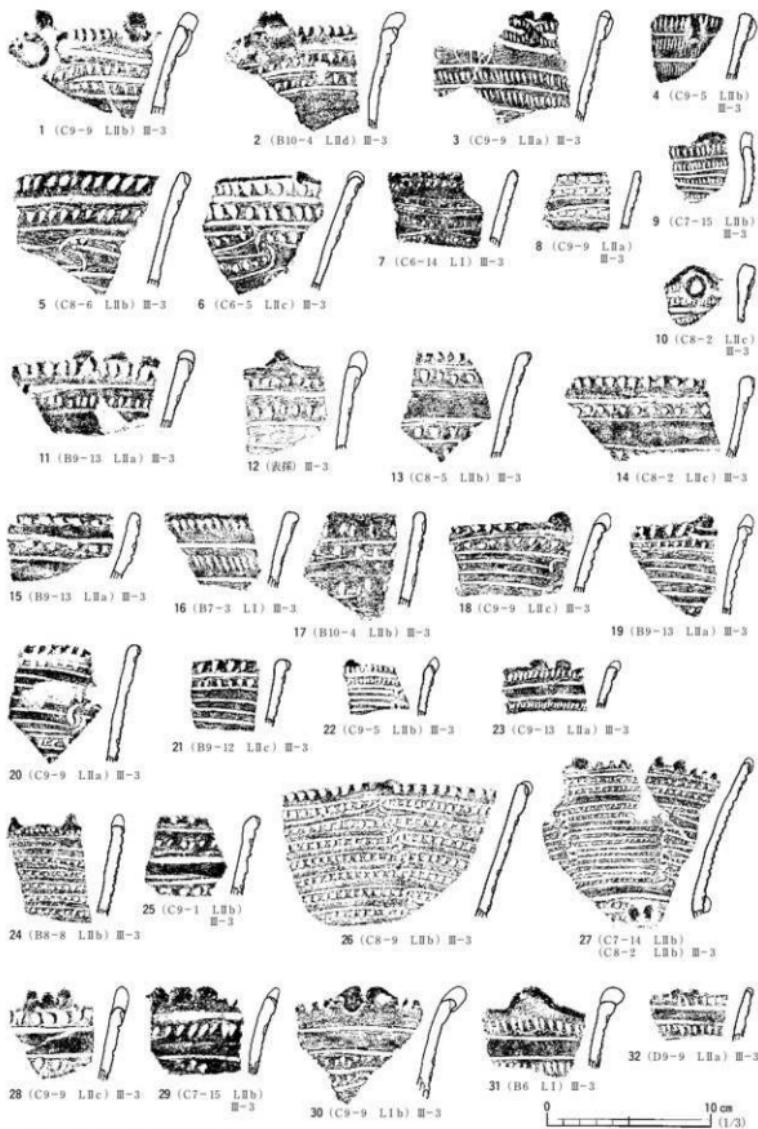


図177 遺構外出土土器(15)



図178 遺構外出土器(16)

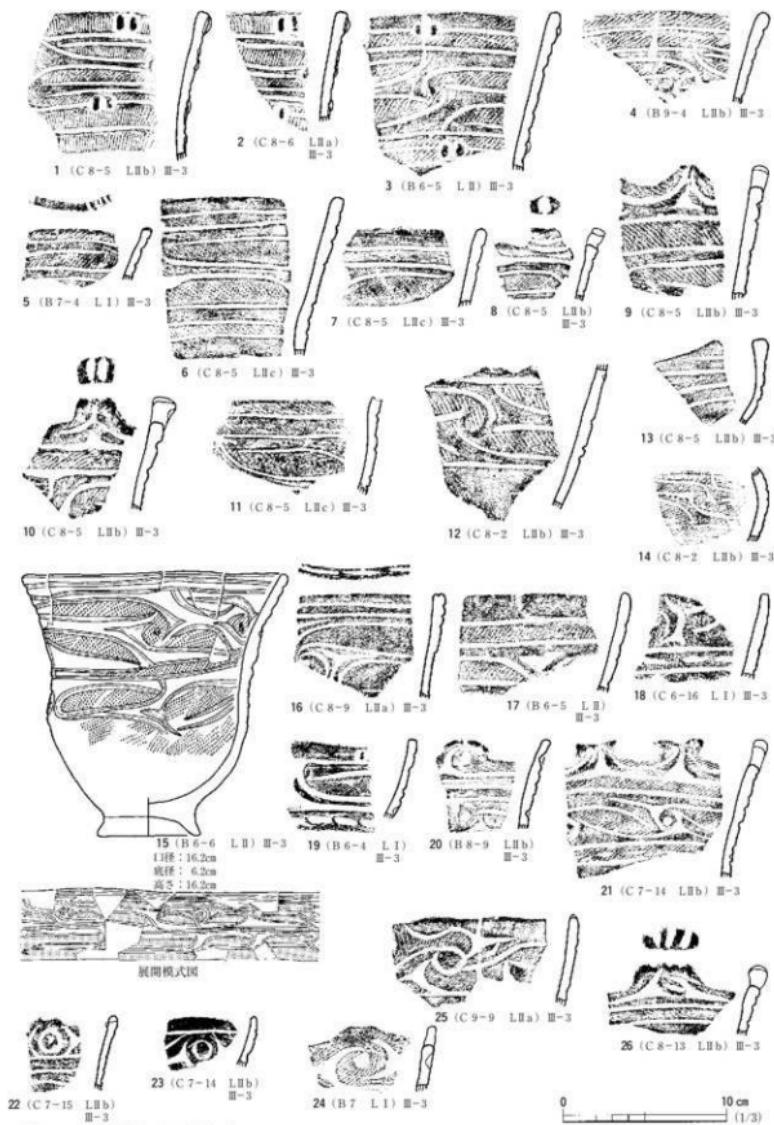


図179 造構外出土土器(17)

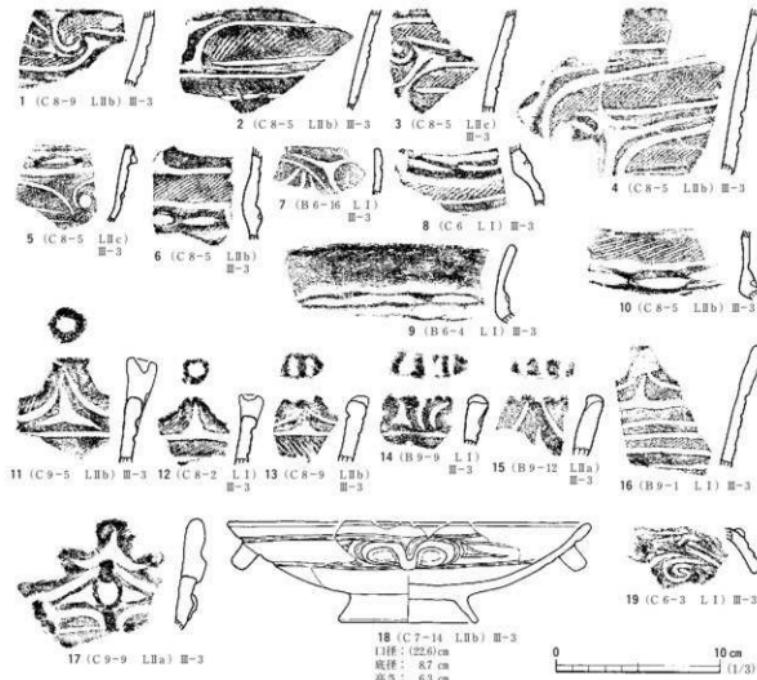
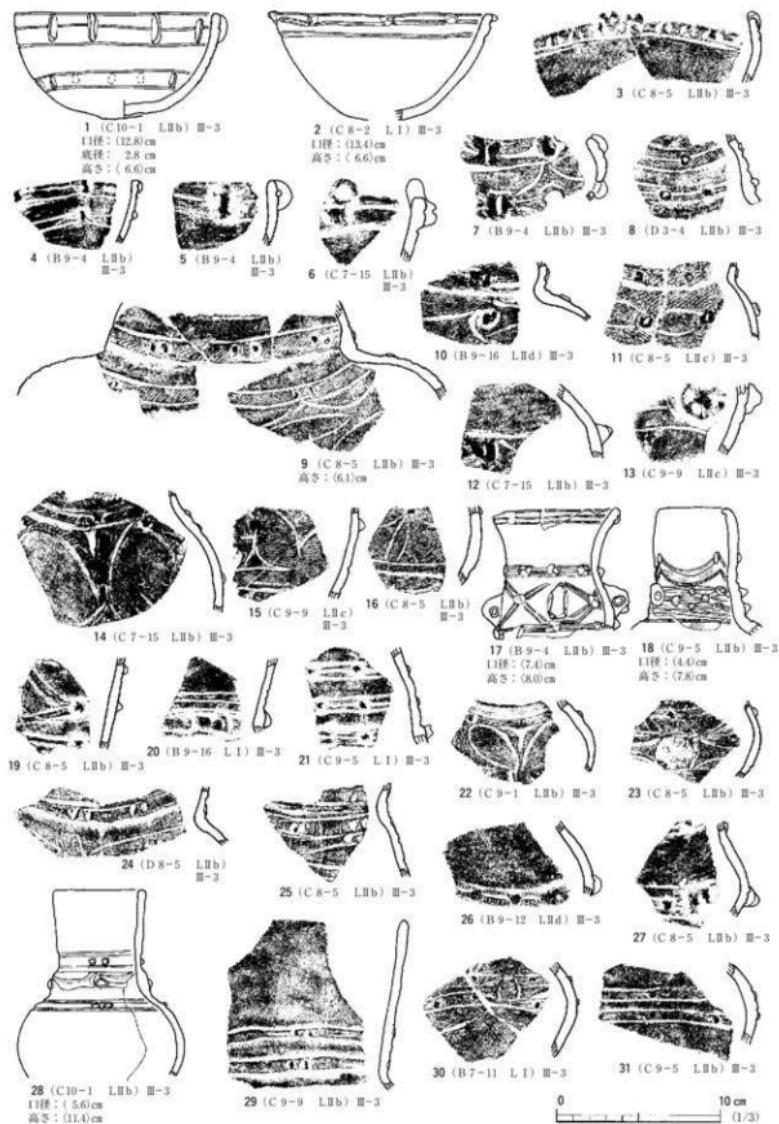


図180 遺構外出土器(18)



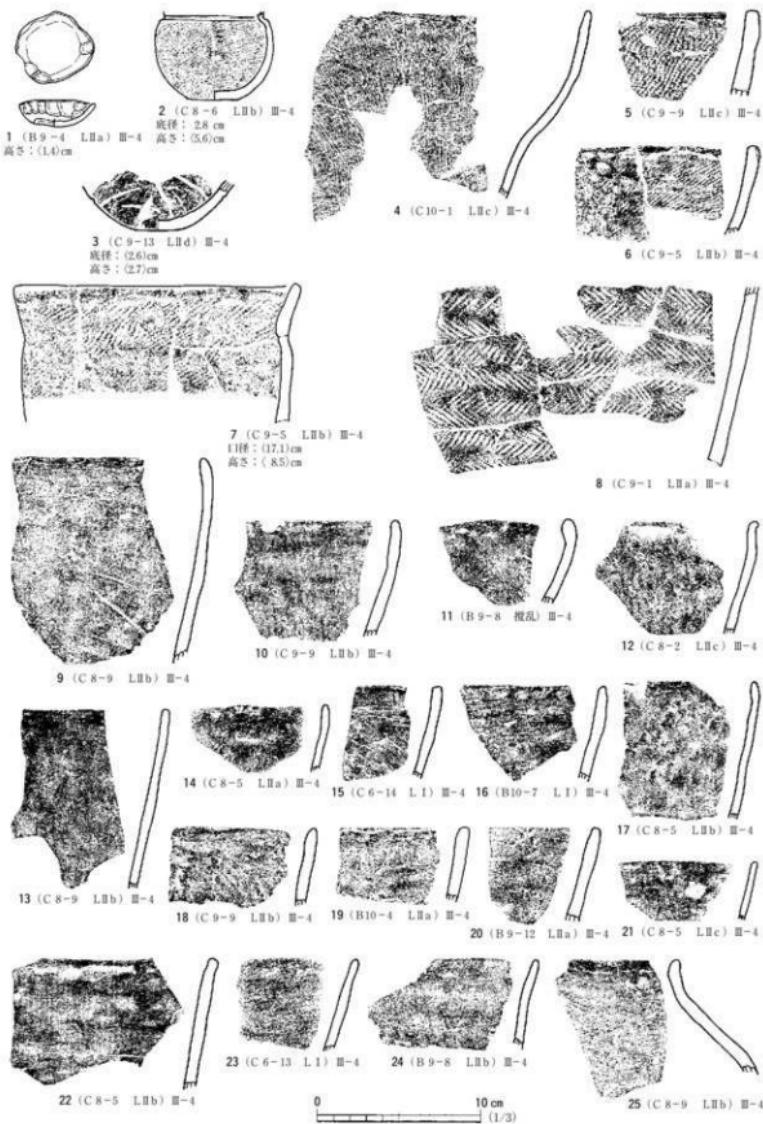


図182 遺構外出土器(20)

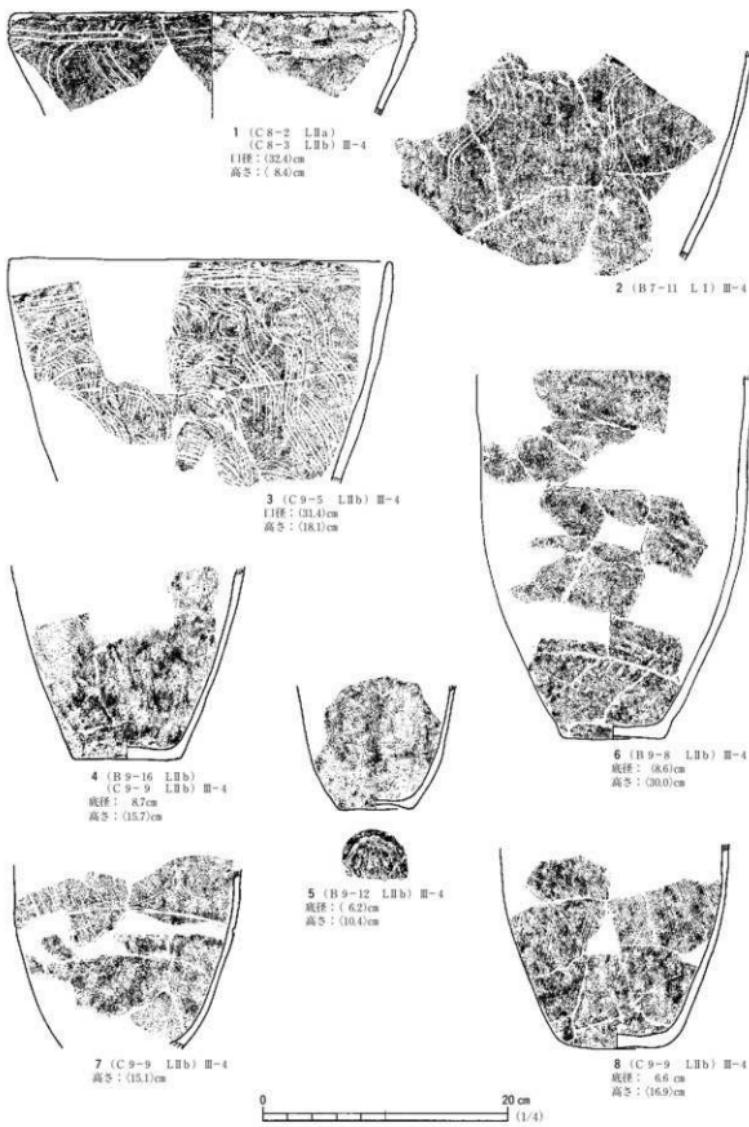


図183 造構外出土土器(21)

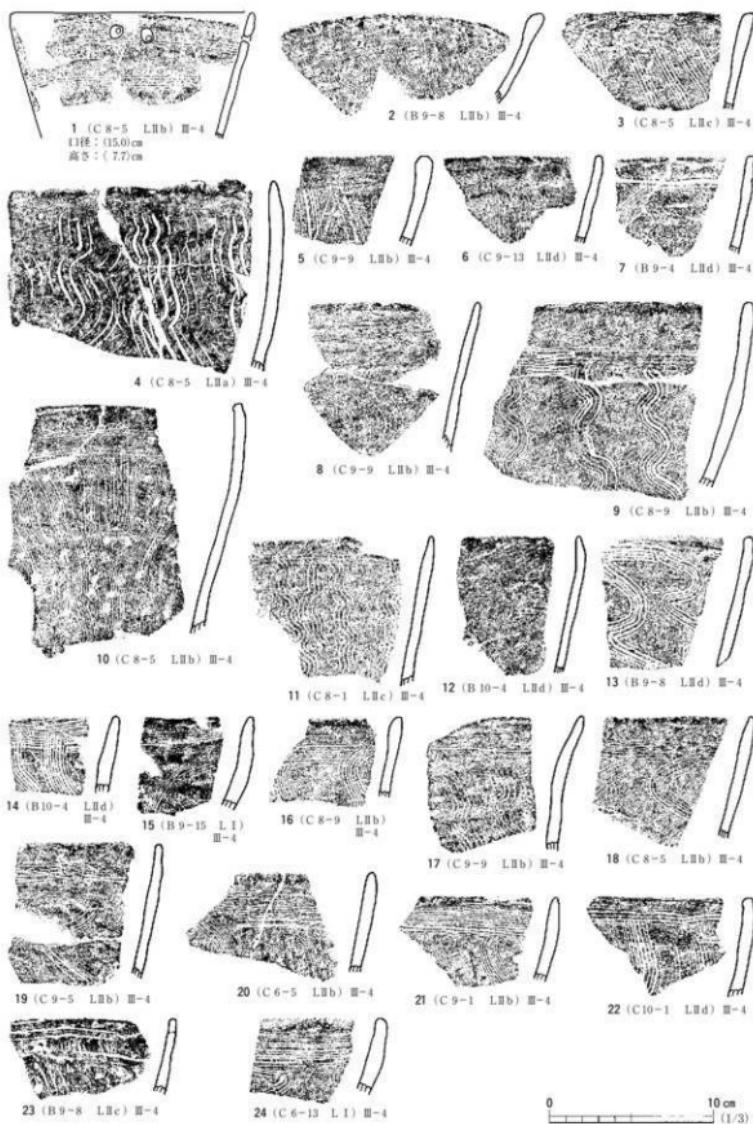
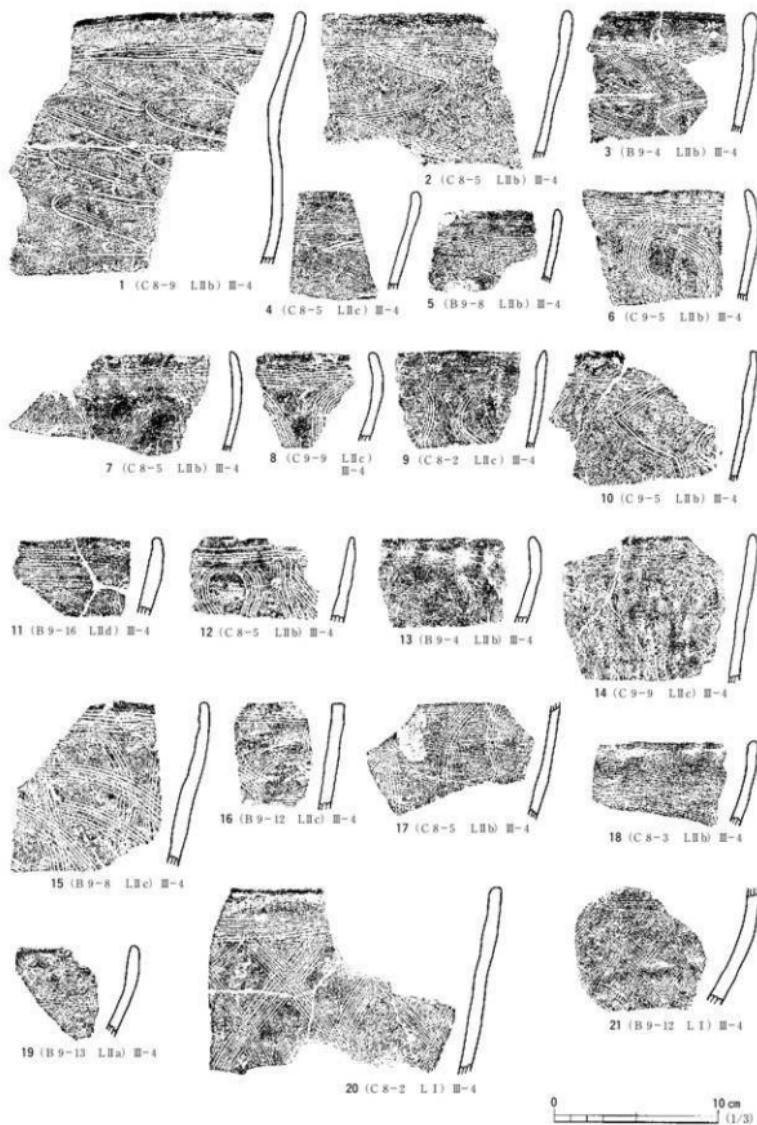


図184 遺構外出土器(22)



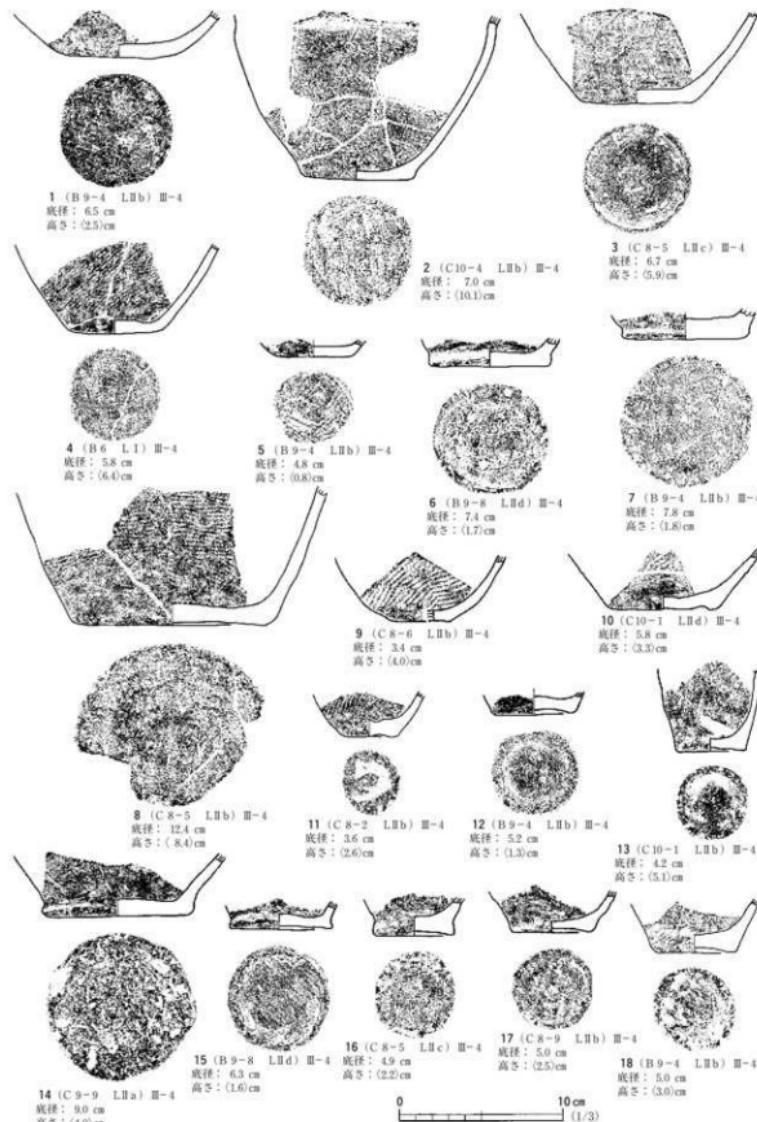


図186 遺構外出土器(24)

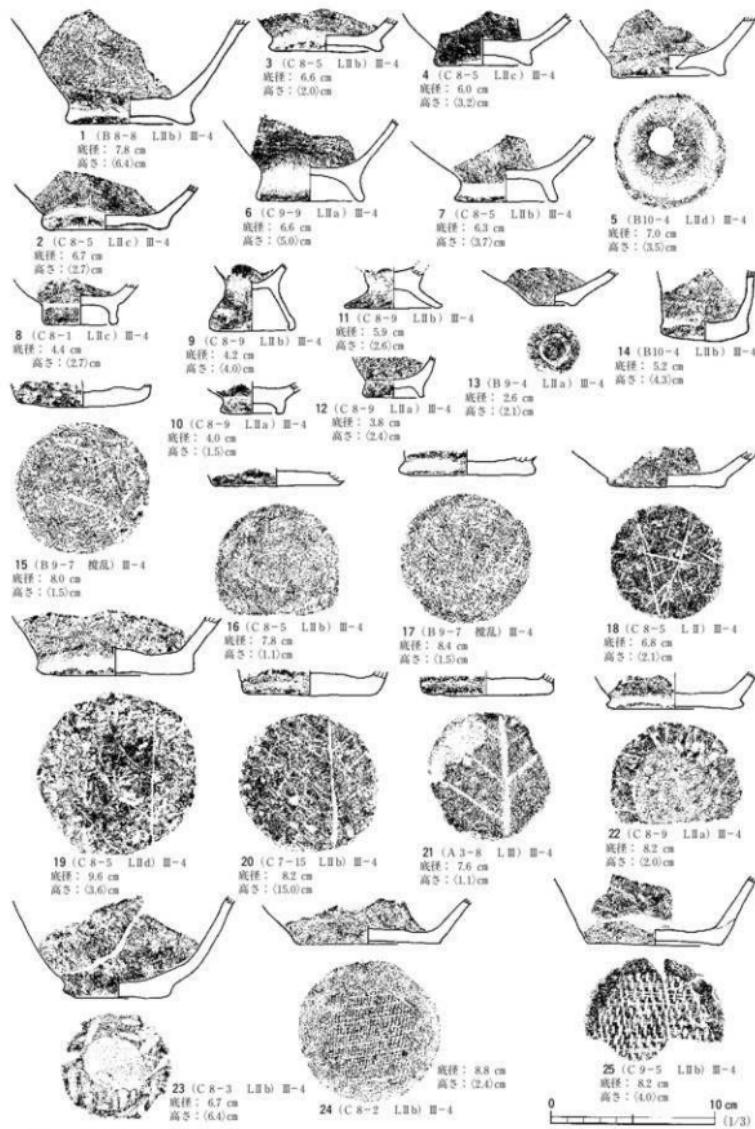


図187 遺構外出土土器(25)



図188 遺構外出土器(26)

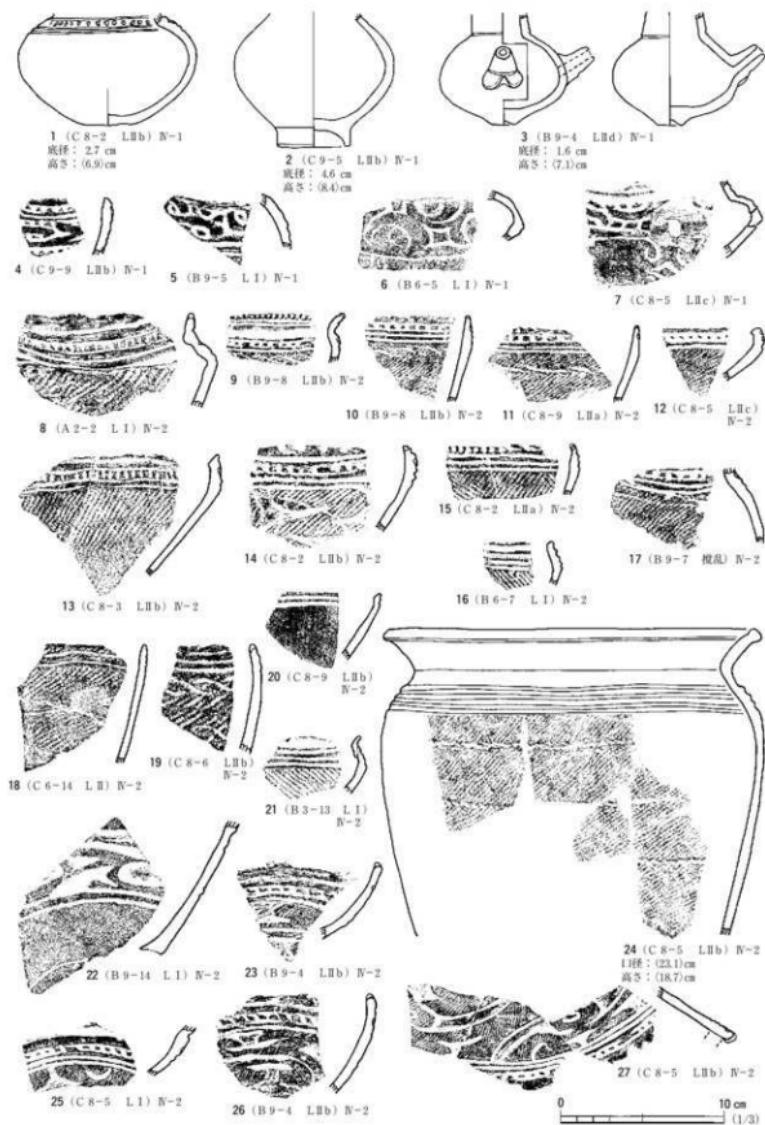


図189 遺構外出土土器(27)



図190 遺構外出土器(28)

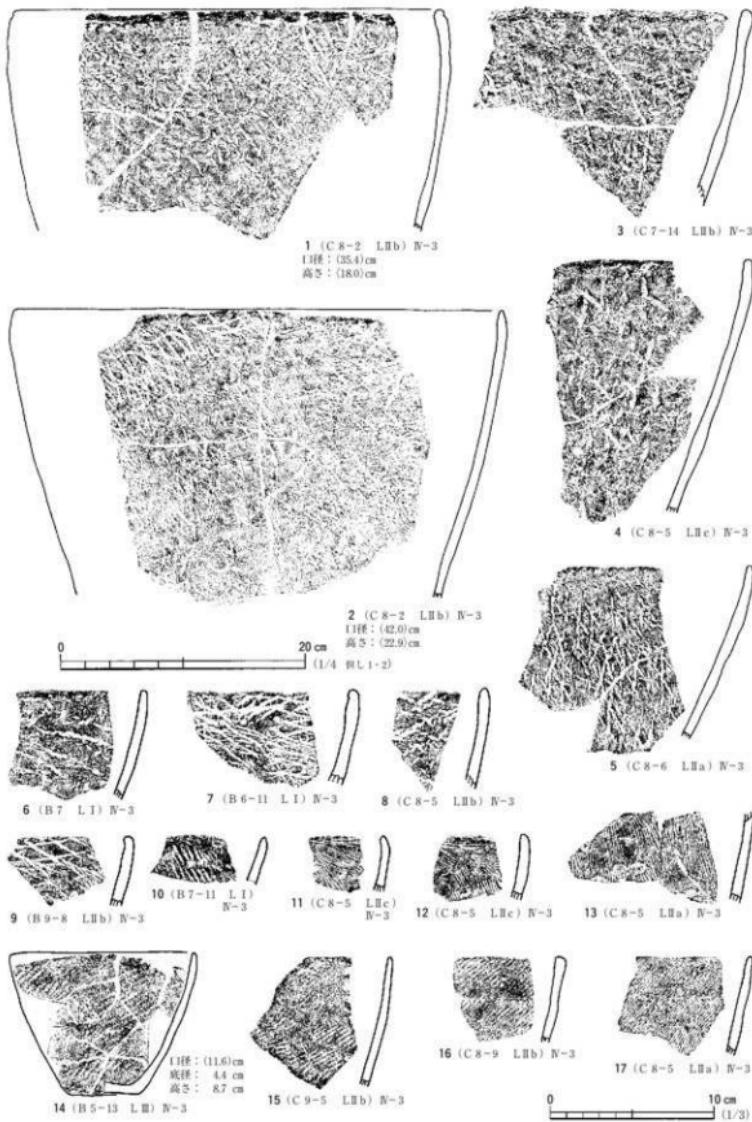


図191 遺構外出土土器(29)

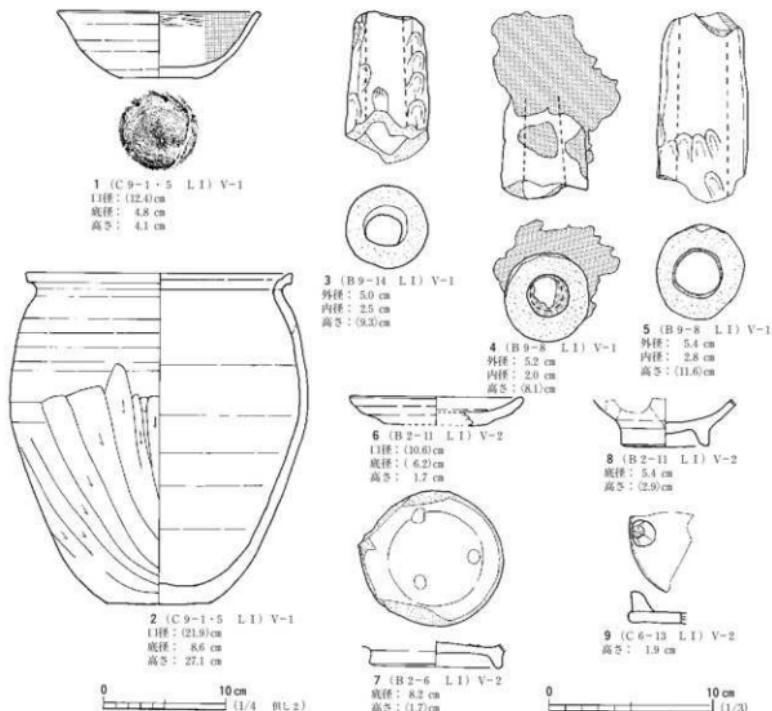


図192 遺構外出土器(30)

V群土器(図192)

出土数は極めて少ない。1～5はⅠ類としたものである。1はロクロ成形の土師器杯で、底面に回転糸切り痕を残し、内面にはヘラミガキ調整後、黒色処理が施されている。2はロクロ成形の土師器甕で、口縁部は「く」の字状に強く外折する。体部上半にロクロ成形痕を残し、下半には縦位のヘラケズリが施されている。3～5は羽口で、いずれも欠損品である。本来的には土製品であるが、帰属時期が本類であることからここに含めた。いずれも外面は主にナデで整えられているが、一部に指オサエの痕跡を残している。また、4には溶着滓が認められる。

6～9はⅡ類としたものである。6はロクロ成形の土師質土器で、底面に回転糸切り痕を僅かに残す。内面に微量の黒色物質の付着が認められることから灯明皿と考えられる。7・8は陶器碗の底部片で、7には灰釉が、8には鉄釉が施されている。9は窯道具である。色調は灰褐色を呈し、胎土に粗粒砂を含み、磁器状に堅く締まっている。

(山岸)

土 製 品(図193~195)

土 面(図193-1・2)

1の形状は楕円形をなしている。鼻・眉は隆帯で表現されている。鼻は上向きで、鼻筋はまっすぐである。鼻孔は刺突により2箇所深く空けられている。眉は頬に向かって垂れ下がり、右側は欠損している。眉の上の粘土紐の貼り付けは額もしくは頭髪を表現したものか判然としない。目は鼻の側面に刺突により2箇所空けられていた。鼻の下は長く、縦方向の細長い線が施されている。口は穿孔され貫通している。内面は湾曲している。

2は欠損品で、鼻・眉・目の一部が遺存しているものである。鼻と眉は連続する隆帯によって表現されている。鼻筋はまっすぐで、粘土紐を付け足して小鼻としている。鼻孔は二筋の沈線で表現している。眉には刻目がなされている。目は両眼とも穿孔され貫通している。頬と眉間に弧線が描かれている。内面は平坦で、横方向のナデが施されている。

土 偶(図193-3~7、図194、図195-1、写真89)

土偶はすべて欠損品であり、胴部の破片が多い。柱状土偶は図194-1・2のみで、他はすべて板状土偶である。胴部の破片のものは、性別を確認できない図194-7を除き、すべて女性である。

図193-3は胴部の破片である。胸部中央から腹部にかけて隆帯が巡り、その隆帯に沿って連続刺突文が描かれている。隆帯の左右には、沈線により弧線文が描かれている。下腹部は膨らみ、横方向に平行沈線文が巡っている。背中には2条の平行沈線により方形文が描かれ、臀部には縦方向に平行沈線文が巡っている。股間には性器が表現されている。

図193-4~7は胸部の破片である。4は胸部には中央から肩にかけて「Y」字状に隆帯が巡っている。隆帯には縄文に連続刺突文を加え、側面のミガキ・沈線文の施文を行っている。胸部は丁寧にミガキが施され、右側の乳房が欠損している。腹部には縄文地に2条の平行沈線文を加え、帶状に巡らせている。背中の中央には地文を区画するように沈線文が「V」字状に、縄文地にも1条の沈線文が加えられている。それ以外は丁寧にミガキが施されている。

5・6は全体にわたり欠損が著しいものである。胸部の上方には2条の沈線文間に1列の連続刺突文が帶状に巡り、背中にまで連続する。連続刺突文は背中では2列となっている。左右の乳房は欠損し、痕跡でしか確認できない。6は左胸の破片である。乳房は痕跡でしか確認できない。表面・側面ともミガキが施されている。7は胸部の破片で、左右の乳房が確認できる。腹部には横・斜方向に、背中には縦・横方向に沈線文が描かれている。

図194-1は胴部と右脚部の破片である。各部位を沈線によって表現している。腹部・大腿部・背中・臀部に縄文を施す。乳房は左側のみが遺存し、腹部は膨らんでいる。臀部は沈線により分割されているが、性器を表現している可能性もある。脚部は大腿部と脛部が分割して作られ接合されている。爪先は欠損している。

図194-2は手首と脚部の破片である。脚部は外側に湾曲し、手のひらは膝に添えられている。

あたかも、四股を踏むような姿勢となっている。指は明瞭に表現され4本までは確認でき、手の甲には縄文が施されている。施文部以外はナデが施されている。脚部は足首から下は分割して作り、接合している。足の指は刻目のみの簡略な表現である。

図194-3は胴部の破片である。3は縄文を施文後、各部位を沈線によって表現している。胸部・背中・両脇には沈線により「U」字状文が描かれ、いずれも沈線文内の縄文を擦り消している。胸部・背中のものは乳房、両脇のものは腕を表現している。このことから背中ではなく、表裏面とも胸・腹部を表現している。腹部は沈線で逆台形状に表現され、表面では膨み、裏面では沈線により性器を表現している。

図194-5は腹部の破片である。腹部は膨らみ、全面にわたりナデが施されている。図194-4・6は脚部の破片である。4は全面にわたりナデが施され、大足である。6の右側面には破線状に沈線文が描かれている。足の指は2本まで確認できるが、他は欠損している。図194-7は胴部の破片であるが、身体の表現が簡略化されているものである。図194-8は左腕と脚部が欠損している。胸部には乳房の膨らみが確認できる以外、身体の表現は簡略化されている。頭部や腕の表現も粘土を摘み出した状態で終えている。図195-1は脚部の破片と推定している。全面にナデを施し、裏面は平坦に仕上げられている。

その他の土製品(図195-2~10, 写真89)

2はスタンプ状土製品で、全体的に剥離が著しいものである。円柱状のつまみが、肉厚な楕円形に取り付いている。

3は土製品で、両端部が欠損している。表裏面から右側面にかけて隆帯が巡っている。4・5は土鍤である。4の形状は長方形の四隅が突出し、全面にわたり剥離が著しい。表面には凹線を十字状に巡らせている。5の形状は長楕円形をなす。両端部に穿孔がなされ、貫通している。中央部には2条の凹線が、両側面には1条の凹線が巡っている。

6は髪飾りである。欠損箇所が多く、全体の形状は不明である。表面には沈線により弧線文が描出されている。胎土には長石が多量含まれていた。

7~9は耳栓である。7は環状をなし、側面の抉りが強いものである。8は表裏面の形状が異なるものである。表面は中央部に円孔が穿孔され、裏面は環状となっている。表面には入組帶状文に弧線文が配置され、弧線文内にはさらに弧線文や刻目が浮彫状に描かれていた。さらに朱彩もなされ、9は環状のものの破片である。表面には円文と弧線文が浮彫状に描かれている。

10・11は土版である。10は全面にわたり剥離が著しく、胎土に砂粒が多く含まれる。表裏面には中央に縱方向の沈線を引き、その左右に二・三重の弧線文が描かれている。

11の表裏面には、弧線文と円文を描き、円文を貫くように中央に縱方向の沈線を引いている。表面の先端には2箇所の穿孔がなされているが、貫通はしていない。



圖193 遺構外出土土製品(1)

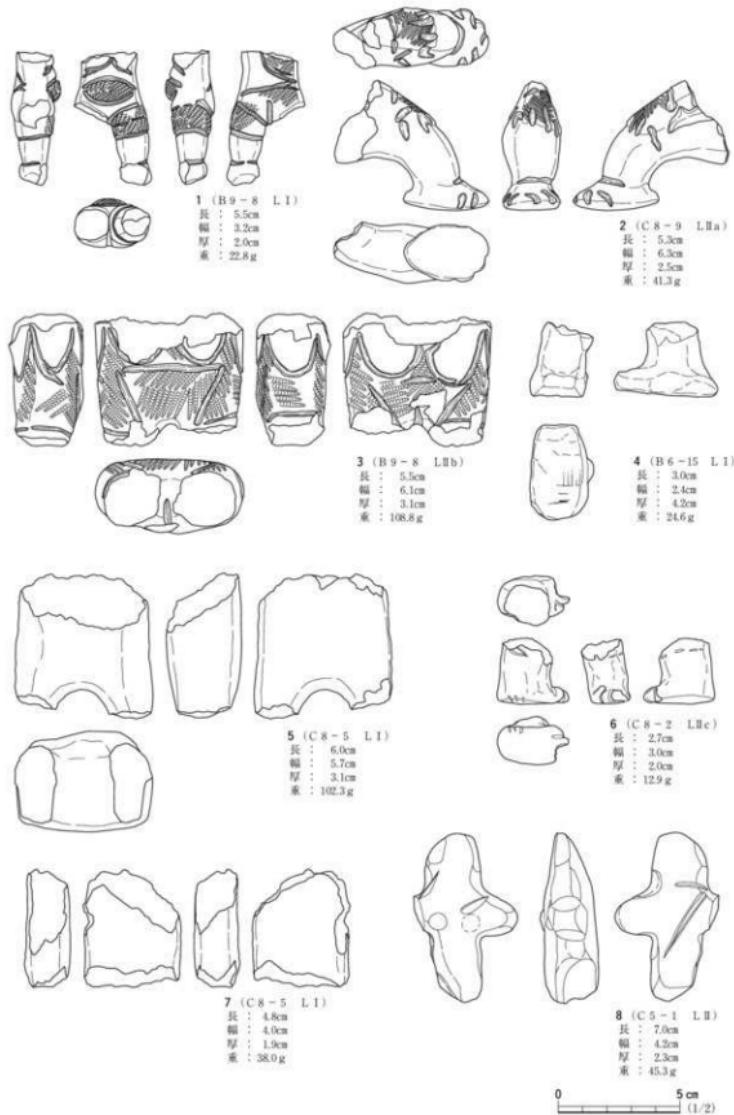


図194 遺構外出土土製品(2)

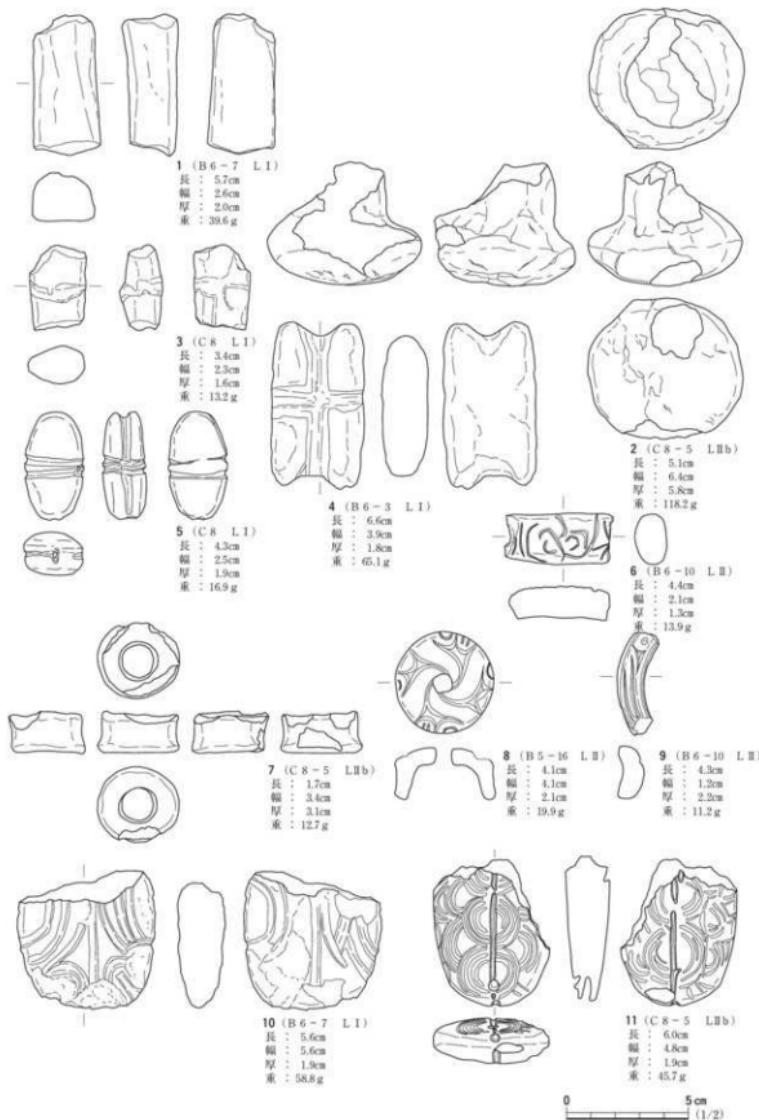


図195 遺構外出土土製品(3)

石 器(図196~213)

出土した石器には石鎌・石槍・石錐・石匙・不定形石器・打製石斧・磨製石斧・石核・異形石器・磨石等がある。以下、器種ごとにその特徴を記述する。

石 鎌(図196~206)

石鎌基部の形態からみると無茎鎌よりも、有茎鎌の出土量が多い。石質では珪質頁岩が多く、頁岩が次ぐ。

図196~198・図199-1~8は無茎鎌である。その石質をみてみると、有茎鎌と比べると珪質頁岩の占める割合が39%と少ない。さらに、石質が多様である。

図196-1~14は、基部の抉りが深いもので、側縁部が長さと幅がほぼ等しい正三角形をなしている。概ね、細かい調整剥離は側縁部に限定され、その他にまでには及んでいない。このことから、薄い剥片を素材として利用している。4・8の中央部が肉厚で、厚さを減じていないものである。6・7・14の裏面には素材の剥離面が残る。14の基部先端は垂直気味に張り出す。9には表裏面ともに素材の剥離面を大きく残している。また、11の表面には自然面が、裏面には素材の剥離面が残る。

図196-15~28、図199-1~17は、基部の抉りが深く先端が膨らみ、側縁部が二等辺三角形をなしている。大半のものが、全体にわたって細かい調整剥離がなされている。図196-15~18は鋭角な二等辺三角形をなすものである。図196-16~図196-20は細かな調整剥離はなされず、扁平な断面形である。図196-21は表面に自然面を残し、図196-22は先端部が屈曲している。図196-26の裏面中央には欠損部がみられる。図196-27の表裏面には基部から中央部にかけて、アスファルトが付着していた。図197-1~3は表裏面に素材の剥離面を残すものである。図197-4~9は裏面に素材の剥離面が残っている。図197-7・8の形状は左右対称ではなく整っていない。図197-10~15はさらに細かい調整剥離が全体にわたっているものである。図197-16・17の基部先端が内傾している。17は重さが2.1gある大型の石鎌である。

図197-18~24、図198-1~10は基部の抉りが深く、その先端が丸みを帯び左右に張り出す。また、側縁部が二等辺三角形をなしている。大半のものが、全体にわたって細かい調整剥離がなされている。図197-18は側縁部が直線状となっている。図197-20は扁平な断面形をなし、基部の表裏面にはアスファルトが付着している。図197-23・24の裏面にはわずかに自然面が残る。図198-2の右側縁部には抉りが入り、左右非対称の形状である。図198-6・10の表面には素材の剥離面が残っている。

図198-11~17は基部の抉りが深く、その先端が鋭角となり左右に張り出すものである。また、側縁部が二等辺三角形をなしている。11・12・16は肉厚な断面形である。13は表裏面ともに焼けはじけがみられる。16は大型の石鎌である。

図198-18~23、図199-1~8は基部の抉りが浅いものである。図198-18は小型の石鎌で、裏

面に素材の剥離面を残している。図198-19の表面には全面にわたって調整剥離がなされるが、裏面は側縁部と基部のみに調整剥離がなされている。さらに断面形も湾曲している。図199-2・7は扁平な断面形である。図199-3は肉厚な断面形である。

図199-9～12は平基無茎鐵で、石鐵のなかでも出土数が少ないものである。石質は石英・頁岩・縞状頁岩などが利用され、珪質頁岩は用いられていない。9・10は表裏面とも細かい調整剥離が施されている。11・12は断面形が湾曲し、11は大型の石鐵である。

図199-13～18は円基鐵である。石質は頁岩・流紋岩・変質流紋岩・玉髓・チャートなどが利用されているが、珪質頁岩は用いられていない。13は側縁部が左右非対称で、整った形状ではない。裏面に素材の剥離面を残す。14は扁平な断面形で、表裏面とも細かな調整剥離が施されている。15は小型の石鐵である。15～18は肉厚な断面形である。

図199-19～24、図200-203、図204-1～24は有茎鐵である。石質をみると珪質頁岩が75%を占め、無茎鐵よりもその割合が多い。その他の石質についても、頁岩・流紋岩・玉髓・変質流紋岩・チャートなどで無茎鐵のように多様ではない。

図199-19～24、図200-1～11は側縁部の長さと幅がほぼ等しい正三角形をなしている。概ね、表裏面にわたり細かい調整剥離がなされている。しかし、図199-19～24、図200-1の裏面のように素材の剥離面が大きく残っているものもある。図199-19～21は茎部が長く、図200-1は側縁部に深い抉りが入っている。図200-8・9は側縁部が短い。さらに、8は肉厚な断面形である。図200-11は扁平な断面形である。

図200-12～24、図201、図202-1は側縁部が二等辺三角形をなしている。有茎鐵ではこの形状のものが多い。大半のものが、表裏面にわたり細かい調整剥離がなされているが、図201-6～9のように裏面に素材の剥離面を残すものもある。図200-16は表裏面ともに焼けはじいている。図200-19～24、図201-1～4・20～24、図202-1は側縁部が対称的で整った形状である。図200-14・16は肉厚な断面形である。図200-15・17は扁平な断面形である。17は右側縁部の一部が欠損している。

図202-2～17は基部が左右に張り出し、茎部が長いものである。大半のものが、表裏面にわたり細かい調整剥離がなされているが、図202-3～8のように素材の剥離面を残すものもある。そのなかでも、5・6は断面形が湾曲している。図202-9・11・12・16は肉厚な断面形である。

図202-18～24、図203、図204-1～6は茎部の抉りが深く入らないもので、全体の形状が菱形をなすものである。石質は珪質頁岩と頁岩に限られる。大半のものが、表裏面にわたり細かい調整剥離がなされている。そのなかでも、図202-1・2、図203-1～9、図204-1のように素材の剥離面を残すものもある。図202-18～24は側縁部が短いものである。図202-21は茎部が明瞭ではないものである。図202-23は右側縁部に自然面を残し、肉厚で厚さを減じていない。図203、図204-1～5の形状は細長い菱形となっている。図203-2の裏面には自然面を残している。図203-12・16は肉厚な断面形である。図203-13の表裏面は焼けはじいている。図203-8・21の断面形

が湾曲している。図203-22は茎部が明瞭ではないものである。図204-6は側縁部の幅が短いものである。

図204-7～13の形状は木葉形をなし、茎部への抉りがなく形状が明瞭ではない。7・8・10・12のように素材の剥離面を残すものが多い。8・10の断面形は肉厚である。

図204-14～23は基部の張り出しがわずかで、小型品が多い。断面形は肉厚なものが多い。14は裏面に素材の剥離面を残している。21の石質には夾雜物が含まれている。

図204-24は側縁部が2屈曲するもので、1点のみの出土である。茎部は欠損している。

図204-25～27、図205、図206-1～13は欠損品・未成品である。図204-25～27、図205-1は正三角形をなし、図205-2～7は二等辺三角形をなしている。図205-8～10の形状は判然としないが、いずれも基部の形状から無茎鐵の未成品と考えている。

図205-11～15・17～22、図206-1～10は有茎鐵の未成品と考えている。図205-16・17は有茎鐵の欠損品である。図206-11～13は完成品の予想がつかないものである。

石 槍(図206-14・15、図207-1～2)

石質は珪質頁岩・頁岩・変質流紋岩などが利用されている。側縁部を両面にわたって調整剥離を施している。横断面形は流線形となっている。図206-14は表面に素材の剥離面を、裏面に自然面を残していることから、扁平な剥片を利用している。

石 錐(図207-3～12、図208-1～3)

石質は珪質頁岩・頁岩・変質流紋岩などが利用されている。図207-3～6はつまみ状のものから錐部を明瞭に作り出している。4・5はつまみ状の部分に素材の剥離面を残している。3・4が短く、5・6が長い。図207-7～10はつまみ状の部分と錐部が不明瞭なものである。図207-11・12、図208-3はつまみ状のものがないものである。図208-1・2は錐部のみの欠損品である。

石 匙(図208-4～9)

石質は珪質頁岩・頁岩などである。すべて裏面に素材の剥離面を残している。4～8が縦形で、9が横形である。4～8の両側縁が刃部となる。8は縦横比の短いものである。

不定形石器(図209、図210-1～3)

石質は珪質頁岩・頁岩・安山岩などである。図209、図210-1は表裏面ともに素材の剥離面を残すものである。図209-1・2・4は端部に調整剥離がなされ、図209-3・5、図210-1は側縁部に調整剥離がなされる。図210-3は一面の全周に調整剥離がなされる。図210-2は側縁部と端部に調整剥離がなされる。

打製石斧(図210-4、図211-1～3)

石質は頁岩・縞状頁岩である。図210-4は小型の打製石斧で、基部に敲打痕がみられ、側縁部に抉りが入る。図211-1～3はいずれも欠損品で、表面に自然面を残している。1は刃部と側面に調整剥離を施している。2は右側面に細かい調整剥離を施している。3の形状は側面に抉りが入る撥状をなし、刃部が擦れています。

磨製石斧(図211-4~8)

石質は蛇紋岩・砂岩・輝緑岩・安山岩などである。いずれも欠損品である。4は基部の破片で、5~8は刃部の破片である。5は使用による欠損が著しく、研磨があまりなされず敲打痕がみられる。刃縁は6・8が丸刃で、7は偏刃である。6は表裏面とも摩滅が著しい。7は刃部を再生したものとみられる。8の刃部には使用痕がみられる。

石 槓(図210-5)

剥離作業面は2面で小さな剥片を採取したものとみられる。

異形石器(図210-6~8)

6は中央部にくびれがあり、糸巻形石器と呼ばれるものである。調整剥離は側縁部と端部になされる。7・8は表裏面にわたって調整剥離がなされる。いずれも側縁部の一部に抉りが入る。

磨石・凹石・敲石(図212、図213-1~5)

円碟もしくは亜円碟を素材とし、石質は輝石安山岩・安山岩などが多い。図212-1・2・6・8は敲石である。1は表裏面と側面、2は表面・側面・先端、6は表裏面と先端、8は先端に敲打痕がみられる。図212-3・7は凹石である。いずれも敲打による凹み痕が表面中央部にみられる。図212-4~6、図213-1~5は磨石である。図212-4・5、図213-2は磨耗面と敲打痕が確認できるものである。4は表裏面に磨耗面が、側面と端部に敲打痕がみられる。5は表面と側面に磨耗面が、両端部に敲打痕がみられる。図213-2は表面中央部に敲打痕がみられる。図213-1・3~5は磨耗面のみがみられるものである。磨耗面は1・5が表面、3が先端、4が表面と側面である。このうち、4の磨耗面の範囲が明確である以外、1・3・5はごく弱い磨耗面である。

その他の石器(図213-6~8)

6是有溝砥石である。円碟を素材とし、石質はレモライトである。表面に細い溝が付けられ、裏面に敲打痕がみられる。7は棒状碟である。粘板岩の素材に調整剥離が部分的になされるもので、裏面は欠損している。8は石鋸の欠損品である。断面形は扁平で、表裏面とも研磨がなされている。刃部は使用により摩滅している。

石 製 品(図214、写真89)

1はへき岩製の勾玉である。穿孔は表裏の二方向からなされている。2は硬玉製の垂玉である。表面と右側面に擦り切り溝がみられる。穿孔は表裏の二方向からなされている。3は滑石製の小玉である。4は滑石製の块状耳飾で、欠損品である。中央部の穿孔範囲に加え、穿孔が表裏二方向からなされている。5は砂岩製の丸玉で、表面と右側面に擦り切り溝がみられる。6は垂玉である。亜円碟を素材として表面からの一方向に穿孔がなされている。表裏面とも研磨などの調整は施されていない。7は石斧状石製品である。全面にわたって丁寧に研磨されている。小型品で、刃部は形成されていないことから実用品ではなく、呪術的な用途が考えられる。

8~11は石棒で、すべて欠損品である。石質は粘板岩・安山岩・頁岩などである。8は火を受け

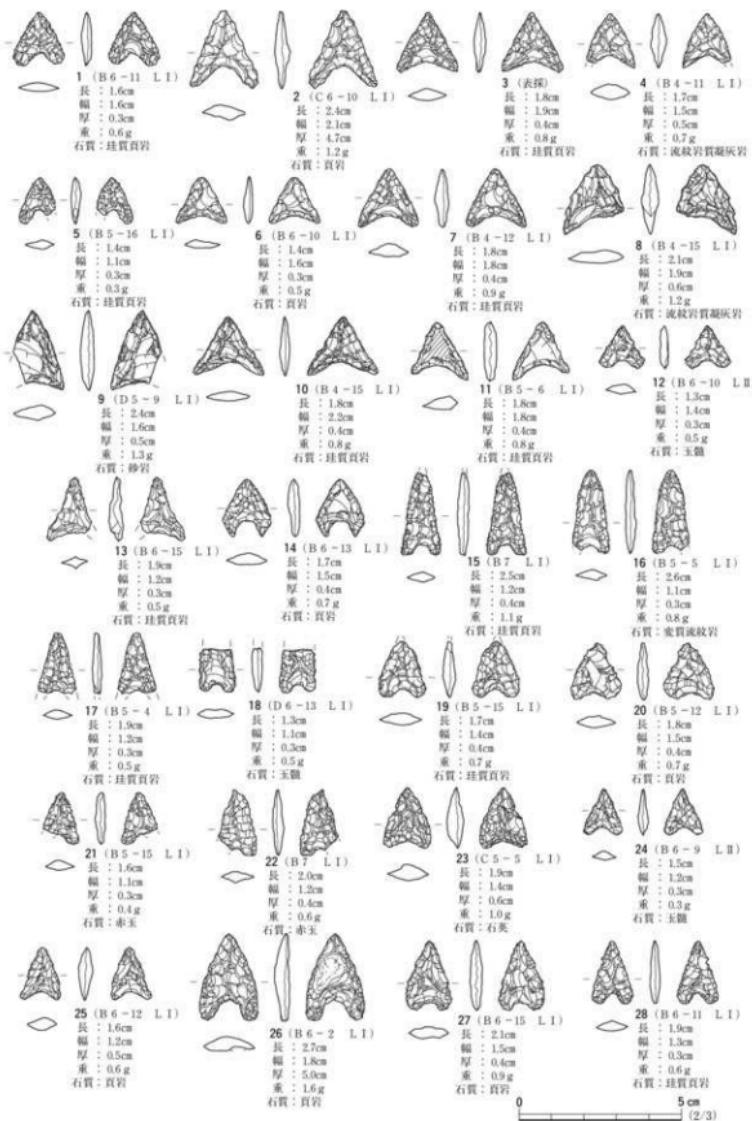


図196 遺構出土石器(1)

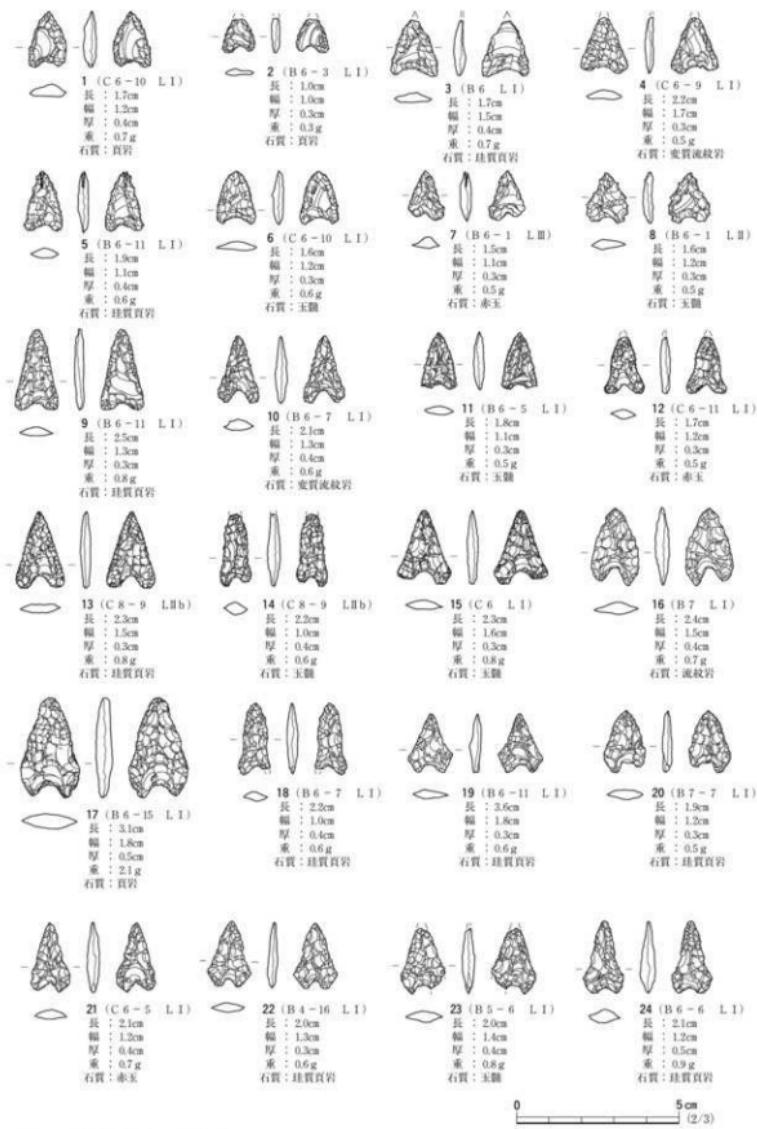
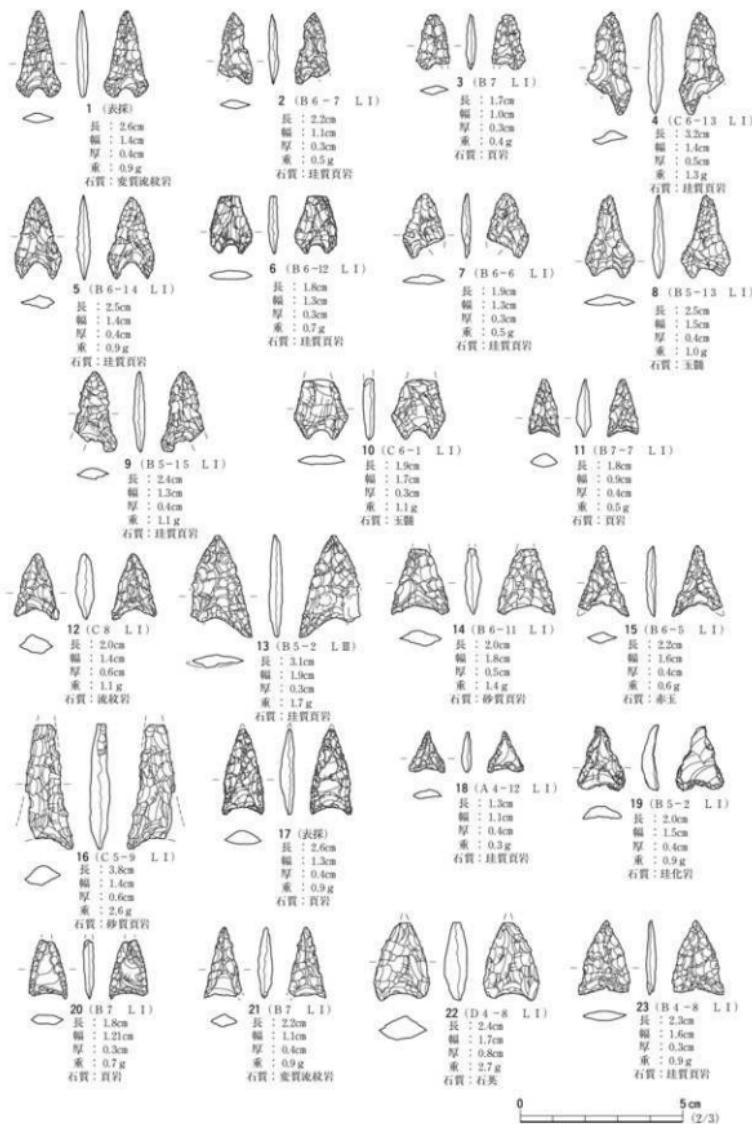


圖197 遺構外出土石器(2)



0 5cm
(2/3)

図198 遺構出土石器(3)

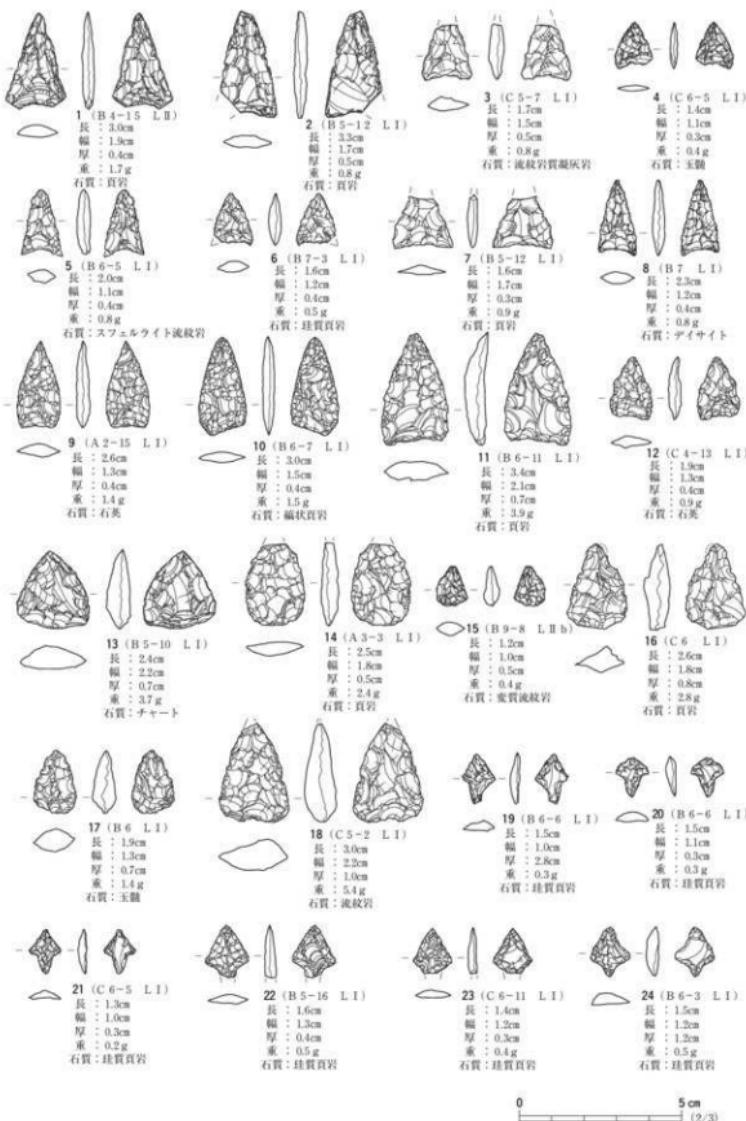


圖199 遺構外出土石器(4)

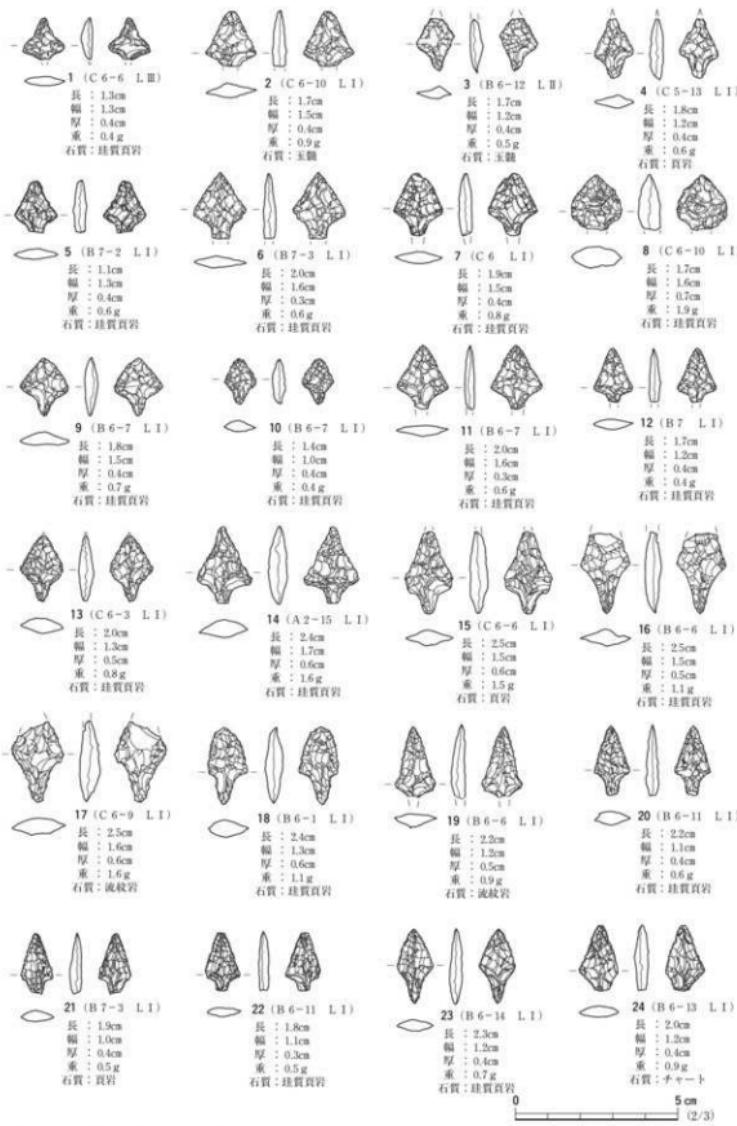


図200 遺構外出土石器(5)

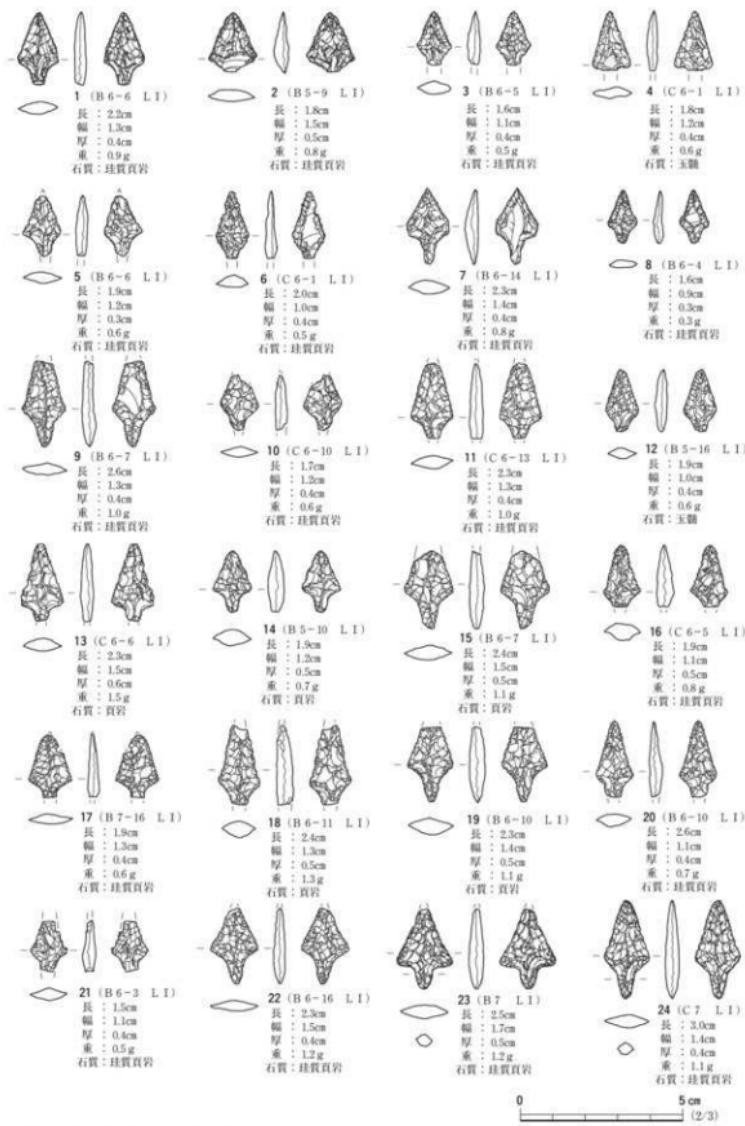


圖201 遺構外出土石器(6)

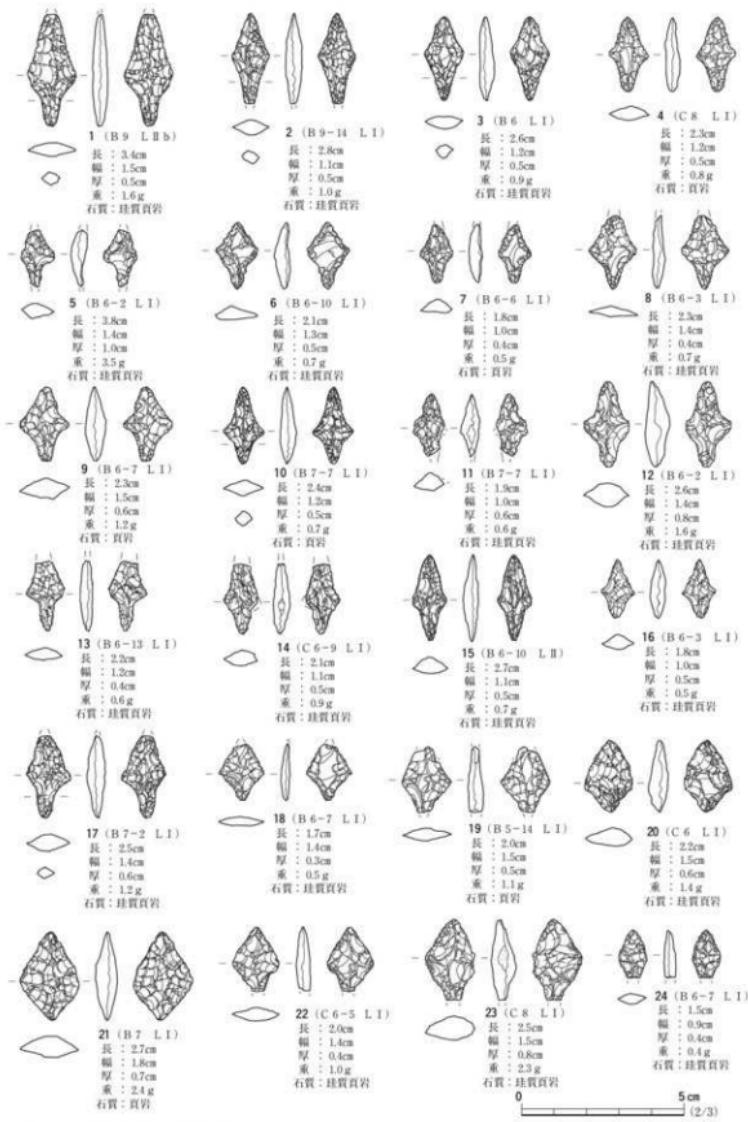


図202 遺構出土石器(7)

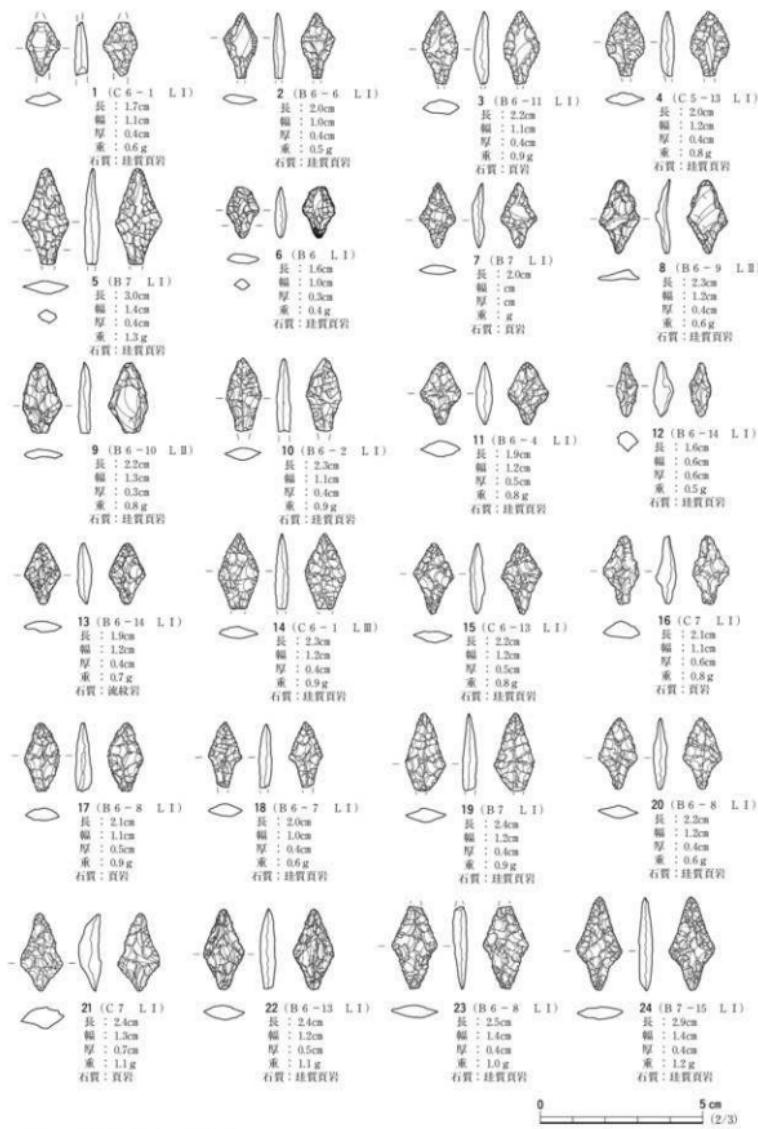


圖203 遺構外出土石器(8)

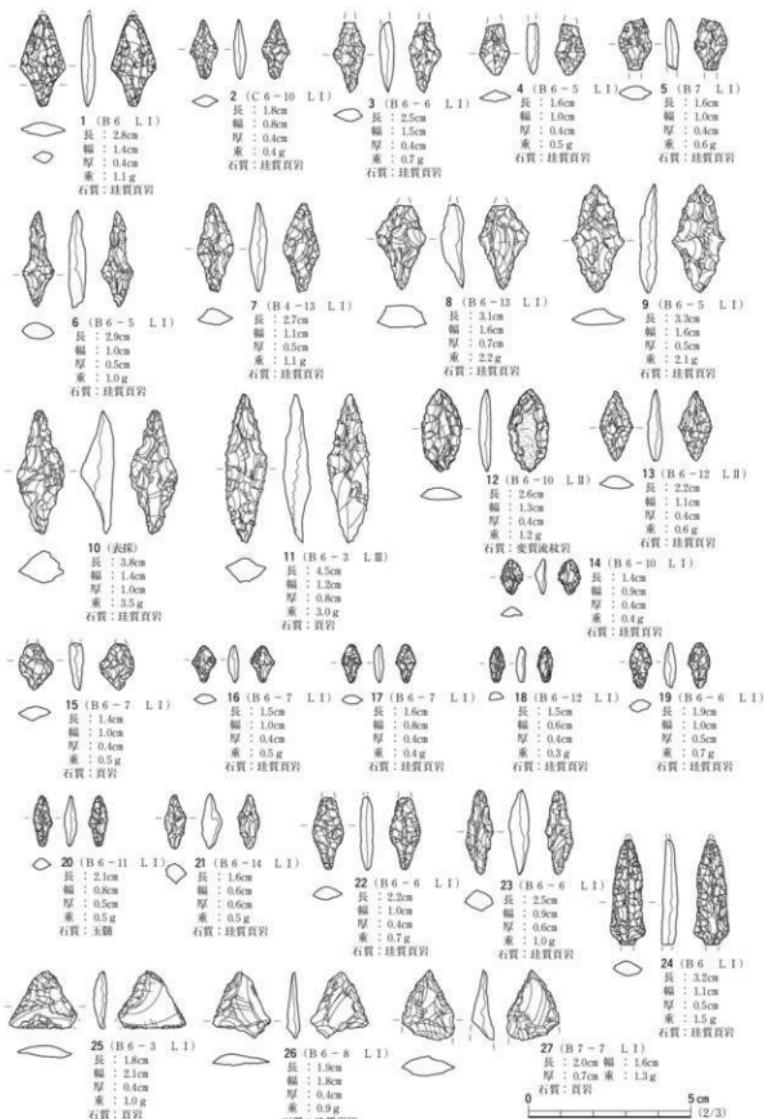


図204 遺構出土石器 (9)

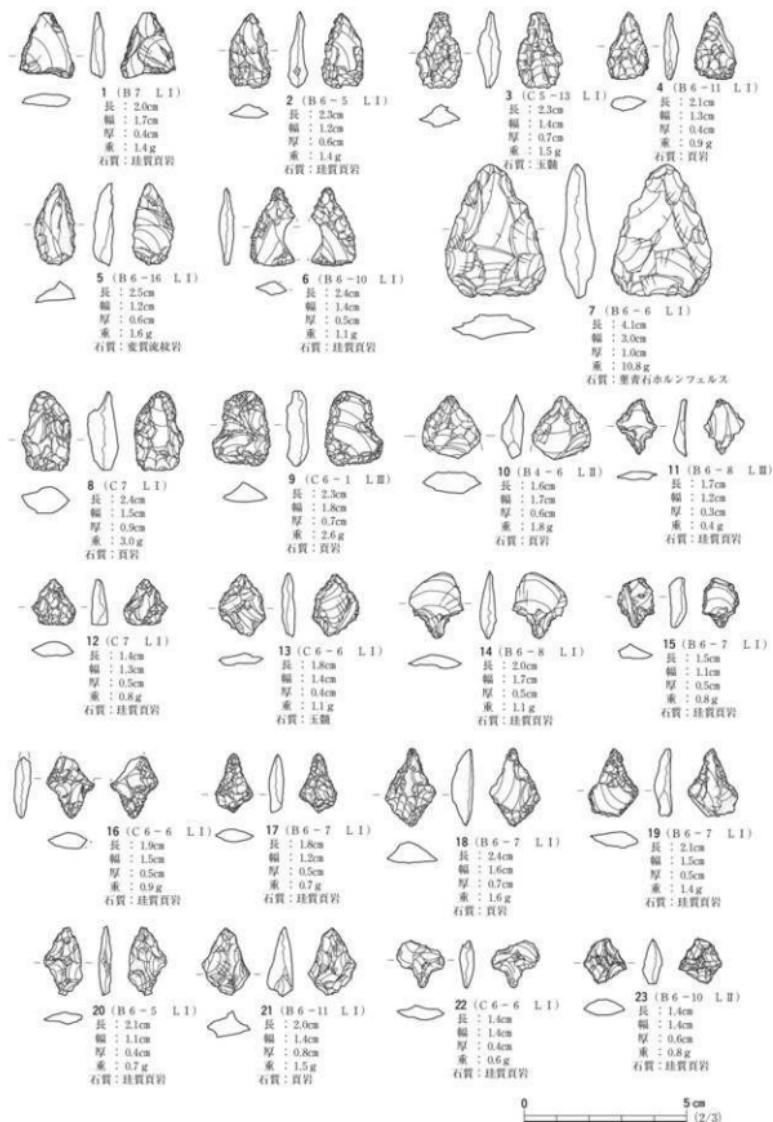


図205 遺構外出土石器(10)

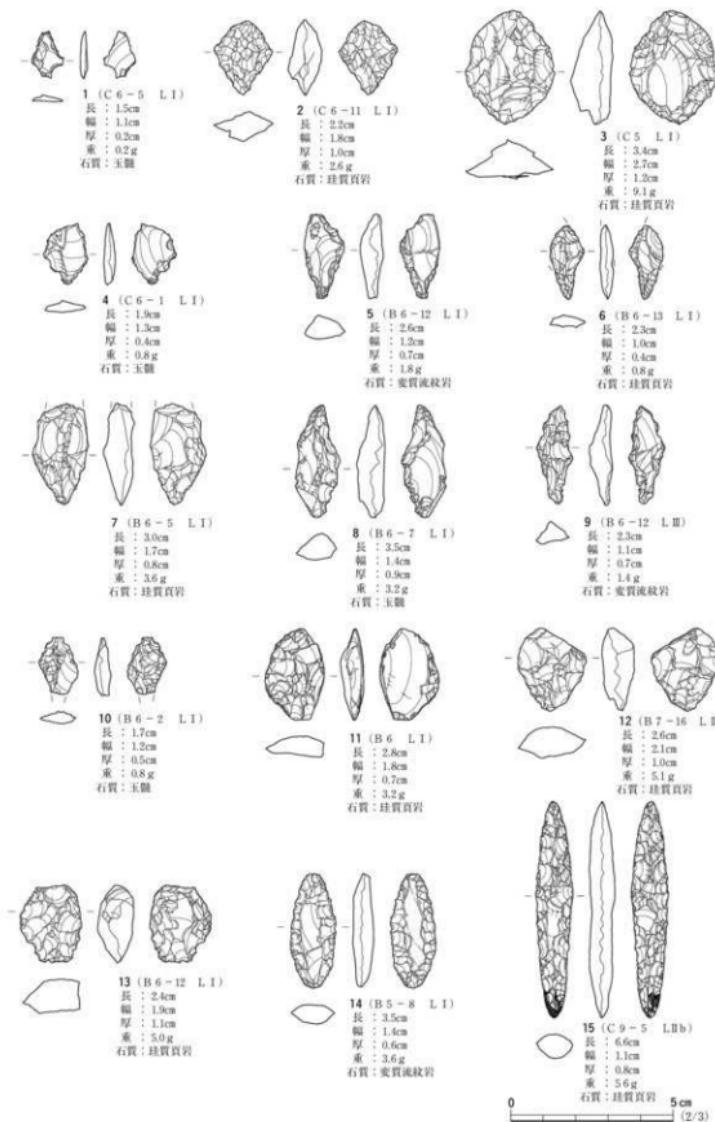


図206 遺構出土石器(11)

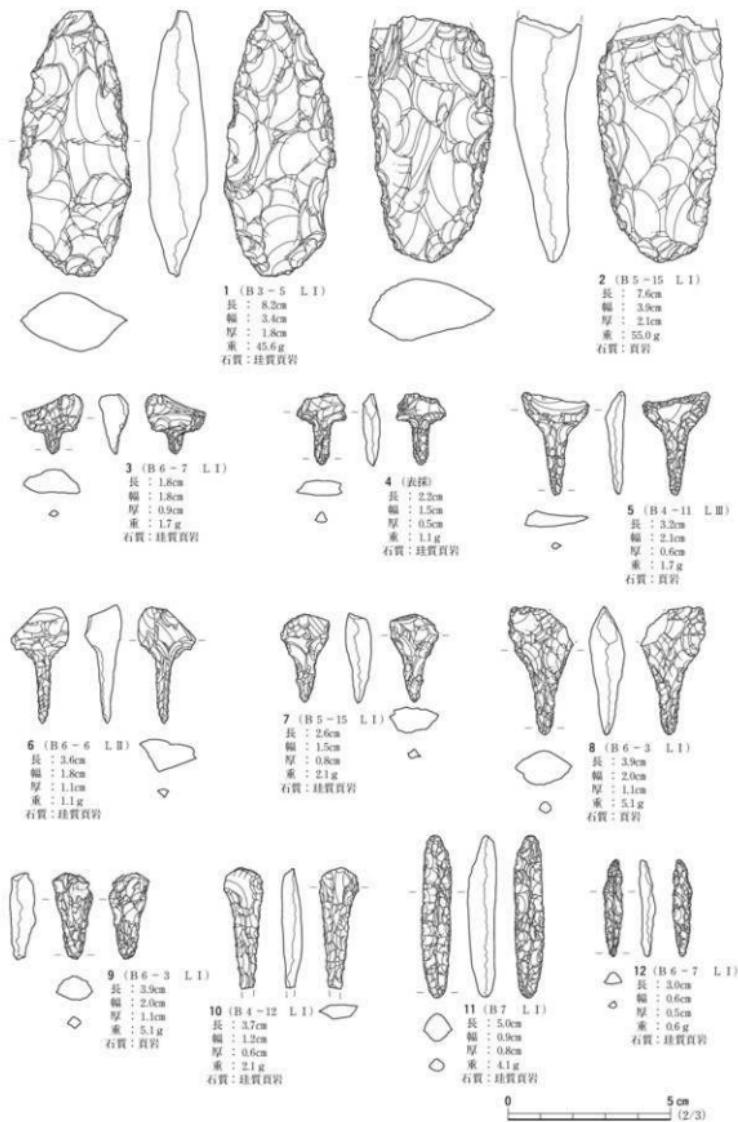


圖207 遺構外出土石器(12)

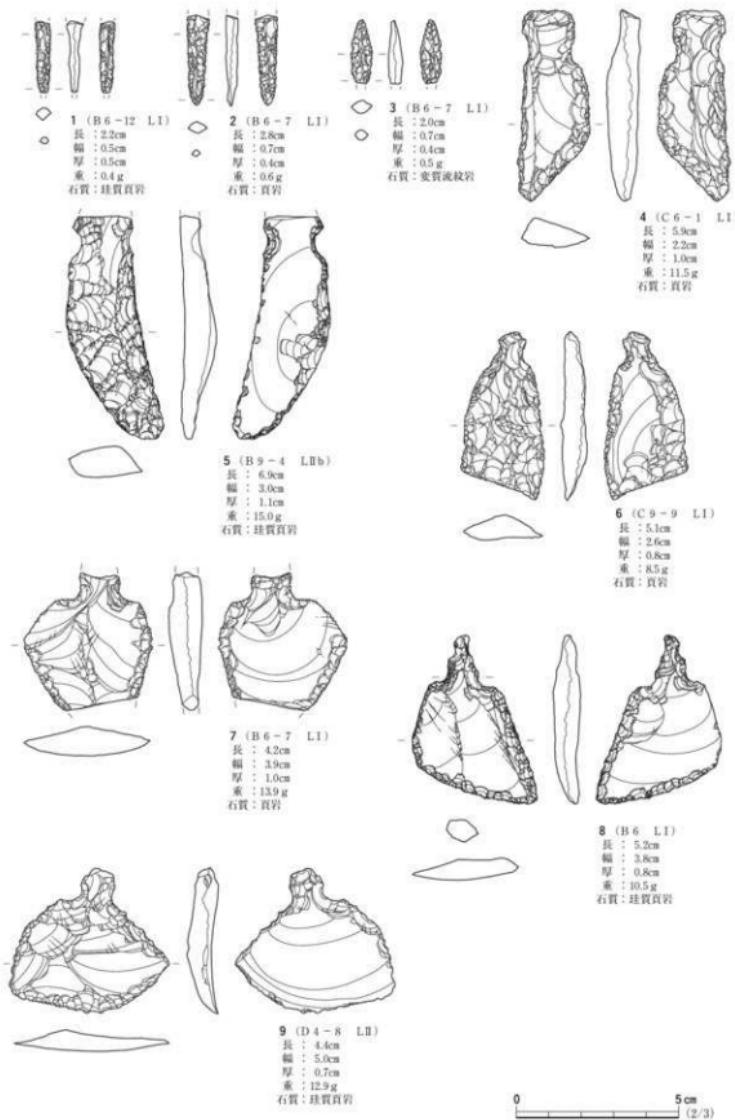


図208 遺構外出土石器(13)

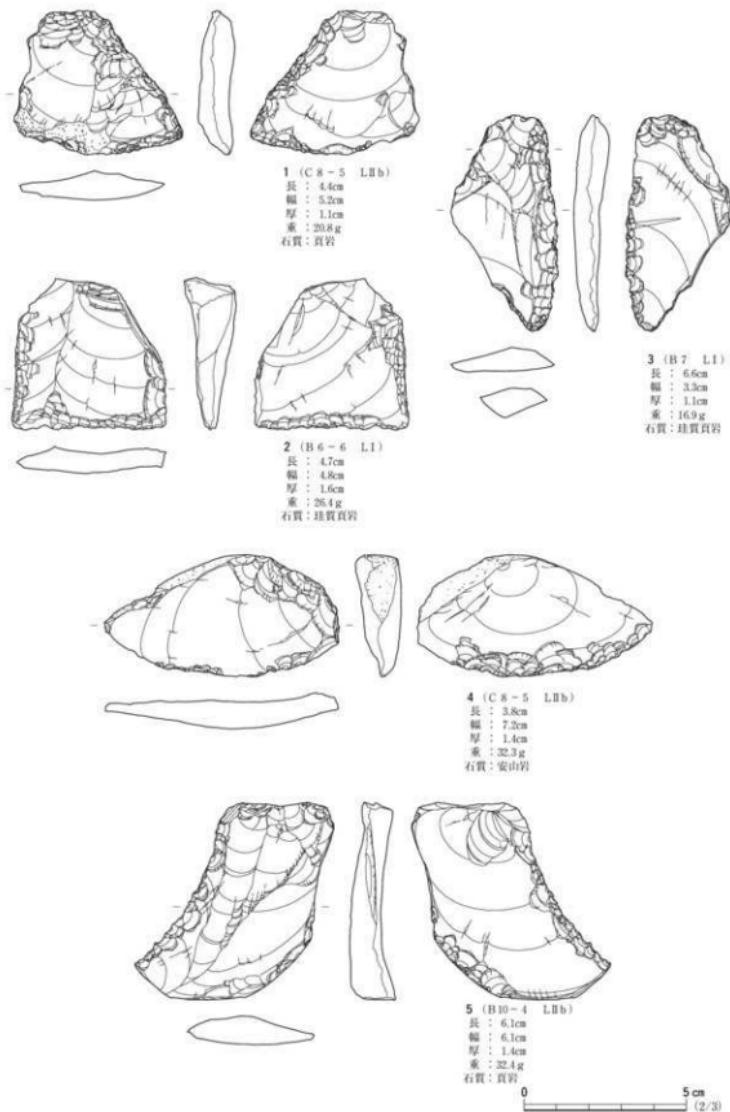
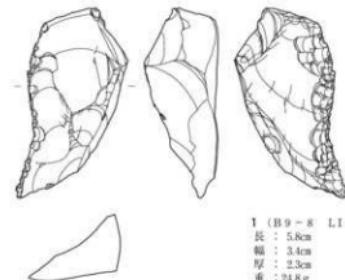


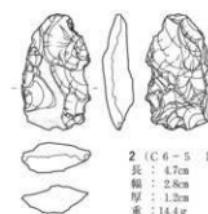
圖209 遺構外出土石器(14)



1 (B 9 - 8 L1)

長 : 5.8cm
幅 : 3.4cm
厚 : 2.3cm
重 : 24.8g

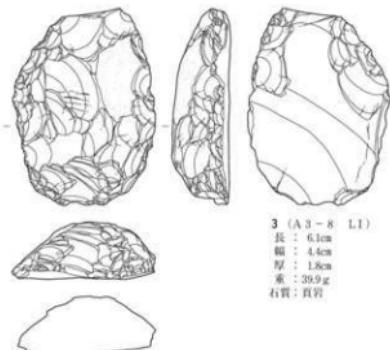
石質: 貝岩



2 (C 6 - 5 L1)

長 : 4.7cm
幅 : 2.8cm
厚 : 1.2cm
重 : 14.4g

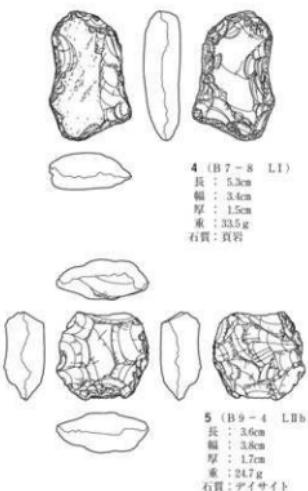
石質: 貝岩



3 (A 3 - 8 L1)

長 : 6.1cm
幅 : 4.4cm
厚 : 1.8cm
重 : 39.9g

石質: 貝岩



4 (B 7 - 8 L1)

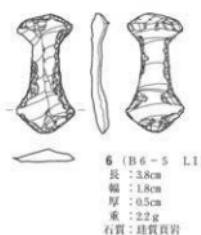
長 : 5.3cm
幅 : 3.6cm
厚 : 1.5cm
重 : 33.5g

石質: 貝岩

5 (B 9 - 4 L1b)

長 : 3.6cm
幅 : 3.8cm
厚 : 1.7cm
重 : 24.7g

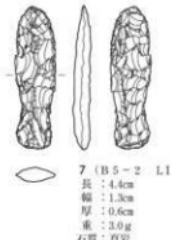
石質: ダイサイト



6 (B 6 - 5 L1)

長 : 3.8cm
幅 : 1.8cm
厚 : 0.5cm
重 : 2.2g

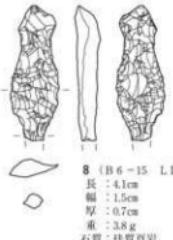
石質: 貝質岩



7 (B 5 - 2 L1)

長 : 4.4cm
幅 : 1.3cm
厚 : 0.6cm
重 : 3.0g

石質: 貝質岩



8 (B 6 - 15 L1)

長 : 4.1cm
幅 : 1.5cm
厚 : 0.7cm
重 : 3.8g

石質: 貝質岩



5 cm

(2/3)

図210 遺構外出土石器(15)

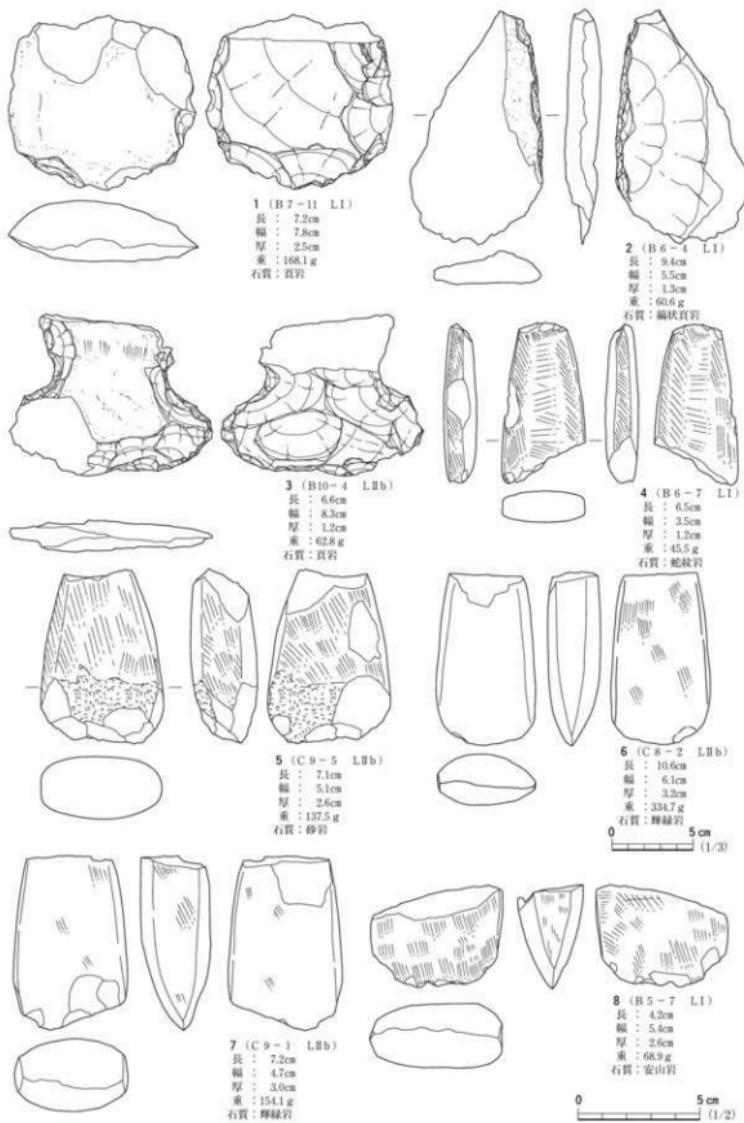


圖211 遺構外出土石器(16)

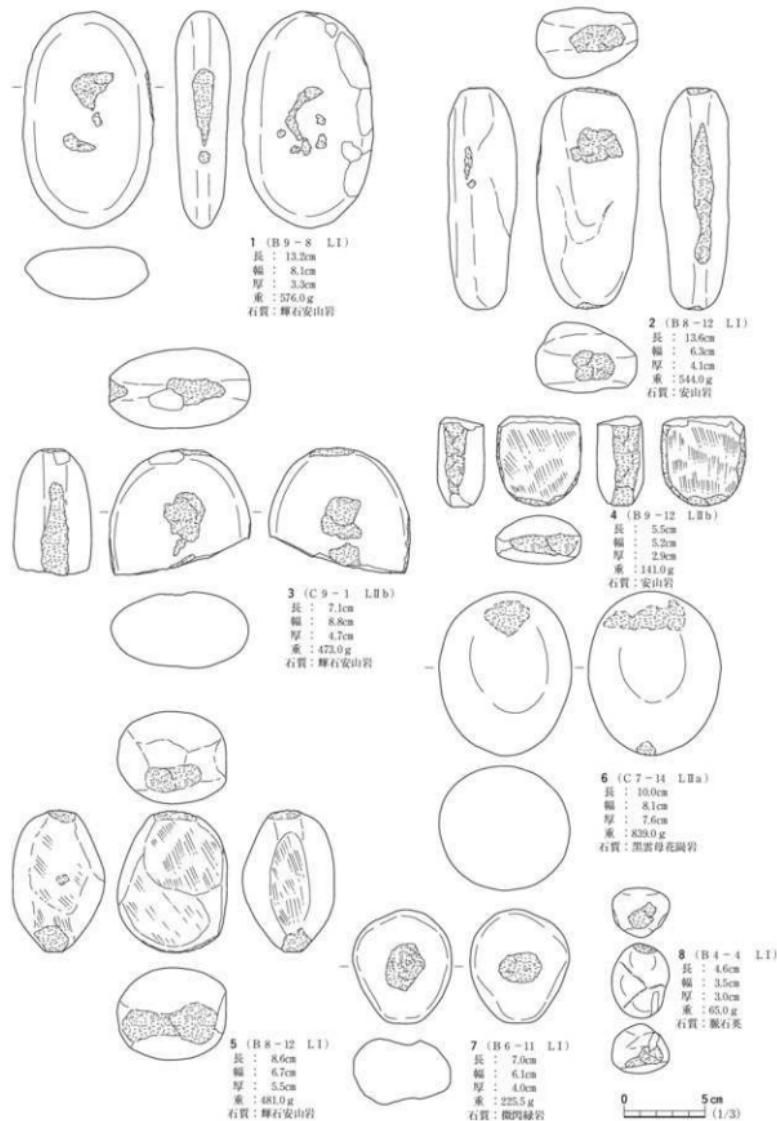


図212 遺構外出土器(17)

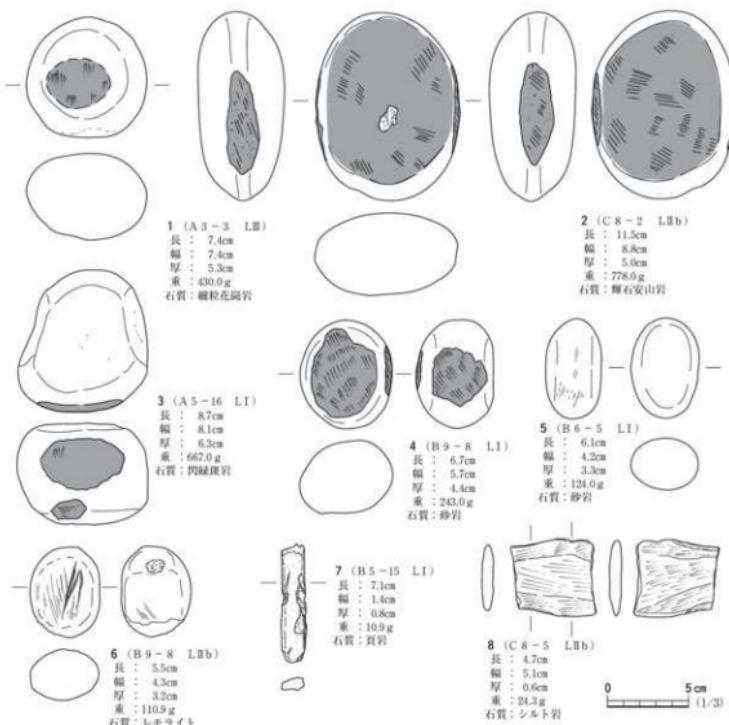


図213 造構外出土石器(18)

所々亀裂が生じ、それにより裏面が欠損している。表面は丁寧に研磨されている。柄頭部は敲打により調整され、柄頭部との境には一条の凸線が巡る。下端部は意図的に打ち欠いている。9は身部分の残片で、意図的に打ち欠いている。全面にわたり丁寧に研磨されている。10・11は柄頭部である。10の形状はコケシ状をなし、断面形は扁平である。全面に研磨されているが、調整時の敲打痕がみられる。11は表面に凸線による平行線による文様が刻まれ、裏面は欠損している。

12・13は石刀である。ともに表面・側面とも丁寧に研磨されている。12は刃部が敲打により調整されている。13は裏面が欠損している。14・15はミニチュア石棒である。いずれも全面にわたりて丁寧に研磨され、柄頭部との境には一条の凹線が巡っている。14の下端部は欠損している。15の下端部は刃部のように形成されている。

(吉野)

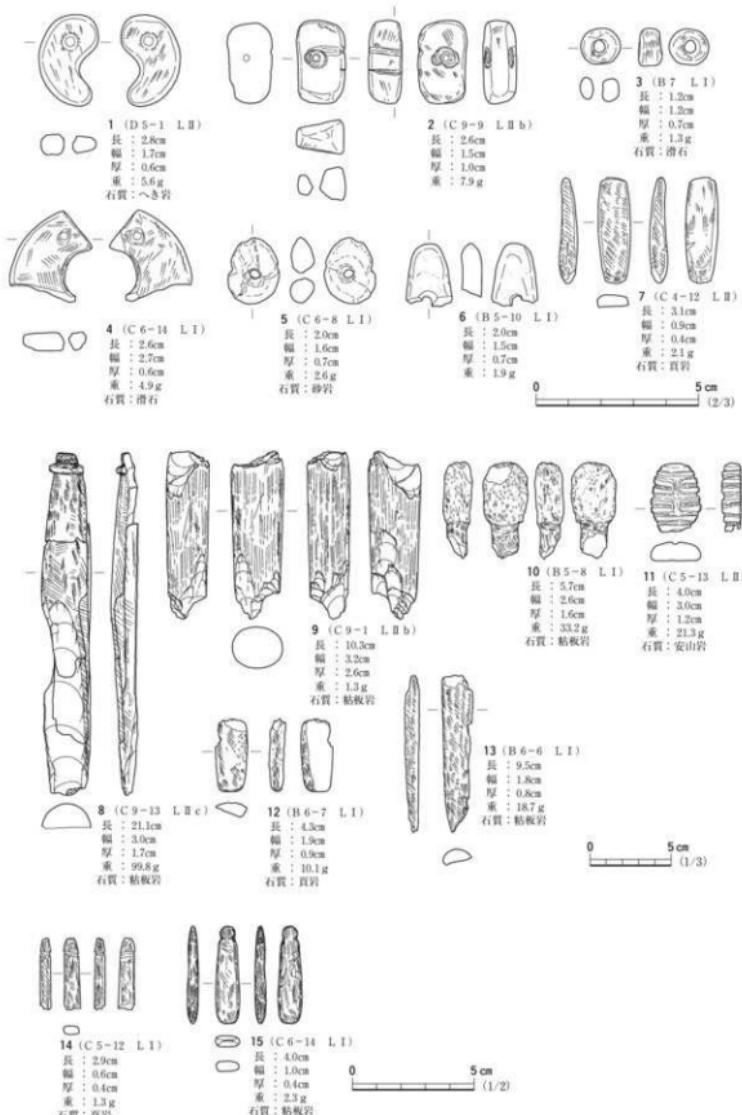


図214 遺構外出土石製品

獣骨片(図215)

調査区中央部の南西側、B 6 グリッドを中心に分布する。いずれの骨も碎片で、白色を呈していることから焼骨と判断した。一般的な住居跡の炉や屋外焼土遺構等に伴う焼骨片とは異なり、自然堆積と考えられる遺構内堆積土内から出土し、遺構に直接関連する焼骨片ではない。また、縄文土器片類と共に散布状態で出土し、面や塊として焼骨片を一括廃棄したような状況はまったく認められていない。

比較的多量に出土した S I 24・28、S B 6～9 等では、いずれも最上層の ℓ 1 内に含まれている。これら遺構は、縄文時代後期末葉～晩期前葉頃に所属する。したがって、焼骨片の廃棄時期については縄文時代晩期前葉以降と考えられるが、周辺には該当時期と判断される明確な遺構は存在しない。また、出土した焼骨片は全て獣類で、鳥・魚類等の他の種は含まれていない。

これら焼骨片の分析・同定にあたっては、他の遺構内出土の焼骨片と共に行ったが、獣の種類・部位等に違いは認められず、祭祀的な遺構も検出されていないことから一般的な食料残滓として廃棄されたものと考えている。
(山岸)

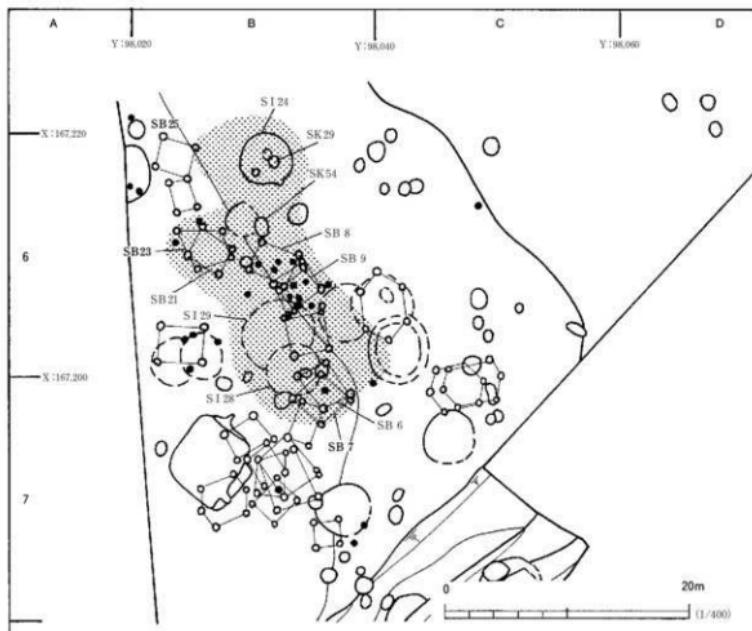


図215 獣骨片の分布図

第3章 総括

平成19・20年度に実施した田子平遺跡の調査で検出した各遺構・遺物の事実報告については、前章までに述べてきたとおりである。したがってここでは、調査の成果について項目ごとにまとめると共に若干の考察を加え総括としたい。

1. 遺物について

田子平遺跡から出土した遺物には、縄文時代、平安時代と近世の遺物がある。ここでは、出土遺物の主体である縄文時代の遺物について記述する。

土器

遺物の主体である縄文土器については便宜上、IV群12類に細分した。縄文時代早期・前期・中期・後期・晚期の各時期に比定される土器が出土しているが、出土量は検出された遺構数に比例し、後期の土器が圧倒的に多い。

I群は早期の土器で、1類は前葉から中葉の押型・沈線文系土器群の日計・三戸式期と貝殻・沈線文系土器群の田戸上層・常世I式期に、2類は後葉の条痕文系土器群の野鳥・鶴ヶ島台式期に、3類は終末期の条痕・縄文系土器に比定できるものと考えられる。多量には出土していないが、中葉の貝殻・沈線文系土器以降、比較的出土量が平均化し、田子平遺跡が初めて縄文時代の生活の場として利用されたことが伺える。小集落跡が形成されていたと想定されるが、詳細は不明である。

II群は前期・中期の土器で、1類は前期前葉～中葉頃の大木2a～5式期と諸磯・浮島式期に、2類は中期後葉の大木9～10式期頃に比定され、極めて出土数が減少する。出土量からすれば、集落跡が形成されていたとは想定できず、一時的なキャンプサイト程度の利用と考えている。また、前期後葉頃から中期の中葉頃にかけての土器がまったく認められず、田子平遺跡に空白期間が存在したことが伺える。ただし、あくまで調査区の様相のため遺跡全体の状況を表していないと考えている。

III群は後期の土器としたもので、最も出土量が多く内容的にも豊富である。1類は前葉の網取・堀ノ内式期に比定され、出土量は後期の中葉頃では最も少ない。生活の場として遺跡が再利用され始めた時期と考えられるが、一時的なキャンプサイト程度と想定される。2類は中葉の加曾利B式期頃に比定される。出土量が増加し、器種組成も豊富となり集落跡が形成された時期と考えている。また、集落跡の中心が調査区の南半に占地され、田子平遺跡の終末まで続いている。

3類は後葉から末葉の新地式期に比定される土器で、いわゆる「コブ付土器」を一括した。III群の中でも出土量が最も多く、器種組成も豊富である。主要文様の特徴から、「コブ」から「連続刺突文」そして「帶状の入組文」への数段階の変遷が迫れるが、各段階内でも系統的な変化と時間差

があり、層位的な前後関係として明示できなかったことから大まかな分類に止めた。集落発展期で、田子平遺跡の主要時期と想定される。

IV群は晩期の土器で、1類は初頭から前葉頃の大洞B～BC式期頃に比定される。三叉文・入組文・羊歯状文等を特徴とし、III群3類土器から連続した変遷が辿れるが出土量は減少する。器種組成的にも深鉢・鉢形土器が少なく判然としない。分布範囲も狭まり、田子平遺跡の集落衰退期と想定される。2類は中葉から後葉頃の大洞C1～A式期に比定され、雲形文や工字文を特徴とする。出土量は激減し、詳細が不明な点が多く、縄文時代の田子平遺跡は終末を迎える。

土 製 品

土製品には、土面・土偶・耳栓・土版等が出土している。出土状況や施文文様等の特徴から主に縄文時代後期後葉頃の所産と考えている。また、出土状況に特殊性は認められない。

土面の出土は稀少であるが、他の遺物と同様の状態で出土している。また、ほぼ完全形の小型の土面については実用的な大きさではないが、内面が湾曲し、口の円孔が貫通していることから土面とした。

土偶は破損品のみが出土し、頭部はまったく出土していない。立体で写実的な形状が多く、手足の指先まで表現されている。各部位は沈線によって区画・表現され、縄文や刺突文等で加飾しているものが多い。また、頸の付け根に相当する胴体部分に、球状の窪みが付けられている例が認められ、差し込み式の頭部の存在も考えられる。

一般的な縄文時代後期後葉頃の集落跡と田子平遺跡出土の土製品を比較するならば、確かに稀少な土面が出土しているものの種類・数量的には飛び抜けた状況は認められない。土製品の比較からすれば、田子平遺跡は一般的な集落跡の範疇に収まるものと考えている。

石器・石製品

石器には石錐・石槍・石錐・石匙・不定形石器・石斧・磨石・石皿等がある。層位的に明確でない石器も含まれているため、一時期の石器組成として判断できないが、組成的には一般的な集落跡とそれほど変わらない。ただし、器種ごとの出土数を見た場合、圧倒的に狩猟具の石錐が多く、解体・加工具の石匙・不定形石器・石錐や調理加工具の磨石・石皿等は極めて少ない。このような状況は、田子平遺跡の集落跡の生活基盤がいかに狩猟に依存していたかを表しているもので、一般的な集落跡と異なった特徴となっている。また、石錐の形態には有茎と無茎の二種類がある。やや有茎石錐が多い傾向にあるが、二種類の形態が同時に存在していることになる。製作者の好みや狩猟対象の違いによるものなのか、その理由については不明である。

石製品には垂飾品・石棒・石刀等があり、数量的にはそれほど多くはない。垂飾品には勾玉や臼・丸玉のように整形されたもの、素材に孔を開けただけのものが認められる。石棒・石刀等は破損品が多く、集石遺構の検出面から出土している以外では、特別な出土状況は認められない。これら石製品には地元産の石材が多く使われているが、日本海地方産の翡翠製の玉類が含まれており、田子平遺跡においても広域な交流活動が行われていたことが伺われる。

2. 遺構について

田子平遺跡から検出した遺構には、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・埋甕・集石遺構・屋外焼土遺構・性格不明遺構がある。ここでは、田子平遺跡の主要時期である縄文時代の遺構について項目ごとに記述して行く。

竪穴住居跡

検出した竪穴住居跡は36軒で、内4軒を除く32軒が縄文時代に所属する。分布的には、調査区中央部の南西側の段丘平坦面と調査区南部の段丘裾部に沿って集中する傾向にある。平面的に重複する例が多く、同一住居の床面上で同心円状に柱穴が巡る例も認められることから複数時期にまたがっているものと考えられる。

時期別では、調査区南部の北東側に所在するS I 20・21が前期前葉、調査区南部南端のS I 3と調査区中央部の中央西端に所在するS I 36が晚期前葉と考えられ、それ以外の28軒がすべて後期後葉の範疇に納まるものと考えている。

これら後期後葉の28軒は、形態・施設的な特徴に変化は認められないが、重複関係や出土遺物の特徴から三段階の大まかな変遷が想定できる。

〔第Ⅰ段階〕 主要文様内に積極的にコブが付加される土器が出土した住居跡で、比較的調査区南部に集中する。S I 1～6・8・14・16・17・19と調査区中央部南端のS I 10が相当する。

〔第Ⅱ段階〕 主要文様内に連続刺突文が施される土器が出土した住居跡で、調査区中央部の南西側と調査区南部の中央付近に集中する。調査区中央部ではS I 11・25～27・29・34・35が、調査区南部ではS I 7・12・18・22が相当する。

〔第Ⅲ段階〕 帯状の入組文を主要文様とする土器が出土した住居跡で、調査区中央部に集中する傾向にある。S I 23・24・28・30が相当する。

これら各段階の住居跡にも重複関係にある例が認められるが、各段階の土器内にも系統的な変化と時間差が存在するため、事実関係からは明示することができなかった。

掘立柱建物跡

検出された掘立柱建物跡は26棟で、重複関係と出土遺物からすべて縄文時代後期後葉～晚期前葉に構築された遺構と考えている。分布的には調査区中央部の南西側に集中し、後期後葉頃の住居跡等の遺構と重複する建物跡も認められる。また、構築時期では後期後葉～晚期初頭、晚期前葉頃の建物跡に大別できる。

後期後葉～晚期初頭の建物跡には、S B 2～5・10・11・16・18～20・24の11棟がある。東西・南北各1間で、平面が方形・長方形を基調とする建物物が多く、S B 2・4・5・19のように棟持ち柱に相当する位置にも柱穴が検出され、平面が六角形の建物跡も認められる。晚期前葉頃の建物跡にはS B 1・6～9・12～15・21～23・25～27の15棟がある。いずれも東西・南北各1間で、平面が方形・長方形を基調とする。平面での規模は、いずれの時期の建物跡共にそれほど変わらず時

期的な特徴は認められないが、柱穴掘形の規模では晩期前葉の建物跡が大きい傾向が認められる。また、柱穴内堆積土の埋土・柱痕の区別が明確な建物跡は晩期前葉が多く、後期後葉～晩期初頭では暗褐色土系、晩期前葉では黒褐色土系の色調の堆積土となる傾向が認められる。

土 坑

検出された81基の土坑の内、76基は縄文時代に所属する。形態的に貯蔵穴と考えられる土坑がほとんどで、狩猟関連の落し穴はまったく認められない。時期的には、早期・前期・後期・晩期の各時期に区分され、後期の土坑が最も多い。前期はSK71の1基だけの検出のため、ここでは早期・後期・晩期の土坑についてまとめる。

早期の土坑には、SK15・18・25・30・31・34～36・39・40・42・44～46・56・61の16基がある。平面は円形を基調とし、他の時期に比べ規模が大きい傾向が認められる。遺構内堆積土は褐色系の土坑が多く、遺物の出土量も比較的多い。調査区北部から調査区中央部の段丘平坦面全域に散在し、まとめた特徴は認められない。

後期の土坑は42基と最も多く検出され、このうち前葉～中葉の土坑にはSK14・28・37・38・43・47・48・67の8基がある。調査区中央部の中央東側、段丘際に近い平坦面から比較的多く検出されている。まとめた特徴は認められない。

後葉の土坑には、SK1～6・10・12・13・19～24・26・27・55・57～60・62～66・70・73・74・77・80の32基が調査区中央部の南西側から多く検出されている。住居跡の検出数からすれば、数としては少ない。分布的には同時期の住居跡の周辺に散在し、一定の地域に集中するような傾向は認められない。

晩期の土坑には、SK7～9・11・29・41・49・51・52・54・69・78の12基がある。調査区中央部の中央西側に分布する傾向にあるが、まとめた特徴は認められない。

埋 売

埋賣は57基検出され、調査区南部の南側と調査区中央部の南西側に集中する傾向が認められる。調査区南部の南側には、SM1～6・10～17・20～24・27・28の22基と埋賣と同一の性格を考えられSS2があり、いずれも後期後葉に比定される。2～3基の埋賣が近接し、掘形内に正立状態で埋められている例が多い。いずれも深鉢形土器が利用され、条線文・無文が施されただけの土器が多く、文様を加飾した土器はすくない。また、器面に炭化物の付着する例が多く、煮沸等に使用した土器が主に埋められている。

調査区中央部の南西側では、SM32～37・39～45・47の14基がまとめた特徴は認められない。

この他では、SM48・49・54等のように、文様を加飾した精製土器で底部穿孔された埋賣も出土しているが、いずれの土器内からも特別な堆積状況・出土遺物は認められていない。

(山岸)

付章1 田子平遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)

株式会社 加速器分析研究所

1 測定対象試料

測定対象試料は、田子平遺跡の遺構から出土した土器付着炭化物20点である。

2 化学処理工程

- (1) メス・ビンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- (2) 酸処理、アルカリ処理、酸処理(AAA: Acid Alkali Acid)により内面的な不純物を取り除く。
最初の酸処理では1Nの塩酸(80°C)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では1Nの水酸化ナトリウム水溶液(80°C)を用いて数時間処理する。なお、AAA処理において、アルカリ濃度が1N未満の場合、表中にAaAと記載する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸(80°C)を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90°Cで乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- (3) 試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空中で封じ切り、500°Cで30分、850°Cで2時間加熱する。
- (4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用して、真空ラインで二酸化炭素(CO₂)を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出(水素で還元)し、グラファイトを作製する。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードに詰め、それをホイールにめ込み、加速器に装着する。

3 測定方法

測定機器は、3 MV タンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS 専用装置(NEC Pelletron 9 SDH-2)を使用する。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

4 算出方法

- (1) 年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polash 1977)。
- (2) ¹⁴C年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0 yrBP)として測る年代である。この値は、δ¹⁴Cによって補正された値である。¹⁴C年代と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差(±1σ)は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) δ¹⁴Cは、試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差(‰)で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により¹³C/¹²Cを測定した場合には表中に(AMS)と注記する。
- (4) pMC(percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。
- (5) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲であり、1標準偏差(1σ=68.2%)あるいは2標準偏差(2σ=95.4%)で表示される。历年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal04データベース

ス(Reimer et al 2004)を用い、OxCalv4.0較正プログラム(Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey,van der Plicht and Weninger 2001)を使用した。

5 測定結果

S K 31から出土した土器付着炭化物 2 点の¹⁴C 年代は、 8240 ± 50 yrBP(外面：1)と 8280 ± 40 yrBP(内面：2)である。S K 31出土土器は土器型式から縄文時代早期中葉に帰属すると考えられており、整合的な結果である。

S M 9 の埋設土器の付着炭化物は 3130 ± 30 yrBP(内面：3)である。S M 10 の埋設土器の付着炭化物 2 点は 3220 ± 30 yrBP(外面：4)と 3420 ± 40 yrBP(内面：5)である。内面試料の $\delta^{13}\text{C}$ が外面試料の値に比べて高く、-14.6%であった。¹⁴C 年代も外面に比べて 200 年ほど古くなることから、土器の内容物が海洋由来であった可能性が高い。この場合、海洋リザーバー効果によって、実際の年代よりも古い¹⁴C 年代となる。S M 17 の埋設土器の付着炭化物 2 点は 3030 ± 30 yrBP(外面：6)と 3090 ± 30 yrBP(内面：7)である。S M 18 の埋設土器の付着炭化物は 2940 ± 30 yrBP(外面：8)と 3000 ± 30 yrBP(内面：9)である。内面付着物の炭素含有率は低く、30.7%であった。S M 27 の埋設土器の付着炭化物は 3020 ± 40 yrBP(内面：10)、S M 48 の埋設土器の付着炭化物が 3050 ± 30 yrBP(外面：11)である。S M 49 の埋設土器の付着炭化物 2 点は 3030 ± 30 yrBP(外面：12)と 3140 ± 40 yrBP(内面：13)である。外面付着物の炭素含有率はやや低く、48.0%であった。S M 52 の埋設土器の付着炭化物が 3000 ± 30 yrBP(内面：14)であったが、炭素含有率が低く 32.6%であった。S S 2 の埋設土器の付着炭化物は、 3090 ± 30 yrBP(外面：15)と 3050 ± 30 yrBP(内面：16)である。内面付着物の炭素含有率は低く、37.0%であった。S I 16 の埋設土器の付着炭化物が 3100 ± 40 yrBP(外面：17)と 3510 ± 30 yrBP(内面：18)である。外面の付着物に比べて内面の $\delta^{13}\text{C}$ が高く、S M 10 出土試料と同様に海洋リザーバー効果によつて実際よりも数百年古い¹⁴C 年代が示された可能性がある。S M 50 の埋設土器の付着炭化物が 2870 ± 30 yrBP(外面：19)、S M 44 の埋設土器の付着炭化物が 3240 ± 30 yrBP(内面：20)である。

測定を通じて、炭素含有率が 50%に満たない試料が幾つか確認された。土器内容物のように、試料自体の炭素含有率が低い場合は年代値の精度に問題が無いが、炭化物に土壤が混入したような場合、測定結果の信頼性が低くなる。炭素含有率が 30~40%の試料はすべて土器内面付着物であり、これらの¹⁴C 年代は外面付着物の¹⁴C 年代と大きな差が認められない。おそらく試料自体の成分を反映したものであり、年代値の信頼性に問題は無いと判断した。なお、S K 31以外の出土土器は縄文時代後期後葉の所産と推定されており、測定結果とも整合的である。

参考文献

- Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion : Reporting of ¹⁴C data,Radiocarbon 19, 355~363
Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy : the OxCal Program,Radiocarbon 37 (2), 425~430
Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal,Radiocarbon 43 (2 A), 355~363
Bronk Ramsey C.,van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates,Radiocarbon 43 (2 A), 381~389
Reimer,P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0~26cal kyr BP,Radiocarbon 46, 1029~1058

表1 放射性炭素年代測定結果

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (%) (A M S)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						LibbyAge(yrBP)	pMC (%)
IAAA-82803	1	遺構：S K31	土器外面付着炭化物	AaA	-19.14 ± 0.88	8,240 ± 50	35.86 ± 0.20
IAAA-82804	2	遺構：S K31	土器内面付着炭化物	AaA	-19.15 ± 0.92	8,280 ± 40	35.69 ± 0.19
IAAA-82805	3	遺構：S M9	土器内面付着炭化物	AAA	-24.87 ± 0.70	3,130 ± 30	67.77 ± 0.28
IAAA-82806	4	遺構：S M10	土器外面付着炭化物	AaA	-30.58 ± 0.89	3,220 ± 30	66.94 ± 0.28
IAAA-82807	5	遺構：S M10	土器内面付着炭化物	AaA	-14.66 ± 0.86	3,420 ± 40	65.31 ± 0.29
IAAA-82808	6	遺構：S M17	土器外面付着炭化物	AaA	-23.31 ± 0.86	3,030 ± 30	68.55 ± 0.28
IAAA-82809	7	遺構：S M17	土器内面付着炭化物	AaA	-23.85 ± 0.93	3,090 ± 30	68.11 ± 0.29
IAAA-82810	8	遺構：S M18	土器外面付着炭化物	AaA	-21.40 ± 0.87	2,940 ± 30	69.37 ± 0.29
IAAA-82811	9	遺構：S M18	土器内面付着炭化物	AaA	-23.80 ± 0.75	3,000 ± 30	68.84 ± 0.29
IAAA-82812	10	遺構：S M27	土器内面付着炭化物	AaA	-18.56 ± 0.78	3,020 ± 40	68.65 ± 0.30
IAAA-82813	11	遺構：S M48	土器外面付着炭化物	AaA	-27.05 ± 0.80	3,050 ± 30	68.38 ± 0.28
IAAA-82814	12	遺構：S M49	土器外面付着炭化物	AaA	-24.39 ± 0.90	3,030 ± 30	68.55 ± 0.28
IAAA-82815	13	遺構：S M49	土器内面付着炭化物	AaA	-22.70 ± 0.71	3,140 ± 40	67.61 ± 0.29
IAAA-82816	14	遺構：S M52	土器内面付着炭化物	AaA	-33.77 ± 0.69	3,000 ± 30	68.86 ± 0.28
IAAA-82817	15	遺構：S S 2	土器外面付着炭化物	AaA	-20.12 ± 0.97	3,090 ± 30	68.06 ± 0.29
IAAA-82818	16	遺構：S S 2	土器内面付着炭化物	AaA	-21.33 ± 0.94	3,050 ± 30	68.42 ± 0.28
IAAA-82819	17	遺構：S I 16	土器外面付着炭化物	AaA	-23.43 ± 0.81	3,100 ± 40	67.99 ± 0.29
IAAA-82820	18	遺構：S I 16	土器内面付着炭化物	AaA	-19.11 ± 0.78	3,510 ± 30	64.62 ± 0.27
IAAA-82821	19	遺構：S M50	土器外面付着炭化物	AaA	-27.72 ± 0.75	2,870 ± 30	69.98 ± 0.30
IAAA-82822	20	遺構：S M44	土器内面付着炭化物	AaA	-19.15 ± 0.90	3,240 ± 30	66.82 ± 0.28

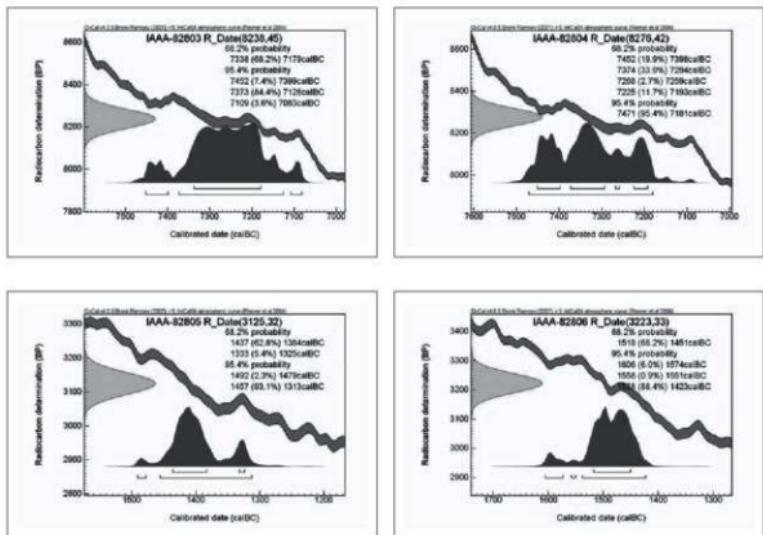
{# 2736}

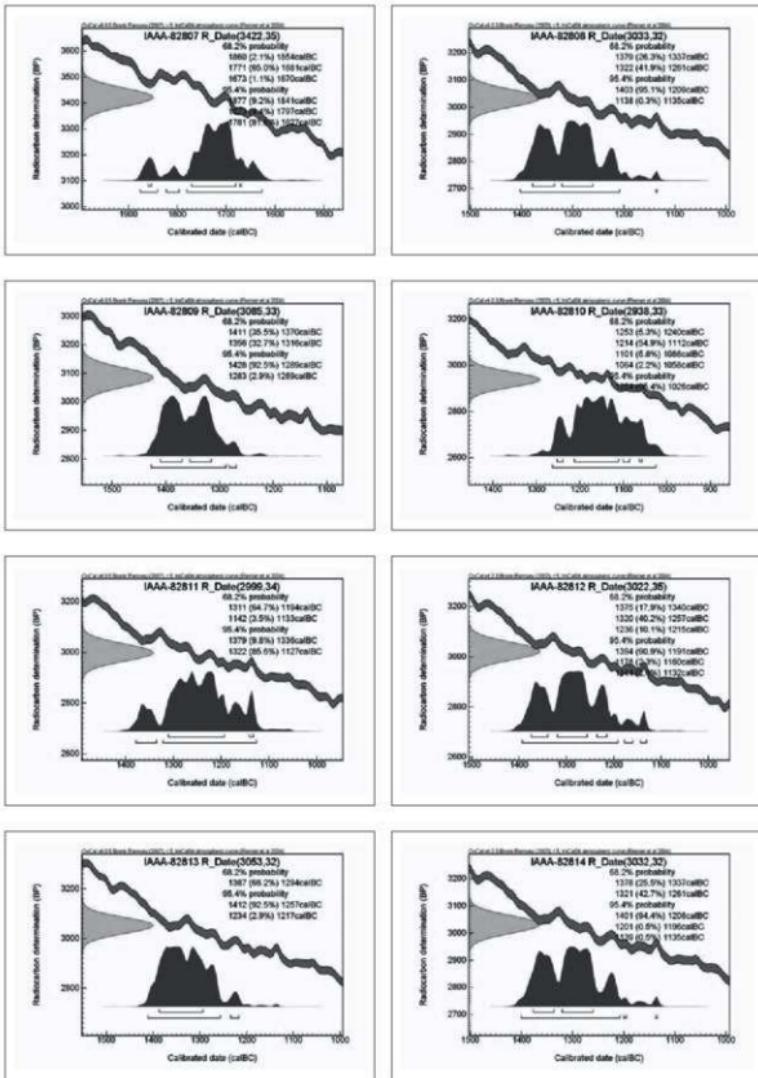
測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		曆年較正用(yrBP)	1σ曆年代範囲	2σ曆年代範囲
	Age(yrBP)	pMC (%)			
IAAA-82803	8,140 ± 40	36.29 ± 0.20	8,238 ± 45	7338 BC - 7179 BC (68.2%)	7452 BC - 7399 BC (7.4%) 7374 BC - 7294 BC (33.9%) 7268 BC - 7259 BC (33.9%) 7225 BC - 7193 BC (11.7%)
IAAA-82804	8,180 ± 40	36.12 ± 0.18	8,276 ± 42	7452 BC - 7398 BC (19.9%) 7374 BC - 7294 BC (33.9%) 7268 BC - 7259 BC (33.9%) 7225 BC - 7193 BC (11.7%)	7471 BC - 7181 BC (95.4%)
IAAA-82805	3,120 ± 30	67.79 ± 0.26	3,125 ± 32	1437 BC - 1384 BC (62.8%) 1333 BC - 1325 BC (5.4%)	1492 BC - 1479 BC (2.3%) 1457 BC - 1313 BC (93.1%)

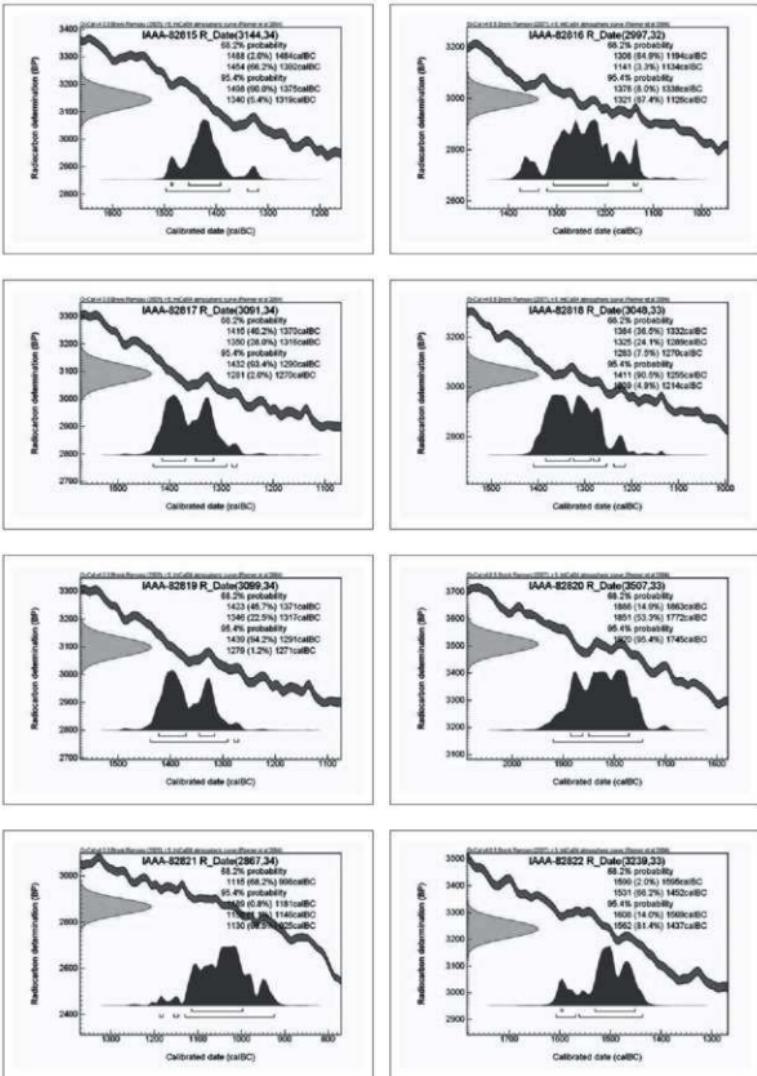
測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		曆年較正用(yrBP)	1 σ 曆年代範囲	2 σ 曆年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-82806	3,320 \pm 30	66.18 \pm 0.25	3,223 \pm 33	1518 BC - 1451 BC (68.2%)	1606 BC - 1574 BC (6.0%) 1558 BC - 1551 BC (0.9%) 1538 BC - 1423 BC (88.4%)
IAAA-82807	3,250 \pm 30	66.70 \pm 0.27	3,422 \pm 35	1860 BC - 1854 BC (2.1%) 1771 BC - 1681 BC (65.0%) 1673 BC - 1670 BC (1.1%)	1877 BC - 1841 BC (9.2%) 1823 BC - 1797 BC (4.4%) 1781 BC - 1627 BC (81.8%)
IAAA-82808	3,010 \pm 30	68.79 \pm 0.25	3,033 \pm 32	1379 BC - 1337 BC (26.3%) 1322 BC - 1261 BC (41.9%)	1403 BC - 1209 BC (95.1%) 1138 BC - 1135 BC (0.3%)
IAAA-82809	3,070 \pm 30	68.27 \pm 0.26	3,085 \pm 33	1411 BC - 1370 BC (35.5%) 1356 BC - 1316 BC (32.7%)	1428 BC - 1289 BC (92.5%) 1283 BC - 1269 BC (2.9%)
IAAA-82810	2,880 \pm 30	69.88 \pm 0.27	2,938 \pm 33	1253 BC - 1246 BC (5.3%) 1214 BC - 1112 BC (54.9%) 1101 BC - 1086 BC (5.8%) 1064 BC - 1058 BC (2.2%)	1264 BC - 1026 BC (95.4%)
IAAA-82811	2,980 \pm 30	69.01 \pm 0.27	2,999 \pm 34	1311 BC - 1194 BC (64.7%) 1142 BC - 1133 BC (3.5%)	1379 BC - 1336 BC (9.8%) 1322 BC - 1127 BC (85.6%)
IAAA-82812	2,920 \pm 30	69.55 \pm 0.29	3,022 \pm 35	1375 BC - 1340 BC (17.9%) 1320 BC - 1257 BC (40.2%) 1236 BC - 1215 BC (10.1%)	1394 BC - 1191 BC (90.9%) 1178 BC - 1160 BC (2.3%) 1144 BC - 1132 BC (2.1%)
IAAA-82813	3,090 \pm 30	68.09 \pm 0.25	3,053 \pm 32	1387 BC - 1294 BC (68.2%)	1412 BC - 1257 BC (92.5%) 1234 BC - 1217 BC (2.9%)
IAAA-82814	3,020 \pm 30	68.64 \pm 0.25	3,032 \pm 32	1378 BC - 1337 BC (25.5%) 1321 BC - 1261 BC (42.7%)	1401 BC - 1208 BC (94.4%) 1201 BC - 1196 BC (0.5%) 1139 BC - 1135 BC (0.5%)
IAAA-82815	3,110 \pm 30	67.92 \pm 0.27	3,144 \pm 34	1488 BC - 1484 BC (2.0%) 1454 BC - 1392 BC (2.0%)	1498 BC - 1375 BC (90.0%) 1340 BC - 1319 BC (5.4%)
IAAA-82816	3,140 \pm 30	67.62 \pm 0.26	2,997 \pm 32	1308 BC - 1194 BC (64.9%) 1141 BC - 1134 BC (3.3%)	1376 BC - 1338 BC (8.0%) 1321 BC - 1126 BC (87.4%)
IAAA-82817	3,010 \pm 30	68.74 \pm 0.26	3,091 \pm 34	1415 BC - 1370 BC (40.2%) 1350 BC - 1316 BC (28.0%)	1432 BC - 1290 BC (93.4%) 1281 BC - 1270 BC (2.0%)
IAAA-82818	2,990 \pm 30	68.94 \pm 0.25	3,048 \pm 33	1384 BC - 1332 BC (36.5%) 1325 BC - 1289 BC (24.1%) 1283 BC - 1270 BC (7.5%)	1411 BC - 1255 BC (90.5%) 1239 BC - 1214 BC (4.9%)
IAAA-82819	3,070 \pm 30	68.21 \pm 0.27	3,099 \pm 34	1423 BC - 1371 BC (45.7%) 1346 BC - 1317 BC (22.5%)	1439 BC - 1291 BC (94.2%) 1279 BC - 1271 BC (1.2%)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		曆年校正用(yrBP)	1 σ 曆年代範囲	2 σ 曆年代範囲
	Age (yr BP)	pMC (%)			
IAAA-82820	$3,410 \pm 30$	65.40 ± 0.25	$3,507 \pm 33$	1886 BC - 1863 BC (14.9%) 1851 BC - 1772 BC (53.3%)	1920 BC - 1745 BC (95.4%)
IAAA-82821	$2,910 \pm 30$	69.59 ± 0.27	$2,867 \pm 34$	1115 BC - 998 BC (68.2%)	1189 BC - 1181 BC (0.8%) 1156 BC - 1146 BC (1.1%) 1130 BC - 925 BC (93.5%)
IAAA-82822	$3,140 \pm 30$	67.62 ± 0.26	$3,239 \pm 33$	1599 BC - 1595 BC (2.0%) 1531 BC - 1452 BC (66.2%)	1608 BC - 1569 BC (14.0%) 1562 BC - 1437 BC (81.4%)

[参考値]







[参考] 历年校正年代グラフ

付章2 田子平遺跡における出土獸骨類

パリノ・サーヴェイ株式会社

1 はじめに

田子平遺跡(福島県双葉郡浪江町室原字田子平に所在)は、請戸川右岸の段丘上に立地し、縄文時代後期～晩期の集落跡とされる。今回の発掘調査により、竪穴住居跡や建物跡、埋甕を伴う土坑などが検出され、土器、石器、土偶、土面、耳飾りなど多くの遺物が出土している。また、これらの遺構や包含層などから骨が出土している。今回の自然科学分析調査では、出土した骨類について、その種類および部位等を明らかにし、当時の動物利用に関する情報を得ることとする。

2 試 料

当社技術者が、平成21年2月24日山下分庁舎にて、出土した約500点の骨片の中から比較的形質を保つた50点の試料の選出を行い、同定試料とした。試料は、SK29の ℓ 1の10点(№1~7・46~48), SK29の ℓ 2の6点(№8・38~42), SI24の ℓ 1の3点(№9・12・37), SI24 ℓ 2の2点(№10・11), SB21P1の ℓ 1の2点(№13・14), SB23P3の ℓ 1の1点(№15), SI28の ℓ 1の4点(№16・17・49・50), SB7P1の ℓ 1の5点(№18・19・43~45), SI34 ℓ 1の2点(№20・21), SI11 ℓ 2の1点(№22), SI36の ℓ 2の2点(№23・24), SK47の ℓ 1の1点(№25), SK9の ℓ 1の1点(№26), SK7の ℓ 1の10点(№27~36)である。なお、出土骨は、すでにクリーニングされた状態にある。

3 分析方法

一部の試料については、一般工作用接着剤を用いて接合を行う。試料を肉眼で観察し、その形態的特徴から、種と部位の同定を行う。

4 結 果

同定結果を表1に示す。№31と№32は接合、№16でみられた破片2点も接合する。いずれの骨も破片となっており、白色を呈し、表面に細かなひび割れが生じるなど、焼骨の特徴を示す。

イノシシ(Sus scrofa)の右下顎骨、左切歯骨、左頬骨、左上腕骨遠位端、第2/5中節骨、中手骨/中足骨遠位端、またイノシシの可能性がある後頭骨・第1頸椎?・末節骨の破片などが検出された。この他、大型獸類の頸蓋片、頸椎片、椎骨片、肋骨片、四肢骨片、基節骨片、基節骨/中節骨片などが検出された。なお、№1の上腕骨遠位端は一部未化骨で外れ、№12の椎骨は椎体板が未化骨で外れることなどから、若い個体であったことが伺われる。また、№8の後頭骨?や№16の右下顎骨片などは、被熱による収縮を考慮しても小さく、成然に達していない若獸と考えられる。これらのことから、周辺において生殖集團が存在していたとも考えられる。

試料が包含層中に散在した状況または包含層から遺構の中に流れ込んでいる状況からは特に儀礼等に伴うようなものではなく、食料資源などとして利用された後に廃棄されたもの可能性がある。また、骨自体がほとんど磨滅していないことから、焼かれて破片となった後も、それほど大きく移動していないと考えられる。

表1 骨同定結果

番号	出土位置	層位	種類	部位	左右	部分	備考
No.1	S K 29	ℓ 1	イノシシ	上腕骨	左	遠位端	一部未化骨外れ
No.2	S K 29	ℓ 1	大型獸類	椎骨		椎体片	
No.3	S K 29	ℓ 1	イノシシ	中手骨／中足骨		遠位端	
No.4	S K 29	ℓ 1	イノシシ	第2～5中節骨		ほぼ完存	
No.5	S K 29	ℓ 1	イノシシ?	第1頸椎?		破片	
No.6	S K 29	ℓ 1	大型獸類	不明		破片	
No.7	S K 29	ℓ 1	大型獸類	肋骨		破片	第1肋骨?
No.8	S K 29	ℓ 2	イノシシ?	後頸骨?		破片	
No.9	S I 24	炉	ℓ 1	大型獸類	不明	破片	
No.10	S I 24	炉	ℓ 2	大型獸類	不明	破片	
No.11	S I 24	炉	ℓ 2	大型獸類	椎骨	椎体片	
No.12	S I 24	ℓ 1	大型獸類	椎骨		椎体片	椎体板未化骨外れ
No.13	S B21	P 1	ℓ 1	大型獸類	基節骨／中節骨	遠位端片	S I 24検出画面
No.14	S B21	P 1	ℓ 1	大型獸類	基節骨	近位端片	
No.15	S B23	P 3	ℓ 1	大型獸類	基節骨／中節骨?	遠位端片?	
No.16	S I 28	ℓ 1	イノシシ	下顎骨	右	破片	接合
No.17	S I 28	ℓ 1	イノシシ	種子骨		破片	
No.18	S B 7	P 1	ℓ 1	イノシシ	第2～5中節骨	近位端	
No.19	S B 7	P 1	ℓ 1	イノシシ?	末節骨	近位端片	
No.20	S I 34	炉	ℓ 1	大型獸類	椎骨	後間接突起	
No.21	S I 34	炉	ℓ 1	大型獸類	椎骨	間接突起	
No.22	S I 1	炉	ℓ 2	イノシシ	切歯骨	左	破片
No.23	S I 36	ℓ 2	大型獸類	肋骨		破片	
No.24	S I 36	ℓ 2	大型獸類	不明		破片	
No.25	S K 47	ℓ 1	大型獸類	不明		破片	
No.26	S K 9	ℓ 1	大型獸類	頭蓋		破片	
No.27	S K 7	ℓ 1	イノシシ	頭骨	左	破片	
No.28	S K 7	ℓ 1	大型獸類	頭蓋		破片	
No.29	S K 7	ℓ 1	大型獸類	頭蓋		破片	
No.30	S K 7	ℓ 1	大型獸類	頭蓋		破片	
No.31	S K 7	ℓ 1	大型獸類	肋骨?		破片	No.32と接合
No.32	S K 7	ℓ 1	大型獸類	肋骨?		破片	No.31と接合
No.33	S K 7	ℓ 1	大型獸類	肋骨		破片	
No.34	S K 7	ℓ 1	大型獸類	肋骨		破片	
No.35	S K 7	ℓ 1	大型獸類	肋骨		破片	
No.36	S K 7	ℓ 1	大型獸類	肋骨		破片	
No.37	S I 24	ℓ 1	大型獸類	基節骨／中節骨		遠位端片	
No.38	S K 29	ℓ 2	大型獸類	肋骨		破片	
No.39	S K 29	ℓ 2	大型獸類	四肢骨		破片	
No.40	S K 29	ℓ 2	大型獸類	頭蓋?		破片	
No.41	S K 29	ℓ 2	獸類	肋骨／四肢骨		破片	
No.42	S K 29	ℓ 2	獸類	頸椎		棘突起	
No.43	S B 7	P 1	ℓ 1	大型獸類	不明	破片	
No.44	S B 7	P 1	ℓ 1	大型獸類	四肢骨	破片	
No.45	S B 7	P 1	ℓ 1	大型獸類	椎骨	破片	
No.46	S K 29	ℓ 1	獸類	肋骨／四肢骨		破片	
No.47	S K 29	ℓ 1	獸類	肋骨／四肢骨		破片	
No.48	S K 29	ℓ 1	大型獸類	椎骨		前間接突起	
No.49	S I 28	ℓ 1	大型獸類	四肢骨		破片	
No.50	S I 28	ℓ 1	大型獸類	不明		破片	

図版1 出土骨



1. イノシシ左上腕骨遠位端(No. 1)
 2. 大型獸類椎骨椎体片(No. 2)
 3. イノシシ中手骨/中足骨遠位端(No. 3)
 4. イノシシ第2/5中節骨(No. 4)
 5. イノシシ?第1腰椎骨片?(No. 5)
 6. 大型獸類部位不明破片(No. 6)
 7. 大型獸類肋骨片(No. 7)
 8. イノシシ?後頭骨片?(No. 8)
 9. 大型獸類部位不明破片(No. 9)
 10. 大型獸類部位不明破片(No. 10)
 11. 大型獸類椎骨椎体片(No. 11)
 12. 大型獸類椎骨椎体片(No. 12)
 13. 大型獸類基節骨/中節骨遠位端片(No. 13)
 14. 大型獸類基節骨近位端片(No. 14)
 15. 大型獸類基節骨/中節骨遠位端片?(No. 15)
 16. イノシシ右下顎骨片(No. 16)
 17. イノシシ種子骨片(No. 17)
 18. イノシシ第2/5中節骨近位端(No. 18)
 19. イノシシ?末節骨近位端片(No. 19)
 20. 大型獸類椎骨間接突起(No. 20)
 21. 大型獸類椎骨間接突起(No. 21)
 22. イノシシ左切齒骨片(No. 22)
 23. 大型獸類助骨片(No. 23)
 24. 大型獸類部位不明破片(No. 24)
 25. 大型獸類部位不明破片(No. 25)
 26. 大型獸類頭蓋片(No. 26)
 27. イノシシ左頬骨片(No. 27)
 28. 大型獸類頭蓋片(No. 28)
 29. 大型獸類頭蓋片(No. 29)
 30. 大型獸類頭蓋片(No. 30)
 31. 大型獸類肋骨片?(No. 31・32)
 32. 大型獸類肋骨片(No. 33)
 33. 大型獸類肋骨片(No. 34)
 34. 大型獸類肋骨片(No. 35)
 35. 大型獸類肋骨片(No. 36)
 36. 大型獸類基節骨/中節骨遠位端片(No. 37)
 37. 大型獸類肋骨破片(No. 38)
 38. 大型獸類四股骨片(No. 39)
 39. 大型獸類頭蓋片?(No. 40)
 40. 頭頸防骨/四肢骨片(No. 41)
 41. 頭頸頭椎棘突起(No. 42)
 42. 大型獸類部位不明破片(No. 43)
 43. 大型獸類四肢骨片(No. 44)
 44. 大型獸類椎骨片(No. 45)
 45. 頭頸肋骨/四肢骨片(No. 46)
 46. 頭頸肋骨/四肢骨片(No. 47)
 47. 大型獸類椎骨前間接突起(No. 48)
 48. 大型獸類四肢骨片(No. 49)
 49. 大型獸類部位不明破片(No. 50)

